古活字版之研究

故安田善次郎大人小祥忌の
御靈前に捧ぐ

川瀬一馬

寶蓮院禪行義居士正五位勲
三等安田善次郎號雅圖明治
十二年己卯三月七日己丑生
於東京小網町至孝保先業好
古藏寶書昭和十一年丙子十
月二十三日戊寅卒於麹町平
河町塟於音羽護國寺

凡例

一我が印刷文化史上に於ける古活字版の意義を闡明する爲、活字印刷術の渡來以前に於ける我が印刷文化の發展を考察し、之を第一篇とした。

一圖版は凡て別册に收め、本文の上欄に其の番號を表記して對照に便した。

一參考の爲、卷末に、古活字版刊記集・同五十音別書目(國書並に漢籍の部)・總索引を附し、別に、中世期印刷文化地圖・古活字版刊行年表(各一葉)を添へ、又、古活字版概說の英譯並に原文を附載した。

中世期印刷文化地圖は、使用保存の爲特に和紙を用ひた。同圖は上野精一氏より英國に於いて編刊せられた印刷文化地圖の敎示を蒙り、之に暗示を得て第一篇の參考資料として作製したものである。

一本書の題簽並に扉は、故安田善次郎大人より賜つたものである。

一卷頭に於ける捧獻のことば並に署名墨書は、著者の手筆にかゝる。

一本書は六百部限定出版(內壹百部は特製)とし、各册に番號を記入した。

一本書は種々な事情に據り印刷に數箇年を費した爲、前後稍體裁の整はぬ點を生じ、卷末に補

訂補を加へて其の若干を補つた

故安田善次郎大人の篤きめぐみによつて生れ出たこの書のあらん限り、御遺徳を偲ぶよすがにと、故大人の遺影を掲げさせて戴きました。かやうなことは故大人の好まれないこととよく承知しながらも、御當主にたつて御願ひをいたしました。なほ御略歴に代へて墓誌の拓本を併せ掲げました。つゝしんで茲に附記いたします。

昭和十二年九月一日　　川瀬一馬識

古活字版の研究　目次

第四章 中世前期に於ける印刷文化

第五章 中世後期に於ける印刷文化

第二編　活字印刷術の傳來並びに其の發達
――近世初期に於ける印刷文化――

漢籍古活字版書目

第七章 國書の開雕と當代の文化(坊刻活字印本の發達其の二)

第八章 國文學書の活字開版(坊刻活字印本の發達其の三)

故安田善次郎大人墓志（文）　口絵参照

寶蓮院釋行水居士正五位勲
三等安田善次郎號樵閑明治
十二年己卯三月七日己丑生
於東京小網町至孝保先業好
古藏寶書昭和十一年丙子十
月二十三日戊寅卒於麹町平
河町葬於音羽護國寺

三村清三郎
會田富康案並文
川瀬一馬

三村清三郎筆
會田富康刻

古活字版の研究

川瀬一馬

第一編　近世以前に於ける我が印刷文化

第一章　序説

近世初期以前に於ける我が印刷文化の發展と時期區分

明治以前に於ける我が國の古き印刷文化の發展は大略三期に分ち得ると思ふ。先づ支那の影響に據つて印刷文化の發生した奈良朝から平安朝までを上古、平安朝の末葉から室町末期までを中世、此の中世は、又前後兩期に分れ各々稍特色を異にする發展を見た。即ち、其の前期は鎌倉時代の末期まで、後期は南北朝を中心として鎌倉末期から室町末期までである。更に、江戸時代の初めからは近世となるのであるが、この近世は又四期に分れると思ふ。第一は、文祿より慶長・元和・寛永に亘る約五十年間、之を初期とし、又、寛政十二年頃より幕府の昌平坂學問所に於いて所謂官板と稱する教科用の漢籍

上古

中世に於ける前後兩期

近世に於ける四期

を出版し初める様になつて、當時の印刷界の狀勢が著しく變化して來た、其の頃からを末期とする。其の初期と末期との中間の中期とも稱す可き時期は、元祿頃を中心として更に二分せられる。卽ち元祿前後から漸く出版界の中心が江戸へ移りかけたからであつて、其れまではやはり出版界の中心は京阪殊に京都であつた。この中間の時期を彼の唐詩を論ずるに倣つて、盛期・中期と稱してもよいと考へるのであるが、ともかくも近世を以上の如く四期に細分するのが穩當であらうと思ふ。而して、各時期に於いて、我が印刷文化は隔期的に海外の影響を蒙つて發展を遂げてゐるのである。乃ち、上古・中世・近世に於ける海外の影響を見るに、上古・中世に於いては、主として支那、之に朝鮮との關係も若干加はり、又近世に於いては、主として朝鮮、之に西歐諸國が稍係つてゐる。

支那の古印刷文化と日本の古印刷文化

支那に於いて印刷文化は古く隋代に發生したと言はれてゐるが、唐代には既に幾多の印刷が行はれてゐる。併し其れ等はまだ殆ど佛典の開版が大部を占め、佛書以外には、僅に實用的の曆書、延いて字書類が印刷せられた。從つて唐代に我が國に齎された印刷文化が、先づ佛典開版の方面に現れてゐるのは極めて自然な事であらう。然るに我が國の印刷文化は其の後に於いても依然として佛教文化に依存する狀態を續け、鎌倉末期に至つて漸く僅少の漢籍が飜刻される樣になつたが、其れとても佛教の庇護のもとに育まれたものである。之を唐代に佛教文化の方面に於いて其の初期の發達を遂

げ、五代に入つて早くも爲政者に據つて外典の開版が行はれてゐる記錄が見え、次いで宋代に至つて官刻本の盛んに現はれてゐる支那の印刷文化の發達に比較すると、（支那の古き印刷術に就きては、長澤學士「支那書籍小史」第二章第一至三節（書誌學第一卷五六號）參照）我が印刷文化は遙かに長く佛教文化のもとに閉されてゐる。たまたま爲政者に據つて行はれる開版も、其れは爲政者としてではなく、單に佛徒としての寄與に過ぎず、何れも佛教の報恩的な思想の下に行はれたものであつた。從つて印刷文化の恩惠を蒙る者は、宗教生活を行ふ者及び其れと密接なる關係を有する極めて少數の精神生活者に限られてゐる狀態であつた。即ち、奈良朝に始つて室町末期に至る約九世紀間に亙る我が印刷文化の特質は、佛教の庇護のもとに發展し、佛教的なる色彩に包れてゐると言ふ事である。從つて各宗派の盛衰は直ちに印刷文化に反映し、各時代に於ける佛經刊行の變遷に據つて各宗派の興亡が自ら明かにせられるのである。古き印刷文化がかゝる狀態に置かれざるを得なかつたのは、主として經濟的の原因に基くものであつて、出版事業は全く經濟的に獨立する事の出來ない事情にあつたのである。

近世初期以前に於ける我が印刷文化の特質

又、この中世期までの印刷文化を其の技術的方面より見れば、何れも一枚板に雕刻した所謂整版であつて、一種の書籍の開版には實に多額なる費用を要し、需要供給の關係に據つて出版事業は未だ企業として成立するには至らなかつたのである。

朝鮮活字印刷術の輸入

然るに豐臣秀吉の朝鮮の役の結果高麗朝以來彼の地に異常なる發達を示してゐた活字印刷術を輸入する機緣を爲して、其の新式にして簡便なる活版術が、我が印刷界の經濟的方面を解決する一大動力となつて、我が印刷文化は佛教文化より離脱した方面へ急激なる發展を遂げる事となつたのである。卽ち、印刷文化其れ自體として初めて獨立して發展する樣になつたのである。この僅か二分の一世紀に過ぎぬ近世初期こそは實に我が印刷文化の展開を兩分す可き重大なる契機である。

我が印刷文化史上に於ける「近世初期」の意義

然しながら、かゝる一大變動の殆ど唯一の直接原因となつた活字印刷術が、豐臣秀吉の朝鮮の役以前に、我が國に傳來してゐたか否か、若し又朝鮮の活字印刷術の傳來は朝鮮の役の結果であるとしても、其れ以前に我が國に活字押捺の法が無かつたかどうか、其れ等に就いても一考しなければならないが、之に就いては後章に於いてなほ詳論する事とする。

朝鮮の役以前に於ける活字印刷術の有無

なほ又茲に注意す可きは、朝鮮の活字印刷術よりも寧ろ少しく早く天正十八年(一五九〇)に西歐の活字印刷術が傳來してゐた事である。之は當時の我が國の中央の印刷界に於ける活字印刷術の發達に餘り著しい影響を與へてゐない樣に在來多く考へられてゐるが、果して如何なる程度に影響を及してゐるかに就いてもなほ一應の吟味を要する。之に就いても後章に於いて述べる事としたい。

西歐活字印刷術の傳來と其の影響の吟味

第二章　上代に於ける印刷文化

第一節　奈良朝の密教信仰と陀羅尼の摺寫

我が國最古の印刷資料四種陀羅尼

我が國に於ける開版の最も古く文獻に現はれてゐるものとして、在來、平安朝極初に生存してゐた大和藥師寺の僧景戒の撰述に係る日本國現報善惡靈異記中の記載、同書中卷の「己作ツテレ寺ヲ用ヒテ其ノ寺ノ物ヲ作ツテレ牛ト役スル縁第九」の條を援引論述せられてゐたが、之は印刷に關する記載に非ずとする橋井清五郎氏の考説(書誌學第一卷第三號「大伴赤麿懺悔文に對する異見」參照)が穩當であらう。

乃ち、當時の文獻と現存資料とに據つて確實に知る事の出來る最古の開版は神護景雲四年(七七〇)に成つた四種陀羅尼である。續日本紀(寶龜元年四月戊午)及び東大寺要錄(卷四)の記する所に據ると、天平寶字八年(七六四)惠美押勝の亂が平定した後、孝謙天皇の發願に基いて、高さ四寸五分、基徑三寸五分の三重小塔一百萬基を造り、塔毎に、根本・相輪・自心印・六度等四種の無垢淨光陀羅尼の摺本中一種を納め、之を東大寺以下の十大寺に分ち置いた　今其の大部分は滅んで、唯法隆寺にのみ之を傳へてゐる。

四種陀羅尼の異版二種

現存の四種陀羅尼を檢するに、其の各々に二版あつて、文字の形の稍大きい系統のものと、其の形の若干小さく細い系統のものとに兩分せられ、其の種類は合せて八種に達する　右八種の中、六度陀羅尼の一種は法隆寺にも所傳なく、在來知られてゐなかつたが、

安田文庫所藏のものを承知し、舊刊影譜に初めて所收紹介して後、貴重圖書影本刊行會本にも追加覆製せられた。其の料紙には厚薄の別はあるが多く、黄紙穀紙の類を用ひ、紙幅は約一寸八九分、字面の高さは略々紙幅を除す事なく、長さは各種陀羅尼に據つて異るが、最も長いのは根本陀羅尼で字面の長さ約一尺六寸四分、最も短いのは六度陀羅尼で字面の長さ約五寸三分、何れも兩端に若干の餘白を存してゐる。其の版式は稚拙なるを免れ難いけれども、なほ優れたる當時の書風の面影を窺ひ得る。就中、根本陀羅尼に於いて最もよく之を見る事が出來るのである

此の摺本の原型を印刷紹介したのは、天保十一年穂井田忠友の觀古雜帖（[illegible]）などが初めであらうと思はれるが、之が木版であるか銅版であるかに就いては、江戸末期よりも種々の論が行はれてゐる。其の版式印刷の體より見ても銅版と認む可きを至當と考へるのであるが、多數の實物を精査するに、自ら先人とは異る論據を見出すのである。在來の論者は何れも、各種陀羅尼を多數比較精査する事なくして、單に其の原版の多種多樣なるを言ふのであるが、實は各種陀羅尼に就いて、各々一異版が存在するに過ぎない事は前述の如くである。若干の現存摺本は偶然の機會の齎したものであるとしても、其の異版の數が僅か兩種に過ぎず、且つ、其の印刷面に原版磨滅の跡をとどめるものが發見されないのは、多數の摺刷を行はなければならなかつた印刷物の性質上、木版使

用の場合にはあり得可からざる事である。玆に注意す可きは、比較的多數現存する相輪・自心印兩種陀羅尼に就いて實物の比較研究を試る場合に最も明らかにされるのであるが、其の原版が同一と確認せられるのに、細部に極めて微少なる差異を有する幾群かに一種の摺本を分類する事が出來る事である。其の微細なる差異を共通に持つてゐる物が幾つも存在すると言ふ事は、單に同一版摺刷の際の狀態に基くものとは言ひ棄て難い。乃ち、摺本の書風筆畫が硬直で精緻を缺く點より見ても、又其の印刷面の趣きより察しても、原版は所謂金屬性の一枚版と認められる事情等を併せ考へて、次の如き推定說を出したいと思ふ。

鑄造模型兩種存在の推定

此の四種陀羅尼は、原來書寫す可きを、恐らく非常に多數を要するが爲に摺刷を以て代へられる樣になつたものと解せられてゐる。法隆寺に書寫のものが現存してゐるのは其の事情を證するものであらう。其の多數の摺刷に供す可く、先づ二通りの鑄型を作り、之を用ひて多くの銅版を鑄造して、其の摺刷に使用したものと考へられる　卽ち其の原の鑄型は同一であつても、其れから鑄造される原版には、鑄造の際に微妙なる差異を生ずる事があつて、自然其れに據つて摺刷せられたものの間に前記の如く同一版と認められながら、然も其の間に微妙なる差異が現れる樣な現象を來したものと考へられる。　卽ち現存の四種陀羅尼の異版が、兩種に大別せられると言ふ事は、其の原の鑄

型が兩種であつたと解せられると思ふ。當然其の鑄型から幾許かの原版が鑄造せられたと認められるが、其の數などは今日知る事が出來ない。

右は多數の實物比較研究の結果想定した銅版說であるが、當時の金石文の現存するものから言つても、陰陽兩様の雕造はあるが、やはり無垢淨光陀羅尼の銅版說を援ける資料となるものが一二に止らない。

大屋德城氏が寧樂刊經史に於いて詳論せられた如く、此の無垢淨光陀羅尼に、當時に於ける宗教風俗とも謂ふ可き罪障懺悔の密教信仰の思想の熾なるに從ひ、陀羅尼の書寫並びに讀誦の功德が力說せられて、陀羅尼及び陀羅尼を有する經典書寫の流行の雰圍氣の中より、惠美押勝の亂の平定に據つて孝謙天皇御發願の百萬塔となつて現れたものであつた。此の世界現存最古の印刷物たる我が奈良朝の摺本の粉本を支那現存の資料に求めて、其の間の聯絡を解く事も行はれてゐるが、（毛氏[illegible]）何れにしても之が支那文化を模倣した當時の文化の一つの現れと見る可きは論を俟たないと思ふ。な

三國傳記の記載

は奈良朝に於ける開版事業として、釋玄棟撰述の三國傳記（明曆二年刊、十二卷十二冊）の卷七第十四鑑眞和尚事の條に、「（前略）鑑眞官ナリト云ヘトモ律三大部ヲハ手自印板開給ヘリ惣諸色ヲ見テモ無妨有通力云々」とあつて、律の三大部の開版を傳へてゐるが、他に確證のない後世の文献であるから、玆に附記するに止める（四[illegible]陀羅尼の事[illegible]）。又我が印

刷文化の起源として摺裟の事を論ずる先人の説に就いても、茲には反説の必要をも認めない。

第二節　平安朝の法華信仰と摺經供養

弘仁版の吟味

平安の地に都が遷つて後、最澄・空海等に據つて新宗教が勃興し、南都の六宗よりは其の勢力は衰へなかつたが、佛經は鈔寫の法のみに據つて流傳せられ、經疏の雕造はしばらく中絶して、平安朝初期の印刷に關しては、何等確實なる文獻の徵す可きものも存在しない。世に傳教版の諸經ありと傳へ、（日本古書史等）又は、單に其の見聞するもの無しと言ふのは、（[illegible]日本史[illegible]）實は江戸末期頃に最澄の弘仁年間の識語を存して雕刻した帖裝仕立の法華長講會式（奥に弘仁三年歲次壬辰四月[illegible]日[illegible]最澄記とあり。）・仁王長講會式（奥に同じく六月七日最澄記とあり。）・金光長講會式（奥に弘仁四年[illegible]月[illegible]日[illegible]）（[illegible]）等の刊經を、其の識語當時のものと輕率に誤認した報告に基く論據である。

義眞點の吟味

この他に、鶴岡徹定が古經題跋に、禪林寺所藏と傳へる成唯識論及び大智度論の叡山古板世に義眞點と稱する」と言ふものを著錄してゐるのも、該書の原本は今日不明であるが、恐らくは傳弘仁版と類似の眞相を持つものであらうかと思ふ。

摺經供養の盛行

然るに平安朝の中頃から、供養の爲に佛經を書寫する風習が盛んになるに從つて、經典を摺刷する所謂摺經供養が流行する樣になつた。當時の文獻の上では、「書寫」に對して「摸寫」又は「摺寫」の語が用ひられてゐる。其れ等摺經の盛行は、當時の公卿の日記類本朝文粹、其他の文獻に多く現れ、既に先人の調査に據つて其の事實が多數指摘されて來

てゐるが、今日までに知られてゐる限りでは、御堂關白記、寛弘六年(一〇〇九)十二月十四日の條に、

中宮御産間、立願數體等身御佛造初、又大内御願千部法華經摺初

と見えるのが最も古い。當時に於ける公卿の日記其他の文獻の方面からの調査が未だ極めて不完全であるから、遽かに論斷する事は不可能であるが、後に成つた續本朝文粹の願文部には摺經供養の事實が頗る多數現れてゐるのに、一條天皇の寛弘年間までの詩文を集めた本朝文粹の方には摺經供養の願文が一つも見當らないのは、なほ未だ其の風が興らなかつたからであると言ふ事が出來る。寛弘六年以後嘉應元年(高倉天皇、一一六九)頃までに摺經供養の文獻に現れてゐるものは左の如くである

御堂關白記

續本朝文粹

文獻に現れたる摺經供養

小右記

小右記(小野宮實資記)長和三年十月十七日(三條天皇、一〇一四)

(前略)今日但馬守國擧摸法華經千部令運天台山如知識觸上下令運上近則昨日以爲信眞人令申事由事依功德令仰雜色所等(據靜嘉堂文庫藏寫本)

續本朝文粹

續本朝文粹(藤原季綱撰)卷十三下、明衡朝臣實成卿爲家督追善願文　長久四年八月十三日(後朱雀天皇、一〇四三)

(前略)仍奉圖繪極樂曼陀羅一舖、奉書寫金泥妙法蓮華經一部八卷、奉摸。寫。黒字妙法蓮華經六十部無量義經觀普賢經等各六十卷、便於法性寺中先公建立堂行三昧堂敬

供養矣(據東京文理大藏古寫本、以下同)

水左記(同上)承保四年八月十日丁亥(白河天皇、一〇七七)

晴、去夜下痢、羅官心地惘然苦痛無極、御前姫君等御心地極令苦給(中略)又、博陸、並上同令苦給云々、酉時許明業奉摺寫供養心經、五十卷壽命經、卅卷、觀海爲講師、布施絹二疋

(據尊經閣文庫藏本)

水左記　承保四年八月十四日辛卯

(前略)今日姫君心地頗宜、御心地重令苦痛給、仍奉摺寫供養仁王經六部、又終日令奉轉讀(下略)

又、水左記には在來知られてゐないが、この他に管見に入つたものにすぐ續いて八月十九日丙申の記事、

(前略)摺寫心經、五百卷、以永義阿闍梨爲講師、布施絹五疋

等があつて、摺經はなかなか盛んである

續本朝文粹　卷十三願文下　有信朝臣東宮卌九日願文　應德二年十二月二十二日(白河天皇、一〇八五)

前春宮坊　奉造立御等身阿彌陀如來像一躰觀世音菩薩一躰得大勢至菩薩一躰

奉書寫金字妙法蓮華經一部八卷無量義經一卷觀普賢經一卷阿彌陀經

一卷般若心經一卷
奉摺寫墨字妙法蓮華經六十部無量義觀普賢經各六十卷(下略)

拾遺往生傳(三善爲康撰)卷上 阿闍梨維範傳 嘉保三年二月一日(堀河天皇 一〇九六)

阿闍梨維範者京師人也。顯密稟性、山林攝心、遂辭平城之月、長入高野之雲。俗呼曰南院阿闍梨。自爾以降、偏厭下界、專望西土。嘉保三年正月廿八日俄有小勞、迄于二三日至二月朔日、法花經一部不動尊一萬躰摺摸供養矣。(下略)――高野山往生傳中、拾遺往生傳に據れる略同文あり。

續本朝文粹 卷十三願文下 江大府卿爲亡息隆兼朝臣卌九日願文 康和四年六月二十日(堀河天皇 一一〇二)

(前略) 奉造立三尺皆金色阿彌陀如來像一躰 奉圖繪兩界曼陀羅各一鋪
奉書寫色紙妙法蓮華經一部八卷無量義觀普賢阿彌陀經般若心經等各一卷
別奉摸寫妙法蓮華經六部卅八卷開結二經各一卷、兩部曼陀羅於逝者之素意
便是平生之心懷也(下略)

續本朝文粹 卷十三願文下 敦光朝臣第三親王周忌願文 保安元年十一月廿八日(鳥羽天皇 一一二〇)

(前略) 今當周忌之齋莚聊條隨分之惠業、奉造立皆金色一丈六尺阿彌陀如來像一躰

奉書寫金字紺紙妙法蓮華經一部無量義觀普賢阿彌陀般若心經等各一卷、墨字色紙妙法蓮華經一部無量義觀普賢阿彌陀般若心經各一卷、此經興者右兵衞納言依白華之孝養春未以所書也、信心堅固文；皆是祈成正覺之緣懇誠精勤句；莫不資證菩提之果、奉書寫色紙大日經敎王經各一部、奉摸寫素紙妙、法、蓮、華、經、十四部無、量、義、觀、普、賢、阿、彌、陀、般、若、心、經、等各十四卷（下略）

續本朝文粹　卷十二願文上　敦光朝臣鳥羽院高野塔供養願文　大治二年十一月四日（西暦一一二七）

（前略）惟新其中奉安置金色八尺大日如來像五尺阿彌閦寶生無量壽不空成就等像各一躰、奉書寫金字紺紙妙法蓮華經一部八卷無量義觀普賢般若心經各一卷、奉摸寫色紙妙、法、蓮、華、經、廿部無量義觀普賢各一卷、丁未之年建子之月從幸臨於其砌致散禮於其庭（下略）

備西念紺紙金字供養目錄（帝室博物館學報第四冊三宅米吉 津田敬武 院政時代の供養目錄）保延六年（西暦一一四〇）以前

（第一二項）奉摺寫法花經五十部四百卷　無量義經五十卷　觀普賢經五十卷　般若心經五十卷　阿彌陀經五十卷

（第二七項）一奉年來日別勤行佛經目錄　始自康和二年至于保延六年竟日別一躰

奉摺寫供養毗沙門天皇目錄　都合幷万五千百八十躰四十一年分

（第三三項）一奉死後料儲佛經目錄　始自保延五年十二月辛亥日　奉造立一尺六寸皆金色阿彌陀如來九躰內

奉一躰出家日供養保延六年三月三日　奉摺寫法花經九部內　在各具經皆　奉一部出家日供養畢（下略）

都合佛經目錄（略）

僧西念白紙墨書供養目錄（同右）　永治二年一一四一近衛天皇、

（第一項）圖繪摺寫御佛一万五千六百五十躰御供養先了　前記第二七項の摺寫毘沙門天王一万五千八十躰を引上れば、新増は四百餘[illegible]となる。

台記（藤原頼長記）　久安六年三月一日一一五〇近衛天皇、

一日戊寅　早朝臨宇治川邊平等院門外鳥居內祓、不奉御燈之由、依禪閤仰、用烏帽子直衣、次於禪閤御前、令法眼良修供養繪像炎魔天三十躰一幅、壽命經三百六十卷、先自書願趣授良修、賴長敬白、炎魔天三十躰、壽命經三百六十卷、爲禪定前相國延命所圖繪摺寫供養也、三十躰、故一年充一躰、三百六十卷、故一月充一卷、閏月隨節上下月令相國有三十箇年壽算、其經故以彼相國手跡爲紙所摺寫也、能延壽算無過此矣、此經所願成就決定無疑賴長敬白

久安六年三月一日從一位行左大臣藤原賴長朝臣敬白（下略）（續群書類從[illegible]下同）

來八日各摺寫心經百卷（十卷爲一帙、束成百帙）一日之中講讀千卷可令祈伽藍安穩佛法繁昌之由給之狀如件　長寬三年二月二日

廣隆寺由來記　永萬元年六月十三日（二條天皇、一一六五）

庚寅、設供養法筵、勅使院使著座、公卿武家衞護、其儀尤嚴、御願文曰、夫廣隆寺者、聖德太子經始之砌、釋王善逝恒轉之場也（中略）左建鐘樓之臺、高懸九乳之洪鐘矣、右起經藏之勢、專置一切之諸經焉、奉書寫金泥本願藥師經一卷、奉摺寫墨字同經一百卷、便涓林鐘六月之良辰供養展梵筵

人車記　嘉應元年六月十三日（高倉天皇、一一六九）

壬寅天陰、今日太上皇令遁世給、御年四十三、追鳥羽院例、此四五ヶ年雖有御願于今遲引、宿善則至今遂素懷給也（中略）勤行逆修善根事

初日

奉造立金色等身阿彌陀如來像一躰　同三尺觀世音菩薩一躰　勢至菩薩一躰

奉書寫金字紺紙妙法蓮華經一部　無量義經一卷　觀普賢經一卷　阿彌陀經一卷　般若心經一卷

奉摸寫素紙妙法蓮華經五十部　無量義經五十卷　觀普賢經五十卷　阿彌陀經五十卷　般若心經五十卷

台記　久安六年十二月十三日

乙卯、自寫紺紙金字壽命經、遣座主房令供養之訖、獻院（鳥羽）御梢之間有書寫之志、而余恐咳病不能書之、今果遂其志、爲法皇壽命增長也、爲救成佐疾、圖繪三尺藥師如來像摺寫同經十二卷（外題自書之）遣彼室供養之、以東大寺得業覺敏爲導師、經憲（布施）取布施（下略）

台記　久壽元年六月八日（近衞天皇、一一五四）

庚寅、晴、今日余奉爲法皇供養等身藥師如來像一軀（居）五寸同像千體（立）素紙摺寫藥師經千卷（去月廿日始之八日修書寫作佛事、仍齋日遂其供養、依徑日之例云）、（下略）

人車記

人車記（兵範記）　久壽二年十月二十三日（後白河天皇、一一五五）

丁酉天晴、於法性寺殿最勝金剛院被行故北政所御法事（中略）

皇嘉門院

奉造立皆金色丈六阿彌陀如來像一軀

奉書寫金字紺紙妙法蓮華經一部八卷　無量義經一卷　觀普賢經一卷　阿彌陀經一卷

奉摸寫素紙妙法蓮華經一百部　無量義經百卷　觀普賢經百卷　阿彌陀經百卷

長寛三年古文書

長寛三年二月二日古文書（二條天皇、一一六四）安田文庫藏（一幅）

東北院　傳法院　中院　松室　淨土院　安養院　上殿院　發志院　菩提院　蓮臺房　以

來八日各摺寫心經百卷(十卷爲一帙、更成百帙)一日之中講讀千卷可令祈伽藍安穩佛法繁昌之由
給之狀如件　長寛三年二月二日

廣隆寺由來記　永萬元年六月十三日(二條天皇、一一六五)

庚寅、設供養法筵、勅使院使著座、公卿武家衞護、其儀尤嚴、御願文曰、夫廣隆寺者、聖德太子經始之砌、醫王善逝恒轉之場也(中略)左建鐘樓之臺、高懸九乳之洪鐘矣、右起經藏之勢、専置一切之諸經焉、奉書寫金泥本願藥師經一卷、奉摺寫墨字同經一百卷、便消林鐘六月之良辰供養展梵筵

人車記　嘉應元年六月十三日(高倉天皇、一一六九)

壬寅天陰、今日太上皇令遁世給、御年四十三、追鳥羽院例、此四五ヶ年雖有御願于今遲引、宿善則至今遂素懷給也(中略)勤行逆修善根事

初日

奉造立金色等身阿彌陀如來像一躰　同三尺觀世音菩薩一躰　勢至菩薩一躰

奉書寫金字紺紙妙法蓮華經一部　無量義經一卷　觀普賢經一卷　阿彌陀經一卷　般若心經一卷

奉摸寫素紙妙法蓮華經五十部　無量義經五十卷　觀普賢經五十卷　阿彌陀經五十卷　般若心經五十卷

一七日
奉造立金色等身藥師如來像一躰
奉摸寫素紙妙法蓮華經五十部　無量義經觀普賢經　阿彌陀經般若心經各五十卷

以後、二七日には彌勒、三七日千手觀音、四七日地藏、五七日釋迦等、六七日、結願まで佛像は替つてゐるが摸寫素紙法花經以下は何時も同數である。別に毎日次の如く供養を行つてゐる。

奉圖繪阿彌陀如來像一鋪
奉摸寫素紙妙法蓮華經十部在具經　已上素紙妙法蓮華經九百部也但五十箇日間可被滿一千部而於今百部者七々日可被供養矣　目錄在別仍不載之（下略）

[illegible]

少し降つては、在來注意されてゐないが、明月記（天福二年八月廿日同九月一日の條）などにも摺寫供養の事が見えてゐる。かくの如く平安朝中葉から末葉に亙つて流行した摺經供養を見るに、其の宗とする所は、法華經であつて、當時に於ける盛んなる法華の信仰に基き、法華書寫讀誦の功が唱道せられ、引いて其の摺摸となつて現れたものである。其の具經として供に摺摸せられてゐる無量義經は法華經の開經、觀普賢經は其の結經と稱せられるもの、又、般若心經及び阿彌陀經等は、天台宗に於いて其の正依の經と倶に念佛行者等に崇信

せられた所であつて、また平安朝中葉以後に於ける淨土教の信仰の盛行を反映するものである。前に掲げた日記等の文に據つても知られる如く、是等の摺經供養は、當時の上流社會に於いて亡者の追善（法華經等）又は病氣平癒の祈願（藥師經壽命經等）或は祈雨（孔雀經法を以て諸寺諸處に祈れる事、當時の文獻に頗る多く見ゆ。）等の爲に行はれたものであるが、無論其の度毎に必しも新しく版木を雕造せず、然る可き藏所の模版を襲用する場合も反つて多かつたのであらう。

二中歷の記載

天台六十卷の模版が、法成寺東光寺等の經藏に分藏せられてゐた事が、二中歷（大治二年編（三宅・津田氏院政時代供養目錄）、松井簡治博士亦崇德帝頃の作かと言はる。）に見えてゐる事、及び其れに附加せられてゐる案文に當時の經師・摺師等の狀態が若干說明されてゐる事も、既に津田氏等に據つて指摘された所である。

現存する摺經

前述の文獻に相當する遺品は今日までに知られてゐないが、別に當時の摺經の現存するものが數點あつて、識語其の他に據つて限定される其の摺刷の年代の最も遡り得るものは、內野氏皎亭文庫所藏の「國寶」妙法蓮華經卷二である。

1) 妙法蓮華經卷第二信解品　一卷　內野氏皎亭文庫藏（舊刊影譜參照）

（卷末朱筆識語）　承曆四年六月卅日點了（以下不明）

2) 佛說六字神呪王經　一卷　石山寺藏（寧樂刊經史附圖等參照）

（卷末識語）　保安元年八月三日善法房阿闍梨奉受

申了　以彼本移點了（花押）

(ロ) 佛母大孔雀明王經卷下　一卷　久原文庫藏（[illegible]）

（奥書識語）　保安三年三月十日午時許

蓮華院御房奉受

了

始從六月六日

寬治五年七月九日於得大寺阿闍梨以房

奉授了

(ハ) 法華玄義釋籤卷第三・四・五　三帖　京都禪林寺藏（[illegible]）

————————正月十三日奉受了

（[illegible]）　久安四年戊辰六月　日

檀頭主僧良[illegible]決定往生阿彌陀仏

（[illegible]）

是等は何れも恐らく京都の地に於いて開版せられたものであらう。此の他に唯識關係の法相宗の典籍で、南都の開版と認められてゐるものがあるが、其等に就いては便宜後章に於いて述べる事として、玆にこれ等の摺經の版式の特色に就いて一言する。法華玄義釋籤（[illegible]）を除く他の三者は、裝潢版式を等しくし、印刷界線を有せず、毎行十七字、字面の高さ、紙幅紙質等も皆相似し、法華經は、字面の高さ約六寸五分、孔雀王經は同じく

約六寸四分、法華經の如きは、紙幅八寸五分、長さ一尺八寸七分の料紙七枚を糊綴して後に、摺刷を行つたものである、之に據つて、素紙摺寫經の一般を察する事が出來よう、書風は全くもと淡墨を以て印刷を行つたものらしく、其の墨色の稍淡きを特色とする、即ち、其の版式から言へば、支那並びに朝鮮の刊經の直接の影響は認められない、然しながら、平安朝の中葉以來、幾多の入宋沙門に據つて齎された支那並びに朝鮮の刊經は、之を版下として覆刻する事こそ未だ行はれなかつたけれども、之が間接に我が佛經摺摸の興起を刺戟する大なる原因をなした事は、寛弘期に我が摺摸の起る以前に、既に奝然等に據つて、宋版一切經の將來等が行はれてゐた事實を以ても推す事が出來よう

然しながら、もと摺摸の發達は摺佛の流行と密接な關係を有するものであると思ふ

摺佛供養の事は、前記の文獻にも若干散見してゐるが、なほ其の他、殿暦・玉葉・山槐記・明月記等にも多くの記載が見え、又現存の摺佛も相當の數に上つてゐて、當時佛像圖繪の摺寫の頗る盛行を極めてゐた事が知られる、下野國志卷五に紹介せられた摺佛（馬頭觀音）の摺寫年代は、承和十一年（八四四）以前に限定せられてゐて、現在、文獻並びに遺品等に據つて明かにせられてゐる摺經發生の時期よりも遙かに遡り得るのであるが、實物の現存が明かではないから、之を準據として論ずる事は稍躊躇されるけれども、比較的簡便な工

程を以て摺摸せられる一枚摺の佛像圖繪の方が、經典の摺寫に先行したと考へる事もあながち無理ではあるまいと思ふ

印佛と摺佛

なほこの摺佛に就いて併せ注意す可きは、佛像を摸印に造つて押捺した所謂「印佛」と稱するものが敦煌出土品中に見え、之等は唐末から宋初にかけてのものと認められてゐるが、かゝる種類のものが早く我國にも渡來して、この佛像の摸印押捺より進んで摺佛の法となり、即ち摺佛の發達は支那の影響に基くものであらうと考へられる事である

扇面古寫經の下繪

なほ摺佛と關聯して、當時の版畫として見る可きものに、扇面古寫經の下繪がある　大阪の四天王寺に五十一面と其の他帝室博物館法隆寺近江西教寺久原文庫藤田男爵家等に若干面分存してゐる　扇面形の紙に、繪卷の如く連續してゐるらしい場面を精密なる描線もて摺寫した上に、不透明なる繪具を用ひて彩色を施し、更に其の上に經文を書寫してある　之も佛教關係を離れてはゐないが、ともかく當時に於ける圖繪の摺寫が佛像以外にまで及んでゐた事は特に注意す可きである

度縁牒の摺刷

更に又當時の印刷文化が佛經以外の方面に及んだ著しい例として、もつとも之も佛教關係ではあるが、度縁牒の摺刷がある　石清水八幡宮に藏せられる沙彌「慶清」の度縁牒二は、保安三年十月（鳥羽天皇、一一二二）に一萬人の僧を得度した際に多數を必要として、其の各人に共通なる部分のみを摺刷したものの遺品である（石清水文書之二、四〇七―九頁）

かくの如く我が印刷文化は、早く平安朝の末葉に佛典開版の外に發達せんとする萌芽を示したけれども、なほ中世を通じて長く佛教文化より離脱するには至らなかつたのである。

第三章　中世に於ける印刷文化の二樣式と時期區分

鎌倉朝の刊經に於ける三種類の樣式

平安朝の中葉から京洛に於いて貴族の間に盛行した摺供養は、其の末葉に及んで、奈良の地に興福寺を中心とする刊經の勃興を促し、更に鎌倉時代の中頃よりは、高野山に於いても奈良並びに京都の影響を蒙つて、所謂高野版の開版が隆盛を極める樣になつた其の間、もとより京都の地に於いても佛典開版の事業は引續き行はれて、殊に平安朝の末葉淨土教が新に興ると共に、後には其の教派の宣傳的な出版等も現はれるに至つたから、鎌倉末期頃までを最盛期として各地に榮えた開版は無論なほ室町末期若しくは其の後までも連續したのであるが、其の樣式を見るに平安朝摺經の影響を蒙り、其の書體は寫經風であつて、極めて少數の例外を除いて、特に所謂版下書の書風は現れてゐない。寫經と同じく毎行十七字詰を原則とし、其の裝潢の如きも、卷子本折本仕立より次第に兩面摺胡蝶裝に移るのであるが、未だ殆ど袋綴は見る事が出來ない。從つて其の料紙も多く堅靱な斐紙の類を用ひ、其の墨色は漆黑で著しく光澤を有する

即ち、かゝる版式の特色は、我國に於いて發達した寫經の影響に基くものであつて、直に平安朝中頃に將來せられた宋版並びに高麗版の一切經摺本の版式の影響を直接に蒙つてはゐない。即ち、鎌倉時代の末頃までを其の最盛期とする、奈良高野京洛等の各地

に於ける印刷文化は、數百年間の長きに亙つて、我國特有の發達を遂げた所のものであつたのである。

南北朝を中心とする五山版の隆昌

然るに、鎌倉時代の初め、新たに興つた禪宗の日支兩國の僧徒の往來漸く繁きを加へ、之に伴つて宋版內外典の持來も亦頗る行はれ、鎌倉末期に至つて遂に禪籍等の覆刻が出現する樣になつて、或は支那刻工の歸化する者も出で來る等、茲に支那版式の影響に基く所謂「五山版」と總稱せられる開版事業が勃興し、南北朝に入つて、遂に、在來の寫經風の版式を有する各地の開版事業を壓し去る樣になつたのである　無論、南北朝以後室町末期に至る、五山版の榮えた時期に於いても、奈良刊經・高野版・淨土敎版等の開版は引續いて行はれてゐたけれども、其の宗派と興廢を倶にして、其の版式等も次第に精美を缺く傾向を生じ、質量共に隆昌に向つた五山版と其の勢を競ふ事は不可能な狀態にあつた。卽ち南北朝以後室町末期に至る我が開版事業の特色は、禪宗の隆興と傑出した禪僧の輩出とに據つて導き出された五山版の存在に外ならぬのである

又、この五山版盛行の時代に於ける佛典の開版が、恩師又は血緣者等の歿後其の冥福を祈る爲に行はれたものの多い事も著しい現象である　自己の資力に堪へない者は四方に勸緣して刻成したものも少くない　かゝる狀勢は、鎌倉時代の奈良・高野・京洛其他の地方に於ける刊經に於いても見られる所であつたが、五山版に於いて一層甚しく行

はれた事は、開版書の跋文刊記等により多く現れてゐるのに據つても明確である。即ち、佛典の開版に助力喜捨する事を佛恩に報ずる有道の一途と信じてゐた當時の人心が、五山版の發達を助長せしむる大いなる一原因であつた。

其れ故に、かゝる狀勢のもとに發展を遂げた中世の印刷文化が、佛教的なる色彩に包まれてゐる事は全く前代と等しく、室町時代の中頃より漸く特志家の社會事業的なる色彩を帶びて外典の開版せられるものが現はれ、又、近畿を遠く離れた地方に於ける印刷文化の稍見る可きもの等も現はれ初めたのであるが、近世極初期活字印刷術の輸入せられるまでは、依然として外典の開版事業は佛徒の社會的事業たるの域を出でぬ大勢であつた。

中世に於ける前後兩期

以上述べた如く、我が中世に於ける印刷文化は、佛教的なる色彩を保ちつゝ、其の各宗派の興亡に從つて、鎌倉時代の末期を境界として前後兩期に分れて、互に其の版式の特色を異にする發展を遂げたのである。　即ち、鎌倉時代の中頃を中心として、平安朝末期より鎌倉末期に至る前の時期に於いては、我國特有の寫經風の版式を有する各地の開版が榮え、南北朝を最盛期として、鎌倉末期から室町末期に至る、後の時期に於いては、支那版式の影響に基く五山版系統の開版が著しい發展を遂げたのである。

次に、中世に於ける印刷文化が、前後兩期に於いて各々其の特色を異にして發展して行

つた跡を見ようと思ふ。

第四章　中世前期に於ける印刷文化

第一節　奈良諸宗の中興と其の刊經

奈良刊經の勃興

平安朝の中葉、京洛に起つた摺經供養は、間もなく京都と最も交渉の頻繁なる南都の地に於ける開版事業の勃興を促すに至つた。且つ、當代に於ける宋版並びに高麗版一切經の齎來は南都の諸大寺に少からざる刺戟を與へる結果を來して、茲に奈良に於いて財力の最も豐富なる興福寺を中心とする經典開版の事業が先づ起つたのである。奈良の刊經が先づ興福寺に發生を見たに就いては、藤原氏の勢力と其の氏神たる春日信仰とを忘れる事は出來ない。其の極初期の開版經典には、平安朝の有刊記本として現存最古の寛治二年刊（西紀一〇八八年）の成唯識論を初め、卷末識語等に據つて平安朝末期の刊行と確認せらるれものが若干存在し、其の書風版式等は、前述の摺經と同樣であるが、何れも法相宗の典籍である點から奈良の地に於ける興福寺關係の刊行に係るものと認められてゐるのである。

寛治二年三月刊成唯識論

寛治二年三月刊行の成唯識論（十卷・內二卷缺、八卷存）は、[illegible]藏、第十卷末に左の刊記がある（大日本史料第三編之一、舊國寶影譜）。

「興福伽藍學衆諸德爲　興隆佛法利樂有情各」加隨分財力課工人鏤」唯識論一部十卷摸寛」治二年三月廿六日畢　功願以此功德廻向諸」

群類往生內院開法信　解證唯識性速成佛道」　摸工僧觀增

なほ在來の古刻書誌は何れも本書の刊行年時三月を、正月又は五月等と誤り傳へてゐる。「三」字の箇處が損じてゐて、寫眞に判然と影じてゐない爲であるが、昭和五年秋、安田善次郎氏に據り帝室博物館總長大島義脩氏の調査せられた所に從へば、明かに「三」と認められる。茲に、在來の誤傳を正す可く、大島氏の實物に就いて影鈔せられた該部分を示し掲げて其の證とする

平安朝に於ける成唯識論並に三箇疏の刊行

其の他の當代法相宗の開版典籍の現存明らかなものは成唯識論了義燈（卷一、高野山正智院藏、卷末識語永久四年八月廿七日僧（花押））・成唯識論述記（卷一・六本末、卷三・八・九本、日光輪王寺藏、卷六保安四年三月識語あり。）・成唯識論述記（卷三末法隆寺藏、治承三年玄理識語。卷七十本・卷七本興福寺藏。（卷十）康治元年五月（卷七）保元二年識語。）・成唯識論了義燈（卷四大谷大學藏。（保延四年八月十九日〇〇點了沙門〇〇）識語あり。）・成唯識論了義燈（卷一首缺、仁平二年識語、法隆寺藏。）・大乘法苑林章（卷一・二・五・七藥師寺藏（卷二）久安六年七月識語。卷一本、卷二・四・六・七法隆寺藏。（卷二）治承五年信定（卷五）嘉應二年識語あり。）・成唯識論述記（卷二本、日光輪王寺藏、養和二年等識語。卷九本、高野山正智院藏、保元二年識語。）・法華攝釋（四卷、東大寺圖書館藏（卷一）安元三年・治承二年（卷二）治承二年（卷三）安元二年・治承七年（卷四）治承元年永厚識語あり。）等であつて、之等は何れも奈良の地に於ける刊經の先驅をなすものであるが、次いで鎌倉時代に入つて、興福寺を中心とする刊經、即ち、法相擁護の神明たる信仰に導かれて春日明神に奉獻開版した「春日版」と稱する刊經が隆盛に赴くと共に、漸く廣く南都諸宗の寺々に於いて各種の經典の開版が行はれる樣になつて、茲に奈良刊經として、中世の印刷文化に於ける一特色を形成する事となつたのである。此の奈良刊經の

研究に就いては、既に大屋德城氏の尊敬す可き業績、寧樂刊經史（大正十二年刊）があり、其の後も前說を補訂せられてゐるから、（寧樂古經選・大正十五年刊等）茲には主として其れに基いて簡單に記述する事とする。

春日版の名義

平安朝の末葉、平重衡の治承の兵火に罹つて、伽藍と共に灰燼に歸した經藏の模版も、東大寺・興福寺の堂塔の復興に從つて、其の再刻が企てられ、建久頃より相續いて印版が開かれたのである。所謂「春日版」と稱する一類の刊經は大屋氏の說く如く、各時代を通じて興福寺並びに其の配下に屬する春日社に於いて開版せられた一定の樣式を有する佛典を總稱し、其の春日明神に奉獻する由の刊記の有無は必しもきびしく問はないとするのが穩當であらうと思ふ。併し、實際に於いて其の刊記を有する經典が中心となる事は言ふまでもない。又、其の刊記を有するものも、建暦三年刊瑜伽師地論百卷（興福寺藏）・承久三年刊成唯識論（聖語藏・尊藏）・貞應元年刊因明正理論本卷（東洋文庫藏）・同年刊辨中邊論（卷三）（模版興福寺藏）・同年刊大乘莊嚴經論（卷十）（模版興福寺藏）・貞和三年刊成唯識論（卷八、卷十）（西大寺藏）（高野山寶壽院藏）等、鎌倉時代のもので現存してゐるものも少くない。而して其の版式が精美で春日版の特色の著しく現はれてゐるのは、言ふまでもなく、其の刊經の最も隆昌を極めた鎌倉時代である。其の樣式も鎌倉期に入ると、先行の刊經とは稍趣きを異にし印刷界線を持たぬ事及び其の書風の寫經風である事等は、前代の摺經

の系統を受け繼いでゐるが、其の墨色は著しく漆黑となり、料紙は厚さを增して强靭となつた。又、書風も一般寫經と同じく、平安朝のやはらかみを失つて、次第に硬くなつて行く傾向が注意される。（因みに、當時の模版の現存するものが少くないのも研究上注意す可き事である。）

興福寺の開版

當代の初めの興福寺に於ける開版は、前代に引續き法相の典籍を主とし、成唯識論の如きは、建仁元年・承久三年・貞和三年等最も重版の數繁く、（但し、無刊記本多し。寧樂刊經史等所載の他、管見に入れるもの少からず。）其の三箇疏たる述記・了義燈・演秘等も亦之と共に繰返し刊行せられてゐる。興福寺關係の開版事業が春日明神の信仰と密接なる關聯を有する事は言ふまでもないが、般若波羅蜜多心經幽賛（貞應三年刊）・般若波羅蜜多幽賛添改科（寛喜三年刊）・地藏菩薩本願經（嘉元四年覺性刊）等も亦、其の信仰の中より現れたものと言はれてゐる。

弘誓の刊經

當時の開版に力を致した學侶の中に弘誓の如きは、建暦三年（順德天皇一二一三）に瑜伽師地論一百卷（興福寺藏等）の刊行に關與したのを始め、成唯識論（承久三年刊）・因明正理門論・辨中邊論（貞應元年刊）・大乘莊嚴經論（同二年刊）・法華經（嘉祿元年刊）等を開版し、最も注意す可き業績を殘してゐる。

次いで當代に於ける奈良刊經は、蒙古來襲に對する國民の國家意識の自覺に據つて、護國經典としての法華經・仁王經・最勝王經等の開版となつて現はれ、又悔過增益の思想は大般若經（貞應嘉祿開刊）並びに密部の典籍の開版を促し、かくて、次第に東大寺・西大寺等、興福寺以外の諸大寺に於いても開版事業の見る可きものが現れる樣になつた。西大寺に於

の刊行がある。同寺に於いては其の後も、鎌倉中期以後、凝然出でて弘安六年には五教章の大冊を刻成し、永仁五年には智照の起信論義記の開離があり、又素慶（内野氏皎亭文庫藏古文尙書舊鈔本元亨二年の跋文に其の名見ゆ。後記參照。）の幹縁に據つて、法華義疏十二帖（永仁三年刻成、東大寺圖書館等藏）の印行流傳を見た。素慶は前に、正應五年大安寺に於いて中論偈頌（東大寺圖書館藏）を、又、後に、嘉元四年に夾註肇論三卷（續寧樂刊經史）をも刊行してゐる。因みに、大安寺に於いても、早く寛元二年に信忍の勸進に據つて持犯要記（法隆寺藏）の開版がある。

素慶の刊經

更に、當代の末期に至つては、覆宋刊華嚴經探玄記（嘉曆三年至元德三年理覺刊、大谷大學藏）・覆高麗刊大方廣佛花嚴經隨疏演義鈔（正慶元年刊、東大寺圖書館藏）等、稍版式の異つたものも現はれ、引いて禪宗の影響を受けて覆宋刊圓覺經（兩種）・圓覺經略疏之鈔（六卷十二帖）等も行はれ、れて、次第に奈良刊經にも宋版の樣式を汲み入れたものが出る樣になつた。

覆宋刊本の出現

又これより前、奈良諸宗の中興すると共に、聖德太子に對する崇信の風が新たに興つて、太子御撰の開版が法隆寺に於いて行はれた。其の最初に現れたのは、承久二年（順德天皇、一二二〇）刊行の梵網經（二卷、久原文庫藏）で、乘願が太子御本（御物）に據つて、校刊したものである。次いで少しく降つて、寶治元年（後深草天皇、一二四七）には三經義疏が開版せられた。卽ち、勝鬘經義疏一帖（石井光雄氏藏）・維摩經義疏三帖（久原文庫藏、永仁六年凝然自筆識語あり。）・法華經義疏一帖（石井光雄氏藏、同じく凝然手澤本なり。久原文庫藏本は應永廿年の識語あれど、略々其の當時の後印に係る。）は、其の版式を一にし、法華經義疏の奥に、「上宮太子御草本在法隆寺」挍彼本雕此摸畢」寶治元年丁未十月日」の刊語がある。なほ、この他に弘安八年（後宇多天皇、一二八五）に、

法隆寺に於ける太子御撰の開版

十七條憲法と四節文との印版が開かれ、其の模版は三經義疏と共に法隆寺に現存してある。以上、極めて簡單に、鎌倉時代に於ける奈良諸大寺の開版事業に就いて記述したのであるが、かくの如く鎌倉時代を通じて奈良の地に隆盛を極めた刊經も、其の極末期から南北朝にかけては、興福寺を中心とする所謂春日版の刊行はなほ餘勢を保つてゐるけれども、其の他の諸大寺は、漸く衰運に向ふと共に、其の刊經も亦振はない樣になつたのである。

第二節　高野に於ける密部典籍の開版

高野版の發生

高野山に於ける開版は、文獻の明示する所に據れば、前述の維範阿闍梨に初まり、次いで長寛三年の古文書(前記参照)は、般若心經一千卷の摺寫が行はれた事を傳へてゐるが、鎌倉時代に入つては、原來密接なる關係にあつた奈良との交通益々頻繁となり、住侶の相往來するものも頗る多數に上り、從つて早くから開版事業が榮えてゐた奈良の刺戟を受けて、高野山上にも亦奈良刊經と相似の様式を有する開版事業が興起する様になつたのである。又一面に於いて高野の開版事業が、京洛と交渉を有するものである事は、京都より經師が移住して來てゐるのに據つても知られる。(木原堯榮師、高野板之研究九八至一〇三頁參照)其の經師大和屋善七が建仁元年に登山してゐるのを見ても、高野に於ける開版事業の始めは、現存の摺本に據つて知り得る建長五年快賢刊三教指歸よりも更に遡る事が出來るものと考へられてゐる。

秋田城介泰盛の[illegible]

この鎌倉初期に發生した高野の開版事業は、其の後元寇國難の願經摺寫(正應六年度書札仁王護國般若讀)[illegible]、論義講經の盛行等に刺戟せられて大いに勃興した。殊に、鎌倉幕府の執權に據つて弘安四年勸學·修學二院が建設せられ、秋田城介泰盛を奉行都監とし金剛三昧院を惣管領所願寺と定め、十萬餘石の扶持を封祿して、文教を奬めて以來、一時に多數の經典の

弘通流布を必要とするに至つて、金剛三昧院を中心とする刊經が隆昌を來す樣になつた（高野版之研究一卷二一八頁參照）就中當時に於ける秋田城介一家の高野山開版事業に寄與する所は實に特筆すべきものがあつた。泰盛の開版に係る現存明かなるものは次の如くであつて、七部三十一帖の密部典籍を開版弘通したが、其の一門の驕奢が原因となつて、泰[illegible]盛父子は弘安八年遂に誅せられるに至つた。

書名	冊數	書寫	開版
御請來經等目錄	一帖	建治三・七・廿八書（信藝）	建治三年八月刊
大毘盧遮那成佛經疏	廿帖（卷一）建治三・五・四書（信藝） （卷二十）弘安二・四・廿三書（信藝）		建治三年八月刊 弘安二年四月刊
金剛頂經	三帖	弘安二・七・十七書（能海）	弘安二年十一月刊
阿字義釋	一帖	弘安三・三・廿九書（覺海）	弘安三年六月刊
大毘盧遮那經供養次第法疏二帖		弘安二・十二・五書（信藝）	弘安三年七月刊
蘇悉地羯羅經	三帖	弘安三・四・九書（能海）	弘安三年八月刊
悉曇字紀	一帖	弘安三・四・一書（信藝）	弘安三年十一月刊

右の諸本に見える如く、當時の所謂版下の筆者には、信藝・能海・覺海等を初め其他、定隆・覺胤・性海等多くの僧が數へられるが、其の書體は奈良刊經の風格と全く同一である。何れも能筆である中に殊に信藝の書が最も優れてゐる樣である。高野に於ける典籍印

板は、秋田城介泰盛の外護を蒙つて著しい活氣を示したけれども、其れ以前に於いても

快賢阿闍梨の開版

快賢阿闍梨（高野板之研究一五四至五八頁）は、三教指歸（建長五年刊）を初め、秘藏寶鑰（建長六年正月刊）・秘密漫荼羅十住心論（建長六年六月刊）・釋摩訶衍論（建長八年刊）・四種曼陀羅義（建長八年刊）・一切如來心秘密全身舍利寶篋印陀羅尼經（正嘉二年刊）・遍照發揮性靈集（正嘉二年刊）・大毘盧遮那成佛神變加持經疏（正嘉三年刊）等の諸本を、又秘密漫荼羅十住心論（卷第七、一帖、建長七年法辨刊）・秘藏寶鑰（卷中、一帖、建長七年能辨刊）・秘密漫荼羅十住心論（卷一實眞、卷二賢定、卷三興實、卷四覺能、卷五理俊、卷八惠深、卷九眞弁建長七年刊）・秘密漫荼羅十住心論（正嘉二年刊、十帖）・金剛頂經開題（一帖、建治二年定眞刊）等が行はれた。

慶賢阿闍梨の開版

泰盛と關係して其の歿後盛んに開版事業を企てたのは弘安九年に金剛三昧院第十一代の長老となつた慶賢阿闍梨（高野板之研究一五八頁）であつて、建治三年に續遍照發揮性靈集三帖の印板を開いたのを初めとして、正應元年には、釋摩訶衍論記六帖、同通玄鈔四帖、同論玄贊疏五帖、正應二年には、發菩提心論一帖、三教指歸三卷、同三年には、秘藏寶鑰三帖、同四年には、金剛頂經大瑜伽秘密心地法門義訣一帖、同六年には、仁王護國般若波羅蜜多經二帖、及び正安四年には、御請來目錄一帖等の開版を行つてゐる　慶賢は嘉元元年世壽八十三にて金剛三昧院に示寂したのであるから、其の前年八十二歲まで印板事業に從つてゐるのである。

鎌倉末期の開版

なほ慶賢の印板の他に、同時に覺胤に據つて弘安三年に眞言二字義一帖、四種曼荼羅義問答一帖、金剛般若波羅密經開題一帖、蘇悉地羯羅經疏一帖（嘉曆四年刊）等の開版が行はれ、續い

て鎌倉末期に至るまでに、金剛頂瑜伽經十八會指歸一帖（正應四年刊）・般若理趣釋一帖（永仁四年刊）・即身成佛義一帖（乾元二年刊）・秘密曼荼羅十住心論十帖（乾元二年刊）・三千佛名經三軸（嘉元三年刊）・金剛界禮懺文一帖（文保二年刊）・即身成佛義一帖（元應元年刊）・辨顯密二教論二帖（元應二年刊）・梵網經開題一帖（嘉曆二年刊）・眞實經文句一帖（嘉曆二年刊）等多くの密部の典籍が現れてゐる

高野版印板目録の存在

現存舊槧本に據つて知り得る當代の高野に於ける印板事業の大勢は大體以上の如くであるが、なほ當代の高野板の研究には重要なる資料が現存してゐる。即ち、當代高野印板目録の現存する事であつて、之は他の舊刊本には殆ど其の例を見ない所である。早く水原師に據つて五種の目録（文應元年（一二六〇）・正安二年（一三〇〇）・延慶四年（一三一一）・元應二年（一三二〇）・元亨三年（一三二三））が發見紹介せられ、近時同師に據つて其の中の後兩種三帖が覆製出版せられた。

其の中、元應二年目録は、延慶四年目録を踏襲書寫したものであるから、其の内容を異にするものは、結局四種となる。其の最も古い文應元年目録には、釋摩訶衍論以下の十四部が著録せられてゐるのが、次の正安二年目録には大日經疏以下四十六部となつてゐて、約四十年間に三十部の增加を示してゐる。以下の延慶四年目録・元應二年目録・元亨三年目録は、共に三十七部を所收してゐる。以上五種の中、近時覆製せられた最後の二種は共の原本が傳はつてゐる。（昭和七年七月水原師同高野版目録、同六月刊高野版之研究一二九—一四九頁參照）

なほ之等の目錄に其の料紙裝釘の品別價格、經師注文の規定等、開版事業に關する諸種の記錄を併せ具へてゐるのは、日本印刷文化史研究上極めて貴重なる資料と言ふ可きである。

高野板の研究に就きては、水原堯榮師の業績(高野山學志第一篇)「高野板之研究」並びに圖錄「高野板英萃」「高野板開板目錄」等參照。

第三節　醍醐並に叡山に於ける法樂刊經

奈良の地に發達した刊經は、高野山を初め當代諸方の寺々に影響を及ほしたが、醍醐並びに叡山に於ける開版事業も亦直接奈良刊經の影響を蒙つて現れたのである。

醍醐は中世以來其の座主が東大寺の東南院主を兼ねてゐた關係もあり、又其の開版典籍が三論宗關係のものである點から見ても、其の開版事業は、直接奈良刊經の影響を蒙つて現れたものと言ふ事が出來る。併し、其の醍醐版とも稱す可きものは、「大乘玄論」五卷が知られるのみであつて、之は弘安三年に一度開版せられた雕板が火災に失はれて、永仁三年再び醍醐の學侶に據つて刊行せられたものである。弘安三年の刊本は現存するものなく、永仁三年の刊本も、在來知られてゐなかつたのを、（[illegible]氏始め奈良刊經史に[illegible]）（混ぜられしも、往に寧樂古經選の附錄續寧樂刊經史に東寺金剛藏の卷二の零本實は永仁三年刊本を紹介せられしも、弘安か永仁かを詳にせられざりしは止むを得ざる所なり。）成簣堂文庫に永仁三年刊本の卷五一帖、石井氏積翠文庫に五卷五帖を檢し、成簣堂善本書目と舊刊影譜とに所收する事を得て、初めて世に明かになつたのである。（卷首缺、舊刊影譜所載）同五卷五帖　兩面摺　七行二十字　字面高さ七寸二分　石井氏藏本は完本であるが、惜むらくは卷末刊語の一葉を缺き、成簣堂文庫藏本は卷五の一帖を傳へてゐるが缺葉なく、海龍王寺の舊藏本である。卷末刊語は左の如くである。

醍醐版大乘玄論

是旦名德　法諱吉藏　歷劫仕佛　三論顯揚」深奥宗義　末世如忘　先師悲此　專懷感傷
彼遷化後　屢迭星霜　弘安聖曆　第三初商」一十三歳　忌景云當　爲資追福　大乘玄章
謹開印板　以耀餘光　納清瀧宮　法樂增莊」不圖斯印　同祿遭殃　醍醐學侶　不耐愁腸
衣鉢各投　論文再彰　攝嶺雲盡　八不月凉」金陵風扇　一實華芳　所生慧業　廻向無疆
万乘聖化　德徧三皇　四海靜謐　慶賢百王」七世恩所　佛道增長　廣施群類　利益堂堂

于時永仁三年三月二十一日菩薩戒比丘寂性

右の刊語中に、「納清瀧宮法樂增莊」とあるのは、前述の興福寺の春日神社に於ける、又は次に述べる叡山の日吉神社に對するが如く、之等諸大寺の刊經が、春日・日吉・清瀧三社の樂の發達の事情と同じく、何れも其の鎭守の神々の靈光に浴して其の發達を遂げてゐる事を明示するものであつて、中世の社寺に於ける注意す可き現象と言はねばならない。

叡山に於ける法華三大部の開版

次に、當代に於ける叡山の開版事業は、奈良・高野等に比して著しく其の發達が遲れ、僅に、弘安二年より永仁四年に至る十八年の歳月を費して刻成せられた法華三大部（玄義・文句・止觀各二十卷）並に其の注疏（玄義釋籤卷二十・文句疏記卷三十・止觀輔行弘決卷四十）が知られてゐるに過ぎない（大屋德城氏日本佛教史の研究參照）。其の開版が直接奈良の影響を蒙つてゐるのではないかと考へられる事は、其の刊行關係者中に見える嚴成が、寛元中奈良に於いて大乘

起信論を雕成した學侶と同一人らしいのに據つても察知せられるのである。

（摩訶止觀第一奥）弘安二年卯己五月三日於關東書寫訖」奉書　山王法樂拭老眼所染筆

也嚴成生年三十

（法華文句第九奥）天台教觀典　適畢摸寫功　使後賢鑽仰　令來者弘通

三聖垂迹砌　神德陪尊崇　百王鎭護崗　人法彌紹隆

過現恩所禎　緇素結緣衆　悉蘿頓犄拭　俱遊眞如宮

願主權大僧都承詮

弘安四年七月十六日於出雲路旅所令書寫了

正三位下行前越前守藤原親成

右の刊記中にも見えてゐる如く、其の開版が日吉山王法樂の爲に行はれたものである事は、春日社・清瀧宮に於ける場合と全く同一の事情にある。其の各卷の刊語に據れば、本書の開版に際しては、權大僧都承詮願主のもとに從一位藤原良敎（法華文句第一下）・前權中納言平時繼（法華疏記第三）・從三位平範賢（法華文句第五）・前大僧正增忠（法華疏記第三中）・大法師視瑜（法華疏記第六）等、僧俗三十一人が版下を奉寫してゐる。其の中に宋人了一・盧四郎の兩人の見える事は頗る注意す可く、最も多く版下を奉寫してゐるのは、阿闍梨賴慶嚴成及び其の弟子嚴尋・宋人了一等である。なほ奉寫の人々が、一帖を寄合書にしてゐるもの、例へば法華文句疏記第八

本卷の前半を從一位藤原良教、後半を宋人了一が、又摩訶止觀第四·五の嚴成執筆の奥だけを嚴尋が續け書きを行つてゐるが如きである

本書の傳本は、東寺·叡山文庫を初め諸寺に零卷を存するが、久原文庫藏本は、文明十四年に摺寫寄進した後摺本である。

第四節　京洛に於ける淨土教版の盛況

奈良高野兩地に於ける開版事業は主として前代に於ける京洛の摺經の影響を蒙つて發達し頗る隆昌に赴いたが、其の間京洛の地に於いても開版事業は兩地と相並んで引續き行はれてゐたのである。就中、淨土教の新に勃興を來すと共に、淨土教の教義宣傳に資し、延いては當代文化にも大いなる寄與を爲した開版事業が其の教徒に據り、華頂山智恩院を中心として行はれ、現在知られてゐるもののみでも鎌倉時代を通じて數十種の多きに達してゐる。是等一類の刊經を近時特に「淨土教版」と稱する。（藤堂祐範氏「淨土教版の研究」）

最古の淨土教版

藤堂氏の研究に據れば、淨土教版の最も古いものは、建仁四年（一二〇四）刊無量壽經（一帖、山田氏藏）・建暦元年（一二一一）呂慶刊行の注十疑論（一帖、稱名寺藏、書影は[illegible]刊行會叢書[illegible]刊）で、其の後のものとしては、

鎌倉時代淨土教版の刊行と開版者

若讃（寛喜元年刊、一帖、[illegible]氏藏）・往生西方淨土瑞應刪傳（貞永元年刊、一帖、西本願寺藏）・阿彌陀經（嘉禎二年刊、一帖、[illegible]藏）・選擇本願念佛集（建長元年刊、二帖、法然院藏、建長三年刊、一帖、西本願寺藏）・安樂集（寛元三年刊、二帖、龍谷大學藏）・往生十因（寶治二年刊、一帖、龍谷大學藏）・群疑論（建長二年刊、七帖、文庫藏）・法然上人像（正和四年刊、一枚、[illegible]院藏）・黒谷上人語燈錄（元亨元年刊、十帖、龍谷大學藏）・淨土三部經（[illegible]二年刊、四帖、東寺觀智院藏）等が現存してゐる。其の開版者は、明信・入眞・往成・仙才・知眞・如圓・了延等、同宗派の宗徒である。

往生要集の開版

又、特に往生要集も早くより開版せられて、承元四年（原本不傳）・建保四年（下卷一帖、[illegible]氏藏）・建長五年

平假名書き黒谷上人語燈錄の刊行

（六條、龍谷大學・東山文庫有抜等藏）等の諸本がある。これ等一類の版經は文字の風格並に裝釘（巻子・帖裝のみにして袋綴はなし）等より見れば、全く前代の摺經の系統を受けて發達したものである。この淨土教版は南北朝を經て室町時代に至つても、其の開版は少しも衰へなかつたけれども、其の版式は次第に粗雜となり、且つ又、宋・元版の影響をも若干蒙る様になつた。

なほ淨土教版に就いて注意す可きは、假名交り書籍の開版を見た事である。我が國に印刷文化が發生して以來、其の印刷せられたものは盡く漢文體の書籍に限られ、假名書きの書籍は元亨元年（一三二一）向專修沙門圓智刊行の黒谷上人語燈錄（七卷、七帖、龍谷大學藏）を以て嚆矢とする。然もこの黒谷上人語燈錄は平假名交りであつて、中世末期に至るまでの殆ど唯一の平假名交り書籍の印行である。なほ中世末期に至るまでの假名交り印書に就いては別に後記する。

第五章　中世後期に於ける印刷文化

第一節　中世後期印刷文化の特色

附　五山版の意義

禪宗の勃興と宋刊本の盛行

平安朝の中期京洛に起つた摺經の系統を引いた印刷文化が、鎌倉時代に入つて京洛奈良高野等の各地に於いて著しい發達を遂げた事は前述の如くであるが、南北朝以後に於いては、漸次衰退に向つた。開版數に於いても前代に比して少數となり、在來の樣式は次第に精美を失つて粗雜に流れ、技巧上の進展も止つてしまつたのである。

一方に於いては鎌倉時代の初頭、碩學俊芿の入宋してより律部典籍の宋本覆刊を見るに至つたが、之に次いで、新たに禪宗の勃興すると共に、日支兩國の禪家緇流の彼此往來する者漸く繁く、宋刊本の將來も亦數を加へ、鎌倉中期以後、鎌倉・京都に所謂五山が創始せられて、學僧の輩出するに從ひ、禪學研讚の爲、支那禪籍の覆刻事業が起り、自然に宋刊本の版式の影響を多分に有する刻本が現れる樣になつたのである。加ふるに、禪家緇流が當代武家階級の有力なる支援を獲得してゐた事が經濟的に困難なる開版事業を比較的容易に遂行し得る一原因ともなつて、鎌倉末期より現れた其の開版事業は、南北

朝に至つて最も盛んなる發展を示したのである。

覆宋覆元の樣式

是等、宋版の影響を蒙つた版式の特色は、匡郭界欄を有する版下書きの書風を有し、其の字體が著しく角張つてゐる點である　當期に於ける支那刻本の覆刻には、原刻本の時差に據り、覆宋覆元、更に室町時代に入つては、覆明刊本も現れたが、間々宋元版と認識せられる程の精刻なものもある（松源和尚語錄（成簣堂文庫藏）等）當時支那刻工の來朝歸化して雕刻に從事する者も少くなかつたのであるから、我國に於いてはいはば宋元版の開版が行はれたわけであつて、其の版式の精美なものが少くないのは當然である。

支那版式の流行

宋元刻本の覆刻の盛行に從つて、我禪家撰述の語錄類等も亦、自ら宋元版の樣式を襲ひ、玆に專ら支那版式の流行を見たのである

外典開版の發生

なほ、此期に於ける特色として注意す可きは、鎌倉末期に發生した外典の纔刻開雕と、室町時代に於ける地方版の興起とである　前者は、禪家緇流の講學と武家の教學とに用ひる若干の外典が、一には多數を一時に鈔寫する事の不便なるが爲に開版せられるに至つたものであつて、從つて其の刊行は禪家學僧の講學讀書を許されてゐた集類韻書類を主とし、之に僅少なる儒書を作つてゐるに過ぎないが、佛典以外の書籍の開版が行はれる樣になつた事は實に我が印刷文化の一大進展である。この佛徒の外典開版事業に伴つて、漸く特志家に據る社會的事業の意味に於ける外典開版事業が現れ初めた

事も亦當期に於ける印刷文化の特色の一つである。

地方への普及

更にこの期の後半室町時代に於いて、鎌倉期より若干起りつゝあつた各地方の開版事業が、近畿各地、東西の諸方に廣く普及する樣になつて、我が印刷文化は玆に地方的にも一大發展を遂げる事となつたのである。

附　五山版の意義

「五山版」といふ術語は極めて曖昧な名稱であつて、比較的新しく使用される樣になつたものであるが、「五山版」と稱する刻本中には、五山開版の確證無きもの、或は五山以外の寺院に於いて開版せられたものも尠くない。

鎌倉・京都の五山

暦應年間に定められた「五山」は、京都に於いては、南禪寺・天龍寺・建仁寺・東福寺・萬壽寺（後に相國寺が加はり、南禪寺は五山の上位となり、結局六寺となる）鎌倉に於いては、建長・圓覺・壽福・淨智・淨妙の五寺であつて、

五山以外の諸寺の印行

京都に於いて、妙心寺・大德寺・臨川寺等は加へられてゐない。併し、この妙心臨川の諸寺の開版事業は京都五山の其れと共に、否或る點では反つて其れ以上に隆昌を極めた。其れ故に嚴密に言へば「五山版」と言ふ名稱は、其の内包を蔽はざる憾みがあるが、旣に熟した名稱であつて、實際に當つて之を廢棄する事は不可能である。乃ち、中世後期の印刷文化の特色は、支那版式の影響を蒙つた禪籍の開版に存し、從つて五山版に屬す可き

ものが、其の中心を爲してゐるのであるから、玆に「五山版」なる名稱を稍廣義に解し、次の如き内包を有するものとする日本書誌學會の制定に從つて、之を用ひて行くのが穩當であらうと思ふ。

五山版の意義

卽ち、「五山版」とは「五山並に禪宗關係者によつて、鎌倉室町間に刊行せられた書籍」を言ふとするのである　卽ち、本書に用ひる「五山版」の見解と其の範圍とは右の如くである

五山版に就きては、他日別に詳細なる研究の發表を期し、玆には中世期印刷文化の大略を述ぶるに止む。

第二節　五山版發達の初期

平安朝の中葉以來、宋版一切經の將來せられるものも尠からず、宋商舶の來往に從つてまた學侶の入宋する者も絶えず、間接に彼の土に於ける印刷文化の影響を蒙る事はあつたが、鎌倉初期に至つて、入宋碩學俊芿の棲住に據り、鎌倉中期寛元建長以後、東山泉涌寺に於いて律部宋刊本の覆刻事業が起るに及んで、茲に支那版式の影響が稍顯著に現れ初めたのである。

泉涌寺版　泉涌寺版と稱す可き其れ等覆宋刊本は鎌倉末期まで續梓されてゐるが、現存明かなるものは、寛元四年（一二四六）の佛制比丘六物圖・寳治二年（一二四八）の梵網經盧舍那佛說心地法門品菩薩戒本・建長四年（一二五二）の四分律删繁補闕行事鈔・文永十年（一二七三）の教誡律儀・永仁六年（一二九八）の盂蘭盆經疏新記・正安元年（一二九九）の四分律含注戒本疏行宗記・元亨二年（一三二二）の新删定四分僧戒本等である。

西大寺版　又この泉涌寺に刺戟せられて南都西大寺に於いても律部覆宋刻本の行はれた事は既に前述した所である。

鎌倉版　なほ又、正嘉二年靈山寺住持宴海謹誌の刊語を有する盂蘭盆經疏新記等、所謂「鎌倉版」とも稱す可き一類の刊經も亦、覆宋刻本であるが、支那版式が時代

五山版の出現　印刷文化の特色として盛行する様になつたのは、鎌倉末期以後、所謂五山初め禪宗關係者の禪籍翻刻が現れ初めてからである。

初期の五山版

弘安十年刊禪門寶訓

正應年間の五山版

永仁・乾元・嘉元・正和・元應年間の五山版

五山版の最初に現れたものが何であるかに就いてはまだ明確ではないが、鎌倉中期東福寺中の普門院に於いて既に開版事業が行はれてゐる。然し、現存資料の示す限りに於いては、弘安十年（一二八七）古倫刊行の禪門寶訓（成簣堂文庫藏）・正應元年（一二八八）刊行の應菴和尚語錄（圖書寮藏）・密庵和尚語錄（東福寺藏）・虎丘和尚語錄（成簣堂文庫藏）・破庵和尚語錄（成簣堂文庫藏）・同二年（一二八九）刊行の雪竇明覺大師語錄（東洋文庫藏）等が最も古く、次いで永仁三年（一二九五）刊の禪林僧寶傳（石井氏積翠文庫藏、本書には三種の重刊本ありて共に成簣堂文庫に藏せらる。）・乾元二年刊（一三〇三）の人天眼目（石井氏藏、本書有界十一行本、無界本は覆刻本なり。）・嘉元元年（一三〇三）刊虛舟和尚語錄（東洋文庫藏）・正和二年（一三一三）刊虛堂和尚語錄並續輯（成簣堂文庫藏）・元應二年（一三二〇）刊鎭州臨濟慧照禪師語錄（靜嘉堂文庫藏、刊語に至るまで原本の儘に覆刻せる一本あり、安田文庫藏。）・增修禪敎施食儀文（一冊、成簣堂文庫藏、卷中佛像の挿畫あり、無刊記なるも鎌倉末期の刊行と認む。）・嘉泰普燈錄（三十卷十冊、成簣堂文庫藏、卷末に「此板見在淨慈寺長生庫印行」の除文（ママ）記あり、鎌倉末期の刊行と認む。本書にはなほ南北朝の覆刻あり。）等である。

これ等の飜刻に際しては、我が禪僧のみならず、歸化宋僧の力に俟つ事も亦少くなかつたのであるが、建武中興以後、政治の中心が京都へ遷る樣になつて後は其の開版事業は、京都五山を中心として隆昌に赴き、南北朝に至つて遂に其の極に達したのである。

第三節　五山版の隆昌期

南北朝に於ける五山版の隆昌の原因

元寇の役の後、殊に元末に於いては、天龍寺船を初め、日元商舶の來往の漸く頻繁なるに從つて、禪僧渡海の風潮も益々盛んとなつて、一時に數十人の多數が入元するが如き現象をも生じ來つた。此等の入元僧が新舊の一切經其の他の典籍を舶載歸國の後、語錄を始め多數の禪籍を覆刻する傾向を生じ、南北朝に入つては、特別に開版事業に意を用ひた禪僧の輩出すると共に、たまたま技術の優れた多數の彼土刻工の來朝する者を得て、茲に版式の優秀なる五山版の多數が陸續として現れるに至つたのである。

武人の罪障消滅希求の開版

又茲に當時の開版事業の隆昌を助長するに至つた一因として注意す可きは、武人の罪障消滅を希求する爲の開版が流行した事であつて、就中、足利尊氏と高師直との開版が最も世に著れてゐる。

足利尊氏の開版

足利尊氏は、大般若波羅蜜多經六百卷（伊藤庄兵衞氏舊藏）を觀應三年九月十五日附を以て摺刷し、又、

大般若波羅蜜多經書寫一切經

一切經書寫を發願し、其の發願文のみ印板を用ひ、「尊氏」の二字を自署してゐる。其の發願文は左の如くであるが、之には同文異版、並に第三・四の二句を除去した別版もある。（舊刊影譜參照。此の一部分は諸家に分散せしも、なほ近江國園城寺に數百帖殘存せり。〔園城寺の所藏參照〕）

發願文

發願文

願書藏經功德力　世々生々聞正法〔頓悟無上菩提心　登佛果位酬聖德〕
後醍醐院證眞常　考妣二親成正覺　元弘以後戰亡魂　一切怨親悉超度
四生六道霑沾恩　天下太平民樂業
文和三年甲午歲正月廿三日
征夷大將軍正二位源朝臣（尊氏）謹誌

高師直の開版　首楞嚴義疏注經

高師直は曆應二年（一三三九）に同じく罪障消滅の爲に首楞嚴義疏注經十帖を刊行した。（圖書寮尊藏本は帖裝にして初印なり。本書後印本は多く袋綴とせり。別に同經には稍後代の覆宋刊本存す。）之は明かに宋本の覆刻であつて、卷末刊語は左の如くである。

師直熟思今生愆尤不可勝計矧是鑛劫
罪障何以消除因玆謹開此
眞詮之板以拔積業之根所冀上報四恩
下資三有同出妄想昏域共入
楞嚴覺場
曆應二禩季春中澣武藏守高師直敬誌

其の他武人の開版としては、文和二年足利基氏の大般若波羅蜜多經、康曆元年佐々木氏賴の大般若波羅蜜多經等少くない　又、足利直義等も一切經の刊行に援助を與へてゐる

る。（[illegible]）禪家緇流の開版に對する武家の保護援助は頗る注意す可きものであつた。

武家に對して當代の公家の開版事業は、見る可きものも少く、康永四年刊行の古林和尚得頌拾遺には、花園院を初め奉り、多數の公卿女官が助緣を行つてゐる例等もあるが、佛事供養の爲に經卷を摺寫する事は間々行はれた。龍肅氏（[illegible]）・禿氏祐祥氏（[illegible]）の示された所に據れば、看聞御記應永二十三年十一月、伏見宮榮仁親王の薨去に際し、五七日の御佛事に、梵網經一卷、壽量品一卷を御遺書を翻して摺寫し奉つた記事がある他、薩戒記、正長元年八月十五日に稱光天皇崩御の際の朝廷に於ける御佛事の記載中に金光明經摺寫の由がある。少し降つて親長卿記、文明九年十二月九日・同十六年十一月十八日の條、蔭涼軒日錄の永享七年六月二十九日の條、同じく八年七月より光明眞言塔の摺寫を毎月十八日に配附する由の記事、長祿三年十二月十八日並に晦日の條、大乘院寺社雜事記、文明六年五月廿四・五日の條、實隆公記（[illegible]）等に摺佛の事が見えるから、前代に引續いての盛行が察せられるのである。なほ中世期に於ける摺佛は、諸方の寺社に於いて施與する本尊の御影護符の類となつて發達する樣になつたらしいのであるが、未だ研究が及んでゐない。

中世後期に於ける五山版の開版數

中世後期に於いて五山版の開版せられたものは、何の位の數に達するか、なほ研究が不十分で明確にし難いが、現に知られてゐるものだけでも數百種に達し、其の最盛期たる

暦應康永年間より應永年中に至る、南北朝を主とする五十餘年間に於ける刊行年代の明確なものだけでも數十種に及ぶ。又、刊行年月の明記無きものにも其の版式上、南北朝頃の刊行と推定せられるものも多數存在する。かゝる狀勢の中にあつて、最も開版事業に顯著なる業績を示したのは、天龍寺の春屋妙葩であつて、一面から見れば、南北朝期に於ける五山版の隆昌は、彼に負ふ所が多大であると言ふも過言ではない。

春屋妙葩の開版

妙葩が初めて開版事業に關與したのは、現存資料の示す限りに於いては、康永元年（一三四二）である。即ち、暦應四年（一三四一）に梵僊座下の森禪人が主唱し、等持の古先印元等が之を扶けて、古林和尚語錄（成簣堂文庫藏）の刊行を企圖した際、翌年の秋、森禪人が入元する事となつた爲、前から既に之に助緣してゐた第二座の妙葩が專ら其の後を承けて幹募終功したのである（古林和尚語錄刊語）。

康永元年刊古林和尚語錄

其の後妙葩に據つて開版せられた確證ある現存五山版は左の如くである　其の內、最後の佛德和尚語錄のみは晩年相國寺に棲住してから開版したものであるが、他は盡く天龍寺に於いて刊行したものである。又其の中には宗鏡錄等の如く、支那工匠を使用して雕刻した確證ある刻本もあるが、師守記の唐人刻工が嵯峨に來着したと言ふ記載等に據つても、恐らく彼土刻工の手に掛つた刻本が多數であつたと思はれる。

妙葩刊行書目

雪峯東山和尚語錄　一卷　二册　貞和五年（一三四九）刊　成簣堂文庫藏

雪峯空和尚外集　一卷　一冊　貞和五年刊　圖書寮尊藏

雪峯空和尚外集一本成簣堂文庫藏に此版留在嵯峨臨川寺の刊記あるものあり本書は天龍寺内雲居菴の刊行なる可し。

五家正宗賛　一冊　貞和五年刊　高木文庫藏

夾注輔教編　六卷　三冊　觀應二年（一三五一）刊　石井氏積翠文庫藏

詩法源流　一卷　一冊　延文三年（一三五八）刊　内藤虎次郎氏藏

蒲室集　一卷　一冊　延文四年（一三五九）刊　帝國圖書館藏

范德機詩集　七卷　一冊　延文六年（一三六一）刊　内閣文庫藏

夢窻正覺心宗普濟國師語錄　二卷　二冊　貞治四年（一三六五）刊　成簣堂文庫藏

天龍開山夢窻正覺心宗普濟國師年譜　一卷　一冊　貞治四年（一三六五）刊　安田文庫藏

虎丘和尚語錄　一卷　一冊　貞治七年（一三六八）刊　成簣堂文庫藏

破菴和尚語錄　九卷　一冊　應安三年（一三七〇）刊　圖書寮尊藏

應安和尚語錄　二卷　二冊　應安三年刊　内野氏皎亭文庫藏

無準和尚語錄　十六卷　一冊　應安三年刊　成簣堂文庫藏

宗鏡錄　一百卷　二十五冊　應安四年（一三七一）刊　久原文庫藏

佛德禪師語錄　二卷　一冊　至德元年（一三八四）刊　成簣堂文庫藏

新編翰林珠玉
華嚴合論
法苑珠林
大藏一覽集

京都富岡氏所藏の新編翰林珠玉六卷、卷末に「貞治癸卯孟春[ ]命工刊行」の刊記あるものの版式上より妙葩の刊行と推定されるものがある。長澤規矩也學士示教。この他、華嚴合論一百二十卷。天龍寺雕造にして、卷十五、應安五年刊以下六十卷、明德四年に至る刊記あり。卷二十六には「天龍寺雲居菴」の刊記あれば、本書亦妙葩の關係せる開版なる可し。(南禪寺藏)も妙葩の刊行と認む可く、康曆三年刊行の法苑珠林一百卷、大唐江南等刻板も天龍寺板と傳へられてゐる。又、大藏一覽集(十冊、成簣堂文庫藏)卷十の末に「應永癸未歲開此版留在天龍雲居菴」の刊記があるから、此も妙葩の影響に據る開版であらう

臨川寺の開版

天龍寺妙葩の刊行に次いで最も數多く開版を行つたのは、嵯峨の臨川寺である　臨川寺刊行の刊記を有する所謂「臨川寺版」中、現存最古のものは、曆應四年一三四一僧興乘・尼昌一助緣刊行の佛果圜悟眞覺禪師心要二卷二冊で、次いで曆應五年刊行の靈源和尚筆語一卷一冊である　右の二書は、後出の集洪州黃龍山南禪師書尺貞治六年(一三六七)刊一卷一冊、大谷大學藏(永正九年識語存す。)と共に刻

臨川寺版書目

雕の文字も稍大型で極めて版式の精美なものである
貞治六年覆元刊本の禪林類聚二十卷二十冊は、初刻の後間もなく何故か支那刻工陳孟榮に據つて補刻せられ、其の後も度々補刻が加へられてゐる　又、原刻本を別に覆刻した一本も存する　この禪林類聚は希杲の幹緣に據り、僧俗百二十餘人の助緣に成つたもので臨川寺版中最も浩瀚なものである。この希杲は、應安五年に附訓の妙法蓮華經八卷をも開版してゐて、世に之を嵯峨本とも稱するが、恐らく此も臨川寺内の刊行であらう

この法華經には後に附訓を改め、原刊記を其の儘に覆刻したものも行はれてゐる。

以上の他にはなほ、了菴和尚語錄（南堂禪師語錄）（二巻六冊、成簣堂文庫藏、應安元年一三六八刊）、石門洪覺範林間錄並後錄（三巻三冊、東洋文庫藏、康曆二年一三八〇刊）、金剛般若波羅蜜經註解、般若波羅蜜多心經註解（各一冊、[illegible]藏、[illegible]二年一三八〇刊）、初祖三論（一冊、[illegible]氏・[illegible]氏藏、至德四年一三八七臨川三會院刊）等があり、圓悟禪師語錄（三巻三冊、成簣堂文庫藏、應永十一年一四〇四刊）が其の最後の様である。

天龍・臨川南禪寺の開版事業は五山版中の尤なるものであるが、建仁・南禪・東福の諸寺に於ける開版にも亦注意す可きものが少くない。

建仁寺の開版

當代の建仁寺に於ける開版としては、第一に景德傳燈錄三十巻がある。貞和四年一三四八に天潤菴の玉峯が自ら工に命じて刻梓したが、間もなく文和四年一三五五の變亂に其の板

景德傳燈錄の補刻

の大半を失つたので、建仁寺の宗任が幹緣し、僧俗の助緣を得て、延文中に更に補刻を行つた。（景德傳燈錄には貞和[illegible]の一刊本あり、谷村一太郎氏藏、[illegible]藏）玉峯は他に佛果圜悟禪師碧巖錄十巻をも刊行して

碧巖錄

ゐる。（成簣堂文庫藏。但し、本書には原木記をも其の儘に覆刻せる一本あり、内野氏皎亭文庫に藏す。）

五燈會元

同じく建仁寺の靈洞院に於いて、貞治七年一三六八に法印宗應の手に據つて五燈會元二十巻が開版せられた。又少し降つて明德二年一三九一には、清牧が禪居菴に於いて、清拙和尚

清拙和尚語錄

語錄一巻を刊行してゐる。

南禪寺の開版

南禪寺は前に吉林和尚語錄を康永元年に開版したが、次いで同四年には椿庭海壽が吉

林和尚拾遺偈頌（安田文庫藏）を刊行した。永徳二年（一三八二）には塔頭龍興菴に於いて佛祖正傳宗派圖が新刊せられた。義堂周信が其の募緣疏偈を書いてゐる佛祖統紀五十五卷も同寺の僧生岩の力に成つたものである。其の他義堂周信撰述の諸書、重刊貞和類聚祖苑聯芳集・空華集・義堂和尚語錄等も、或は同寺の刊行であらう

東福寺の開版
元亨釋書の重刊

東福寺は圓爾辨圓の豐富なる典籍將來の影響を蒙り、早く普門院に於いて開版が行はれた樣であるが、南北朝に至つては、海藏院に於いて虎關禪師の元亨釋書三十卷が鏤梓せられた。初め、虎關禪師の徒、無比單況等が貞治三年（一三六四）から永和三年（一三七七）まで前後十三ケ年を費して刻成した鏤板は、僅に數年を經て永徳二年（一三八一）の火災に烏有に歸したので、性海靈見は更に募緣して明徳二年（一三九一）に重刊した

嘉慶元年刊冥樞會要

この他には、嘉慶元年（一三八七）三河實相寺是一等が刻して常樂庵に置いた冥樞會要三卷三冊（成簣堂文庫藏）又、正宗菴に於いて佛果圜悟禪師碧巖錄等の刊行がある

妙心寺刊佛果圜悟碧巖錄

以上諸禪院の他になほ少し後の刻本であるが、妙心寺の佛果圜悟禪師碧巖錄等諸寺の開版も少くないが、其の刊記を通じて考察するに、一寺中に於いて多數の開版を行つてゐるものは比較的少い。併し、これ等はなほ今後の研究に據つて新に闡明される點が少くないと思ふ。次に五山版隆昌の時代に於ける管見に入つた刊行年時の明かな京洛開版の佛書を列擧すると左の如くである。外典も便宜併記する。なほ詳細に調査

すれば種々の新發見があらうと思ふ。

暦應・觀應間五山版有刊記本書目

暦應二己卯年一三三九刊　首楞嚴義疏注經（靜直刊）　十帖
　四辛巳年一三四一刊　佛果圜悟眞覺禪師心要（臨川寺刊）　二冊
　五壬午年一三四二刊　靈源和尚筆語（臨川寺刊）　一冊
康永元壬午年一三四二刊（改元）　古林和尚語錄　三冊
　禪儀外文集　一冊
　二癸未年一三四三刊　冷齋夜話　二冊
　三甲申年一三四四刊　夢中問答集（大字本）　三冊
　四乙酉年一三四五刊　古林和尚偈頌拾遺　一冊
貞和二丙戌年一三四六刊　感山雲臥紀談　二冊
　三丁亥年一三四七刊　雪峯空和尚外集　一冊
　四戊子年一三四八刊　景德傳燈錄　十五冊
　五己丑年一三四九刊　五家正宗贊（妙葩刊）　一冊
　雪峯東山和尚語錄（妙葩刊）　二冊
　雪峯空和尚外集（妙葩刊）　一冊
觀應二辛卯年一三五一刊　夾注輔教編（妙葩刊）　五冊

文和三（壬辰）年（一三五二）刊　大般若波羅蜜多經（尊氏版）　六百帖

三（甲午）年（一三五四）刊　（書寫一切經）發願文（尊氏版）

五（丙申）年（一三五六）刊　勅脩百丈清規（永尊刊）　二冊

延文三（戊戌）年（一三五八）刊　景德傳燈錄（貞和本補刻）　十五冊

詩法源流（妙葩刊）　一冊

四（己亥）年（一三五九）刊　蒲室集（妙葩刊）　一冊

叢林公論（識語）　一冊

六（辛丑）年（一三六一）刊　范德機詩集（妙葩刊）　一冊

貞治二（癸卯）年（一三六三）刊　月林和尚語錄　一冊

新編翰林珠玉（妙葩刊カ）　一冊

三（甲辰）年（一三六四）刊（正平十九年）論語集解（堺浦道祐刊）　五冊

四（乙巳）年（一三六五）刊　夢窻正覺心宗普濟國師語錄（妙葩刊）　二冊

天龍開山夢窻正覺心宗普濟國師年譜（妙葩刊）　一冊

六（丁未）年（一三六七）刊　禪林類聚（臨川寺版）　十五冊

集洪州黄龍山南禪師書尺（臨川寺版）　一冊

七（戊申）年（一三六八）刊　虎丘和尚語錄（妙葩刊）　一冊

	(北磵詩集卷九・北磵文集卷十・北磵語錄卷一)	
永和二丙辰年一三七六刊	歷代帝王編年互見之圖	一冊
	集千家註分類杜工部詩(觀喜刊)	十三冊
三丁巳年一三七七刊	永源寂室和尚語錄	二冊
	元亨釋書	三十帖
四戊午年一三七八刊	大休和尚語錄	五冊
康曆二庚申年一三八〇刊	石門洪覺範林間錄並後錄	三冊
	黃龍十世錄	一冊
	金剛般若波羅蜜經註解・般若波羅蜜多心經註解(臨川寺版)	一冊
康曆三辛酉年一三八一刊	法苑珠林	一百帖
永德二壬戌年一三八二刊	佛祖正傳宗派圖	一帖
至德元甲子年一三八四刊	傳法正宗記(俞良甫版)	六冊
	佛德禪師語錄(妙葩刊)	一冊
	澹游集	一冊
二乙丑年一三八五刊	佛鑑佛果正覺佛海拈八方珠玉集	二冊
四丁卯年一三八七刊	初祖三論(臨川寺版)	一冊

嘉慶元丁卯年一三八七刊（改元）

年	書名	冊數
嘉慶元丁卯年一三八七刊（改元）	冥樞會要	三冊
	新刊五百家註音辯唐柳先生文集	二十冊
二戊辰年一三八八刊	重刊貞和類聚祖苑聯芳集	十冊
	首楞嚴經會解	八冊
明德二辛未年一三九一刊	清拙和尚語錄	一冊
	大明禪寺開山月庵和尚語	二冊
	元亨釋書（重刊）	三十帖
四癸酉年一三九三刊	新編排韻增廣事類氏族大全	九冊
應永二乙亥年一三九五刊	般若心經疏（[illegible]）	一冊
三丙子年一三九六刊	佛祖正法直傳	一冊
五戊寅年一三九八刊	古今韻會擧要	十冊
七庚辰年一四〇〇刊	大光明藏	三冊
八辛巳年一四〇一刊	圓悟禪師碧巖錄	五冊
十癸未年一四〇三刊	大藏一覽集	十冊
十一甲申年一四〇四刊	圓悟禪師語錄（[illegible]）	三冊
	佛祖正法直傳	一冊

十四年（丁亥 一四〇七）刊　一山國師語錄　二冊
十六年（己丑 一四〇九）刊　月菴和尚語錄　二冊
十九年（壬辰 一四一二）刊　聚分韻略　一冊
廿二年（乙未 一四一五）刊　虎關和尚續禪支錄　一冊
廿四年（丁酉 一四一七）刊　聖一國師年譜　一冊
廿五年（戊戌 一四一八）刊　佛祖宗派綱要　一冊
廿七年（庚子 一四二〇）刊　金剛般若波羅蜜經註解 般若波羅蜜多心經註解　一冊
廿九年（壬寅 一四二二）刊　旱霖集　一冊

應永以後に於ける京都の五山版は頓に衰運に向ひ、印刷文化の活動は中央を去つて、各地方に於ける開版事業が勃興する樣になつた。即ち、應永以後、室町時代に於ける印刷文化の特色は、地方印刷文化の開發せられた點に存すると言ふ事が出來る。

第四節　支那刻工の來朝

[illegible]

五山版の開版の隆昌に赴くに從つて元の刻工の我が國に來住する者が出て來つた事は、既に空華日工集・師守記（貞治六年七月廿一日、[illegible]）等にも見えてゐるが、其れ等來朝の元の工匠は主として五山版の版心に雕刻せられてゐる刻工姓名に據つて知り得るのである。版心に刻工姓名を雕刻する事は、原來我が國には殆ど例のない事であつて、之は來朝の彼土刻工が母國の慣習に從つて之を施してより我が刻本に初めて現れるに至つたものである。又、其の五山版に現れてゐる刻工名の大部分が、版心よりもむしろ匡郭の左右邊の下方外部に刻されてゐる事も一特色であらう。技術の優秀なる彼等の來朝が五山版隆昌の一大原因となつた事は言を俟たないが、彼等が最も盛んに開版に從事したのは、應安頃から應永の初め頃までであつて、室町時代に入つて後は、版心に刻工名を見出す事もなく、彼土來朝の刻工も絶えてしまつてゐる。即ち、元刻工の雕刻に係るものが多數を占めてゐるのは、南北朝に於ける五山版の一特色と言ふ可きである。

[illegible]

又、稀には、增修互註禮部韻略一本（[illegible]）の如く「日本永春刀」と匡郭左右邊の下方外部（[illegible]）に刻した例もあるが、此等は彼土刻工に倣つたものであらうと思ふ。又、覆宋・覆元刊本等の中に、密菴和尚語錄（[illegible]）の如く、稀には原刻本の

刻工名の見ゆる五山版

刻工名「天台周浩刊」等を殘存するものもある。（祖英集の「四明洪擧刊」また原刻工名なる事長澤學士の指摘せられたるが如し。）

其の彼土刻工姓名の雕刻の多く見えてゐる五山版には、應安四年春屋妙葩刊行の宗鏡錄を初め、貞治六年臨川寺刊行の禪林類聚（後に陳孟榮補刻）、永和二年刊の集千家註分類杜工部詩、王狀元集百家註分類東坡先生詩、大廣益會玉篇等がある　就中、最も多數の刻工姓名が刻まれてゐるのは宗鏡錄であつて、之を卷中の初見順に擧げると、陳堯・立何・才從・付・養・李・褒・康・成・林・王・榮・大・用・朱・邵・文・亮・鄭・才・丁・仍・盛・和・俊・曹・安・昭・才・陳・仲・祥・壽・明・溢・孟・榮・福・良甫等の三十餘名となる。

宗鏡錄に見ゆる刻工名

而して卷末の妙葩の刊語の次に、「江南陳孟榮刋刀」とあるのを見れば、孟榮はこの時其れ等工匠を綜べる地位にあつたものであらう　王狀元集百家註分類東坡先生詩には、孟永・良・孟才・長有・彥明・伯壽等の六名、又禪林類聚（貞治六年刊初刻本）には、版心に揚・趙（肖）・陶・秀（秀）・朱・陳（東）・張・木・於・春・上壽・袞・一両・上・八等が散見し、永和二年刊行の集千家註分類杜工部詩には、孟榮・良甫・孟才・彥明・長有の六名、大廣益會玉篇には、彥明・孟才・榮等が見える　其の中、陳孟才は、鐔津文集を、又、陳伯壽は大藏經綱目指南要錄を雕刻してゐるが、陳伯壽は、空華日工集、應安三年九月廿三日の條に「唐人刮工陳孟千・陳伯壽二人來、福州南臺橋人也、丁未年（貞治六年）七月到岸、大元失國、今皇帝改國爲大明、孟千有詩、起句云、吟毛玉兎月中毛云云」と見えてゐる。

空華日工集の記載

我が國に渡つて來た彼土の刻工はこの空華日工集の記事や、陳孟榮・俞良甫が自ら江南の產と稱してゐるのに據つても知られ

る如く、何れも我が國に渡海の便よき支那南部福建邊のものであつた

兪良甫と陳孟榮

これ等刻工の中で、特に多數の開版に關與し、我が印刷文化に多大の貢獻を爲したもの

は、兪良甫と陳孟榮とである。兩者協力して同一書籍の雕刻に從つてゐるものもある

兪良甫刊行書目

が、兪良甫の關係したものは左の如くで、應安より應永に至る三十年間に亙つてゐる

月江和尚語錄　二卷　應安三年刊（彦明等協力）

宗鏡錄　一百卷　應安四年刊（多數刻工協力、此の刻工名中に良甫出づ）

碧山堂集　五卷　應安五年刊

白雲集　四卷　應安七年刊

集千家註分類杜工部詩　二十五卷　永和二年刊（多數刻工協力、中に良甫あり）

傳法正宗記　十二卷　至德元年刊

五百家註音辯昌黎先生文集　四十卷

新刊五百家註音辯唐柳先生文集　四十五卷　嘉慶元年刊

般若心經疏　一卷　應永二年刊

無量壽禪師日用清規　一卷（刻工名見ゆ）

陳孟榮刊行書目

陳孟榮の關與したものは次の如くである

禪林類聚　三十卷　貞治六年刊（臨川寺版）

宗鏡錄　一百卷　應安四年刊（妙葩刊、多數刻工協力）

重新點校附音增註蒙求　三卷　應安七年刊

新刊五百家註昌黎先生聯句集　二卷　永和二年刊

集千家註分類杜工部詩　二十五卷　永和二年刊（多數刻工協力）

天童平石和尙語錄　二卷（孟榮刊行」の刊記あり）

大廣益會玉篇　二十卷（刻工名見ゆ。）

○法苑珠林　一百卷（南禪寺藏）卷末に「旹康曆三年仲春吉日　大唐江南　等刻板」の刊記あり、また陳孟榮等の所爲なる可し。

「嵯峨版」「博多版」の傳稱

なほ玆に附言す可きは、在來俞良甫の所刻本を「嵯峨本」「嵯峨版」等稱するものもあるが、之は俞良甫が京洛嵯峨に在住して或は自ら開版し、（傳法正宗記刊語）又他に雕板に從つた點から言ふならば、敢へて穩當を缺くものではない。然しながら、之を「博多版」と傳稱し、或は彼等支那刻工が博多を經て京洛へ來着したる故等と解して、之を援用せんとするのは穩當ではない。「博多版」と傳稱するに至つた最初は、明確にし難いが、活版經籍考に「予が嘗に見し一本（一馬云、俞良甫版韓柳文）に應永七年博多僧某なるものの挍點して題字ありし本あり」云々とある舊刊本の書入等に據つて出で來つたものと解せられる節もある。

第五節　外典鏤刻の原因と其の發達

禪宗ト儒教

程朱ノ新注ト義堂ノ見解

禪家の緇流が、自家講學の持本として、且つは武家の師表としての教授用本として一時に多數の外典を必要とするに至つて、外典の開版が行はれる樣になつた事は前述した如くである。鎌倉初期以來佛典と共に齎された多數の外典の將來が其の鏤刻を助長した有力な原因である事も亦言を俟たないが、殊に經書鏤刻の發生を促すに至つた主因の一は、禪宗と儒教との密接なる關係にある。義堂周信に據れば、儒教は禪宗より脫出したものと確信して、難解なる己が禪の妙味は、武家に容易ならずとし、其の入門として、在家の人々には、まづ朱子學を說いたのである。（[illegible]）義堂の空華日工集の左の文は其の間の消息を最も明瞭に示してゐるものである。

近世儒學有新舊二義　程朱等新義也　宋朝以來儒學者皆參吾禪宗、一分發明心地註書與章句學迥然別矣　四書盡於朱晦菴及第以大惠一卷爲理性學本云々　漢以來及唐儒者皆拘章句者也　宋儒及理性達故釋義太高則皆以參吾禪

其れ故に義堂なども門弟子の學僧に對しては、外典を讀む事を禁じ、專ら內典の講學を勵してゐる。同じ空華日工集に

余講圓覺經小子兩三輩不臨講筵余痛責而曰自今誓斷俗書不然余必擧闔院外典於中

庭而焚之以供天帝（應安四年九月二十八日）

とあるのに據つて明白である。併し、右の記錄の裏面の消息は、當時の禪僧が內典より以上の興味を外典に向けてゐた事を物語るものであつて、之が又一つには、我が中世に新注の學が早くから五山僧侶の間に漸染した所以であつた。かくの如く外典は僧侶に對して禁せられる狀態であつたが、詩文集は反つて偈頌語錄著作の爲にも其の讀書が奬勵せられて、其の飜刻も多く行はれ、且つは、我が緇流撰述の詩文集等も開版せられる樣になつたのである

從つて、當代に於ける外典の開版は、詩文集と之に關聯して作詩文の爲の韻書とが多數を占め、經史子の類は僅少で合して漸く其の一半を占めるに止つてゐる

經書の古注本飜刻の一因

又、經書の少數なる開版が何れも我が國に在來行はれてゐた古注本である事は特に注意を要す可き點で、之は當時に於ける縉紳儒流の傳統的勢力がなほ未だ衰へず、殊に淸原家代々の博士が中世の精神生活を指導してゐた點が少くなかつた事も其の主要なる原因であらう　この外典の開版中には、支那に於いて餘り行はれず、反つて我が國にのみ多く流行した書籍も少くない　從つて、我が國に於いて數次の飜刻を重ねる中に次第に原本の版式と懸け離れて行つたもの、或は最初から直接に支那版式の影響を蒙らぬもの等も存する　又、外典の飜刻事業は、次第に緇流の手を離れて、所謂民間特志の

刊行に係るものが增加する傾向となつた。

正中本寒山詩

外典の鏤刻の最初に現はれたものが何であるかに就いては、在來古文舊書考を基にする妄説も行はれてゐるが、（上村學士、在來の妄説の非なるを闡明せり。禪學一九ノ四[illegible]に於ける外典の鏤刻、東洋學藝[illegible]）確實なる現存資料に據つて知り得る最古のものは正中二年（一三二五）刊行の寒山詩（杉浦三郎兵衛氏藏）一冊（正[illegible]）である。卷末刊語は左の如くである。

正中歲次旃蒙赤奮若冬
十月下澣禪尼宗澤捨心
聊以刊之

詩人玉屑の本

在來同じく正中二年刊本に詩人玉屑があるとされてゐたが、其の非なる事は、早く狩谷棭齋が、古刻書跋（棭齋書入本、富田文庫藏）に頭註書入を施して訂正を加へてゐる如く、卷末附刻識語の初めに「本云」の二字があるから之を刊語と認める事は出來ない。即ち、現在確證ある鎌倉末期の鏤刻は寒山詩一本のみである。

延文三年妙葩刊詩法源流　延文六年刊范德機詩集　貞治二年刊增補新編翰林珠玉

南北朝に入ると、延文三年春屋妙葩刊の詩法源流（內藤博士藏）同六年刊行の范德機詩集七卷（內閣文庫藏）貞治二年妙葩刊行と推定せられてゐる增補新編翰林珠玉六卷（京都富岡氏藏）等がある。前者は緇流以外の著作の嚴密なる意味に於ける外典の鏤刻の最古のものである。以上最初に現れたものは何れも集類であるが、經書の刊行は、元亨二年

經書刊行の嚆矢

正平本論語

の古文尚書が未刊に了つたものであるとすれば、正平十九年に堺浦の道祐居士に據つて刊行せられた所謂正平本論語十卷を以て嚆矢とする。正平本論語は原板が亡んで其の覆刻が三度（所謂、單跋本(後無跋本)・雙跋本及び明應本）も行はれ、且つ其の初刻本の遺品が長く知られなかつた爲に、江戸時代以來覆刻の諸本の一を誤つて初刻本に充當せんとする諸種の論爭が繰返されて來たが、昭和六年初夏、筆者等の研究に據つて永年の疑問が解決せられ、初めて正平本論語の初刻本(大阪府立圖書館藏)と其の覆刻本との關係が闡明されるに至つたのである（斯文昭和六年九月號、拙稿「正平板論語攷」參照。）

俞良甫と陳孟榮との所刻本

俞良甫所刻の碧山堂集(應安五年)・白雲集(同七年)・五百家註音辯昌黎先生文集・新刊五百家註音辯唐柳先生文集(嘉慶元年刊)・陳孟榮所刻の重新點校附音增註蒙求(應安七年刊)・新刊五百家註昌黎先生聯句集(永和二年刊)・集千家註分類杜工部詩(同年刊)・大廣益會玉篇及び祖應刊行の北澗詩集・文集(應安七年刊)・濟遊集二卷(至德元年刊)等がある事は前述したが、他に刊記ある南北朝期の飜刻には、

永和二年刊歷代帝王編年互見之圖

歷代帝王編年互見之圖一卷(阿波國文庫藏、刊記「永和第二丙辰季冬初弦重刊于洛之大用菴」寛永六年板坂卜齋の覆刻本往々にして存す。)

明德四年刊新編排韻氏族大全

新編排韻氏族大全十集(明德四年刊、刊記「明德癸酉八月開版」(圖一)。本書には刊記を削去せる後印本あり。)等がある。

冷齋夜話

冷齋夜話十卷は版式から見ても、遲くも南北朝は降らぬものと認められる上、成簣堂文庫藏本の「明德辛未」の識語に據つて自ら其の刊行年時が限定せられる

韻府群玉

韻府群玉にも南北朝時の支那刻工名が見えるから略其の刊行年時を知り得る。他に無刊記本にして南北朝期の刊行と認められるもの、及び其の刊行期の詳細は明かではないが室町末期を降らぬと認められるものも少くない。これ等はまた覆刻所依の底本の時差に據って覆宋・覆元、降って覆明等の別があり、又朝鮮本に基いたものもある。次に管見に入った南北朝以後室町末期に至る外典の翻刻せられたものを列擧すると次の如くである。

平安時代に於ける外典開版書目

圖書の開版に就いては後章に於いて別に述べるから、玆には省略に從ふ。（書影は書誌第三ノ四號參照）

其他

（一）古文尚書（卷一至六零本）　舊題漢孔安國傳　高木文庫藏

南北朝の刊行と推定せられる。（書影は影譜・正平版論語攷二〇頁を參照。）

（二）毛詩鄭箋　漢毛亨傳鄭玄箋二十卷　圖書寮藏（零本十一）・靜嘉堂文庫（[illegible]）・成簣堂文庫藏

古文尚書と同版式。（書影は影譜を參照。）

（三）春秋經傳集解　晉杜預撰　三十卷

圖書寮舊藏・米澤圖書館（三十）・靜嘉堂文庫・成簣堂文庫（廿九冊、[illegible]）

安田文庫・（十冊、足利學[illegible]）・東洋文庫・南葵文庫・上杉伯爵家（[illegible]）藏

內藤虎次郎博士（[illegible]）藏

南北朝刊。覆宋興國軍學刊本。（書影は影譜・舊本影譜一ノ四參照。）

（四）論語集解（正平本）　魏何晏集解　十卷　五冊　正平版論語攷（[illegible]）參照。

初刻本（正平十九年刊）　大阪府立圖書館藏（有缺）・圖書寮藏（單跋本補配、第三・四卷）

單跋本（室町初期刊）　圖書寮藏（有缺）・內閣文庫・安田文庫（二本）・光藤益夫氏・龍門神社・東洋文庫・久原

文庫・神田喜一郎氏有缺・大阪府立圖書館初刻本補配、零本藏

（無跋本）天文單跋本の跋削去　圖書寮尊藏・内閣文庫・帝國圖書館・陽明文庫（二本）・久原文庫・東北帝國大學圖書館・阿波國文庫・東洋文庫・靜嘉堂文庫・尊經閣文庫・成簣堂文庫・三井源右衞門氏（二本）・龍谷大學（二本）・松本文三郎博士・濱野知三郎氏（零本二部）藏。原版木の大部分帝室博物館に殘存す。

雙跋本室町初期刊　圖書寮尊藏・東洋文庫・松井簡治博士零本藏、（影鈔本）靜嘉堂文庫藏陸心源舊藏

明應（八年刊）本　圖書寮尊藏・北野天滿宮文庫・安田文庫・伊藤家古義堂・三井源右衞門氏藏

＊江戸時代以後覆製本―市野光彦覆刊（單跋本・札記附、文化十年刊）・古逸叢書本（單跋本、明治十七年刊）・斯文會影印本（東洋文庫藏單跋本影印、札記・解説附、大正十一年刊）・四部叢刊本（單跋本縮寫）・大阪府立圖書館影印本（初刻本、不足の部分雙跋本を以て補ふ、解説附）

（五）論語（天文本）　十卷　二冊　無注　傳本多し。原板木、堺南宗寺に存す。正平板論語攷・舊刊影譜參照。

（六）音注孟子　漢趙岐注　十四卷　圖書寮尊藏三冊・成簣堂文庫三冊・東洋文庫四冊・内藤虎次郎博士三冊藏

南北朝覆宋刊。原本唐土佚書。吉石盦叢書影印本。善本影譜一ノ四參照。

（七）大學章句　宋朱熹章句　一卷　一冊　大阪懷德堂藏西村時彦博士舊藏

延德四年伊地知氏刊。文明十三年同氏刊本を覆刻せるもの。内閣文庫に往時佐藤一齋の訓點を去りて配字のみを鈔寫せしめし一本を傳ふ。西村氏玻璃版覆製本・舊刊影譜參照。

（八）大廣益會玉篇　梁顧野王撰唐孫强增　三十卷　叡山文庫四冊、寛永五年識語・石井光雄氏五冊・久原文庫五冊藏

南北朝覆元刊本。書誌學第一卷四號、拙稿「大廣益會玉篇の舊刊本に就いて」、善本影譜甲四十參照。

（九）增修互註禮部韻略　五卷　宋丁度撰・毛晃注・毛居正增　五冊　善本影譜甲戌四參照。

(イ)第一種本（目次末尾刀の刻工名あるもの覆刻あり）　圖書寮尊藏・東洋文庫・尊經閣文庫・彰考館文庫藏

(ロ)第二種本　內閣文庫・東洋文庫藏

(ハ)第三種本（第二種本の覆刻）　東洋文庫・岩瀨文庫藏

(二)韻鏡　宋張麟之撰　一卷　一冊（善本影譜參照）

享祿元年刊（傳本不存）

永祿七年重刊　東洋文庫・安田文庫・陽明文庫・久原文庫・尊經閣文庫・谷村一太郎氏藏

(三)古今韻會擧要　三十卷　元熊忠撰　一〇冊　東洋文庫・久原文庫・米澤圖書館（卅一）・淺野圖書館・高野山寶壽院藏・安田文庫藏

寬永五年刊　卷末に「寬永五歲姑洗日 [illegible]」の刊記あり。（善本影譜甲戌十參照）

史部

(一)立齋先生標題解註音釋十八史略（元曾先之編 明陳殷音釋）　帝國圖書館・東洋文庫（二本）・久原文庫・成簣堂文庫藏

室町中期覆明正統余氏刊本。或は覆明正統朝鮮刊本（成簣堂文庫藏）に據れるものか。（善本影譜甲戌十參照）

(二)歷代帝王紹運圖　一卷　宋諸葛深編　一冊（善本影譜甲戌八參照）

(イ)第一種本（南北朝の刊行なる可し。）　圖書寮尊藏

(ロ)第二種本　東洋文庫・尊經閣文庫藏

(ハ)第三種本（室町時代刊）　圖書寮尊藏・帝國圖書館・阿波國文庫・東洋文庫・安田文庫・成簣堂文庫・杉浦三郎兵衛氏・中島仁之助氏・東北帝大藏

(三)歷代帝王編年互見之圖　宋馬仲虎撰　一卷　一冊　阿波國文庫藏　善本影譜甲戌八參照。

永和二年覆宋刊。　寛永六年坂板卜齋覆刻本卜齋手澤本安田文庫藏世に行はる。舊刊影譜・書誌學第一卷第一號拙稿、舊刊影譜補訂參照。

(四)歷代序略　明孟散梁撰　一卷　一冊　舊刊影譜參照。

天文二十三年刊。　(イ)初印本　東洋文庫藏

(ロ)刊記一部削去本　京都府立圖書館・東洋文庫・安田文庫・杉浦三郎兵衛氏・中島仁之助氏一卷末刊記一葉補鈔・身延文庫藏

(五)唐才子傳　元辛文房撰　十卷　二冊　成簣堂文庫二本、一は清見寺二は、島田氏舊藏・國分高胤氏・內藤虎次郎博士藏

南北朝刊。覆元刊本なる可し。唐土佚書。古活字印本は本書を飜印せり。善本影譜一ノ二參照。武進董氏影印本。

(六)分類合璧圖像句解君臣故事　二卷　二冊　阿波國文庫・東洋文庫・尊經閣文庫享德三年識語藏

南北朝刊。　插畫刻本。　善本影譜甲戌八參照。

○

(一)冷齋夜話　宋釋惠洪撰　十卷　二冊　圖書寮尊藏金地院舊藏・東洋文庫・成簣堂文庫明德辛未識語・高木文庫上卷室町時代補鈔藏・內藤虎次郎博士藏

南北朝覆元刊。善本影譜一ノ十參照。

(二)重新點校附音增註蒙求　五代李瀚撰　三卷　三冊　帝國圖書館・東洋文庫一卷末刊記一葉補鈔藏

應安七年陳孟榮刊。　舊刊影譜・善本影譜一ノ九參照。

(三)新板大字附音釋文千字文註　五代李暹撰　三卷　內閣文庫・阿波國文庫・東洋文庫一冊藏

室町時代刊。　善本影譜甲戌十參照。

(四) 四體千字文書法　一卷　一冊　東洋文庫・安田文庫（[illegible]）・佐々木信綱博士藏

天正二年擇石郡丁刪覆元刊。陰刻。（善本影譜參照）

(五) 增廣事吟詩韻集大成　（[illegible]）二卷　（善本影譜甲[illegible]）　内閣文庫藏

室町時代覆明洪武刊。

(六) 韻府群玉　元陰時夫編陰中夫注　二十卷　二十冊　（善本影譜甲ノ十參照）

南北朝刊。元明・其有寄刻工名あり。覆元元統刊本たる朝鮮刊本（圖書寮藏・成簣堂文庫藏）に據りたるものたる可し。東洋文庫（二本）・安田文庫（大西氏舊藏）・尊經閣文庫・岩瀬文庫・成簣堂文庫・高木文庫・東北帝國大學圖書館藏

(七) 聯新事備詩學大成　元林貞編　三十卷　内閣文庫・東洋文庫（[illegible]）・成簣堂文庫（[illegible]）藏

室町時代刊。覆明刊本。（善本影譜甲ノ六參照）

(八) 新編排韻增廣事類氏族大全　十集　帝國圖書館・東洋文庫（[illegible]）・安田文庫（[illegible]）・成簣堂文庫（[illegible]）藏

明德四年刊。卷末に「明德癸酉八月開板圓成」の刊記あり。其の刊記を削去せる後印本（成簣堂文庫藏）も流傳せり。善本影譜一ノ一〇參照。

(九) 莊子鬳齋口義　宋林希逸撰　十卷　十冊　陽明文庫・足利學校遺蹟圖書館・成簣堂文庫（[illegible]）藏

室町時代覆朝鮮刊。（善本影譜乙ノ四三參照）

(一〇) 列子鬳齋口義　宋林希逸撰　二卷　二冊　帝國圖書館藏

南北朝覆元刊。（善本影譜乙ノ四五參照）

(二)新刊名方類證醫書大全　明熊宗立撰　二十四卷首一卷　十冊　舊刊影譜參照。

大永八年阿佐井野宗瑞覆明刊。　舊刊影譜參照。　圖書寮尊藏二本（一は昌平坂學問所舊藏、一は「江戸醫學藏書之印」あり。）・帝國圖書館・大阪府立圖書館・安田文庫・尊經閣文庫・岩瀨文庫（五冊）・岡崎桂一郎博士・藤波剛一博士・粟田元次氏・武田長兵衞氏（二本）・尊經閣文庫（四冊）藏

(三)八十一難經　明熊宗立撰　一卷　一冊　帝國圖書館・谷村一太郎氏・尊經閣文庫（三冊）藏

天文五年覆明刊。　挿圖刻本。　舊刊影譜參照。

○

(一)寒山詩　唐釋寒山撰　一卷　一冊　杉浦三郎兵衞氏・安田文庫（震災燒失）藏

正中二年覆宋刊。　善本影譜一ノ七・舊刊影譜參照。

(二)集千家註批點杜工部詩　二十卷　元高楚芳編　劉辰翁批點　杜工部文集二卷　杜工部年譜一卷　圖書寮尊藏（三本、一は完本十一冊、二は文集缺八冊、三は零本三冊）・阿波國文庫（首缺、文集及）・東洋文庫（三本、一は完本十二冊、二は文集缺十一冊、三は卷一・二及び附錄の一冊、羅山舊藏本あり。）・靜嘉堂文庫（首缺、文集及）・成簣堂文庫（八冊）藏

南北朝覆元刊。　善本影譜癸酉五輯參照。

(三)集千家分類杜工部詩　宋徐居仁編　二十五卷　三冊　圖書寮尊藏（卷十六至末缺）

室町時代刊。　善本影譜甲戌二輯參照。

(四)集千家註分類杜工部詩　宋徐居仁編　黃鶴補註　二十五卷　十三冊　帝國圖書館・蓬左文庫・高野山寶龜院・石井光雄氏藏

永和二年覆元至正刊。　舊刊影譜・善本影譜一ノ九參照。

(五)五百家註音辯昌黎先生文集　宋魏仲舉編　四十卷　圖書寮尊藏（福井文庫舊藏一）・東北帝國大學・帝國圖書館・靜嘉堂文庫・東洋文庫・成簣堂文庫・那波利貞氏（二本、一は十五冊補鈔あり、二は十七冊、第一卷のみ古活字印本）

南北朝兪良甫刊。舊刊影譜・善本影譜一ノ三參照。

(六)新刊五百家註昌黎先生聯句集　二卷　二冊　蓬左文庫・大島雅太郎氏藏

永和二年陳孟榮刊。善本影譜一ノ九參照。

(七)新刊五百家註音辯唐柳先生文集　宋魏仲舉編　四十五卷　圖書寮尊藏（二本、一は金澤文庫舊藏、二は福井崇蘭館舊藏）・東北帝國大學・帝國圖書館・靜嘉堂文庫・東洋文庫（二本）・成簣堂文庫藏

嘉慶元年兪良甫刊。舊刊影譜・善本影譜一ノ三參照。

(八)新板增廣附音釋文胡曾詩註　宋胡元質撰　三卷　一冊　圖書寮尊藏（小島寶素舊藏）・帝國圖書館・安田文庫・成簣堂文庫・那波利貞氏藏

南北朝刊。善本影譜癸酉五參照。

(九)鐔津文集　宋釋契嵩撰　二十卷　善本影譜甲戌二參照。

(イ)南北朝刊。卷二の末に「陳孟才刊」刊記あり。帝國圖書館・尊經閣文庫（興聖寺舊藏、印記あり、卅冊）藏

(ロ)室町時代刊。小字本。臺北帝大圖書館藏

(一〇)王狀元集百家註分類東坡先生詩　舊題宋王十朋注　劉辰翁批點　二十五卷　圖書寮尊藏（四本、一は[illegible]山舊藏、二は[illegible]舊藏、三は[illegible]、四は[illegible]印記本、四は卷二のみ舊刊本補配）・東北帝國大學（[illegible]山文庫舊藏）・成簣堂文庫・東洋文庫（二本、一は嘉吉三年書入、二は[illegible]）・靜嘉堂文庫・高木文庫・足利學校遺蹟圖書館（二本及び零本）・谷村一太郎氏藏

南北朝覆元刊。（工名見ゆ。）善本影譜癸酉十參照。

(一一)山谷詩集注　宋任淵撰　二十五卷首一卷十一冊　圖書寮尊藏・米澤圖書館・東洋文庫（二本）・久原文庫・成簣堂文庫（二本、一は慶長七年[illegible]書入、二は島田氏手澤）・安田文庫・內野皖亭文庫（[illegible]）・杉浦三郎兵衞氏・谷村一太郎氏・岩瀨文庫（[illegible]）藏

南北朝覆宋刊。大字本。善本影譜一ノ一・舊刊影譜參照。

(一二)山谷黃先生大全詩註　宋任淵撰　二十卷　足利學校遺蹟圖書館零本、卷一・二・靜嘉堂文庫十一冊・成簣堂文庫七冊藏
室町初期覆宋刊。小字本。善本影譜一ノ四參照。　彰考館文庫古鈔本に首一冊補配・淺野圖書館藏

(一三)山谷老人刀筆　宋黃庭堅撰　二十卷　成簣堂文庫藏
室町時代覆明刊。善本影譜甲戌六參照。

(一四)誠齋集(卷九十五)　宋楊萬里撰　一卷　成簣堂文庫藏
室町初期刊。善本影譜一ノ一參照。

(一五)北磵全集　宋釋居簡撰　二十卷　圖書寮尊藏有補配・內閣文庫・帝國圖書館・成簣堂文庫(二本)・神田喜一郎氏藏
應安七年覆宋刊本。文集十卷、詩集九卷、他に語錄を合して二十卷なり。善本影譜一ノ四・三ノ二參照。

(一六)碧山堂集　元釋宗衍撰　五卷　一冊
(イ)應安五年俞良甫刊。　東洋文庫藏　善本影譜一ノ三參照。
(ロ)無刊記本(南北朝刊)　帝國圖書館・神田喜一郎氏藏　善本影譜甲戌十參照。

(一七)白雲詩集　元釋英撰　四卷　一冊　靜嘉堂文庫藏
應安七年俞良甫刊。善本影譜一ノ四參照。

(一八)雪廬稾　元釋克新撰　一卷　內閣文庫藏
南北朝刊。善本影譜一ノ十參照。

(一九)趙子昂詩集　元趙孟頫撰潭澗編　七卷　二冊　帝國圖書館藏
南北朝覆元至正刊。善本影譜一ノ十參照。

(二〇)范德機詩集　元范梈撰　七卷　善本影譜一ノ七參照。

(二七)中州集　金元好問編　十卷　中州樂府一卷　五冊　內閣文庫・蓬左文庫・那波利貞氏藏、樂府東洋文庫・富岡益太郎氏藏

覆明宣德刊本。善本影譜癸酉五參照。

(二八)澹游集　元釋來復編　三卷　內閣文庫藏

至德元年刊。善本影譜一ノ七參照。

(二九)皇元風雅(前後集)　元傅習・孫存吾編　各六卷　善本影譜一ノ四、甲戌六參照。

(一)南北朝刊本。　內閣文庫・成簣堂文庫藏

(二)室町時代刊本。　內閣文庫・圖書寮尊藏

(三〇)魁本大字諸儒箋解古文眞寶　十卷　元黃堅編　善本影譜甲戌六參照。

(一)室町時代刊。大字本。(後集)　東洋文庫・靜嘉堂文庫藏零本九條家舊藏

(二)室町時代刊。小字本。(前・後集)　內閣文庫・東洋文庫・尊經閣文庫四冊藏

(三一)雅頌正音　明劉仔肩編　一冊　近畿善本書影參照。　內藤虎次郎博士・尊經閣文庫二冊藏

南北朝刊。

(三二)詩人玉屑　宋魏慶之撰　二十卷　善本影譜一ノ二・甲戌八參照。

(イ)無跋本南北朝刊。　成簣堂文庫藏

(ロ)正中跋本南北朝刊。　京都帝國大學・東洋文庫本有缺・那波利貞氏藏

(三三)詩法源流　明王用章編　一冊　近畿善本書影參照。　內藤虎次郎博士・成簣堂文庫(德富蘇峰氏)藏

延文三年妙葩刊。

第六節　清原・阿佐井野兩氏開版の意義

中世の精神生活に於ける清原家の位置

前述の如く、中世後期の初めまでに於ける開版は、專ら佛徒の事業であつて、時運の然らしむる所、漸く外典の開版を見るに至つたけれども、なほ佛教文化と全く關係無き出版は稀有であつた。然るに、室町時代の中期になつて、縉紳儒流、博士家の目覺しき社會的活動の一端は、遂に開版事業の方面にも現れる樣になつたのである。博士家中、特に清原家は、中世後期、賴業・業忠・常忠等數代を經て、宣賢に至つて、大いに勢力を振ひ、各地に招かれて講筵を行ひ、其の持本は弘く流傳する樣になつたのである。開版事業に關與する事となつたのも、其の盛なる講學の現はれの一面である。在來、中世の精神生活に於ける清家の地位は五山緇流に比して甚だしく輕視せられてゐるが、一面に於いては清家は五山緇流をも指導する立場にあつたのであつて、五山緇流と博士家との兩方面に等しく注意を向けて研究を進めなければ、中世に於ける精神生活の實相は闡明する事が出來ない。現存資料の單なる一面たる古鈔本に就いて、其の傳流を考究するの一事を以てしても、中世に於ける博士家の位置が如何に重要なるものであるかがわかると思ふ。

博士家開版の意義

博士家の關與した開版事業は何れも自家講學の立場に於けるものであつて、之が我が

享祿版韻鏡

印刷文化史上、種々なる意義を見出すのである。

一には、佛家以外の開版事業である事、二には然も其れが外典のみの刊行である事、三には、外典中、特に純國書の刊行にも及んだ事等で、茲に我が印刷文化は佛教文化より離脱して其の本質的發展の道を辿らんとする兆しを示現したものと言ふ可きである。中世後期に於いて博士家が開版に關與した事實を示す現存資料は左の三書である

其の一は享祿元年（一五二八）に刊行せられた享祿版の韻鏡と稱するものである。泉州堺南莊在住の宗仲論師が韻鏡の開版を企圖し、清原宣賢に其の跋文を乞うた。其の跋文は左の如くである

韻鏡之書行於本邦久而未有刊者故轉寫之訛烏而焉焉而馬覽者多困彼此不一泉南宗仲論師偶訂諸本善不善者且從且改因命工鏤板期其歸一以便於覽者且曰非敢擅之天下聊備家訓而已於戲今日家書乃天下書也學者思旃

享祿戊子孟冬初一日

正三位行侍從臣清原朝臣宣賢

この韻鏡が開版せられた事は、堯空（三條西實隆）（天文六年死）より其の開版者たる普門院宗仲論師に宛てた書簡（堺市光明院所藏）に「（前略）抑韻鏡開版之由聞及候一覽大切候餘本候者一本可預芳志候（下略）卯月十二日　堯空　普門院宗中論師」（實隆公記に據れば、享祿二年四月十四日に宗中へ書状を遣せり。）とあるに

の年代記に雕刻せられてゐる最末の年數たる享祿四年中にありさせられた。（歴史と地理昭和八年三月號三一ノ三三頁。）

天文版論語

其の二は、天文二年（三一—三五）刊行の何晏集解に基いた無注本の論語二冊である　同じく泉州堺南莊在住の阿佐井野家が其の開版に際し、其の校勘等に就いて清原宣賢の指導を仰いだものである　其の板木は後に江戸時代の初め堺の南宗寺に傳はら、今も同寺に殘存し、從つて、後印本が頗る多く流傳してゐるが、この書の開版は、正平本論語の覆刻の一本たる雙跋本と密接な關係があると思はれる（細目、正平版論語跋五四頁參照。又、文化年中仙石政和の重刻本あり。）

天文版論語の刊語は左の如くである（書影參照）

泉南有佳士厥名曰阿佐井野一日謂予云東京魯論之板者天下寶也雖然離丙丁厄而灰燼矣是可忍乎今要得家本以重鏤梓若何予云善技　應神天皇御宇典經始來　繼體天皇御宇五經重來自爾以降吾朝儒家所講習之本叢諸秘府傳於叔世也蓋唐本有古今之異乎家本有損益之失乎年代寖遠不可幾而測遂撰累葉的本以付与庶幾博雅君子糾焉

天文癸巳八月乙亥　金紫光祿大夫拾遺清原朝臣宣賢法名宗尤

小槻家の貞永式目刊行

博士家の開版としては、なほこの他に小槻家の貞永式目（御成敗式目）があるが、後章の圖書刊行の發達の條に讓つて、次に阿佐井野家の開版事業に就いて述べる

阿佐井野家の開版

阿佐井野家は堺南莊在住の醫を業とするものと傳へられてゐるが、詳しい事は未だ明

語・阿佐井野家の跋文をも其の儘に覆刻した一本が存在する。筆劃は稍細めであるが、其の版式上、室町末期を降らぬものと認める。世に阿佐井野版の三體詩と稱する傳本は、原本よりも反つてこの種のものが多數を占めてゐる（東洋文庫・安田文庫・成簣堂文庫等藏。）三體詩にはな

後刻無刊記本

ほ別に室町末期刊行と認む可き無刊記の一本があつて往々にして明應前板と誤認せられてゐる（靜嘉堂文庫・高木文庫各二本藏、安田文庫藏本等其の他多し。舊刊影譜參照。）

此板流傳自京至泉南於是阿佐井野宗禎贖以置之於家塾也欲印摺之輩以待方來矣

大永版醫書大全

又、大永八年（一五二八）阿佐井野宗瑞刊行の醫書大全は、我が國醫書開版の濫觴をなすもので本書あつて、卷末の幻雲壽桂（天文二年一五三三寂）の跋文は、よく同家の開版事相を說明してゐる（日本醫學史）に異版ありと靜くのは、全くの妄說であつて、異版は存在しない（舊刊影譜參照。）

我邦以儒釋書鏤板者往々有焉未曾及醫方惠民之澤人皆爲鮮近世醫書大全自大明來固醫家至寶也所備其本稍少欲見而未見者多矣泉南阿佐井野宗瑞捨財刊行彼明本有三寫之謬今就諸家考本方以正斤兩雖一毫髮私不增損蓋宗瑞之

志不爲利而在救濟天下人偉哉陰德之報永及子孫矣

大永八年戊子七月吉日　　幻雲壽桂誌

前の三體詩の跋文に見える宗禎と、この宗瑞とは密接なる關係に立つ同族であらうと思はれるが未だ詳にし難い。唯以上の三書に據つて阿佐井野家の存在と其の活動とが知られるに過ぎない。其の開版事業が我が印刷文化史上種々なる意義を有するものである事は上述の如くであるが、其の開版に際して、常に學僧の指導を仰いでゐる事も亦頗る注意す可き點であつて、三體詩板木の流傳と言ひ、清家並びに五山緇流との交渉と言ひ、京師と堺浦との精神的交流の淺からざるを見る可きである。

京師と堺浦との交渉

前述の正平本論語を初め、泉南に於ける多數の開版は中世期に於ける商業都市たる堺の活動の一端として、中世後期の印刷文化史上特に注意す可き點であるが、之に就いてはなほ後章に於いて記述する。

第七節　國書刊行發達の初期

附　挿畫の刻本の發生に就いて

國書の語義

國書刊行の發達を調べるに當り、先づ「國書」の語義を明らかにする必要がある。玆に國書と稱するのは、我が國人撰述書の意味に於いて使用する。從つて、如何なる言語表現を用ひても、我が國人の撰述書であれば、國書として取扱ふ。乃ち、かゝる意味に於ける

國書刊行の濫觴期

國書刊行の濫觴期は、鎌倉時代の後半で、奈良刊經中の西大寺叡尊撰述の教誡新學比丘行護律儀(正和五年刊)殊に之は撰者在世中に開版せられた。高野版中の遍照發揮性靈集(正嘉二年刊)、高野大師將來目錄(正安四年刊)淨土教版關係の往生要集・選擇本願念佛集・黑谷上人語燈錄、或は法華經音訓(至德三年刊)等、諸種の佛書を見出す事が出來る

南北朝時代に於ける禪家緇流の語錄書開版

南北朝に入つては、釋師鍊(虎關禪師)撰述の元亨釋書が再度開雕せられ、國書として最初の大部なる開版である。之と相前後して禪家緇流の語錄・詩文集の開版が漸次其の數を加へる樣になつた。卽ち、圓通大應國師語錄(應安五年刊)・一山國師語錄(明德四年刊・應永十四年重刊)・絕海錄・蕉堅稿・空華集・重刊貞和類聚祖苑貞和集(嘉慶二年刊)・夢中問答集(康永三年刊・足利行道山刊)・鹽山和泥合水集(至德三年刊)等は其の主なるものである
中には、黑谷上人語燈錄の如き平假名交り、又蓮如上人御文章、夢中問答集・鹽山和泥合水

集の如き片假名交りのものも現はれ初めたけれども、なほ殆ど佛教關係の撰述書に限られてゐた。其の間、稍趣きの變つたものであるが、假名交りの印刷としては、元弘二年と傳ふる平假名暦（東洋文庫藏[illegible]）、至徳四年の假名暦（[illegible]藏）、少し降つて永享九年平假名暦（足利學校）（[illegible]）、永正十一年平假名暦（東洋文庫藏[illegible]）等其の斷簡が殘存してゐるから、當時假名暦は實用として、年々開版せられたものであらう。然しながら所謂佛書以外の國書開版の特異性は、禪家緇流の作詩文の流行に附隨して、支那韻書飜刻の隆昌に伴つて現れた我が國人撰述の韻書・字書等の方面より進展して行つた傾向を有する事であらう。即ち、國書刊行の發達の初期を形成するものは、聚分韻略と節用集との開版の盛行である。

聚分韻略の刊行

聚分韻略は中世後期の初頭（鎌倉末期）禪師錬の撰述する處であつて、往々にして、本書には德治元年の虎關序、同二年一山叟の跋を有する爲、其の室町時代に於ける或る種の復刻の無刊記本を目して德治撰述當時の初刻本と爲すものがあるのは誤である。其の開版の最初は現存資料に據れば、應永十九年であつて、其の後所謂三重韻に編纂を改めたものは各地に於いて度々重刊せられてゐる。この書は、碧巖錄と共に中世期に於いて、同一書の重版の最も盛んに行はれたものの一つで、之が一には、地方に於ける印刷文化開發の直接原因をも爲してゐるのである。（聚分韻略の諸版[illegible]地方に於ける[illegible]印刷文化[illegible]）

節用集の刊行

節用集の刊行は、現存資料の示す限りに於いては、天正十八年の堺版と、室町末期の刊行と認む可き所謂饅頭屋本の節用集とがある　聚分韻略に比して開版度數少く、之は少し降つて慶元中に大いに重刊せられてゐて、近世極初期の國書開版の發達に寄與したものと言ふ可きであるが、寧ろ一面には聚分韻略よりも一層通俗的な字書の出版として注意す可きものである

饅頭屋本節用集

饅頭屋本節用集の刊行年代に就いては慶長以後とする説もあるが、其の版式より見ても室町末期を降らぬものであつて、且つ、近時、林宗二の開版に係る確證も發見されてゐるから、古くより「饅頭屋本」と傳稱し來つたのも、適當な稱呼と言ふ可きである　其の體裁が便宜な横綴の小型本である事も特に注意す可き點である（圖書寮・帝國圖書館・安田文庫・高木文庫・栗田元次氏等）（島仁之助氏舊藏。舊刊影譜參照。）

天正版節用集

饅頭屋本と其の内容を異にする天正十八年堺版の節用集（二卷、東洋文庫藏）は、唯卷末刊語の一葉のみ若干版式が異つて新味があり、其の天正十八年の補刻なる事がわかる　卽ち、卷末一葉の改刻は、恐らく藏板異同の關係に據るものであらう　然しながら、其の初印本と認む可きものは未だ發見されてゐない　先人の文龜本等と稱するもの或は其の類ではあるまいかとも思はれる　天正版の卷末刊記は左の如くである（舊刊影譜參照）

右此板木者泉州大鳥郡堺南庄

右屋町經師屋有右部丁刪而
干時天正十八年(庚寅)履端吉辰

實語敎童子敎往來の開版

この他に節用集に關聯して、實語敎・童子敎の開版が明應六年に行はれたと言はれてゐるが、未だ傳本に接しない。之は恐らく天正版の庭訓往來(四帖)(素本五冊)と傳へられるものと其の事情を等しくするものではあるまいかと思ふ。天正版の庭訓往來と稱するものは、天正八年の識語ある一本を底本として江戸初期、恐らく元祿頃に梅村彌與門(彌與門の諸書に書肆名として見ゆ。)の開版したものであつて、其の卷末「右四冊者爲本嶋與二丁跡稽古染拙毫者也天正八年暮秋　彌與門板」は「彌與門板」の四字のみ刊記と認む可きものである。

貞永式目の刊行

最後に中世後期の國書開版として特記す可きは、前章に若干論及した博士家刻本として、大永版並に享祿版の御成敗式目(貞永式目)の存する事である。博士家の持本は、御成敗式目の傳本中主要なる系統を占めるものであつて、(植木直一郎氏御成敗式目の研究參照)御成敗式目の傳流を通じても亦、中世精神生活に於ける博士家の位置を窺ひ得るのである。この御成敗式目の刊行は中世期に至る佛典以外の國書の刊行として、字書類を除いて唯一の存在であるのみならず、其の法制の書が、かくの如く他に先んじて刊行せられた事は特に注意す可き事である。

大永版

大永版の御成敗式目は未だ管見に入らないが、山科言繼卿記(大永七年三月三十日、同年四月二十五日條)及び後の

文獻に見え、又群書類從本(巻四百)に其の跋文を載せてゐるから、(御成敗式目の研究四七〇頁)其の實在した事は明確であつて、(不忍文庫書目にも大永版見ゆ。類從本は恐らく屋代藏本に據りしなる可し。)唯現に傳本に接しないのである

類從本に所載せられた大永版の刊語は左の如くである

制節則不愛私謹度則不踰矩蓋君子常也昔貞永武將以平氏泰時爲良佐也誠進賢々哉於是九重安鼎四夷解辮劇　朝之羽儀保天之性命遂本律令以定式目揔五十一ヶ條是豈非理國之紀綱耶至矣盡矣記之者姓名其説多端不遑毛擧然而四位外史清原教隆最爲長焉既登明經科剩得儒術譽誰敢差肩余因以此書始鏤于板庶幾上下專祭祀之禮左右抱勸懲之志至尊偏傍推㸃畫頗施於新學而已

大永甲申冬十有二月良辰　正五位上行左大史兼算博士小槻宿禰伊治

卽ち、小槻伊治が大永四年(一五二四)に始めて開版したものである。然し、其れが無訓本であつた事は、言繼卿記(大永七年五月二十八日)の「法印の式目をてんじ候」の記載と同じ小槻伊治の重刊した享祿版の刊語「故加清家㸃以重鋟諸梓矣」との比照に據つて明かである

享祿版

大永版が出でて僅か五年の後、享祿二年に再び小槻伊治は先行の大永版に更に清家の訓㸃を加へて重版した

初期の附訓刻本

附訓の刻本は佛典中に於いても極めて其の發達が遲れ、中世則に至るまでに現れたものは、僅かに應安五年刊行の嵯峨本と傳稱せらるる妙法蓮華經八卷を見るに止るのであつて、茲に國書刊行の初期に當つて、返㸃送假名を附訓した

刊本が現れた事は特に注意す可き現象である。享祿版の完本の管見に入るものは、圖書寮尊藏本（[illegible]）・安田文庫藏本・早稻田大學藏本・東京帝國大學附屬圖書館南葵文庫藏二本である。卷末刊語は左の如くである。（因みに、[illegible]）

此書雖万代不易之法也故加清家點以重校讐梓寅西爲摺夫豈家藏基論底究其濫
理速通理速照見訟者稀少豈非輔道少補乎猗哉有先生何有夫子同時並之學日新乎哉
爲之以博雅君子應幾諒察焉

享祿己丑秋八月　日

從四位下行左大史兼算博士小槻宿禰伊治序

享祿版の次に現れた慶長十二年刊本が本書に基いて刊行せられたものであるのみならず、其の後相續いて重刊せられた多數の御成敗式目は皆享祿版が若しくは享祿版に據つた慶長版に基いてゐて、御成敗式目の傳流の上より見るも享祿版は最も注意す可きものと言はねばならない。

享祿版の價値及後世への影響

要するに、中世後期の初頭以來次第に發達して來た國書の刊行は、佛書を含めてもなほ其の數は多いとは言へないけれども、近世初期活字印刷術の傳來以後急激に發展を遂げた印刷文化の諸相の母胎としての中世後期に於ける印刷文化の一特色として、頗る注意す可き事相と言ふ可きである。

附　挿畫刻本の發生に就いて

印本に圖畫を挿入する事は、支那並に朝鮮所刻の佛經の影響に基くものであるが、我が國の刻本に初めて挿畫の現れたのは、鎌倉初期、寛元四年（一二四六）泉涌寺比丘道丘刊行の佛制比丘六物圖、及び鎌倉末期の刊行と認められる増修禪教施食儀文（一冊、成簣堂文庫藏）等である。又、刊經の見返し等に施された扉繪風のものは、延應元年（一二三九）上州新田庄長樂寺に於いて隆圓の刊行した首楞嚴經（[illegible]院藏）に說相圖の扉繪を附したものがあり、其の後、永德三年施入識語ある大般若波羅蜜多經（丹波大通寺藏）等が存在するが、南北朝以後の所謂挿畫刻本としては、至德元年兪良甫版の傳法正宗記・應永三十三年刊阿彌陀經（智恩院藏）・室町極初期の刊行と認められる佛制比丘六物圖の覆寛元四年刊本（南禪寺開版）（石井氏積翠文庫・東洋文庫等藏）・分類合璧圖像句解君臣故事（東洋文庫・阿波國文庫・尊經閣文庫等藏）・「四部錄」及び「五味禪」三種・天文五年刊八十一難經（人形の圖を挿入）等を見るに過ぎない。

就中、四部錄中の十牛圖の如きは、周文が下繪を描いたと傳へられるものがあつて、最も著明であるが、之とても未だ充分に挿繪としての效果を有するもの卽ち、挿畫の本質を盡したものとは認められない。四部錄は信心銘・證道歌・十牛圖・坐禪儀の四部を收め、南北朝の刊行と認められるが、（松本文三郎博士、東洋文庫藏（東洋文庫藏本は入衆日用及び證道歌を補鈔せり。）其の後、入衆日用を含む「五

味譚として重刊したものが亦兩種ある。一は十牛圖のみ十行なる一本（圖書寮藏）、二は八行本（帝國圖書館藏）である（書影第二）。なほ別に正中本寒山詩と相似の版式を有する八行大字の一本（安田文庫藏）があつて、恐らく之が最古刻本ではあるまいかと思ふ。

以上を以て見れば、この方面に於いても亦、近世初期、國文學作品の假名交り書籍の開版が發生するに及んで、漸く眞の挿畫刻本の發達を遂げる樣になつたのであつて、當代に於ける若干の挿畫刻本の存在は、唯近世初期印刷文化の母胎としての中世期印刷文化事相の一として注意せらる可きものと言ふ事が出來る。

融通念佛縁起繪卷

なほ茲に附言す可きは、大正十二年の震災に亡んだけれども、小林文七氏藏の應永廿一年の奧書を有する繪卷融通念佛縁起二卷に就いて在來應永の開版とする議論が行はれ、之を肯定するものは我が版畫史上特筆す可きものとしてゐる。然し之には深く疑ふ可き事由も存するが、實物が現存しないから、茲に私見を述べる事が出來ない。即ち、近時の再檢討に據つて、幾多の異見を闡明し得た實例に鑑み、殊に在來議論の多いこの繪卷に對して、先人の曖昧なる報告に基いて論を進める事は避けたいと思ふ。

文祿五年刊高野大師行狀圖畫

なほ茲に今一つ注意す可きは、文祿五年刊高野大師行狀圖畫（高野版）十卷の存する事である。之は、應其上人が平假名卷子本として開版したものであつて、繪は越前守行光、詞は關白道嗣と傳へられてゐる。其の文祿の板本と稱するものが現に高野山勸學院に

藏せられてゐるが水原堯榮師高野板之研究二七一至七頁參照。共の板木に據つて近時摺刷した完本を檢するに、共は明かに江戸中期頃の覆文祿刊本であつて、文祿の原刻本は別に存する。即ち覆刻本は文祿原刻本の精刻に比す可くも非ず、原刻本にして初めて詞書の書風の流麗なる圖畫の描寫の生彩ある頗る美術的なる版畫繪卷を見るのである。現在の所、この中世期の最後に現れた繪卷の刊行は、少くとも現存最古の我が版畫繪卷として特に注意せらる可きものである

第八節　地方印刷文化の開發

朝鮮との交通

對外的の關係を見るに、對支の交通は、應永以後、明國との間に行はれ、五山の僧は常に遣明使節として入明するならはしであつた。從つて彼等入明僧が、前代と同じく、我が國の文化、特に印刷文化に少からざる影響を及した事は言ふまでもない。なほ又この室町時代には明と共に高麗との交通が愈々頻繁となり、印刷術の進步してゐた彼の地との交渉が少くなかつた事も亦注意す可きである。南北朝頃より現はれ初めた朝鮮本の復刻(莊子鬳齋口義等)が、室町時代に入つて著しく其の數を增してゐるのは、其の間の消息を如實に語るものであらう。又、詩人玉屑の如く、朝鮮の地に於いて我が刻本の復刻せられるものも出で來つた。

京都に於ける五山版の衰頽

室町時代に於ける京都五山を中心とする開版事業は、應永年間を境界として遽かに衰運に向ひ、前代開雕の版木を襲用して摺刷を行ふもの、及び之に補刻を加へて再印するもの等が其の多數を占めてゐた。或は前代開雕の版木の失はれたものを再び鏤梓する事も稍行はれたが、全く新たに開版せられたものは極めて少數である。正長・永享以後の京都開版の刊記を有する五山版が僅かに、永享九年(一四三七)刊鎮州臨濟慧照禪師語錄一冊(相國寺享徳四年八月十五日寄進、法隆寺東寺觀智院前田文庫等藏)・明應三年(一四九四)刊增註唐賢絶句三體詩法(前田家藏)・永正元年(一五〇四)刊聚

分韻略（板置東山春雲軒、後記參照）・永正二年刊盂蘭盆經疏新記（東福寺不二庵刊）等に過ぎないのを以て見ても其の衰退が察せられる。 即ち、室町時代に於ける五山版は、地方寺院の印刷文化に其の特色を現はしたのであつて、中央の京洛に於ける五山版の開版は纔かに前代の餘炎を保つに過ぎぬ狀態であつた。

地方印刷文化開發の原因

中世前期に於いては、奈良・高野等近畿地方の寺院に於ける開版事業が榮え、京洛と鼎立して當代印刷文化の主體を爲したのであるが、其れ等寺院の開版中、各地に生國を有する佛徒が其の本山へ上つて開版を興した事實は少くないけれども、未だ各地の末寺に於いて開版事業の行はれたものは殆ど皆無と言つても過言ではない。 然るに、中世後期に至つて所謂五山版の開版事業が京都五山を中心として隆昌を極めるに及んで、遂に各地の禪宗寺院に於いても亦、次第に禪籍其の他の開版事業を見る樣になつた。 其れには、禪僧が中央と地方との間を絶えず轉住してゐた事も與つて力があつたであらう。 又、之と相前後して各地各宗の寺院に於いても亦刊經が行はれる樣になつた

此等室町中期以後に於いて特に地方印刷文化の興起するに至つた原因は、應仁文明の亂に據つて、京洛が戰陣の巷となつて、五山其の他の寺院も昔日の勢力を失ひ、京洛在住の五山緇流・公卿等が地方の豪族・寺院に身を寄せ、地方割據の群雄また之を喜び迎へ、各地に中央の文化が移し植ゑられる樣になつて、豪族の特志に基く報恩寄進の開版も自

ら數を增して、玆に地方に於ける印刷文化は次第に開發せられ來つたのである。
玆に室町時代に於ける地方印刷文化開發の狀を見るに先立ち、中世後期に於ける淨土教版・奈良刊經及び高野版等、鎌倉時代を中心として榮えた諸種の版經の開版狀態に就いて一言して置かうと思ふ。なほ地方に於ける中世期の開版に就いては本節に於いて室町以前の其れにも併せ言及する事とする。

南北朝及び室町の淨土教版

南北朝に於ける淨土教版は五山版隆昌の前に壓せられて微々たる狀態で、其の開版は正平六年以前刊觀無量壽經一帖・貞治四年刊一枚起請文・同年刊黑谷上人御法語・繪若讃（無刊記一帖、無刊記本にして南北朝の刊行と認むべきもの若干存す。）等を見るのみであるが、應永年中よりは、同宗派の發展と共に開版事業の方面にも其の活動が現れる樣になつて、應永年間以後室町末期に至るまでに三十數種の刊行を見たのである。（淨土教版の研究參照）其の全部が何れも前代を承けて、其の裝潢の如きも帖裝のみであるが、唯一種、永正十七年刊大原談義聞書（一卷一冊、內閣文庫藏、舊刊影譜に所收初めて紹介せられしもの）の袋綴本が存する。なほ同宗派には地方の開版事業も若干現れてゐるのが注意せられる。

室町時代に於ける奈良刊經

次に同時代に於ける奈良諸寺の刊經は、所謂「春日版」の開版のみはなほ其の數が衰へなかつたが、其の他の諸寺の開版は應永中に於ける東大寺等の例を除き、殆ど全く衰へてしまつた。春日版には當期開版の摸版の殘存するものも少からず、室町末期に至るま

で其の奉獻開版も續いてゐるが、其の版式は前代の精刻に比して著しく粗雜となり、其の整備した様式の特色を失ふ様になつたのである。（學樂刊經史參照）

中世後期に於ける高野版の特色

南北朝以後に於ける高野版は、前代に比して質量共に衰へたが、前代の高野版の版式が全く奈良刊經の影響を受け、兩者の間に於ける識別が困難であるのに比して、當代の高野版は其の様式こそ粗雜に傾いたが、反つて自ら高野版の特色を現はす様になつた又宋版の影響を蒙つたもの（[illegible]）が現れて來たのも當時の印刷文化の大勢を反映するものである。

南朝の年號使用

京都・奈良等の刊經が殆ど北朝の年號を使用してゐるのに、高野版には南朝の年號を用ひたものが多い事も注意す可き點である。（[illegible]）

室町時代の開版

室町時代に入つても其の開版は依然として振はず、唯其の間に舊刊本の新たに開版せられた事（[illegible]）が注意せられるに過ぎない。（水原堯榮師著高野版之研究一七七至二六四頁參照）

根來版の興起

然るに茲に當代の高野版に關し最も注意す可きは、南北朝の中頃より高野版の影響を蒙つて、紀州の根來に於いて（根來版）の興り來つた事である。

根來版の書目

水原堯榮師の調査に從へば、永和四年（一三七八）刊般若心經祕鍵一帖（東寶堂文庫藏）を初め、康暦・永德・應永・文安・大永・永祿の各年代に及び、即身成佛義（康暦元年刊）・辯顯密二教論（康暦二年刊）・祕藏寶鑰（同年刊）・大乘起信論（永德元年刊）・大毘盧遮那成佛神變加持經（應永廿三・四年刊）・金剛頂瑜伽經（同廿四年刊）・蘇悉地羯羅經

（同廿五年刊）・悉曇字記（文安四年刊）・般若眞實經（大永五年刊）・理趣經（同刊）・即身成佛義（永祿五年刊）等約十數種二十數帖の刊行が知られてゐる（[illegible]）。

京都東寺の開版

なほ同じ眞言宗たる京都東寺に於ける覺［illegible］等の開版、大毘盧遮那成佛神變加持經（[illegible]）・仁王護國般若波羅蜜多經（[illegible]）等も亦高野の刺戟を受けて現れたものであらうと思ふ。

近江國の開版
康曆元年刊大般若波羅蜜多經
文明十五年刊秘密曼荼羅十住心論

次に畿内に近い地方に於ける中世期の開版を見るに、近江國では、佐々木氏賴が康曆元年（一三七九）に大般若波羅蜜多經六百卷の版木（[illegible]）を佐々木八幡宮に寄捨納入した他に、文明十五年（一四八三）から十九年にかけて、秘密曼荼羅十住心論十帖（[illegible]）が江州坂田郡黒田鄕大興坊覺舜等の施主江州平方惣持寺常住及寄の願主に依つて開版せられてゐる。

伊勢國の開版
白子觀音寺の文明十五年刊般若波羅蜜多理趣經

伊勢の國に於いては、文明十五年（一四八三）に白子觀音寺に於いて般若波羅蜜多理趣品一卷（成簣堂文庫藏）の開版が行はれた。成簣堂文庫藏本には左の刊語並に墨書識語が存するから、或は他に同時に刊行せられたものがあるかもしれない。

文明十三年辛丑十月廿五日
梵漢博士　權少僧宥範書之七十
文明十五年癸卯八月十八日

勢州栗眞白子觀音寺常住
爲二親菩提權律師　實政開之三十八
廻此功德普利一切衆生界
（墨書）爲道善禪門三十三年忌追善也
十五卷之內

美濃國の開板　北勢から上つて美濃國に於いては、瑞龍寺（稻葉郡稻葉山麓、齋藤妙椿、其の主土岐成頼の菩提所として創立す。）に於いて佛果圜

瑞龍寺刊悟溪錄　悟禪師碧巖錄十卷（久原文庫所藏、瑞龍寺刊の刊記あり。）が、又、正法寺（寬正六年土岐成頼建立、妙椿また住せり。）には、延德三年（一四九一）

正法寺刊臨濟錄　に臨濟錄（吉田文庫所藏、重刊臨濟錄と題す。）が鏤梓捨入せられた。其の卷末の刊記は、

延德三年辛亥八月十五日季恭居士鏤梓捨入
濃之正法栖雲院

文明十八年刊聚分韻略　とある。少しく年代を遡つて、文明十八年（一四八六）には、聚分韻略が刊行された（[illegible]所藏）。其の卷末には左の木記がある。其の木記等の體裁より言へば、文明十三年刊薩摩版を摸したらしく認められる。

文明丙午新梓濃之南豐大極

大和國多武峯の開版　大和國では、奈良刊經を他にしては、永正十六年（一五一九）多武峯[illegible]寺に於ける妙法蓮華經（[illegible]藏、[illegible]十三年[illegible]のもの。）の開版がある。卷末に、

發護持正法　利樂有情願　窮盡未來際　彫置法華摸
庶衆人摺寫　廣流布諸國　互興法利生　自他共成佛
多武峯絹蓋寺法華經板木也
永正十六年己卯九月日　願主英宗
彫手盛繼

永正十六年刊妙法蓮華經

の刊記がある。但し多武峯絹蓋寺には、既に永和三年（一三七七）に妙法蓮華經八卷の開版が行はれてゐるから、（谷村一太郎氏藏、卷末刊記同文にして、末に永和三年巳六月日　願主華貴　彫手淨心とあり。）永正版は其の重版である。

永和三年刊妙法蓮華經

泉州堺に於ける開版の沿革

堺は南北朝時代に於いて南北兩軍の爭奪の目標となり、其の附近に於いて度々戰が行はれたけれども、堺其のものは奇蹟的に平和に惠まれ、漁港としての發達をも示しつゝあつた。其の後この地は政治的には種々の變動を見たけれども、奈良京都の一大需要地を控へて次第に商業都市として殷賑に赴き、應仁の亂に據る大內・細川兩氏頡頏の結果、對明貿易上、大內氏の領海を避けた南海路が新に開拓せられ、堺港を其の起點とするに及んで、一層の活氣を呈し、遂に其の全盛期を將來した。（堺市史等參照）堺に於ける開版事業も亦正平十九年に論語集解が出版せられて以來、室町初期に兩度の覆刻がこの地で行はれる等、漸次進展を示してゐるが、室町中期以後に於ける堺の盛況に伴ひ、著しい發展を遂げる樣になつたのである。

正平十九年（一三六四）に開版せられた論語集解は刊記ある經書として現存最古の飜刻本である。卷末に、

(1) 堺浦道祐居士重新命工鏤梓
正平甲辰五月吉日謹誌

(2) 學古神德楷法日下逸人貫書

「日下逸人貫」の版下書

の刊記がある。(2)の學古神德楷法日下逸人貫書に就いては、天平時代の寫經生「古神德」の筆法を傳習した「日下逸人貫」の書の意と解す可く、「日下逸人貫」は島田翰の如く「是貫」と說くものもあるが、何れにしても、南都に深き由緣を有する學人であつたと思はれる節があつて、道祐居士が論語の開版に當つて、新しく版下を書いたものか、或は嘗て書寫しておいた一本を道祐が開版に利用したものか、其の間はどちらにも考へられるけれども、ともかくも結果に於いて日下逸人貫の書を版下としてゐる事には相違はない。

道祐居士

開版者の道祐居士に就いては、在來說を爲すものもあるが、結局現在に於いては正平本論語を通じて知り得る以外に、何等明確なる傳記を尋ぬ可き手掛りはない。即ち、道祐居士に就いて明らかな事は、正平の使用年號から觀じて吉野朝に同心であつた事、「日下道人貫」の版下書より考へて、南都と若干の交渉を持つた事、當時頗る資力を要して困難な事業とされた出版を企てる能力を有してゐた事等に止る。右の刊記中に「重新命工

鏤梓」とあるから、論語集解の先行刻本があるとも考へられるのであるが、他に未だ先行刻本の存在した確證はない。若し先行刻本が存在しないとすれば、右の刊記にはまた種々なる推論が成立するわけである。

正平十九年開版本の傳本は極めて罕で、大阪府立圖書館藏の一本（卷三第十四葉中第六葉を缺く、四・五・六の三卷及び八卷第五・六葉缺）と圖書寮藏（同寮藏單跋本中に、卷三・四缺を補配してゐる。）とを合してもなほ卷五・六兩卷及び八卷の五・六兩葉が缺脱となつてゐる。かく傳本の罕なのは、室町初期に其の覆刻が兩種も現れてゐるのを以て見ても知られる如く、其の板木が早く佚亡してしまつた事も一因であらう。

正平本論語の覆刻は室町初期に所謂單跋本・雙跋本の兩種が行はれ、更に又雙跋本に基いて明應八年に杉武道が周防で開版してゐる。就中、單跋本は、天文・元龜以後其の卷末の原刊記二行を削去して摺刷を行ひ、所謂無跋本として摺刷を重ね、其の板木は諸方へ流傳して現に帝室博物館に其の大半が殘存してゐる。

正平本論語各種本先後の疑問

江戸時代の末頃から、清朝の學儒に刺戟せられる事もあつて、吉田篁墩・屋代弘賢・狩谷棭齋・市野光彦等の考證學者が各々覆刻の一本乃至兩三本を架藏し、其の各種本の關係に就いて考究し、或は單跋本を以て正平十九年刊本とし、或は雙跋本を目して正平の原刻本と論定し、甚しきは無跋本を以て先行本に擬したのである。爾來晩近に至るまで正平本論語各種本に就いての論爭は學界の疑問として絶えず繰返へされて來たのであ

るが、昭和六年五月王仁千六百年祭を記念として大阪府立圖書館に於いて開催せられ次いで六月東京に於いて再開せられた論語展覽會が機緣となつて、筆者等の研究に據り、新たに大阪府立圖書館藏の一本が、在來知られてゐた各種の覆刻本と版を異にし、反つて之が其の初刻と認む可き幾多の有力なる證據を發見するに至つたので、「斯文」昭和六年九月號に、「正平板論語攷」（六十一頁）を公表し、玆に多年の問題も略々其の歸趨を得た次第である。

初刻本の發見

大阪府立圖書館藏本（昭和八年末、今井貫一氏玻璃版覆製）の類は、版式の古雅なる事、舊鈔本古文尚書（日下逸人貫書）（內野氏皎亭文庫藏）と筐法相似せる事、其の本文研究上より見て古き事等の諸點より論じて正平十九年初刻の一本と認めるのであるが、室町初期、或は應永六年の堺の大火の際にでも既に板木が佚亡したものと見えて、室町中期以前に兩種の覆刻が行はれた

室町時代に於ける正平本論語の覆刻

其の一は、正平本に改訂を加へず、多少の誤刻等はあるが、原型の儘に覆刻する意圖を以て行はれたものである。但し、卷末の刊語中、(2)學古神德揩法（云々）のみは削去し、(1)正平甲辰（云々）のみを原の儘に存し、其の覆刻の際に於ける刊記はない。刊記中の一半のみを存するから之を「單跋本」と稱してゐる。單跋本の開版せられた年時は明確にし難いが、大略、永享・嘉吉の頃堺で行はれたものと推定されるのである。（正平板論語攷三七・八頁參照）單跋本は、現存諸搨本に據るに、少くとも元龜以前天文年中には卷末の原刊記の削去が行はれた

覆刻の一、單跋本

[illegible]

（天文中の識語書入ある[illegible]）即ち、單跋本は其の板木傳流の間に卷末の原刊記を失つて所謂「無跋本」となつた。言ふまでもなく「無跋本」は單跋本の後摺である。江戸時代にも其の殘板を以て摺刷を行つた事があるが、其の板木が京都相國寺内に流傳してゐた事は、佐々木春行が殘板を摺刷した一葉（安田文庫藏）の注記に據つて明かである。其の後板木が市に出で、狩谷棭齋の奔走で江戸書肆須原屋（北畠茂兵衞）に歸し、明治二十三年帝室博物館に納つた。博物館現藏の板木は三十二枚で、なほ十六枚缺佚してゐるわけであるが、この他德富氏成簣堂文庫にも一枚を藏せられ、もと京都某書肆所藏の數板中の一で、支那へも持ち去られたと言ふ。

覆刻の二、雙跋本

覆刻の二は、所謂「雙跋本」であつて、無論覆刻の際に於ける刊記はないが、卷末の原刊記は(1)(2)全部原の儘に雕刻してゐる。但し、其の本文は義疏本を以て少量の補訂を加へ、正平本とは若干内容を異にする所のある覆刻の一本である。之が何時頃の開版であるかも明確にし難いが、明應八年刊本は本書の覆刻であるし、又寛正五年の識語書入ある初印と認む可き一本（東洋文庫藏・屋代弘賢舊藏）も存するから、單跋本と相前後して刊行せられたものであらう。是も亦堺で行はれたと思はれるのは、天文板論語の跋文と其の本文の性質とから暗示されるのであるが、舊板の燒失に據り再興せられた天文板論語の先行本は或は雙跋本ではあるまいかと推定される。板木が早く燒失してしまつた事が、單跋本

に比して、雙跋本の傳本が少い原因の一つでもあることと思ふ。

雙跋本の覆刻明應本

明應八年に大内家の杉武道が開版した論語集解は全く雙跋本の覆刻である（後記參照）。

以上各種本の關係を圖表に明示すると次の如くである。（なほ正平本論語並びに各本に就きての詳論は拙稿「正平板論語攷」（斯文、昭和六年九月號）參照。他日補訂を加へ重ねて單行せんと欲す。）

正平本論語各種本關係圖表

〇初刻本（正平十九年刊）─┬─單跋本（永享・嘉吉頃刊）────無跋本（天文年中以後）────（殘板本）（江戸末期摺）
　　　　　　　　　　　　　└─雙跋本（寛正以前刊）─→明應本（明應八年刊）

應仁之亂以後堺の全盛期に於ける印刷文化

正平本論語の覆刻本は以上の如く室町初期堺に於いて行はれたものと考へられるのであるが、應仁の亂以後、堺の全盛期に於いては、前節に詳論した宗仲論師の開版には、享祿元年刊韻鏡・同四年刊皇年代記、阿佐井野氏の開版には、三體詩・大永八年刊醫書大全・天文二年刊論語等があり、天正年間には、石部了冊の關與した四體四字文書法（天正二年刊）・節用集（天正十八年刊）の二本があつて、中世期に於ける地方の印刷文化としては他に比類なき隆昌を遂げたのである。

宗仲論師・阿佐井野氏・石部了冊の開版

而して是が常に京都と密接なる交流を有す事は、相國寺と堺南莊との關係を想起するまでもなく、其の刊行の諸本が自ら明瞭に之を物語つてゐる。

兵庫の開版

堺よりも古い港の兵庫に於いては、文和元年（一三五二）福嚴寺の元壽の刊行佛燈國師語錄の存在が江戸時代の翻刻本に據つて知られてゐる（新村出博士「兵庫の古板本について」（歷史と地理、大正十一年五月）參照。）

播州の開版

然し、播州には應永十五年に妙法蓮華經八卷（白毫寺藏ニ刊記「播州近江寺常住[illegible]准十[illegible]郡[illegible]永十五年[illegible]三月[illegible]日」）の開版が行はれた

[illegible]

中國筋に於いては、古く安藝國御調郡御調八幡宮に安那定親の奉獻開版した嘉禎二年（一二三六）の阿彌陀經一（[illegible]）・普門品と同三年刊金剛壽命陀羅尼經があり、其の摸版はなほ御調八幡宮に遺つてゐる。其の刊記は各々左の如くである（[illegible]）。

[illegible]嘉禎二年丙申七月十六日始之同歳八月十七日畢願主安那定親

[illegible]嘉禎二年丙申九月十八日始十一月廿二日畢但爲法界衆生并父母也願主安那氏

[illegible]嘉禎三年丁酉五月廿一日願主定親

大内氏の印刷文化

然しながら室町時代に於ける中國地方の印刷文化の見る可きものは、大内氏の領内に於いて其の權勢の下に行はれたものである。大内氏の開版事業は、應仁以後、難を其の領内に避けた京都の公卿緇流等の來住、大内氏の朝鮮及び明國との通商貿易、延いては文、泉州堺との交通關係等、幾多の好條件の下に、其の發達を遂げる樣になつたのである。

明應二年刊聚分韻略

現存資料に據れば、先づ大内氏關係の開版としては、明應二年（一四九三）眞樂軒刊行の聚分韻略一冊、内閣文庫・東洋文庫藏（[illegible]）がある。卷末に、

明應癸丑周陽」眞樂軒新鏤板」

の木記がある。後の天文八年（一五三九）に刊行せられた大内義隆の聚分韻略に舊板と言ふのはこの明應二年刊本であらうと思ふ。舊板より小型に作ると言ふ識語にもよく合する。

天文八年刊聚分韻略

天文八年刊聚分韻略（[illegible]）は、西周に刻書事業が多く行はれた中にも眞

に所謂「大内版」の名稱に適ふものであつて、小型本二冊（五卷）、入聲の末に「玉田千駒（花押）刻（陰）」とあるのは恐らく刻工の類であらう。卷末に左の長文の刊語がある。

三韻一覽實於世之書也凡遊藝工於詞之士未嘗無取焉信乎開卷三聲之字條衣於一紙之上平仄之異燦然於一日之中古之人五行倶下十行並下之說未必有然此不亦快乎余平素有意於勸人蓄之故不待其梨梓之朽腐仍復命工新其刊矣庶爲是州纔本乎然而小其字於舊板冊子亦短其紙蓋所以備於數千熟覽者之藏於巾箱携於袖間也若夫與舊本同遊戲於世光飾藝苑潤色詞林則所謂經寸之珠不失寶於其形之小者也矣

旹天文八年己亥春三月日　正四位下行大宰大貳兼兵部權大輔周防介多々良朝臣義隆

大内氏の書籍納藏

東洋文庫藏の一本（長門大寧寺舊藏）には、唐紙を用ひて摺刷してゐる。卽ち、大内氏が其の料紙を支那より輸入して之を摺刷した事を證するものであつて、在來料紙を彼の地に送つて印刷せしめたと稱するのは（老人雜話）反つて反對の言を爲すものであつた。

明應八年の論語刊行

明應八年七月（一四九九）には、大内家中の杉武道が、正平本論語の雙跋本（[illegible]藏・東洋文庫・[illegible]藏）を覆刻してゐる。之は堺と大内氏との密接なる關係より生れ出たものと言ふ可く、卷末刊語は左の如くである（[illegible]）。

今茲一書　夫子之遺言而

歷朝諸儒所註解也寔是五經

之轄轄六蓺之喉衿也天下爲
民生者豈不仰其德矣哉
明應龍集巳未仲穐良日
西周平　武道敬重刊

氷上山興隆寺の妙法蓮華經

佛經としては、氷上山興隆寺に於ける妙法蓮華經がある。其の板木は現に山口縣立圖書館に保管せられてゐるが、第一卷には「文明十四壬寅五月　日願主宥淳開板爲書」、以下各卷に文明十五・十六・長享三年、延德二年の刊記があり、最終の部分は後の元龜三年・天正五・六年に重賢が再興願主となつてゐるから、現存のものは、兩度の企てに據つて一部が完成した形となつてゐる。この氷上山興隆寺の諸堂を造營し、又香山國清寺を其の見大

應永十七年大内盛見の施刊藏乘法數

内義弘の菩提の爲に建立した大内盛見（大先道雄居士）は、早く應永十七年（一〇四）に藏乘法數一冊蓬左文庫藏（[illegible]）を施刊してゐる。藏乘法數の傳本は頗る多數存在するが、其の何れもが慶元中の覆刻で、（[illegible]）是にも亦、兩版の別がある。在來應永版と稱せられたものは盡く覆刻本であつて、原刻本は近時蓬左文庫に一本を發見したのみである。

比丘雲通修禪之暇古教照心嘗患法義有未解了而提吾口者偶獲蓮師藏乘法數若
義瞭然在目乃欲流通是書與天下學者共之今周州大先道雄居士欣然施財命工以壽

于梓使覽者乃知」禪不異教教不異禪禪教雙思而」超言數之表寔有補於宗門者也」

應永庚寅二月比丘靈通謹白

門司關崇聖寺の五部大乘經の印行

大内氏の勢力範圍にはなほ海を渡つて豐前國に於いて、門司關崇聖寺（明徳六年、大内義興創建古き同寺の慶積修覆の爲寄附を朝鮮に求む。善隣國寶記）の元積が應永六年（一三九九）に五部大乘經（華嚴・方等・般若・法華・涅槃）を開版した。（「門司關崇聖寺と門司大華嚴經」大正七年永井環氏刊）其れには、卷末に左の木記が附印されてゐるが、古い原板を襲用し、單に木記のみ追摺に係ると言ふ考說（高橋直次郎博士說）は穩當であらうと思ふ。其の原板は拙い點はあるが、やはり覆宋本であらう。其の木記は左の如くである（訪書餘錄、四ノ四二圖參照）

日本國豐前州門司關崇聖寺比丘元積」切睹欲懺夙愆以修當果梓印大乘五經」
就命本山而壽不朽恭惟祝嚴」羅圖与二化永固流通竺教同三光齊明」
思有旨酬見普以賴者也」

應永竜集己卯冬節后三日　董志

博多に於ける開版

中世期に於ける筑前の博多は日支交通の重要地點を占め、早く茲に開版事業の發生を見る可きは當然であつたが、現存資料の殘存するものなく、僅かに、中巖圓月の疏に據つて、顯孝寺に於ける圓覺經の雕板が鎌倉極末期に企てられた事を文獻上より知るのみである（本書六八頁參照）。在來傳稱する「博多版」に就いては前に考說を述べたから茲には重言を避ける

乃ち、室町時代九州に於ける印刷文化として注意す可きものは、南部の島津氏領内に於ける開版事業の發達である。

島津氏領内に於ける開版

文明十年(一四七八)桂菴玄樹(應永三十四年—永正五年 一四二七—一五〇八)が島津忠昌に迎へられ、茲に薩南の地に朱子の新學が盛んに講ぜられる事となつて、國老伊地知重貞の手に據つて文明十三年(一四八一)に大學章句一冊の新刊を見た。其の原刻本は現存してゐないが、間もなく延德四年(一四九二)に桂菴棲住の桂樹院に於いて再刊せられたものは、西村時彦博士舊藏の一本が懷德堂に、又嘗て佐藤一齋が其の配字のみを影鈔した一本が内閣文庫に現存する。

文明龍集辛丑夏六月」左衞門尉平氏伊地知重貞」命工鏤梓於薩州鹿嶋」

延德壬子孟冬」桂樹禪院再刊

本書が近世期以前に於ける唯一の新注纂印として特に注意す可きものである事は茲に言を俟たない。又、近世初期に於ける新注の諸經書の最初に刊行せられたものが何れも桂菴の學統を繼承した文之の弟子如竹等に據つて行はれてゐるのを以て見ても、西南の文運興隆に與つた桂菴が、又延いて近世文藝復興の一原動力となつた事を知る事が出來るのである。又、應仁以後島津氏の領内に印刷文化が勃興した重大な原因として、應仁の亂に據る對明貿易上の新航路の開發を考慮しなければならない。室町時

代に於ける對明貿易船は、兵庫を以て起點とし、瀨戸內海より博多、五島を經て寧波に直航した。然るに應仁の亂に據り對明貿易上特殊の權力を有してゐた大內・細川兩氏が確執するに至つて、大內氏の勢力範圍たる兵庫を起點とする航路の他に、新たに細川氏の勢力下なる堺港を出港地とし、海南を進み、薩摩の坊ノ津に寄つて寧波に赴く航路が開拓された。從つて南北朝以來殷賑に赴いた堺は愈々商業都市として發展し、又其の文化的活動も大いに振ひ、印刷文化の方面にも特位の發達を示すに至つた事は前述の如くである。堺と共に薩南の地が對支文化輸入の門戸を爲すに至つて、其の文運興隆に大いなる影響を蒙つてゐる事は言ふまでもないが、之がまた交通上の關係より先進の堺市が直接薩南の文化興隆を促し、其の開版事業の勃興をも刺戟するに至つた事も當然であらう。

文明十三年刊薩摩版聚分韻略書

大學章句の他に薩南の地に於ける開版事業としては、同じく文明十三年に聚分韻略一冊の刊行がある。卷末に「文明辛丑刻梓」「薩陽和泉莊」の木記があるが、(帝國圖書館藏(拜谷望之舊藏)舊刊影譜參照)別に其の下方に「宗藝」の二字を陰刻附加した稍後印の傳本(東洋文庫藏舊刊影譜參照。)が存する。聚分韻略の諸刻本中、明應版と共に最も大型である。

享祿三年刊日向版聚分韻略

島津氏領內の日向に於いてもなほ一種聚分韻略が佛果圜悟禪師碧巖錄と共に開版せられた。聚分韻略一冊(內閣文庫・東洋文庫・谷村一太郎氏藏、舊刊影譜參照)は、眞幸院の藏板で、卷末に「享祿辛卯刻梓」「日陽

眞幸院」の木記があり、其の下方に「作者宥圓」「書者秀篤」と刻し、其の木記等の體裁は文明十三年刊本に據つてゐる樣である。又、其の刊記に作者と稱するのは、其の開版施主の意を傳へたものと思はれる。なほこの板木が江戶末期まで傳はつてゐた事は、屋代弘賢が曾昌啓に依賴して眞幸院に殘存してゐた板木を以て首二葉と尾一葉とを摺刷せしめた一本（安田文庫藏、訪書餘錄五ノ五十六ノ二ニ揭載）に據つても知られる。（眞幸院の舊蹟は肥薩線吉松驛を去る數町の處にあり。）

[illegible]

佛果圜悟禪師碧巖錄（五冊）（[illegible]藏）は卷末に「大日本國日州[illegible]」の刊記があり、聚分韻略と同所同一人の刊行に係るものであるから、略々其時の開版なるは明確である。なほ天文十五年に田島莊で四體千字文が印行せられたと傳へてゐるが現在の處確證とす可きものはない。

[illegible]

聚分韻略と佛果圜悟禪師碧巖錄との兩書は、室町時代に最も開版を重ねられ、地方印刷文化開發の一契機ともなつてゐる。聚分韻略の地方版は、其の編纂の體を改め、平上去の三韻を三段に重ねて所謂「三重韻」となつたものが多く上梓せられた。

虎關禪師の撰述當初德治年間の開版があると稱するものは、何れも室町時代の無刊記諸刻本の原跋を以て誤るものであつて、現存最古の有刊記本が應永十九年なるを以てすれば、恐らく其の版式より見るも無刊記の諸本中室町初期を遡るものはあるまいと

思ふ。但し、無刊記の諸本は三重韻に組織を改めず、虎關禪師撰述の原形を保つてゐる點から見ると、少くとも有刊記本の大部分に比して先行の刻本が多いものと考へられる。無刊記本の刊行地は明かにし難いが、是も京洛の開版が多數であると思ふ。

一、無刊記本第一種(十行本)五卷一冊　安田文庫藏

二、無刊記本第二種(十行本)五卷一冊　安田文庫藏

三、無刊記本第三種(九行本)五卷(分)二冊　安田文庫藏(伊澤蘭軒舊藏)

四、無刊記本第四種(九行本)五卷四冊　圖書寮尊藏・帝國圖書館藏

五、應永十九年刊(東本福寺靈源院版)五卷五冊　神田氏藏(今佚すと言ふ)

六、文明十三年刊本(薩摩版)一冊　(イ)初印本　帝國圖書館藏　(ロ)(宗藝)追刻本　東洋文庫藏

七、文明十八年刊(美濃版)一冊　神田喜一郎氏藏

八、明應二年刊本(周防版)一冊　內閣文庫・東洋文庫・杉浦三郎兵衛氏藏

九、永正元年刊本(東山春雲軒版)一冊　帝國圖書館・京都府立圖書館・東洋文庫(二本)藏

(刊記)聚分韻略啓蒙之書也然平上去入難卒分之或列四聲以備一目蓋俾人易解也因鏤于板置諸東山春雲軒伏冀不卽文字不離文字以極禪河敎海

永正元年歲舍甲子八月初吉

十、享祿三年刊(日向版)一冊　內閣文庫・東洋文庫(元龜二年識語)・谷村一太郎氏藏(後讓安田文庫藏)

二、天文八年刊（大内版）二冊　京都帝國大學・東北帝國大學狩野文庫・東洋文庫（二本）藏

三、天文二十三年刊（駿河版）一冊　（イ）初印本　東洋文庫・安田文庫・大阪德富氏藏

（ロ）天寧寺藏の版[illegible]　東洋文庫藏

[illegible]

次に佛果圜悟禪師碧巖錄の諸刻本を見るに、同じく地方版が多數を占めてゐる。[illegible]是は聚分韻略が西南部に多く現れたに對して東北部に多く刊行せられた。其の刊行年時を附刻した唯一の刻本は應永八年刊本であるが、他の諸本は多く其の後刻に係るものと認められる。無刊記本を除き刊記ある諸本は左の如くである。

一、南北朝刊（[illegible]）十卷五冊　圖書寮・成簀堂文庫藏

二、應永八年刊本（室町時代刊）十卷五冊　内野氏皎亭文庫藏

三、應永八年刊　十卷五冊　大阪府立圖書館藏

四、東福寺正宗菴版　十卷五冊　東福寺・石井光雄氏藏

五、妙心寺正眼菴版　十卷五冊　東北帝國大學狩野文庫・成簀堂文庫・安田文庫・久原文庫等藏

六、日向眞幸院版　十卷五冊　南足院藏

七、美濃瑞龍寺版　十卷十冊　東北帝國大學・成簀堂文庫・安田文庫・久原文庫・石井光雄氏藏

八、能登總持寺版　十卷十冊　安田文庫・久原文庫・石黒傳六氏藏

九、越後蒲原本源禪寺版　十卷十冊　成簀堂文庫・久原文庫藏

越前國一乘谷の開版
天文五年刊八十一難經

北國の方面では、越前國一乘谷の高尾寺に於いて天文五年（一五三六）に八十一難經が雕刻せられた。（舊刊影譜參照）其の校正者谷野一栢は入明の名醫、當時に於ける一乘谷は清原氏が屢々來つて講筵を行つた地であるから、本書の印行せられたのももつともである。この他

文明五年刊正信偈三帖和讃

同國に於いては、本願寺の蓮如上人が文明五年（一四七三）に吉崎で正信偈三帖和讃（四帖、大谷大學藏）を刊行した。

能登國の開版
總持寺版碧巖錄

能登國では、總持寺に於いて佛果圜悟禪師碧巖錄（安田文庫藏、十冊）の開版が行はれた他、法住寺に於いては正長元年（一四二八）に妙法蓮華經（妙成寺藏）を開版してゐる。其の卷末刊記は左の如くである。

正長元年刊妙法蓮華經

於能州珠州郡吠木山法住寺有此板正長元年戊申八月日
勸進願主金剛傳燈榮玄

越後蒲原本源禪院刊碧巖錄

越後國の刊行としては、蒲原郡加地の庄の本源禪院の佛果圜悟禪師碧巖錄（成簣堂文庫藏）がある

上州長樂寺の開版
延應七年刊首楞嚴經

關東地方に於ける開版事業としては、上野國新田庄長樂寺の首楞嚴經の刊行がある延應元年（一二三九）隆圓の開版に係り、其の卷首に說相圖の扉繪を附してゐる　關東地方の出版としては最も古いものであらう。（東寺觀智院藏、古代版畫集參照。）

野州の開版

下野國の開版事業は日光と足利とに行はれた。現存資料に據れば、共に南北朝より室町初期に榮えてゐる。

足利行道山開版の二書

足利行道山淨因菴の開版には、應永十一年（一四〇四）刊諸偈撮要（一冊、圖書寮尊藏）と、同じ頃の刊行と認められる夢中問答集（三卷三冊、成簣堂文庫藏）とがある。[illegible]

應永十一年刊諸偈撮要

諸偈撮要には卷末に左の刊記がある。

此版留在野州足利行道山淨因菴

應永十一年甲申小春　　日誌

夢中問答集の小字本

夢中問答集の刊記は「此版留在行道山淨因禪菴常住公用」とのみあるが、其の版式上諸偈撮要と共時の刊行と認められる。夢中問答集は康永元年刊本に據つて重刊したもので ある。片假名交りである事には變りないが、彼は大字本、此は小字本の差異を有する。

日光山の開版

日光山では早くから開版事業が行はれ、本尊の御影護符等の類等も摺寫してゐた樣で

眞言八祖の畫像雕版

あるが、應永三十三年（一四二六）より康正元年（一四五五）に至る三十年を費して雕版した眞言八祖の畫像は現に輪王寺に殘存してゐる。經版としては、明應五年（一四九六）に日光山第四十二代

明應五年刊妙法蓮華經

の座守昌源が妙法蓮華經を行つたものがある。其の模版も全部輪王寺に傳はつてゐる。

古谷清氏「戰國時代下野國に於ける經版雕刻と其摺刷事業」（史學雜誌第二十九編第五號）參照。

大雲菴に於ける貞和五年刊妙法蓮華經

なほ下野の國内では、貞和五年（一三五〇）都賀郡稻葉鄉大雲菴に於いて其の檀那、新堀入道聖海、一千部印施の大旦那、津守景義のもとに、比丘良守が妙法蓮華經の開版を行つてゐる。今其の第八卷のみが日光山に殘存してゐる。

大永二年（一五二二）には奈良東大寺所傳の永仁版法華義疏を宇都宮東勝寺に於いて再摺した。（日光山慈眼堂藏）

武藏國普濟寺開版の諸經

武藏國に於ける最古の開版は、立川の普濟寺（武藏七堂の一、立川氏菩提所）に於いて貞治二年（一三六三）から至德四年（一三八七）に亘つて比丘光信・如見等に據つて大乘大方等日藏經・大方廣佛華嚴經・大方等大集月藏經等が行はれた。是は覆宋刊本である　武藏に於いてはなほ他に淨土教版一種と妙法蓮華經とが印行せられてゐる。

武州小石川の淨土教版　應永十五年刊佛說阿彌陀經

即ち、應永十五年（一四〇八）刊佛說阿彌陀經一卷一帖（增上寺藏）で、卷末に左の刊記がある

武州豐嶋小石川談所
應永十五年戊子十一月十五日
幹緣比丘西譽
筆者松雨其阿

增上寺の開山西譽聖聰上人の開版に係り、先づ「江戸」の地域に於ける出版として最も古いものと言ふ可きである。（淨土教版の研究）

文龜三年刊妙法蓮華經

妙法蓮華經は、埼玉縣新鄉村の八幡社別當寺眞光寺に於いて發見されたもので、最初の板木に「文龜三年」（一五〇三）の刊記があり、卷八の末に左の刊記がある（埼玉史談二ノ六、昭和六年六月）

武州於太田庄慈思寺

願主轎崎坊秀慶圓永
同秀善開之
永正三年(丙寅)三月吉日

相模國の開版

相州に於いては、鎌倉の地に早くより開版が行はれてゐた。京都から將軍を迎へて中

鎌倉に於ける刊經

央の文化を移入し、既に建長年間に佛經の供養開闢があつた事は、東鑑(建長三年二月七日)の「今日相州於御第被供養法華經形木鶴岡別當法印爲導師是依年來御素願乎云々」等の記載に據つても明かである。鎌倉中期以後所謂五山が創始せられて後は、其れ等禪院を中心として禪門寶訓集(建長寺藏正嘉刊)等若干の刊經が行はれたが、この方面は現存資料並びに文獻に乏しく、鎌倉の禪院に於ける刊行の明記あるものは極めて少い。其れに就いては研

「鎌倉版」

究の未だしき點もあるが、要するに著しい發展は遂げてゐない樣である。然し、之等鎌倉に於いて刊行せられた一類の刊經を地名を冠して「鎌倉版」と稱する事は穩當であらうと思ふ。

鎌倉時代に於ける靈山寺の刊經

なほ相州に於ける鎌倉時代の開版として知られてゐるものに、靈山寺の刊經がある。靈山寺の所在に就いては種々の考說があるが、(相模靈山寺版に就て黒田亮氏「書誌學」三ノ二)鎌倉に近接の地と考ふ可きであらうと思ふ。靈山寺の刊經の現存明かなるものは、正嘉二年(一二五八)宴海刊孟蘭盆經新記(東洋文庫藏)・孟蘭盆經疏科分(金澤文庫藏)・弘安十年(一二八七)刊傳法正宗記(南禪寺藏)・大方廣佛

華嚴經（金澤文庫藏）等である。

東海の方面では、駿河國の開版は、今川氏の當國に蟠居した當時、天文年間に行はれてゐる。（今川氏時代駿州古刊書志（新村出博士）「典籍叢談」所載）其の第一は、聚分韻略（五卷・一冊）で、天文二十三年（一五五四）善得寺（もと富士郡今泉村に在りし禪寺）の樂全軒主建乘の鏤梓に係る。單邊、有界、七行、匡郭内、縱四寸四分、横三寸四分半の小型本（安田文庫・大屋德城氏藏）で、卷末に、

維時天文二十三甲寅年春正月吉辰

富士山善得寺樂全軒主建乘鏤梓

の刊記がある。東洋文庫藏の一本（舊刊影譜參照）には卷末刊記の前の空白欄に「駿府天澤禪寺」藏殿公用」の摺刷（或は捺印か）が施されてゐて、版木が後に天澤寺（富士郡須津村）に移つた事を示してゐる。（或は右印文が捺印なれば、單に摺本の所有權を示すに止るものと解せられる可し）其の二は、明孟敬梁撰の歷代序略（一卷・一冊）の覆刻である。版式が稍粗拙で、同じく天文二十三年の開版、卷末に左の如き刊記がある（東洋文庫藏）

此書已渡其版未行因鏤之梓留置于（東海駿城府）龍山雪齋書院」天文甲寅仲冬吉（缺字）

刊行者龍山雪齋は今川氏親の弟、義元の叔父である。なほ右の刊記には開雕當初すでに入木を試みたらしい痕跡を有し、「東海駿城府」の五字を缺いた後印と認む可き傳本（京都帝大）（圖書寮・安田文庫・東洋文庫・杉浦三郎兵衛氏・中島仁之助氏藏）が多く殘存してゐる。雪齋と前の聚分韻略を開版した建乘と

駿河國の開版

天文二十三年善得寺版聚分韻略

歷代序略

は交遊があつたらしく、時を共にして兩書の刊行を見たのも諾けるのである（兩書に就ては[illegible]）。

三河國に於ける開版

三河國に於いては、田原城主戸田憲光が亡父全久の遺志を繼承して明應九年（一五〇〇）七月に妙法蓮華經を開版した。田原町長樂寺に憲光寄進の二軸（一は卷一至三、二は卷四至七[illegible]）が現存してゐる。卷三の末に左の刊記（[illegible]）がある。

明應九年戸田憲光刊妙法蓮華經

先考　全久夙有願力開　妙經之板
厥功未終逝（全久逝去）紹家業而謹終其
志也蓋酬罔極之恩者也願乘此重修
力先考　全久乃與法界含識不滯化
域速至寶所透出方便內直證眞實果
明應九年七月　日彈正忠藤原憲光敬誌

東觀音寺藏諸版

なほ渥美郡の東觀音寺には、文安四年（一四四七）二月の陀羅尼經、大永六年（一五二六）三月の馬頭觀音、大永八年（一五二八）十一月の多寶塔（同寺現存の室町時代建立多寶塔の雛形[illegible]）等の模版が殘存してゐるから、室町時代に於ける同地方の印刷文化には頗る見る可きものがあつた事がわかるのである（渥美郡史大正十二年刊參照）。

甲斐國の開版

甲州に於いては、明應六年（一四九七）に妙法蓮華經の開版が行はれた（[illegible]）。青木昆陽の觀聽草（[illegible]）の記載に據れば、刊語は左の如くで、豆州三島の刻工の

明應六年刊妙法蓮華經

手に成つた事がわかるが、三島の僧侶が其の本山へ納版してゐる例は永正十七年刊大原談義聞書（三嶋左近大夫景吉）等があるから三嶋の地にも開版が行はれたものと推せられる

（妙法蓮華經卷第八　此卷施主平信長）此版留在甲州都盧郡德藏山妙樂禪寺

諸化緣若干人

明應六年霜月　日　　化主源清

豆州三島府住吉久刀

甲斐國志に據れば、なほ都留郡岩殿山圓通寺に於いて康曆元年刻成の大般若波羅蜜多經六百卷（近江佐々木氏開版の後摺と思はる。然らば、同版は度々後の摺寫行はれしものと言ふ可し。）を應永八年に摺寫した一本を傳へてゐた事も明かである

信濃國戸隱山の妙法蓮華經

信濃國に於いても早く元亨元年（一三二一）より戸隱山中院權現に奉獻の妙法蓮華經（卷一元亨元年・卷二同二年河住盛家・卷三康永四年（一三四五）勸進賢阿等・卷四正中元年（一三二四）僧賴仲、菅原氏女等卷五正中二年妙阿法阿等・卷七嘉曆二年（一三二七）火御子牛王・卷八元亨二年祇蓮房寬等の刊記あり）の開版が行はれた事が其の模版の發見に據つて判明した。なほ其れと共に、無刊記の大般若經・仁王經及び文安二年（一四四五）刊般若心經の摸版があつて、それには裏を利用して「戸隱山服忠令」が雕刻されてゐるのは特に注意す可き事である。

昭和六年十二月發考古學雜誌二一ノ一〇小林健三「戸隱山に於ける法華經版木の發見に就て」

かくの如く中世期、殊に其の末葉なる室町時代に佛書開版の地域は中國九州より北陸關東地方にまで擴大せられ、地方に於ける印刷文化は大いに開發せられ、其の發展には頗る見る可きものがあつた。（附錄、中世期地方印刷文化地圖參照）

而して、以上の事實に據つても知られる如く、各地に於ける印刷文化開發の原動力の主體を爲すものは、やはり禪家緇流であつて、是れ即ち、中世後期に於ける印刷文化が、前代に比して、種々なる方面に、一大進展を示したにも拘らず、なほ依然として、印刷文化は佛教文化と不離なる關係にあつて、其の本質的なる發展を遂げ得なかつた所以である。

然しながら、中世後期に其の一大進展の曙光を現はし初めた我が印刷文化は、近世初期の劈頭、活字印刷術の傳來に據つて、急激なる變轉を示し、茲に印刷文化の本質を發揮するに至つたのである。

第二編　活字印刷術の傳來並びに其の發達

―近世初期に於ける印刷文化―

第一章　序　說

我が印刷文化が中世期の後半に至つて新たなる進展を遂げんとする萠芽を現はしつつあつた事は、前篇の後章に於いて記述した如くであるが、なほ經濟的の事情に據つて、佛教文化より離脱するに至らず、未だ印刷文化の本質的なる發展は見る事が出來なかつたのである。

豐臣秀吉の朝鮮の役に據る活字印刷術の傳來

然るに、豐臣秀吉の朝鮮の役は、高麗朝以來、支那の影響を蒙つて異常なる發達を示してゐた彼の地の活字印刷術を將來する機緣を爲し、其の新式にして簡便なる活字印刷法が、經濟的に不利であつた諸條件を解決する原動力となつて、茲に文藝復興の氣運の熟するに乘じて、我が印刷文化は僅か四五十年の間に急激なる一大展開を見る事となつたのである。

活字印刷術隆昌の原因

其の展開の殆ど唯一の原動力となつた活字印刷術隆昌の原因は、其の印刷法が在來の一枚彫〔整版〕術に比して經濟的に簡便なる點に存する事は無論であるが、引いては之を採用するに至つた各方面の積極的なる活動に據るものである。先づ第一は、前代まで印刷事業の殆ど唯一の主體を爲してゐた寺院が、新式の印刷法を受け入れて益々盛んに開版に從事し、殊に其の開版事業が、出版書肆業の發達に有力なる支援となつた事である。

其の二は、時の爲政者が積極的に開版事業に關與し、又之を奬勵した事であつて、前代に於いても西國の豪族等の間には開版事業の見る可きものが若干現れてゐたが、其れ等は、當代に於ける所謂勅版の事業、並びに德川家康の大規模な開版事業等には比す可くもない。又他方に於いて、これ等の開版事業が、民間特志の出版事業の興隆を喚起し、引いては是が、出版書肆業の發達を促す主因となつたのである。而してこれ等の進展は、一旦戰亂が鎭つて後の民心の歸趨を巧に導いた爲政者德川家康の文運作興の指針に基くものなる事は茲に言ふまでもない。

活字印刷術に基く近世前期印刷文化の特質

かゝる近世初期の文運に伴つて發達を遂げた印刷文化は頗る前代と其の特質を異にする。其の最も著しい點は、印刷文化が佛教文化の制約を離れて、其の本質的なる發達を見た事である。從つて在來從屬的地位に置かれた所謂外典の開版事業が急速に進

展し、漢籍の飜刻は漢唐古注の學より程朱の新注の學への展開を扶け、又、前代まで全く行はれなかつた國文學書の開版が隆昌を來すに至つて、其の古典の復興は更に新文學の勃興へと導き、玆に初めて創作を出版する現象をも生じた。實用的啓蒙的なる各方面の書籍も亦多數印行せられる樣になつたのである

慶長元和中に於ける整版印刷の不振

一度活字印刷術が渡來すると、前代まで專ら行はれた一枚雕の「整版」に據る出版事業は殆ど中絕の狀態となつた　慶元中に於ける整版本は極めて稀であつて、當時印書と言へば、まづ活字印本を稱し、末代の重寶（慶長年鑑（内閣文庫藏）、八年卯月一日ノ條ニ此五三ヶ年摺本ト云事仕出何ノ書籍ヲモ於京都摺出當時之ナ板木ト云末代ノ重寶也）として凡て活字印刷法を採用し、一種流行の狀をさへ惹起したのである

寛永年間に於ける整版印刷の復興

然しながら、活字印刷術の傳來と共の發達とに據り、寛永年間に至つて、出版事業が企業として確立し、出版界の經濟狀態も整版に據る出版を以て利益とするまでに進步すると、反つて活字印刷を不便とする樣になつて、寛永末年以後江戸中期に於いては極めて特殊な事情に據る場合の他、活字の新雕が行はれる事は極めて稀有となつた

卽ち、文祿慶長より元和を經て寛永末年に至る約半世紀間に於ける印刷文化の劃期的なる進展は、一に活字印刷術の傳來と共の發達とに基くものである。　故に、玆に近世初期として區分する半世紀間に於ける印刷文化の特質は、活字印刷術の傳來並びに其の發達の考察に據つて闡明せられるのである　換言すれば、當時に於ける刻書は、殆ど全

部活字開版せられたものであるから、其の活字印本の研究に據つて初めて近世初期印刷文化の諸相が明かにせられるのである。

本篇の研究對象

朝鮮の活字印刷術傳來以後江戸時代を通じて、明治初年頃本木昌造の努力工夫に據つて現行活版印刷術の基礎が成り立つに至るまで所謂舊式の活字本(活字版)が行はれ、殊に寛政十二年に幕府の昌平坂學問所に於いて官版の開版事業が起つてからは、各藩各私塾等に木活字印刷が流行を極めた。其の幕末の木活字は主として教科用の書籍が大半を占め、漢籍の他、新式の洋學關係の書籍も多數現れてゐる。但し國文學に關するものは殆ど罕である。其の版式も粗拙なるものが多く、全部でどの位の出版が行はれてゐるかも明かではないが、國分高胤翁の文庫中に、筆者が先年調査し得たもののみでも五百部を降らないから、以て其の盛行の狀を察する事が出來ると思ふ。

江戸末期の木活字印刷

國分翁架藏五百部

正保年間以後、江戸中期に亙つては活字印刷は極めて微々たる狀態であつて、元祿寶永前後の江戸刊行の佛書類が特に注意せられる程度である。其の版式の如きも寛永以前の其れに比して全く其の類を異にし、著しく劣つてゐる。即ち、寛永以後江戸末期に至る江戸中期の活字印刷は前後兩期の盛行を僅かに結ぶ點線を爲すの狀態である。

江戸中期の活字印刷

古活字版の意義

乃ち、文祿年間朝鮮活字印刷術の傳來以後寛永年間に至る活字を以て印行せられたる書籍は、既に前述の如く我が印刷文化史上に於ける意義より言ふも、又其の樣式に見る

も、茲に儼然と一期を劃す可きものであつて、是が總名を、其の先出たるに據つて「古活字印本(古活字版)」と稱するのである。

活字版の別稱

然しながら茲に「文祿・寛永間に作られたる活字を以て印行せられたる書籍」を「古活字版」と稱するとして、後世に於いて其の殘存せる活字を印刷に襲用した場合をも考慮しなければならないが、實際問題としては、伏見版の圓光寺の木活字・駿河版の銅活字等が江戸末期に極めて若干利用せられた程度であつて、殆ど考慮の必要を認めないのである。なほ活字版の名稱に就いては、古く我が國に於いては、「一字版」(慶長勅跋)「植字版」又支那に於いては、「聚珍版」「排印本」「排字本」等の名稱が行はれてゐるが、其れ等に就いてはなほ後章に於いて述べる事とする。

研究の方法

古活字版の研究は、極めて意義深く且つ興味ある問題なるが故に、江戸中期以後書誌に關心を有する者は必ず一度之に觸れたけれども、一少部分、斷片的なる業績の他に、未だ纒まつた研究と稱し得可きものは現れてゐない。

古活字版の研究に於いて直接其の對象となる可き資料は、我が國に於ける書誌研究の何れの分野とも同じく、印刷せられた書籍其の物以外に文獻の徵す可きものが罕である。然るに我が先人の研究態度は、自ら實物調査を行はず、時にまた僅かに之を行ふものがあつても、其の不備ながらも蒐集した資料に對する詳審なる檢討を缺いて之を概

論し、又かくて導き出された前人の所説の祖述を旨とするが如き傾向にあつた。其れ故に、今茲に古活字版の研究に於いて執り用ふ可き方法は、先人の獨斷的なる所説に拘泥する事なく、之を單なる參考に止め、自ら廣く其の研究資料たる古活字印本を蒐集捜査し、其の獲たる資料に就いて精密なる檢討を遂げ、之を綜合して以て論斷を爲す可きである。

かゝる實物に基く研究方法は、嘗て和田維四郎氏等に據つて採用せられ、部分的には其の研究業績も發表せられてゐる。然し、和田氏等の研究態度にもなほ遺憾少しとせず、且つ又、廣く多くの研究資料を蒐集して、之を考究する事の最も緊要にして、其の事の最も困難なる此の方面の研究に於いては、時と處とを異にして資料の蒐集に深く留意する事に據つて、幾多の重要なる新資料の發見が齎され、其の資料の檢討に據つて、其の見解に多くの進展を豫知し得可きは必然である。

然しながら茲に、在來の所説の誤れるは之を正し、妥當なるはより深く之を基礎づけ、更に新たに幾多の事相を闡明し得たとするも、なほかゝる廣汎なる研究題目は、今後時代の進運に伴つて幾多の補正が豫知せらる可き事もまた自ら明かである。今本稿を草しつゝある中にも、絶えざる新資料の發見に據り、其の見解に若干の改變を來し、更に又在來豫想し得なかつた方面に新資料の發見を期し得る狀態であるが、唯將來如何なる

新資料の發見が行はれるとしても、恐らくは根本的に本篇の體系に補正を加ふ可き點は殆ど僅少であらうと信ずる

第二章　西歐活字印刷術の傳來と切利支丹版

近世初期の劈頭に於いて我が國に傳來した活字印刷術には其の源を朝鮮に發するものと西歐より傳來したものとの二系統が存し、此の兩系統は相前後して渡來した。

西歐活字印刷術の傳來

西歐の活字印刷術は朝鮮系統の其れよりも稍早く天正十八年（一五九〇）伊太利の學僧アレッサンドロ・ワリニャーニ Alessandro Valignani に據つて、活字印刷機並びに工匠が舶載せられた。

ワリニャーニ師の來朝

ワリニャーニは我が國に來朝した耶蘇會士中、最も盛んに活躍し、前後四回日本の地を踏んだ。彼は基督教の弘法者であると共に、新しき文化の傳達者であつた。天正十年（一五八二）正月に大友有馬大村諸侯より派遣した四名の青年使節を作つて日本を去り、天正十八年印度ゴアより、四人の日本青年の歸朝と共に二度日本に姿を現はし、陽七月二十一日（陰六月二十日）長崎に到着したのである。（新村出博士「南蠻廣記」大正十四年刊、黒田正雄博士「アレッサンドロ・ワリニャーニ」參照）

四青年使節の歸朝

（第二回の來朝）

天正十九年ローマ字本サントスの御作業の内抜書

翌天正十九年にこの將來せられた活字印刷機に據つて、先ず「サントスの御作業の内抜書」一冊のローマ字本が肥前高來郡の加津佐の學林で刊行せられた。

傳來、天草の學林に、後には長崎の學林に於いて、慶長中期に至るまで、ローマ字並びに假

名交り兩樣に亙つて種々の吉利支丹版が刊行せられたのである。其の日本耶蘇會刊行の活字印本は、明治二十一年(一八八八)英サトゥ氏が日本耶蘇會刊行書志に十四部を所收紹介し、後明治卅三年(一九〇〇)に其の續篇(Transactions of the Asiatic Society of Japan Vol. XXVII. Pt 2, 1900)に二部を追補紹介して以來、次第に發見せられて現に二十數種が知られてゐる。吉利支丹版は特殊な事情に據つて佚亡したものであるが、なほ今後の發見を期し得るものも少くないと考へられるのである。

次に在來の研究に據り、現存の書目を掲げると左の如くである。

吉利支丹版研究參考書目

(參考書目)

Ernest Mason Satow; The Jesuit Mission Press in Japan. 1888、新村出博士「南蠻廣記」(大正十四年刊)二、典籍諸論文、「文祿舊譯伊會保物語」(明治四十四年刊・昭和三年改訂刊)・「南蠻文學概觀」(日本文學講座、後、琅玕記(昭和五年刊)所收)・林若吉氏「こんてむつす・むんぢ」(稀書複製會刊行稀書解說第二篇(大正十一年六月刊)・村岡典嗣博士「吉利支丹文學抄」大正十五年刊・岡本良知氏「ひですの經」(書誌第四冊)大正十五年刊・「日本耶蘇會刊行書志」解說(明治文化研究會編、日本耶蘇會刊行書志覆刊解說—日本耶蘇會刊行書解題(村上直次郎)・南蠻文學研究の源泉(新村出)・サトゥ氏の「日本耶蘇會刊行書志」に就いて(石田幹之助)・サトウ先生著述目錄(吉野作造・池田榮三郎編)大正十五年十二月刊・龜井高孝氏「天草本平家物語」昭和二年刊・橋本進吉氏「吉利支丹教義の研究」(東洋文庫論叢第九、昭和三年刊)・岡本良知氏初期耶蘇教徒編述日本語學書研究(ジョルダン・ア・デ・フレイタス原著譯・註、其の他)昭和四年刊・長沼賢海氏「南蠻文集」昭和四年刊・太田正雄博士「えすぱにや・ぽるつがる記」昭

和四年刊・土井忠生氏「日本耶蘇會版倭漢朗詠集卷之上」(藝文、昭和十六、二月)・新村出博士「典籍散語」(昭和九、三)

○右記書目中、國字本には＊印を附し、サトウ氏の書誌に所載せるものは標示の數字ゴヂック體を用ふ

日本耶蘇會刊行現存書目

(1) サントス(聖徒)の御作業の内抜書(羅馬字)　二卷一冊　天正十九年(一五九一)加津佐學林刊
(サ氏書誌一)　英國オクスフォード大學ボドレイアン文庫藏

(2) ヒーデス(信仰)の導師(一名信心録)(羅馬字)　一冊　文祿元年(一五九二)天草學林刊
(サ氏書誌三)　和蘭ライデン大學圖書館藏

(3) ドチリイナ・キリシタン(聖教要理)(羅馬字)　一冊　文祿元年(一五九二)天草學林刊
東洋文庫藏

(4) 日譯平家物語(卷四)・伊曾保物語(卷二)・金句集(羅馬字)　一冊　文祿元年(一五九二)天草學林刊
(サ氏書誌二)　大英博物館藏

(5)＊ どちりいな・きりしたん(國字)　一冊　刊行時所未詳(文祿元年(一五九二)？天草？)
(サ氏書誌九)　羅馬バルベリニ文庫藏(毎半葉十四行、十八字乃至二十字(不等)字面の高さ約七寸。)

(6) アルヴレズ氏拉丁文典(羅馬字)　三卷一冊　文祿三年(一五九四)天草學林刊
(サ氏書誌四)　羅馬アンゼリカ文庫藏

(7) カレピーヌス氏拉葡日對譯辭典(羅馬字)　一冊　文祿四年(一五九五)天草學林刊
(サ氏書誌五)　ボドレイアン文庫・佛國學士院文庫・ライデン大學藏

(8) コンテンツス・ムンヂ(羅馬字)　四卷一冊　慶長元年(一五九六)天草學林刊
(サ氏書誌六)　英國オックスフォード大學圖書館藏

第六〇二圖

(9)* 落葉集(國字) 四卷一冊 慶長三年(一五九八)長崎(?)學林刊

(サ氏書誌七) 大英博物館・ライデン大學・クロッフォード伯爵家・*內野氏皎亭文庫(太平記拔書原表紙裏出零葉十二葉一帖)藏

(10)* さるばどる・むんぢ(國字) 慶長三年(一五九八)長崎(?)學林刊

(サ氏書誌八) 羅馬カサナテンセ(ミネルヴァ)文庫藏

第六〇三圖

(11)* ぎや・ど・ぺかどる(國字) 二卷二冊 慶長四年(一五九九)長崎學林刊

(サ氏書誌十) (第一版)大英博物館・巴里國民文庫(下卷)藏

(第二版)*丸善圖書株式會社(上卷)・羅馬バルベリニ文庫(下卷末字集十二葉)藏

別に何種か不明なるもなほ下卷一冊葡萄牙王室に歸せしものあり。

(12)* ごちりいな・きりしたん(國字) 一冊 慶長五年(一六〇〇)長崎後藤登明宗印耶蘇會印刷所刊

(サ氏書誌十一) 羅馬カサナテンセ文庫藏

第六〇四圖

(13)* ごちりいな・きりしたん(國字) 一冊 刊年未詳(されど本書の内容、形式より吉利支丹版國字本中、最古刻の一なるべし。刊行地天草か。)

*飯島請司氏藏(補訂篇卷末參照)

(14) ドチリイナ・キリシタン(羅馬字) 一冊 慶長五年(一六〇〇)長崎學林刊

(サ氏書誌續(一)) 德川賴貞侯藏

(15)* 倭漢朗詠集卷之上(國字) 一冊 慶長五年(一六〇〇)長崎學林刊

(16)* こんちりさんの略（國字）　慶長八年（一六〇三）長崎（?）刊

西班牙國エスコリヤル・サン・ロレンソ王宮文庫藏

(17)* 太平記抜書（國字）　六巻六冊　慶長中長崎（?）刊

（[illegible]）[illegible]野氏[illegible]學文庫藏

(18) ロドリゲーズ日葡辭書（國字羅馬）　一冊　慶長八年（一六〇三）長崎學林刊

（第四十二圖）ボードレイアン文庫・大英博物館・巴里國民文庫藏

(19) ロドリゲーズ日本文典（國字羅馬）　慶長九年（一六〇四）長崎學林刊

（第四十三圖）ボードレイアン文庫・アジュダ文庫藏

(20) サカラメント（秘蹟）要覽（國字羅馬）拉丁文、稀に日本語あり。　一冊　慶長十年（一六〇五）長崎學林刊

（第四十四圖）東洋文庫・大英博物館[illegible]共に二色摺。本文第一葉表、邊匡郭內、縱六寸四分、橫四寸[illegible]）・エレリス師[illegible]藏

(21) スピリツアル（求道修業鈔）（國字羅馬）　二冊　慶長十二年（一六〇七）長崎學林刊

長崎大浦天主堂藏

(22) フロスクリ（聖教精華）（國字羅馬）　一冊　慶長十五年（一六一〇）長崎學林刊

東洋文庫藏 [illegible]

(23)* こんてむつす・むん地（國字）　一冊　慶長十五年（一六一〇）京都原田アントニヨ印刷所刊

林*若吉氏藏

(24)* ひですの經(國字) 慶長十六年一一六長崎後藤登明宗印耶蘇會印刷所刊

平假名交り活字印本

以上の中、平假名交りの活字印本は、(5)刊行時所未詳羅馬バルベリニ文庫藏「ごちりな・きりしたん」・(9)落葉集(慶長三年刊)・(10)さるばごる・むんぢ(慶長三年刊)・(11)ぎや・ご・ぺかごる(慶長四年刊)・(12)ごちりいな・きりしたん(慶長五年後藤登明宗印刊)・(13)刊行時所未詳「ごちりいな・きりしたん」(伊藤長藏氏藏)・(15)倭漢朗詠集巻之上(慶長五年刊)・(16)こんちりさんの略(慶長八年刊)・(17)太平記抜書(慶長中刊)(嘗て慶長七年以後同三年内の刊行かと稱せられしも、其の原表紙裏張りより慶長三年刊落葉集十二葉出でたるを以て見るも、慶長三年より餘り年經ざる頃の刊行なるべし。)・(23)こんてんつす・むん地(慶長十五年京都原田アントニヨ刊)・(24)ひですの經(慶長十六年後藤登明宗印刊)の十一種に達する

其の中、「こんちりさんの略」一種は明治二年 Petijean 師が上海で刊行したものに據つて其の内容が知られるのみで、其の原本の姿を見る事が出來ないから之を除き、他の十種の國字本を其の活字の様式に據つて分つと、(一)羅馬バルベリニ文庫所藏の「ごちりいな・きりしたん」伊藤長藏氏藏の「ごちりいな・きりしたん」の二種と、(二)落葉集(慶長三年刊)・さるばごる・むんぢ(同刊)・ぎや・ご・ぺかごる(同四年刊)・ごちりいな・きりしたん(同五年後藤登明刊)・倭漢朗詠集巻之上(同五年刊)・太平記抜書・こんてんつす・むん地(慶長十五年京都原田アントニヨ刊)・ひですの經(慶長十六年後藤登明刊)の八種とに二分さ

國字本活字は木製か金屬製か

れる。(一)は稚拙にして版式上から見るも先行と認められ(二)は樣式の整つた書風の麗しい活字を以て印刷せられてゐる。卽ち後者は慶長三年に初めて落葉集に用ひた活字を慶長十六年まで襲用してゐるのである。この兩種の國字印本の活字が木製であるか金屬製であるかに就いては未だ詳かにせられてゐない。もと天正十八年にヷリニヤニが傳へたローマ字活字は確かに金屬製であつて、型も小さく其の樣式も餘り優れたものではなかつた。ローマ字活字が輸入後直ちに使用せられてゐるのに對し、國字の活字は全然新しく作製せねばならなかつたから、自然遲れて出現したのは當然であるが、其の最初に作製せられた平假名交りの活字は恐らく木製ではなかつたかと考へられるのである。

羅馬バルベリニ文庫所藏の刊行時所未詳の國字本「どちりいな・きりしたん」、又同種の活字印本たる伊藤長藏氏藏の「どちりいな・きりしたん」等の類（大型活字）が、國字本としては早く刊行せられたものであらうとは識者の意見の一致する所である。其の平假名交りの活字の版式に稚拙な角張つた感じを受ける點があるのは、最初に作製せられた木製雕刻の爲ではなからうか。又、之と關聯して考ふ可きは切利支丹版に於ける片假名活字の存在である。其の片假名交り活字印本の存在は僅かに、羅馬カサナテンセ文庫藏慶長三年刊「さるばどるむんぢ」の表紙裏張りに使用せられてゐる半枚宛二葉の斷簡[illegible]

片假名交り活字印本の存在

第一八圖

書誌、長澤氏「どちりな・きりしたん」等の一部分に相當せる由考證あり（南蠻文集解說二三頁以下）と慶長五年刊倭漢朗詠集卷之上の表紙裏張に使用せられてゐる同種活字の零葉（二葉）（藝文昭和六年二月號、土井氏論文一〇六頁以下）とに據つて知られるのであるが、其の寫眞に見るに（幸田成友博士將來の寫眞に據る）樣式亦頗る粗拙にして、彼は平假名、此は片假名の差異あるも、前記どちりな・きりしたんと同性質のもので木製ではあるまいかと思ふ。

之等版式の古拙なる片假名活字印本が少くとも慶長三年以前の刊行に係る事は言ふまでもなく、又其の內容より見て、小冊子の體をとつて現れたらしいこの種の片假名交り印本が適宜に集成せられて、平假名本の「どちりな・きりしたん」「さるばどる・むんぢ」等が出來上つたものであらうと考へられる點から言つても、耶蘇會關係の假名交りの活字として、最初に作製せられたものと推定する事は不穩當ではあるまいと思ふ。更に之を耶蘇會の年報（村上直次郎博士抄譯紹介、後記參照。）に少くとも文祿二年には國字の活字印本が存在し、其の書名さへも記されてゐる事實に深く注意するならば、一層容易に首肯し得るに至るであらうと思ふ。而して、この種の片假名活字と前記の平假名活字とは共に木製にして、其の初期に現れた國字であるとして、兩體の何れが先行であるかは未だ詳かにし難いが、朝鮮系統の活字に基く京洛の活字印刷術の發達に於いても片假名が平假名に先立つてゐるのを以て見れば、恐らくは片假名を先行と考へる事も出來るのではあるまいかとも思ふ。

次に、慶長三年に初めて現れた落葉集・さるばざる・むんぢ等の類の活字は、行草體の書風麗しい纖細なる樣式を具へたものである。其の印刷面より案ずるに恐らく金屬製の活字であらうと思ふ。最初に現れた落葉集に比して、後出の「こんてんつす・むんぢ」(慶長十五年刊)等に活字の磨滅が餘り現れてゐないのも其の一證とする事が出來よう。但し、太平記拔書等の如きは、特に諸種の漢字を必要として、補刻した木製のものを交へてゐる樣に認められるが、是等は特殊な場合であつて、總體としては金屬製の活字であつたと思ふ。然もまたこの種の活字に就いては頗る興味ある事實が判明してゐる即ち、我が國に來朝活動してゐた耶蘇會士が本國へ發信した年報には種々布教の爲の印刷の事をも言及してゐて、村上直次郎博士の紹介せられた所に據れば、(日本耶蘇會刊行書誌緒言三頁參照。)

村上直次郎博士紹介耶蘇會年報に見ゆる印刷の事實

天草のコレジヨ内の印刷については、一五九六年(慶長元年)の耶蘇會年報にコレジヨの獨立したる一部にラテン語並びに日本語印刷の設備ありと見え、又一五九三(文祿二年)の年報には「天草のコレジヨにはパードレ七人、ポルトガルのイルマン八人、日本のイルマン三十六人、外に同宿即ち使用人二十人あり、一部はコレジヨの雜用をなし、一部は印刷に從事す」とある。

耶蘇會の印刷事業と其の効果については、一五九一年乃至九二年(天正十九年至文祿元年)の年報に「學生の修學を少からず助けたるは歐洲より持渡りたる印刷機にして、之に依りラテン語及び日本語の書數種刊行せられたり」とあり、又一五九三(文祿二年)の年報に「フライ・ルイス・デ・グラナダ著ドチリナの大意即ちカテキスモ日本文の印刷を終り、又日本語を學ぶ者の爲め他に數種の書と、キリシタン等の爲

め日本語日本文字の宗教書數種とを刊行せり」と見え、一五九五年（文祿四年）の年報には又、此の教化の事業を更に進捗せしむる爲め、我等が信仰し又實行すべき事を十ヶ條に分ち簡單且明瞭に、當國語にて記したる小册子を刊行し、又コンヒサンの仕方、ロザイロの唱へ方、其の他善きキリシタンのなすべき信心に關する同國語の小册子數種を印刷せり」とあり、至一五九六年（慶長元年）の年報には「本年コンテムプツス・ムンヂと云ふ書をラテン語及び日本語にて出版し又ラテン文にて我がパードレ・イグナショのエセルシショを刊行せり」

とあつて、今日未發見の刊行書も澤山に見えるし、之に據つて少くとも文祿二年には國字本の活字印本が出現してゐた事もわかる　更に又、（「十六世紀末澳門及び日本に於ける活字出版」ポルツガル圖書館文書館報第一卷五號一九一五年十月掲載、ジョルダン・デ・フレイタス原著、岡本良知氏譯註（太田正雄氏「えすぱにや・ぽるつがる記」所收）參照。）ジョルダン・デ・フレイタス氏は其の論文中に「日本の港長崎にて千六百年八月二十五日、クリストに於て甚だ崇敬せらるべきパードレに宛て書かれたる書簡」（ワレンチン・カルヴリョ報）の拔萃として次の記事を援引してゐる。　左に岡本氏の譯文を全掲する

日本耶蘇會士書信の記載

當地にはセミナリオの他にも別の印刷所有之候。耶蘇會は此事教徒にとりて甚だ有用なりと考慮致し候ひしかば、少からぬ資金を右の印刷所に投じ申し候。既に一度ならずも報知申上候ことなれど、右印刷所よりは、日毎に新しき書を世に出し居り候。諸種の書籍の印刷に供へんがため、日本語活字を豐富に鑄造し、イタリツク及びラテンの鋭鈍兩樣の印字をも製造致し候。Fray Luiz de Granada の Guia de Peccadores は美事なる日本語に飜譯せられ、日本活字にて印刷致し候。その他にもセ

ミナリオ學生用の書籍多く消失致し候まま學生用にとて、且つ又は古典文學書も不足勝ちに候間、我等の歐洲文字にてキン・ペッナーレの默想譯附き、内部の書一冊、ウィルジリウスの書一冊を印刷致し候。尙また全新語書、日本語にてのどちりなきりしたんも同じく刷り上り候。後の書はこの日本文字、歐洲文字兩様のものを刊行いたせし次第に候」

「日本文字印刷機は本年前記印刷所より取り離し、長崎の有力者の一人たる教徒に委託致し候。右には日本耶蘇會長老の指定する書の外は何書といへども之を印刷すべからずとの條件を加へられ候。かかれば我等の許には歐洲文字の機械の存するのみにて、責務も以前よりは輕く、出費も少く相成候。右印刷機相預り候教徒は、己が費用にて其の機を使用し、印刷仕る可き書よりの利益も己に歸むることに有之候。その後既に右機に由り日本活字にてキリスト教徒たちの讀書に要すべきことと聞てを書き著したる一書の刊行も行はれ候。向後も教徒のため有利なる書は引き續き出版相成可く候」

後藤登明の國字印刷委託

前者の書簡中に舉げられてゐる印刷書にも切利支丹版佚書が暗示せられてゐるが、特に後者の書簡中、國字の印刷機を委託せられた日本人教徒と言ふのは、既に土井忠生氏も指摘せられた如く、後藤登明宗印であらう。慶長五年(一六〇〇)刊どちりいな・きりしたた(羅馬カサナテンセ文庫藏)國字本には、後藤登明印刷所刊行の由が明記せられてゐる。乃ち、慶長三年以來落葉集等の刊行に使用した類の國字活字は、慶長五年の後半頃から、後藤登明の手に委ねられ、爾後の國字本は、後藤登明の印刷に係るわけであるが、其の明

記ある現存書は、他に慶長十六年（一六一一）のひですの經のみであるから、恐らく佚散したものが多い事と思はれる　又、後藤登明に委託せられた活字を以て京都原田アントニヨ印刷所で慶長十五年に「こんてんつす・むん地」一冊を刊行してゐる　京都の地に於いて印行せられたものと解す可きではあるが、翌十六年に長崎の地に於いて又同種活字を以て後藤登明が「ひですの經」を印行してゐる點から考へると頗る不審である　然し、之には何等かの事由が存するのであらう

またこの種の活字印本には、例へば、ぎや・ど・ぺかどるの如く、同年刊行の異植字版が發見せられてゐるもの（天正使節渡歐三百五十年記念珍書展覽會目錄（丸善）村岡典嗣氏ぎや・ど・ぺかどる解說）も存する（大英博物館藏本と丸善株式會社所藏本（上卷）と同年刊行異植字本）から、恐らく、京洛に於ける我が國の中央の印刷界に於ける活字印本と同じく同一の書籍を時差なく重版する場合が屢々あつた事と推定せられるのである。

耶蘇會印刷事業の目的と切利支丹版の樣式

耶蘇會の印刷事業が、すべて切利支丹宗布教傳道の一手段として行はれたものである事は玆に言ふまでもなく、其の當初には唯一の印刷法であつたローマ字綴りの印本は、主として外人宣教師に日本語を學修せしめる教科書として編刊せられたもので、次いで現れた國字印本も亦同樣な目的に應ずる出版であつた　國字印本にも、若干ローマ字を交じへ、又星標でうす・きりしと等の造字、花飾り、半濁音等の記號其の他を使用し、扉に耶蘇會の紋章を印影し、司教出版許可の由を附記する等、其の樣式上に多少の歐風を

採用し、自ら一特色を爲してゐる。

切利支丹版の書等

其の刊行書の内容から言へば、切利支丹宗の教義を解き明したものが大部分を占め、其の他は語學研究の目的で編刊せられた落葉集の如き漢字辭書、カレピーヌス氏拉葡日對譯辭典(ローマ字)等の語學書遙かに之に次ぎ、「太平記抜書」「平家物語」等、日本の歴史と言葉とを學習する爲の教科書も若干存在する。又是等に聯關して倭漢朗詠集等も刊行せられた。

切利支丹版刊行の意義

是等の編刊書中、特にローマ字綴りを以て我が國語を寫した印本に於いては、當時の國語資料として大いなる價値を認め得可く、又其の耶蘇教教義書に現れた歐文飜譯の文學たる所謂切利支丹文學は、當時に於ける特異なる文學現象として注意せらる可きものである。更に、一方、軍記物語其の他の優秀なる我が文學作品を西歐の人々に紹介し、他方、彼の地の名著イソホ物語等を我が國に輸入して、玆に初めて東西文學の交流が行はれた事も亦記憶せられなければならない。

西歐の活字印刷術と朝鮮活字 中央の印刷界との關係

ワリニャニ師の傳へた西歐の活字印刷術は、慶長極初には既に九州の一角に於いて平假名交りの印本を出版するに至り、朝鮮系統の活字印刷術の將來に據つて京洛の地を中心として榮えた假名交り活字印本の發達に比して、少くとも數年を先じてゐる。京洛の假名活字は、其れ以前に出現してゐた切利支丹活字に何等負ふ所が無かつたかと

うか。耶蘇會士の活動、文祿慶長に於ける京洛と九州との頻繁なる交渉は、我が國中央の印刷界が西歐活字印刷術の影響を蒙らなかつたと斷言する事は出來ない。慶長中期に本阿彌光悅・角倉素庵等を中心とし、洛北に行はれた嵯峨本の刊行は、京洛に於ける假名交り活字開版の隆昌を促した最も主要なる原因であつた。安南渡航船を管理した了以を父に持つた素庵自身を直ちに其の傳達者と目せずとも、角倉素庵の位置は、切利支丹版に於ける國字本と嵯峨本との聯絡を思ふ上に一種の暗示を與へるものと言ふ事も出來る。

西歐の技が九州の一端より東漸したであらうといふ事は、其の時代の風潮より察して一應考へられる所である。（新村出氏「活字印刷術の傳來」（南蠻廣記一六九・七〇頁參照。）京洛の平假名活字に於ける連續式の活字も、或は其の技術を西歐の法に得たものではあるまいかとの考說も其の間の聯絡を考へる上に若干の暗示を與へるが如くであるが、この點は或は版下書きの關係から、自然に其の軌を一にする結果を生じたものとも解し得る事であつて、必しも有力な手掛りとはならないと思はれる。一方に於いては又、前記援引の耶蘇會士通信に據つて知り得る如く、耶蘇會は國字本の印刷を擧げて後藤登明宗印に委託しながら、其の印刷機は耶蘇會長老の指令の外一切其の使用を嚴禁してゐるのを以て見れば之も亦推論の域を出でぬのであるが、西歐の活字印刷術は宗教的・地理的關係に制約せられて、我

京都に於ける慶長十五年の切利支丹版「こんてむつすむんぢ」

が國中央の印刷界に殆ど影響を與へずに終つたと考へる事も無理ではなからうと思ふ。慶長十五年に切利支丹版としては唯一つ原田アントニヨに據つて京都の地で「こんてむつすむんぢ」の國字本が活字印行せられてゐるが、之は既に京洛に於いて假名交り活字印本が充分なる發達を遂げた後の事であるから、技術的なる方面其の他に就いても特別な影響を及さなかつたものと解する事が出來るのである。

要するに、何れの論も推定に止るのであるが、西歐の活字印刷術に據つて出現した印刷文化は著しく孤立的なる性質を帶びてゐたものであると言ふ事だけは確かであらうと思ふ。

第三章　朝鮮活字印刷術の傳來と極初期の活字開版

豐臣秀吉の壬辰の役に據る活字印刷術の將來

西歐の活字印刷術が西陲の地に於いて孤獨に終つたに對し、我が中央の印刷界に其の新式の法が採用せられ、之が直接の動因となつて、我が印刷文化を其の本質的發展に導いたものは、朝鮮より傳へられた活字印刷術である。　我が中央の印刷界に採用せられ急速に其の發達を遂げた活字印刷術が、豐臣秀吉の朝鮮の役の結果、彼の地より將來せられたものである事は、後陽成天皇の勅版、慶長二年刊錦繡段、並びに勸學文の刊語（本書一七八頁）に明示せられてゐる。　錦繡段の刊語は、南禪寺の玄圃靈三の筆になり、「前略此規模頃出朝鮮、傳達天聽、乃依彼樣使工摹寫焉（下略）」とある。　靈三は、文祿壬辰の役に、承兌・永哲等と共に秀吉の名護屋の本營に隨從したのであるから、其の言ふ所は確實である。

朝鮮の典籍の將來

なほ又壬辰の役出征の武將例へば、浮田秀家・加藤清正等に纏はる書籍並びに活字將來の傳說を生ずるに至つたのも、所謂「高麗入」（遺老物語卷八、小瀨甫庵「永祿以來出來初之事」）が彼の地の文物を盡して齎し歸つた中にも、書籍並びに其の關係品が著しく多數であつたが故であらう。浮田秀家が曲直瀨正琳に遺つたか否かは姑く措き、現存書に據つて知られる養安院の舊藏書中に數多い朝鮮古刊本は、朝鮮の役の結果、其の架藏に歸するに至つたものであ

らうとは容易に察する事が出來る。又、直江兼續の關係と目せられる舊上杉家所藏（現米澤圖書館藏）の舊籍中に多い朝鮮古本、德川家康の所持した驚く可き多數の朝鮮本（尾州家蓬左文庫藏書を始め、紅葉山文庫舊藏者・内閣文庫藏書・東京帝國大學藏書等の舊藏書中にも若干存する事に現存せり。）等は文祿慶長の役に於ける朝鮮本の多數の將來を如實に物語るものである。島津・毛利等の諸侯も亦多數の朝鮮本を持ち歸つた。（德富猪一郎氏「文祿慶長役に於ける朝鮮の文化」（第二史餘）日本）安國寺惠瓊の如きも文祿元年六月釜山より藝州安國寺へ宛てた書簡の中に「朝鮮大唐入御手、書籍内傳外傳、其外寶物、船に積候て各へ可遣候」と言つてゐる。（前變實記一、六二頁參照）かくの如く多數の朝鮮書籍の將來と共に活字印刷機が齎された事は決して偶然ではなかつたと考へられる。恐らく、秀吉第一次の出征、文祿の役の結果、凱旋の諸將の何人かが、少くとも若干枚植版し得るだけの活字其の他の附屬機具一切を持ち歸り來つたのを、文祿二年八月下旬秀吉の大坂凱旋の後、其の一端が天聽に達し、後陽成天皇の勅版の御企となつて現れる樣になつたのであると思ふ。

後陽成天皇勅版の御企

確實なる文獻の示す限りに於いて我が國最初の活字印本は、壬辰の役の直後に現れた文祿二年の勅版古文孝經である。文祿勅版の古文孝經は、勅命に據り近侍の臣、六條有廣・西洞院時慶・日野輝資等十二人が文祿二年閏九月二十一日に開版に着手した。即ち、秀吉の凱旋を去る約二ヶ月の後に當る。恐らく朝鮮將來の活字一式を御嘉納の上、朝

我が國最初の活字印本文祿二年の勅版古文孝經

鮮銅活字の新法を其の儘御利用の思召しで、直ちに御下命になつたものと察せられる。幾許かの高麗製銅印字が御手許にあつた事は、後に慶長十一年徳川家康が銅活字鑄造奉獻の際、拜借した「高麗銅一字印」を禁中へ返進上してゐる事が慶長日件錄（後記參照）に見えてゐるのに據つても證せられる　この古文孝經植版の顚末は、時慶卿記（據圖書寮藏本。句讀訓點假に施す。）に詳かであるから、左に摘錄する。（十月中事を行はざるは、表向きにて秀吉等の演能等ありて閑暇を得ざりし爲なる可し。）

時慶卿記に見ゆる古文孝經印出の顚末

文祿二年

閏九月二十一日　天晴、禁中御觸、折紙アリ、雖當番則參上候、ハンノ字ヲ十一兩人ニ被仰付撰候。（下略）

同二十二日　天晴、善右衛門出候、禁中參上、文字ヲ撰事、如昨日。（下略）

同二十三日　天晴、如昨禁中參上、板考ノ字ヲ撰及薄暮退、日野ハ不參也。（下略）

同二十四日　天晴、如昨禁中へ字撰ニ參候、泉長老被召、文字ヲ被引候、及黃昏ニ退出。（下略）

同二十七日　天晴、飯後禁中御番參勤、吉田代又內々被召候、先度ノ殘文字引候、於御湯殿ノ上ニテ、勅言ヲ奉候、廣橋中納言、右衛門督、飛鳥井中將、壇蕭南禪寺ノ三長老等也、又某ニハ先日被仰付候書籍之目錄推可申通候。（下略）

十一月六日　天晴、（中略）於御湯殿上、六條與兩人ニ板校ノ字其類々々ニ撰集候。直ニ仰也。（下略）

同十六日　天晴、亦雨（中略）古文孝經ノ板出來候、上ヨリ被見下候。

十二月八日　雨天、中略自禁中孝經印本拜領、長橋迄御禮ニ參上、今度板梓ヲ被ㇾ起候本也。（下略）

同十三日　天晴、中略禁中御會參上、執筆ハ六條也、中刻ニ果、食ハ如ㇾ例、於內々ニ番所ニテ在之、御會ノ席ハ小御所也、午前モ於御前・御酒アリ、各御人數ニ孝經ノ印本被下、六條ト某斗ハ先日拜領也。（下略）

右に據れば、六條有廣・西洞院時慶の二人が御湯殿上の間に於いて專ら植版に從ひ、十一月十六日を以て印行を終へ、十二月八日に兩人がまづ拜領し越えて十三日に他の近侍に下賜せられたものである。かくの如く古文孝經の印行せられた事は確實であるが、印刷部數の如きも極めて少數に止められたものか、江戶時代以來、未だ傳本の殘存あるを聞かない。若し實物を精査し得たならば、其の活字の性質等も判明するであらうが、其の版式等に就いては全く今後の傳本の發見を期する外はない。

僧侶に於ける活字印本　本圀寺日保の活字印行

文祿勅版の古文孝經は未だ實物に接し得ないとして、現在の所、實物の殘存する最古のものは、文祿四年十二月本圀寺の僧日保の開版した「法華玄義序」一帖、同じく十一月刊行の「天台四教儀集解」三卷四冊である。

文祿四年十二月刊法華玄義序

「法華玄義序」（一卷、一帖）（京都帝大圖書館・廣島文理大・安田文庫・高木文庫・谷村一太郎氏・松浦三郎兵衛氏等藏）は、折本仕立、每半折五行、每行十七字。字面の高さ約六寸三分。卷末に刻されてゐる左の

第三七圖

奉寄進　法華玄義序　　百部
文祿四乙未曆極月二十四日
大光山本國寺常住　願主　一輪房日保

の跋文を刊記に非ずとし、本書を稍後の刊行とするものもあるが、原丹表紙の中央に「法華玄義序」とある書外題も亦當時の筆蹟であり、其の版式・裝潢より見るも、本國寺常住日保の開版事業として、文祿當時に於ける一百部限定刊行と認めてよいと思ふ。加ふるに、「天台四教義集解」(三卷、三冊)（帝國圖書館藏、鹿島則泰氏示教。無邊、無界、毎半葉十行二十字。字面の高さ約七寸五分。版心「集解上(中・下)(丁數)」。改裝本。）は、法華玄義序と同様の活字を用ひ、各卷末に、

文祿四年十一月刊天台四教義集解

第三六圖

文祿四乙未曆十一月二十四日

の年時を刻し、法華玄義序の卷末と比照するに、文祿四年十一月、卽ち法華玄義より一ケ月以前の印行と認む可きものである。活字は比較的小型で、印刷面より案ずるに木製である。本國寺にかく早く活字印本の現れたのは、或は同寺が日蓮宗に屬する點から、朝鮮の役出征の武將加藤清正等と何等かの關聯を有するのではあるまいかと想到するのであるが、未だ確證はない。

本國寺に早く活字印版の行はれし原因

文祿・慶長に於ける小瀬甫菴の活字出版

次いで、文祿から慶長元・二年頃に亙つて活字印刷術に據つて諸書を印行したものに小瀬甫菴(道喜)がある。文祿五年十月「標題徐狀元補注蒙求」(三卷、三冊)を初めとして、同年

十二月（文祿五年十月廿七日慶長と改む）卽ち慶長元年十二月刊行の「十四經發揮」（三卷、一冊）、翌慶長二年初夏に「新編醫學正傳」（八卷八冊）、同年更に「東垣先生十書」等の醫書を相續いて上梓してゐる。　甫菴が早く活字印刷に從つた事は、在來著明な事實であつたが、かく多數の書籍を出版したと言ふ事は近時新たに闡明し得た所である。　甫菴がかく多數の醫書を出版してゐる事は、彼が豐臣秀次の侍醫であつたと言ふ說を裏書するものであつて、また彼が率先して、新式の印刷法を採用してゐるのは、關白秀次に近侍して、其の法を早く熟知するの便を有してゐたからではあるまいかと思ふ。　甫菴の用ひた大型の活字には朝鮮活字の樣式が特によく現れてゐる。　要するに甫菴が活字印刷術の新渡に際し、其の發達に盡した功績は、近世初期印刷文化史上に於いて特に注意せらる可きものである。

「書屋刊大成論」存在の推定

なほ南化和尚の遺稿中に、甫菴の爲に代作したものと解し得可き、「大成論跋」と題する一文が見え文祿五年に醫方大成論の開版も行はれた事になるが、未だ傳本の存するものを見ないから、玆に附言するに止める（新村出博士「南蠻廣記」二六五頁參照。）

〔參考〕大成論跋――日東洛陽西洞院之北、勸解由小路之南、中御門、浦辻居住、甫庵道喜書屋新刊二字板、而爲童蒙初學之助矣、烏焉馬之誤、甲由申之差、豈免誚於傍人乎、翰學人後來校者甚、文祿丙申南月吉辰、洛陽浦辻、甫庵道喜謹跋

年代紀略

又、少しく後年、慶長十六年の開版と認む可き「年代紀略」（一冊、東洋文庫藏、[illegible]本、匡郭内縱七寸八分、横四寸八分半。後の覆刻整版本

第四七圖　文祿五年刊補注蒙求

通行せりも前菴の編者になるものであるから、或は是も前菴の編刊であらう。但し、其の活字は前記各種の書籍に使用してゐるものと稍趣きを異にしてゐる。

標題徐狀元補注蒙求　三卷　三冊

五代李瀚撰・宋徐子光注。卷首に李良の薦蒙求表一葉・徐子光の序二葉、各卷首に目錄を附す。四周雙邊、匡郭內縱五寸七分、橫五寸。無界、每半葉十一行、每行十五字。但し、標目のみ大字を用ふ。版心「蒙求上(中・下)」丁數。大黑口。每卷首目錄數葉のみ縱七寸二分、橫四寸九分、每半葉十一行、每行四字標目四段組。總紙數、上卷目共通算九十九、中卷目三、本文九十三、下卷目三、本文九十四葉。卷末刊語左の如し。

桑城洛陽西洞院通勘解由小路南
町住居市庵道喜新刊一字板繡此
書以應童蒙之求也呼嗚末辨芋耶
羊耶魚耶魯耶冒愧林慙甚博覽人
運郢斤多幸
惟時文祿第五丙申小春吉辰道喜記

本書現存明かなるもの比較的多く、內閣文庫（昌平坂學問所舊藏、一時帝國圖書館へ保管せられたる事ありしも、再び閣庫へ戻れり）・大阪府立圖書館（上卷卅一・二葉舊時の補鈔、下卷古き朱墨點書入あり）・久原文庫（待賈堂舊藏）・東洋文庫二本（一は西莊文庫舊藏、二は木村正辭博士舊藏）・安田文庫（上野賢知氏舊藏）・內藤虎次郎博士（朱訓點書入、改裝本なり）・杉浦三郎兵衞氏藏の八本に達す。

慶長元年刊十四經發揮

第四〇・四一・四三圖

十四經發揮　三卷　一冊

元滑壽撰。卷首に宋濂序二葉・呂復序二葉・自序一葉・凡例・目錄・仰伏人圖葉共三。四周雙邊、匡郭内縱七寸二分、横五寸五分强。有界、每半葉九行、每行十七字。小字雙行。版心十四經上（中・下）丁數。大黑口。大型の活字は朝鮮の字母に據れる事明かなり。本文、上卷手足陰陽流注篇五葉、中卷十四經脉氣發揮篇六十六葉、下卷奇經八脉篇七葉。全卷に人身の圖形十四圖を挿入す。卷末に左の刊記あり、本書は活字の様式のみならず、其の本文も亦高麗本に據れるものなる可し。

旹慶長元年十二月上澣

日本洛陽西洞院住　甫菴道喜挍行焉

文祿元年は十一月廿七日に慶長と改元、即ち、慶長元年の年號を用うる唯一の刊本なる可し。同じく甫菴の刊行に係るも蒙求の活字に比し大型にしてまた別種なり。安田文庫に一本を傳ふるのみなり。

慶長二年刊新編醫學正傳

新編醫學正傳　八卷　八冊

明虞天民撰。卷首序數葉のみ十四經發揮の大型活字を用ふ。本文は蒙求に用ひたる小型活字を以てし、四周雙邊、有界、每半葉十二行、每行二十字。匡郭内縱七寸四分五厘、横五寸四分。版心醫學正傳卷數丁數。各卷首に目錄を附す。卷末刊記左の如し。

扶桑國平安城西洞院居住甫菴道喜齋以

愚意刊一字之板而印鼓書校支那三韓之
兩本宗其正者也雖然字字可多舛差若有
博覽之妙手新泥者幸甚
　　時慶長第二丁酉初夏中瀚

（圖四二・四四・四七參）

傳本の管見に入れるもの、圖書寮*尊藏（舊博物館藏）・大阪府立圖書館藏の二本のみにして、圖書寮尊藏本殊に原裝を傳へ、褐色原表紙、原題簽（醫學正傳（卷數））をも殘存する卷多く、殊に第五卷の如きは、水色料紙にて目錄題簽をも保存せるは注意す可し。原本の大きさ縱九寸六分、橫六寸七分。醫學館・多紀氏舊藏印記を捺す。各卷末に愛賴（花押）（寶形朱印）の識語あり、全卷に加へられたる朱墨の書入等と共に開版當時のものなる可し。後の元和八年刊本は整版本なり。

慶長二年刊東垣先生十書

（圖四七參）

東垣先生十書　五冊（舊安田文庫藏本、傳、京都府立圖書館に完本あり。）

東垣十書の內、醫經溯洄集（一卷、王履撰。八十二葉・目二葉）・格致餘論（一卷、元朱震亨撰。六十八葉・目三葉）・局方發揮（一卷、同撰。四十葉）・東垣先生此事難知集（二卷、元東垣李撰。上五十三葉（補寫一葉）・下五十葉、序目十葉）・外科精義（二卷、齊德之撰。上四十九葉、下六十七葉（補寫一葉）・目六葉）の五種を存す。安田文庫*に一本を傳ふるのみなるも、恐らく闕餘の五種（脈訣一卷・脾胃論三卷・蘭室秘藏三卷・內外傷辨三卷・湯液本草三卷）も共に刊行せられしものなる可し。以上五種全く同版式にして、四周雙邊、有界、每半葉十行、每行十七字。小字雙行。匡郭內、縱六寸四分半、橫四寸八分半。外科精義の末に左の木記あり。全卷、補注蒙求・醫學正傳等に用ひたる小型の活字を襲へり。

は活字印刷術と本質を等しうするものであるから、之が朝鮮から學んだものであるか、又は、摺佛等より自然に發意したものであるかが問題となる

又「一字版」と言ふ名稱の有無は姑く措き、實際に社寺に於いて前記の如き捺印法を行つてゐたとするならば、ともかくも其の來由を考究しなければならない　思ふに、中世期に於ける朝鮮との文物交流は相當に行はれたけれども、活字印刷術に關する限り、何等の關係も無かつたものと察せられる　一方に隆昌を極め世を風靡してゐて、甚だ調法とするものであつても、地方に流動する事のない現象も珍しくはない　壬辰之役以前に於ける朝鮮の活字印刷術も其の類であつたのであらう　而して、中世期社寺に於いて行はれたと言ふ印字は、單に其の一箇としての形が相似してゐるに止り、活字印刷術の如く特定の技術を要する事もなく、其の機能にも大いなる隔りの存するものであつて、恐らく、在來の「摺佛」「印記」等の技術より自ら必要に迫られて創意せられたものであつたと思ふ

右の問題は、既に述べた如く、今後の新しい資料文獻の發見を俟つて、更に考究せらる可きものであつて、現在に於いては、ともかくも以上の如き推論に止るのである

朝鮮に於ける活字印刷術

因みに、茲に壬辰の役以前に於いて朝鮮に發達した活字印刷術に就いて附言して置きたいと思ふ。

朝鮮に於いては、所謂高麗版大藏經の類が早くより我が國に將來せられてゐる如く佛典の開版が夙に盛行し、佛經の雕刻に次いで、活版印刷の法も古く起つたのである。朝鮮の印刷文化が常に支那より影響を蒙つてゐる事は言ふまでもなく、活字印刷術に就いても、支那に於いて發明せられた方法を輸入し、之に改正を加へて獨自の進んだ技術を産み出すに至つた。白氏文集朝鮮古活字印本成化二十一年金宗直の跋文（[illegible]）に「活板之法始於沈括、而盛於楊惟中、天下古今之書籍、無不可印、其利博矣。然其字率皆燒土而爲之、易以殘缺、而不能耐久。百載之下、廷達神智、範銅爲字、以貽永世者、其權輿於我朝乎」（下略）とあるが、銅製の活字は宋代にも存在してゐたらしく、必しも朝鮮の其れを以て嚆矢とする事は出來ないが、自ら表彰する如く其の言ふ所は多少傳說的であるかもしれないが、採つて以つて優秀なる技術にまで之を高めた事は確かであらう。

支那に於ける活字印刷術の起源と其の影響

もと支那に於いて活字印刷術の發明せられたのは、宋の仁宗の時代とせられてゐるが、恐らく其れより早く既に五代に始まつたものではなからうかと推定せられてゐる。何れにしても、文化史上特筆す可き世界最初の發明たるの譽れを負ふ可きものである。が、支那本土に於いては、種々の原因で、其の初めには餘り著しい發達を示す事なく、反つて之を傳受した遠地に於いて利用せられ、長足の進歩を示したのである。遠く西歐の

地に十五世紀の半頃に起つた活字印刷術も支那より漸使したものであると考へられてゐる。

宋沈括の夢溪筆談

宋代に於ける活字印刷術は、宋の沈括の夢溪筆談(巻十八)及び江少虞の皇朝事實類苑等の記事に據つて證せられてゐる　沈括の夢溪筆談には左の如く記るされてゐる

板印書籍、唐人尚未盛爲之　自馮瀛王始印五經、已後典籍皆爲板本　慶暦中(宋仁宗朝、我が後朱雀・後冷泉天皇の御代、一〇四一至一〇四八。)有布衣畢昇、爲活板　其法用膠泥刻字、薄如錢唇、毎字爲一印、火燒令堅　先設一鐵板、其上以松脂臘和紙灰之類冒之　欲印、則以一鐵範置鐵板上、乃密布字印、滿鐵範爲一板、持就火煬之　藥稍鎔、則以一平板按其面、則字平如砥　若止印三二本、未爲簡易　若印數十百千本、則極爲神速　常作二鐵板、一板印刷、一板已自布字　此印者纔畢、則第二板已具、更互用之、瞬息可就　毎一字皆有數印　如之也等字、毎字有二十餘印以備一板內有重複者、不用則以紙帖之　毎韻爲一帖　木格貯之　有奇字素無備者、旋刻之　以草火燒　瞬息可成　不以木爲之者、文理有疎密、沾水則高下不平、兼與藥相粘、不可取　不若燔土、用訖再火、令藥鎔、以手拂之、其印自落、殊不沾汚。　昇死、其印爲予群從所得、至今保藏。(靜嘉堂文庫藏元刊本に據る。句讀、竝に訓點を加ふ)

宋代の活字印本は現存してゐるものが知られてゐないが、元代の活字印本も亦今傳は

るものがない。唯、元の王禎の農書の附載に據つて見るに、其の活字印刷の法と其の進展の情とが察せられる。（農書は武英殿聚珍版に基くもの多きも、今茲に、其の原本たる明嘉靖刊本を靜嘉堂文庫藏に據りて左に抄す。）

王禎の農書の記

伏羲氏畫卦造契、以代結繩之政、而文籍生焉。（注云、書卦于木、刻其側以爲契、各持其一以相考合。）黃帝時蒼頡視鳥跡以爲篆文。卽古文科斗書也。周宣王時、史籀變科斗而爲大篆。秦李斯損益之、而小篆。程邈省篆而爲隸。由隸而楷。由楷而草。則又漢魏間諸賢變體之作、此書法之大槩也。或書之竹、謂之竹簡。或書于縑帛、謂之帛書。厥後文籍寖廣、縑貴而簡重、不便於用。又爲之紙。故字從巾。案、前漢皇后紀已有赫蹏紙。至後漢蔡倫、以木膚麻頭敝布魚網造紙、稱爲蔡倫紙。而文集貫之以爲卷軸、取其易於卷舒、目之曰卷。然皆寫本。學者艱於傳錄。故人以藏書爲貴。五代唐明宗長興二年、宰相馮道・李愚請令判國子監田敏校正九經、刻板印賣。朝廷從之。鋟梓之法、其本於此。因是天下書籍遂廣。然而板木工匠所費甚多、至有一書字板、功力不及、數載難成。雖有可傳之書、人皆憚其工費、不能印造傳播。後世有人、別生巧技、以鐵爲印盔界行、內用稀瀝青澆滿、冷定取平火上、再行煨化、以燒熟瓦字、排於行內、作活字印板。爲其不便、又有以泥爲盔界行、內用薄泥、將燒熟瓦字排之、再入窯內、燒爲一段、亦可爲活字板印之。近世又有注錫作字、以鐵條貫之作行、嵌於盔內界行印書。但上項字

樣、難於使墨、率多印壞、所以不能久行、今又有巧便之法、造板木作印盔、削竹片爲行、雕板木爲字、用小細鋸鏤開、各作一字、用小刀四面修之、比試大小高底一同、然後排字作行、削成竹片夾之、盔字既滿、用木楕、楔（牛結切）之使堅牢、字皆不動、然後用墨刷印之

寫韻刻字法

先照監韻內可用字數、分爲上下平上去入五聲、各分韻頭、校勘字樣、抄寫完備、擇能書人取活字樣、製大小寫出各門字樣、糊於板上、命工刊刻、稍留界路、以憑鋸截、又有如助辭之乎者也字及數目字、幷尋常可用字樣、各分爲一門、多刻字數、約三萬餘字、寫畢、一如前法、今載立號監韻活字板式于後、其餘五聲韻字、俱要倣此（韻字巻）

鏤字修字法

將刻訖板木上字樣、用細齒小鋸、每字四方鏤下、盛於篋筥器內、每字令人用小裁刀修理齊整、先立準則、於準則內、試大小高低一同、然後另則別器

作盔嵌字法

於元寫監韻各門字數、嵌於木盔內、用竹片行行夾住、擺滿用木楕輕楕之、排於輪上、依前分作五聲、用大字標記

造輪法

用輕木造爲大輪、其輪盤徑可七尺、輪軸高可三尺許、用大木砧鑿竅、上作橫架、中貫輪軸、下有鑽臼、立轉輪盤、以圓竹笆鋪之上、置活字、板面各依號數、上下相次鋪擺、凡置輪兩面、一輪置監韻板面、一輪置雜字板面、一人中坐、左右俱可推轉摘字、蓋以人尋字則難、以字就人則易、此轉輪之法、不勞力而坐致字數、取訖、又可鋪還韻內、兩得便也、今圖輪像監韻板面于後（活字板韻輪圖）

取字法、

將元寫監韻另寫一冊、編成字號、每面各行各字、俱計號數、與輪上門類相同、一人執韻、依號數喝字、一人於輪上元布輪字板內、取摘字隻嵌於所印書板盔內、如有字韻內別無、隨手令刊匠添補、疾得完備

作盔安字刷印法

用平直乾板一片、量書面大小、四圍作欄、右邊空、候擺滿盔面、右邊安置界欄、以木榍榍之、界行內字樣、須要箇箇修理平正、先用刀削下諸樣小竹片、以別器盛貯、如有低邪、隨字形襯墊榍之、至字體平穩、然後刷印之、又以椶刷、順界行豎直刷之、不可橫刷、印紙亦用（椶刷、順）界行刷之、此用活字板之完法也

(前)任宣州旌德縣縣尹時、方撰農書、因字數甚多、(難)於刊印、故尚己意、命匠創活字、二年而工畢、試(印本)縣志書、約計六萬餘字、不一月而百部齊成、(一如)刊板、使知其可用、後二年余遷任信州永豐(縣)、挈而之官、是農書方成、欲以活字嵌印、今知(江西)見行命工刊板、故且收貯以待別用、然古今此(法)未有所傳、故編錄于此、以待世之好事者、爲印(書)省便之法、傳於永久、本爲農書而作、因附于後（一面内の文字靜嘉堂文庫本破損ありて讀む能はず、武英殿聚珍版を以て之を補ふ）

朝鮮に於ける活字印刷の初期

支那の活字印刷術に據つて發達したと考へられる朝鮮の活字印書法の起源は未だ詳かにせられてゐない　現在文獻に據つて最も古く遡り得るのは、高麗高宗の二十八年であつて、（李奎報、東國李相國後集）詳定禮文が印行せられた。其の後、恭讓王四年（高麗史百官志、後龜山天皇御代、明太祖洪武二五〇、一）これにも活字の鑄造が行はれた　然し、高麗朝の活字印刷に就いては、考究す可き資料に乏しく其の活字印刷術の利用の盛んであつた事を纔に窺ひ得るに過ぎない　恭讓王の四年は即ち、高麗朝の最後であつて李朝の太祖(李成桂)の王位に即いた年である

李朝に於ける活字鑄造

鄭道傳の置書籍舗序（増補文獻備考卷二百四十一、第七葉裏藝文考一、歷代書籍）に切欲置書籍舗鑄字云々とあるのも李朝草創の際既にこの方面に爲政者の意向が動いてゐたものと言へる　太祖四年（洪武(辛亥)四年一三七一）には、木製活字を以て大明律を印出した事があるが、大規模に活字鑄造の業を興し、印書を勸めたのは、李朝第三世の太宗で、其の第三年（明・永樂元年(一四〇三)後小松天皇御代）に内帑を出して鑄造所

印行書に附載せる跋文に現れた活字鑄造

を設け諸臣をして之を努めしめた（後記跋文參照）太宗以後の李朝活字鑄造の事績は、幸にして、其の印行書の跋文に詳細なる始末を順次記載したものが附載せられてゐて、之に據つて其の發展の狀況を略々察知する事が出來る。　但し多少傳說的ではあるまいかといふ疑問が存するが、今玆に圖書寮尊藏及び足利學校遺蹟圖書館所藏の朝鮮古刊活字印本の跋文の順次年代を降るもの四種を採つて其の一端を示すこと次の如くである。

(一) 十一家註孫子　六卷　三冊　永樂七年（一四〇九）刊銅活字印本　圖書寮尊藏（前間氏舊藏）

四周雙邊、有界、每半葉十一行、每行二十字。匡郭內縱七寸七分、橫五寸二分五厘。活字小型にして、約縱四分、高さ三分五厘の大いさなり。

(二) 歷代將鑑博議　十卷　九冊　正統元年（一四三六）刊銅活字印本（圖書寮藏）

四周雙邊、有界、每半葉九行、每行十八字。注雙行。匡郭內縱八寸六分五厘、橫五寸六分。活字大型にして非常に美はしく我が慶元間の眞名活字の樣式の據つて出る所なり。活字の大いさ約高さ四寸五厘、幅五分なり。

(三) 資治通鑑綱目　一百五十卷　一百五十冊　正統三年（一四三八）刊銅活字印本（現在李王家藏、[illegible]）

四周雙邊、有界、十行十八字。注雙行。序文等は極大型の活字を用ゐ、五行十二字、匡郭內縱八寸七分半、橫五寸六分半。

(四) 歷代十八史略　七卷　十冊　景泰二年（一四五一）刊銅活字印本（足利學校遺蹟圖書館藏、高麗史節要同種活字。）

(五) 高麗史節要　三十五卷　三十五冊　景泰四年（一四五三）刊銅活字印本（[illegible]藏）

歷代將鑑博議同種活字印本。四周單邊有界、十行十七字。匡郭內縱八寸三分、横五寸五分。原裝。

（六）白氏文集　七十一卷　十六冊（補鈔）　成化二十一年（一四八五）刊銅活字印本（圖書寮尊藏）

四周雙邊有界、每半葉十二行、每行十九字。匡郭內縱六寸八分、横四寸八分。活字十一家註孫子に比して更に活字小にして、大いさ約幅三分五厘、高さ三分なり。

（一）十一家註孫子跋

十一家註孫子鑄字跋

永樂元年春二月

殿下謂左右曰、凡欲爲治、必須博觀經籍、然後可以窮理正心、而致修齊治平之效也。吾東方在海外、中國之書罕至、板刻之本、易以刓缺、且難遍刊天下之書也。予欲範銅爲字、隨所得書、必就而印之、以廣其傳、誠爲無窮之利。然其諸費、不宜斂民、予與親勳臣僚有志者共之、庶有成乎。於是悉出內帑、

命判司平府事臣李稷・驪城君臣閔無疾・知申事臣朴錫命・右代言臣李膺等監之、軍資監臣姜天霔・長興庫使臣金莊侃・代言司注書臣柳荑・修寧府丞臣金爲民・校書著作郎臣朴允英等掌之。又出

經筵古註詩書左氏傳、以爲字本、自其月十有九日而始鑄、數月之間多至數十萬字、恭惟、我

殿下濬哲之資、文明之德、萬機之暇、留神經史、孜孜無倦、以謂出治之源、而闡修文之化、思廣德教、以淑當時而傳後世、孜孜焉爲鑄是字、以印群書、可至於萬卷、可傳於萬世、規模宏大、思慮深長如此、

王教之傳、

聖曆之永、固當並久而彌堅矣、是年後十一月初吉、推忠翊戴佐命功臣正憲大夫參贊議政府事判禮曹事寶文閣大提學知經筵春秋成均館事吉昌君臣權近拜手稽首敬跋、

（永樂七年四月　日印）

孫子跋

（二）歷代將鑑博議・資治通鑑綱目・歷代十八史略・高麗史節要跋

歷代將鑑博議・資治通鑑綱目・十八史略・高麗史節要跋

（十一家註孫子の跋文全部「永樂七年四月日印」の一行のみを除去せり）を含み、次に左の追記あり。

鑄字之設、可印群書、以傳永世、誠爲無窮之利矣、然其始鑄字樣、有未盡善者、印書者病其功不易就、永樂庚子冬十有一月、

我
殿下發於宸衷、命工曹參判臣李蕆、新鑄字樣、
極爲精緻、命知中事臣金益精、左代言臣
鄭招等、監掌其事、七閱月而功訖、印者便
之、而一日所印、多至二十餘紙矣、恭惟我
恭定大王作之於前、今我
主上殿下述之於後、而條理之密、又有加焉者、
由是而無書不印、無人不學、文教之興、當
日進、而世道之隆、當益盛矣、視彼漢唐人
主、規規於財利兵革、以爲國家之先務者、
不啻霄壤矣、實我朝鮮萬世無疆之福也、
永樂二十年冬十月甲午、正憲大夫議政
府參贊集賢殿大提學知·經筵同知春秋
館事兼成均大司成·臣卞季良拜手稽首敬跋

宣德九年秋七月
殿下謂知中樞院事臣李蕆曰、卿所掌監造鑄
字印本、固爲精好矣、第恨字體纖密、難於

閲覽、更用大字本重鑄之、尤佳也、仍
命監其事、集賢殿直提學臣金墩・直集賢殿
臣金鑌・護軍臣蔣英實・僉知司譯院事臣
李世衡・議政府舍人臣鄭陟・奉常注簿臣
李純之・訓鍊觀參軍臣李蕆長等掌之、出
經筵所藏孝順事實爲善陰騭論語等書
爲字本、其所不足、
命晉陽大君臣瑈書之、自其月十有二日始
事、再閲月而所鑄至二十有餘萬字、越九
月初九日、始用以印書、一日所印、可至四
十餘紙、字體之明正、功課之易就、比舊爲
倍矣、恭惟我
殿
下聖學無斁、萬機之暇、潜心義籍、思欲使刊
於用典布於下、俾人人皆得以講明焉、凡
再變、而鑄字之支、尤爲盡美、誠我朝鮮萬
世之寶也歟、宣德九年九月日、中訓大夫
試集賢殿直提學知製　敎經筵侍讀官

臣金鑌、拜手稽首敬跋、

正統元（資治通鑑綱目は「元」字、「三」とあるを異にするのみ、他は全文同じ。）年十一月日　印出　（歷代十八史略足利學校遺蹟圖書館藏）

はこの印出年時「景泰二年八月　日印出」高麗史節要（蓬左文庫藏）文は「景泰四年四月　日印出」とあるを異にするほか全文同一なり。）

（三）白氏文集跋

白氏文集附載
新鑄字跋

新鑄字跋

活板之法、始於沈括、而盛於楊惟中、天下古今之書籍、無不可印、其利博矣、然其字率皆燒土而爲之、易以殘缺、而不能耐久、百載之下、

聖運神智、範銅爲字、以貽永世者、其權輿於我朝乎、恭惟

太宗恭定大王作之於始、而

世宗莊憲大王、

世祖惠莊大王、述之於俊、於是乎、鑄字之精工、殆無以加矣、成於永樂癸未者、謂之癸未字、成於庚子者、謂之庚子字、其字本乃經筵古註

詩書左氏傳等書也、今已無存焉、成於宣德
甲寅者、謂之甲寅字、其字本亦經筵孝順事
實爲善陰隲、論語等書也、成於景泰乙亥者、
謂之乙亥字、姜希顏之所書、成於成化乙酉
者、謂之乙酉字、鄭蘭宗之所書、今方並用焉、
甲辰秋八月、我
殿下傳旨于承政院君曰、甲寅乙亥字極爲精好、
然而字體差大、所印之書、簡帙繁重、且已歳
久、散落將盡、雖補鑄而用之、不類其初、乙酉
字、則其字不端、不可用、予欲別鑄新字、令細
大疎密適宜、以印諸書、以布四方何如、遂出
內藏歐陽公集列女傳爲字本、
命行上護軍臣李有仁・都承旨臣權健監其事、
典籍臣李世卿別坐臣李坫前判官臣劉用
平・博士臣柳廷秀・學庄臣安潤德・正字臣金
石精・分左右以掌之、字之不足者、使行司猛
臣朴耕補寫之、自是月二十四日始事、至乙

巳三月日ニ畢レ功、爲ニ字大小共三十餘萬一、用レ之以印レ書、明正妍妙、累累若レ貫レ珠焉、臣竊惟、吾東方自ニ箕子一以來、世爲ニ文獻之邦一、而與ニ中國一隔遠、典籍鮮少、幸頼下我朝之

列聖創物之智、用ニ鑄字一印上レ書、凡經史子集無ニ家不一レ有、然而物久則壞、理之常也、癸庚之字、既不ニ復見一、甲乙之字又將ニ刓弊一、所ニ以變通更鑄之

命不レ得レ不レ待ニ於今日一也、將レ見ニ排印之易、流布之廣一、倍ニ蓰於舊傳之千萬禩而不刊也無レ疑矣、

嗚呼我

聖上、右レ文興レ化、纖述燕翼之規模、其至矣哉、成化

二十一年三月　日、嘉善大夫吏曹參判兼

同知　經筵成均館事臣金宗直謹跋

右四種の銅活字印本は、白氏文集の跋に據れば、永樂の十一家註孫子の活字は「癸未字」、歷代將鑑博議・歷代十八史略の活字は「甲寅字」と稱する類であり、又白氏文集の類は、「乙巳字」で、成化二十一年の新鑄に係るものである　其の他白氏文集の跋に見える種類だけでも、「庚子字」「乙亥字」「乙酉字」等がある　在來知られてゐる各朝に於ける鑄字の種類

朝鮮に於ける活字鑄造年表

と稱せられてゐるものを表示すると次の如くである。

癸未字　太宗三年鑄一四〇三
庚子字　世宗二年鑄一四二〇
甲寅字　世宗十六年鑄一四三四
丙辰字　世宗十八年鑄一四三六
壬申字　文宗二年鑄一四五二
乙亥字　世祖元年鑄一四五五
乙酉字　世祖十年鑄一四六五
辛卯字　成宗二年鑄一四七一
乙巳字　成宗十六年鑄一四八五
癸丑字　成宗二十四年鑄一四九三
黄銅字(己卯)　中宗十四年鑄一五一九

以後數十年間鑄造の事實を傳へるものがないから、或は前代の活字を襲用するに止つたものであらう。かくて宣祖二十五年、豐臣秀吉の壬辰の役に際し、其の機器が我が國に齎され、新式の印刷法が流行して、玆に我が印刷文化の一大變動を促す結果となつたのである。（朝鮮に於ける印刷文化の研究に就きてはまだ詳しきもの來す、他日を期す。）

第四章　爲政者の活字開版と其の奬勵政策

第一節　後陽成天皇の慶長勅版

附　後水尾天皇の元和勅版

第一次の勅版

前述の如く、新式の印刷術が傳來して第一に現れた活字印本が、後陽成天皇の文祿二年の勅版古文孝經であると言ふ事は、近世印刷文化史上極めて意義深き事である　之を第一次の勅版として、其の後數年を經て再度の御企てとなつて現れたものは、所謂慶長勅版である

第二次の勅版

慶長勅版に就いては、江戸末期、近藤守重が右文故事（巻十六）に「慶長勅版考」を著はし、錦繡段・勸學文・日本書紀・四書・長恨歌琵琶行・陰虛本病並びに元和勅版皇宋事實類苑の諸本に就いて考證を行ひ、近時（昭和五年）鈴鹿三七氏にも亦「勅版集影」の編刊があり、龍肅氏また世界印刷通史日本篇中に於いて古記錄を多く援用して勅版の事實を明かにせられた　乃ち、今茲に先人の所説に若干補正を加へて本節を草する事とする

「慶長勅版考」と「勅版集影」

慶長の勅版は現存資料並びに文獻に據れば、慶長二年に始り慶長八年に終つてゐて、其の間七ヶ年に亙つてゐる　何れも殆ど同一の版式を備へ、極めて大型の木製の活字を

用ひ、版式の規模の大いなる、眞に勅版に相應しい優れた樣式を具へたものである

慶長二年刊錦繡段

慶長二年に最初に上梓せられたものは、錦繡段（一冊）（有欄邊、有界、每半葉八行、每行十七字、匡郭內、約縱八寸二分五厘、橫五寸三分五厘、大黑口、版心錦繡段（丁數）、裏紙數六十四葉）である　其の印行に關しては、慶長二年七月南禪寺の靈三の記した左の跋文に據つて明かである。（一馬云、訓點私加レ之。）

錦繡段者東皐天隱之所レ編、而未レ有ニ刊行一焉、悉取ニ載諸文字一、鏤ニ一字於一梓一、棊布ニ諸一版一、印ニ一紙一、纔改ニ棊布一、則渠篠亦莫レ不ニ適用一、此規模頃出ニ朝鮮一、傳ニ達天聽一、乃依ニ彼樣一使ニ工摹寫一焉、叡慮卓在ニ振ニ周詩六義一、教以化レ之、家藏人誦、傳ニ之不朽一云。

慶長第二叢在ニ丁酉一夷則下澣

臣僧南禪靈三誌焉

命を奉じて何人が事に從つたかは確證がないが、やはり他の勅版に與つた西洞院時慶等が奉仕したものであらう　印行成つて八月二十日に近侍に下賜せられた事は、小槻孝亮宿禰記（宮內省圖書寮藏）慶長二年八月廿日の條に、廿日晴、錦繡段新ホリノ板、自　禁中被下諸

家、家君一冊拜領」とあり、又三寶院の義演准后日記（慶長二年八月の條）にも、

廿日、從禁裏今度新敷被開版トテ、錦繡段一冊拜領、自長橋局二條殿（昭實）へ參候了、仍今夕到來了。

廿一日、爲雙紙以禮、勸修寺大納言（豐晴）殿へ、以愚札申候、使者宮内卿法眼、從禁裏樣、昨日新版之錦繡段一帖、令拜領候、誠以叔慮忝次第、過分存候、毎事宜預御披露候、謹言。

八月廿一日　　　　義演

勸修寺大納言殿

とある。傳本の世に知られてゐるものは、久原文庫・油小路家舊藏・東洋文庫*「圓融藏」「盛胤之印」印記あり、もと櫻井宮舊藏改裝・内藤虎次郎博士「勅賜錦繡段（同明國師）の書外題、元文二年識語あり」・杉浦三郎兵衞氏藏の諸本である。久原文庫藏本勅板集影印本は、油小路隆典が享保十三年九月東山天皇より拜領したもので、次の識語があり、當時既に官庫に罕であつた事がわかる

右一冊自　東山院拜領之本也御前にて給之末代之重寶可秘藏者也　享保十三九　隆典　先年内裏炎上之時官庫に二部有之御本は各近臣拜領畢奧書ヲ加不申間今日爲子孫書付者也

第六圖

慶長二年八月印行勸學文

錦繡段と相前後して印行成つたものに勸學文一冊がある　版式等凡て錦繡段と同じく、左右雙邊、毎半葉七行十七字、匡郭内縱八寸三分、横五寸三分五厘。總紙數五葉　本書も亦何人の奉仕に據つて出來したか詳かではないが、他の勅版と同じ奉仕者の手に成つたものであらう　卷末に左の刊記がある

命ㇾ工、毎一梓鏤一字、棊布之一版、印ㇾ之
此法出朝鮮、甚無ㇾ不ㇾ便、因茲摸寫此書
慶長二年八月下澣

勸學文の傳本

傳本の明かなものは、陽明文庫（[illegible]）・東洋文庫・神田喜一郎氏（[illegible]）藏の三本である　東洋文庫藏本は、淡香色の原表紙をも存し、大いさ縱九寸六分、横六寸九分。卷首扉に上ヨリ　時直ニ拜領慶長二年八月廿六日〔〕の西洞院時慶の識語があるから、本書摺刷の完成時日をも推す事が出來る。（[illegible]）

慶長四年春刊行の勅版諸本

越えて慶長四年春には、日本書紀神代卷（二卷一册）・古文孝經（一卷一册）・四書（大學一册・中庸一册・論語一册・孟子二册）・職原鈔（二卷二册）の諸本が摺刷せられた　日本書紀神代卷（二卷、一册）の刊行に就いては、左記の船橋國賢の跋文に詳かである　其の刊行に際し、

日本書紀神代卷

底本の作成には、吉田家の人々（兼雄・兼古等）が與つた事は、神道の寶典たる神代卷の傳承より考へて當然の事であるが、其の準備の書類（版下書き樣の類）が同家の近き縁戚なる猪熊（信男）家に傳へられ、然も其の反古類中に、神代卷の綴目なき一葉（下卷第二十一葉）が共に保存せられてゐた事等に據つて明かに證示せられるのである。（[illegible]）

日本書紀歷代之古史也。元正天皇養老年中、一品舍人親王太朝臣安麻呂奉ㇾ勅撰ㇾ之、書爲撰書宜ㇾ要覽ㇾ以ㇾ是爲ㇾ植輿ㇾ書耶。君臣共以莫ㇾ不ㇾ寶ㇾ此書ㇾ矣。按　神天皇以還

至繼體天皇御宇、異域典經多以雖來朝、不解其義、徒經三百有餘歲矣。推古天皇御宇、聖德太子察三才之源、達三國之起、故始以漢字附神代之文字傍、於于爰吾邦人淩得識量典經之旨、非至聖敢成此擧哉。蓋神道者爲萬法之根抵、儒教者爲枝葉、佛教者爲花實、彼二教者、皆是神道之末葉也。雖以枝葉顯其本原、然則異曲同工者歟。頃學儒佛者夥、而知神書者鮮矣。物有本末、事有終始、何棄本取末焉。於神國爭疏神書乎。萬機之政尙以神事爲最第一、但神代事理既幽微、非理不通。欽惟

陛下寬惠叡智之餘、後世惜其流布之不廣、遂命鳩工、於是始壽諸梓矣。舊本頗純駁不一、求數本考正之、去其駁而錄其純、用之國而及之天下、則以成熙皞之治、以紹神尊之統、保瑞穗之地、千五百秋將必有賴於斯焉。

慶長己亥姑洗吉辰　正四位下行少納言兼侍從淸原朝臣國賢敬識

御湯殿上日記

御湯殿上日記據圖書寮尊藏本慶長四年閏三月の條に、

三日、はる丶 日ほんき新はんニ仰つけられ候、けふいてきたて丶みな〳〵へ下さる丶。

五日、はる丶 (前略)日本きいせないくう下くうへまいらる丶、てんそうしていたさる丶。

廿五日、はる丶 かすかへ、日本き參らる丶、なんさうの辨していたさる丶、なかひから御れいに長はしまて參る、ゆゑんのすみしん上申。

壬生家四卷之日記

とあり、又、壬生家四卷之日記圖書寮尊藏慶長四年の條に、

閏三月廿六日、近衞白公家日本紀神代卷上下被奉納神宮、今日二宮禰宜等進請文。

とある。即ち、本書の完成と共に、先づ兩宮に奉獻の後、侍臣等に之を賜はつたものであ

る。外宮奉獻本は今も神宮文庫に殘存（後掲）してゐるが、神宮側にも之に關する記録が

發見されてゐる。これに就いては神宮文庫の岡田米夫氏の研究に詳らかである。（書誌學三ノ二、神宮文庫所藏の勅版日本書紀神代卷について參照）

本書の活字は、慶長二年刊の兩本と同じ樣式で、唯四周單邊なるを異にする。（無界、每半葉八行、每行十七字、匡郭内、縱八寸二分五厘、橫五寸四分。版心「日本紀丁數」、大黑口、上卷四十七葉、下卷四十三葉、初に跋文一葉、上下卷を一冊に綴り、下卷は丁數のみ[illegible]）見返には慶長四年刊行の勅版にのみ特有なる「日本書紀慶長己亥季春新刊」の大いなる木記がある。

本書に就いて注意す可きは、比較的多數の傳本中に、原題簽をも存するものが存在する事である。見返しと同じ筆蹟で雙邊內に「舊日本書紀神代上下」とあり、（匡郭内、縱四寸三分五厘、橫一寸五厘）後陽成天皇の御宸筆と稱せられてゐる。（[illegible]版集影十頁參照、近藤守重の[illegible]考に[illegible]原題簽と稱するもの其の大いさ原本に合せずして、各[illegible]に[illegible]上に貼れたる跡あり、且[illegible]原表を損ずるを以て見るに、正齋の[illegible]させしは、恐らくは不忠實なる[illegible]なりしならん）

現存の諸傳本に據つて本書の原裝潢を窺ふに、香色原表紙を附した上下合一冊本に、印刷題簽を添附したものであつたと認められる。傳本の管見に入るものは、圖書寮尊藏の三本を初め十五本に達し、諸勅版中、特に多數である。諸社へ奉獻せられた關係等もあるので、或は他の諸本より多く摺刷せられたものではあるまいかとも思はれるのである。

神代卷の傳本十五本

(一)圖書寮尊藏本 一冊、古き丹表紙を存し、野宮家舊藏裏打を施せるも、書入なき美本なり・(二)圖書寮尊藏本 一冊、「樂山」印記あり、原表紙（但題簽缺）に、其の先道忠の舊藏本なる由、山田以文の手識書入あり・(三)圖書寮尊藏本・(四)神宮文庫藏本 二冊、豐宮崎文庫舊藏にして、各卷末表紙裏に「從帝王當宮御寄進神代也」の墨書識語あり。卽ち、外宮に奉納せられしものなり・(五)京都帝國大學圖書館藏本 勅版集影印影、同書參照。鈴鹿敬芳（明和元年八十歲歿）が青蓮院宮御家藏本をふと買得せる由、天保十四年七月、鈴鹿隆啓の識語あり。・(六)陽明文庫藏本 寬文三年神龍院桂巖瑞芳移點の識語あり。・(七)大阪府立圖書館藏本 氏澤の識語あり。上賀茂社家舊藏。・(八)大阪天滿宮文庫藏本 原題簽存するも、表紙は布地に改裝せり。朱墨點記入。嘉永五年葛城長兵衞納。・(九)東洋文庫藏本 雲村文庫舊藏。一塚本家藏圖書印記あり。改裝に係るも、卷中些の書入なく、現存諸傳本中殆ど唯一の紙面麗はしきものなり。・(一〇)靜嘉堂文庫藏本 現存諸本中最もよく原裝を傳へ、原題簽を保存せり。山田以文舊藏。文明十三年卜部兼倶加點本を移寫せり。・(一一)安田文庫藏本 二冊。西莊文庫舊藏。・(一二)成簣堂文庫藏本 曼殊院舊藏。（昭和二年一誠堂酒井宇吉氏寄贈。）・(一三)內野氏皎亭文庫藏本 山田以文舊藏本にして、同僚鈴鹿隆啓に割愛せしもの、卷末に下鴨社家鴨脚家下賜本の識語、廣瀨蒙齋の識語を移寫す。・(一四)吉田良兼子爵藏本 此一策者禁內上上御賑之時令拜領者也慶長四年八月七日法印淨慶の識語あり。・(一五)猪熊信男氏藏本 一冊。見返に舟橋宣光の識語あり。別に同氏は、吉田家の緣由より、傳來の活版神代卷（圖係爻古中に下卷第二十葉綴目なき一葉紙幅縱一尺二分、橫一尺四寸六分）を藏せらる。

御湯殿上日記四書孝經刊行記事

三月より五月に亙り、神代卷と相前後して、同版式に據つて、四書（白文）・古文孝經（白文）等が印行せられた。御湯殿上日記（據圖書寮尊藏本）慶長四年の條に、

（閏三月八日）大かく新はんに仰つけられ候けふいてき候。

（同）十七日、前中ようも新はんいてきたつる。

五月二十五日、四しよきようきやう新はんニ仰つけられていてき、御所／＼おとこたちにたふ。

大學・中庸・論語・孟子及び古文孝經共に版式勸學文・錦繡段等と同一にして、唯見返に各々「大學（中庸・論語・孟子・古文孝經）慶長己亥刊行」とあるのが異なる。

古文孝經

古文孝經は（五行、每行十三字、每半葉八行、行十七字。匡郭高さ八寸三分、横五寸三分）總紙數九葉、版心「孝經丁數」。古文孝經は文祿二年に一度勅版が行はれ、玆に再び精刻なる活字印本として現れたものである。傳本の知られてゐるものは、吉田兼良子爵藏本（竹里信彰の舊藏、吉田家の兼倶の識語あり）・東洋文庫藏本（和田雲村氏舊藏、中寳）・帝國圖書館藏本（表紙に原本貴事無用の識語あり、藤原惺窩の手澤本と書誌あり）・刈谷町立圖書館藏本（村上忠順・野口道直舊藏、寛政草第二十二を書き添へり）の四本である。

第八號

帝國圖書館藏古文孝經の底本たる竹苞樓の覆刻

帝國圖書館藏本の表紙に存する「原本貴事無用」の識語は、この本が嘗て竹苞樓に在つた時覆製を企てた底本なる事を證するものであつて、京都書肆佐々木竹苞樓に版木二枚（一枚は見返及び本文第一葉、一枚は本文第二葉、凡て八葉にして、序が未完成のまゝ未刊とす。）が未完成の儘殘存してゐる。之を檢するに頗る精刻であるが、未完成の儘なるが故に其の板木を以て摺刷した傳本は管見に入らない。

四書

第十・八號

四書の傳本は現存諸勅版中最も少く、其の完本は大正十二年の震災以前に安田文庫藏本が知られてゐたが、（其の印影本にして本書附録影印に印行所載せり。）今は近衞公爵家陽明文庫（京都帝國大學圖書館寄託）藏の一部のみである（新板影印本）。紙數大學九葉、中庸十八葉、論語三十五葉、孟子（孟子のみ上下二冊、卷八頁下より下冊とす）（上冊序三葉、本文六十八葉、下冊六十七葉、匡郭内縱八寸二分五厘、横五寸四分。）他に、論語一冊は靜嘉堂文庫（林宜齋舊藏）に、又、孟子二冊は東洋文庫

職原抄

雲村文庫舊藏。上卷尾に「慶長己亥年六月廿九日刊行」の墨書識語あり。に藏せられてゐる

職原抄（二卷二冊）は見返の篆書木記「職原鈔慶長己亥季春刊」に據つて、前記の諸本と同じく慶長四年春三月の上梓と認められるが、孝亮宿禰記（圖書寮尊藏本）慶長五年七月十日の條に、

孝亮宿禰記の記載

十日辛亥 從 禁裏職原抄新板官務拜領也同日地震有之

とあり、禁庭常侍の重職にある孝亮に、約一年の後、新板を下賜せられる事も解し難いから、見返のみ前に出來し、翌慶長五年に至つて完成を見たものではあるまいかとの疑問も生ずる（勅板集影）。然し、其れは何等かの理由で御下賜が遲れたのであつて、やはり木記に從つて、慶長四年の刊行と認むべきものであらう。

本書は見返の木記のみ同年刊行の他の勅版と異り、篆字を用ひてゐるが、活字其の他版式は凡て同一である（版心職原抄（丁數）。下卷は丁數のみを新にし、總紙數上卷四十五葉、下卷五十四葉。）

職原抄の傳本

傳本の存するものの三本、一は久原文庫藏本（勅板集影印影。破損甚し）二は安田文庫藏本（後の補裝を經、一冊に合せ、見返を缺くは惜しむ可しと雖も、紙面に些の破損なく、卷末別に原來勅版に無き後附二十一葉を慶長十三年船橋秀賢刊本を以て書寫（江戸初期）せるを附屬す。全卷に慶長時書入朱墨點あり、曼珠院舊藏印記及び「光章之印」印記を存す。又、西莊文庫舊藏。）三は圖書寮尊藏本（壬生家舊藏、一條兼良本を以て書入を施し、卷末に兼良の跋文を書き加ふ。見返は存するも、卷中若干破損せる部分あり。）である。因みに、勅板集影に採錄せられた圖書寮尊藏の一本は、實は慶長勅版ではなくして、慶長勅版を覆刻した伏見宮家御板の一本である。同書に所收してある靜嘉堂文庫藏本も亦同一の板本である。伏見宮家御板に就いては後節に於いて別に述べる事とする。

第一〇圖

〔慶長八年勅版五妃曲〕

かくの如く慶長四年には多數の勅版が印行せられたが、翌五年からは關ヶ原の役に續く騷ぎにまぎれて勅版印行の事業も中絶の狀態にあつた樣であるが、慶長八年二月に徳川家康が征夷大將軍に任ぜられて政局も稍安定したので、再び勅版の事も行はれて、船橋秀賢の慶長日件錄八年正月の條に、

〔慶長日件錄の記載〕

正月十七日晴、前略飡後參番、長恨歌一字板於御前鷲尾、中院入道予等撰並畢、

廿一日、戊刀朝微雪晴、巳刻參內、白氏文集之中上陽人・陵園妾・李夫人・王昭君詩四五首長恨歌傳等五妃曲ト名て被撰拔、以一字板百部被新摺、細工之衆ニ予申渡者也（下略）

とあり、後、慶長九年五月十四日に、「次竹內門跡へ參、五妃曲令點遣之」（慶長日件錄）とあるのも、勅版の事であらう。又、慶長八年四月一日の言繼卿記・時慶卿記には各々拜領の記事がある。

〔言經卿記・時慶卿記の記載〕

禁中ヨリ白氏五妃曲（上陽人李夫人陵園妾長恨歌王昭君等也）一冊被拜領了、忝者也、去春新刻ニ被仰付了（言經卿記）

（前略）一、自禁裏ヨリ白氏文集內上陽人長恨歌傳等ノ板拜領也一御福ヨリ文到着（時慶卿記 圖書寮藏本）

之に據れば、五妃曲の開版せられた事は確實であるが、未だ實物の殘存あるを聞かない。

〔長恨歌琵琶行刊行の問題〕

日本古刻書史に、近藤正齋が慶長勅版と言傳へる長恨歌・琵琶行を揭げてゐるのを以て、五妃曲の誤りと論斷してゐるのは、無論謬見である。（古活字版集說二四頁）なほ又、近藤正齋が慶長勅版考に所收してゐる「長恨歌・琵琶行」を慶長勅版と認定する事は（古活字版集說）なほ充分なる考究を要すると思ふ。其の種の傳本の管見に入るものは僅かに一本のみで、林森太郎氏藏

本（林復齋傳藏、或は正齋の見たるは本書か。貴重圖書影本刊行會覆製）あるが、正齋の匡郭が雙邊なる差のみと言ふ說は首肯し難く、其の活字も他の勅版より稍小型に類し、其の活字の形狀のみを基準として之を勅版と稱する限り、之を慶長勅版と認めるにはなほ留保を要する。卽ち、茲には他に確實なる資料の發見せらるゝまで、之を勅版に擬する事を避けようと思ふ。

慶長勅版と傳稱せる諸本の吟味

陰虛本病

なほ藤原貞幹が好古日錄に、慶長勅版神代卷の活字を以て印出した醫書の存在を傳稱してゐるのに對し、近藤正齋が、慶長中刊活字印本を後に覆刻した陰虛本病一冊の存在を以て、其の原刻本たる活字印本を慶長勅版に擬してゐるのは、全く貞幹の暗示に懸つたものと言ふ可きものであつて、何等の論據をも發見する事が出來ないから、茲には詳に之を吟味する必要もないと思ふ。

「禮記」印行の御企

土御門泰重記の背紙罫線

第十一圖

但し、茲に注意す可きは、慶長勅版として、或は「禮記」印行の御企てがあつたらしいと言ふ事である。圖書寮尊藏の土御門泰重自筆の「日時勘文留」（一冊、九葉。扉に「日次日記」とあり。）寛永十一・二年の條には、明かに慶長勅版の版式を以て試みられた罫紙を用ひてあつて、論語一葉・中庸（匡郭內、縱八寸二分五厘、橫五寸五分）二葉・禮記*（匡郭內、縱八寸二分五厘、橫五寸四分五厘）二葉の併せて五葉を發見する。何れも慶長勅版の匡郭・界線・版心等のみを組立てゝ摺刷を試みたものである。之に中庸・論語と共に「禮記」の罫紙が存在するのは、或は大學・中庸等がもと禮記中の一篇

を抽出したものであるから、之を禮記とした もの、又は泰重の書留に利用したのが慶長より大分後の寛永十一二年の事である點から、後年慶長勅版に用ひた活字一式を以て再擧の準備としてかゝる罫紙が出で來つたものとも附解し得るのであるが、殊に後者は、記錄の具はつた時代にも拘らず、何等其の證據の徴す可きものもなく、是はやはり、中庸論語が慶長四年の刊行であるから、其の折に、諸書と共に禮記印行の叡旨のおはしたるものと拜察す可きものであらう　恐らく、其の御計畫は何等かの關係で中止せられたものが、先立つての御準備の罫紙のみ玆にたまたま殘存したものであらう　側近に奉仕して御信任の殊に厚く慶長勅版にも重要な關係者の一人であつた泰重の手許にかゝる罫紙の殘存してゐた事は當然である

慶長勅版中臣祓の存在

なほ玆に、慶長勅版として中臣祓一帖が印行せられたと認む可き證據がある　猪熊信男氏の示教に據つて知り得た同氏所藏の慶*安刊中臣祓（一卷）の刊語に、

第一四圖

這解除者忝　慶長御宇官版
而所令祖父拜領也抑元〻神
語所集延喜式等五十余本之
簡一最上善言美詞是也衆人
願望頓〻而令成就仍舊中臣

秡臣頓也故爲令授与於諸家重
而鋟梓者也寔吾道之樞要愼
而其怠矣
慶安玄默壽星歳季夏居維鶉尾日卜部朝臣

とある　即ち、祖父が拜領したといふ「慶長御宇官版」とは、慶長勅版の謂に外ならぬ事、玆に理由を説くまでもない。本書も、字面の高さ約四寸二分（每行九字）で、文字の型も大きく、飜刻ではあるが共の底本たる慶長勅版の版式を髣髴せしむる體のものである（猪熊氏に據れば、嘗て同家の藏書中に卷頭の若干破損せる之に該當す可き古刻の一卷を見たる事ありと言ふ。又、慶安刊本と共に、其の版下書きの草稿多數殘存せる事實も亦若干の傍證となる（圖版參照）。又、蓬左文庫藏本中に、敬公遺愛の中臣祓卷子摺本あり、刊記なけれど、其の版式上、或は慶安版の底本となりし一本かと思はる。每行八字、字面の高さ約四寸三分にして、慶長中の印行と認めらる。）猪熊家は平野卜部の正統で、吉田家とは極めて密接なる關係を有し、一條天皇の御代の人、卜部兼延の子、兼忠に二子あり、兄兼國は猪熊藤井家、弟兼忠は吉田・萩原・錦織家の祖となつたが、後、中世期に、卜部兼倶の長男は吉田家を、次男兼永は猪熊家を、三男宜賢は出でて舟橋家を相續し、兼永の後、兼興―兼任―兼雄（後陽成朝）―兼古―兼魚を經て、兼魚の長子兼慶は猪熊家、次子兼充は藤井家を繼いだ。かくの如き猪熊家と吉田家との關係より吉田家のものが猪熊家に多く傳はり存してゐるのである。（猪熊信男氏示教。）中臣祓のみならず、吉田家の人々が、勅版神代卷の出版に奉仕した事を證す可き書類等（版下書、摺遺）も殘存してゐる事は前にも

述べた。

かくの如く慶長初年に率先して諸種の書籍を勅刊せられた後陽成天皇の叡旨が近世初期に於ける印刷文化の進展に大いなる寄與となつた事は、特に注意するまでもない事であるが、其の叡旨を迎へて徳川家康が自ら開版を行ひ、其の政策上より進んで開版事業を奨勵し、慶長十一年には圓光寺の元佶をして、銅印字大小數萬個を調進せしめ、之を奉獻した事は、慶長日件録の左記の記載に據つて明かである。

徳川家康の銅字獻進

慶長日件録の記載

慶長十年四月廿八日、晴、早朝主上番所へ出御、暫有御雜談、其次前大樹銅鑄一字板十万字、可有調進之由、先日上意之由、令披露之處、事外叡感也、

七月廿五日、(前略)圓光寺より銅鑄一字印可備叡覽之由被示、仍着衣冠參内、件字共備叡覽處、如件字可然之由、其旨前將軍へ可申入云々、件字十万被鑄立、可有進上之由、前將軍内々仰也、圓光寺予也、令相談樣子可相究由、是又仰也、(下略)

同廿七日、晴、(前略)次圓光寺行、銅一字印之事、令相談畢、入夜參番、(下略)

同廿八日、晴、長橋御局へ參、高麗銅一字印返進上之、自將軍銅一字印、令新調可被進之由申上畢、次親王御方へ參、孝經奉授之、(下略)

(慶長十一年四月)朔癸巳、圓光寺より書状到來、來書云、前大樹被仰付銅印字八万計出來也、可備天覽否之由也、仍則向彼院、今年始也、仍爲見義毛氈十双進之、對面、果刻打畢、及晩銅印字箱貳つ取寄、(每箱に千字)有之、(又箱下二千字)令隨身備叡覽、御前殿下令候給、一段見事出來之由仰也、先返遣畢、(下略)

(同)廿七日、晴、早朝圓光寺來談、銅印字一枚被掛、盤木可備天覽云々、正親町三條亭へ朝食ニ行、庭田少將
令同道、巳刻令參內、件銅印字備天覽之處、御感也、(下略)
(六月)朔、戊戌、齋了、伏見へ行、巳刻前大樹御對面、從濃州伊吹山氷可進上、於御前各賜之、今朝禁中へ御進上
云々、各退出也、後猶令候也處、色々有御雜談、次銅印字出來、學校より請取、可上申之由、上意也、(下略)
(同)四日、雨、(前略)次圓光寺より書狀到來云、銅印字令出來之間六日七日之比可令進上云云、
(同)六日、晴、早朝圓光寺來入、今日銅印字可令進上禁裏へ、可披露之內談也、令領掌、午刻銅印字箱百、圓光
寺之使僧持來、即於殿上請取之、

銅印字數覺　　木字五万五千三百六十字
注字三萬五千八百九十五字
合九万千貳百六十一字
右從前將軍　禁中へ御進上
此外種盤五、卦一通、箱子百、錐貳、以上箱數百
慶長十一年　　圓光寺
林鐘初六　　元佶判
舟橋式部少輔殿
人々中

如此圓光寺より覺書被贈、即　禁中へ書狀共ニ令進上畢、
(同)七日、早朝相國寺圓光寺へ行、他出不能面、

（同）九日、晴、也足軒令同心前大樹へ參御對面也、先度銅印字御進上之叡感之由、申入畢、（下略）

（七月）六日、晴、圓光寺一字板並字卦二通來、

同七日、晴、早朝伏見へ行、前大樹へ御禮ニ參御對面也（中略）及晩歸蓬庵則御盃ニ參、昨日並字銅卦備天覽畢、

同八日、晴、齋了、依召勾當御局へ參、昨日銅卦事共御尋也、

九月十七日、晴（前略）及黃昏勾當局へ被召、則參、銅印字御禮之事也、

右の徳川家康奉獻の銅活字を以て企てられた開版に就いては未だ詳にしないが、恐らく其の御豫定のみに終つたものではあるまいかと察せられる。後に後水尾天皇の元和七年に遊された勅版は、其の活字を以て御企てになつたものではあるまいかと推測せられるのであるが、其の活字に就いてはなほ後に駿河版の條で述べる。

附　後水尾天皇の元和勅版

後陽成天皇の譲位

後陽成天皇は慶長十六年に後水尾天皇に御譲位になつた。天皇亦父帝の叡旨を承けさせられ、學術を奬め、元和七年には銅活字を以て、第三次の勅版とも稱す可き、宋江少虞輯の皇朝類苑七十八卷（目一卷）十五冊の大冊を印行せしめられたのである（四周雙邊、有界、每半葉十三行、每行二十一字、小字雙行、序・目錄のみ行書體の大型活字を用ひ、有界、八行十二字。匡郭内、縱七寸三分五厘、横五寸四分五厘強。版心「皇朝類苑（卷數）（丁數）」大黑口。首卷目四十二葉）。

元和七年皇朝類苑の刊行

本書通行本は不全、七十八卷本はこの本のみであるから、其の内容より見ても尊ぶ可きものである。公卿・僧

侶等が其の印行に與り、諸家の記錄にも其の印行の狀を見る可きものがある。（龍肅氏世界印刷通史日本篇二四七頁。）

土御門泰重記の記載

土御門泰重記（宮内省圖書寮藏本）元和七年の條には

三月廿一日、癸亥、晴、皇朝類苑校合畢、二叉從長橋御局御所へ進上仕候。（下略）

四月十三日、甲申、晴、午時女院樣御振舞被下、直番伺ひ申候、晩召御前、御聯句一巡共仕候、宿ニハ倉橋番代也、皇朝類苑一冊匡合可仕之由仰也。

同月十五日、丙戌、晴、不能成被仰付候、皇朝文類之校合仕候。

同月十七日、戊子、晴、從御所召之故、伺公申候、今日皇朝類苑一冊、校合相濟返上仕候、入夜御聯句廿句斗有之也、左右丞相御参也、今晩少雨降。

八月廿三日、壬辰、晴、（中略）御番晝夜伺公申候、召御前御酒被下候、皇朝類苑御判一部拜領忝事也。

資勝卿記の記載

資勝卿記、元和七年の條には、

四月廿二日、癸巳、御裝束取出候次手に、かくやにて皇朝類苑今度板行被成候を見物申候、光西堂奉行也、勝西堂峯首座兩人替て奉行之由也、

時慶卿記の記載

又、時慶卿記同年の條には、

九月十五日、道春ニ皇朝類苑ノ點ヲ被仰付候、今日五山駿河部屋迄参上ト也、

廿日、天晴、禁裏ヨリ皇朝類苑一部十五冊拜領、昨夜時直番ノ次ニ給也、今朝歸宅候時刻頂戴、則長橋迄参、御禮申入、西園寺大納言等同心也、

廿三日、天晴、平仁八、皇朝類苑年箇也、

と見えてゐる。又、元和年録、羅山文集、道春年譜、盍簪録等にこの書に關する記載がある事は既に近藤正齋が慶長勅版考の末に附言した如くである。即ち、

元和年録の記載

元和年録には

元和七年十月　禁中にて皇朝類苑と申御書物判木に被仰付何れも公家宗學文仕候衆へ被下　公方様へも一部被進候金地院を被召寄於　御前所々讀候而講釋仕候其中に三河守大江定基出家致し爲求法入唐仕候へは唐の天子殊之外崇敬仕候て圓通大師と申號授候よし此書の中に有之定に日本の名譽なるへきよし御感被成候

盍簪録の記載

盍簪録には

後水尾帝時勅以活字刊皇朝類苑方賜諸臣搢紳之家今尚有藏者亦散于民間或充鬻買（下略）

と見えてゐる。皇朝類苑の跋文はまた勅版を讃へ左の如く記るされてゐる。

皇朝類苑巻末跋文

（巻末跋文）

皇宋事實類苑吉州太守江少虞所撰也。蓋此書之爲、恐遺文逸藏可申于一時言論千載者之泯絶也。其顛末言于序文、今不復贅矣。伏惟

皇帝陛下

叡智萬成之天性、在仁博愛之至道、悉義于

聖躬、紀綱整肅于
朝中、車書混一于海內、加之萬
機餘暇、學學術、惜白駒忙於書窓、跋紅燭轉於夜几、不啻校訂
本朝國史、特設經史子集之庫、其經營也、塗以黝堊、堆以金碧、甍棟雄麗而結構、闌楯衡直
而煥目。意匠出巧輪焉奐焉。其前有池水漣漪湛凝碧、浮鳥戲乎其上、游鱗躍乎其中、佳
木秀而布繁陰、奇石疊而幻小峰、風致瑋其庭除如此。大觀豈可以口舌贊揚而盡哉。然
而令如薛稷馬懷素沈佺期武平一之俊才知之。於是下
勅命曰、令皇宋類苑鏤梓。其
叡旨要前人之言往古之行取之左右逢其原且又欲令天下國家之人而斯文者覩其美
以爲勸、視其惡以爲戒。嗚乎大哉。體手業已了畢、則先賢之言之美也。以之爲寶、而玩之、
則崑山粹精之玉不足比擬焉高文之才之俊也。以之爲苑而遊之、則鄧林之材梗楠杞
梓不足譬喩焉況又樂花開而禮葉茂氣焰生而麗藻光以盡美善矣。閲者宜
應命於臣僧某甲曰、跋此書尾。如臣某淺術末智醯甕之雞坎井之蛙如不知甕外之天井
外之海、今又老懶眼生昏花、憑烏皮着睡、工夫之外別無一所爲。何以與毛刺史楮先生
從事哉。雖然固辭固請普天率土無處逃避。故綴荒蕪詞、塵
宸眷、惟深慚縮臣某不勝蒙恩遇。故奉謝其萬一跋、非臣敢所書。

元和七年重光作噩六月晦日

前南禪臣僧瑞保謹書 回

後年に於ける銅活字の仕末

皇朝類苑の印行に用ひられた銅活字を其の後襲用して摺刷した書籍の有無に就いても未詳であるが、例へば、補注蒙求（圖書寮尊藏等、雙邊、無界、十三行、二十字。）・古注千字文（安田文庫藏、雙邊、無界、十三行、二十字。）・天寶開元遺事（東洋文庫藏）の如き、又、古今事文類聚の或る部分の如きは著しく其の活字の樣式が相似し、或は同じ活字を寛永中に用ひて印行したものではあるまいかと考へられるのである。既に近藤正齋が、橘窓自語に、

橘窓自語の記載

官庫に銅版の活字板あり（図）如此のかたちなり。寶永の火事までは倭に入て御春屋とて米藏あり。そこにをさめて有しが、寶永にやけたりしかど、銅板なれば、燒損ぜざれば、とり集めて長櫃にをさめて文庫に入られたり。我おぼえて取いたされて、大學論語などをすらされしとあり。伏原宣光卿物せられしにはたらいて字をうゑしこと有しなり（云々）

とあるを指摘し、更に之に「正齋又嘗テ聞ク其銅字ノ苞ニ入タルヲ葵祭ノ鷺山ノ車鎮ニ貨シ用ヒシ事モ有ト」と追書してゐる如く、江戸時代に銅活字が官庫に埋藏せられてゐた事が知られる。

皇朝類苑の傳本（十七本）

皇朝類苑の傳本の管見に入るものも比較的多數で、殊に原裝を傳へたものが少からず殘存してゐる。原裝を傳へてゐるものは、何れも淡香色の鳥子紙の表紙を附し、外題が直接表紙に認められてゐる。即ち、

（一）圖書寮尊藏本（十五冊、）・（二）圖書寮尊藏本（十三冊、徳山藩毛利元功原藏本。）・（三）帝國圖書館藏本（十五冊、原裝。）・（四）近衞

家陽明文庫藏本原裝・(五)東洋文庫藏本野間三竹舊藏・(六)東洋文庫藏本「雲煙家藏書記」印記あり。・(七)靜嘉堂文庫藏本青蓮王府舊藏、原裝。・(八)靜嘉堂文庫藏本不忍文庫舊藏、改裝。・(九)安田文庫藏本西莊文庫舊藏、原裝。(震災前安田文庫また一本を藏す。)・(一〇)成簣堂文庫藏本十四冊(卷三九至四三、補鈔)櫻山文庫舊藏。・(一一)久原文庫藏本姉小路家舊藏、原裝。・(一二)內野氏皎亭文庫藏本十五冊、島原侯舊藏。・(一三)高木文庫藏本九條家舊藏、原裝。・(一四)堺市祥雲寺藏本堺市史參照。・(一五)彰考館文庫藏本禁中より水戸家へ下賜せられたるもの、原裝。・(一六)布施卷太郎氏藏本・(一七)岩瀨文庫藏本原裝本等の諸本がある。

第一二・一三圖

第二節　伏見宮家の御板行

附　活字開版事業に於ける堂上家の活動

文祿・慶長・元和の際、勅版は申すまでもなく、宮廷に於いて、公卿の開版事業に直接關與する者も少からず、また武家方に於いても開版事業を勵め、寺院民間の特志者に至るまで、上下を通じて印刷文化の發展に心を傾けた中に、宮家に就いては、在來何等傳へられる所がないのを不審さしたが、玆に宮家に於いても有意義なる御企ての行はれた事が闡明せられるに至つた事は、近世初期印刷文化史上極めて注意す可き事である。但し、活字印刷術を用ひられず、整版に據つて上梓せられた。在來往々にして慶長勅版と誤認せられるか、或は坊刻本中、版式の極めて美事なるものとして扱はれてゐた職原抄（一冊）の一本が、（狩野亨吉氏舊藏、書齋壽藏及び靜嘉堂文庫藏勅版職原鈔さ見らるるもの、實は勅版にあらずして、宮家御板なり）帝國圖書館藏本に據つて、伏見宮家の御板なる事が判明したのである（富島周余氏示教）

伏見宮家御板の發見

帝國圖書館藏本は、水色の表紙に伏見宮家の御紋章を金にて打出した原裝の儘を傳へた大型本で、其の大いさ、縱一尺五厘、橫八寸一分。版式は、一見勅版さ紛ふ許りの慶長勅版を覆刻した整版である事は疑ひない。但し慶長勅版には存しない後附の百官の部分二十葉を附刻してある。行間字數等勅版さ等しく、匡郭內縱八寸一分橫五寸四分

帝國圖書館藏職原鈔一本

（第　圖）

帝國圖書館藏本識語

卷末に左の墨書識語を存する

此職原鈔者伏見宮中務卿（邦永親王）
御家板也寶永乙酉拜領之永
可爲家藏者也

右京權大夫賀茂縣立淸茂［賀茂淸茂］（印）

傳本の存在

即ち、古く摺刷しておかれたものを後年拜領したものと認められる。頗る紙質の厚い（この類本は比較的管見に入るもの多く、靜嘉堂文庫・安田文庫等諸家に藏せらるゝもの亦少からず。）料紙を用ひてある。卷首に「淸茂之印」「溫故齋藏書」等の印記がある。

右に邦永親王御家板なりとあるのは、伏見宮家の御藏板と言ふ意に解す可く、この職原抄の版式は、慶元中の開版に相違ないと認められるから、其の當時御活動遊された親王家の開版せられた御板と考ふ可きである。又是が勅版其の他の開版事業の盛行の雰圍氣の中より現れたものとするならば、慶元中の御家板と考へるのが穩當であらう。

伏見宮家御系圖

今、伏見宮家の御系圖を案ずるに、邦房親王の御晩年の御企てか、或は貞淸親王御壯年の際に於ける御業績であらうと察せられるのである。慶元中とすれば、むしろ邦房親王の御家板と申す方が宜しいかもしれないと思ふ。

⌐邦房親王天正三年元服、元和七年薨―貞清親王慶長九年生、同十年元服、承應三年（五十九歳）薨―貞致親王寛永九年生、萬治三年元服、元祿七年（六十三歳）薨―
―邦永親王延寶四年生、享保十一年（五十一歳）薨　　（據系圖綜覽）

附　活字開版事業に於ける堂上家の活動

文祿二年の第一次の勅版、慶長初年に於ける第二次の慶長勅版、降つて元和に於ける後水尾天皇の勅版等、すべて勅命に據つて行はれた開版事業が、悉く朝臣の手に懸つたものである事は既に前述の如くである。其れ故に、朝廷に於いて御儀其の他行事の立ち重なる場合には、其の開版事業も延引中絶の狀態に置かれざるを得なかつたのである。文祿二年の時慶卿記に據つて勅版古文孝經印行の工程を窺ふに、閏九月二十一日に十一兩人に文撰を命ぜられ、十一月十六日に出來上つてゐる。其の間十月一ヶ月は殆ど開版に從事した記事は見えず、其の日曆の記載に見るに太閤の出仕に據つて御能其の他の御催に紛れて開版事業に力を致す遑を得なかつたものの如くである。

無論勅版の印行に當つては、五山緇流の參與したものもあつて南禪寺の靈三の如き跋文等を認めてゐるが、實務にはやはり公卿が主として與り、文祿の際には西洞院時慶と六條有廣の二人が專ら植版に從つた。慶長勅版の際は何人が從事したか判然としな

いが、同じ人々が主として取扱つたものであらう。神代卷の印行に當つては、吉田家(兼雄・兼古)の人々が參與した事は前述の如くである。

慶長勅版神代卷印行に於ける吉田家の參與

元和七年の勅版皇朝類苑には、土御門泰重等が參與し、其の跋文は瑞保が誌してゐる。公卿と共に僧侶が與つた事は、資勝卿記に(前記參照)「光西堂奉行也、勝西堂峯首座兩人替て奉行之由也」とあるのに據つてわかる。

元和勅版に參與せる人々

慶元中に於ける公卿の日記の傳はるものも若干あるが、勅版に參與した期間に於ける記事の全いものは少い中に、舟橋秀賢の慶長日件錄の如きは、缺年も存するが、當時の公卿が廣く開版事業に參與した狀態を窺ふ可き最もよき資料である。

舟橋秀賢の活躍

他の公卿は朝廷內の開版事業に參與する事はあつたが、朝廷外の事に與る事、卽ち、社會的に活動する事は極めて其の例に乏しい。然るに舟橋秀賢は、博士家の傳統を承けて、學界を指導す可き立場にあつたが爲に、開版事業に就いても各方面との交涉が結ばれてゐたのである。秀賢のこの方面に關しては、嘗て新村出博士が指摘紹介せられたが、(天理圖書館の活字本)次に慶長日件錄(尊經閣文庫藏本)の關係記事を示すと左の如くである。其の中、慶長八年正月に於ける慶長勅版五妃曲に關する事項、及び次いで慶長十年四月末から同十一年九月に亙る德川家康の銅活字新鑄奉獻に對する斡旋を行つた事は前に述べたから繰返すのを避ける事とする。(第四章第一節一九〇頁以下參照)

慶長日件錄の記載

慶長日件錄（抄）

寶珠院の活字本　〔慶長八年十月〕廿二日、雨、寶珠院ヘ一字板注字本以上三百遣之、巳刻參番、

〔注〕後記第五章第一節六參照。

叡山版毛詩・左傳　〔慶長九年二月〕廿九日、高野僧二人來、論語自先進篇至憲問授之畢、次比叡山僧一人、僧來、出納爲監令同心、年始之爲祝義鵝眼二十疋遣之、來月中旬より毛詩之板可摺始云々

〔慶長九年三月〕廿八日、晴、日出之後自番令退出之處、叡山智藏坊來、後毛詩之一字板漸出來之間、五日可令摩摺云々、爲校正予也、點本令許借大全本一冊是又借與、辰刻參女院、〔下略〕

〔慶長九年四月〕六日、晴、〔前略〕次叡山智藏坊來、毛詩一本點本同注本點本二本一冊借遣之〔下略〕

〔慶長九年十二月〕廿三日、晴、〔前略〕叡山月藏坊より毛詩注本一・二之卷一冊幷小字毛詩一冊惠來則又毛詩十七・十八卷同小本十七・十八之卷兩冊借遣之、

〔慶長十年三月〕十日、陰、叡山月藏坊來鵝眼二ケ惠之、毛詩注本十五六卷幷小本兩卷借遣之〔下略〕

〔慶長十年八月〕廿九日、晴、〔前略〕次比叡山月藏坊來人、毛詩印本六部之分惠之、次左傳之本共借與之〔下略〕

〔慶長十二年十月〕六日、晴、〔前略〕叡山月藏坊より毛詩注本新板十部到來。

〔注〕叡山月藏坊の活字印行（後記第五章第二節一、參照）には慶長八年より十年に亙る法華三大部科註（六十六冊）及び慶長十六年刊科註妙法蓮華經（十冊）がある。其れ等と同種活字印本の毛詩・左傳は諸庫に現存してゐる。

心蓮院の活字本　〔慶長九年五月〕廿五日、晴、高尾普賢院へ朝食ニ行、早朝下總休間中川九左衞門方へ遣之、歸路心蓮院へ行、和玉篇一字板令見物也、〔下略〕

(注)後記第五章第一節八参照。

(慶長十年五月十八日、晴、巳下刻、烏頭蘭、六條宰相、山科内藏頭令同心伏見前將軍へ御見舞ニ参、先有御振舞、其巳後、於御書院有御雜談、東鑑新板出來云々、仍被取出被見下、則處々讀申畢、晡時歸蓬畢。

(注)伏見版東鑑には卷末に慶長十年三月の跋文があるが、右の記載に據り、跋文の年時より程遠からぬ出版なる事が知られる。(後記第三節二伏見版参照)

(慶長十年九月廿三日、晴、(前略)次依召勾當御局へ参、入夜圓光寺來談、新板周易注本給之、因周易本可備叡覽之由被申之間、則可令披露之由令得諾。

(慶長十年九月廿四日、晴、(前略)次勾當御局へ参、圓光寺進上周易令披露御祝着之由也。(下略)

(注)後記第五章第三節二伏見版参照。

(慶長十年十一月六日、晴、(前略)次要法寺上人被來、也足軒同心也、新板和漢合運圖被惠之、薦一盞(下略)

(注)要法寺上人は即ち、日性(圓智)で、其の編著、倭漢皇統編年合運圖は慶長五年以來數次の活字印行があり、慶長十年にも重刊を見た。茲に秀賢に贈つた新板は恐らく同年新摺の一本であらう。

(要法寺版の條二六一頁参照。)

(慶長十二年十一月[illegible](前略)次、心經開板出來令摺、見之處刊ニ不上手、字面不似墨筆之樣、不快云々、

(注)自ら版下書を行つたものゝ如くであるが、前後に關係記事も見えないから、供養の理由等も不明である。

(慶長十二年十一月廿七日、晴、(前略)次、新板吏記全本拜領、年來所望之處無力之故、不應得、每度事更之由拜領、滿足大慶〻〻、

一同十二月一晦日、早朝參(前略)依召參勾當局へ、次、史記本先日拜領一册不足、仍今日他本全本被替下之
　由、御樽中入退出。

(注)史記の活字印本は三種あり、其の中、吉田素庵の印行と言ふ嵯峨本と傳稱する一本は、慶長十一年(成簣堂文庫藏一本識語)には既に開版せられてゐた證據があるから、玆に見えるのも其の類であらうと思ふ。

慶長日件錄に據つて知り得る秀賢の開版事業に關する活動は以上の如くであるが、印行書籍の刊語等に據つて更に補ひ加ふ可きものが兩種存する。其の一は、慶長七年の刊行に係る古文孝經(古活字印本)であり、其の二は、慶長十三年中原職忠より依賴せられて底本を提供し、且つ跋文を認めた職原抄(古活字印本)の刊行である

慶長七年刊古文孝經

慶長七年刊古文孝經(一册)は、卷末に左の如き秀賢の跋文がある

或一日來而謂予曰孝經者非百行之爲
本乎今世好事者多以雖費梓工未及
此書惜矣因貫剞鋟之勞欲備幼學之几
案也予感其志遂出累代的本借與焉予
亦時〻加校訂者也
　慶長壬寅八月壬子明經儒清原秀賢誌

何人に依囑せられたものか、明かではないが、其の本文の活字は後の職原抄と異るが、刊

記の部分のみは職原抄と同じ樣式である。跋文の書風に見るに是は秀賢自ら版下を書いた爲であらう。この種の古文孝經の傳本は極めて罕で、高野山寶壽院・東北帝國大學藏本と東洋文庫藏本（卷末刊記損じて文字若干讀む能はず。訪書餘錄寫眞所收。）とを見るのみである。但し、本書と略々版式を等しくする古活字印本の孝經が存する。是には三種の異植版があるが、後章に於いて述べる事とする。なほ本書と同種活字の論語（慶長八年墨書識語（靜嘉堂文庫藏））があるが、是も此の人々の關係した出版であらうと思はれる。

傳本

第四九・五〇圖

中原職忠の活字開版

慶長十三年活字印行の職原抄は秀賢の關與したものではあるが、實は中原職忠（出納）の刊行である。職忠は、かの天海僧正の甥に當り、正四位上大藏大輔に叙せられたので出納職忠と言ふ。八十一の長壽を保ち萬治三年に卒した。秀賢と頗る緊密に相往來してゐる事は、慶長日件錄に據つても明かである

慶長十三年刊職原抄

第四八圖

慶長十三年には、職原抄を活字印行せんと欲して、舟橋秀賢に指導を仰いだ。慶長日件錄の該部が缺けてゐるので秀賢の日曆に之を徴する事は出來ないが、職原抄卷末の左の刊語は其の事情を明かに語つてゐる。なほ職原抄（二卷、二冊）には同種活字の異植版が一種存在する。即ち、版種に據つて其の傳本を分つと下記の如くである（(1)東洋文庫一本（加持井宮舊藏、原裝）・靜嘉堂文庫・高木文庫・鹽釜神社（下卷第十六葉以下缺）・村井古巖納本）・大島雅太郎氏等藏。(2)東洋文庫藏一本（改裝））

職忠は、叡山の僧の活字開版にも關與してゐるらしい事が慶長日件錄（九年二月）に據つても

察知せられるが、ともかくも、當時の堂上家中にあつて、開版事業に對して特に意を留めた一人であつたのである。

清原秀賢刊語

官位職員科目、備令條雖截之、上古風儀、輙難識其多端也、而今此抄者、外題除書之體、内含令式之義、而撰周典之職、配唐官之名、又述自中古覃當時、諸家昇進旨趣殆如指掌也、是以桃華禪閤被加格言、尤可謂官位職掌之龜鑑者也、爰中原職忠欲鋟梓之、余需按讎、因聚考數本、從其宜而已、並可便覽者七八科、附其後

于時慶長戊申夏四月蜓蝣出日　吏部少卿清原秀賢誌

秀賢の慶長日件錄を繙くに、講書の事が最も多く見えるのは博士家の人として當然であるが、職原抄の如きも慶長十年三月朔より九條殿の爲に講義をしてゐるのを初め、同十一年六月には親王方に講ずる等最も數多く講じてゐる典籍の一つである（慶長日件錄、九年三月四日の條。）職原抄に就いては、豐臣秀頼より依賴を受け外題を書いて與へた事等もある。

慶長十七年刊百官略・書札禮事

又、慶長十七年刊行の「百官略・書札禮事」（各一卷合刊一冊、四周雙邊、無界、八行十七字、匡郭高七寸、幅五寸三分。卷末に慶長玄默困敦夾鐘　日刊之の刊語あり。帝國圖書館・東洋文庫・高木文庫・岩瀬文庫藏。）は右の職原抄と同版式の附屬的なる出版と目す可きものであるから、恐らく秀賢の關係した印行であらうと思ふ。

第十一圖

中院通勝の活動

慶長日件錄の中にも見える如く、秀賢と共に慶長勅版五妃曲の印行實務に參與し、又秀賢と同道して活字開版の一見に赴くなど秀賢と常に往來繁き中院通勝は、當時に於ける古典文學の權威者として、諸種の古典に對し、或は注釋を加へ、或は本文の校合を行ひ、其の手を經た傳本も少くないが、所謂嵯峨本伊勢物語・同じく伊勢物語肖聞抄等の開版

に關與した　伊勢物語は慶長十三年に五度、伊勢物語肯聞抄は慶長十四年に兩度の開版が行はれ、通勝は肯聞抄の若干を除き其の全部に對し、卷末刊語に自署花押を施し、其の責任を明かにしてゐる　なほ、慶長九年如庵宗乾活字開版の徒然草壽命院抄等も一度通勝の手を經た一本が上梓せられてゐる　通勝は國書の開版の漸く隆盛に赴んとする慶長の中期（慶長十五年三月廿五日死。）に歿したから、なほ生存したならば、更に多くの業績をこの方面に殘したのではあるまいかと思ふ　けれども、所謂嵯峨本の刊行が國書開版隆昌の大きな原因となつたものとすれば、（後記參照）嵯峨本の刊行に關與した通勝の業績も亦頗る注意せらる可きものである

烏丸光廣の活動

稍降つて慶長末期からの烏丸光廣の開版事業に於ける活動なども亦併せて注意す可きものである　光廣は、慶長十八年に徒然草の活字刊行に關與したのを初め、所傳に從へば、後には竹齋始め假名草子類の創作にも筆を染め、其れ等は書下されると直ぐに印刷に附されて流布してゐる　竹齋の如きは、先ず最初に一兩度活字開版せられて後專ら整版に據つて行はれる事となつたが、光廣作と傳へられてゐる假名草子には最初から整版を以て開版せられたものの方が多數を占めてゐるのは、其の活動の時期が、既に活字開版の盛行期を過ぎてゐた事を示すものであつて、茲には、直接關係がないから、一言附加するに止める

第三節　德川家康の開版事業

一　伏見版と駿河版

德川家康の文教奬勵

後陽成天皇の叡旨が近世初期に於ける印刷文化の進展に大いなる光明となつた事は、前述の如くであるが、後陽成天皇の叡慮を體し、共に近世初期印刷文化の開發に大いなる寄與を爲したるものは、德川家康の開版事業である。家康は、其の治國策の一として大いに文教の開發に力を致した。即ち、中世末期から次第に刻しつゝあつた文藝復興の氣運は、家康の好學並びに文教の奬勵に據つて、一大躍進を遂げる樣になつたのである。けれども家康の嗜好し求めた學問は、むしろ文藝的傾向を帶びたものではなくて、義理の學問、經世實用、治國平天下の學問であつた。而して其の彼の奬勵は、一方には學儒を遇すると共に、他方には開版事業として現れたのである（德富猪一郎氏著近世日本國民史家康時代下第十六・七章參照）。

「伏見版」と「駿河版」

言ふまでもなく家康の開版事業は前後兩期に分れ、前者は京洛伏見の地に於ける慶長四年より同十一年（一五九九至一六〇六年）に至る八年間、足利學校第九世の庠主元佶（三要）・相國寺の承兌等を督事とする木活字摺刷、後者は、其の後約十年を經て、家康の晩年駿府の地に於ける林羅山・金地院の崇傳（本光國師）等の監督の下に行はれた大藏一覽集及び群書治要の銅活字印刷である。即ち、兩者に附與せられた「伏見版」「駿河版」の二名稱は、最も適切

なるものと言ふ可きである。然るに、江戸時代以來「駿河版」(駿河本)を以て家康開版の典籍の總稱とするものが少くない。けれども「駿河版」を家康開版書の總名とする說に從ふものは伏見版の刊行地は京洛であるが、刊行命令者たる家康は當時駿府に居住してゐたが故に、家康の所在地よりして「駿河版」中に伏見版を包括すると說くのである。(訪書餘錄)けれども、家康の駿河築城は慶長十二年(一六〇七)伏見版の刊行を終へてから後の事であつて、伏見版開雕の當時は駿府には居住してゐないのであるから、全く其の論據を失した極めて不穩當なる見解と言ふ可きである。然も、伏見版は駿河版に比して開版の書籍も多く、且つ又、其の開版の土地のみならず、關與の當事者、印刷の樣式等をも全く異にしてゐるが故に、兩者の名稱は、明瞭に之を區別せられなければならない。從つて若し「伏見版」「駿河版」を併せ稱する場合には、自ら他にこの兩者を包括す可き適當なる總名を求める必要を生ずるのである。

家康開版書籍の總名

之に對して、近藤正齋は、「慶長御版本」(右文故事卷三御本日記續錄卷中)なる名稱を與へてゐるが、之を現代にまで用ひる事は躊躇せられる。又古く「官版」を以て稱するものもあるが、慶安の中臣祓の跋文に勅版を指して官版と稱してゐる點から言つても、「古官版」「慶長官版」等は不穩當である。寧ろ、必要に應じては、「師直版」「尊氏版」又は同時代の「秀賴版」等に倣つて、「家康版」と稱すれば足りるかと思ふ。(拙稿伏見版と駿河版(昭和七年六月、書物春秋第十九號)參照。)

「家康版」の提唱

（近藤正齋の「慶長御版本」研究）家康の開版事業に就いては、早く近藤正齋が尊敬す可き業績「慶長御版本」（右文故事卷五御本日記續錄卷中）なる研究を殘してゐる。爾來、殆ど正齋の研究に遠く出るものはないと言ふも過言ではない。今本節には、正齋の研究に新たに補訂を加へて稿を進めようと思ふ。

二　伏見版の刊行

（伏見版）家康は足利學校の庠主三要を用ひ、十萬個の木活字を新雕して、之に附與し、所要の典籍を印行せしめた。慶長六年には伏見に學校を興し、三要をして事を司らしめ、新に圓光寺を建立して住せしめた。[illegible]三要が家康の指令に據り所與の活字を以て初めて開版を行つたのは、慶長四年（一五九九）である。（慶長四年刊伏見版）慶長四年には孔子家語・三略・六韜の三書の印行を見たが、其の第一に現れたものは孔子家語である。三書共に跋文の末に仲夏吉辰とあるが、六韜一本（阿波國文庫藏）の原表紙の裏張りに孔子家語を使用してゐる點等から見ても、三略・六韜は常に其時に刊行せられるものであるから、恐らく孔子家語を以て最初の伏見版とする事が出來ようと思ふ。次に伏見版の版式の一斑を明かにする爲、孔子家語に就いて詳述する。

（孔子家語）標題句解孔子家語　六卷（附素王事紀）元王廣謀撰　四冊

四周雙邊、有界、每半葉七行。每行十七字、注雙行、匡郭内、縱七寸二分五厘、[illegible]寸二分五厘、横五寸二分。[illegible]

卷末に左の刊語があり、伏見版刊行の始末を盡してゐる。（訓點假に加ふ）

孔子家語三要刊語

世際否運、而學校教將廢也。維時内府家康公、于文于武、得其名、故興廢繼絶、爲後學刻梓文字數十萬、而賜。予退爲謝公之恩惠、初開家語、此書是聖人奧義、治世要文、寔非小補也。刊字列盤中、則明本家語以數本考正焉。或板行有訛謬、或文字有顚倒、以亡加之、以余刪之、雖如此有帝虎鸛鶴者必矣。只願待博雅君子改制焉也。謹跋

慶長第四龍集己亥仲夏吉辰　前學校三要野衲於城南伏見里書焉　悉眼刊之

本書の直接の底本となつたものは、在來、足利學校所傳の舊鈔本と傳へられてゐるが、（右文故事卷五、慶長[illegible]本）兩者の關係は兄弟關係はあるかもしれないが、母子關係の無い事は、之を比較すれば明かであつて、實は朝鮮古刻の一本（成簣堂文庫藏）に基いてゐるのである。

孔子家語の傳本

伏見版孔子家語の傳本の管見に入るものは比較的多く、最もよく原裝を傳へるものは、(1)大阪府立圖書館藏本（丹表紙原題簽、附南足院舊藏）・(2)成簣堂文庫藏一本（中・下卷、原題簽存）・(3)足利學校遺蹟圖書館藏（淺縹色原表紙、原題簽若干存す）等で、以下(4)圖書寮尊藏一本（二冊、森立之等舊藏）、(5)圖書寮尊藏二本（四冊、[illegible]家舊藏）・(6)圖書寮尊藏三本（四冊、[illegible]圖書之章印記あり）。(7)神宮文庫藏本（林崎文庫舊藏、改裝美本）・(8)京都府立圖書館藏本（丹表紙。卷末に[illegible]光寺[illegible]住元信花押二〇[illegible]あり。諸[illegible]本中[illegible]のもの）。(9)東洋文庫藏本（澁江全善舊藏。卷末刊語一葉補鈔）・(10)安田文庫藏本（[illegible]三冊）・(11)高木文庫藏本（[illegible]）・(12)成簣堂文庫藏本（[illegible]日藏書印記あり、[illegible]古止點及び訓點書入）の十數本に達する。なほ本書には卷末刊語一葉のみ植版を異にする(13)太宰府神社藏本（[illegible]）の類も存す

るが、以上の諸本は殆ど同版である。

三略・六韜

同じく慶長四年五月の跋文を有する三略・六韜の兩書は、徳川家康の最も愛好する所と傳へられ（慶長年中卜齋記）伏見版に於いても爾來、七書を加算して四度も重版せられてゐる。かく重版せられた事は武家の開版として然る可き事であらう。然るに伏見版の三略・六韜は楓山文庫にさへも所傳がなかつた程であつて、況んや民間には散する機會が少かつたものか其の傳本は極めて罕である。近藤正齋は、「慶長御版本」中に、加藤清正が清原秀賢に求めて朱墨點を加へた傳本を所藏してゐるが、實は其の本は屋代弘賢の不忍文庫架藏本であつて、現に阿波國文庫に其の六韜の二冊のみが殘存してゐる。三略は佚して他にも現に傳本の明かなものが無い。正齋に據れば、三卷裝爲一冊（八行十七字、四周雙邊）、卷末に左の刊語がある。

三略刊語

右三略依內府家康公命刻梓焉板行誤以明本講義改正者也
于時慶長四龍集己亥仲夏吉辰　庠主三要野衲書之

阿波國文庫藏六韜　第…圖

＊阿波國文庫現藏の慶長四年刊伏見版六韜（六卷、二冊）は、原表紙（紙背に孔子家語を使用せる事前述の如し）を存し、四周雙邊、有界、毎半葉七行、毎行十七字。匡郭內縱七寸一分、横五寸一分五厘。版心「六韜卷幾」（丁數）。「天師經籍傳」「清原秀賢印」記を捺す。卷末に左の刊語がある

六韜刊語

雖時　內府家康公以刊字數十萬賜予
即開六韜、六韜是文武備書也。吾　公治

世不㆑忘㆑亂謂乎。

慶長四龍集己亥仲夏吉辰

前學校三要於伏見城下書焉

清原秀賢識語

其の裏に左の如く清原秀賢自筆の識語があり、全卷朱墨點が加へられてゐる。

加藤金部郎中者本朝英武之勇將也予嘗謂云古語云仁賢之智聖明之慮與襄之事

將所宜聞也仍全板六韜全篇投予被需朱墨爲以累葉秘本令合點畢輙勿出函底

于時慶長五載蕤賓中旬　吏部郎中清原秀賢㊞

尊經閣文庫藏六韜

他に六韜の傳本の存するものは尊經閣文庫藏一冊のみであるが、同文庫藏本は明治以降に同庫に新收せられたものであつて、古來の傳承本ではない。（永山近彰氏示教。）

慶長五年刊伏見版

翌慶長五年（一六〇〇）には、貞觀政要（十卷、八冊）と、同じく三略・六韜の再版が行はれた。貞觀政要も亦家康が好讀の一書であつて、（慶長年中卜齋記等）早く文祿二年に既に藤原惺窩の講義等も聞いてゐる。其の版式等は全く前數書と同じく（四周雙邊、有界、每半葉八行、每行十七字、注雙行、匡郭内縦七寸二分、横五寸一分五厘。版心は貞觀（卷數）（丁數）、卷首に尊經序・貞觀政要序・目録・上表・諸儒傳姓氏等を附す。）卷末に左の如き承兌長老の刊語がある。

貞觀政要

唐太宗文皇帝者創業守成一代英武之賢君也千載之下仰其德慕其風者、

今之內大臣家康公是也故令前學校三要老禪校訂貞觀政要去歲開家語

於板、今歲刻政要於梓遵聖賢前軌而作國家治要宜也

豐國大明神際辭下土之日、受

貞觀政要刊語

令嗣秀頼幼君賢佐遺命、爾來寛厚而愛レ人、聰明而治レ衆、不レ異下周勃霍光安ニ劉氏輔昭帝也、矧又海内弘此書、而協和士民之心、則爲明神不ニ忘舊盟、爲幼君盡至忠者、其用大矣哉

慶長五年星輯庚子花朝節　前龍山見鹿苑承兌叟謹誌　[illegible]

但し、右の刊語には、「豐國大明神云々」以下、最末「其用大矣哉」までを削去した傳本もあつて、之は政治的關係で後に改訂を行つたものと解せられてゐるが、未だ管見に入らない。

貞觀政要の傳本

伏見版貞觀政要の傳本の管見に入るもの九本、卽ち、(1)圖書寮尊藏本（[illegible]書印記あり。改裝に係るも美本なり）(2)足利學校遺蹟圖書館藏本・(3)米澤圖書館藏本・(4)愛知縣立師範學校藏本（尾州家舊藏）(5)東洋文庫藏本（[illegible]）(6)臺灣帝國大學藏本（卷[illegible]元和[illegible]本にて補配す。十冊）(7)内野氏皎亭文庫藏本（[illegible]）(8)高木文庫藏本（[illegible]）である。

伏見版貞觀政要翻刻元和九年刊本

なほ伏見版を元和九年に翻刻した坊刻古活字印本があつて、其の傳本は比較的多數現存してゐる（[illegible]）。

慶長五年刊三略

「黄石公」三略（三卷、一冊）は、足利學校遺蹟圖書館・田村專一郎氏藏の二本を傳へ、行款等凡て先行の諸印本と同じく、四周雙邊、有界、毎半葉八行、毎行十七字、匡郭内、縱七寸五厘、橫

五寸二分、版心「三略卷上（中・下）丁數」深漂色原表紙を存し、卷末に左の刊語がある

右三略依ニ内大臣家康公命ニ刻梓焉。板
行誤以ニ講直兩部ニ改正者也。
于時慶長五祀集庚子孟夏吉辰
前畫山元佶叟於伏見城下書焉

右の三略と共時の刊行たる六韜は、田村專一郎氏所藏の完本（一冊）を知るのみである

足利學校遺蹟圖書館藏本（下卷缺）は前半三卷を存するのみであるが、刊行者三要の前住

地たる由緒ある學校に寄せられたものである　完本の卷末には左の刊語がある

當時　內府家康公當學文與仁務武立義故以刊字數十萬賜予卽仰其厚恩開ニ六韜ニ巳

以講直兩部正文字訛謬也予案ニ六韜是非治周家季世樞機也以之計之ニ文武備書也吾

公卜此書治世不忘亂ニ亦宜哉慶長五年庚子初夏吉辰ニ前畫山元佶叟於伏見城下書焉

この年關ケ原の役が起り、家康も多事であつたが、慶長七年には江戶の富士見亭に文庫

を建て、其の間諸種の講書を聽問する事等もあつた　慶長八年には征夷大將軍の宣下

を蒙り、其の聲望は愈々加はつた　越えて九年に至つて、三度六韜の開版が行はれた

三略も共に行はれたものと推定されるが、其の傳本に接しないから、未詳である　慶長

九年刊伏見版六韜は、高木文庫と東洋文庫とに各一本を傳へるのみである。　高木文庫

藏本は、（…）版式等凡て先行諸本と同一（四周單邊、有界、每半葉八行、每行十七字。匡郭內縱七寸一分五厘、橫五寸一分五厘。）

慶長五年刊六韜ノ存在

慶長九年刊六韜

高木文庫藏本

砥粉色表紙「六籍」の書外題共に原の儘で、卷末に左の刊語がある。

當時　征夷大將軍家康公常學文興仁、務武立義。故以刊字數十萬賜。予即仰其厚恩開六籍、已以講直兩部正文字訛謬也。予案六籍、是非治周家季世樞機也。以之計之文武備書也、我公本此書治世不忘亂亦宜哉

慶長九年甲辰仲冬吉辰　前龍山元佶叟於伏見城下書焉。

慊堂日暦の記載

この書は遠州掛川藩太田侯の舊藏に係り、其の侍儒松崎慊堂自筆の箱書があり、文政九年九月五日、慊堂が西遊せんとするに當つて執筆したものである（慊堂日暦（靜嘉堂文庫自筆稿本藏）にも箱書所載）。

東洋文庫藏本

東洋文庫藏本は二冊に仕立てある（この書、同文庫にも所藏せり）。

慶長十年刊周易

翌十年には周易六卷三冊を印行した。版式等先行諸刻本と等しく（四周雙邊、有界、每半葉八行、行十七字。注雙行。匡郭内、縱七寸五分、橫五寸一分五厘。版心「周易卷數丁數」。）卷末に左の如き承兌の刊語がある。

古今學儒書者排斥佛經、學佛經者排斥儒書、是世之常、而共不辨眞理也。釋尊生中國設教、則如周孔、周孔生西天設教、則如釋尊。儒釋元來不涉二途、如鳥雙翼、似車兩輪也。如閑室大禪師者、壯歲入東關、讀四書六經而品論之、講説之、既稱學校者、有年于茲。暮齡到洛陽、傳中峯法要、位登門極品、衆曰、儒釋兼幷也。頃蒙大將軍源家康公鈞命、印行周易。其志要弘聖道於萬年、能校正舛差、而加陸德明音義於王輔嗣注、集而大成者乎。古德曰、鷲嶺拈華伏羲初畫、少林面壁文王重爻。然則於禪門亦不可不究盡易道。予於禪師其情如骨肉。因需跋其後、不獲堅辭、漫書焉也。

慶長十年星集乙巳孟夏初五日　鹿苑西笑叟承兌

伏見版周易の傳本

慶長日件錄に據れば、右の周易は同年九月廿四日に後陽成天皇の天覽を賜はつたのである。（前記參照。）

傳本の管見に入るもの、圖書寮尊藏本（三冊、改裝、美本）・帝國圖書館藏本（合二冊、改裝、市野迷庵舊藏、屋代弘賢の藏本もて跋一葉補鈔せり。）・内閣文庫藏本（林氏舊藏）・東洋文庫藏本（三冊）・成簣堂文庫藏本（二冊、島田氏舊藏）・大阪府立圖書館藏本（三冊、第一冊第一葉缺、商善院舊藏。）・久原文庫藏本（原題簽存す。）・高木文庫藏本（三冊、卷末跋文のみ補配せり。）・京都帝大藏本（清家舊藏一冊）等がある。

第二六圖

周易の古活字印本

なほ周易王注には、伏見版の他、同じく慶長十年刊古活字印本、即ち卷末に「關東下總住正運刊焉」の刊記並びに潤轍子祖博の跋を有する一本（十卷、五冊）（本書附篇刊記集參照。東北帝大圖書館（山科宗舊藏原裝本）・陽明文庫・成簣堂文庫・靜嘉堂文庫（二本）・東洋文庫等藏）と、無刊記無跋の古活字印本十卷、五冊（靜嘉堂文庫・東洋文庫（一本）・蓬左文庫・成簣堂文庫・圖書寮尊藏・久原文庫（二本）・陽明文庫等藏。）との兩本がある。殊に前者は、正運等の工匠を通じて伏見版と密接なる關係を有する開版であつたと思はれる。

慶長十一年刊七書

翌慶長十一年には、家康は七書二十四卷（第一冊孫子・吳子、第二冊司馬法・尉繚子、第三冊六韜、第四冊三略・太宗問。）を出版せしめた。（四周雙邊、有界、每半葉八行、每行十七字。匡郭内、縱七寸五厘、橫五寸一分五厘。）

卷末に左の刊語がある

承兌跋文

夫兵書古今雖レ多、諸家說凡以二七書一爲二樞機一、孫子以二兵書一見二於闔廬一、闔廬知二孫子能用一レ兵爲レ將、彼豈唯是孫子力也、吳起學二書於魯子一、事二魯君一、後事二魏文侯一、擊レ秦拔二五城一、所三以吳起爲レ將

也。穰苴齊景公時。文能附衆、武能威敵。景公聞爲將。尉繚以天官時日決勝而已。三略老人授子房書也。是漢代平均其乎。太公以文武龍虎豹犬傳於文王、與起周代八百餘歲者乎。太宗問李靖、對曰、先仁義後權譎、可謂文武兼並也。前　大將軍家康公以文安人、以武威衆、天下萬臣歲歸服。雖周漢不能過。忽隨　公釣命、記七書於梓、以講直正之畢矣。予爲令知太平於後人、跋其後也。

慶長十一年龍集丙午初秋念又一　紫陽閑室元佶叟書焉

七書重印の事

但し、この七書には、同種活字を以て殆ど同時に再度の印行が行はれた。即ち、異植版兩種の傳本に據って之を知り得るのである。（一）は東洋文庫藏（一橋家舊藏、三冊）・高木文庫藏（[illegible]山[illegible]知尊藏、三冊）・安田文庫藏（富岡舊藏、六韜、[illegible]共六冊）・（二）は、安田文庫藏（[illegible]三略[illegible]一帙、[illegible]を[illegible]せる一本なり）の諸本である（七書には伏見[illegible]慶長十一年至[illegible]二十年[illegible]の刊行もあり）。以上の伏見版諸書は盡く漢籍の飜刻であって、其の版式は凡て同一である。茲に書目を纏めて表示すると左の如くである。其の刊行が推定せられて、現存書に接しないものは括弧を加へた。

伏見版漢籍書目

孔子家語	六卷（附素王事紀一卷）	四冊	慶長四年刊	三要跋
（三略）	三卷	一冊	慶長四年刊	三要跋
六韜	六卷	二冊	慶長四年刊	三要跋
貞觀政要	十卷	八冊	慶長五年刊	承兌跋

三　略　三卷　一冊　慶長五年刊　三要跋
六　韜　六卷　二冊　慶長五年刊　三要跋
（三　略）　三卷　一冊　慶長九年刊　三要跋
六　韜　六卷　二冊　慶長九年刊　三要跋
周　易　六卷　三冊　慶長十年刊　承兌跋
七　書　二十四卷　四冊　慶長十一年刊　三要跋

これ等の印行に際し、專ら其の事を監したのは、前述の如く三要元佶であつて、時に承兌が其の跋文等を援けてゐる。然し、實際に印行の實務に從つたのは、孔子家語貞觀政要等に「刊之」とある如く「慈眼久德」等であつた。慈眼久德の傳は詳かにし得ないが、やはり僧籍にあつたものであらう。

慈眼久德

因みに、「刊之」の意味に關し、在來諸種の論もあるが、之はやはり實務に關與した意（諸書節藤）に解す可きものであらうと思ふ。

「刊之」の意味

以上諸書の他、なほ伏見版として、慶長十年に東鑑が上梓せられたが、本書のみは、書籍の性質上、假名字體を交じへ、全く別種の活字を以て印刷せられてゐる。東鑑は家康の最も愛好した史書で、彼の治政は是に基く所が多大であつたと言ふも過言ではない。然しながら、在來伏見版と稱されてゐる東鑑に就いては頗る疑問があつて、却つて坊刻

慶長十年刊伏見版東鑑

と考へられてゐた所謂富春堂刊本なるものが、眞の伏見版として認めらる可きものである。

東鑑古活字印本の三種

現存の東鑑の古活字印本には左の三種がある。

其の一

其の(一)は、(四周單邊、有界、十行二十字、匡郭内、縦七寸五分、横五寸七分五厘。版心「東鑑卷數」丁數」。)間々片假名・平假名を交じへ、其の版式の古拙なるは、本書が活字印本發達の極初期に現れたものなるを明示してゐる。卷首目錄(七葉)の末に、「富春堂新刊」の刊記があり、卷末に左の如き承兌の跋文一葉(整版)を附載してある。(訓點假に附す)

第二七圖

夫人之處世也、言行之善不善不可不記焉。得一善記之則百世善其人、得一惡記之則百世惡其人。言行寔君子樞機也。可不愼乎。左氏記春秋而作万代龜鑑、得良史名者難矣哉。東鑑一書者自治承四年至文永三年八十七歳之間、傍羅曲探以大抵記之。不知記者名。爲遺憾久歷年代其名湮滅耶深隱山林其名埋沒耶抑又謙退以不著名耶。見此書則言行之美惡如指掌也。吾大將軍源家康公治世之暇翫弄此書、見善思齊焉、見不善内自省也。凡人主所趨向天下隨之。如風草形影也。以東鑑名之者、非無所由。殷以夏爲鑑、周以殷爲鑑。詩曰、殷鑑不遠在夏后世。今也刻梓以壽其傳、後世能見此書、辨別淄澠則非啻東州明鑑、豈不修四方鑑戒乎。書之以爲跋。

慶長十稔星集己巳春三月　日

前龍山見鹿苑承兌叟書

其の二

其の(二)は無界なるの他、配字等は全く同一であるが、（四周雙邊、無界、毎半葉十二行、毎行二十字。匡郭內、縱七寸四分五厘、橫五寸八分。）其の活字の筆畫ご版式の整備ごより、慶長末年か、或は少しく降つて元和初年の開雕ご推定せられる。卷末に前記其の一ご同じく承兌の跋文を其の儘襲用してゐる。傳本が罕で、管見に入るものは帝國圖書館藏本（榊原芳埜舊藏。原題簽附、原裝。二十五冊）ご安田文庫藏本（尊經閣文庫舊藏。原題簽附原裝。二十五冊）東大寺佛教圖書館藏本（二十冊、虫損甚し。）京都帝國大學藏本（第一冊缺）及び高木文庫藏（卷末一冊）ごである。

其の三

其の(三)は、前本の飜印本であつて、配字等も全く同一、寛永中の印刷ご認められる。承兌跋文の附載はない。內閣文庫・久原文庫等に各一本を藏する。

伏見版東鑑刊行當事者五十川了庵

すでに版式上より慶長前半期の版式を備へてゐる東鑑を富春堂刊本のみごし、現存諸本中に伏見版を求めるごすれば、之に附載せられてゐる承兌の跋文を疑ふ必要はないわけであるが、茲に更に富春堂刊本が眞の伏見版東鑑なる有力なる資料が存する。卽ち、德川實紀に據れば、伏見版東鑑の刊行當事者は五十川了庵である。然らば、版式上、慶長十年刊伏見版ご認む可き刊本に存する「富春堂」なる名稱は五十川了庵の別號ではなからうかご考へられるのである。

德川實紀附錄卷二十二の記載

德川實紀附錄卷二十二には、伏見版東鑑の刊行に就いて左の如く記るされてゐる

五十川了庵は、名は春昌、一には宗知といひ、又春意とあらたむ。慶長七年了庵私に太平記を梓行して、世上にひろめしこと聞しめして、御文庫の東鑑をかし給ひ雕刻せしむ。この東鑑は小田原の北

條が藏本なりしを、小田原の戰ありし時、黑田孝高入道如水城内に御使せし時、氏政これをねぎらひ引出物にせしを、如水より獻ぜしなり。いと罕覯の書にして、原本今なを楓山御文庫に現存せり。

（了庵碑銘、鵞峯文集）　靜嘉堂文庫に成島司直の自筆稿本を傳ふるも、該部分を缺けるを以て、新訂國史大系本に據る。

鵞峯林學士文集所載老醫五十川了庵春意碑銘

右の記載は、鵞峯林學士文集卷第六十七の老醫五十川了庵春意碑銘に據つたものであるが、更に其の碑銘に從へば、五十川了庵は、天正七年十月二十五日京洛四條坊門に生れ、寬文元年正月二十九日京洛に病歿した。壽八十九。其の先は近江佐々木氏より出で、江州五十川邑を以て、氏と爲し、祖父淨鑑以來、京洛に移り住んだ。父を了任と言ふ。母は津田氏、了庵は其の第三子である。諱は春昌、一の名は宗知、後に春意と改めた。七歲にして父を失つて醫道に入り、後家康に愛重せられ、其の子、忠輝に侍した。早くより林羅山と交遊渥く、羅山が惺窩を見んと欲して吉田素庵と簡牘を通じた時も、了庵は之が介となつた。家康より東鑑の刊行を命ぜられた事に關して林鵞峯は左の如く記るしてある。

「上略」慶長六年了庵從細川興元赴豐州小倉、羅山作詩餞行、數月而旋洛、明年壬寅了庵初刻太平記於梓、便於世俗、事聞於幕府、癸卯東照大神君使了庵繡梓東鑑、而許鏤官本、歷年功成、以獻之「下略」

右の記載に據つて五十川了庵が伏見版東鑑の刊行當事者である事、並びに慶長七年に

初めて太平記を上刻し、同八年より東鑑の刊行に着手し、年を歷て慶長十年に功終し、之を三要等の手になつた伏見版と同じく取扱はれた事等が明かとなつて、茲に、同じく了庵の刊行した慶長七年刊太平記と伏見版東鑑との密接なる關係が問題となつて來るのである。

富春堂刊本太平記と伏見版東鑑

刊行年代の明確なる太平記最古の刻本は、慶長八年富春堂刊行の古活字印本で、（四周單邊、無界、每半葉十二行、片假名交り。匡郭内縱七寸二分、横五寸五分五厘。版心「太平記卷（數）」「丁數」。）卷末に、

第二一圖

慶長癸卯季春既望　富春堂　新刊

の刊記がある。（東洋文庫藏（四十册）・安田文庫藏（原裝二十册。卷十九・二十、一册無刊記古活字印本補配。）杉浦三郎兵衞氏卷三十九・四十の一册零本藏。香川縣坂出町立圖書館藏の四本あり。）

富春堂刊本太平記の刊記

第二二圖

然るに右の刻本と同種の古拙なる活字を用ひて印刷せられた一本がある（四周單邊、無界、每半葉十二行、片假名交り、匡郭内、縱七寸五分、横五寸四分。富春堂文庫に收藏の一本を傳ふるのみ。）但し、序文一葉のみ活字を異にし、九行十七字、慶長四年如庵宗乾刊元亨釋書、同九年刊徒然草（壽命院）抄等と同一の大型活字を用ひてゐる。其の版式に統一を缺いた點と、慶長八年刊本に比して活字磨滅度の極少なる點とに見ても、本書は慶長八年季春以前の刊行に係る事が明らかである。之が版式上より慶長八年季春以前の刊行とすれば、了庵の碑銘に言ふ、慶長七年（壬寅）に初めて上梓された刻本に相當するものなる事は疑ひないと思ふ。又、當時の名醫たる壽命院秦宗巴の刊行書が同一の印刷機關に據つてゐる事も、富春堂の印行が醫師關係のものなる事を暗示

してゐる。而して、富春堂刊本東鑑と富春堂刊本太平記兩本に使用せられてゐる活字は全く同種であつて、其の兩者の開版が同一の關係者に據つて行はれたものなる事は極めて明確である。

乃ち、慶長前半期に於ける同一關係者に據る太平記と東鑑との刻本を現存傳本中に求めるならば、富春堂所刊の兩書以外に之を發見する事は不可能である。茲に於いて、五十川了庵所刻の太平記と東鑑とは、卽ち富春堂刊本なる事が現存の傳本と文獻とに據つて證せられるのである。換言すれば、現存の太平記刻本の傳本と了庵の碑銘とより、了庵は慶長七年に初めて太平記を刻し、再び明年之を新刊して世俗に便し、其れが幕府に聞えて家康が之に東鑑の印行を命じた事となるのである。

家康が東鑑を開版せんとするに當つて、三要の主催する伏見版の出版は、未だ假名字體の活字を使用する事が無かつたから、當時早くも再度太平記を開版して、假名活字を交じへた印刷に相當の經驗と準備とを有する五十川了庵に命じたものであらうと思ふ。

「富春堂」は了庵の別號歟

結局、伏見版東鑑の刊行當事者は五十川了庵であつて、了庵は其れより以前、既に慶長七・八年の兩度に活字印刷を行ひ、其の刻本中には「富春堂」なる號を用ひてゐた事が明らかにされたと思ふ。唯若干遺憾な點は「富春堂」が五十川了庵の別號である事の積極的な證明を行ふ事の出來ない事である。けれども了庵の諱は春昌であり、後に改めたのも

春意である。富春の之に對する密接なる關係を推測せざるを得ないのである。

伏見版東鑑開版所要年時

なほ東鑑の開版着手が慶長八年であつた事は、了庵の碑銘に據つて知られるが、其の完成は、承兌の跋文に記るされてゐる年時慶長十年三月を去る遠からぬ頃であらう。　慶長日件錄の記事に據れば、（前記二〇三頁參照）之が五月中旬以前に限定せられる

伏見版東鑑の傳本

第二七圖

伏見版東鑑の傳本は比較的多數存在し、(1)圖書寮尊藏本（五十一冊。）(2)東京文理科大學藏本*（原裝、卷首附訓書入あり。）(3)東洋文庫藏本（「米澤藏書」印記あり。原裝二十五冊。）(4)成簣堂文庫藏本（「御本」印記（尾州家舊藏）あり。原裝五十一冊。）(5)高木文庫藏本（代葉義之舊藏、補修本二十五冊。）(6)安田文庫藏（西莊文庫舊藏、有鈌本。）(7)久原文庫藏本（原裝、原題簽附五十一冊。）(8)大島雅太郎氏藏本（改裝、美本五十一冊。）(9)九州帝國大學藏本（原裝、五十一冊、卷四五鈌。）等の諸本がある

在來の伏見版東鑑研究の不備矛盾

以上に據つて富春堂刊本東鑑が眞正なる伏見版東鑑である事が證せられたが、古刻本の自由なる比較研究の不可能であつた先人は、「富春堂新刊」の刊記の性質を究める事なく、單に之を坊刻の刊記と定め、唯、慶長十年の承兌跋文の襲用附載ある後刻の古活字印本を目して、直ちに之を伏見版と斷じたのである。　近藤正齋が右文故事慶長御版本中に其の說（此書世ニ刊布スルモノ御板本ノ外ニ又活板本アリ目錄ノ末ニ富春堂新刊トアリ整板二本アリ（云々））を述べて以來、之を祖述するのみで、自ら實物調査を怠つてゐることの方面の記錄文獻が、この誤謬に對し、何等の注意をもなし得なかつたのは當然である。　且つ又近來伏見版東鑑に說き及ぶものは、先人が伏見版と誤認した後印古活字印本に接する機會さへも殆ど罕で、誤認ながらも伏見版に

充當す可き刊本を持たなかつたが爲に、一方には先人に盲從して、「富春堂刊本」を坊刻と認めながら、他方に、或は「富春堂新刋」の刊記を看過して、之を伏見版に擬し、或は又、「富春堂新刋」の刊記を截去僞作したものを以て、伏見版とするの矛盾を敢て行つてゐたのである。

後世に殘存する伏見版木活字

伏見版の印行に用ひた木活字は、慶長中に、萬葉集無訓本印行の一部分に襲用された事もある樣であるが、(後出參照)圓光寺に殘存して、江戸末期に皆川淇園が之を利用し、若干の新

皆川淇園の圓光寺活字本

雕を加へて、兩三種の擺本を出版してゐる。其の管見に入つたものは、淇園文集十二(卷、後卷、十五冊文化十三年刊)・遷史戾柁(三卷三冊)・世說啓微(二卷、一冊)(文化乙亥(十二年)圓光寺道隱跋あり)等がある。

圓光寺現存の伏見版所用の木活字

終りに圓光寺に現存してゐる伏見版活字に就いて附言する。

圓光寺は瑞巖山と號し、現に京都府愛宕郡一乘寺村にあるが、もと慶長六年伏見に建立せられた。慶長十七年五月二十日に三要は遷化したが、其の後一時相國寺中へ移り、寬文七年に更に現在の地に轉じたのである。明治以來一時荒廢に歸し、保管せられてゐた伏見版の木活字等も甚しく散佚してしまつたが、なほ同寺の土藏内に九十餘箱が殘存してゐる。大部分は注雙行に植版した小型活字である。大型の活字には、底部がM字型に切込んであるものと平面のもの(高さ約六分五厘)とあり、M字型のものの方が高さが五厘强低く、磨滅度も多くて最初に雕刻したものと認められる。底部の廣さは兩

者同一で横五分五厘、縦四分である（圖版卷末參照）

又、皆川淇園が江戸末期に之を襲用して諸書を印行する際、不足の文字を新雕したものが混在してゐるが、是は用材が新しいから一見識別される

三　駿河版の刊行

駿河版の刊行

家康は老來愈々學問を愛好し、慶長十二年駿府退棲の後は、主として講書又は古典籍の蒐集に留意し、數年間はこの方面に力を注いだが、晩年再び開版事業を起し、駿河に於いて銅活字を以て、大藏一覽集と群書治要との兩書を印行した。この駿河版の開版に就いては林道春と金地院崇傳とが專ら事を督し、其の刊行の顚末は、近藤正齋が早く紹介した如く、崇傳の本光國師日記に詳かである（本節附本光國師日記抄參照）。

駿河版に用ゐた銅活字の性質

この駿河版刊行に使用した銅活字の性質に就いては明らかではないが、群書治要印行の際、活字補鑄の爲、三要が京洛にて、鑄字の際切り取つた後漢書の文字の殘餘の引渡しを求めてゐる點等より見て、恐らく慶長十一年に家康が三要等に命じて新鑄せしめ、後陽成天皇に奉獻した銅活字と同時に鑄造を行つた同種の活字ではあるまいかと思はれる。但し其れが獻上の銅活字數九萬餘箇と本光國師日記に言ふ銅字八萬九千餘との大數が合する點より、其の不足は時日の經過と場所の異同等に據つて減變したものと考へて、一旦獻上した銅活

字を後に御貸下げになつたものではなからうかとの推定も出來るのである。何れにしても其の銅活字は駿河版印行の直前に初めて用意したものではなく、唯其の補鑄だけを鮮人林五官等が行つたものである。（本光國師日記）なほ後に紀州家に傳はつたこの活字が、同家では、加藤清正が朝鮮から將來したものと傳へ、清正の二女が賴將に嫁した際に持參したものであると稱してゐるのは、單なる傳説に過ぎないと思ふ。恐らく三要等が鑄造を行つたと認む可きこの駿河版所用の銅活字は、三要が鑄造の際、舟橋秀賢を通じて禁中の高麗銅字（朝鮮之役將來の獻上品ならん）を拜借して標準としてゐるのに據つても、家康の手許には彼の地のものはなかつたものと言ふ可く、卽ち、駿河版所用の活字は我が國新鑄のもののみであつたと思はれるのである。

大藏一覽集の刊行

駿府記に據れば、大藏一覽集刊行の直接動機は慶長十九年八月六日、金地院崇傳の大藏一覽集進獻に始る。家康は之を重寶の書なりとして百部か二百部開版す可しと命じた。乃ち、林道春を其の督事として、翌慶長二十年春より印行に着手した。本光國師日記に據れば、慶長二十年三月二十二日附書狀を家康の旨として興津の清見寺等へ造り、大藏一覽集板行の爲に物書衆の來援を求めてゐる。（清見寺舊藏の大藏一覽集成簣堂文庫に現存せるは興味深し）板行の實務は其の前日三月二十一日より駿府城內に始り、

刊行の顛末

（本光國師日記・駿府記）十八人の工匠が之に從事してゐる。其の中、壽閑台林以下凡て九名は同日記

の扶持方の書類に見えてゐる。中途、植版の底本の文字が消えて見えないと言ふ理由で、卷五の一冊を東福寺の不二庵に急使を以て借用を依頼し、其の借覽本は六月八日に返却してゐる。本書の刊行中、大阪の夏陣が起つた爲、崇傳等は六月晦日、新板出來の大藏一覽十部を京都二條城に持參した。この大藏一覽集（四周雙邊、有界、毎半葉八行、毎行十七字。匡郭內、縱六寸九分、橫五寸一分。[illegible]大藏一覽卷數丁數。[illegible]心の文字大藏一覽は細長き連續活字なり。[illegible]て厚き白紙を用ふ。藍色の表紙を附し、題簽は存せず。二十冊。）は家康より諸寺に與へ、家康の朱印記（[illegible]參照）を捺した傳本も殘存してゐるが（叡山文庫藏）百二十五部摺刷した中、其の半數程はなは後に紀州家に歸した樣である。

大藏一覽集の刊本

諸庫に傳本の存するもの、圖書寮尊藏（四本）・叡山文庫藏（家康納印あり。）・京都帝國大學圖書館藏（元和元年[illegible]識語あり。）・東洋文庫藏・蓬左文庫（二本）（駿河御讓本。共に御本印記あり）・彰考館文庫（十一冊。駿河御讓本。）・成簣堂文庫藏（二本）（一は[illegible]、一は寺[illegible]藏）・安田文庫藏・高木文庫藏・阿波國文庫（存忍文庫舊藏、卷末一葉補寫）等の諸本がある。なほ大藏一覽集には先行本に應永十年刊の五山版（成簣堂文庫藏）があるが、この駿河版を基にして後年活字印行したと認められる一本もある。（四周雙邊、有界、毎半葉九行、毎行十九字。十一冊。成簣堂文庫に一本[illegible]）（一冊缺、補寫。東洋文庫一本藏）

群書治要の刊行

大藏一覽集に次いで、翌元和二年正月十九日に至り、更に大規模なる群書治要（五十卷の內、卷四・十三・二十缺）の印（[illegible]四周雙邊、有界、毎半葉八行、毎行十七字、注雙行。匡郭內、縱六寸九分、橫五寸[illegible]。[illegible]色表紙に、題簽[illegible]く、[illegible]に冊數を[illegible]す[illegible]の小紙片を貼附す。）行を同じく崇傳・道春の兩名に命じた。兩人は豫め凡ての計畫を定め、工匠の周旋を在

京都の板倉勝重に依賴し、校正には五山の僧侶を動員し、かくて大藏一覽所用の活字印刷器具に補充を加へ、二月二十三日には事業上の嚴しき掟てを定め、城内三之丸に於いて仕事を行つた。五月末には終功したが、其の間、四月十七日に家康は其の最後の開版事業の完成を見ずして薨じた。其の刊行事情は凡て本光國師日記に詳かである。

駿河版群書治要の底本

本書飜字の底本には、金澤文庫所藏の清原敎隆鈔本（現圖書寮藏）を新たに轉寫して用ひ、其の轉寫本は慶長十九年十月三日に崇傳より道春の手を通じて家康の手許に上つてゐるが本書を原本に比するこ誤植が著しく注意せられる。駿河版刊行に際しては、特に校正に意を用ひた事は、本光國師日記に據つて明らかであるから、かゝる不備を惹起したのは、家康の薨去に遭つて其の完成を急いだが爲であらうこ思ふ。

駿河版の處分

家康の薨去後、大藏一覽集の殘部、新刊の群書治要並びに銅活字一切は城内に納められてゐたが、元和五年八月賴宣が紀州に轉封を命せられた際に若山（和歌山）に持ち去られた。家康の薨去に據つて、秀忠の手より後水尾天皇に群書治要を奉獻したこ言はれてゐる（天明五年尾州藩刊本著者所藏書引とこ）元祿三年には紀州家二代の光貞が、之を豐宮崎文庫に奉納した。其の奉納の次第を卷末に墨書識語した一本は神宮文庫に殘存してゐる。

群書治要の後刊本

群書治要には、天明年中に尾張藩で翻刻を行つたもの（二五冊、天明五年細井德民著例言、同七年林信敬序）こ、弘化年間

現存の駿河版所要銅活字

に紀州藩で、駿河版の銅活字を襲用し、之に木活字の補雕を加へて印行した活字印本十二五冊。山本元恒序。駿河版と最も簡明に識別せらるゝ點は版心の意匠の簡略なるにあり。とがある。又、其の銅活字の一部は紀州徳川家に二十三箱に収められて殘存してゐる。舊時の銅活字三萬餘箇、弘化補刻の木活字五千餘箇等である。

駿河版群書治要の諸本

第二十三圖

群書治要は後年まで紀州家にかなり多數殘存してゐた様であるが、文化年間に八十九部ありといふ。(高木氏、好書雜載)管見に入つた諸本は、(1)(2)(3)圖書寮尊藏三本、(4)神宮文庫藏本徳川光貞豊宮崎文庫納本・(5)京都帝國大學圖書館藏本・(6)東洋文庫藏本・(7)(8)成簣堂文庫藏二本・(9)安田文庫藏本*・(10)高木文庫藏本・(11)葵文庫藏本・(12)靜嘉堂文庫藏本勝海舟より中村敬宇に贈りたるもの・(13)内藤虎次郎博士藏本・(14)谷村一太郎氏藏本・(15)蓬左文庫藏本明治以後に至り紀州家より贈りしもの・(16)久原文庫藏本・(17)帝國圖書館藏本である。

駿河版工匠の歸洛

なほ茲に附言す可きは、京洛より招かれて、駿河に於いて開版に從ひ、家康より扶持を受けた工匠等が、後再び歸洛して印刷事業に努め、其の發達に資する事の特に大であつた事である。

後年に於ける謠抄・台林・半右衛門・二兵衛等の活字開版

駿府に於ける校合受持の壽閑が元和三年に元亨釋書古活字印本を、字ほり受持の台林が謠抄(古活字印本)安田文庫京都帝大等藏・元和三・四年法華三大部科解(宗存版)を、同じく半右衛門が寛永四年に天台三大部補註(古活字印本)を、受持の二兵衛が元和四年城西聯句元和七年刊三千句寛永元年古文尚書抄・同四年職原私抄等を活字開版してゐるのは其の一端である。

第四節　豐臣秀頼の開版事業

豐臣秀頼の好學

豐臣秀頼は年少より清原秀賢等を師として、或は之を大阪へ招いて經籍の講義を開き、（慶長十年十月八日至十日、秀賢大阪にて孟子を講ず。）（慶長日件錄）或は據る可き書籍を求める等、（慶長九年三月四日、片桐市正を通じ、秀賢に職原抄の外題を求む。（慶長日件錄）同九年四月十一日藤內を通じ、秀賢に三略を進上す。）大いに修學につとめ、著しく好學の風があつた。開版事業も其の現れの一面に相違ないが、是が動機はまた家康に負ふ所が少くないと思ふ。

「秀頼版」

「秀頼版」とも稱す可きものは慶長十一年刊行の帝鑑圖說（六卷、六冊、明張居正呂調陽撰）一部であるが、秀頼の刊行としては最も相應しいものである。其の活字も精美なる樣式を有し、且つ豐富なる挿畫刻本である事も、挿畫刻本發達の極初期に於ける開版として特殊な意義を併せ持つものと言ふ可きである。

帝鑑圖說

卷末に左の如き慶長十一年承兌の跋文がある。（四周雙邊、有界、每半葉九行、每行十九字。匡郭內、縱七寸二分、橫四寸六分。四冊。前集後集に分ち、前集卷首に萬曆癸酉仲春吉日陸樹聲敍、進圖疏、聖哲芳規の四字を一字一葉草書體に刻書、目錄等を附し、唐堯帝の任賢圖治以下、宋の哲宗までを錄し、其の紙數、圖說各項目每に一葉挿入、通算二百十四葉、四冊。後集も卷首に「狂愚覆轍」の四字を前集と同じく、次に目三葉、夏太康・桀王以下宋の徽宗に及ぶ。即ち後集は惡しきためしを擧ぐる可く、其の紙數圖說共九十八葉、別に王希旦の後序三葉と慶長十一年秀頼刊行に關する承兌の刊語二葉附載あり。跋は本文より一字低く、讀、心[illegible]丁數）。（其の底本となりたる種の明版、彰考館文庫（本或は駿河御讓本なる可し。）に一本を藏す。）

夫帝鑑圖說者、元輔少師張居正以經史浩博而難研究、略其大、撮其要編輯焉、而獻

大明皇帝、自隆慶六年及今歷三十五星霜也。聚賢事蹟八十一事、用九九陽數、愚蒙惡行三十六事、用六六陰數、各因畫圖系其說於後、爲令幼主易識見也。其輔佐之志、良臣之忠、不謂而可知矣。雖爲帝者一身有善行、則稱諸賢君、有惡行、則以爲暗君。凡人之在一世也、始者善而後不善者多焉、可不謹愼乎。克始克終者、固難矣哉。頃右相府秀賴公及見此書、手之口之、寅夕無不披覽也、仍命工刻于梓、而壽其傳於無窮也。孔夫子日規其所以、觀其所由、察其所安、人焉廋乎、人焉廋乎、今也右相府其所由、其所安、見善思及其行、見不善思改其行、善言惡行共作鑑戒也。妙年未及志學、而有老成人之風、規者罕見其比、以此書名帝鑑者、本于唐太宗以古爲鑑、知興替之義、聖哲之君、佞邪之主、以一百餘之條目、知千百世之治亂興敗者、寔非萬代之龜鑑乎也

慶長拾壹稔星集丙午春三月　日

豐光老衲承兌

帝室圖書寮の傳本（第十一・二冊）

本書の傳本の明かなものは、(1)内閣文庫藏本（昔玄同舊藏慶長十五年識語あり。後、新宮城書藏）(2)東洋文庫藏本(3)臺北帝國大學藏本(4)安田文庫藏本*（西洞院家舊藏、後集補配）(5)陽明文庫藏本の五本であるが、この他に卷末の承兌跋文二葉のみを缺く傳本は比較的多い。或は、跋文の性質上後に德川家を

憚つて取り去つたものではなからうかとも考へられるのである。其の種の無跋本には、(1)内閣文庫藏本（林讀耕齋手澤本）(2)帝國圖書館藏本（足利學校舊藏、各冊末に慶長十八年寄進識語あり）(3)東京帝國大學圖書館藏本（南葵文庫舊藏）(4)大阪府立圖書館藏本(5)米澤圖書館藏本(6)東洋文庫藏本（大久保忠寄舊藏、合三冊）(7)安田文庫藏本（原裝原題簽附）(8)成簣堂文庫藏本（原裝原題簽附）(9)蓬左文庫藏本（零本）(10)陽明文庫藏本(11)國分青崖氏藏本（卷六缺冊なるを以て茲に加ふ）(12)久原文庫藏本(13)神田喜一郎氏藏本(14)東北帝國大學圖書館藏本等の諸本がある。

直江兼續の文選印行

なほ當時に於ける武家方の活字開版としては、直江兼續の文選の印行が在來最も著明なるものであるが、他には餘り知られてゐるものはない樣である。所謂直江版文選（慶長十二年要法寺內開版）に就いては後章（要法寺の開版の條）に詳述する事とする。

附　本光國師日記（抄）

（イ）大藏一覽之部

（慶長十九年十一月晦日ニ兵衛江戶ゟ上ル。（下略））

大藏一覽關係記事

一　大藏一覽之板行被仰付候付而、物書衆六七人入申由候、貴寺臨濟寺へ可申旨御意候、臨濟寺ニハ折書無人ニ而濟一人可被出由候、貴寺衆僧中、五六人可被成御越候、則從今日奉待候、爲其由申入候、恐惶謹言、

慶長二十年三月

三月廿二日　　金　地　院

拜呈

清見寺

侍衣閣下

猶々御本城西之丸へ可被指越候、以上、

請取申御扶持方之事

一合壹石八斗者

右是ハ大蔵一覧はんぎの衆、上下十八人、三月廿一日より、同晦日迄之御扶持方也、但毎日壹斗八升つゝ、

以上、

慶長廿卯

三月廿六日

校合 壽閑在判

字不り 台林在判

同 半右衛門在判

うへて 二兵衛在判

同 五兵衛在判

同 理兵衛在判

すりて 清兵衛在判

同 與七在判

字木切 喜左衛門在判

道春

金地院印丸

畔柳壽學様参

うらかき
如右之面無相違八木御渡し可被成候、以上、

慶長廿

三月廿六日

吽壽學老

先刻得貴意忝存候然者板木者共之御扶持方之手形進候間、御裏判被遊、可被遣候、各忝可存候さなく候へは、ともまわり不申候、此等之者共も勇不申候間、乍御六ケ敷被遊候而、尤存候、猶以參上可申上候、恐惶謹言、

三月廿六日　　道春在判

金地院様　人々御中

右之手形之裏書、金地院加判候様ニと、道春さま〲被申候、不入儀と斟酌申候へ共、手形うらかきまて、相調、右之趣被越候間、及異議候へは、如何ニ候條、印押遣候、道春状は札をつけ、目安箱ニ入置也、

一　態以次飛脚申入候、此書状東福寺之藤長老へ、早々被遣、物之本壹冊可參候間又次飛脚ニ而、可被成御下候、是は今度當地にて、大藏一覽板被仰付候ニ付而、此方に有之本、一冊字共消候而、見え不申候故、取ニ遣候、爲御心得申入候、次ニ廿八日にも、次飛脚を以申入候先日之御本之長持、于今參著不申候、早々可被御下候、恐惶謹言、

三月晦日　　金地院

板伊州様　人々御中

一　急度令啓達候、大藏一覽貴菴ニ有之由、返答被申候、左樣ニ候者、五之卷壹冊可有御下候、於當地板被仰付候、此方之本五之卷、字共亂脫候故、爲校合申入候、萬一貴菴ニ無之候者、五岳中御才覺候而、可被成御下候、公儀御用ニ候間、御油斷有間敷候、爲其伊賀殿迄、次飛脚に而申越候、恐惶謹言、

三月晦日　　金地院

拜呈　不二文室　侍衣閣下

如此状認上野殿へ遣候、次飛脚ニ而京へ遣ス、受閑ニ西之丸ニ而、如此かゝせ候、左ニアリ、即受閑書ヲ、
切紙にして状ニ添て、不二へ遣ス、

大藏一覽集　卷之第五、

自善惡門作至報應品一冊如此

一　請取申御扶持方之事、

合　壹石八斗者、

右是者、大藏一覽はんぎの衆、上下十八人、四月朔日ゟ同十日迄之御扶持方也、但毎日壹斗八升づゝ、仍如件、

慶長廿卯

四月八日

壽　閑在判　台　林在判　半右衛門在判

二兵衛　五兵衛　理兵衛

清兵衛　與七　喜左衛門

畔柳壽學様　参

（うらがき）右之面八木御渡し可被成候、以上、

四月八日　道春

金地院丸印

畔柳壽學老

一　請取申御扶持方之事

合壹石八斗者

右是者、大藏一覽はんぎの衆、上下十八人、四月十一日ゟ同廿日迄之御扶持方也、但毎日壹斗八升つゝ、仍

如件、

慶長廿卯　壽閑在判　台林半右衛門　二兵衛

四月廿日　五兵衛　理兵衛　清兵衛　與七

喜左衛門

畔柳壽學様　參る

うらかき
右之表、八木御渡し可被成候、以上、

四月廿日　道春

金地院　印丸

畔壽學老

一　請取申御扶持方之事

合　壹石八斗者

右是者、大藏一覽はんぎの衆、上下十八人、四月廿一日ゟ晦日迄之御扶持方也、但毎日壹斗八升つゝ、仍如件、

慶長廿卯　壽閑在判　台林半右衛門　二兵衛

四月廿日　五兵衛　理兵衛　清兵衛　與七

喜左衛門

畔柳壽學様　參る

うらかき
右之表八木御渡し可被成候、以上、

四月晦日　　　　　　　　　　　道　　　春

　　　　　　　　　　　　　　　金　地　院印丸

畊壽學老

右道春ゟうらはんつき候様にと、書狀に而申來候間、乍斟酌裏判候而遣候、

一(卯月六日)次飛脚にて伊賀殿四月三日之狀、不二四月二日之返書來、大藏一覽五ノ卷一冊來、

一同日大藏一覽五一冊ニ狀添、是ゟ道春へ遣ス、後庄三へ賴入候不二之狀も道春へ遣ス、

一廿一日、道春十六日之狀、駿府ゟ來、伊賀殿ゟ被屆摺手之事得　上意也、

一廿三日、駿府道春へ狀遣ス、板木之業下候、便宜ニ下、(下略)

一六月八日叢主座駿府ゟ上、道春六月二日之狀來宗翁六月二日之狀來、大藏一覽五之卷一冊歸、則東福寺不二へ返進、其外々への言傳狀共叢首座ゟ被屆也、

(ロ)群書治要之部

群書治要關係記事

一(慶長十九年十月三日)群書治要全五十冊、內第四第十三第十九第廿共四冊不足、箱に入如本　御城へ上ル、右兩部道春へ渡候、奧に而　御前へ上候由也、則書狀來、右道春書狀兩通とりて置、目安箱に有、

元和二年正月

一(正月十九日)急度令啓達候、仍群書治要板行之儀被仰出候、然者役者如此書立被仰付早々可被差下候、爲其以次飛脚申入候、恐惶謹言、

正月十九日　　　　　　　　　　道　　　春

板倉伊賀守殿人々御中　　　　　金　地　院

一、群書治要板行ニ付而役者人數之書立、

二人　木切

三人　彫手
拾人　植手
五人　摺手
三人　校合
以上貳拾三人
右之分被仰付早々可有御下候、以上、
正月十九日　道春在判
金地院崇傳在判

板倉伊賀守様

右之兩通　御城にて相認、板倉内膳殿へ、次飛脚にて御上せ候へと申遣ス

一、二月七日板伊賀殿、正月晦日之状來、板木之者共、以上廿人來由也、

一、今度板木彫可差下由被仰越候、則刊手摺手之者木切以上、貳拾人之分、二月朔日京都を罷立候、然者校合仕者之事、色々相尋候へ共、京都ニ無之由申候、道春能々如存知去年も無之とて不罷下由申候間、不及是非候、随而道春へ申候、此者共罷下候路錢無之ては不成者共之儀候、去年も路錢壹人ニ付銀貳十目つゝ請取之由申候間、只今も如其申付相渡申候、其御心得可被成候、於樣子此者共可申候、猶期後音之時候、恐惶謹言、

正月晦日　板伊賀守

金地院
道春老

尙々此者共罷下儀去年於爰許道春申談指下候、只今も何も如去年申付指下候、以上

此本文道春へ遣ス、

一、態以次飛脚申入候　大御所樣御氣相彌被爲得御快氣候　公方樣當地ニ被成御座御機嫌能御座候、御心安可被思召候、仍群書治要板行之儀最前被仰出候通、諸役者下府之儀被仰付候由、先度御報之旨、得其意存候、其段令言上候、此中者御煩ニ付而、其沙汰無之候處ニ昨六日之御夜詰ニ重而被仰出候、校合人者五山衆可呼下旨被仰出候、從一山二人宛下向候樣ニ、五山へ可被仰渡候、板器校合之儀ニ候條、餘大老も又若輩も可爲難儀候、西堂平僧之內ニ而、其寺々にて吟味候而被指下候樣ニ、被仰渡尤存候、恐惶謹言、

二月七日　　　道　春判

金　地　院判

板倉伊賀守樣

人々御中

右之折紙御城にて相認、板倉內膳殿へ渡ス、

一、二月十三日板伊賀殿、二月十一日之狀、金地道春一兩人へ來、五山衆近日下可申との返書也、即道春へ遣ス、

一、二月廿四日

急度令啓達候、今度群書治要板行被仰付に付而、鑄字之儀五官ニ被仰付候、然者役者三四人京ゟ呼下度由、五官申候間、被仰付可被差下候、樣子は五官以書付可申上候、次ニ先年圓光寺鑄字被仰付候時、後漢書之切本幾可有之候間、弟子衆ニ申可被下旨、被仰出候、御事繁候而、是又可有御下候、爲其令啓達候、恐惶謹言、

二月廿五日

此折紙遣候様ニと道春ゟ申來候付、折紙を認遣ス、

道　　春

金　地　院

板倉伊賀守様

人々御中

此時道春狀札を〇、目安箱へ入置也、

一、同廿六日

請取申御扶持方之事

合貳石八斗也

右是は群書治要板器之時、京諸職人被下四十人、二月廿三日ゟ同廿九日迄、日數七日之分之御扶持方也、但一日ニ一人ニ付而米一升宛被下候、以上、

元和二年

辰二月晦日

台　林判

順　虎判

宗　運判

清　雲判

仁兵衛判

喜左衛門判

源十郎判

うらがき

右之面々可有御渡候、

畔柳壽學様

道　春印　此外以上廿人之名判在

金地院代
松　首座　之、

右二月廿六日如此書候而、裏判之儀、道春ゟ申來候間、松首座ニ加判させ遣し候也、去年大藏一覽之時のことく道春次第に仕候也、後の覺のため如此、

一、同廿七日

覺

一、銅大字五万八千六百四拾六

一、同小字參万千百六拾八

合大小字八万九千八百拾四

是は前方ゟ百箱に入候而有之分也、

一、銅大字八千八百四拾四

一、同小字千五百拾四

一、同丁付字拾

合大小字壹万參百六拾八

是は駿府にて大藏一覽板器之時仕立候而前方之百箱之内へ加入申候、

一、銅卦長短合百五拾四本

此内八拾參本は、前方ゟ有之、七拾壹本者大藏一覽之時仕立申候、

一、すりばん拾參面

此内五面者前方ゟ有之、八面者大藏一覽之時仕立申候、

一、つめ木四拾八本
　此内廿四本者前方ゟ有之廿四本者大藏一覽之時仕立申候、
一、以上卅拾貳本、大藏一覽之時仕立申候、
一、紙水打板五枚　同斷
一、木硯四ッ　同斷
一、字木箱四ッ、但し字木入何もふたなし　同斷
一、字木だんす壹ッ　同斷
　但し木字大小五千八百八拾九入
一、板摺し板八ッ　同斷
一、をしごう壹ッ　同斷
一、すり鉢四ッ　同斷
一、のみ壹ッ　同斷
一、かなつち壹ッ　同斷
　以上
右是は群書治要板器被仰付候時駿府西之丸御納戸ゟ取出し於三之丸改相渡申候者也仍如件、
　元和二年丙辰
　　二月廿三日
書寫代　都筆安右衛門印
金地院内　春藏主印
道春印

畔柳壽學老參

右之道具道春老ゟ壽學老へ御渡候に付而、點檢之時壹人可出由候間、則春藏主を出し申候也、

金　地　院印

一、今朝者被召寄忝存候、殊更永喜まで毎度於我等過分存候、今日者臨濟寶臺ゟも二人つゝ被參候而、寫被申候、仍内々如申上候、板器道具目錄書付進候間、我等方ゟ壽學へ相渡し申候趣、此奧へ被遊御判被成可被下候、つまり候はゝ書直し可申哉、今夜壽學へ渡し可申候、恐惶謹言、

廿七日　　　　道　春判

金　地　院　様

人々御中

如此道春ゟ狀添來候間、右之奧書仕候而遣ス、則道春ゟ之捻は札を付、目安箱へ入置也、

一、二月廿九日久左衛門上ニ付而、板伊賀殿へ狀遣す、案左に有、〇久左衛門上せ申候間」以下手紙の文中略

一、三之丸能の芝ゐにて、板行被仰付候、廿三日より取かゝり申候、五山衆おそく御座候而唉止に而候、片時もはやく下着候様ニと存候、臨濟寺寶大寺之衆、拙老同宿共不殘出しかゝせ申候、〇下略

二月廿九日　　　　金　地　院

板　伊　州　様

人々御中（追而書略）

一、同日東福寺召西堂（二字虫損）西堂下、板伊賀守殿二月廿一日之狀來、板器校合人、早々下候との狀也、令披見道春へ遣ス、（下略）

一、群書治要板行之間諸法度、

一、朝者卯刻ゟ被出、晩者酉之刻以後可有休息事、

一、高談付口論等、有之間敷事、
一、各互ニ勵相、不可有油斷事、
一、御座敷舞臺樂屋ニ而、私之細工以下仕、御座敷中あらし申間敷事、
一、人々私之知人引ニ見物など入間敷事、
右相定所如件、
元和貳年
二月廿三日
畔柳壽學判
道　春判
金地院判

一、群書治要板行之間、奉行人役者衆之外、無用衆出入有間敷者也、
二月廿三日
秋元但馬守判
板倉内膳正判
松平右衛門佐判
本多上野介判

一、三月三日板伊州二月廿九日之狀來、(中略)同日之日附にて金地院、道春への宛所にて返書來、左官方申上せ候鑄字之者聽而可下由之書中、并圓光寺之時被仰付候鑄字之後漢書切本卅七冊、是又聽而可下由之書中也、何も板倉内膳方於御城夜詰之時被届、右則返書遣ス、案左ニ有之、
一、(上略)一板器之儀無油斷、三之丸ニ而申付候、急可申旨御諚ニ候故、各無油斷候、一左山衆も各下着候、而校合之儀、無油斷被申付候、(下略)
三月五日
金　地　院

板伊州様
人々御中（追而書略）

一、板器之業宿之儀、昨日申入候處、宿見立可申入候由、被仰越候、彼業今日見立申候間、案內者を御添御渡候而、可被下候、皆々迷惑仕、日々訴訟申候間、御渡奉賴候、恐惶謹言、

三月五日

畔柳壽學在判
道　春在判
金地院在判

彥坂九兵衞殿

一、三月十日（中略）

一、一書令啓達候、律令並群書治要、貴殿被成御所持候哉、從拙老內證可相尋旨　御諚ニ候、御報ニ承預候者、御前へ可申上候、恐惶謹言、

三月十日

金　地　院

直江山城守殿
人々御中

道春方上意ニ候間、折紙可遣旨書狀來候間、此折紙遣ス也、右之狀札を付、目安箱へ入置也、

一、三月十二日、板伊賀殿三月六日之返書來、鑄字之者、五官指圖次第、申付下由之書中也、漢書の切本、圓光寺へ申、以上卅七冊下候由也、金地院道春へ之アテ所ニ來、披見候而道春へ遣ス、

一、三月十六日

一、一書令啓達候、仍此群書治要四冊御同宿衆ニ被仰付、書寫候而可有御越候、今度板行被仰付候、卦積八行十七字ニ而候、則卦料紙相添進候、點も、頭書も入不申候、字積相定板之字植申用所迄ニ而候、其

御心得ニ而、急度被仰付可有御進上候、爲其令啓達候、恐惶頓首、

三月十七日　　　　金　地　院

清　見　寺

道春ゟ清見寺臨濟寺實泰寺へ書寫ニ遣候樣ニと書状來候間、四十一、四十二、四十三、三冊臨濟寺、四十四、四十五、四十六三冊、實泰寺、四十七、四十八、四十九、五十、四冊は清見寺へ遣ス、清見寺へは右之折紙遣ス、臨濟、實泰へは使僧にて申遣ス、道春書状札を付、目安箱入置、

一、卯月廿五日（前略）

請取申御扶持方之事

合拾七石七斗者

右是者群書治要板器付書寫校合被仰付候時、被下候御扶持方也、三月朔日ゟ卯月廿九日迄、日數五十九日、壹人ニ付、一日ニ三升宛請取申候、仍如件、

元和貳年

卯月廿六日

東福寺　竹西堂
同　　　良西堂
建仁寺　智藏主
同　　　保首座
相國寺　岩首座
同　　　玄西堂
天龍寺　仙首座

同 洪 西 堂
南禪寺 堅 首 座
同 圭 西 堂

畔柳壽學老

金地院代 道 春 印
松 首 座 判

裏書 右之表、可有御渡候、以上、

請取申銀子之事

合壹貫目者 大黒丁銀也、

右之銀子者、群書治要被仰付候時京之諸職人、爲作料被下候也、仍如件、

元和貳年

辰ノ四月廿五日 台 林

廿 人

畔柳壽學老

うらがき 右之表可有御渡候、以上、

金地院代 道 春 印
松 首 座 判

請取申銀子ノ事

金三百拾目者 但大黒丁銀也、

右是ハ群書治要板器之時、銅字數大小壹万三千請立申、爲御作料被下候也、仍如件、

元和二年

辰卯月廿六日　　庄兵衞

唐人 林五官

評傳壽學老

右之去可有御渡候、以上、

道春印

金地院代 長首座判

一、五月廿九日、駿府板行板行之衆へ、状遣ス、案左ニ有之、

當月廿三日之御連署、同廿六日令拜見候、板器近日相濟可申旨珍重、此中各御苦勞無申計候、御次而之時御前へ具ニ可申上候、隨而各直ニ可有御歸京歟、當地へ可有御越かと御尋、我等分別ニ御異見難成候、但此度之儀者、其元隙明候者、先一統に御歸京も可然候哉、一人二人披露ニ御下向之儀者、如何と存候、何樣ニも於其地ニ道春老へ可被仰談候、恐惶謹言、

五月晦日　　金地院

眞乘院

南昌院

勝榮軒

知天西堂

貢公座元 各位下

一、同日道春へ状遣ス、案左ニ有之、

當月廿三日之御狀、同廿六日令拜見候、從是も廿四日に以書狀申入候、參著可申と存候、三册不足之所、先書ニ如申定而、御年寄衆可被得　上意候間、樣子可被仰入と存候、隨而板器校合之五山衆、其方又當地へ可有參上候、御尋候揣老も指圖は難成候、ケ樣之儀得　上意候事、不罷成候儀に候、先存寄候所は番手ニ候而、各被相替候由候、其上碩學衆、又は先年詩文之衆と申而候も、今度板行校合之御人數なれば、一統に而候、自餘の役者衆も直に被上候へは、猶以其通ニ先其地か歸京候而可然候哉と存候、只今在府之衆下向候へは、最前之番候衆、殘多可被存候哉、貴老御下向ニ而、各精入候通被仰上候者、其上ニ而仰出も可在之候哉、但貴老御分別次第ニ候、恐惶謹言、

五月晦日　　　　金　地　院

道　春　尊　老
人々御中

猶々板校之衆之內二人三人ぬけがけに下向候事は、尙以相役衆之おもわくも如何候はん哉、能々御思案候而、可被成御異見候、以上、

一、五月晦日、一色左兵衞駿府へ上、安藤帶刀殿、水野對馬殿、道春板器校合之五山衆、眞乘院、南昌院、勝業軒、如天西堂、寅公座元へも狀遣ス、

一、六月十二日、道春畔柳壽學、六月九日之狀來、板器之諸職人廿人上候傳馬之儀如何と申來、則返書遣す、案左に有之、

一、　六月九日之御飛札、同十二日令拜見候、板器之諸職人廿人罷上ニ付而、傳馬之儀被仰遣候、最前も御年寄衆へ被仰越候、我等へ之宛所も御座候故、令披見候ツル、只今又閑齋永喜迄も、被仰入由候、永喜は鶯御使御上洛之由候、定而閑齋か樣子可被申入と存候、揣老儀此二三日煩中以之外相煩、平臥之式に罷居候間、御年寄衆へ双談申儀不罷成候、閑齋か返書可有之候間、可被得其意候、此中者永々板

本之儀ニ御苦勞共奉察候、定而當地へ可爲御參上候條、以面上可得御意候、恐惶謹言、

六月十二日　　金地院

道春尊老

壽學尊老

尊只

一、六月十三日、右西堂駿府ゟ六月八日狀來、兩人之國師衆ゟ屆南人之國師之中樣能ゝ聞候樣ニとの書中也、井板木頓而濟候間、上洛可申ととの書中也、（下略）

一、六月十四日、前略右西堂六月七日之狀來、板木相濟可罷上由之書中也、右之兩通日野唯心殿之內案被屆。

（以上、靜嘉堂文庫藏本光國師日記自筆本の轉寫に據る）

第五章　寺院に於ける活字開版の競起

寺院に於ける活字開版

新たに輸入せられた活字印刷術は、先づ時の爲政者に採用せられて、早くも有力な出版事業となつて現れたのであるが、在來、大きな困難に處しつゝも相當大規模な出版を行ひ、我が印刷文化の主體を爲してゐた寺院が、新渡の簡便なる新式の印刷法を看過する筈はない。即ち、在來印刷事業に少しも關係してゐなかつた宗派の寺院からも反つて多數の出版書を見る樣にさへなつて、寺院の出版事業は前代にも增して隆盛を來したのである。これ等諸寺院の活字出版は、概して爲政者の其れよりも、僅かに遲れて慶長五・六年頃から現れ初めた。爲政者の出版に僧侶の關與してゐるものが多數を占めてゐるのに據つても、兩者の出版に密接なる關係がある事がわかる。最も古く寺院の活字出版が現れてゐるのは、京洛であるが、京洛の寺院に於ける出版が日蓮宗に多いのは特異な現象であつて、是には朝鮮の役の凱旋武將の信仰等も關係があらうと思はれる。

寺院に於ける外典の開版

又、當時に於ける寺院は、多種多樣なる佛典の印行と共に、外典の開版をも併せ行つてゐる。（叡山月藏坊、要法寺等の諸例、後記參照。）

寺院の活字開版と出版書肆の發生

なほ茲に注意す可きは、所謂特志者の開版事業の盛行に據つて、企業としての出版書肆の發生が助長せられつゝあつた當時に於いて、寺院に於ける活字開版が、出版書肆業の

發達を扶け、印刷事業を企業として成立せしむるに有力なる支援となつた事である。

寺院內に於いて自用に供す可き開版事業は、盛行を極めるに從つて、門外に依囑して開版の實務を行はしむる事も生ずるに至り、寺院に於いては單に藏版の權利を保持するのみに止つて、例へば、本能寺・叡山・野山等の如く、（後記參照）寺院自體に代つて、所謂山內に出版書肆の營居を有するもの、或は其の門前に出版書肆の業を營む者が漸く多きを加へ來つたのである。

かくて寛永末期、活字印刷の衰退と共に、否寧ろ少しく先に、寺院自體の活字開版は殆ど影を潜めてしまふのである。

なほ當時に於ける寺院の活字開版事業の特色の一として、著しく地方的にも發展を遂げてゐる事が注意せられる。次に當時に於ける京洛初め各地の寺院に於ける活字開版事業盛行の大勢を見ようと思ふ。

第一節　京洛の寺院に於ける活字開版事業

京洛の寺院に於ける活字開版

後陽成天皇の勅版並びに徳川家康の伏見版等が緇流の力に俟つ處が少くなかつた事も一因を爲して、再度の勅版が慶長二年に、又、伏見版が慶長四年に現れると直ぐに、年を次いで慶長五六年頃から京洛諸寺院に於いて活字開版の事業が競ひ起る樣になつた。京洛寺院の活字開版事業の最も盛んであつたのは、日蓮宗で、就中、要法寺・本能寺等を其の尤なるものとする。然もこれ等諸寺の活字開版は既に述べた如く、公家・武家側と密接なる交渉を有するのみならず、又一方に所謂坊刻本と聯關する事も極めて深く、近世初期印刷文化の進展に寄與する事頗る甚大なるものがあつた。次に各寺院毎に其の開版事業の狀態を究めようと思ふ。

一　要法寺の開版事業

要法寺の開版事業

京洛の寺院中、最も早くから幾多の特色ある出版を行つてゐるのは京洛の要法寺である。而して、其の要法寺に於ける開版事業の中心は、同寺の塔頭本地院の日性(圓智)に外ならぬのである。

本地院日性(圓智)の活動

日性は自撰の諸書の開版を主とし、引いて先人撰述の書にも及んでゐる。而して其の

開版は、棲住の地たる要法寺内本地院に於いて行はれた。又、圓智の刊語なく、單に「要法寺内開板」等、要法寺の刊語のみを有するものも、他に要法寺内に開版事業に關與した者の存在しない以上、日性の與る所と認む可きものであらう。即ち、慶長十九年二月、日性の入寂以後、寺内の印刷事業が頓挫してしまつてゐるのは、其の最もよき證據である。日性開版書の大半は活字印本であつて、整版本は、何れも活版を版下とした覆刻と認められるものである。其の數も極めて少く、論語集解と倭漢合運圖（慶長十六年刊）の一本とが見られるのである。又、活字印本は同種の活字を使用したものが多く、其の活字の樣式の類を異にするものは、論語集解（活版・整版）亂版中の活字印本の部分と、慶長十六年刊倭漢合運圖・慶長十八年刊四教儀集注等とである。各書に就いての詳細は後に論ずる事として、次にまづ要法寺開版事業の中心人物たる日性の傳に就いて一言しておかうと思ふ。

日性の傳記

日性の傳記に關する資料は、大日本史料第十二編之十三（七一八至二六頁。慶長十九年二月廿六日の條參照）に收められてゐる。

世雄房日性は、天文二十三年京洛に生れ、其の先は田村將軍、祖父量親より村田を稱した。所化名は「圓智」、台家を修め、又、身延山に學んだ。妙年にして東關に赴き、暫く足利に留り、後歸來して、三十歲の時、東山建仁寺に入つて大藏を看閱し、「藏經纂要」一百卷を集大

第五二圖　慶長五年刊法華經傳記

成した。其の他にも著述が多いが、其の中、生前に自ら刊行したと認められるものは「法華經傳記」「元祖蓮公薩埵略傳」「倭漢皇統編年合運圖」等である。又、其の著述を自ら刊行すると共に、沙石集太平記等の如く其の校刊にも携つてゐる。更に、直江山城守兼續の依囑に應じ、寺内の活字を以て「文選」の印行に從つた事も著明なる事實である。未刊行の著述も數種存在してゐる樣であるが、（日性著述目錄 要法寺答書）要法寺版と直接關係が少いから、其の吟味は茲には省略する。唯々當時に於いて相當の學僧であつたから、後陽成天皇に召されて御進講申上げたのを初め、公家・緇流の間に屢々講筵を行つてゐる。慶長十一年三月法印に叙せられ、（要法寺文書）慶長十九年二月二十六日入寂した。時に六十一歳。入寂前一箇月、自讃の像を殘してゐる。

次に、先づ日性の關與した「要法寺版」中最初に現れた圓智撰述書の開版に就いて考察を進めようと思ふ。

其の第一は、「法華經傳記」である。管見に入つた傳本は帝國圖書館藏の一本で、十卷五冊、（原書皮を存し、單邊、十行十八字、活字印本、縱六寸八分五厘、橫五寸三分。尼崎本興寺舊藏、各卷末に「主運傳日」十卷末に「日護（花押）」各卷首に「尼崎本興寺常住（本）」識語あり。各卷朱筆點附）卷末に左の刊語が存する

唐僧祥公不知其氏族博聞達識之人而記
法華之感驗誘愚昧之徒殊裁出傳譯等之

科目該括一化之始終質維甚奇甚妙也故
盛行于世爲讀者之資矣然轉寫誤於家亥
剰有差脱不可稱計予嘗披僧史傳幷衆經
錄等忽覺此記傳之有本據愈考愈質輙命
工鏤梓學者幸勿疑惑焉時
慶長庚子歳季春望日　洛陽　釋圓智誌

其の活字の様式より慶長五年の刊行たるは疑問の餘地を存せず、即ち、圓智最初の開版、要法寺版中最古刻に屬する。後刻の諸書は、本書の開離に初めて使つた活字を襲用してゐるものが多い。

慶長六年刊元祖蓮公薩埵略傳

其の二は「元祖蓮公薩埵略傳」である。在來、群書類從卷二二一所收底本に據つて要法寺版の存在を傳へてゐるが、別に、慶長六年の原刻本を元和寛永中に覆刻したと認られる整版本が存在する（叡山文庫藏一冊天海藏舊藏及び岩瀬文庫藏寛文補刻二冊）。類從本は、原刻本に據つたものか、或は覆刻本を所收したものか明らかにし難いが、恐らく覆刻本に據つてゐるかと思ふ。

本書は、（單邊無界、七行十七字、訓點附）末に、蓮公大師年譜・錄內年月未勘之書（七行有界）を附し、卷頭に「元祖蓮公薩埵略傳　佳釋永悲撰」、卷末に

慶長第六辛丑載季冬下浣三日　本地院中　板行

とあるが、其の版式は慶長初期と定め難い。恐らく、慶長六年の原刻本は前後の開版よ

り推して、活字印本なる可く、本書は、稍後年(元和寛永中)に訓點を附刻して再刻したものかと思はれる。乃ち、なほ慶長六年原刻本の傳本の發見を期す可く、唯本書に據つて、慶長六年刊本の存在を推定するに止める。而して、若し慶長六年刊本が存在するならば、恐らく法華經傳記・倭漢合運圖等と同種の活字印本であらう。

慶長五年初版倭漢皇統編年合運圖

其の三は、同じく圓智自撰の「倭漢皇統編年合運圖」(上下二卷、垂仁天皇五十三年(新國滅亡まで)までを上卷、垂仁天皇五十四年(後漢光武帝建武元年)よりを下卷に分ち、上下二段に區分せる倭漢對照の年代記なり。)である。法華經傳記と同種の活字を以て雕刻せられてゐるが、小字を多く用ひてゐる點が先行刻本と異る點である。この書は頗る世に流行し、度々開版を重ねてゐるが、其の初めて印行せられたのは、刊語は無いけれども、慶長五年前半までの記事を含むから、恐らく同年內の刊行であらうと思ふ。かゝる性質の書籍としては、其の內容の記載が、其の開版年時に著しく接近してゐるのが常である。即ち、連年植字重版する度に、記事を追加してゐるのを以ても、其の證とする事が出來る。而して、前述の如く、各種重版中、慶長五年までの記事を含むものが最も年代の遡り得るものであつて、之を慶長八年までの記事を含む異版に比するに、慶長五年の記事の後半(即ち九月以後の記事)を缺く點より見ても、慶長五年の記載に止るのは、恐らく同年後半(九月以後)に出版せられたからであらうと思はれる。

慶長五年刊本帝國圖書館・內閣・西本

この慶長五年刊本と認められるものに前後兩種の活字開版があつて、其の一は、帝國圖

第[illegible]圖

書館所藏本と內閣文庫藏本及び安田文庫に藏せられてゐる一本（下卷一冊）、其の二は久原文庫（完本、原表紙存す）栗田元次氏藏*（下卷一冊）の一本とである。

兩種の傳本

其の一は其の二の一類と植版を異にし、且つ其の記載に若干の出入がある。慶長八年以下の重刊本が其の二の方の記載を傳へてゐるのを以て見れば、其の一の類が即ち初版で、其の二の類は之を訂正再版したものと言ひ得る。

第五三圖

第一種本も第二種本も其の版式は全く同一で、（單邊有界、十二行、縱九寸六分五厘、橫五寸六分五厘）*帝國圖書館藏本は、圓光寺舊藏、もと同寺に於いて最も貴重とした什物であつたと言ふ（鹿島則泰氏示教）。頗る原裝の面目を傳へ、上卷の末に、

從將軍拜領之年代記　二冊　閑室（花押）

の閑室自筆識語を存し、下卷末には、同じく「年代記二冊之內　閑室（花押）」とある。なほ、卷末に元和二年までの記事を追書してあるのは他筆である。

慶長八年刊本兩種

この倭漢合運圖は初版が出て四年後の慶長八年になつて、同種活字を以て二度も印行せられた。兩版共に其の內容は全く同一で、慶長五年初版刊行後慶長八年までの間の記事の追加がある。兩版中何れが先行とも決し難いが、慶長八年の印行なるは疑ひなく、世の需めに應じて同一年內に兩度の重版を行つたものであらう。かゝる例は、慶元中に於ける活字印本の刊行に屢々見る所である。

この慶長八年刊行と認められる兩種の異版の管見に入るものは安田文庫に藏せられる兩本である（書影參照）之を假に慶長八年刊本第一種・第二種（第一種本は京都帝大國史研究室原裝、但し上卷末五葉破り去らる。第二種本は京都府立圖書館に一本を藏す。）と稱する事とする。

慶長十年刊本

更に、慶長十年に至つて、前記諸版と同種活字に據つて、第四版が出版された。小目の意匠が稍簡略になつてゐる外に版式上の差異はないが、其の內容より言へば、慶長十年までの記事が附け加へられてゐる事は勿論であるが、なほ先行の諸版と異り、家康と秀頼とに敬稱を附して、「家康公・秀頼公」と改めてゐる點が注意せられる。船橋秀賢の慶長日件錄慶長十年十一月六日の條（前記二〇三頁參照）に見える新板に相當するものであらうと思ふ。この種の刊本も亦、安田文庫に藏せられてゐる。

慶長十六年刊本

なほ以上五種の他に、同種活字の重刊本は管見に入らないが、慶長十六年に至つて、在來の諸版と別種なる新雕の稍小型の活字を以て、重刊せられた第六版が出た。この慶長十六年刊本は、先行の諸版と同じく慶長十六年までの記事の增補が行はれてゐる點より同年內の刊行と認められるものである。この十六年までの記事を含む刊本は、栗田元次氏藏の一本が之に相當するものと認められる。栗田氏藏本は、上卷一冊のみで下

覆慶長十六年刊整版本

卷を缺いてゐるから、卷末の緊要な部分が判明しないが、之を覆刻整版本（第七版）（慶長十六年までの記事を含む。靜嘉堂文庫に二本藏す。）に比するに、其の所依の底本となつたものである事は疑もないから、栗

田氏藏本の類は、確かに慶長十六年刊行の古活字印本であらう。栗田氏藏本の卷末に慶長十七年の識語（予時慶長第七之曆孟陵重集之月吉曜無是角尖之也）があるのも其の傍證の一端とする事が出來よう。（然るに栗田氏藏本と同種活字印本にして、下卷をも完備せる他の原裝の一本が岩瀨文庫に存するに、卷末識語は整然たると同一にして其の覆刻書の底本と認めらるゝも、卷末終葉に他の年號を補寫せるものを目してすれば、一二年以下の誤字なし元和元年の出版と定むべきが如し。されど栗田氏藏本の慶長十七年識語を以てすれば、慶長十六年の刊行と認む可く、即ち岩瀨文庫藏本は卷末終葉を補寫なしあるものに附し補寫せる後の傳本と考ふるを得可し。）

慶長十年沙石集の梓行

以上の三書は圓智自撰の書籍を版行したものであるが、同じく圓智の梓刊したものに、慶長十年刊行の「沙石集」がある。片假名交りの活字印本で、（雙邊無界十行、高七寸三分、幅五寸二分。）其の眞名活字は、前記諸本に使用したものを襲つてゐるが、片假名活字は特に新雕して混用したものである。卷末の刊語は左の如くである。

此集行于世尚矣本有與略幷有前後不知孰是也此幸得無住師之直筆正本今世不墨蹟蔓蔓於焉逢遇于梓十日所覗豈甚撿乎勿敢疑也

慶長十乙巳年仲春下澣八日　　圓智梓鏤

沙石集流布本

傳本の管見に入つたものは三、其の最もよく原裝を傳へてゐるのは成簣堂文庫藏本（十冊）で、他に圖書寮尊藏本（三冊）と蓬左文庫藏本（一冊二）とがある。

慶長十年刊本が沙石集流布印本の祖をなすものである事は言ふまでもないが、別に同種活字の重刊と認められる一本が存在する。卷末に刊語を存せず、且つ又、無邊無界であるが、字面の高さは約七寸三分であるから、其の版型は慶長十年梓刊本と同一である。

同種の活字を使用してゐる事實以外に確證は無いが、全く圓智と無關係な出版とは考へられないから、玆に再印本として要法寺版中に數へたいと思ふ。

元和以後の刊本

因みに、沙石集の後刊流布本に就いて附言すると、元和二年刊古活字印本兩種・元和四年刊古活字印本・元和二年刊古活字印本の一本を覆刻した整版本等がある。其の中、元和二年刊古活字印本（雙邊無界十二行片假名交り十卷十冊）は、卷末「此集行于世云々」の刊語の末に、

元和二年刊本

元和二年六月吉日　　圓智校讎

とあつて、慶長十年圓智校刊本を元和二年に重刊したものであるが、之に同種活字異植版があつて、同年内に再度の活字開版を行つたものである事がわかる（松井簡治博士藏本と大阪府立圖書館藏本其の兩種に相當る。）何れにしても、元和二年は既に圓智入寂の後であるから、圓智自ら印行したものでない事は無論、單に重刻の際、原刻の刊語に其の年時を充當したに止まる。又、この元和二年刊古活字印本を其の儘覆刻した整版本がある。元和二年の刊行ではあるまいが、餘り年時の隔らぬ頃のものであらう。（龍谷大學・東洋文庫等藏。）

元和四年刊本

元和二年に於ける兩種の活字印本開版の後、元和四年に又活字印本の重版が行はれた（安田文庫・高木文庫藏。）之には、卷末圓智の校語の末に、

元和四年正月吉日

の刊年を見るのみで、「圓智校讎」の四字は省略されてゐる。寛永以後屢々片假名交り整

版本の刊行が繰返された外、平假名交り印本も現れたが、結局、慶長十年圓智校刻本を其の祖とするもののみである。

要法寺内に於ける直江版文選の刊行

慶長十二年要法寺に於いて直江兼續が文選を活字開版せしめた事は、既に先人の說く所であつて、何れも、羅山文集（卷五十四題跋、內閣・家藏本の條）に「五臣註文選跋」と題し、

此本近歲米澤黃門景勝陪臣直江山城守某開版要法寺余請秋元但馬守泰朝而後泰朝告景勝而得之以寄余

とあるのを其の證として揭げてゐる。經籍訪古志には、「嘗見有羅山先生眞蹟跋本云」として右の跋文を所收し、「直江板」の證としてゐる。更に、狩谷棭齋撰述の「活字板書目」（上下二卷、一冊、森約之自筆本、安田文庫藏）の卷頭に、片倉玄周藏弃の文選を登錄し、「羅山林恕之跋有讀耕齋藏書」とあるから、當時片倉氏藏の一本が羅山自筆跋本であつた事がわかる。

羅山文集の記載

右の羅山の跋文には近歲とあるが、文集に據れば、慶長十二年より十數年を經た元和八年の記と認められる事は既に新村博士の說かれた所である。けれども、右の羅山文集に據るまでもなく、文選其の物の版式が、全く圓智開版の前記諸活字印本と同一なる事こそ要法寺で開版した最もよき證據である。卽ち、文選の刊行に使用してゐる活字は、慶長五年刊法華經傳記・慶長五年初刊和漢合運圖等に用ひた所のものであつて、文選が圓智の手に據つて要法寺内で印行された事は全く疑ふ餘地のない事實である。

直江版文選に關する崇傳文書

直江兼續と圓智との交渉に就いては、何等の資料が發見されてゐないけれども、文選の印行共れ自體が、兩者の密接なる關係を知る可き有力なる證據である。但し、前記の羅山の跋文に據つても伺ひ得るが、兼續の文選印行に當つては、無論背後に上杉景勝の有力なる後援があつたに相違なからう。其の傍證ともなり、且つ又、文選印行に附隨する一つの事實を知り得る資料を茲に紹介する。其れは、安田文庫所藏（伊佐早氏舊藏）の古文書で、文面は左の如くである。

今朝清兵衛方迄預候狀ゝ令
他行只今拜見申候文選全部
箱共ニ被掛御意候先年從霜臺公
拜領之內一冊不足其處迄申
請度存候處ニ全部被下候一部ハ
上方へ上セ一部爰元ニ可召置候
永々之控割?一入過分ニ存候將又
昨日御入來御掛物一覽樣子共略
令漏泄候趣御取成故從霜臺公御
禮狀被下候御念入申候段忝存候則
御請申入候御被露所仰候恐々
謹言　卯月六日　　崇傳（花押）

いてゐないのは物足りないが、崇傳が國師號を賜つたのは寛永三年の事であるし、文書に使用してゐる花押が晩年のものに屬する等の點より考へ併せても、寛永九年の書狀と認めたいと思ふ。然らば、霜臺公は上杉定勝を指す事となる。清兵衛は日記に屢〻見える平賀清兵衛である。何れにしても、崇傳がかく文選を二部も上杉家より受けてゐる一事を以て見ても、要法寺で印行された直江板文選と稱するものは、上杉家に於いて餘程の力を致したものと言ふ可きであらう。然らば、世にこの文選を又「會津版」と稱する事も不穩當とは言へない。

上杉家と直江板文選

「會津版」の名稱

又、此の文選の版式に就いても新しく異版の存在を發見した。在來知られてゐるものは、六十卷を三十冊に裝潢し、別に目一卷一冊を附して三十一冊（雙邊有界、十行二十二字。注雙行。縱八寸二分五厘、横四寸八分。）卷末に

右文選板歳久漫滅殆甚紹興二十八年冬十月
直閣趙公來鎭是邦下車之初以儒雅飾吏事首加
修正字畫爲之一新俾學者開卷免魯魚三豕之訛
且欲垂斯文於無窮云右迪功郎明州司法參軍兼
監盧欽謹書
慶長丁未沽洗上旬八蓂　　板行畢

の原刊語を植字し、一行隔てて

直江版文選の傳本
第六八・六九圖

の刊語を存する。此の種の傳本は比較的管見に入つたもの多く、薄紅唐紙の印刷原題簽をも存する高木文庫所藏（三十一冊）を初め、帝國圖書館・神宮文庫・京都府立圖書館・尊經閣文庫・刈谷町立圖書館（舊鹿文庫舊藏、十五冊）・東洋文庫（二本）（一は市野光彦足利學校藏宋板（虎文選）を以て手校せるもの、文政三年手跋あり。）・東方文化研究所（竹添井々博士手澤）・久原文庫・內藤虎次郎博士藏等の諸本がある。（上杉伯爵家にも二部以上藏せられる由。）

卷末同版異本
第七〇圖

然るに、卷末の一葉のみ全く植版を異にし、且つ、刊語を存せざる一異版が發見せられた。即ち、安田文庫現藏の一本であつて、「米澤藏書」印記を存し、上杉家の舊藏なる點が特に注意せられる。最後の一葉を除く外全く同版である上、其の終葉一葉も同種活字を以て植版せられてゐる點より、兩版の間に於ける時差は極めて少いと認められる。其の何れが先であるかは遽に決し難いとするも、卷末の原刊語の植字を檢するに、無刊語本は「右文選云々」の初行の次に一行空白を存し、第三行目より「直閣趙公云々」以下四行を植字し、慶長丁未の刊語一行を缺いてゐる。右の五行の原刊語は行間を隔てず、有刊語本の如く植版す可きが自然であつて、無刊語本の如く稍版式の整はぬのは、或は最初の試みであるからではなからうかと考へられる。即ち、最初摺刷の出來上つた見本樣のものの上杉家に殘り傳はつたものが、恐らく安田文庫現藏の一本であつて、其の一度試みた版式を整備し、之に刊語一行を加へたものが、有刊語本の通行本ではあるまいかと思ふ。然らば、開版依囑者たる上杉・直江側の意見に據つて、かく改められたものとも考へ

られるであらう。

なほ茲に、本書の刊行着手の年時を凡そ限定し得可き資料に、慶長十年九月刊太平記（四周雙邊、無界、毎半葉十二行片假名交り。匡郭内、縦七寸五分五厘、横五寸五分五厘。版心「太平記(卷數)」(丁數)。卷首目一冊を附す。劒卷は附載せず。）がある。其の卷末には、

直江版文選刊行着手の年時と慶長十年九月刊太平記

第五七圖 慶長十年刊太平記の傳本

慶長十年乙巳九月上旬日

の刊記がある。其の傳本には、久原文庫・成簣堂文庫・高木文庫（卷廿三・四補寫）・高野辰之博士藏（缺本）の諸本があるが、原裝を保存する高木文庫藏本の原表紙裏張りに直江版文選の卷一第四十五葉等の摺遣りを多く使用してゐる　即ち、文選は慶長十二年四月に終功したが、早くも同十年九月以前に着手したものである事が明白となつた。然も本書の眞名活字も亦、仔細に檢すれば、文選と同種である。之を前記の同年圓智校刊沙石集と比するに、本書に用ひた片假名活字のみは新雕したものと覺しく、其の樣式が優れてゐる。

寛永二年重刊の文選 第[illegible]圖

又、直江版文選の重版に寛永二年の活字印本がある。間々寛永二年の刊語を去つて原刻本の如くに僞れるものもあるが、原刻が有界であるのに比し無界であるから（但し、目錄一冊のみ有界）直ちに判明する

傳本

寛永二年重刊活字印本の出版事情は不明であるが、或は坊刻に非ずして、上杉家あたり重版ではあるまいかとも思はれる　傳本も比較的多數で、帝國圖書館藏本（二十五冊、鶚軒文庫舊藏）を初め、東北帝國大學藏本・秋田縣立圖書館藏本（根本通明舊藏）・東洋文庫藏本・靜嘉堂文庫藏本・久

原文庫藏本・安田文庫藏本・成簣堂文庫藏本・高木文庫藏本・內野氏皎亭文庫藏本（狩谷棭齋舊藏）・大島雅太郎氏藏本・尊經閣文庫藏本等の諸本がある。

（要法寺版論語集解　第二・三種）

次に、要法寺版と稱せられて、往來、其の代表的なものとなつてゐたものに、論語集解がある。この論語を先人何れも活字印本としてゐるが、其の資材としてゐる所のものを見るに、實は盡く整版本である。即ち、圖書寮尊藏本を初め、內閣文庫藏二本・帝國圖書館藏本・東京文理科大學南摩文庫藏本・大阪府立圖書館藏本・京都帝國大學圖書館藏本・東洋文庫藏本二本・秋田縣立圖書館藏本・成簣堂文庫藏本・安田文庫藏本（下冊一）・高木利太氏藏本等

（要法寺版論語の傳本）

頗る多數に上る傳本は嘗て活字印本と傳へられてゐたが、何れも整版本である。十卷五冊、（もと〳〵二冊に綴りけり。四周雙邊有界七行十七字、縱七寸、横五寸。）卷末に

慈眼刊　正運刊　洛汭要法寺內開板

の刊語がある。然るに、此の整版本は、其の版式上、活字印本の覆刻と認められるが故に、別に其の基く所の活字印本が存在するものと思はれるけれども、未だ實查の期を得る事が出來ない。然し、茲に、其の活字印本の存在を推定し、又要法寺版論語の雕刻に對して一つの問題を提供す可き整版と活版とを交へた「亂版」の論語集解がある。

（要法寺版論語亂版の存在）

即ち、整版の部分は前記諸本と全く同版であつて、其の部分は、終始約三分の二（卷首より四葉・六葉より七葉・九葉より卷末まで）に當り、活字で印刷されてゐる其の殘りの部分は、上下二冊本で言へば（下二の卷の末の二葉に綴られり上）

上卷の末約三分の一と下卷の初約三分の一、卽ち中央の部分約三分の一に相當する。この種の傳本が少くとも三本も存在する以上は、（東北帝國大學狩野文庫・東洋文庫・安田文庫藏）特にかゝる種類の摺本が造られたものと考へなければならない。而して、前記整版本と亂版との前後關係に就いては、他の要法寺版が、先行活字印本に基いて整版本となつて現れてゐる點から考へても、要法寺版論語整版本の傳本の多數なる點より見るも、恐らく、整版本が後出であらうと思ふ。なほ其の推定を助けるものは正運刊行の刊語ある中庸の活字印本と其の覆刻整版本との存在する事である。（後記參照）但し、論語の活字印刷の部分は、整版本の當該部分の版下になつたものとは認め難いから、要法寺版（整版本）論語が、活字印本を版下として雕成せられたるものなる事を前提として認める限り、此の亂版は、要法寺版活字印本論語の一部を流用したもの、卽ち、活字印本の中央約三分の一の摺紙が殘存してゐたのを整版本雕成の際に利用して若干の混合本を生み出したものとは認め難いと思ふ。

要法寺版論語亂版の[illegible]

然らば、整版本雕成の際、其の卷首卷末雙方より雕刻に掛り、中途にして若干の摺本の需めに迫られて、中央部のみ活字印刷を以て補ひ急ぎ一部の書を成したものと解し得るであらう。けれども、まだ當時摺刷せられた他の活字印本を以て補配したものではないかとの疑問を生ずる。乃ち、試みに、慶長中に開雕せられた各種の論語集解の活字印本と比較調査するに、之と版式の合致するものを發見し得ないから、まづ茲に開

題はないと思ふ。當時に於ける論語集解の活字印本の管見に入つたものは、勅版及び要法寺版（亂版）を除いて五種。即ち、（一）慶長十四年刊本（上下二冊）卷末に「友傳刊　慶長十四年己酉九月日洛汭甚與開板」の刊語がある。（二）其の卷末の刊語の一部のみ植字を異にする一本。（卷末刊語の一部「洛汭宗甚三板」とあり。）（三）無刊記本第一種（慶長八年以前刊）（靜嘉堂文庫藏一本の卷に此圖珠者以大學博士清原秀賢本寫點業講他之一時可秘　慶長癸卯第八夏五吉辰瀧川豐前守□墨書あり。又、慶長七年清原秀賢刊古文孝經は同活字印本なるを以て其刊行年時を限定せらる。他に京都帝大圖書館藏本（清家舊藏）・東洋文庫藏本（五冊原書）あり。）（四）無刊記本第三種。（安田文庫藏。前記二本に比するに、誤字多く、この點より言へば、第一種本最も後出に似たり。版式なども本書を最も先出とす可きが如し。）（五）無刊記本第四種（圖書寮藏。（新宮城書藏）・岩瀬文庫藏。前記諸本と合せ、活字を異にす。下目は藏中書及び無刊記の孟子より、共のみ管見に入らざれど、恐らく本書と共に四書として印行せられたるものなる可く、又、慶長十一年以前刊傳嵯峨本史記と同種活字印本なり。依て刊行年時を推す可し。）以上五種の中、慶長十四年刊活字印本兩種は、要法寺版（亂版）論語活字印本の部分の版式と相去る事最も遠い。なほ論語集解には

慶長中刊論語古活字印本諸本

覆刻整版本

この他に慶長中の刊行と認む可き整版本が存在し、其の傳本は枚擧に遑ない位である。活字印本を承けて現れた整版本が先行の活字印本の覆刻であるのを通例とする當時に於いて、本書も亦先行活字印本の覆刻かと認められるが、是が版下になつたかと思はれる活字印本は未だ發見されてゐない。但し、當時の整版本が活字印本の版式の影響を蒙る事多く、活字覆刻に非ざるものも恰も活字印本を版下として製作されたかの如く見えるのであるとすれば問題は別である。

結局、以上の如く、現存資料に就いて之を論ずるならば、要法寺版（亂版）論語集解の活字印

刷の部分は、特に亂版製作の爲に先行の活字印本の活字を以て植版を行つたものと認められるかと思ふ。なほ、整版本より亂版の方が先行かと認められる傍證としては、他の正運所刻本の場合に就いて考へたいと思ふ。（正運刊活字印本大學中庸と論語亂版中の活字印刷の部分と版式同一なるは又其の證とすべし。）

現存せる正運所刊の漢籍の管見に入つたものは左の數種である。併せて、刊行年時の不明確なる要法寺版論語の開版年時の限界を示す可く、慈眼の關與したものをも掲げると次の如くとなる。（左表中、孟子の正運刊本は在來全く知られてゐないものである。（彰考館文庫・詩仙堂舊藏・尊經閣文庫・内藤博士藏））

刊年	書名	版	関与
慶長四年刊	孔子家語（伏見版）	活版	慈眼
慶長五年刊	貞觀政要（伏見版）	活版	慈眼
	論語集解（要法寺版）	整版（活版存在推定） 亂版	慈眼　正運
	大學・中庸・孟子	活版（學・庸は異版兩種及び別に覆刻整版存す）	正運
慶長九年刊	大廣益會玉篇	整版（覆刻存す）	正運・純孝
慶長十年刊	周易	活版	正運

要法寺版論語の開版年代

卽ち、右に據れば、慈眼が開版事業に關與してゐるのは慶長極初年の間のみであるから、恐らく、其の存在が推定せられる要法寺版活字印本論語の開版は慶長五至八年の間にあると思はれる。無刊記活字印本の慶長八年以前に開版せられてゐる事も其の傍證となるであらう。而して、現存の亂版及び整版が少しく後年の覆刻たる事は異論ない

と思ふ。論語と共に正運の關與した大學・中庸に就いては、往來、訪書餘錄初め諸家の、活字印本として、著錄せられるものも亦、盡く整版本を誤認したものであつた。然るに正運所刻の刊記ある中庸には實は古活字印本が兩版あつて、其の一は（＊内藤虎次郎博士藏、＊東洋文庫藏本（木村正辭博士舊藏。）震災に亡ひたる松廼舍文庫藏本亦同じ（據寫眞）。）其の二は（＊高木文庫藏本（九條家舊藏、大學を併せ存す）久原文庫に中庸、成簣堂文庫に大學のみあり。）である。何れも大學には刊語を存せず、中庸の卷末にのみ「關東上總住今關正運刊」とある。覆刻整版本（整版本、東洋文庫等藏。）は其の二の類を底本としてゐるから、其の二の方が或は後出であらう。而して、其の版式が要法寺版論語亂版中の活字印刷の部分と合致するから、略〻同時の開版たる事がわかる。けれども、この點より之を要法寺内の開版とする事はなほ躊躇せねばならない。圓智の場合と異り、少くとも正運と要法寺との關係が今少し明かにせられなければ、之を要法寺版中に加へる事は困難である。寧ろ、慈眼が伏見版にも要法寺版にも關係する如く、正運も亦、或は要法寺内の開版に參與し、又、鐵山叟宗鈍版行の大廣益會玉篇（「舊刊本大廣益會玉篇に就いて」（拙稿）書誌學一ノ三・四參照。）に純孝と共に盡力し、更に、涸轍子祖博刊行の周易にも事に從ふ等、工匠として諸方の要求に應じてゐたものと解す可きであらう。又、茲に注意す可きは、涸轍書院所刻の刊記ある古注千字文（高木文庫藏）・韻鏡（圖書寮尊藏）の活字は明らかに直江版文選と同種であつて、文選の活字を襲用したものに相違ない。文選の開版以後、要法寺版としては同種活字を以て印行したものが現存してゐないのは、

正運所刊の中庸古活字本兩種　第[illegible]圖

慶長十三年圓機書院刊行の兩書

其の活字を淵轍書院が專ら使用するに至つたが爲ではあるまいかとも考へられるのである。

慶長十八年刊古活字印本天台四教儀集註　第六八圖

次に、同じく要法寺內の開版の刊語を存するものに、「天台四教儀集註」がある。之は在來知られてゐないものであるが、叡山文庫に一本を存する。三卷三冊。活字印本。單邊無界、十一行二十字。縱七寸五分、橫五寸三分。「山門西塔本住院廬堂藏」の印記あり。卷末に、

慶長十八癸丑年八月　日

於京師要法精舍板行焉

の刊語を存する。活字の樣式が他の何れの要法寺版とも異つてゐるのは、現存資料の示す限りに於いて、他本に比して本書が獨り後出の故であらうと思ふ。現存までに知られた要法寺版中の最後出のものであつて、恐らく本書にも圓智が關係してゐるものと思はれる。卽ち、本書が出でて間もなく圓智が入寂してゐる點より考へても、要法寺の開版事業は全く圓智を中心として活動したものである事が知れよう。

要法寺版書目

要するに、以上茲に要法寺版として數へ得ると考へたものは、圓智自撰の開版書と要法寺內開版の刊語、及び證據ある刻本とを合して次の如くである

慶長五年刊　法華經傳記　十卷五冊　圓智撰(刊)　活版

慶長五年刊　倭漢皇統編年合運圖(初版・再版)　二卷二冊　圓智撰(刊)　活版

慶長六年刊　元祖蓮公薩埵略傳　一卷一册　圓智撰(刊)　(覆刻整版現存)
慶長八年刊　倭漢皇統編年合運圖(三版・四版)　二卷二册　圓智撰(刊)　活版
慶長十年刊　沙石集　十卷十册　圓智校(刊)　活版
(慶長中刊)　沙石集(再版)　十卷十册　活版
慶長十年刊　太平記　四十卷二十册　活版
慶長十年刊　倭漢皇統編年合運圖(五版)　二卷二册　圓智撰(刊)　活版
慶長十二年刊　文選(直江版)　六十卷三十一册(要法寺內版)　活版
(慶長中刊)　論語集解　十卷二册　要法寺內版(整版・亂版現存)慈眼・正運刊
慶長十六年刊　倭漢皇統編年合運圖(六版)　二卷二册　圓智撰(刊)　活版
同　同　(七版)　二卷二册　圓智撰(覆活字整版)
慶長十八年刊　天台四教儀集註　三卷三册　(要法寺內版)活版

なほ以上の諸本の他に、圓智撰述と認められる太平記抄(四十卷附音義二卷、十册、片假名交り。)が活字開版されてゐるが、之にも數種の異版が存在する。但し、この活字印本太平記抄が圓智の撰述か否かに就いては、活字印本其の物には何等其の記載はないが、其の一傳本(高木利太氏藏、岩崎文庫舊藏、)(內閣文庫和田文庫同種印本藏)の卷首の「世雄坊日雅述記」(但し、日雅は圓智(日性)の別號か、要法寺在住の後人か詳かならず。或は、日性其の人に非ずして後人の撰述であるを、寺傳亦誤り傳へたるか。)音義の卷末に「于時寬永貳年　板出來」の識語は、要法寺傳の日性傳記資料等に太

平記抄四十卷とあるのに併せ考へる事が出來るかと思ふ。高木文庫藏本は、寛永二年開版の由識語があるが、安田文庫藏本に據れば、慶長十五年春枝開板の太平記と共時の刊行である。其の他内閣文庫藏別本(二本藏)、高木文庫藏又一本（高野辰之博士同種零本藏。）は何れも異版であつて、是だけでも三種に達するが、圓智在世中要法寺刊行の版式と確認し得るものを見出し難い（後記參照）。

又、圓智が諸抄の撰述にも關係してゐた點より、諸抄の頗る多數の活字印本中圓智の開版したものがあるであらうとは、既に先人の言はれた所であるが、なほ、版式の相似の方面より之を究めて論定するには至らない。太平記抄と共になほ他日研究を進め度いと思ふ。

要法寺版の研究に就きては、曾て新村出博士の考説せらるゝあり、（大正九、四圖書館雜誌、同十四典籍叢談所載。）早くこの方面の研究に示唆を與へられしかど、其の後時運の進展に伴ひて新しき發見亦少からず、乃ち、昭和八年十一月書誌學第一卷第一號に要法寺版の研究と題して拙稿を草し、次いで善本影譜癸酉第二・九輯に圖版を集め略解を加へしかど、今茲に、又補訂を加へ以て本節の一篇となす。

二　本國寺の開版事業

（本國寺の開版事業）

法華宗本國寺に於いては、早く文祿四年に天台四敎儀集解・法華玄義序の兩書を一輪房日保に據つて活字開版せられ、且つ、是が宗派の關係より或は加藤清正等の如き朝鮮の役出征武將に關係するものではあるまいかと推定せられる事は前に述べたが、（一五五頁參照）現在資料の示す限りに於いては、開版は暫く中絶して、慶長後半に至つて、寧ろ要法寺等同宗派の開版に刺戟せられて再び現れたものと言ふ事が出來るのである。即ち、慶長十七年に、佛祖歷代通載（二十二卷十冊。四周雙邊、有界、每半葉十行、每行十九字。匡郭內縱七寸、橫五寸。阿波國文庫・不忍文庫舊藏・內藤博士・龍谷大學・東洋文庫・六冊・成簣堂文庫・一本二は寶積寺舊藏、二は興國寺舊藏十五冊藏。）の活字印行を見た。卷末に左の刊語がある。

（慶長十七年刊佛祖歷代通載）

（第一一一圖）

本國寺學校　玉潤日銳補欄脫耳

十住　從　實乘　進

法壽　珠　金林　慧

四僧集會異體同心鏤梓刊板流行天下

慶長十七壬子極月十九日

是に據れば本國寺內には或種の組織的な修學の機關が設けられてゐた。開版事業等も或は其の一活動として行はれたものであらう。元和中の開版は未だ見當らないが、

寛永初年には、

寛永三年刊本三種

摩訶止觀私記（十卷、十冊）無邊、無界、十行二十字。字面の高さ約七寸四分。中島仁之助氏藏（卷末に「授與之覺天日埃寛永第六年己巳六月吉日　日禎（花押）」識語あり）

（刊記）寛永三曆丙寅九月　日
　　於洛陽本國寺內　開之

法華玄義私記（十卷、十冊）版式等凡て止觀私記に同じ。中島仁之助氏藏（「日東」印記あり）

（刊記）寛永三丙寅曆九月　日　洛陽於本國寺開之

第十九圖

*法華疏讃（六卷、六冊）無邊、無界、十行二十字。字面の高さ約七寸四分。版心右二本と同じ。叡山文庫藏（天海僧正舊藏、各卷末に「西塔地定院侍從進上」の識語あり）

（刊記）右此抄記者一家習學之士雖勵書寫之功展轉之謬數亦有餘矣因茲今聚集數多之舊本粗校檢之而輙鋟乎版焉庶幾留未來永劫伴道廣遠也猶恐魚魯訛錯章句齟齬文字添脫敬請後哲刪削決正而已

　　于時寛永三丙寅曆南呂仲旬
　　　　洛陽於本國寺　開之

等の諸經が開版せられ、寛永年間まで其の開版事業が繼續せられた事は明白である。

又、同じく寛永三年には四教儀（三冊）を上梓してゐるが、是は整版を用ひ、卷末に「寛永三丙寅九月吉日　於洛陽本國寺之內開板」の刊記があるから、其の頃から、本國寺內の活字開版も影を潜めたのではあるまいかと思はれる。然し、なほ他に今後同寺內の開版書の發見せられるものがあらうと思ふ。

三　本能寺の開版事業

本能寺の開版事業　露閑の事蹟

本能寺に於ける活字開版事業は、慶長の末年に始つてゐる。本國寺と同じく、同宗派要法寺等の影響を蒙つて現れたものであらう。其の開版に專ら關興したのは「露閑」で、慶長十九年にまづ要法寺版法華經傳記(圓智撰)の活字飜刻を見たのを以ても其の間の消息が察せられる。

慶長十九年刊法華經傳記

慶長十九年刊法華經傳記(十卷、三冊)四周雙邊、無界、十行、十八字。蓍山文庫藏(原裝)は、卷末慶長五年圓智原刊記(要法寺版)の權題の次に、

第七十一圖

慶長十九甲寅孟冬仲三日洛陽　釋露閑誌

の刊語がある。露閑に就いては未だ詳にしないけれども、次いで、元和六年には摩訶止

元和六年刊法華三大部補注

觀私記(成簣堂文庫藏零本一冊)無邊、無界、十行、二十字。字面の高さ約八寸一分。卷末に「元和六年十二月上旬　開板露閑」並びに元和六年三月二十日圖書目錄の識語あり。なほ、本書は法華經三大部補注(十四冊)として刊行せられたるものゝ如く、高野山寶壽院目錄に本能寺板法華經三大部補注とある。を、又、寛永三年には、

寛永三年刊百喩經

百喩經(二卷、一冊)無邊、無界、十行、十八字。字面の高さ約七寸四分。安田文庫・成簣堂文庫藏。等を印行してゐる。百喩經の刊記は左の如くである。

第七十二圖

寛永三丙寅拾月吉日百喩經
洛陽於本能寺　開判露閑

本能寺内に於ける出版書肆の發生

本能寺内の開版事業は、寛永初年以後、寺内の出版書肆の經營に移つたらしく、例へば寛永六年刊の三教指歸注、寛永八年刊の性靈集抄、同十九年刊の止觀義例隨釋等の諸刻本(整版)に存する刊記「本能寺内　石黒藤太夫板木」が明かに之を證してゐる。

石黒藤太夫

なほ又、本能寺内の他、其の門前にも書肆が發達してゐたと思はれる事は、元和・寛永初年中の古活字印本に「本能寺前町開板」の刊記を有するものが存在する事に據つて知られる。即ち、寺内の開版事業が、次第に同寺を中心とする出版書肆の發達を促進するに至つたものと言ふ可く、本能寺の如きは、近世初期に於ける寺院の開版事業と出版書肆業の發達との密接なる關聯を見る可き最好適例の一つである。

寺院版と出版書肆業の發達との關聯

本能寺前町開板の刊記ある活字印本は左の如くであるが、特に所謂假名講説が多數を占めてゐるのは注意す可き事である。或は、本能寺前町の刊記を解して、本能寺に於ける開版書中、内典は之を寺内開版、外典のみは之を門外の開版としたものではあるまいかとの推説も考へられない事はないが、是はやはり前述の如く、同寺を中心として其の内外に出版書肆が發達を遂げてゐたものと解す可きであらうと思ふ。

本能寺前町開版の書籍

前漢書　(百二十卷、二十五冊)　四周雙邊、無界、每半葉十行、每行十七字。注雙行。匡郭内縱七寸二分、横五寸四分五厘。圖書寮尊藏(森立之舊藏三九冊)・京都帝大寄託陽明文庫・京都府立圖書館・久原文庫・東洋文庫・高木文庫藏。

刊記「寛永第五戊辰曆菊月廿一日於洛陽本能寺前刊行焉」

本能寺前町開板假名活字三種

周易抄（六卷、六冊）四周雙邊、無界、十五行片假名交り、匡郭内、縱七寸五分、橫五寸三分。阿波國文庫（不忍文庫舊藏）・富山文庫藏。

〔刊記〕於洛陽本能寺前開板

毛詩抄（二十卷、十三冊）四周雙邊、無界、十六行片假名交り、匡郭内、縱七寸三分五厘、橫五寸六分。圖書寮（尊藏）・東京文理科大學藏（舟橋家舊藏）

〔刊記〕於洛陽本能寺前町開板

第十二圖

日本書紀（神代卷）抄（二卷、二冊）四周雙邊、無界、十六行片假名交り。匡郭内、縱七寸四分、橫五寸六分。阿波國文庫（不忍文庫舊藏、原表紙裏より毛詩抄[illegible]の摺遣出づ）・成簣堂文庫（宇治慈心院舊藏）・高木文庫藏。

〔刊記〕於洛陽本能寺前町開板

本能寺前町開板平假名活字日本紀抄存在

右の假名抄物三種は同種の活字を以て摺刷せられたものであつて、なほこの本能寺前町の開板には、平假名交りの書籍も行はれたらしい。卽ち、阿波國文庫所藏の日本書紀抄の原表紙裏張りに毛詩抄と共に、長恨歌傳の平假名交り古活字印本の摺遣が現れてゐて、是が日本書紀抄下卷第二十二葉表の注にのみ引用植版した「あまさかるひなに五年すまゐして都のてふり忘られそする」の山上憶良の歌一首の活字と同種である點より推定せられる。

四　北野經王堂の開版事業

北野經王堂に於ける宗存の活字開版

慶長の末から元和・寛永初年に亙つて北野經王堂に於いて常明寺の宗存に據つて種々なる佛經の活字開版が行はれた。經王堂に就いては未詳であるが、諸本の刊記に西京北野とあるから、洛北に於いて行はれたものに相違ない。何れも肉太にして大型なる活字を用ひ、其の刊行の實務には駿河版に從事した工匠台林等が關與してゐるものもある。宗存の傳記も未詳であるが、聖乘坊（常明寺中の坊か、或は宗存の號する所か。）宗存と稱し、常明寺（伊勢國度會郡山田、高日山法樂院常明寺（文化九年の「異例寺院抜書」に明治初期まで現存せしも今廢寺となる「獅子王圓信師叡山版の研究」參照＝研究會學報第五輯、昭和七・四、專修院本律研究會）に住したものである事は諸本の刊記に據つて知られる。其れが、京都北野經王堂に於いて開版事業につとめたものである。」伊勢皇大神宮に大藏經奉獻開版の大願を起した事は特に注意す可き事であるが、是も無論神宮に近く棲住してゐたが爲であらう。又宗存の開版事業は、同じく天台宗なる關係上、叡山に於ける盛なる活字開版に刺戟せられたものであらうと思ふ。

台林等の關與

常明寺の所在

慶長十八年刊大藏目錄

第十一圖

其の最初に開版したものは、慶長十八年刊「大藏目錄」（三帖東大寺佛教圖書館藏）字面の高さ約八寸。黄紙摺。褐色原表紙附折本。料紙繼ぎめ内に「大藏目錄上（中・下）（丁數）及び繼目の印（一）を植版す「東大寺印」及び「傳領永宣」の識語あり）卷末に左の刊記がある

大本願伊勢聖乘坊宗存(花押)

慶長十八癸丑年九月吉日於洛陽梓之

當施主開板　吉野入道意齋

西田勝兵衛尉

現存明かなる宗存所刻大藏經

次いで慶長十九年より元和三年に至る間に大藏經の一部分として活字印行せられたものの中現存の明かなるものは左の如くである。何れも黄紙に摺刷してゐる。

商主天子所問經　蘇悉地羯羅供養法三卷　有德女所問大乘經　受持七佛名號所生功德經　般泥洹後灌臘經　佛臨涅槃記法住經　破邪論二卷　師子莊嚴王菩薩請問經　佛說堅固女經(無跋)　佛說大乘流轉諸有經　佛說不增不減經(甲寅歲日本國大藏都監奉勅雕造)　菩薩訶色欲法經(乙卯歲大日本國大藏都監奉勅彫造)　法觀經　佛說壽生經　佛說文殊師利五字瑜伽根本秘密大智神咒大陀羅尼經　文殊師利發願經　四品學法經　佛說內身觀章句經　六菩薩亦當誦持經　禪要經　舍衞國王夢十事經　撰集三藏及雜藏傳　十二遊經　諸發諸王要偈　諸佛心陀羅尼經　日光童子經　申日兒本經　逝童子經　大乘離文字普光明藏經　無垢賢女經　迦葉赴佛般涅槃經　德護長者經　文殊師利問菩提經　大乘伽耶山頂經　清淨觀世音普賢陀羅尼經　玄師颰陀所說神咒經(丁巳歲大日本國大藏都監奉勅雕造)　阿吒婆拘神咒經　壽生經　象頭精舍經　預修十王生七經　延命地藏菩薩經　梵網菩

薩戒序　般若心經秘鍵　跋無

其の他寛永初年に至る宗存の活字開版にはなほ左記の諸經があり、又、五味禪（高木文庫藏）の如く宗存所印本の活字を襲用したものと認められる印本も存在する

神祇講式（一卷、一册）

（刊記）伊勢大神宮　常明寺　高日山　法樂院　元和元年乙卯十一月吉日　法印宗存敬梓

顯戒論（三卷、三册）叡山文庫・久原文庫・高木文庫（叡山眞如藏菩藏）藏

（刊記）維旹元和三丁巳曆八月中旬於西京北野經王堂常明寺宗存摺刊之畢

法華三大部（三十卷、六十六册）（摺寫役人上州住正[illegible]工匠台林等の刊記を添ふ。）圖書寮尊藏・叡山文庫藏

玄義　元和三年九月中旬刊（刊記略）

文句—元和三・四年刊（刊記略）

止觀　元和三年六月中旬刊（刊記略）

正因果集（三卷一册）（四周單邊、無界、九行、十七字。匡郭内、縱七寸一分五厘、橫五寸七分、上卷末のみ刊記あり。「宗存」なき外他の諸本と同形式なり）叡山文庫藏

（上卷刊記）惟時元和戊午曆正月下旬

源信枕雙紙（一卷、一册）東洋文庫藏（單邊、無界、十行十字。匡郭内、縱四寸一分、橫六寸二分五厘。褐色原表紙存す。）

（刊記）元和七辛酉年七月吉日　伊勢大神宮内院一切經本願常明寺宗存敬梓

千手千眼觀世音菩薩大慈心陀羅尼（一卷、一帖）叡山文庫藏

「刊記」元和八年壬戌十月二十日甲子日　天台沙門常明寺宗存重刊

法苑珠林（一百卷、一百册）　圖書寮尊藏叡山文庫成簣堂文庫藏

毎卷刊行年時の他に「伊勢大神宮一切經本願常明寺宗存敬梓」の刊記あり　元和七年より寛永元年に至る　刊行順次は必しも卷數順ならず

五　西本願寺の開版事業

本願寺は中世後期に於いて、三帖和讃や蓮如上人の御文の片假名本の開版等を行つたけれども、其の布教の民衆的であつたのに比して、印刷文化を布教宣傳に資する事は少く、近世初期に於ける開版事業は甚だ微々たる狀態である。其れは、この宗派の僧徒が講學の爲めに餘り多くの佛經を要しないのと、又一方には大坂石山合戰後の內局收拾に力を致してゐた事も原因の一つであらうと思ふ。けれども、在來全く開版事業を行つてゐないと考へられてゐるのは、（浄土教史の研究。）誤りであつて、他の寺院の影響を受けて、元和年間には若干の佛典印行に關與してゐる。管見に入つた現存資料は成簣堂文庫所藏の次の二書である

第七七圖

法界次第　（三卷三冊）成簣堂文庫藏本中卷缺

（刊記）六條　刊堂（元和・寛永中刊）

無量壽經優婆提舍願生偈註　（二卷、二冊）但し整版なり。

（刊記）元和六庚申曆　六條西寺內開之

なほ、高木文庫藏の浄土略名目圖見聞（二卷、二冊無刊記本に、慶長十八年六條西寺開版の由刊記を妄補僞造した一本が存するが、（書誌學二ノ三掲稿古板本の僞造、高木文庫古活字版目錄八五頁參照）西本願寺の活字開

版に就いては在來知られてゐないのであるから、なほ今後新しく發見されるものが少くないであらうと思ふ。

又、他の諸寺院　場合と同じく其の寺門の內外に開版事業が榮えてゐた事も素聞玄機原病式（元和六年刊、一册。刊記｜元和二年丙辰　於六條開板之）等に據つて知られる。

六　寶珠院の開版事業

寶珠院の活字開版

寶珠院の活字開版には、慶長九年の敎誡新學比丘行護律儀（一卷、一冊）四周雙邊、有界、九行、十七字。匡郭內縦七寸、横五寸七分。＊神田喜一郎氏・東洋文庫・人吉願成寺藏がある。其の卷末刊記の末に、

慶長九年刊敎誡新學比丘行護律儀

第七八圖

右敎誡儀簡牘磨滅字畫殘缺或烏而焉或焉而馬
故勵志拔小賊命工令活版併爲正法久住善願圓
滿耳
慶長九年甲辰應鐘上旬
城西歡喜山寶珠院沙門幸朝
下村生藏刋之

とあり、同じく慶長十年下村生藏の印行した元亨釋書は本書と同種の活字を使用してゐる。この寶珠院は、舟橋秀賢の慶長日件錄（八年十月廿二日の條、前記參照）に「寶珠院へ一字板注字木以上三百遺之」とある記事と關聯を有するものであらうとは既に新村出博士の指摘せられた所である。（要法寺版の研究（典籍叢談三〇四頁參照））これは公家の活字開版事業が寺院の其れに影響を及した消息の一端を語るものであるが、「寶珠院」は、秀賢の日曆中にも屢々見え、洛北の寺院と認められるが、同じく慶長日件錄中に「實壽院」と言ふのが數多く出てゐる。是は舟橋

寶珠院と實壽院

家の墳寺で、現に慶長十年正月十四日に秀賢は其の嫡男を疱瘡で失ひ、同十五日に同寺へ葬つてゐる。江戸時代の古版地誌には兩者を同一視してゐるものが多いが、日件錄を見ると同一ではない樣に考へられる。然し、若し同一であるならば、其の墳寺へ開版の便宜を與へてゐる事は當然であらう。尙右の敎誡新學比丘行護律義の刊行に從つてゐる「下村生藏」に就いて一言する必要がある。即ち下村生藏はこの他にも、敎誡新學比丘行護律義と同じ活字を以て慶長十年に元亨釋書（三十卷、十冊。雙邊、有界、九行十七字。匡郭内、縱七寸、橫五寸七分。卷末に慶長乙巳歲仲夏日　下村生藏刊之の刊記あり。東北帝國大學圖書館・蓬左文庫・東洋文庫・安田文庫・成簣堂文庫・高木文庫・粟田元次氏・谷村一太郎氏・正宗敦夫氏・小川五郎氏有缺藏）を印行してゐる他に、又無年號本ではあるが慶長中の刊行と目す可き中庸（一冊、卷末に「下村生藏刊之」の刊記あり。雙邊、有界、七行十七字。匡郭内、縱七寸二分、橫五寸二[illegible]東洋文庫藏、[illegible]舊藏）を活字印行してゐる。又、之と同種活字の無刊記本に論語（圖書寮尊藏[illegible]岩瀨文庫藏（吉田家舊藏）及び孟子（圖書寮尊藏東洋文庫・太宰府天滿宮文庫（卷一至四缺、三冊））の二本があり、大學は未だ管見に入らないが、恐らく四書として刊行せられたものと思はれる。なほこの四書と關聯して考ふ可きは、林鵞峰が吉田素庵の刊行といふ所謂嵯峨本史記と傳稱せられる史記古活字印本（慶長十一年以前刊、傳本の一、蓬左文庫藏本は雲母摺の原表紙を存し、又、單に色紙の表紙なるも優良なる原裝を保存する傳本も[illegible]）の活字が、下村生藏刊四書の其れを若干襲用してゐる點であつて、然らば、右の史記印行の主體であつたと考ふ可き角倉與一を中心に、下村生藏及び次に附言する下村時房等多數の工匠並びに印刷事業關與者の一群が活躍を行つてゐた當時の出版界

角倉與一と下村時房

第八一圖

の發展の有樣を、これ等多數の資料を通じて、髣髴する事が出來るのである

次に、卷末に「下村時房刊之」の刊記を有する慶長中刊行の平*家物語（活字印本。この書、卷八ノ卷首一葉のみ、初め章段見出しを脱し、後之を補ひて刷改む。卽ち、傳本に兩種あるなり。）の雕刻者、下村時房は同姓なるが故に前記の下村生藏と極めて密接なる關係に立つものであらうとは直ちに考へられるのであるが、角倉與一が元和四年に本書を尾張敬公に獻上してゐるのと、（尾州家蓬左文庫藏、舊時の藏書目錄）前記の如く嵯峨本史記等を中心として考へられる角倉與一と下村生藏との關係とを併せ考察するならば、兩下村の關係も亦角倉を挾んで著しく接近して來るのである。なほこれが所謂「嵯峨本」の刊行に關して再檢討を要す可きは後に述べる事とする

下村姓を名乘る舊家は京洛に於いて「大丸」を始め少くない樣であるが、これ等先人に關しては未だ考究し得ない。（先頃、齋藤昌三氏の示教に據り、故下村觀山畫伯家は代々時房を以て稱する舊家なる由にて、同家につき過去帳を拜見するの幸を得たるも、寛永以前に時房なる名は發見する能はざりき。同家はもと京洛にあり、後に紀州へ移りしと言ふ。）

七　一條清和院の開版事業

一條清和院の活字開版

一條清和院（新義眞言宗智山派）はなほ現存してゐるが、同寺に於いても往時の開版事業に就いては所傳を失つてゐる樣である。管見に入つた刊記ある開版書は、慶長十六年刊行の俱舍論頌疏（三十卷、十四冊）の一本であるが（京都府史蹟調査報告）、同じく慶長十七年の華嚴五教章は明かに同種の活字同版式を以て印行せられてゐるから、同院の開版に係る事は疑ひもない。華樂刊經史（大屋德城氏）には華嚴五教章を南都關係の開版かと推定せられたが、實は一條清和院の刊行と認む可きものである。かくの如く相當大部の書を印行してゐるのであるから、なほ他にも開版が行はれたものであらうかと思ふ。

第八・一圖

俱舍論頌疏　（二十九卷、二十九冊）無邊、無界、九行十七字。活字大型にして、字面の高さ約七寸五分。叡山文庫二本、一は毘沙門藏（第一卷缺、二十八冊）、天海藏[illegible]あり。二は華*藏八冊（卷九至十四缺）藏・東大寺佛教圖書館藏（二本、一は完本金珠院舊藏十冊、一は缺九冊）・東北帝國大學圖書館藏（卷六缺、二十八冊）・舟橋水哉氏藏（十四冊）・金澤文庫藏（元和二年識語、缺本）の諸傳本存す。

（刊記）　慶長十六辛亥曆孟冬

京一條清和院新刊

第八・二圖

華嚴五教章　（三卷、三冊）俱舍論頌疏と全く同型。上（二十三葉）中（四十三葉）下（六十[illegible]葉）東*大寺佛教圖書館藏（原裝、慶長十九年實英自筆書入。香色原表紙に「清涼院實英[illegible]」の墨書あり。）・人吉願成寺亦缺本二冊藏。

「刊記」慶長十七年壬子十月吉日

戒壇院第二住持示觀長老凝然自筆之點本

寫之訖於左點者以異本寫之早

慶長十九年甲寅二月廿四日花嚴末葉實英

（東大寺圖書館藏本卷末識語）

八　心蓮院の開版事業

心蓮院の倭玉篇開版

慶長日件録の記載

舟橋秀賢の慶長日件録（九年五月廿五日の條、前記參照）に「心蓮院へ行倭玉篇一字板令見物畢」とある。心蓮院は今は無いが、もと元和寺の塔頭で、藏書の富があつた。和玉篇を印行してゐるのを以て見れば、なほ他にも内外典の活字開版が行はれたものと推定せられる。然るに現存和玉篇の古活字印本は無刊記本のみ二種（三版）あつて、版式上共に慶長中期を降らぬ頃の刊行と認められるから、其の何れも之に該當す可き性質を有し、他に確證なき限り、何れが眞の心蓮院版に當るものか、又は二種（三版）共に心蓮院版であるか、凡て未詳である。併し、恐らく心蓮院版は其の中に包含されてゐるのであらうと推定せられる（古典保存會複製安田文庫藏古活字版倭玉篇解題參照）。

第一、二種

六行五段組本

乃ち、次に其の二種（三版）に就いて略述する事とする。

其の一は安田文庫の一本（三巻、三冊）で、龜田次郎氏も亦下巻一冊を藏せられる（四周雙邊、有界、六行、五段、配字、匡郭内、縱八寸一分、橫五寸二分、[illegible]片假名附訓植版。）是には版式等の樣式を若干異にする同種活字の異植版が存在する（大槻茂雄氏上中二巻、中島仁之助氏下巻藏）（書誌學二ノ二「[illegible]倭玉篇に關する二三の新見」參照）。

六行四段組本

其の二は、内容は全く同一であるが、活字の樣式及び組み方の全然異なる一本であつて、是も亦版式上慶長中の刊行に相違ないと思ふ。是は水戸彰考館文庫所藏（小山田與清納本）の一本を見るのみである（雙邊、有界、六行四段組、匡郭内、縱七寸、橫五寸四分五厘）。

九　寶藏寺の開版事業

寶藏寺の活字開版

寶藏寺の開版事業は前記諸寺院より稍年代を降つて、寛永年間の刊行に係るものである。同寺は淨土宗西山派に屬する。（現に京都市蛸薬師裏寺町にあり。）管見に入つたものは左の二書である。一は寛永二年刊妙法蓮華經、二は寛永十七年刊觀經四帖疏楷定記(三十六卷、十五冊)である。

寛永二年刊科注妙法蓮華經　第八十七圖

科注妙法蓮華經（八卷、十冊）久原文庫藏（四周雙邊、有界、八行十七字、匡郭内縱六寸七分半、横五寸五分半。）

〔刊記〕于時寛永二年十月日於洛陽三條寺町
寶藏寺摺刊之畢

第八十八圖

觀經四帖疏楷定記(三十六卷、十五冊)　龍谷大學藏（四周雙邊、無界、九行十九字。縱七寸五分半、横五寸三分半。）安田文庫藏（觀經正宗分散善義楷定記[十一卷、十一冊]寛永十七年刊）

〔刊記〕寛永十七庚辰年八月吉日
洛陽三條於寶藏寺令印判之者也
比丘來譽林香

一〇　高臺寺の開版事業

［高臺寺の開版］

高臺寺に於ける開版事業とも見る可きものに禪林類聚（二十卷、四冊）があり、其の卷末に左の刊記がある。高臺寺の開版に係るものと認めてよからうと思ふ。

於洛陽高臺寺　參來之徒拔出之誤多々

于時　慶長十八（癸丑）菊月吉辰

［第八〇番］

傳本の管見に入るもの、高木文庫藏の一本がある。（四周單邊、無界、每半葉十行、每行二十字、匡郭内縱七寸六分、横五寸五分。）本書は後に整版として覆刻せられた一本がある。東洋文庫藏本（四冊）は第一冊のみ活字印本で、他は覆刻整版本であるが、四冊とも同じ原裝を有する點から見て原來補配を以て完本を爲すものの如く、整版本の出現が活字印本に對して餘り著しい時差のない事を示すものであらうと思ふ。

一一　妙心寺に於ける開版事業

妙心寺に於ける宗鐵の活字印行

第一一圖

當代の禪宗に於ける寺院の活字印行の振はない間にあつて、妙心寺住侶の宗鐵は慶長末年から元和初年にかけて若干の宗門書を印行した。宗鐵在住の點より妙心寺版と稱する事が出來ようと思ふ。其の第一は雲門匡眞禪師廣錄であるが、是は他の一切の眞名活字印本の書風が楷書であるのに對して稍行書體を加味した肉太の活字で、甚だ趣きを異にしてゐる（雙邊、有界、十行二十字。匡郭内、縦七寸七分、横五寸三分。卷首字のみ一葉整版。）これと同種の活字を以て印行した無刊記本の「鎭州臨濟慧照禪師語錄」（雙邊、有界、十行、十八字。成簣堂文庫藏、武州金澤金龍院舊藏）一冊がある。之も恐らく宗鐵の開版であらうと思ふ。元和に入つて印行した兩書は寧ろ元和勅版皇宋事寶類苑に極めて類似した版式を有してゐる。

次に宗鐵印行の有刊記の三書を表示すると左の如くである。

雲門匡眞禪師廣錄　三卷　三冊　京都府立圖書館・安田文庫・久原文庫・成簣堂文庫・東洋文庫・岩瀨文庫・松本文三郎博士藏

〔刊記〕慶長癸丑歳仲春月洛陽　宗鐵重刊

一本書は行書體の活字を用ふ。

增集續傳燈錄　六卷　四冊　靜嘉堂文庫・久原文庫・成簣堂文庫・谷村一太郎氏藏

〔刊記〕續傳燈錄者古來日域未有板行今使工摸寫焉竟畢其功冀后代不朽矣元和丙辰二年小春良辰　宗鐵誌之

宗派圖　二册　兩足院藏

〔刊記〕元和三歳仲秋月壁庵宗鐵校勘

高尾・槇尾に於ける開版事業

二　高雄・槇尾に於ける開版事業

其の他京洛の寺院に於ける活字開版として管見に入つたものはないが、高雄山に於いて寛永八年に菩薩戒本（一冊）（刊記）寛永八年於高雄山摺之畢。—明治大正古書價の研究（水谷不倒氏）があると謂ひ、又、これと關聯して、整版本ではあるが、槇尾山平等心王院に於ける寛永十年刊新刪定四分僧戒本（一冊、筆者藏）がある。卷末刊語の末に「于時寛永十年極月日槇尾平等心王院常住　施主備前州受謙道雪」とある。然るに、右の他新たに「脩華嚴奥旨妄盡還源觀」（一卷一冊、安田文庫藏）の活字印本が存する事が發見された（無邊無界、十行十七字。字面の高さ七寸。）卷末に左の刊記がある。

于時寛永八年七月八日

於槇尾平等心王院　摺寫之畢

整版本にして近世初期に於ける寺院版を求めるならば、なほ種々なる版經等が存在するであらうと思ふが、茲には以上諸院の活字開版に就いて述べるに止めたのである

第二節　地方寺院の開版事業

地方寺院の開版事業

京都諸寺院に於いて活字開版事業が隆昌を極めた事は前節に於いて述べた如くであるが、慶長初年要法寺内に活字開版事業が起ると間もなく、叡山・野山等に於いても亦其の開版に活字印刷術を採用する樣になつて、京洛の寺院にも優る隆盛を來した。次いで簡便なる活字印刷の技術は各地方に於ける寺院の佛典印行をも誘發する原因を爲し、奈良を初め、近畿地方、東海・關東地方等の寺院の活字開版事業には注意す可きものがある。卽ち、中世後期より次第に興起しつゝあつた地方寺院の出版が活字印刷術の利用に據つて益々隆盛に赴いたのである。

一　叡山に於ける活字開版の盛行

叡山に於ける古活字版の盛行

京洛の諸寺院にも增して寺院に於ける活字開版事業が最も盛んに行はれたのは叡山である。京洛に接近して、財力も豐富であり、且つ、僧坊並びに其の學僧も頗る多數であつたから、玆に開版事業の盛行を見る可きは當然である。叡山の古活字版に就いては、

古本の蒐集

在來吉谷清氏が日光輪王寺の藏書を紹介したもの（考古學雜誌大正十二年一月第十三ノ五號　水原堯榮師高野版ノ研究三二八頁以下に）目錄等の他、殆ど知られなかつたが、叡山に於いて諸藏の典籍を集めて新たに叡山文庫を

創設して以來、漸く其の豐富なる叡山活字版の存在が明らかとなつた。昭和六年秋叡山文庫創立十周年記念として催された同文庫の展觀の後、同文庫主事獅子王圓信師に據つて發表せられた「叡山版の研究」（研究會學報第五輯、昭和七・四、專修院本科研究會）は新しい紹介として注意す可きものである。今玆には、叡山文庫其の他の諸庫に於いて搜査し得た資料に據つて、叡山に於ける活字開版の盛衰を見ようと思ふ。

初期の叡山活字版

慶長八年刊摩訶止觀科解・科註天台四教儀 第九・一〇圖

現存資料の示す限りに於いては叡山に於ける活字開版は京洛の要法寺等より兩三年後れて慶長八年頃から始つてゐる。管見に入つた最古の叡山活字印本は慶長八年刊の摩訶止觀科解（十卷、二十六冊）科註天台四教儀（六卷、六冊）（西谷覺林坊秀憲刊。）で、次いで慶長九年刊法華玄義科文（十七冊、東塔月藏坊刊）同十年刊法華文句科解（二十三冊）慶長十六年刊法華三大部私記（三十冊）*科註妙法蓮華經（十冊、東塔月藏坊刊（東北帝國大學（序補鈔）東洋文庫・成簣堂文庫・谷村一太郎氏・春日政治氏藏））等が、慶長中の印行に係るものである。

元和より寛永前半に亙る約二十年間は叡山版の最も隆盛を極めた時期であつて、就中、其の上梓が元和四年と寛永三年とに集中せられてゐるのは、何等かの事由に據るものと思はれるが、未だ究める事が出來ない。次に管見に入つた元和寛永中の叡山活字印本を列擧すると左の如くである。（諸本の所在は原則として一箇處のみ注記するに止める。）

元和寛永中に於ける叡山活字印本書目

第一章

元和二年刊　維摩經略疏（十卷、十冊）雙邊、無界、十一行、二十字。匡郭内、縱七寸五分半、橫五寸七分半。叡山文庫藏天海藏

止觀義例隨釋（六卷、三冊）西塔南谷摺　雙邊、有界、八行、二十字。匡郭内、縱七寸八分、橫五寸二分半。安田文庫藏寛知舊藏

三年刊　涅槃經疏（十五卷、十五冊）（東塔摺）雙邊、無界、十一行、二十字。匡郭内、縱七寸五分半、橫五寸四分半。叡山文庫藏天海藏樹坊榮仙識語

涅槃經疏には行款等同一なる一本あり匡郭内縱七寸橫五寸五分無刊記なるも元和寛永中の印行にして、右の叡山版に基けるもの。東洋文庫完本十五冊・成簣堂文庫卷一至四寛永二十年日乘識語あり藏

守護國界章（三卷、九冊）西塔北谷正觀院摺　雙邊、無界、十一行、二十字。匡郭内、縱七寸五分、橫五寸五分。叡山文庫藏天海藏山門正觀院識語。

四年刊　眞言宗敎時問答（四卷、四冊）（無動寺摺）單邊、無界、十一行、二十字。匡郭内、縱七寸六分五厘、橫五寸五分。安田文庫・谷村一太郎氏藏

心地敎行決疑（六卷、六冊）西塔南尾摺　雙邊、無界、十一行、二十字。匡郭内、縱七寸五分半、橫五寸五分。叡山文庫藏

一乘要決（三卷、三冊）　叡山文庫藏

授決集（二卷、二冊）寶幢院摺　單邊、無界、十行、二十字。匡郭内、縱七寸六分、橫五寸二分半。帝國圖書館藏青蓮院舊藏・叡山文庫藏天海藏・東洋文庫藏

本書には卷末刊記をも其の儘に飜字せる後刻活字印本存す。兩種成簣堂

第九四・九五圖

文庫に藏せらる。（成簣堂善本書目二六〇頁及び本書圖版參照）

天台四教儀十二卷、十二册（單邊、無界、十一行、二十字。匡郭內、縱七寸六分半、橫五寸四分半。）　叡山文庫藏（別當代藏（惠心院舊藏））

法華玄惑（二卷、二册）（雙邊、無界、十一行、二十字。匡郭內、縱七寸二分、橫五寸六分。）　安田文庫藏（眞如舊藏）

天[*]台名目類聚鈔（十一册）（寶幢院撰、序の末に快倫誌さあり。）版。（單邊、無界、十一行、字數不等。匡郭內、縱七寸一分、橫五寸四分。附訓植）　叡山文庫藏（毘沙門堂藏、卷末に「圓慶之」の識語あり。）

菩薩戒義記（二卷、二册）（雙邊、無界、十一行、二十字。匡郭內、縱七寸二分半、橫五寸六分。）　安田文庫藏（眞如舊藏）

觀世音經疏（二卷、二册）（雙邊、無界、十一行、二十字。匡郭內、縱七寸二分、橫五寸七分。）　叡山文庫藏（華藏。「南樂房覺賢」識語あり。）

五年刊　天台法華宗牛頭法門要纂（一卷、一册）（單邊、無界、十行、二十字。）　成簣堂文庫藏

寬永元年刊　七帖要文（七卷、七册）（單邊、無界、十一行、十一字。橫本。匡郭內、縱四寸一分五厘、橫五寸九分。）　叡山文庫藏（天海藏）

二年刊　法華經論（一卷、一册）（單邊、無界、十行、二十字。匡郭內、縱七寸六分、橫五寸三分五厘。）　叡山文庫藏（華藏。「章海寄附焉」識語あり。）

隨身鈔（四卷、四册）（無邊、無界、十行、二十字。）　成簣堂文庫藏

科註妙法蓮華經鈔（十二卷、十二册）　人吉願成寺藏

「刊記」旹寬永二乙丑曆梅月下旬吉辰刊摺之」

三年刊　天台法華宗學生式問答（八卷、一册）（雙邊、無界、十行、二十字。匡郭內、縱七寸六分、橫五寸三分。）　成簣堂文庫藏

唐決集（二卷、二册）（單邊、無界、十行、二十字。匡郭內、縱七寸六分、橫五寸四分。）　叡山文庫藏（天海藏）

註無量義經（三卷、一册）（單邊、無界、十一行、二十字。匡郭內、縱七寸六分、橫五寸七分五厘。）　叡山文庫藏（天海藏）

寬永三年刊集解要文附載の開版書目

無界、十行、二十字。成簣堂文庫藏)・觀普賢經記(二卷、二冊、元和寬永中刊、單邊、無界、十一行、二十字。成簣堂文庫藏)・法華秀句(三卷、五冊、元和寬永中刊、雙邊、無界、十行、二十字。成簣堂文庫藏。)・四念處(四卷、二冊、元和寬永中刊、無邊、無界、十行、二十字。成簣堂文庫藏)等も其の版式其の他の點より見て叡山に於ける活字印行であらうと思はれる。

なほ玆に注意す可きは、先に獅子王圓信師に據つて指摘せられた寬永三年刊集解要文の卷末に開版書目が附載せられてゐる事で、此の書目は何れも活字印本と推定せられるが、是に據つて寬永三年以前に多數の叡山活字印本が行はれてゐた事が知られる。其の半は未だ其れと明確に現存資料を指示し得ず、今後の調査に俟つ可きものであるが、集解要文と同種の無刊記の活字印本(四分角の活字)に、維問答(有目錄に丁數なし。寬永三年以後の刊行か(高木文庫藏))傳法正宗記(寬永七年刊)(帝國圖書館・東洋文庫・安田文庫・大阪府立圖書館・高木文庫等藏)等があるから、其れ等も或は叡山版であらう。又、次の目錄に見える「釋氏要覽・佛祖統記・飜譯名義集」(共に無刊記本)等の活字は同種のものである。なほ又、元和末年の江戸刊行の活字印本も其の活字の樣式が同一であり、且つ、何れも次の書目中に見えるもののみであるのも注意す可き事である。

目錄

此一部校合之時私加紙數於諸章疏之下然世流
布之本木橫豎之字算多有不同者以故右所勘之
本誌于別紙畢矣

一　佛祖統記　十一行二十一字（無刊記本に集解要文と同種活字印本あり）
一　名義集　十行二十字但勘細字（仝上）
一　釋氏要覽　十行二十字但勘細字（仝右）
一　守護章　十一行二十一字（元和三年刊本行欵版式合す）
一　山家義苑　十行二十字
一　一乘要決　十行二十字（成簣堂文庫藏一本行欵版式合す）
一　秀句　十行二十字（前記成簣堂文庫藏一本行欵版式合す）
一　授決集　十行二十字（元和四年刊・同後刻本行欵版式合す）

大分記之

叡山版の三塔別

以上の如き叡山の三塔の谷々で學侶の手に成つた開版を、三塔別にすると、次の各院で行はれてゐる。東塔が最も盛んで、横川には殆ど擧ぐ可きものがない。（獅子王圓信師「叡山版の研究」四頁）

東塔　比叡山東塔　止観院佛母谷　西谷覺林坊　比叡山無動寺　淨土院
　　　比叡山紅葉溪　山門遺教院　千光院　龍珠院　比叡山南谷
西塔　山門寶幢院　西塔北谷正觀院　西塔南谷正光院　西塔南尾　山門正藏院
　　　常樂院　金台院
横川　四季講堂

開版に關與せる僧徒

然し、各僧院の刊行關與の僧徒の名を現はしてゐるものは極めて少數で、慶長八年に四教儀集解・科註四教儀を開版した秀憲（西谷覺林坊）と、摩訶止觀科解（慶長八年）・法華文句科解（慶長十年）を開版した月藏坊の眞慶・亮憲、及び寶幢院刊天台名目類聚鈔（元和四年）に識語を誌してゐる快倫の四人に過ぎない。

其の中、快倫は、元和四年に寶幢院に於いて天台名目類聚鈔に長文の刊語を誌してゐるが、他の刊行書に據れば、播州書寫山松壽院に棲住し、慶長十八年には、書寫山北丘として法華經文字聲韻音訓篇集(三卷三冊、高木文庫・叡山文庫・杉浦三郎兵衞氏藏)[illegible][illegible]を、又、寛永十九年には、義例私註(二冊、整版、叡山文庫藏)を刊行してゐるから或は少くとも此の兩書は、「書寫山版」と稱してよからうと思ふ。然し、何れにしても叡山に於ける活字開版と最も密接なる關係を有するものに相違ないから、叡山版中に併せて論ずるも、亦不穩當ではあるまい。乃ち、玆に附記する所以である。

法華經文字聲韻音訓篇集(三卷三冊)

刊語　于末冒慶長十八癸丑年三月日理教房快倫誌之

純好刋之

義例私註(二卷二冊)

刊記　寛永壬午七月書寫山松壽院退寮快倫書

寛永十九年壬午八月中旬摺之

版式の變遷

叡山の活字版に於ける版式の變遷に就いては、附訓植版の發生の他には別に注意す可き特色もないが、活字の大いさは、慶長初期のものは大きく、次第に小型になつて行く傾向がある事は近世初期活字印本と一般である。匡郭に就いて見ると、慶長中は雙邊で

あつたのが、元和中には一半は單邊となり、寛永初年には匡郭の無いものが增加してゐる事が注意せられる。

附訓植版の發生

附訓植版は、叡山版に於いて初めて採用せられた新しい試みであらうと思ふ。元和四年寶幢院摺刊の天台名目類聚鈔が最初である。寛永年間には、往生要集抄寛永三年刊・宗要柏原案立同九年刊等が存する。京洛の坊刻本と認む可き元和六年刊庖言抄等に施された附訓植版は、叡山版の影響に據るものであらう。又、附訓植版の樣式は高野山の活字印本にも多くの影響を及してゐるものと思はれる。

叡山に於ける外典の開版

叡山に於ける活字開版事業に於いてなほ注意す可き事は、其の僧院に於ける外典の開版である。前記の如く清原秀賢の慶長日件錄に據れば、月藏坊に於いて慶長十年前後に毛詩及び左傳の摺刷を行ふに當り、秀賢に種々の指導を仰いでゐる。現存の毛詩及び左傳の古活字印本中には其の刊記を有するものは見當らないが、月藏坊所刻の慶長

月藏坊の刊行せる毛詩と左傳

十六年刊科註妙法蓮華經と同種活字の毛詩及び左傳は現存する。卽ち、其の版式上、月藏坊所印と認む可きものである。左傳及び毛詩の古活字印本に關しては後章に於いて述べる。

叡山に於ける出版事業の發生

以上に據つて見れば、叡山内の各院に於いて僧徒の手に成つた活字開版事業が如何に隆盛を極めたかがわかる。かの天海僧正の一切經の活字開版も一にはかゝる山内の

狀勢から導き出されたものである事をも知るのである。然しながら此の山内の活字開版の盛行も、寛永中期に及んで漸く出版書肆の手に委ねられる樣になり、活字印本は整版本となつて、寺院内に於ける自給の出版は跡を絶つてしまふのである。正保四年刊行の十六章所依の刊記（右此本自叡山依被仰付所開板者也　正保四年二月吉日　長谷川市兵衛）は其の現象を明示する好適の資料であつて、更に降つては、坂本の門前に叡山學書の開版を專らとする書林が生ずるに至り、稽古堂佐野某は江戸中期に榮えた。又、京都にも延暦寺の藏版に基いて發兌する台宗書林が若干存續した。

この寺院内に於ける自給的の活字出版が出版書肆の發達を促し印刷事業を企業として成立せしめるに有力なる支援となつた當時に於ける著しい現象を、前記の本能寺、後記の高野山に於ける場合と同樣に、叡山版の發達に就いてもよく伺ふ事が出來るのである。

二　高野山に於ける活字開版

叡山と共に最も活字開版の隆昌を極めたのは野山である。中世期に於ける野山の刻書は、其の質に於いては必しも衰退を示さなかつたけれども、其の樣式は次第に粗惡に陷する傾向となつた。

賴慶・朝印と三要

然るに慶長初年に至つて、版式の精美した復古的なる刻書の開版再興の氣運と共に、賴慶・朝印（高野板の研究二九四至二九六頁）等、德川家康に召された學僧の手に據つて、京洛の地に發現した活字印刷術が採用せられる樣になり、茲に野山開版史上に一新期劃をなしたのである。賴慶等が其の活字印刷術を新に採用するに至つたのは、圓光寺の三要に負ふものと認められる。（高野板の研究二七一頁）

最初の高野活字本

本書眞言初心要鈔の刊開

其の最初に現れたものは、慶長九年の賴慶跋の光明眞言初心要鈔（一卷、一冊）であると言はれてゐるが、是は寛永頃に附訓植版の活字印本として現れたものであつて、慶長九年に賴慶が跋文を附した寫本に基いて刊行したものと認められる（宋原流宗師と對談中に一致す）。

慶長十四年刊秘密曼荼羅十住心論

乃ち、高野山に於ける活字印本の最初に現れたものは、慶長十四年に寶龜院朝印を願主として、幸悦宗安淨善に據つて開版せられた秘密曼荼羅十住心論（十帖）である。次いで慶長十五年幸悦所刊の左の四書がある。

慶長十四年刊曼荼羅

仁王經開題・大日經開題・阿字義・梵網經開題（各一帖）

これ等慶長中の活字印本には、高野版の傳統的なる裝幀、兩面摺帖裝が用ひられてゐる。之は他の寺院活字版には殆ど見られぬ所のものである。

元和寛永年間に於ける野山の活字開版に最もつとめたものに尾州丹羽郡丹下淨善がある。慶長十四年の秘密曼荼羅十住心論にも關與した他に左の如き刊行書がある。

十住心廣名目　元和三年刊（六冊、東長寺藏）

百法問答抄　元和九年刊（九冊、日光天海藏）

玉澤不渇抄　元和十年刊（二冊、成簣堂文庫藏）

王印抄　寛永三年刊（六冊、阿波國文庫・成田圖書館・京都帝大圖書館藏）

（性靈集）寛永三年刊（但し整版、十冊、成簣堂文庫藏）

開心鈔　寛永四年刊（三冊、日光天海藏・東洋文庫（其中）・阿波國文庫藏）

開心鈔には寛永元年西院刊本あり（刊記「高野山於西院開之　寛永元年八月十六日」高野山親王院・高木文庫藏）

秘密曼荼羅十住心論　寛永五年刊（十帖、遍照光院藏）

秘密漫荼羅教付法傳　寛永八年刊（二帖、高野山寶龜院藏）

廣付法傳聞書　寛永十一年刊（三冊、高野山寶龜院藏）

大毗盧遮那成佛神變加持經疏　寛永十四年刊　(三十二帖、成簣堂文庫藏)整版か。

釋論名目　(二冊、叡山文庫藏)

釋論名目私鈔　(一冊、高野山一乘院藏)

寶光院應宣の活字開版

以上の諸本は附訓植版本が多く、又、寛永年間寶光院應宣の印行に係る活字印本も亦、同じ様式の附訓刻本であつて、漢字の間(上下)にレ點及び數字を、右傍行間に送假名(片假名)を施してゐる。この形式はやはり叡山版に範を學んだものと認められる。應宣の開版した活字印本は左の二本である、

三教指歸鈔　(十卷、十冊)　高木文庫藏

(刊記寛永八年辛未三月仲旬　於高野山開板應宣

第一〇四圖

古筆拾葉抄　(六冊)　叡山文庫藏

(刊記右古筆鈔於高野山往生院開印板

寛永十二年乙亥九月吉日應宣開之

寛永後半に於ける蓮福院の活字開版

寛永の後半には蓮福院刊行の活字印本が數種存在する

表白集　寛永十二年刊　(八帖)

第一〇五圖

諸尊表白鈔　寛永十五年刊　(八帖)

地藏引導等　寛永十六年刊　(十帖)

秘藏記　　寛永中刊（三帖）

〔寛永十九年刊月輪觀秘釋 [illegible]〕

高野山に於ける最も後出の活字印本は、寛永十九年刊行の月輪觀秘釋（一帖、水原堯榮氏藏）本書には別に開題言の無刊記本一帖あり、毎面七行行十七字、春日政治氏藏。

刊記「于時寛永拾九壬午暦仲秋吉辰日

於高野山往生院寶藏院開板之」

〔高野山に於ける活字の若干、活字の種類、大小 [illegible]〕

高野山に於いては活字印本と同時に整版本の開版も併行して相當に行はれてをり、此の點は他の寺院版と稍趣きを異にする。然しながら、叡山其の他の寺院の場合と同じく寛永を過ぎると、各院で行はれた開版事業が山内の書肆の手に委ねられる樣になつて其れと同時に活字印本も其の姿を沒してしまふのである（高野板の研究三四五頁以下）。なほ附言す可きは、當時使用した木製活字の若干が高野山西禪院に現存してゐる事である。水原師に據れば、總數三千二百三十四個。之を檢するに種々樣式の異つたものが合流して殘存してゐるものと認められる。但し、其の高さは一定し約六分強、底部には切込みなく、小型のものは、三分七分弱（十一粍）四方、大型のものは、四分強（十三粍弱）四方、注字雙行に使用する小型細目のものは、橫三分三厘強、縱二分の大いさである（本邦高野板の研究二六七、三四四五頁參照）。

奈良諸寺の活字刊經

興福寺に於ける二の活字開版

第一二一圖

二　奈良諸寺の活字刊經

奈良諸大寺の開版事業は、中世後期に至つても、興福寺を中心とする刊經はなほ衰へなかつたのであるが、近世初期に於いては、甚だ微々たる狀態となり、現存資料の示す限りに於いては、活字印刷術に據る摺刷も極めて僅少である　大屋德城氏が寧樂刊經史に紹介せられたものは華嚴五教章(慶長十七年刊)と行事鈔(慶長十二年刊)との二書であるが、其の中の華嚴五教章は實は一條清和院の印行と認む可きものに相違ない事は前述の如くであつて、(本書二九二頁)現在の所、奈良の地に於ける寺院開版の活字印本は、行事鈔一部のみである。

行事鈔　一帖　律宗勸學院藏

（刊記）慶長十二丁未暦五月七日

大和州添上郡於元興寺極樂律院摺寫之

然し、東大寺佛教圖書館には現に慶元乃至寬永年中に作製せられた木製の活字が若干殘存してゐる　江戸末期にも活字を新雕して佛經の摺刷を行つたものと覺しく、現に殘存してゐるものの大部分は、其の新しい樣式を有するものであつて、其の中に少數の古活字が混在してゐる。然し、古活字は、新雕の活字に比して高さ稍低く、約六分、大いさ

東大寺現存の古活字　第一二[illegible]圖

は略同大で、底部は切込みなく、横四分強、縦三分五厘である　注雙行に使用した細目の小型活字、及び○印の見出し符號等も僅少發見される　即ち、是等古活字の殘存、殊に其の磨滅の跡の著しいのを以て見れば、東大寺中に於いても當時活字開版が相當盛んに行はれてゐた事を知る事が出來るのである　未だ其の徵證ある印本の殘存するものが發見されてゐないのは殘念である　他日の研究を期する。

四　三州平地善宗寺の活字開版

京都を中心とする地方を遠く去つて、三河國では、平地（ひらち）善宗寺（蓮如上人舊蹟、後寺在を變じて現在福岡町内土呂にあり。）に於ける良心の阿彌陀經秘直談鈔の開版がある。版式の整つた優れた様式を有するものである。（三巻三冊、毎半葉八行、十七字。字面の高さ約七寸二分。良心阿直（巻數）（丁數）。叡山文庫（香色原表紙存す。大いさ縦八寸八分、横六寸一分。）京都帝大圖書館・岩瀨文庫二巻二冊（上巻缺、中下藏））

（刊記）右此秘直談一部三巻者爲末代改略誤

之文字印潟畢

峕元和七年辛酉　九月日　沙門良心

三州於平地善宗寺　梓刊

五　下總龍澤山大巖寺の活字開版

當時淨土教關係の活字開版を最も盛んに行つたのは下總國生實郷（千葉縣千葉郡生實町）の龍澤山大巖寺である。同寺住源譽隨流上人（越前侯に聘せられ、慶長十三年福井に運正寺を開く。後生實に歸り、寛永十三年寂）の發願に據り、雲龍の上梓したもので慶長十一年より同十八年に至る慶長後半期に專ら行はれてゐる。

釋淨土二藏義　三十卷、十冊（釋良忠撰）　刊記に據れば慶長十一年より同十四年に至り完成せるもの。　久原文庫（身延文庫舊藏）・成簣堂文庫藏

選擇傳弘決疑鈔　五卷、二冊（釋良忠撰）　慶長十四年刊　叡山文庫藏

（慶長十七年第二版あり、村口半次郎氏藏。）

（慶長十九年第三版あり、安田文庫藏。[illegible]）

觀念法門私記　二卷、一冊（釋良忠撰）　慶長十六年（八月）刊　叡山文庫藏

法事讃私記　三卷、一冊（釋良忠撰）　慶長十六年（八月）刊　叡山文庫藏（[illegible]）

往生禮讃私記　二卷、一冊（釋良忠撰）　慶長十六年（十月七日）刊　叡山文庫藏

觀經四帖疏傳通記　十五卷、五冊（釋良忠撰）　慶長十七年刊　叡山文庫藏

（慶長十二年以前に一版あり、京都某中堂藏。[illegible]參照。）

第一〇九圖

神田新智恩寺幡隨意院の智譽上人

安樂集*　二卷、一冊(唐釋道綽撰)　慶長十八年刊　叡山文庫藏(天海僧正手澤)

其の活字は極めて樣式の粗拙なるものであつて、無邊無界、每半葉九行、又は單邊(選擇傳弘決疑鈔(縱七寸一分・橫五寸。)・釋淨土二藏義)字詰は、十八字、字面の高さ約六寸八分。(觀念法門・法事讃・往生禮讃私記)十九字(釋淨土二藏義(十八字の部分もあり。)・選擇傳弘決疑鈔)・二十字(觀經四帖疏傳通記・安樂集)等若干の相違がある

叡山文庫藏の諸本は天海藏舊藏の美本で何れも原裝を保存し、天海僧正の手澤本である。

なほ淨土教關係の活字開版が、或は武州邊でも行はれたのではあるまいかと推定せられる由中島仁之助氏より同氏所藏の淨土略名目圖見聞(無邊、無界、九行十九字。二卷二冊。)の卷末識語を以て示教せられた。(書誌學第四卷第一號七七頁)其の上卷には、右此名目一部兩卷神田山新知恩寺開山演蓮社智譽幡隨意上人御座下堪忍之切求之早　本譽寺山下卷には右此名目神田新智恩寺方隨意和尙御座下ニ而　師匠并二親爲成佛也　本譽法幡割の識語があつて、神田新知恩寺幡隨意院は慶長九年智譽上人六十三歲の開基で、同十三年武州熊谷村熊谷寺へ轉住してゐるから、智譽上人が新智恩寺在住の期間に之を求めたものとすれば、この書は慶長中期の印行となり、又法幡割を法幡刻と解し得るとすれば、同時期に開版が行はれたものと考へられるといふのである。然しながら、慶長中期の開版であるる事は其の識語及び版式に據つて確かであると思ふが、其の割は、本文に句讀點を施した意ではないかと思はれるので、同時期新智恩寺内の印行と考へる事はなほ早計であらう。乃ち、茲に附

記して後考を俟つ事とするが、關東地方にも相當文運が啓けてゐた事だけはこれ等に據つても考へられると思ふ。

六　下總飯高法輪寺の活字開版

下總國飯高法輪寺の活字開版

關東地方の活字開版としては、同じく下總國飯高の法輪寺に於ける元和年間の印行がある。管見に入つた資料は成簣堂文庫所藏の左記數種であるが、なほ多數の開版を見たものと思はれる。法輪寺の僧徒が新刊の佛典を多數收藏してゐたらしい事は、寛永中刊日蓮上人註畫讃（久原文庫藏、寛永十八年識語の次に、飯高法輪寺求之高月日浩（花押））の識語に據つても知られる。法輪寺は日蓮宗に屬するから、當時に於ける京洛の同宗派の盛んなる活字開版事業の影響を蒙つたものに相違ない。

本漸寺の乾龍上人

飯高郷より餘り隔たらぬ東金の本漸寺に學僧として著明なる虔龍上人などが在住し、佛典の收藏に務めてゐたのに相應じた貌を爲してゐる。殊に寺内に僧徒養成の機關（法輪學校）を有してゐたので、佛典開版事業を起す必要に迫られたものであらう。地方版であるから、龍澤山版と同じく其の版式等は極めて粗拙である。管見に入つた法輪寺版は成簣堂文庫の左の三書である。

新學行要抄　一冊（無邊、無界、七行十七字、字面高さ約七寸）

〔刊記〕下總州香取郡飯高郷法輪學校之工匠等幸覓此一本輙鏤梓矣所慨者雖積年累月爲生産之謀天性不敏晴字或囫圇避俗正或弗知所從非況匕匕之形乇乇之類乎欲請於大家刪削之以其不差耳

元和第八壬戌年十月十四日

法華玄義釋籤　十冊

【刊記】於下總國飯高梓刊

元和九年癸亥潤八月下旬

・妙法蓮華經玄義（零本）一冊（卷三）（附圖二十七圖版六）

當時の地方版と覺しき版式の粗拙なる活字印行の佛典には、往生要集義記（八冊）、觀經正宗分散善義（四冊）、觀經玄義分傳通記（零本一冊）等を成簣堂文庫に一見してゐるが、なほ在來知られず、今後の研究に俟つ可きものも少くないと思ふ。

日蓮宗關係の活字印行

地方の寺院版に就いては以上を以て終るのであるが、最後に江戸開版の活字印本に關して記述する前に一言附加す可きは、往々にして日蓮宗關係の印行と認む可き僧徒の刊記等の加へられたものが存在する事である。修證心印（一卷、一冊、久原文庫藏）無邊、無界十行二十字　字面高さ約七寸三分　卷末刊記「寛永第九壬申霜月朔日　中山第九世寂靜院日賢記」其れ等は刊行者の傳記等も詳かでない爲に、寺院版か否かも明白ではないが、或は身延山其の他同宗の有力な寺院でも亦宗義書の活字開版が行はれたのではあるまいかと思ふ。安田文庫藏（寛永頃の印行）誘供受不受論記（一冊）の稚拙な樣式を有する活字印本は或は身延山版等と傳稱せられてゐるものである。然し、身延山に就い

て自から調査を行つたが、明治初年の火災に罹つて資料は全く佚亡して何等の手掛りをも見出す事が出來ない　乃ち、御書目錄日記之事（鈴鹿三七氏藏　寛永後半頃の古活字印本、立正安國論（無邊無界、八行十八字。字面の高さ約六寸五分。）の前に附す。）に據れば、四十冊百四十八種の宗義書が開版せられてゐる、間々其の不完本に接するが、完本は水戶の彰考館文庫等に存する　其の中、開目抄（二卷、二冊、高木文庫藏）の如く片假名交りの印本も存する　其の開版地等凡て明確ではないが、恐らく京洛ではあるまいかと思ふ。其の略目錄を示すと左の如くである

日蓮宗御書四十冊の古字印行書目

(一)立正安國論　(二)(三)開目抄　(四)(五)撰時抄　(六)(七)報恩抄　(八)観心本尊抄（以上五大部）
(九)法華取要抄・本尊問答抄　(一〇)守護國家論　(一一)法華題目抄・唱法華題目抄
(一二)顯謗法抄　(一三)一代大意（他二書）　(一四)佐渡御勘氣御文（他三）　(一五)法蓮抄
(一六)兄弟抄（他四）　(一七)法華行者値難事（他十二）　(一八)身延山傳書（他二）　(一九)三三藏祈雨事（他六）
(二〇)千日尼御前御書（他三）　(二一)持法華問答抄（他三）　(二二)初心成佛抄（他一）　(二三)阿彌陀堂法印祈雨事（他六）
(二四)秀句十勝御書　(二五)大田禪門許御書　(二六)教機時國抄（他二）　(二七)八幡抄（他三）　(二八)十如是事（他十一）
(二九)頼基陳狀（他四）　(三〇)善無畏抄（他三）　(三一)御書（聞計事 存知事）（他四）　(三二)不可親近謗法者事（他七）

(三三)南條殿御返事(他三)　(三四)大田殿女房御返事(他六)　(三五)法華眞言勝劣(他七)　(三六)一念三千事(他二)

(三七)眞言見聞(他二)　(三八)立正觀抄(他七)　(三九)戒體即身成佛義(他五)　(四〇)四恩抄(他三)

七　「江戸」に於ける初期の印刷文化

中世期に至るまで京洛以外の地方に於いて出版せられた所謂地方版は、春日版高野版を除いては、極めて少數であつた　西南地方は交通其の他の關係もあつて少いながらも地方版として比較的見る可きものもあつたが、關東地方に於ける出版のまことに寥々たる有樣であつた事は上述の如くである。即ち、武州江戸の地域で行はれた出版は、

江戸の地域に於ける最古の出版

應永十五年刊佛說阿彌陀經一卷一帖(增上寺藏)で豐嶋小石川談所に於いて增上寺の開山西譽聖聰上人の開版に係るものが最も古いものである。

然し、明かに「江戸」と稱した刻本の最も古いものは何かと言へば、現存資料の示す限りに於いては、應永年間より約二百年を隔てた元和年間刊行の天台學に關する古活字印本である。管見に入つたものは左の五種で、共に元和六・七年に刊行せられてゐる。

(一)法華肝要略注秀句集　二卷　一冊　高木文庫・龍谷大學藏

〔刊記〕豈元和六年庚申五月吉日　武州江戸　開板

(二)山家義苑　二卷　一冊　成簣堂文庫藏

〔刊記〕　武州江戸　開板

于時元和六年庚申七月二十四日

(三)助顯唱導文集　五卷　五冊　叡山文庫藏(天海藏)

刊記　時元和六年庚申十二月日　華林　日徳
本妙　日慧
從正本於武州江戸梓刊　晋乘　日通

(四)釋門自鏡集　二卷　一冊　成簣堂文庫(今東洋文庫藏)

刊記　于時元和七年辛酉三月日　於江戸梓刊

(五)拂惑袖中策　二卷　一冊　久原文庫藏

刊記　於江戸梓刊

何れも同一の活字を以て印行せられ、活字の樣式は特別に優れてはゐないが、整つた版式を具へたものである。共に四周單邊、無界、毎半葉十行、毎行二十字。法華肝要略注秀句集を例とすれば、匡郭內、縱七寸四分五厘、橫五寸。他の諸本も略々同大である。助顯唱導文集の卷末刊記に僧侶の名が見えるが、其の開版者の性質を明かに爲し難い。其の盡く天台學書なる點より恐くは、未だ寬永寺の造營を見なかつた當時に於いて、川越の喜多院に棲住してゐた天海僧正を中心とする天台僧侶の江戸に於ける活動の現れではあるまいかと思はれる。然らば、叡山に於ける當時の盛なる活字開版事業の影響に基くものであつて、後年、寬永末期より天海僧正が、一切經の活字印行を發願する若干

の準備となつたものであらうと思はれる

天海僧正の一切經活字開版

寛永後半より始つた天海僧正發願の一切經の刊行も、江戸に於ける極初期の出版として著しいものである。坊刻本には寛永年間の年號刊記ある江戸版を未だ發見する事が出來ないから、元和年間の天台學書活字印行に次いだこの天海版の一切經は、江戸に於ける初期の出版として頗る注意す可きものと言はねばならない。天海版の一切經は慶安二年まで繼續出版せられ其の後年は整版をも用ひてゐるが、寛永後半に着手せられたものは、木活字印行で、其の活字は今も上野寛永寺に殘存してゐる。天*海版の一切經は坊間に散見するもの少く、其の完本は寛永寺を初め、叡山文庫(三部)海禪寺・川越喜多院・仁和寺青蓮院・西本願寺等に現存してゐる。各書の末に願主天海僧正の跋文があつて、末に「林氏幸宿花溪居士使工人雕鏤之」の刊記がある。其の慶安元年に於ける一切經新刊印行目錄(西本願寺藏)の跋文は天海版一切經刊行の事狀を見る可き好資料であつて、「寛永十四丁丑三月十七日始刊行之到慶安元年三月十七日經歷十二年而終其功焉云々」と見えてゐる。其の活字も寛永寺に殘つてゐる。

天海版一切經以外の江戸版

天海版一切經を除いて江戸に於ける極初期の出版は、最初、武鑑並びに紋盡し、指物揃の類と江戸繪圖とに現れた樣である。武鑑は、正保三年刊行の江戸版(安田文庫藏)があり、是は横本で、旗本等を主とした一冊である。江戸繪圖等の刊行も上方版より遙かに遲れて

ある。江戸が出版界の中心勢力を持つ様になつたのは、かなり後からの事で、元祿頃から漸次、江戸の出版界は上方と對立して其の一中心を爲すに至つたのである

（追記）

妙法蓮華經玄義（古活字印本。十卷十冊。無邊無界、七行十七字。字面高約六寸八分。）の末に、

天台三大部項者叡山承詮之開板盛行諸徒以教授焉退而省之復非無其失故挍訂玄義釋籤而鏤梓然猶恐有遺志差脫庶幾後君子有質焉時元和四戊午五月下旬四日洛下　沙門　華林沙門　實乘

の刊語があり、其の刊行者は沙門華林・實乘の兩名となつてゐる。卽ち、之に據れば元和四年には京洛に於いて之が出版に關與し、二三年後には江戸へ下つて助顯唱導文集（元和六年刊、前記三二六頁參照）等の刊行に從事したものと解せられるのである。

第六章　坊刻活字印本の發達（其の二）

第一節　坊刻本の發達に於ける醫師の活動と醫書の開版

民間特志の出版と書肆業者の出版

爲政者寺院等の開版事業の深き影響を蒙り、民間特志の開版事業と密接なる關係を保持しつゝ次第に發達し來つたのは、出版書肆業である。其の發達の原因に就いては、茲に再言を避け、唯其の狀態を述べようと思ふ。但し、當時に於ける民間特志の出版と書肆業者の出版とは、明瞭に辨別し難いものが少からず、特志の出版と稱するものが著しく書肆業としての性質を帶びてゐたものとも言ひ得るのである

坊刻本

在來、是等を坊刻本と總稱するのは適當なる稱呼である　なほ又、出版當事者に就いては、工匠と發行者とが判然分化してゐない爲に、其の兩者の關係も極めて複雜であつて、其の手掛とす可き資料の乏しいこの方面の研究は、なほ困難なるを免れない

醫師の活字開版

其の坊刻本の極初期に現れたものに、醫師の關與したものが多いのは注意す可き事である

小瀬甫庵

如庵宗乾

小瀬甫庵が豐臣秀次の侍醫であつた事は言ふまでもなく、慶長四年に元亨釋書（三十卷、十冊。（刊記）于時慶長四年己亥月日　日東　洛陽如*庵宗乾　摸行　京都帝大・東洋文庫・成簣堂文庫藏）同九年に徒然草（壽命院）抄（二卷、二冊。（刊記）慶長九暦閼逢執徐姑洗良辰　日東　洛陽

醫方大成發提（等一冊、安田文庫藏。雙邊、有界、八行十五字。原裝。匡郭内、縱五寸六分、横四寸三分。）及び慶長九年に醫方考（六卷、六冊、圖書寮尊藏・久原文庫（卷一缺））藏を出版した。（新增醫方大成發提（刊記慶長八年癸卯臈月既望洛陽醫德堂刊）・醫方考（刊記慶長第九甲辰四月十二日　醫德堂刊））

なほ新鍥雲林神彀・醫方大成論等と同種の（無刊記）活字印本に、格致餘論（圖書寮尊藏）・傷寒明理方論（一卷、一冊、久原文庫藏。雙邊、有界、十行、十八字。匡郭内、縱六寸八分、横五寸、香色原表紙存す。卷末に慶長十五年玄朔講讀本の奥書を移寫せり。）・察病指南（三卷、一冊、高木文庫藏（寛永四年識語）・久原文庫藏。雙邊、有界、十一行、十六字。原裝。原題簽附。匡郭内、縱六寸、横五寸一分五厘。）・節齋醫論慈谿王汝言著（一冊、久原文庫藏。雙邊、有界、十二行、十七字。匡郭内、縱六寸三分、横五寸六分。）等がある。

梅壽軒の刊行書目

梅壽軒は其の後を繼いだ貌で、慶長後半より元和・寛永に及んだ　主として明刊本を飜印したものであつて、其の刊記に重刊とあるは覆明刊本の意を現はしたものである　現存明かなる活字印本刊行書目は左の如くであるが、中には元和寛永中整版として覆刻せられてゐるものも少からず發見される。

黄帝内經素問註證發微　九卷補遺一卷　十二冊　圖書寮尊藏（林羅山舊藏）・高木文庫・久原文庫（十冊、待賈堂舊藏）

（刊記）慶長十三戊申年十二月日梅壽重刊

醫方大成論　一卷　一冊　安田文庫藏

（刊記）慶長己酉（十四）初夏良日梅壽重刊

黄帝内經靈樞註發微　九卷　六冊　圖書寮尊藏（林羅山舊藏）

（刊記）慶長十四己酉年六月日梅壽重刊

醫方大成論　一卷　一冊　高木文庫藏

（刊記）慶長庚戌季春良日梅壽重刊

素問入式運氣論奧　三卷　一冊　圖書寮藏（[illegible]）　京都帝大圖書館久原文庫藏

（刊記）慶長十六辛亥初冬吉辰梅壽重刊　　東洋文庫藏

本草序例　一卷　一冊　東北帝國大學狩野文庫藏（[illegible]）杉浦三郎兵衛氏藏

（刊記）慶長十七年季夏良日　梅壽重刊

難經本義　二卷　二冊　成簣堂文庫藏（中島舊藏の島津家に贈りたるもの）

（刊記）元和三年歳舍丁巳仲秋之吉梅壽重刊

十四經發揮　三卷　一冊　中島仁之助氏藏

（刊記）元和四年歳舍戊午初春良日於洛陽二條梅壽刊行

雲林神彀　四冊　帝國圖書館（冊四）高木文庫（冊一）藏

（刊記）元和六年歳舍庚申仲冬良日於二條梅壽重刊

和名集幷異名製剤記　二卷　一冊　大島雅太郎氏藏

（刊記）元和九年歳舍癸亥季春良辰日梅壽疏之以刊行

名醫類案　十二冊　東洋文庫藏

刊記于時元和九年歳舍癸亥臘月吉辰猪子梅壽刊行

傷寒明理論　　二冊　太宰府神社藏

刊記寛永元年歳舍甲子季秋吉旦　梅壽刊行

保赤全書　三卷　三冊　內閣文庫藏

刊記寛永元年歳舍甲子季秋吉旦　梅壽刊行

十四經發揮　三卷　一冊　小川五郎氏藏

刊記寛永二年歳舍乙丑仲夏良日於洛陽二條　梅壽刊行

素問入式運氣論奧　三卷　(合)一冊　高木文庫藏

刊記寛永第二歳舍乙丑季冬良日　梅壽重刊

*格致餘論鈔　四卷　四冊　陽明文庫藏（片假名交り）

刊記寛永三年歳舍丙寅初秋良日　梅壽刊行

第一二四圖

坊刻醫書

以上の諸本は一種の活字を以て印行したものではなく其の種類は多數に上つてゐるが、何れも小型である事は一致してゐる。

其の他に坊刻の醫書としては、刊記のあるものに次の數書がある　中にも雲州と紀州との冠稱を有する刊行は注意す可きものであらう　殊に平宣政の刊行に係る醫方大成論は版式の整つた美事な刻本である　實際の仕事は恐らく京洛に於いて行はれた

ものであらう。

新刊明堂灸經　三卷　一冊　成簣堂文庫藏（中排本）

（刊記）慶長十三年三月吉日

醫方大成論　十卷　一冊　中村積德堂藏（單邊、無界、九行十八字。縱七寸、橫五寸。目各二、本文六十一葉）

（刊記）慶長壬子（十七）仲秋日於雲州鹽氏平宣政開板

儒*醫精要　一卷　一冊　成簣堂文庫藏

（刊記）慶長甲寅（十九）仲春吉日　紀州和歌山見義堂梓

脈語　二卷　二冊　東洋文庫藏

（墨書識語）慶長甲寅求之（四周雙邊、毎半葉十行、二十字。）

歷代名醫傳略　二卷　二冊（法眼意安撰）　成簣堂文庫藏

（刊記）于時元和丁巳姑洗上澣日刊行

〇歷代名醫傳略にはなほ慶長二年の序ある慶長中刊本圖書寮藏、東洋文庫藏及び上層欄に標識せる慶元中の一本上卷一冊安田文庫藏の二種の古活字印本存せり。

新鍥丹溪先生醫書纂要心法　三冊　安田文庫藏

（刊記）元和七（辛酉）年南呂穀旦　寺町（三條）黑澤源兵衛開版

醫學源流（醫書大全之附）　一卷　一冊　安田文庫藏

（刊記）元和七年辛酉季冬良日重刊

局方發揮抄（片假名抄）　二卷　一冊　安田文庫藏

（刊記）于時寛永五戊辰暦長夏下旬　刊行之

玉機微義　　五十卷　十二冊　東洋文庫・久原文庫藏

（刊記）新町通町頭　盧甚左衛門室町藥師町　宇野善五郎寛永第五戊辰暦八月吉辰　繍梓

泰定養生論（玉機微義同種活字印本）　一卷　一冊　久原文庫・杉浦三郎兵衛氏藏

刊記曽寛永第七稔龍集上章敦牂白藏夷則吉辰活板焉新町通町頭　盧甚左衛門室町藥師町

宇野善五郎

食性能毒（二卷）・日用灸經（片假名交り一卷）　一冊　安田文庫藏（雙邊、無界、九行十六字。小本）

（刊記）右之一冊爲初學蒙士記焉慶長第二歳舍丁酉仲夏初吉延命院法印元訥寛永八辛未歳仲春

吉辰重刊

難經捷徑　　二卷　二冊　帝國圖書館（松澤老泉手識あり。）・東北帝國大學狩野文庫藏

刊記寛永十四丁丑年孟秋中旬　二條通觀音町風月宗知刊行

第二十六・二十七圖

無刊記の醫書古活字本

無刊記本に至っては頗る多く、前に併記した諸本の他に、新刊黄帝明堂灸經（三卷一冊。挿圖。慶長十三年刊本と異り、別に後印の異植字本あり。共に安田文庫藏。）・重刊東垣十書（一卷、一冊、成簣堂文庫藏。雙邊、無界、大字八行十字。）・格致餘論（醫德堂刊本と同種活字印本（圖書寮尊藏）と別種たるもの三種あり。共に安田文庫に藏す。）・醫方大成論（慶元中刊、單邊、無界、十一行二十字。一冊。安田文庫藏。）・十五指南篇（三卷一冊。高木文庫藏。慶長中刊。雙邊、無界、十二行

十八字。・新刊明醫雜著一卷、一冊。慶元中刊。上欄外に陰畏文字植字雙邊、無界、十行、十九字。匡郭內、縱七寸五分、横五寸五分、久原文庫藏。・醫書大全論一冊、上行二十字。小型活字、十一行、字の大さ八行十二字。陽明文庫藏。・新刊湯液本草三卷三冊、雙邊、無界、十一行二十字。小型活字、匡郭內、縱六寸二分、横四寸九分五厘。卷中活字を縱横斜面に配字刷印せる部分あり。久原文庫藏。・辨證配劑醫燈三卷二冊、雙邊、無界、十三行二十一字。小型活字。匡郭內、縱三寸七分、横五寸一分。久原文庫藏。・八十一難經一卷一冊。乙酉中刊、谷村一太郎氏藏。

片假名交りのもの

等、又、片假名交りのものには、(南北經驗)醫方大成論抄二冊、陽明文庫藏、雙邊、無界、十二行片假名交り。匡郭內、縱七寸一分、横五寸五分。・日用灸經寬永八年刊、一冊。安田文庫藏。・濟民記三卷三冊、横本、東洋文庫・安田文庫藏。・美濃醫書一卷一冊。寬永中刊、十四行片假名交り。字面の高さ約三寸七分。高木文庫藏。

等がある。

醫書と朝鮮本の底本

なほ陽明文庫には、醫學入門十二冊・古今醫鑑八冊等がある。

醫書の類は朝鮮本の飜刻が多く、活字の樣式のみに止らず、其の本文をも底本としてゐる事は朝鮮の印刷文化の我國に及した影響の更に大いなるものあるを見るのである。

朝鮮本の外に、唐土の刻本の飜刻は、殆ど明刊本に基いてゐる。

第二節　佛書活字坊刻の隆昌

附、坊刻活字印本刊行者名表

醫書坊刻の隆盛と相並んで佛書の類も亦、寺院に於いて出版せられると同時に、書肆關係に於いても次第に多數の出版が行はれる樣になつた　坊刻と認む可き有刊記本中佛書が多數を占めてゐる點より見ても、寺院版が出版書肆の發達を誘導しつゝ、遂に其の位置を讓るに至つた過程が察せられる、　又、茲に坊刻活字印本の佛書中、殊に禪宗關係のものが大部分を占めてゐるのは特異な現象であつて、卽ち是は當代禪宗寺院の活字開版事業の不振と相關的の地位に立つものと言ふ可きである

寺院版と坊刻の佛書

禪籍坊刻の勢況

次に、刊記ある坊刻の佛書活字印本を列擧すると左の如くである

第一八圖

天台四敎儀集註　三卷　三冊　高木文庫（眞如藏舊藏）・神田喜一郎氏（上中二卷整版、補配下卷一冊）藏

（刊記）慶長第五庚子歲臘月下澣吉辰　正雲刊之

第十八圖

元亨釋書　三十卷　十冊　東北帝大・東洋文庫・成簣堂文庫・安田文庫・高木文庫・久原文庫・藥田元次氏・谷村一太郎氏・正宗敦夫氏藏

（刊記）慶長乙巳歲仲夏日　下村生藏刊之

日蓮上人註書讃

日蓮上人註書讃　五卷　一冊　成簣堂文庫藏

（刊記）慶長戊申曆十月十日功畢　工匠琳齊日慈

日蓮上人註畫讃には古活字印本數種あり。其の最古きは、慶長龍集舍于辛丑(六年)無射仲九逢功
[illegible]巳顯主俊長日燈印造清純日源校勘鶯山日顯の刊記ある一本(雙邊無界七行十七字)(叡山文庫藏)なり。
又刊記の末に「于時寛永二龍集乙丑正月念四日成功畢」とある寛永二年刊の一本(久原文庫藏)及
「于時寛永四龍集丁卯南月念五日成功畢」の刊記ある一本(高木文庫藏)あり。

第一二〇圖

五家正宗贊　四卷　四册　東洋文庫・成簣堂文庫・高木文庫・久原文庫(二本)・岩瀨文庫・松
　　木文三郎博士・谷村一太郎氏・杉浦三郎兵衛氏藏

(刊記)慶長十三戊申仲秋吉辰西京花園一枝軒板行之

第一二一圖

中村長兵衛刊五家正宗贊の異植字

五家正宗贊　四卷　二册　杉浦三郎兵衛氏藏(雙邊無界九行十七字、匡郭高七寸七分、幅五寸一分)

(刊記)慶長十三戊申仲秋吉辰富小路晝州寺町　中村長兵衛尉

本書と其の活字更式全く同一なる異植版あり。共に杉浦氏の蔵架にあり。

第一二二圖

中村長兵衛刊祖庭事苑

祖庭事苑　八卷　四册　東洋文庫・成簣堂文庫・谷村一太郎氏藏(寛永中刊同版一部のみ現存)

(刊記)陰刻　洛陽富小路通晝州寺町　中村長兵衛刊

祖庭事苑には本書に先行せる元和寛永中刊の無刊記古活字印本存す。(東洋文庫・成簣堂文
庫藏、十卷十册)(雙邊無界八行十四字)

大慧普覺禪師書　二卷　二册　久原文庫藏(慶長十四年刊の本書と書誌同じ)

(刊記)富小路通晝州寺町　中村長兵衛

本書には、下卷第三十八葉以下整版を交じへたる亂版あり(久原文庫・高木文庫藏)(高木文庫古活字版目錄八七)

照）、其の整版の部分を襲ひて全部整版とせる一本（久原文庫藏）あり、活字版より亂版、亂版より整版を生じたる要法寺版論語と同じ事情のもとに成立せるものなる事明かなり。又別に慶元中刊無刊記活字印本あり。（成簣堂文庫藏）

黄檗山斷際禪師傳心法要　一卷　一册　久原文庫藏

（刊記）富小路讃州寺町　中村長兵衛尉

五燈會元　二十册　阿波國文庫（三文庫舊藏）・東洋文庫・成簣堂文庫・久原文庫藏

（刊記）寛永乙亥（十二年）重陽日洛陽富小路通讃州寺町　中村宗遵重刊

大乘起信論疏　三卷　三册　松本文三郎博士・大島雅太郎氏・谷村一太郎氏藏

（刊記）惟時慶長第十七壬子暦仲秋良日　日本若耶府利庵正節模行洛陽飯田久左兵衛門勝家新刊

無量壽經鈔　七卷　七册　東洋文庫・大島雅太郎氏藏（無邊、無界、九行、十七字、字面の高さ約七寸一分）

（刊記）洛陽七條寺内平井近江法橋良専開板于時慶長二十乙卯初夏上旬

（無量壽經疏七卷七册。叡山文庫藏）同じく無邊無界九行十七字の同版式同活字にして、卷末に右望西樓七帖一部者爲末代興際損落改文字開板摺寫之畢　旹慶長十九甲寅歳三月二十五日願主大僧都の刊記あり。黄紙摺。なほ無刊記本なるも勸心往生論亦同種活字印本なり。

秘藏記　一卷　一册　成簣堂文庫・大谷大學藏

（刊記）慶長十二暦丁未九月上旬

遍照發揮性靈集　十卷　十册　安田文庫藏

刊記「於洛陽寺町市右衛門開板之慶長十九暦甲寅仲夏吉日」

遍照發揮性靈集の古活字印本には、前記寛永三年刊高野版の他に、慶元中刊雙邊有界九行十八字本（成簣堂文庫・久原文庫藏各三冊）、及び慶元中刊雙邊有界七行十四字本（帝國圖書館藏、十冊）天海僧正手澤等あり。

黒谷聖人傳繪詞　四十五卷　十冊　成簣堂文庫・龍谷大學藏*（[illegible]）

刊記「于時寛永三（丙寅）暦孟夏上旬於四條寺町大文字町中野市右衛門開之」

佛果圜悟眞覺禪師心要　二卷　二冊　東洋文庫藏

刊記「于時寛永三年（丙寅）中秋下旬於洛下四條寺町中野市衛門尉刊摺之」

南浦文集　三卷　三冊　帝國圖書館（存卷一）・成簣堂文庫・東洋文庫（[illegible]）・安田文庫・森潤三郎氏藏

刊記「寛永乙丑（二年）仲秋四條寺町校正刊行」

禪儀外文集　二卷　二冊　帝國圖書館（[illegible]藏）・東洋文庫・靜嘉堂文庫・久原文庫・叡山文庫（天海藏）・谷村一太郎氏藏

刊記「寛永三（丙寅）卯月上旬於四條寺町校正刊行」

元亨釋書*　三十卷　十冊　東洋文庫・成簣堂文庫・岩瀬文庫（[illegible]）藏

刊記「元和三丁巳暦孟秋上旬　洛陽二條通鶴屋町　壽閑開板」

元亨釋書の古活字印本には、前記慶長四年如庵宗乾刊行本・慶長十年下村生藏刊本の二先行本あり。

長嶋世兵衛開板

禪宗無門關抄　二卷　二册　安田文庫藏（片假名交り）

（刊記）元和八戊戌歲立夏吉辰　洛陽　存故刋之

禪宗無門關抄　二卷　二册　成簣堂文庫藏（片假名交り）

（刊記）寬永元甲子年立夏吉辰　加校合　洛陽重刋

禪林類聚　三十卷　四册　兩足院・布施卷太郎氏藏

（刊記）於越前國靈泉寺二代日雷澤和尙之假名點細被付置候不殘一點校合悉致精誠畢

　于時元和六庚申極月吉辰　二條通仁王門町長嶋世兵衛開梓

禪林類聚の古活字印本には高臺寺版（慶長十八年刊）の他、慶元中の開版と認む可き雍州住人小林滿介刻之の刊記、各册（四册）の末に存する一本（谷村一太郎氏・金澤市立圖書館藏・安田文庫・久原文庫・高木文庫藏（不完））あり。

禪門秀句集　二卷　二册　成簣堂文庫藏

（刊記）于時元和七酉　五月吉辰　長嶋世兵衛開板

摧邪輪抄　一卷　一册　神宮文庫藏

（刊記）右此書七十卷摺寫旨趣者奉爲　宗徹道意大禪定門證大菩提也　願主深譽仰誓信女　元和七酉曆四月望云爾

鎭州臨濟慧照禪師語錄　一卷（雙邊無界九行十八字）　一册　谷村一太郎氏藏

（刊記）元和壬戌歲孟春朝　金宣重刋

今宮には慶長十一年に四體千字文整版の刻あり。

鎮州臨濟慧照禪師語錄　一卷　一冊　久原文庫藏

（刊記）元和九年孟冬吉日洛陽　重刊

鎮州臨濟慧照禪師語錄　一卷　一冊　高木文庫藏

（刊記）寛永四丁卯歳仲秋吉辰加校合　重刊之

なほ臨濟錄には、慶長中妙心寺宗鐵刊、雙邊有界十行十八字の古活字印本あり。（成簣堂文庫藏）

佛果圜悟禪師碧巖集　十卷　五冊　成簣堂文庫・神田喜一郎氏藏

（刊記）寛永三年丙寅暮秋中旬　洛陽於押小路新刊

鹽山和泥合水集　三卷　三冊　陽明文庫藏（[illegible]）

（刊記）寛永丙寅林鐘日　板開

天目中峰和尚廣錄　三十卷　十冊　成簣堂文庫藏

（刊記）于時寛永四丁卯年三月吉辰刊之

天目中峰和尚廣錄　三十卷　十冊　高木文庫・久原文庫藏

（卷末跋文）寛永四歳在丁卯春三月下浣　前南禪最岳元良誌

宗門正統箋　十二卷　十四冊　東洋文庫（[illegible]）・安田文庫・成簣堂文庫・中島仁之助氏藏

（刊記）日蓮宗顯信女印寫宗門正統錄若干部施充三十三回忌之佛事伏希仁女百年之後[illegible]

力永覺女流速到佛地」　寛永丙寅（三年）八月吉辰

本書には同種印本にして刊語なく、十三巻、十五冊として正法山六祖傳・正妙山妙心禪寺記を加へたる一本(東洋文庫・岩瀬文庫・成簣堂文庫藏)あり。

天台三大部補注　十四巻　十四冊　成簣堂文庫・九州帝大松濤文庫・中島仁之助氏藏

(刊記)寛永四年丁卯歳於洛陽尾張町河面半衛門　刊行

修習止觀坐禪法要　一巻　一冊　成簣堂文庫藏

(刊記)于時寛永六己巳曆二月日　開板

淨土略名目圖見聞　杉浦三郎兵衞氏藏

(刊記)寛永四丁卯曆十二月中旬

他に同種活字異植版なる無刊記古活字印本(高木文庫等藏)あり。又其の先行の無刊記本もあり。(無邊無界、九行十九字。中島仁之助氏藏、前記參照)慶長中期刊。其の再版(同種活字)鈴木靈眞氏藏。

又寛永元年刊一本もあり。(布施卷太郎氏藏、二冊)

(刊記)寛永元年甲子八月中旬

徹選擇本願念佛集　二巻　二冊　藤堂祐範氏藏

(刊記)于時寛永五戊辰曆孟春下旬

他に無刊記本なるも同種活字印本にて、徹選擇集(二巻一冊)・徹選擇本末口傳抄(一巻一冊)藤堂氏藏の二本あり。

往生要集抄　三巻　八冊　京都帝國大學藏

（刊記）于時寛永五戊辰曆二月吉日刊摺之畢五條因幡堂大堀付拔町清吉

寛永三年刊叡山版の飜印なる可し。

安樂集私記　二卷　二册　鈴木靈眞氏藏（寛永六年識語あり）

（刊記）于時寛永五戊辰曆卯月吉日刊摺之畢五條因幡堂大堀付拔町清吉

釋淨土二藏義　三十卷　十五册　鈴木靈眞氏藏（大正十二年震災燒失）

（刊記）于時寛永五戊辰曆卯月上旬於洛下大佛橋通醍醐町道以刊之

寛永中の無刊記本（無邊無界十一行二十字あり。（佛教專門學校藏）

決疑鈔直牒　十卷　五册　京都帝國大學藏

（刊記）于時寛永己巳初冬上旬大佛橋通於伝屋町長井七左衞門開之

傳述一心戒文　二卷　二册　安田文庫・杉浦三郎兵衞氏藏

（刊記）寛永十五戊寅曆四月中旬十五日刊行畢

山家義苑　二卷　一册　成簣堂文庫藏

（刊記）于時寛永二十年癸未九月上旬

本書には前記元和六年江戸版の古活字印本あり。

西山上人緣起　一卷　一册　禿氏祐祥氏藏

（刊記）正保三丙戌歲三月日（麩屋町通船屋町）版木屋宗兵衞開之

天台四教儀備釋　二卷　二册　成簣堂文庫藏

（刊記）正保三年七月吉日　寺町三條上町　庄右衛門

以上の中には、或は刊行の年月のみを存するもの等には、寺院版であつて、坊刻本ではないものもあるかもしれない。又無刊記本中には坊刻本も頗る多數存在するであらうと思ふ。以上の有刊記の坊刻本を通觀するに、禪籍が最も多數を占め、天台學書・淨土教學書等が其の次に位してゐる。當時の佛典の坊刻活字開版の大勢を見る爲には、廣く無刊記本をも盡して之を概觀す可きであるが、手許に蒐集した資料の限りに於いては、有刊記本に現れてゐる比例は卽ち、無刊記本をも併せた活字印本全體の比を示すものと言ひ得るのである。

佛典の活字開版と當代各宗の教學

但し、茲に、其れ等各宗の敎學の反映を坊刻の佛典に見る場合に、寺院版の問題の外になほ整版本の問題がある。佛典の整版本は元和年間より次第に現れて寛永年間には頗る多數を算するに至つた。其れ等整版本の開版の傾向をも併せ考察して始めて當時に於ける佛典印書事業の上より各宗派教學の狀を察知する事が出來るのである。けれども整版を併せ考察しても亦前述の如く坊刻有刊記の活字印本を以て考察すると同樣の結論を得る事が出來るのである（附錄古活字印本刊行年表參照）。

片假名交り印本

以上の諸印本中、假名交りのものは少數であるが、中世期に比して遙かに其の數を加へたのは、佛典の平明なる解義が次第に公開せられる樣になつたからである。前述の禪宗無門關抄（元和四年・寛永元年刊）・鹽山和泥合水集（寛永三年刊）・黒谷聖人傳繪詞（寛永

三年刊)倶舍論頌疏鈔(寛永中刊、二十六巻、十三冊。附訓植版、成簣堂文庫藏)等の他に、徹選擇抄(藤堂祐範氏藏、一冊)夢中問答集等がある。

就中、夢中問答集は多く行はれて、種々版式を異にするものがある　卽ち何れも無刊記本で、大字本と小字本(三種)とである。

(一)大字本(元和寛永中刊。雙邊、無界、十行。匡郭内、縱七寸五分、横五寸四分。)(東洋文庫・靜嘉堂文庫・石井光雄氏藏)(二)は小字本で、これにまた兩三種植版を異にするものがある。(イ)東京文理科大學(林羅山舊藏)・高木文庫藏(雙邊、無界、十二行片假名交り。縱七寸四分、横五寸七分。)(ロ)安田文庫・東洋文庫藏(雙邊、無界、十二行平假名交り。縱七寸四分半、横五寸六分半。)(ハ)成簣堂文庫藏(雙邊、無界、十二行片假名交り。縱七寸四分、横五寸五分。)

夢中問答集には五山版にも大字本と小字本とがあり、小字本は大字本に基いて飜刻したものと認められるが、(本書第一篇參照)其の兩本が古活字印本に於いて夂、各々の底本となつたものである。

平假名交り古活字印本は佛書に於いては極めて罕であつて、和風安心抄(二巻、二冊。大谷大學藏。十一行約二十一字。)と廿三問答(一巻、一冊。安田文庫藏。十一行約二十一字。匡郭の高さ約七寸五分。夢中問答に據れるもの、或は之に基けるか。廿三ヶ條に亙りて說經す。)とを見るのみである。共に元和寛永中の刊行と認む可きものである。

佛書の無刊記活字印本は其の數極めて多いが、遇目の限り左に列擧する事とする。

讃)本書には他に、無邊、無界十行二十字(三卷、三册)寛永中刊の一本あり。(淨土教古活字版圖錄參照。)**觀心往生慈訓抄**一卷、一册。寛永中刊。無邊、無界。九行、十七字。成簣堂文庫藏。**般舟讃**一卷、一帖、無邊、無界、六行、十七字。字面の高さ約六寸八分。五部九卷(法事讃二卷、往生禮讃・觀念法門・般舟讃各一卷及び觀無量壽經疏四帖四卷なほこの種の大字を以て兩面摺にせる淨土教關係の書少からず。(安樂集二卷二帖(圖書寮藏)・選擇集(東洋文庫・成簣堂文庫藏本も亦其の類なり)の中にして、又異植字版も行はれたる事知らる。(淨土教古活字版圖錄參照)

なほ淨土教關係の無刊記活字印本には、**轉經行道願往生淨土法事讃**二卷、二册、無邊、無界七行、十七字。鈴木眞龗氏藏。**觀心往生論**一卷、一册。無邊、無界八行、十七字(大正)間田平治氏藏。**往生要集**二卷、六册。同上同種活字印本、鈴木氏藏。**淨土宗名目**二卷、雙邊、有界。八行、十七字。京都帝大藏。別に植異版あり。下卷零本。禿氏祐祥氏藏。**大原談義聞書抄**一卷、一册。無邊、無界。七行、十七字。兩面摺。杉浦三郎兵衞氏藏。又別に、異植字版あり。同じく杉浦氏藏。**觀經四帖疏傳通記**十五卷。寛永中刊。無邊、無界。九行、十九字。玄義二缺本。佛教專門學校藏。**選擇傳弘決疑鈔**五卷、五册。無邊、無界。十行、二十字。寛永中刊。杉紫明氏藏。**二藏義見聞**八卷、無邊、無界。九行、十九字。第四・八卷零本。佛教專門學校藏。**教相切紙拾遺徹**二卷、二册。無邊、無界。九行、十八字。大正大學藏。**西方要決釋疑通規**一卷、一册。無邊、無界。九行、十八字。鈴木眞龗氏藏本、卷末に寛永十一年の識語あり。**往生要集義記**三卷、八册。無邊、無界。九行、十八字。佛教專門學校藏。**科文無量壽經**二卷、二册。單邊、有界。九行、十五字。大谷瑩成氏藏。**大經直談要註記**二十四卷、二十四册。高木文庫藏、高木文庫古活字版目錄參照。等がある(淨土教古活字版圖錄參照。)

以上に述べた醫書佛書の坊刻活字印本に加ふるに漢籍・國書總てを併せ古活字印本の刊記に據つて坊刻活字印本刊行者名を表記すること次の如くである。即ち左表に據つて佛書等に比して所謂漢籍・國書に於ける有刊記本が如何に僅少であるかがわかると思ふ。

附、坊刻活字印本刊行者名表

所在	刊行者	刊行書
	飯田久左衞門(勝家)	慶長十七年刊 大乘起信論疏
新町通町頭	盧甚左衞門	寛永五年刊 玉機微義 寛永七年刊 奈迹養生論

姓氏未詳の部

陰山玄佐　寛永元年刊六韜抄・同三年刊史記抄

洞𢿢書院(堂)　慶長十三年刊古注千字文・韻鏡・慶長九年刊四體千字文(整版)

(宗甚)　慶長十四年刊論語集解

春枝　慶長十五年刊太平記・慶長十一年刊四體千字文(整版)

五條因幡堂大堀付抜町　清吉　寛永五年刊往生要集抄・安樂集

台林　元和中の宗存刊本・慶元中刊謠抄

御幸町通二條　仁右衛門　慶元中刊伊勢物語抄・平家物語(十二巻)

友傳　慶長十四年刊論語集解

醫徳堂守三　(前記參照)

才雲　慶長十四年刊太平記

正雲　慶長五年刊天台四教儀集註

二條通鶴屋町　壽閑　元和三年刊元亨釋書

麩屋町通船屋町　宗兵衛　正保三年刊西山上人緣起

大佛橋通醍醐町　道以　寛永五年刊釋淨土二藏義

梅壽　(前記參照)

琳齋日慈　慶長十三年刊日蓮上人註畫讃

金宜　元和八年刊臨濟錄・慶長十二年刊四體千字文(整版)

心也　元和九年刊狹衣

寺町三條上町　庄右衛門　正保三年刊天台四教儀備釋

二條大黒町　助衛門　元和寛永中刊山谷集註

存故　元和八年刊禪宗無門關抄

三條寺町　道意　寛永元年刊平家物語

二條鶴屋町　富杜歌鑑　元和九年刊源氏物語

以上の中には或は寺院棲住の學侶も混じてゐるかもしれないし、又、前述の正運・慈眼・宗純等の如く單に刻工に過ぎぬものもあらうが、單なる工匠と出版業者とは或る點では一致してゐる場合もあつて、其の間の區別は實際に困難なものが少くない。書肆としての實質を具備してゐないものもあらうが、全體として當時相當多數の出版書肆業者が出現活動してゐた事が知られるのである。そして其れ等は集團的に同一地域に在住してゐるものが多かつた事も右の表で判明する。寺町が多いのは、寺院版と坊刻書肆との關係を物語るものであらう。なほ其れに就いては、當時の整版本に關しても併

せ考察しなければならないが、慶長中刊行の整版本は活字版に壓せられて極めて僅少に過ぎず、且つ整版の復興は活字版の隆昌、殊に坊刻活字版の盛況より導き出されたものであつて、右の所論と直接の關係が少い。其れ等は後章に於いて述べる事とする。

地方に於ける坊刻活字本の刊行

茲に當時の坊刻活字印本中注意す可きは、地方版と認む可き刊記を有するものが若干存在する事である。或は地方人士が京洛に於いて出版を行ふに際し、其の生國を表彰するものとも考へられるが、其の刊記あるものは左の如くである。

又は國名を冠せる刊記の

紀州

一、（紀州）平治物語（[illegible]）三卷三冊　京都帝國大學圖書館（中・下）・安田文庫（上・中）・高野辰之博士（上）藏

刊記「紀州那賀郡湯淺梓」

二、儒醫精要　一卷　一冊　成簣堂文庫藏

刊記「慶長甲寅十九仲春吉日　紀州和歌山見宜堂梓」

若州

（若州）大乘起信論　三卷　三冊　松本文三郎博士・大島雅太郎氏・谷村一太郎氏藏

刊記「維時慶長第十七壬子暮往穀良日　日本若耶府利庵正節堂行　洛陽　敦田久右衛門勝家督刊」

雲州

（雲州）醫方大成論　十卷　一冊

刊記「慶長壬子仲秋日於雲州[illegible]氏平宣[illegible]開版」

大乘起信論は京洛に於いて刊行せられたものであるが、若耶府云々に就いては、刊行を

慶長九年若耶府新刊の假名安驥集

企てた利庵の生國を表はしたものと解せられる。但し、若耶府新刊の刊記を有する本が他に存する。其れは整版であるが、慶長九年刊行片假名交り附訓刻本（送假名返點ありて句讀點なし。）の「假名安驥集」十二卷十二冊（内閣文庫藏原裝、原題簽なも存せり。）板木後世まで遺存せりと覺しく、坊間後印の傳本に接する事あり。で、慶長九年八月望の道派叟序あり、卷末に、道派叟謹書とあつて、次に、

于時慶長九甲辰歳仲秋望日　若耶府新刊

の刊記がある。（安驥集は當時行はれたる馬寮法書の一にして、安驥馬寮法と題する古鈔本（五冊）同じく内閣文庫にあり。）即ち、若州に於いて出版が行はれた事を知るのである。

第三節　漢籍の開雕と當代の漢學

活字印刷術渡來以前の漢籍飜刻

次に當代に於ける漢籍の活字飜刻の狀勢であるが、もと外典の飜刻は、鎌倉末期以後、南北朝室町時代を通じて、我が印刷文化が佛教文化の一特質としての存在に過ぎなかつた當時に於いても、學僧の教養其の他の關係から若干行はれてゐた事は既に第一篇に於いて記述した如くである。

活字印刷術渡來以後に於ける漢籍の飜刻

經書飜刻の興隆

活字印刷術渡來以後に於ける漢籍の飜刻は、後陽成天皇の勅版、德川家康の伏見版等、爲政者の獎勵を受け、又寺院内の出版も少からず現れる等、益々隆盛の氣運を示し、大いに坊刻本の勃興を刺戟した。併し、其れ等の經書開版には直接間接に博士家の人々、並びに其の學統を繼承する緇流が交渉を持つたから、其の飜刻の底本には、殆ど其れ等人士の持本たる古注本が用ひられたのである。時には、唐摺の新注系統本を校勘に使用してゐる例（叡山月藏坊所印毛詩等（慶長日件錄記載）前記參照。）もあるが、其の場合にも、底本はやはり我舊時に傳來した、當時に於ける博士家の持本であつた。但し、史子集類には中世期の飜刻本、即ち所謂五山版に基いて飜印せられたものも存在し、其れ等は直接博士家の人々の手を經ないものが多い。

又、寺院に於いて開版せられた經籍の類は殆ど刊記等を缺き、坊刻本との辨別が著しく

困難である　慶長中に開版せられた漢籍は、其の後屢々開版を重ね、元和寛永年間を通じて現れた漢籍の坊刻活字印本は頗る多數に上るのである。この元和寛永年間に隆盛に赴いた坊刻書肆活字印本の漢籍は、先行本の飜印を主とする傾向を有し、當時の新學たる程朱學の書籍は、活字開版せられたもの、子部の若干を除き、經部は僅かに周易程傳（寛永二年中島久兵衛刊）と寛永極末期の孝經大義とを見るのみであつて、新注本の刊行が、活字印刷術の盛行に導かれて再び新しく發展の道を辿りはじめた整版印刷術に據つて、附訓刻本として現れてゐるのは特に注意す可き現象である　其れは新注唱導の黎明期に際して、特に啓蒙として必須の附訓刻本が、技術的方面に於いて活字印刷術に據る事を困難とした事等も一因ではあるが、要するに是は、近世初期の劈頭に於ける我が經學界の大勢を示現するに外ならぬものである

新注本活字印行の状態

中世に於ける新注の學

我が國に於ける程朱學は中世後期より五山緇流の手に據つて我が精神生活界に漸浸し來つたが、岐陽方秀の後を承けた桂庵玄樹が其の後半世を西陲に隱して後は、反つて邊陲の地には新學が講せられる樣になつたけれども、京洛に於いては、依然として舊來の博士家の傳統に支配せられてゐた

博士家の四書

其の中にあつて、大學・中庸の二書のみは、新たに用ひられて、論語集解・趙注孟子に併せて所謂博士家の四書なるものを形成したが、其の他の經書は總て古注を墨守した　慶長

期に入つて、藤原肅（惺窩）の若干の新注講學が德川家康等の容れる所となつたが、惺窩の如きも、なほ單なる新注學者の一讀書子に過ぎず、其の鼓吹する新風は當時に於いてはまだ其の大いなる結實を見る事が出來なかつたのである　無論近世初期に於ける新學の唱導と、其の後世への大いなる影響とは認められる可きものであるが、惺窩を承けた林羅山に至つても未だ其の新學に對する學識は皮相の域に止り、政治的の保護が加へられなかつたならば、文藝復興の氣運に乘じて古注の學より新注の學へ一世を導く先達となる事も頗る困難であつたであらう　かゝる狀勢の中にあつて寧ろ林羅山等の新注の唱導に先立ち之が準備工作として、啓蒙的なる新注學書の出版を行ひ、新注の盛行に大いなる寄與を爲したものが、桂庵玄樹の學統を繼承した人々であつた事は、特に注目す可き事實である　文之乃至如竹の近世初期儒學史上に於ける位置も亦、玆に見出されるのである。

[illegible]

新注學書の開版は、中世後期に於ける唯一の文明延德の薩摩版大學章句を除き、其の後現れたものは、慶長二十年の文之の跋を有し、略當時の刊行と認む可き黃石公素書（一卷一冊、安田文庫等藏）が最初で、訓點を附刻してある　次いでは文之和尚の弟子如竹の手に據つて元和十年に刊行せられた桂庵和尚家法倭點（一冊、附訓整版）がある　之を新注學書開版の準備として、其の後寬永三年に同じく如竹の手に據つて初めて四書集注（整

慶長二十年刊黃石公素書

元和十年刊桂庵和尚家法倭點

文之點四書集注寛永三年刊本

寛永五年刊本

寛永十九年刊本

周易經傳の附訓刻本

版、十冊、松井簡治博士藏)が刊行せられた。この種の啓蒙的なる附訓刻本は相次いで重版が行はれて、管見に入つたものだけでも、寛永五年刊本(成簣堂文庫藏)・寛永九年刊本(刊記「寛永九年壬申孟夏吉辰重刊」京都帝大圖書館藏)等があり、後の慶安四年の刊本は寛永の諸本に比して比較的傳本に接するから、其の行はれた事が察知せられる。

寛永四年に初めて附訓整版本として現れた周易經傳(筆者藏、寛永二十年の木記を加へたるものの成簣堂文庫藏)も亦度々重版せられてゐる。其の間藤原惺窩林羅山等の關係に出たと認む可きものは、寛永五年刊行(松井簡治博士藏)の五經のみである。

かくの如く、盛んに行はれた文之和尚・如竹等の系統を承けた新注學書の附訓整版本の開版は、近世初期に於ける程朱學の發達に寄與する所が甚だ多い。然も是等の新注本が活字印刷術の發達より再び新たなる進展を促された「整版」に據つて出版せられてゐる現象は、極めて注意す可きである。

文祿慶長以來新式の活字印刷法に據つて著しく開發せられた經籍の印行が、我が舊時傳承の古注本に限られ、活字印本としての新注學書が寛永二年の周易傳義等僅少なる例外的存在に限られてゐるといふ事は、少くとも寛永以前に於ける新注の學の弘通が如何なる狀態にあつたかを明示するものであらう。

寛永初期以來、漸く整版本を以て新注本が出版せられる樣になつた事は、其の學の振興

を意味するに外ならない。即ち、當時の印刷文化を通じても亦玆に近世儒學の發達の跡を明瞭に知る事が出來るのである（近世初期に於ける經書の訓點に就いて拙稿書誌學四ノ四參照。）

坊間の漢籍活字印本

活字印刷術渡來以後、最初に現れた文祿二年の勅版は古文孝經であり、慶長勅版も亦其の初めは勸學文、國書ではあるが漢籍に類する錦繡段である。德川家康の伏見版も東鑑の一書を除いては皆漢籍である事は既に詳述した如くである。慶長十年前後には寺院に於いても種々の漢籍活字開版が行はれ、所謂坊刻本としても夙に小瀨甫庵の文祿五年刊補注蒙求がある。其の後現れた坊刻活字印本と認む可き刊記あるもの及び其の他の徵證に據つて刊行年時の限定せられるものも左の如く多數に上つてゐる。後刻の活字印本が順次先行本に基いて續印せられてゐる事は言ふまでもなく、又、活字印本を覆刻した整版本が慶長中より少からず現れてゐるのも、國書に比して、先行の現象と言ふ可く、當時に於ける漢籍出版が、印刷文化の上に優越なる地位を占めてゐた事がわかる。

かくの如く活字印刷術渡來以後、漢籍の印行が先づ最初に發達したに就いては種々なる原因が考へられるが、其れ等は後章に於いて述べる事とする。次の表記を前述の佛書醫書並びに後記の國書の其れと併せ勘へると更に當代に於ける坊刻本の大勢が一層明瞭となる。（論語其の他に據つて刊行年時の限定せられるものをも併記して置く）

論語　十卷　二冊　東洋文庫・靜嘉堂文庫・京都帝大圖書館藏

（靜嘉堂文庫藏本識語）此間珠者以大學博士清原秀賢本寫點輙莫許他之一瞬可秘（慶長七年清原秀賢刊本孝經と同種活字を用ふ。）

慶長龍集第八夏五吉辰瀧川豐前守

史記（嵯峨本傳）　一百三十卷　五十冊　内閣文庫（慶長十二年識語菅得庵手澤）・東北帝大狩野文庫（改裝）・京都府立圖書館（丹表紙原裝）・東洋文庫（二本）・久原文庫（森立之舊藏）・蓬左文庫（雲母摺原表紙存す）・鍋島侯佐賀内庫所（一冊缺）・栗田元次氏（一冊缺原裝）・高木文庫・大阪府立圖書館（十冊缺）・成簣堂文庫（零本一部）・靜嘉堂文庫（零本二冊）・新村出氏（零本）等藏

（成簣堂文庫藏本識語）慶長十二丁未秋八月以東福善惠軒之本新加朱墨倭點者也

其の識語に之より後の年時を記るせるものはなほあり。

纂圖附音增廣古註千字文　三卷　一冊　高木文庫藏

（刊記）慶長戊申（十三）中春良日下洛涸轍書院新栞

全く同版にして刊記一行のみを缺ける無刊記本あり、高木文庫・東洋文庫・正宗敦夫氏（小山田與清舊藏）藏。

韻鏡　一卷　一冊　圖書寮尊藏

（刊記）慶長戊申中春良日下洛涸轍書院新栞

魁本大字諸儒箋解古文眞寶後集　十卷　二冊　圖書寮尊藏・東洋文庫・靜嘉堂文庫（林氏舊藏）藏

（刊記）慶長十四己酉年陽月下旬　室町通近衞町本屋新七刊行

論語集解　十卷　二冊

(イ)(刊記)左傳刊慶長十四年己酉九月日洛汭宗與開板
成簣堂文庫(完本及上卷一冊)安田文庫・東京帝大圖書館(舊南葵文庫)藏

(ロ)(刊記)左傳刊慶長十四年己酉九月日洛汭宗甚三板
東洋文庫・安田文庫・高木文庫・久原文庫(木村正辭舊藏)藏

古今韻會擧要　三十卷　十五冊(嘗て鹿田松雲堂に舊藏せられしもの)

(裏書識語)右一部慶長十五天暮春求之西南院人寺秀講

簠簋內傳金烏玉兎集　五卷　二冊　久原文庫藏

(刊記)于時慶長十七壬子年九月吉日

春秋經傳集解　三十卷　十五冊　足利學校遺蹟圖書館藏(同種印本はなほ他に藏せらるゝもの多し)

(裏書識語)奧之會津人宗祥藏主入杏壇備津梁不幸逝矣遺此本作當庠什物
慶長十七年壬子閏十月　廿七日　庠主寒松叟誌焉

古今歷代十九史略通考　十四卷　十四冊　圖書寮尊藏・帝國圖書館(合七冊、坂本卜齋舊藏)・陽明文庫(元和二年同語)・東洋文庫(同上)・岩瀨文庫(同上)・阿波國文庫・尊經閣文庫藏

(刊記)古由二三子退朝鮮國之意匠頗徹工布列一円字於一板予寫于十九史略者一百餘部矣大哉
挙世觀木校讎令字畫無謬頃略而式從其官矣庶允博施溥散要令宇內之人知諸史端末而已
元和第二年丙辰暮春令辰
惠由　守　藤　二　乃　壽守

纂圖附音增廣古註千字文　三卷　一册　東洋文庫・靜嘉堂文庫・久原文庫・安田文庫・成簣堂文庫・高木文庫・內藤湖南博士藏

（刊記）元和三丁巳曆二月辰日

新編排韻增廣事類氏族大全　十集　十册　陽明文庫・久原文庫・成簣堂文庫・安田文庫・高木文庫藏

（刊記）元和五己未年九月日

白氏文集　七十一卷・目二卷・後序一卷　三十册　圖書寮尊藏（十九册、他に零本四册あり）・帝國圖書館（榊原芳埜舊藏）十五册・宮城縣立圖書館・東方文化研究所・大阪天滿宮文庫（卷廿二の奧に貞享七年唯寂坊校正識語移寫あり）・東洋文庫・高木文庫・尊經閣文庫・安田文庫・久原文庫（有缺）廿九册・成簣堂文庫（三十册、他に零本（二册）あり）・內藤湖南博士等藏

元和四年那波道圓校印跋（附錄刊記參照集）

小學集說　六卷　五册　帝國圖書館（卷一のみ久原文庫藏、林羅山手澤）藏・東洋文庫・尊經閣文庫・岩瀨文庫藏

（久原文庫藏本識語）戊午（元和四年）閏三月道春氏朱句焉

城西聯句　二卷　二册　高木文庫藏

（刊記）元和四歲霜月日　二兵衛開板

施氏七書講義　四十二卷　十四册　東洋文庫藏（無刊記本別に一種あり、圖書寮尊藏（十八册）及び九州帝國大學（十三册、元和四年等菅得庵手識あり）・尊經閣文庫（二本）・成簣堂文庫（十册）・蓬左文庫（二十册）藏の諸本より）

（刊記）于時元和七年辛酉歲仲秋吉辰　岩田七兵衛刊行

(刊記)寛永二年乙丑初春吉日　洛陽玉屋町田中長左衛門開刊

邵康節先生心易梅花数　一巻　一冊　久原文庫藏

(刊記)寛永二暦　八月吉祥日

周　易(程傳)　二十四巻　十二冊　久原文庫藏

(刊記)寛永二年南呂下旬　二條観音町中嶋久兵衛開之

三國相傳陰陽轄轄簠簋内傳金烏玉兎集　六冊　東洋文庫藏

(刊記)寛永三丙寅潤四月中旬日　松岡作左衛門開板（追記、本書にはなほ松岡刊の寛永二年同五年刊本の存する事を發見、追補記載參照）

城西聯句　二巻　二冊　東北帝國大學藏

(刊記)寛永五歳春巳濟開板

漢　書　一百巻　五十冊　圖書寮尊藏三十九冊・京都府立圖書館・陽明文庫・東洋文庫・久原文庫・高木文庫藏　蓬左文庫藏本(野間三竹舊藏)には宣德三年の朝鮮本(底本)の原跋をも存す

(刊記)寛永第五戊辰暦菊月廿一日於洛陽本能寺前刊行焉

三國相傳陰陽轄轄簠簋内傳金烏玉兎集　五巻　二冊　阿波國文庫藏

(刊記)寛永六己巳潤二月上旬日洛陽富小路通於一町目松岡作左衛門開板

新江湖風月集略註　二巻　二冊　東洋文庫藏（雙邊、無界、十一行、二十一字。）

(刊記)寛永六年五月下旬　二條観音町中嶋久兵衛開刊

多識編　二卷　二冊　高木文庫（寛無舊藏）藏

（刊記）寛永七庚午年霜月下旬

山谷詩集　三冊　東北帝大圖書館・陽明文庫藏

（刊記）於二條大黑町助衛門刊行

冷齋夜話　十卷　二冊　成簣堂文庫（二本）・內野氏皎亭文庫・久原文庫藏

（刊記）於下京櫻町開板（又、目錄の末に癸未仲春刊之とあるは寛永二十年の刊なるべし）

新編晦菴先生語錄　十八卷　五冊　東北帝國大學（四冊）・東洋文庫（一冊）・成簣堂文庫・安田文庫・高木文庫（缺）・久原文庫（零本）・谷村一太郎氏・國分高胤氏（二本）藏

（刊記）正保三歲極月日　二條鶴屋町田原仁左衛門刊行

眞西山心經・政經　一卷　一冊　阿波國文庫・東洋文庫藏

（刊記）正保三丙戌歲下冬吉辰　風月宗知刊行

かくして正保以後は、書肆の活字出版も全く衰退してしまふのであるが、玆に漢籍の活字出版に關し、特に附言す可きは、中世後期に於いて博士家を中心として五山緇流等の間に行はれた假名講義（所謂抄物）が盛んに活字印行せられてゐる事である。其れ等は主として其の本經の開版に連れて元和寛永年間に現れてゐる。即ち、漢籍開版の盛行と慶長後半以後片假名交り書籍出版の隆昌さに育まれて現れたものである。中に本

能寺前町開版の數書等の存する事は前に述べた　開版書の主要なるものは左の如くで、其の中刊記を有するものも若干存在する　元和六年(活字)刊三體絶句抄の覆刻整版の如く既に寛永中に活字版を版下として覆刻整版にせられてゐるものも少くない

周易抄(本能寺前町版前記參照)　六卷　六冊　阿波國文庫(下忍文庫舊藏)・叡山文庫藏

尚書抄*　十五卷　十二冊　圖書寮尊藏・東洋文庫・大島雅太郎氏*藏

(刊記)于時寛永元甲子歲卯月吉辰　二兵衛開板

毛詩抄*(本能寺前町版前記參照)　二十卷　十三冊　圖書寮尊藏・東京文理科大學(舟橋家舊藏)藏

論語抄　十卷　十冊

(一)單邊十八行本(慶元中刊)靜嘉堂文庫・成簣堂文庫*藏

(二)雙邊十八行本(慶元中刊)圖書寮尊藏・東京*文理科大學(舟橋家舊藏、第十卷一冊缺)・久原文庫(卷缺)・刈谷町立圖書館([illegible])藏

大學章句抄　一卷　一冊

(一)雙邊十二行本(元和中刊)東北*帝國大學・成簣堂文庫藏

(二)單邊十六行本(元和中刊)(元和八年刊三體詩素隱抄同活字)　高木文庫藏

(三)寛永二年刊(中書同活字共時刊行)十二行本　成簣堂文庫藏

(四)[illegible]單邊十二行本(字面の高さ約七寸)久原*文庫藏

(二)寛永中刊單邊十二行本　成簣堂文庫藏

(三)寛永中刊單邊上下雙邊十二行本　久原文庫藏

(四)寛永中刊雙邊十一行本　布施卷太郎氏藏　　長恨歌傳には更級日記などにも見ゆる如く古くより平假名交りに抄譯せるものあり、古活字印本も兩種存す。(後記參照)

帳中香　慶元中刊。單邊、無界。九行、十八字。本書は假名交りならざるも併せて茲にかゝぐ　二十卷　四十冊

圖書寮尊藏(二本一は廿一冊、二は廿二冊)・神宮文庫廿一冊・帝國圖書館廿一冊・叡山文庫・高野山寶龜院・成簣堂文庫藏

四河入海　慶元中刊。單邊、九行、十八字。注、平假名交り十七行。　廿五卷　一百冊

圖書寮尊藏(德山毛利家舊藏)・帝國圖書館(朱墨書入)・靜嘉堂文庫・東洋文庫・久原文庫・蓬左文庫・成簣堂文庫藏

三體詩素隱抄　十三卷　十三冊

(一)(刊記)于時元和八年壬戌仲夏丙申朔草于湘南紫陽山下　雙邊、無界。八行、十八字。抄文十七行。久原文庫・成簣堂文庫・高木文庫・中島仁之助氏藏

(二)(刊記)寛永第三丙寅季秋念七 木室二兵衛尉刊行了　(一)の覆印。卷三絕句の末に刊記あり。原刊記なる七言律詩の末に存せり。　東洋文庫藏 丹表紙原裝。

三體詩鈔　寛永中刊。單邊、無界。十六行本。匡郭內、縱七寸六分半、橫五寸五分。　十三卷　六冊缺有　高木文庫藏

三體詩絕句抄　六卷　六冊　陽明文庫合三冊・久原文庫・高木文庫藏

卷末に元和六年前南禪古澗叟慈稽跋あり。　雙邊、無界。十二行、匡郭內、縱七寸一分半、橫五寸二分。覆刻整版本(寛永頃刊)あり(京大藏)

古文眞寶抄　十卷　十册　成簣堂文庫・高木文庫藏

（刊記）元和三丁巳孟春如意珠日於雒陽刊行焉（單邊、無界。十八行。匡郭内、縱七寸五分半、横五寸二分半）

古文眞寶抄（四周雙邊、有界十一行、匡郭内、縱七寸一分半、横五寸二分半）　十卷　六册　東洋文庫（明合二）・高木文庫藏（零本）

中華若木詩抄（四周單邊、中間雙邊、十八行、匡郭内、縱七寸二分半、横五寸八分半）　四卷　四册　成簣堂文庫（三本）・高木文庫藏

以上は漢籍の假名抄物の古活字印本に限るのであるが、所謂ゾ式の抄物（ソで止めたもの）が大部分を占めてゐる。假名講說は前述の醫書（醫方大成論抄・格致餘論抄・百方藥類抄等）・佛書、及び國書（錦繡段・續錦繡段抄・庭訓抄・庖言抄・日本書紀抄・職原私抄・貞永式目抄等、後記）の漢文體のもの等にも少くない。從つて是等をも併せ、其れになほ書寫のみに據つて行はれた抄物をも考究して、初めて中世後期より近世初期に亙つて盛行した假名講說に關する種々なる問題を明らかにする事が出來るのである。

次に管見に入つた漢籍古活字印本（醫書・佛書を除く）約七百餘本に就いて之を四部に分つて整理すると左の如き數字が得られる。

漢籍古活字本開版書目數

經部	一八部（[illegible]）	六部（[illegible]）	一一部（中世期刊本[illegible]）
史部	一二部	一部	六部
子部	三六部	五部	一二部（[illegible]）
集部	一四部	九部	三三部

○計　　八○部　　二一部（合計）一○一部　　六二部（同一書目に就きて異版を算せず）

漢籍古活字印本開版度數

これを開版を重ねた數、即ち、版種の異なるに從つて通算すると次表の如くとなる

經部	五五部（假名抄を除く）	一二部（假名抄）
史部	一六部	一部
子部	六○部	五部
集部	三八部	一三部
○計	一六九部	三一部（合計）二○○部

中世期との比較

右の二表に據つて見るに、子部は開版書目は多數であるが、一書を度々重版する場合は比較的少い。經部は書目としては少數であるが、當時の人々が正依の經典としてゐたものであるから、一書の重版は極めて多く、集部も亦古文眞寶·山谷詩集注·長恨歌等書籍に據つては多數版を重ねたものも少くない。更に之を中世期に於ける五山版等の外典鏤刻の狀態に比すると經史子部の增加してゐる事は當然であらうが、集部は反つて減少してゐる。是は前述の如く中世期に於ける印刷文化の性質の然らしむる所であつて、其の開版關係者が、詩文に堪能なる五山緇流を主としてゐたが爲である。要するに兩者の間に於ける書目の增減と變化とに據つて、近世初期に於ける精神生活が中世期より如何に展開して行つたか、精神生活を行ふ者の性質が如何に變化したかを察知

する事が出來るのである。

慶長古活字印本所據の底本

其の所據の底本に就いて概觀すると、(一)我が國に古來傳承せられてゐる漢唐の古注本

一、我國傳來の古鈔本

(鈔本)を基にして讎印したもの(是は經籍に多く、古文尚書・毛詩鄭箋・禮記鄭注・古文孝經・論語集解・趙注孟子・史記・兩漢書・白氏文集等、但し、中世期傳流の間に漸次他本が混入して不純なる本文を有するものが多い。又、其の讎印に際して叡山版の毛詩の如く特に大全本等を參酌して印行してゐるものもある)と、(二)朝鮮刊本に據つたもの(龍龕手

二、朝鮮刊本

鑑・說文解字篆韻譜・十八史略・十九史略通考・借臣圖像・孔子家語・東坡先生詩・百聯抄解等)とが最も多い。特に朝鮮刊本に據つたものは、以上表記の他にも存し、原來其の活字の樣式を模倣してゐるものが多い關係から、自然其の底本までも彼に據つてゐるものが多數に上つた事も一因であらう。又彼の地より舶載せられた漢籍が支那本土よりも渡來した其れに比して遙かに多量であつたが爲に開版者が底本として入手し易かつたからでもあらうと思はれる。寬永頃の整版本にも精刻なる覆朝鮮刊本(例へば寬永九年刊聯珠詩格—陽明文庫藏)が存在する。朝鮮刊本は、我が覆刻所據の底本として

朝鮮刊本の我に及したる影響
一、本文上
二、版式上
三、裝潢上

其の本文が用ひられ、其の版式(活字版・整版共)に多大の影響を及したるのみならず、其の裝潢に於いても亦我が國在來の其れに大いなる改變を與へた。卽ち、中世期に於ける諸本の現存するものに就いて見るに、其の表紙(改裝さるも、中世期の原物の遺存するもの)は原來質の薄い料紙

紙を用ひ、之に模様を打込み、磨き出しにしたものは、未だ管見に入らない　是に對し、慶長以來の表紙の特色としては、中世期の質の薄いものから、質の厚いものに變り、更に模様を打込んで裏張りを行ひ、一層厚くなつてゐる　これ皆朝鮮本の行ふ所に基いたものである　かくの如く朝鮮は、當時に於ける我が出版の汎ゆる方面に對して其の影響を及ぼしてゐるのである。

我が舊鈔本と朝鮮本との其れに比して、(三)五山版等我が先行刻本に據つたもの（韻鏡・唐才子傳・冷齋夜話・韓文・白雲詩集等）及び(四)唐土の刻本に據つたもの（直江版文選は宋本に基けり）は少數で、殊に後者は、新しき明刊本等の如きも、一度朝鮮を經て間接に底本となつてゐる狀態である。

其の活字の様式も種々あり、同種活字を襲用して數種の書籍を印行したものも少くないが、其れに就いては後章に別記する事として、次に四部の分類に從ひ、漢籍古活字印本の全部に就いて略述する。

經部
(一)周易　第一六一號　第一六二號
(二)周易傳義　第一六三號
(三)尚書

一　經部

(一)周易

(一)伏見版(慶長十年刊、魏王弼注、六卷)の他に、(二)慶長十年刊(閻繖子祖傳跋、正運刊、十卷五冊)及び(三)慶長中刊無刊記本(本は二式[illegible]、正運刊に[illegible])がある事は前述の如くである　後二者は共に十卷(五冊)魏王弼注・晉韓康伯注。

(伏見版及び周易抄に就きては前記參照)

(二)慶長十年刊本(閻繖子祖傳跋・正運刊)(雙邊、有界、七行、十七字)　十卷　五冊
東北帝國大學(山田家舊藏)・陽明文庫・東洋文庫・靜嘉堂文庫(二一)・*成簣堂文庫(昌平黌舊藏)・內藤湖南博士藏

(三)慶長中刊無刊記本(雙邊、有界、七行、十七字、(二)と同種活字)　十卷　五冊
圖書寮(舊藏)・陽明文庫・*足利文庫・久原文庫(二一)・東洋文庫(二一)・靜嘉堂文庫・成簣堂文庫・秋田縣立圖書館藏

(四)無注本　(合一冊)　秋田縣立圖書館藏(根本通明舊藏)　五經無注本十冊の內、雙邊有界、七行、十七字

(二)周易傳義　二十四卷　十二冊　久原文庫(舊藏[illegible]家藏)

寛永二年刊本(刊記、整版)(雙邊、有界、十一行、二十一字、匡郭內縱六寸八分、橫五寸二分)

(三)尚書　十三卷　舊題漢孔安國傳

無刊記本四種あり、其の刊行年時は未詳であるが、管見に入つたものを版種の異なるに從つて整理すると左の如くとなる。

第一六四圖

(一)第一種、九行十七字 雙邊有界 本匡郭内、縱七寸二分半、横五寸五分半。 二冊 圖書寮尊藏 原裝、全卷朱墨點書入・帝國圖書館・東京帝大圖書館 舊南葵文庫・久*原文庫・安田文庫 三冊・成簣堂文庫 三冊・高木文庫 合二冊・谷村一太郎氏 清家御進講本・猪熊信男氏 元和刊(宗存版)法華三大部を原表紙裏張に用ふ。本書刊行年時を限定す可し。藏

第一六五圖

(二)第二種、八行十七字 雙邊有界 本匡郭内、縱七寸一分、横五寸六分半。 四冊 圖書寮尊藏・陽*明文庫・蓬左文庫藏

第一六六圖

(三)第三種、八行十七字 雙邊有界 本匡郭内、縱六寸九分半、横五寸四分。 四冊 阿波國文庫 柴野栗山舊藏・高*木文庫 叡山眞如藏舊藏・成簣堂文庫 職忠舊藏・秋田縣立圖書館藏

第一六七圖

(四)第四種、八行十七字 雙邊有界 本匡郭内、縱七寸六分強、横五寸六分半。 四冊 神*宮文庫 舊林崎文庫本・阿波國文庫 不忍文庫舊藏・久原文庫・東京帝大圖書館 舊南葵文庫・東洋文庫・内藤湖南博士藏

(五)無注本。 活字大に下村本中庸に類す。雙邊有界七行十七字。慶長中刊。一冊 蓬左文庫・秋田縣立圖書館 二冊藏

古文尚書には、他の古活字印本に見るよりもなほ誤植の少からざる事注意せらる。 吉田篁墩が活版經籍考に記るせる部分を、各種本卷首に就きて調査するに左の如し。 概して、古活字印本は後出

に從ひ誤植増加する傾向にあり。

四種の誤植異同表

正(○)誤(×)	(一)	(二)	(三)	(四)
詠(永)	○	×	×	×
歴(厯)	×	×	○	×
漢(渼)	○	○	○	×

なほ又本書中に恒字等の闕畫あり。貫名活字の闕畫に就きては後章に附言す。古文尚書抄寛永元年刊に就きては前記參照。

(四)毛　詩　二十卷　漢毛亨傳鄭玄箋　十冊

(一)慶長中刊（雙邊、有界、八行十八字。）靜嘉堂文庫（卷十六まで八冊。澤家舊藏。）・成簣堂文庫・宗像神社・内藤虎次郎博士藏

(二)慶長中刊叡山版なる可し（雙邊、有界、八行十七字。）異植字版あり。

(イ)圖書寮藏（十冊）・東京帝大（舊南葵文庫舊藏）・東洋文庫・靜*嘉堂文庫（二本、一は直江兼續・竹添井々氏舊藏、一は[illegible]）・陽明文庫・久原文庫（二本、一は合三冊、一は[illegible]）・成簣堂文庫・岩瀨文庫（[illegible]舊藏）・谷村一太郎氏・尊經閣文庫藏

(ロ)東洋文庫・陽明文庫（[illegible]）・高*木文庫・成簣堂文庫（[illegible]舊藏）藏

(三)無刊記本（[illegible]）成簣堂文庫・秋田縣立圖書館藏

毛詩抄(本能寺前町板に就きては前記參照。

(五)禮記　二十卷　漢鄭玄注　十冊

慶元中刊無刊記本兩種(同種活字)あり、其の印行の先後は未詳なるも、共に時差なく現れしものなり。

(一)八行十八字雙邊有界本　(イ)第一種　圖書寮舊藏(原裝)・足利學校遺蹟圖書館・陽明文庫・久原文庫(二本、一本は清家書入本、一は一・二卷補鈔)・東京帝大文庫(舊南葵藏)・高木文庫(零本)・谷村一太郎氏(零本)藏

(ロ)第二種　東洋文庫(舊日野家藏)・成簣堂文庫(舊戰忠藏)・高木文庫(完本(南昌院舊藏)及一・二卷零本)・靜嘉堂文庫(第一冊補鈔、第二・六冊鈔、八冊)・內藤虎次郎博士藏

(二)無注本。(古文尙書無注本同版式)　二冊　秋田縣立圖書館(四冊)・岩瀨文庫藏(舊駿河御讓本、尾州家舊藏。今四冊とす。)

(六)春秋經傳集解　三十卷　晉杜預注　十五冊

(一)慶長十七年以前刊(足利學校藏本識語)雙邊、有界、八行十七字。　足利學校遺蹟圖書館・高木文庫(松花堂舊藏、吉田篁墩・鹽田屯手校)・京都府立圖書館・大島雅太郎氏藏

(二)慶長中刊。雙邊、有界、八行十七字。叡山月藏坊刊本なるべし。毛詩(二)と同活。本書に同種活字の異版あり。
(イ)東洋文庫(第一冊のみ(ハ)種補配。)・東京帝大文庫(舊南葵藏)・成簣堂文庫(舊戰忠藏)
(ロ)成簣堂文庫(舊蒹葭堂藏)・東北帝國大學(原裝)藏

（ロ）洛汭宗甚三板本　東洋文庫・久原文庫・安田文庫藏*

（二）要法寺版（亂版）　前記參照　東北帝大狩野文庫・東洋文庫・安田文庫下卷藏

（三）無刊記本

（イ）第一種　慶長八年以前刊　慶長七年清原秀賢刊古文孝經と同種活字印本　靜嘉堂文庫*慶長八年瀧川豐前守識語あり・京都帝大清家舊藏・東洋文庫原裝五冊藏

（ロ）第二種　雙邊、有界、七行、十七字。誤植等(イ)より少きと、版式上とより或は(イ)より先行か。　安田文庫藏「林鐘房朱」印記あり*

（ハ）第三種　慶長中下村生藏刊中庸と同種活字印本。他に孟子もあり。七行、十七字。雙邊、有界。　圖書寮*尊藏　賜蘆文庫・新宮城舊藏・岩瀬文庫藏　二冊「吉氏家藏」印記あり。

（二）孟子　第一八五圖　第一八六圖　第一八七圖　第一八八圖　第一八九圖

○慶長四年勅版は無注本にして、四書合刻なり。

（論語抄に就きては前記參照）

（二）孟子　十四卷　漢趙岐注　五冊（七冊）

（一）正運刊本　慶長中刊。雙邊、有界、七行、十七字。匡郭內、縱七寸、横五寸强。刊記「關東上總住今關正運刊」　彰考館文庫*詩仙堂舊藏、原裝・尊經閣文庫・高木文庫零本・內藤虎次郎博士藏

（二）（下村生藏刊本）　慶長中下村生藏刊中庸同種活字。題辭（卷首）なし。雙邊、有界、七行、十七字。匡郭內、縱七寸二分、横五寸三分。　七冊　圖書寮・東洋文庫・成簣堂文庫小島寶素舊藏、七冊・太宰府天滿宮文庫*卷一至四缺、三冊藏

（三）慶長中刊本　雙邊、有界、七行、十七字。匡郭內、縱六寸九分半、横四寸九分半。　五冊　東北帝國大學卷末に宣賢識語一葉附、延享元年南湖修識語。・靜嘉*

堂文庫藏（藤原忠井藏印あり）

（四）慶長中刊本　雙邊、有界、七行、十七字。匡郭內、縱六寸九分半、横五寸五厘。　五冊　京都帝國大學（清家舊藏、朱墨書入、首三冊）・東北帝國大學（五冊）・靜嘉堂文庫（舊澤氏藏）藏

（五）慶長中刊本　雙邊、有界、八行、十七字。匡郭內、縱六寸九分半、横五寸三分。　五冊　圖書寮藏・大阪府立圖書館藏

（二）大學章句

（二）大學章句　一卷　宋朱熹章句　一冊（前記參照）

（一）正運刊本　（イ）第一種本（震災前安田文庫藏）

（ロ）第二種本（刊記なけれど、共に同時の刊行）　高木文庫（舊九條家藏）・成簣堂文庫（舊林讀耕齋藏）藏

大學・中庸章句抄に就きては前記參照。

（三）中庸章句

（三）中庸章句　二卷　宋朱熹章句　一冊（前記參照）

（一）今關正運刊本　（イ）第一種　雙邊、有界、七行、十七字。匡郭內、縱七寸九分半、横五寸三厘。（震災前安田文庫藏）・東洋文庫（舊木村正辭藏）・內藤虎次郎博士藏

（ロ）第二種　雙邊、有界、七行、十七字。匡郭內、縱七寸、横五寸一分。　高木文庫（舊九條家藏）・久原文庫藏

正運刊本を覆刻せる整版（高木文庫・安田文庫藏）は（ロ）第二種に基けるものなり。中には往々無刊記の整版活字覆刻（京都帝大藏）もあり。

（二）下村生藏刊本　雙邊、有界、七行、十七字。匡郭內、縱七寸二分、横五寸二分半。　東洋文庫（清原秀賢手澤・清原秀賢識語あり。清家藏書論語（圖書寮藏）・孟子（圖書寮藏・東洋文庫藏）同

活字なるもの、即ち共時に四書として印行せられたるものなる可し。

（三）中庸集略

（三）中庸集略　二卷　二冊　內閣文庫・高木文庫藏

元和寬永中刊。雙邊、無界、九行、十八字。匡郭內、縱七寸四分、橫五寸二分半。

（四）說文解字篆韻譜　第一九四圖

（四）說文解字篆韻譜　五卷　南唐徐鍇撰　二冊

左右雙邊、有界、七行、五段組、版心篆韻上（下）（丁數）。上卷七十葉、下卷百十一葉。匡郭內、縱七寸五分、橫四寸七分半。朝鮮本に基き、印行なる可し。　圖*書寮尊藏（二本）一は香色原表紙を存するも補裝に係る・京都府立圖書館一冊合・阿波國文庫・陽明文庫三冊藏　二は字一葉缺。

（五）增廣龍龕手鑑　第一九〇圖

（五）增廣龍龕手鑑　八卷　遼釋行均撰　八冊

圖書寮尊藏十冊・帝國圖書館（二本）一は白河文庫舊藏、二は狩谷棭齋舊藏・神宮文庫・龍谷大學・東洋文庫七冊・尊經閣文庫・安田文庫・久原文庫・高*木文庫眞如藏舊藏・內藤虎次郎博士・松井簡治博士藏

元和中刊と認む。朝鮮本飜印。單邊、有界、十行。字每行四段配字。匡郭內、縱七寸五分、橫五寸七分。本文語彙每行十六字。

（六）韻鏡　第一九一圖

（六）韻鏡　一卷　宋張麟之撰　一冊

慶長十三年刊本（前記參照）匡郭內、縱七寸四分半、橫五寸七分半。本書は享祿本の覆刻なるも、韻鏡にはなほ慶長中の刊行に、本書の覆刻無刊記整版本と覆享祿刊本（元和頃刊行か）との二種あり。　圖*書寮尊藏

（七）古今韻會擧要

（七）古今韻會擧要　三十卷首一卷　元熊忠撰　十五冊

識語あり。・新村出博士舊本・靜嘉堂文庫舊藏

第一九七圖

(二)慶元中刊 雙邊、無界、八行、十七字。匡郭內、縱七寸二分、橫五寸五分半。但し、年表のみ有界、九行、十七字、前記(一)に倣へるに似たり。活字の樣式も頗似すれど、この方小なり。谷村氏藏の一本、丹表紙に(一)と同じ題簽を用ふ。前者を襲用せしものならんも、行款補字の異れると共に兩者の關係密接なるを知る可し。 東洋文庫・久原文庫・成簣堂文庫 合廿九冊・高木文庫・谷村一太郎氏藏

第一九八圖

(三)慶元中刊。雙邊、無界、九行、十七字。匡郭內、縱七寸三分、橫五寸五分、年表も同じ。 神宮文庫 村井古巖獻本、丹表紙原裝。・東北帝國大學 合十三冊・東洋文庫 丹表紙原裝・成簣堂文庫(完本及び不完十五冊一)・大島雅太郎氏 五十冊・猪熊信男氏舊本藏

史記古活字印本の零本を以て種別を察すれば、一二種の年表の部分をも異版に算し、五種の別ありとの誤認に陷り易し。調査の結果は右の如く三種に止るなり。然も大部なる史籍の三度まで上梓せられたるを以て見るに其の行はれたる事知らる。

(二)前漢書

(二)前漢書 一百卷 漢班固撰 唐顏師古注 五十冊 圖書寮尊藏 廿九冊、森立之舊藏・內閣文庫・京都府立圖書館 丹表紙原裝・陽明文庫・久原文庫・東洋文庫・蓬左文庫 野間三竹舊藏・高木文庫・內藤虎次郎博士・布施卷太郎氏藏

(三)後漢書

第一九九圖

(三)後漢書 八十卷 宋范曄撰 唐章懷太子註 三十四冊

寬永五年本能寺前町刊(前記參照)雙邊、無界、十行、十七字。匡郭內、縱七寸二分、橫五寸四分半。蓬左文庫藏本等に據れば、卷末に其の底本たりし朝鮮古活字印本の宣德三年の跋を附印す。

圖書寮尊藏・內閣文庫(二本)・神宮文庫・京都府立圖書館 丹表紙原裝・東洋文庫 廿五冊・愛知縣

立第一師範學校（野間三竹舊藏、尾州家舊藏）*・久原文庫・尊經閣文庫・高木文庫・成簣堂文庫（三十三冊）*・栗田元次氏藏

（四）立齋先生標題解註音釋十八史略　七卷　元曾先之編　明陳殷音　七冊　圖書寮尊藏・內閣文庫・東北帝國大學・陽明文庫・東洋文庫*（六冊）・靜嘉堂文庫（三合冊）藏

寬永中刊。雙邊、有界、九行、十七字。史記(二)、前漢書と同種活字印本なり。

（五）古今歷代十九史略通考　十四卷　十四冊　圖書寮尊藏（首尾補鈔）・帝國圖書館（七冊）・阿波國文庫（[illegible]文庫舊藏、[illegible]跋なし）・陽明文庫・東洋文庫*・岩瀨文庫藏

元和中刊。單邊、十二行、二十二字。眉欄二字詰。匡郭內、縱七寸一分半。橫五寸五分。元和五年刊氏族大全と同種活字印本。有山脇氏印。

（六）貞觀政要　十卷　唐吳兢撰　元戈直注　十冊　（前記參照）

元和二年刊。萬曆九年朝鮮弘文館本飜印。雙邊、有界、九行、十八字。匡郭內、縱七寸四分半、橫五寸四分。元和二年宗藤の跋一葉のみ整版を用ふ。

（一）慶長五年刊伏見版

（二）元和九年刊本（伏見版を飜印せるもの）雙邊、有界、七行、十七字。匡郭內、縱七寸三分、橫五寸一分。（前記參照）

（七）君臣圖像　二卷　二冊　阿波國文庫・蓬左文庫（[illegible]本二種[illegible]なり。[illegible]）・東洋文庫（二本）（一は原表紙[illegible]に「君臣圖像」[illegible]）・久

（四）十八史略　第二〇〇圖

（五）十九史略通考　第二〇一圖

（六）貞觀政要　第二〇二圖

（七）君臣圖像　第二〇三圖

原文庫・岩瀬文庫・高木文庫・成簣堂文庫（二本一は傳本一印記あり）・内藤虎次郎博士・栗田元次氏（卷下）藏

慶長中刊。雙邊、無界、十行、二十字。畫像入。朝鮮本を覆刻したるもの、朝鮮本の承傳する所また善本にして、其の畫像、比較的典據あるものといふ。（内藤博士示敎）

（八）列仙傳

（八）列仙傳　二卷　漢劉向撰　一冊　陽明文庫・東洋文庫・尊經閣文庫・成簣堂文庫・高木文庫藏

寛永中刊。雙邊、十一行、二十字。匡郭内、縱六寸、横四寸一分。木活字を用ふ。

（九）唐才子傳

（九）唐才子傳　十卷　元辛文房撰　三冊　東洋文庫・靜嘉堂文庫・安田文庫（莊子抄を原表紙に裏張す）・高木文庫・成簣堂文庫藏

寛永中刊。單邊、無界、十二行、二十二字。匡郭内、縱七寸三分半、横五寸三分。五山僧藏印。

（一〇）帝鑑圖說

（一〇）帝鑑圖說　六卷　明張居正・呂調陽撰　六冊（前記參照）

慶長十一年刊秀賴版　（イ）有跋本

（ロ）無跋本　前記諸傳本の他に福井市立圖書館藏（松平家本）あり。

（一一）孔子通紀

（一一）孔子通紀　八卷　虞潘府　四冊　東京文理科大學・蓬左文庫・尊經閣文庫・東洋文庫（二本）（一は四冊、一は合二冊）・安田文庫（森立之舊藏）・高木文庫藏

慶長中刊。雙邊、無界、九行、十六字。匡郭内、縱七寸六分半、横五寸五分半。

(三)開元天寶遺事　第二〇五四
子部
(一)標題句解孔子家語
(二)孔子家語
(三)近思錄集解
(四)小學集說　第二〇六[illegible]
(五)小學集注大全

(三)開元天寶遺事　二卷　五代王仁裕撰　一冊　東洋文庫・神田喜一郎氏藏*

元和中刊。元和勅版皇朝事寶類苑と同種活字印本なり。（雙邊、無界、十二行、二十字。匡郭內、縦七寸五分、横五寸五分五厘。）

二　子部

(一)標題句解孔子家語　六卷　（附素王事紀一卷 元王廣謀撰）　四冊　（前記參照）

慶長四年刊伏見版

(二)孔子家語　十卷　魏王肅註　五冊　高木文庫・成簣堂文庫・岩瀨文庫（楠本碩水舊藏、丹原表紙原裝）藏

元和寛永中刊。（雙邊、有界、七行、十八字。匡郭內、縦七寸、横五寸二分。伏見版と異りて素王事紀を附する事なく、其の底本は別途に出づるものなり。）

(三)近思錄集解　十四卷　宋朱熹・呂祖謙撰　五冊　高木文庫藏

寛永中刊。（雙邊、無界、九行、十八字。匡郭內、縦七寸五分、横五寸六分。活字の樣式は寛永中のものなれども或は正保頃、朱子語類等と共時の擺刷かと思はる。）

(四)小學集說　六卷　五冊　東洋文庫・帝國圖書館（林羅山手澤、識語あり。其の卷一のみ久原文庫藏）・尊經閣文庫（六冊）・岩瀨文庫（五冊、丹表紙原裝）藏

慶長中刊。（雙邊、有界、十行、十八字。活字の樣式寛はしく、よく朝鮮銅活の面影を傳ふ。林羅山の元和四年朱識ある一本帝國圖書館卷一至六、卷一は久原文庫に分藏せらる。帝國圖書館藏本も兩度に之を校たる由、[illegible]の分藏惜しむ可し。）に據りて刊行年時を限定せらる、[illegible]の版式上慶長中の印行と推定せらる。

(五)小學集注大全　十卷首一卷　明陳選撰　六冊　成簣堂文庫藏

寛永中刊。（單邊、有界、十行、十六字。）

（六）晦菴先生語録類要　十八卷　括士龍編　五册　東北帝國大學（四册）・東洋文庫・久原文庫・*安田文庫・高木文庫（無跋）・成簣堂文庫・國分高胤氏（二本）・谷村一太郎氏藏

正保三年刊本。雙邊、無界、十三行、十九字。序・目・後序のみ八行十七字の大型活字を用ふ。同種印本にして刊記のみを缺く傳本あり。

（七）眞西山心經・忠經　一卷　一册　阿波國文庫（柴野栗山舊藏）・東洋文庫藏

正保三年刊本。雙邊、無界、八行、十八字。匡郭內、縱七寸三分、横四寸八分。活字の樣式北溪先生性理字義等相似す。

（八）北溪先生性理字義　二卷　宋陳淳撰　二册　圖書寮尊藏（一册）・阿波國文庫・尊經閣文庫・陽明文庫・成簣堂文庫（森立之舊藏）・內藤虎次郎博士藏

寬永中刊。雙邊、有界、十行、十八字。晦菴先生語録類要の大字の部分、近思錄・小學集注大全等同種の活字なり。

（九）六韜　六卷　舊題周呂望撰　二册（前記參照）

伏見版（慶長四年・五年・九年刊、同十一年刊七書の內）

（一〇）黃石公三略　三卷　舊題漢黃石公撰　一册

（一）伏見版（慶長四年・五年・九年、及び十一年刊七書の內）

（二）慶元中刊。雙邊、有界、九行、十七字。匡郭內、縱六寸三分、横四寸八分。伏見版七書中の[illegible]印なる可く、單行か否か未詳なるも、或は三略は多く行はれたれば單行もある可し。　高木文庫藏

(二六)新增鷹鶻方 第二一〇圖

(二七)祥刑要覽 第二一一圖 第二一二圖

(二八)棠陰比事 第二一三圖

(二九)簠簋內傳金烏玉兎集 第二一四圖 第二一五圖 第二一六圖

(二六)新增鷹鶻方　一卷　一册　安田文庫・久原文庫藏

寛永中刊。雙邊、無界、九行、十七字。匡郭內、縱七寸二分、橫五寸三分。

(二七)祥刑要覽　一卷　一册

(一)元和中刊。雙邊、無界、十行、十八字。匡郭內、縱七寸、橫五寸四分。卷首に「祥刑要覽卷上」とあれど、卷末に「下卷者卽棠陰比事也」と刻せるを見るに、本書と同種活字印本の棠陰比事ある可し。

(二)寛永元年刊。雙邊、無界、十行、十八字。匡郭內、縱七寸三分、橫五寸四分。卷首に卷上とあれど、卷末には終とあり。前記(一)より後出なる可し。　九州帝國大學(楠本碩水舊藏)・蓬左文庫(原裝)・久原文庫・成簣堂文庫藏

(二八)棠陰比事　三卷　宋桂萬榮撰　一册　陽明文庫・東洋文庫・安田文庫・久原文庫・高木文庫(上缺)藏

寛永中刊。寛永元年刊祥刑要覽と同種の活字を用ふ。雙邊、無界、十行、十八字。本書に附訓を施して覆刻せる整版本(風月宗智刊)あり。前記祥刑要覽(一)と共時の刊行に係る棠陰比事存在す可きも未だ管見に入らず。

(二九)簠簋內傳金烏玉兎集　(前記參照)

(一)慶長十七年刊本。雙邊、無界、九行、十九字。匡郭內、縱七寸一分、橫四寸七分半。五卷。　二册　久原文庫藏

(二)寛永二年刊本。單邊、無界、八行、十九字。匡郭內、縱六寸九分、橫四寸五分五厘。　六册　東洋文庫藏

(三)寛永五年刊本。雙邊、無界、九行、十八字。匡郭內、縱六寸六分、橫四寸九分。　安田文庫藏(卷三至六)

(四)寛永六年刊本。雙邊、無界、十行、十八字。匡郭內、縱六寸六分、橫五寸。前記寛永三年の再刊なり。　二册　阿波國文庫藏

(二〇)邵康節先生心易梅花數　一卷　一冊　久原文庫藏

寛永二年刊本。雙邊、無界、十二行、二十字。匡郭内、縱七寸四分半、横五寸三分。（前記參照）

(二一)冷齋夜話　十卷　宋釋惠洪撰　二冊　久原文庫・*成簣堂文庫（二本）・内野氏皎亭文庫藏

寛永二十年刊。單邊、無界、九行、十八字。五山版の飜印にして、卷首に「癸未春孟新刊」の刊記、卷末別に「於下京櫻町開板」の刊記あり。小型活字を用ふ。

(二二)新刊鶴林玉露　十八卷　宋羅大經撰　六冊　圖書寮尊藏（森氏舊藏）・東北帝國大學・東方文化研究所・陽明文庫・東洋文庫（元和八年後長識語）・靜嘉堂文庫・久原文庫・成簣堂文庫・*安田文庫藏

慶元中刊。雙邊、有界、九行、十九字。東洋文庫藏本に元和八年後長の識語あり。其の刊行年時を限定す。

(二三)群書治要　五十卷（原缺三卷）　唐魏徴等奉勅編　四十七冊（前記參照）

元和二年刊本。（駿河版）

(二四)皇朝事寶類苑　七十八卷目一卷　宋江少虞編　十五冊（前記參照）

元和七年刊本。（勅版）

(二五)標題徐狀元補注蒙求　三卷　五代李瀚撰　宋徐子光注　三冊（六冊）

一）文祿五年刊市庵版（前記參照）

二）慶長中刊本。雙邊、無界、八行、十五字。三卷を各卷末に分ち六冊とす。匡郭内、縱七寸二分半、横五寸五分。異植字版兩種あり。

往々にしてあり。・靜嘉堂文庫六冊・安田*文庫西荘文庫舊藏

(ロ)高木*文庫上二冊缺四冊藏

(三)元和寛永中刊本。雙邊、無界、注十四行、二十字。匡郭內、縱七寸四分、橫五寸五分半。　圖書寮尊藏見返に恆徳の識語、全巻古き朱墨點書入あり。・內閣文庫・東*洋文庫・高木文庫・帝國圖書館「慈照寺」印記あり、文化十四年藤原壽房(正三位式部大輔)書入あり。藏

第二二三圖

(三)た寛永中に覆刻せる整版本あり。

第二二四圖

(四)元和寛永中刊本。注(千字文・胡曾詩合刻)雙邊、有界、七行、十六字。但し四字(一句)毎に半字の間隔を置く。匡郭內、縱七寸一分、橫五寸一分半。三注を合刻(久原文庫藏)せるも丁數は通算せず。　帝*國圖書館千字文缺、森立之舊藏・高木文庫蒙求のみ・久原文庫三注完藏

(二六)新編古今事文類聚
第二二〇圖

(二六)新編古今事文類聚　一百二十一巻、目六巻　宋祝穆編 元富大用補　八十一冊　久原文庫・成簣堂文庫・高*木文庫藏

元和寛永中刊。雙邊、有界、十二行、十九字。匡郭內、縱六寸九分、橫五寸四分半。

(二七)増續會通韻府群玉
第二二五圖

(二七)増續會通韻府群玉　三十八巻　三十八冊　帝*國圖書館原題簽存す、合十九冊・東北帝國大學・東方文化研究所・陽明文庫・愛知縣立第一師範學校(二本、共に尾州藩舊藏)・谷村一太郎氏・中島仁之助氏藏

(二八)新編排韻増廣事類氏族大全

(二八)新編排韻増廣事類氏族大全　十集　十冊　陽明文庫・久原文庫・安田*文庫・成簣堂文庫・高木文庫藏

寛永二年刊本。(前記參照)雙邊、有界、十行、十八字。注雙行。匡郭內、縱七寸二分半、橫五寸三分半。

元和五年刊本。雙邊、有界、十三行、二十四字。匡郭内、縱七寸一分半、横五寸二分五厘。（前記参照）

（元）纂圖附音增廣古注千字文　三卷　一冊（前記参照）

一　慶長十三年刊本。

（イ）有刊記本　雙邊、有界、十行、二十字。匡郭内、縱七寸四分、横五寸。　高木文庫藏

（ロ）無刊記本（刊記の外は全く（イ）に同じ）　東洋文庫・高木文庫・正宗敦夫氏（并）山田[illegible]藏

本書の活字が直江版文選（要法寺版）と同種にして密接なる關係を有する事前述の如し。

二　元和三年刊本。單邊、有界、九行、二十字、匡郭内、縱七寸四分、横四寸八分。　東洋文庫・静嘉堂文庫（[illegible]）・久原文庫・成簣堂文庫・安田文庫（[illegible]）・高木文庫・内藤虎次郎博士藏

三　元和寛永中刊本。雙邊、無界、注十四行、二十字。匡郭内、縱七寸三分半、横五寸五分。　安田文庫藏

四　元和寛永中刊本。（注）千字文（[illegible]）　久原文庫藏

（一）剪燈新話句解　四卷附一卷　瞿佑撰　滄洲訂正　垂胡子集釋　三冊　高木文庫（[illegible]）・成簣堂文庫藏

慶元中刊。單邊、有界、八行、十六字。活字大型なり。匡郭内、縱七寸五分半、横五寸七分。

（二）新編剪燈餘話　七卷　明李昌祺撰　一冊　大島雅太郎氏藏

元和寛永中刊。雙邊、有界、十三行、二十字。

（三）列子鬳齋口義　二卷　宋林希逸撰　二冊　東洋文庫・成簣堂文庫（[illegible]）・高木文庫藏

慶元中刊。雙邊、有界、九行、十九字。匡郭内、縱七寸七分半、横四寸八分。

(三三)句解南華眞經 第二三四圖

(三三)句解南華眞經(莊子鬳齋口義) 十卷 宋林希逸撰 十冊

(一)慶長中刊。雙邊、有界、七行、十七字。句解南華眞經と題す。匡郭內、縱六寸九分半、橫五寸。卷末に新添莊子十論を附す。圖書寮尊藏・帝國圖書館・陽明文庫・東洋文庫・高木文庫・成簣堂文庫(三本、一は東坊城家舊藏、二は天海僧正舊藏首尾有缺卷、三は祥雲寺舊藏、卷二缺)・栗田元次氏藏

第二三五圖

(二)慶元中刊。雙邊、有界、十行、十九字。匡郭內、縱七寸一分、橫五寸五分。東洋文庫・高木文庫藏

(莊子抄に就きては前記參照)

(三四)老子經 第二三六圖

(三四)老子經 二卷 舊題漢河上公注 二冊 圖書寮尊藏・大阪府立圖書館(菊亭家舊藏)・陽明文庫(原題簽附、藍色原表紙存す。)・成簣堂文庫(小島寶素舊藏)・東洋文庫(二本、一は元和八年識語あり、一は合一冊本。)・久原文庫(下卷一冊)藏

慶長中刊。雙邊、有界、七行、十七字。匡郭內、縱六寸九分、橫五寸。

(三五)老子鬳齋口義 第二三七圖 第二三八圖 第二三九圖

(三五)老子鬳齋口義 二卷 宋林希逸撰 二冊

(一)慶長中刊。雙邊、有界、九行、十七字。注低一劃、匡郭內、縱六寸八分半、橫四寸八分半。帝國圖書館(合一冊)・大島雅太郎氏藏

(二)慶長中刊。雙邊、有界、八行、十八字。匡郭內、縱七寸五分、橫五寸五分半。成簣堂文庫藏

(三)慶元中刊。雙邊、有界、七行、十七字。匡郭內、縱六寸九分、橫五寸二分半。卷頭に「句解道德經」とあり。東洋文庫・內藤虎次郎博士藏

(三)長恨歌傳
第二四四圖
第二四五圖
第二四六圖
第二四七圖

(四)新板增廣附音釋文胡曾詩
第二四二圖

(五)增刊校正王狀元集註分類東坡先生詩
第二四三圖

(三)長恨歌傳([illegible]行・野一馬[illegible]合)　一冊

(一)傳慶長勅版本。(參照前記)　勅版に擬する一本、林森太郎氏にあり。

(二)慶長中刊。雙邊、有界、八行、十五字。匡郭内、縱六寸三分、橫五寸一分。　安田文庫・京都帝大圖書館・猪熊信男氏藏*

(三)慶長中刊。雙邊、有界、七行、十七字。匡郭内、縱七寸、橫五寸。　京都府立圖書館藏*

(四)慶長中刊。雙邊、有界、八行、十七字。匡郭内、縱七寸九分半、橫五寸一分。　高木文庫・安田文庫*・春日政治氏藏

(五)慶元中刊。單邊、無界、八行、十七字。匡郭内、縱七寸、橫五寸一分半。　京都帝大圖書館藏

(六)慶元中刊。雙邊、無界、八行、十七字。匡郭内、縱七寸、橫五寸二分。　高木文庫藏*

なほ長恨歌には整版本にして慶元寬永中刊行のもの少からず。

(四)新板增廣附音釋文胡曾詩　三卷　宋胡元質注　三冊

(一)元和寬永中刊。雙邊、無界、注十四行、二十字。匡郭内、縱七寸三分、橫五寸四分五厘。補注蒙求(十三行本)同種活字。　成簣堂文庫(舊一絲和尚藏)・高木文庫*(上欠)藏

(二)元和寬永中刊。注蒙求(千字文合刻)　蒙求の條參照。　帝國圖書館(森立之舊藏)・久原文庫藏

(五)增刊校正王狀元集註分類東坡先生詩　二十五卷(附序目一卷 東坡紀年錄一卷)　舊題宋王十朋注　劉辰翁評　二十六冊　圖書寮尊藏・東洋文庫(二十一冊)・岩瀨文庫・尊經閣文庫(紀年錄缺)・成簣堂文庫・高木文庫*藏

慶長中刊。雙邊、有界、九行、十五字。匡郭内、縱七寸二分、橫五寸六分。宋刊本(建安虞氏務本書堂刊)に基ける朝鮮刊本の飜印なる可し。

(八)陸象山全集
(九)増補六臣註文選
(一〇)新編江湖風月集略註
(一一)諸儒註解古文眞寶前集
(一二)魁本大字諸儒箋解古文眞寶後集

(八)陸象山全集　三十六卷　十冊　雙邊、無界、八行、十七字。匡郭內、縱七寸、横四寸五分。唐紙摺。寬永中刊。　東北帝大圖書館二十冊・蓬左文庫十冊藏

(九)増補六臣註文選　六十卷附目一卷　梁蕭統編唐李善等注　卅一冊（前記參照）

(一)慶長十二年刊本（要法寺版）（直江版）

(二)寬永二年刊本（要法寺版飜印）

(一〇)新編江湖風月集略註　二卷　二冊

(一)慶　元　中　刊。雙邊、有界、九行、十六字。匡郭內、縱六寸五分横五寸三分五厘。　京*都府立圖書館・東洋文庫・安田文庫藏

(二)寬永六年刊本。雙邊、無界、十一行、二十一字。匡郭內、六寸八分五厘横五寸一分五厘。　東*洋文庫東西莊文庫舊藏藏

(一一)諸儒註解古文眞寶前集　十卷　元黄堅編　三冊

元和中刊本。雙邊、無界、九行、十七字。匡郭內、縱七寸三分、横五寸六分。後集(五)と共時の刊本なる可し。　東洋文庫五冊、石川丈山舊藏・成*簣堂文庫藏

(一二)魁本大字諸儒箋解古文眞寶後集　十卷　元黄堅編　二冊

(一)慶長十四年刊本。雙邊、有界、八行、十八字。匡郭內、縱七寸五分半。横五寸七分。　圖書寮尊藏・東洋文庫原表紙存す。・靜*嘉堂文庫林氏藏書昌平坂學問所印記あり。・帝國圖書館下卷末若干鈌葉青木信寅舊藏藏

(二)慶　長　中　刊　本。雙邊、有界、八行、十五字。匡郭內、縱七寸二分、横五寸一分。　高木文庫卷六以下鈌藏

(三)慶　長　中　刊　本。雙邊、有界、八行、十八字。匡郭內、縱七寸四分、横五寸六分半。前記(一)と同種活字無刊記異植版なり。(一)に次ぎて印行せられしものなる可し。　高*木文庫寬永十一年識語あり・東洋文庫藏

（四）慶　元　中　刊。縱七寸五分半、橫五寸七分半。（雙邊、有界、八行、十八字。匡郭內、）　東洋文庫・成簣堂文庫藏

（五）元　和　中　刊　本。雙邊、無界、九行、十八字。匡郭內、縱七寸五分、橫五寸三分。本書を覆刻せるものに寛永元甲子歲孟夏上旬開板「清韓」の刊記ある一本あり。（靜嘉堂文庫藏「米澤藏本」印記あり。丹表紙大本。）又其の刊記を削去せる後印本（靜嘉堂文庫藏、九條家舊藏）あり。　靜嘉堂文庫藏*

（六）元和寛永中刊本。雙邊、有界、八行、十八字。匡郭內、縱七寸四分、橫五寸一分。　靜嘉堂文庫藏*

（七）元和寛永中刊本。雙邊、有界、九行、十八字。匡郭內縱七寸四分、橫五寸五分。（三）と活字の樣式を異にするも、目次に使用せる陰刻活字には之を襲用せるものあり。　高木文庫藏

（三）百聯抄解　一卷　（橫）一冊　陽明文庫藏*

（三百聯抄解 第二六〇圖）

元和寛永中刊。單邊、無界、十行、七字。匡郭內、縱四寸一分半、橫五寸五分半。卷末に享保十七年堀南湖自筆の識語を附す。朝鮮刊本に基き其の諺文の解を除きて飜印せるものなり。

（四）城西聯句　二卷　（橫）二冊

（一）元和四年刊。無邊、無界、十三行、十一字。字面の高さ約三寸九分。　高木文庫藏*

（刊記）元和四歲霜月日二兵衛　開板

（二）寛永元年刊。行款等（一）と同一。字面の高さ約三寸九分五厘。　高木文庫・廣島文理科大學藏*

（刊記）寛永元孟夏日意濟　開板

（三）寛永五年刊。行款等前記二本と同一。字面の高さ約三寸六分半。　東北帝國大學藏*　卷末刊記の次に「寛永五戊辰歲十一月上旬（花押）」の墨書識語あり。

（刊記）寛永五歲春　巳濟開板

第七章　國書の開雕と當代の文化

（坊刻活字印本の發達其の二）

第一節　假名活字印本刊行の初期

中世期に於ける國書の開版

もと我が國人の撰述に係る所謂國書の開版は、我が印刷文化に於いて最も發達の遲れた方面である。前述の如く、漢籍の繡刻が禪宗の學侶等に據つて既に鎌倉末期以來現れ初めてゐるのに比しても、國書の開版は、室町時代に至つて、聚分韻略、節用集の二字書と貞永式目の他には、書物としての體を爲さぬ樣な假名暦と年代記とが行はれてゐるに過ぎない。又これと關聯して、假名交り本の書籍の開版も、平假名交り本としては、元亨元年に黒谷上人語燈錄、片假名交り本としては、康永三年に夢中問答集（室町初期に足利行道山の覆印あり。）並びに至德三年刊の靈山和泥合水集、及び室町中期以後に於ける御文等を見るのみであつて、共に其の發達が遲れてゐる。殊に國文學書の開版の發生は最も晩く、近世初期活字印刷術の盛行に伴ひ、漸く慶長年間に入つてから初めて現れる樣になつたのである。

朝鮮の活版術が輸入せられ、中央の印刷界に改新が齎されてからも、最初に現れた開版

書籍はなほ佛書漢籍の類であつた。次いで現れる樣になつた國書も日本書紀神代卷・職原抄等漢文體の所謂眞名活字の書籍を主とし、未だ假名交り印本には及んでゐない。かくの如く其の發生の遲れた事には、種々の理由が數へられる。第一には、中世期以來假名交り書籍の印行が未だ強く要望せられず、從つて其の發達が遲れてゐた爲であらう。切利支丹版には早く假名活字が現れてゐたが、我が中央の印刷界を革新せしめた朝鮮の活字印刷所が先づ眞名活字を傳へた事も有力なる直接の原因であらう。又、其の發達が遲れてゐた爲に、眞名活字と混交する事を前提とする假名活字は其の新雕と植版とに、種々技術上の難問題も伴ひ、これが解決に多少の時日を要する點もあつたと思ふ。

假名交り活字印本發生遲延の理由

假名交り活字印本の最初に現れたものが何であるかに就いては、若干の問題がある。藤原貞幹は好古日錄（寛政九年刊二冊、野間書堂文庫に撰著自筆稿本あり、日本に至るまで稿本の存するを知らない。）に、慶長元年六月の平假名活字暦日と稱するものを摸刻紹介してゐるが、慶長前後に於いて丙申の干支を有する朔日は慶長元年七月と同六年八月との兩月のみである。（三正綜覽に據る）好古日錄所收の暦は月初の一行を缺き一日より二十餘日に至る僅か三分の二ヶ月間の斷簡であるが、其の中に立秋七月節が見え、八月には當らないから、慶長元年七月（文祿五年七月）と認めなければならない。即ち、貞幹の考證よりも一ヶ月後となるが、ともかくも是に據れば、實用

最初に現れた假名活字印本

好古日錄の慶長元年假名暦日（第二七九圖）

慶長元年七月假名活字暦日

的なる暦日は文祿五年(改元慶長)一ヶ年の分を少くとも前年末(文祿四年)には刊行したものでなければならないから、早く平假名活字印本が出版せれてゐた事となるのである。其の樣式は全く中世期の假名暦(刊・寫)を承けたものであつて、其の實在が諾かれる體のものであるが、其實物を傳へてゐないので、なほ疑問としたが、好古日錄所收の斷簡と全く同一の樣式を具へた、慶長九年の平假名活字暦日一卷(安田文庫藏)を發見するに及んで、茲に同種の活字暦日が早くより連年續刊せられてゐたものであらうと考へるに至つたのである。然らば、平假名活字暦日のみは例外的に假名活字として早く現れたものと言ふ事が出來る。慶長九年暦であれば、前年末には出版せられてゐたものとしなければならないから、慶長八年の刊行と認められ、汎ゆる現存資料に據つて知り得る最古の平假名活字印本である。

慶長九年平假名活字暦日

慶長九年平假名活字暦日　一卷　一軸　安田文庫藏

稍ゝ大きて小型の活字連續活字多しを用ひ、單邊の匡郭(縱九寸五分、横一尺四寸二分半。)横紙面同大一内は、古暦の例に從ひ、界線を以て、上段約二寸六分・中段約一寸一分・下段約四寸三分の三段に分ち、各行間は四五分となつてゐる。卷頭の慶長九年暦の慶長九三字は何故か墨書である。縱九寸五分、横一尺四寸二分半の料紙に一月分づゝ横全幅に印刷し、摺刷の後、料紙(慶長九年は閏八月(小)あれば、十三ヶ月分。後の白紙と別に卷頭の部分三寸五分半あり。)十三を繼ぎ合せて一軸に仕立てゐる。此の損傷なく、全卷の面目を遺憾なく傳へてゐる點も、この類の古い摺本として罕な例であらう。

慶長九年刊本徒然草壽命院抄（第一〇七圖）

慶長八年刊平假名活字暦目の他に、初期の平假名活字として注意す可きは、慶長九年刊徒然草（壽命院）抄（如庵宗乾刊、片假名交り二卷二冊、刊記「慶長九暮閏甲辰姑洗良辰　日東　洛陽如庵宗乾刊行」（書陵部・龍谷大學・慶應義塾大學・東洋文庫・内野氏皇學文庫・尊經閣文庫藏））の卷首數葉のみに混用した平假名活字（本文のみ平假名、注記は片假名を用ゐる。用意なりしか、校書上の實驗なるが爲か、卷初數葉のみに之を行なって、他は皆片假名）と慶長十年刊伏見版東鑑中に散見する若干の平假名活字との存在する事である（第一〇八圖）。然し、兩者とも平假名を主體としたものではなく、其の版式も拙く、草假名の書體の流麗なる特色を十分に現してゐないのは、極初期の平假名活字として當然な事であらう。

慶長十一年以前刊行古活字本史記（第一〇九圖）

片假名交り本の中に若干平假名を混用した程度のものでなく、平假名を主體としたものには所謂嵯峨本史記と稱する古活字印本史記内閣文庫藏本の原表紙裏張りより發見せられた慶長十一年以前刊行の諸本がある。此の種の史記は成簣堂文庫藏本等に據つて慶長十一年八月以前の刊行と認める（内閣文庫の藏本は慶長十二年より同十六年の五年間に亙り、菅得菴が林道春の本を以て朱墨點を加へたものである）其の原表紙裏張りより發見せられた諸本は、稍〻型の小さい活字の六行十五字、字面の高さ約五寸八分のもので、書風麗はしく版式も整つてゐる。此の種の諸本は内閣文庫藏史記の裏張りに據れば、相當多數の曲目が印行されてゐるから、或は百番揃本として現れたものかもしれない。併し、現存唯一の傳本は八嶋一冊（原裝、安田文庫藏）を見るのみである

舞の本兩種

伏見常盤と滿仲

第二六七圖
第二六八圖

る。なほ又同じ内閣文庫の史記と同種印本たる靜嘉堂文庫藏(零本、同種印本)の原表張裏張りより二種の舞の本の活字印本を發見してゐる。其の一は右諸本と同種の活字で、此の種の舞の本には、安田文庫藏伏見常盤*がある。右の八嶋と比照するに、全く同一の活字を共用してゐる。(八嶋第一葉表第三行「國」字、伏見常盤第二八葉表第一行に用ひたるが如き例)其の二(靜嘉堂文庫本より出たる高舘等)は諸本とは異り、光悦の亜流に屬する書體の活字である。是には滿仲*一冊(大島雅太郎氏藏)がある。この兩種の舞の本も諸本と同じく何番印行せられたものか未詳であるが、舞の本は後の如く三十六曲本として出版したものか否か未詳としても、やはり相當揃つた曲目數の出版が行はれたものと考へられる。

伏見常盤

伏見常盤は、前述の嵯峨本史記靜嘉堂文庫藏其の他の原表紙裏張りから現れた斷簡と同種の活字を以て印刷せられてゐるから、大略慶長十一年前後の開版(早ければ、慶長十一年八月以前)と認め得可く、毎半葉十行、毎行約十九字、字面の高さ約七寸二分。挿畫十面。總紙數三十一葉。其の料紙に具引き色縺りのもの(色黄・薄紅・萌等十葉)を用ひてゐる點に於いては、所謂嵯峨本(後記參照)との關聯が考へられるのであるが、現存資料の示す限りに於いては、かゝる種類の古活字印本の方がかへつて嵯峨本に影響を及ぼしたものと言ひ得る。又、繪入本としても最も古いものの一に屬するのであるが、其の挿畫の手法から見ても、奈良繪本を粉本としてゐる事は明かであつて、或は其の料紙の具引きなども一には奈良繪本の、印刷に不便な紙質の趣きを傳へんが爲に試みられたものではあるまいか

と思はれる。

慶長十年前後の平假名交り古活字刊本

慶長十年以後十五年位までの間に現れた刊記其の他刊行年時を限定する確證を有する平假名交り古活字印本は、刀劍書が数種と、慶長十四年刊太平記とを除くと他は所謂嵯峨本の一類である。

慶長十年前後の片假名活字本

片假名交りの古活字印本は、寧ろ平假名よりも其の發達が早く、慶長八年五十川了庵(富春堂)刊太平記(前記参照)と共れ以前(慶長七年)刊行の太平記(前記参照)に次いで、徒然草壽命院抄(慶長九年刊)、同十年刊(要法寺版)沙石集と太平記(前記参照)、伏見版東鑑等があり、同十二年には醫德堂守三刊太平記賢愚抄(刊記参照。刊記「慶長十有貳丁未晉仲夏如意珠日於醫德堂守乾三上梓刊行」四十巻上下二冊。内閣文庫・成簣堂文庫・松井簡治博士・[illegible]氏藏)があり、同十五年には、左の二書がある

慶長十五年刊太平記・同賢愚抄

太平記　四十巻剣巻一巻　二十一冊　圖書寮藏・内閣文庫・大阪府立圖書館・久原文庫(巻九補寫)・岩瀬文庫・高野山寶龜院・安田文庫(巻十七補寫)・高木文庫・成簣堂文庫二本(一本は巻十二・巻十五補寫)・高野辰之氏(缺三冊)・福井市立圖書館・布施巻太郎氏藏

(刊記)慶長十五曆庚戌二月上旬日　春枝開板

右の太平記と共に印行せられたるものに太平記鈔(安田文庫等藏)あり。(後記参照)

太平記賢愚抄　四十巻　二冊　蓬左文庫・刈谷町立圖書館・高木文庫・神田喜一郎氏藏

(刊記)慶長十五庚戌暦孟春仲旬第三刊行焉

慶長十四年以前刊寶物集 第一六九圖

又、慶長十四年以前の刊行と認む可きものに、寶物集(三卷・三冊)、神宮文庫・大谷大學(中缺)・安田文庫・松井簡治博士・大島雅太郎氏・大屋德城氏(左記識語の他に、「相州志貴峯千手精舍」識語あり。)藏)がある。大屋氏藏本に存する左の墨書識語に據つて其の刊行年時が限定せられるが、無論其の識語より程遠からぬ頃の出版に係るものであらうと思ふ。(大島氏・大屋氏藏本には雲母模樣の原表紙を存す。雲母模樣の表紙は嵯峨本に於いて其の裝釘の一特色とする所なるも、當時新刊の諸本に之を用ひたる例少からず。)

(大屋氏藏本上・下卷墨書識語)慶長十四年菊月中旬求之西南院秀辨(秀辨舊藏識語ある古今韻會擧要(古活字印本)の傳本も他に存す。)

慶長十五年以前の平假名活字印本

これ等片假名活字印本と共時に刊行せられた平假名活字印本には前記諸本・辨の本等の他に、刊記を有するものとしては、慶長十二年刊太平記及び、識語其の他に據つて刊行年時を限定し得る本朝古今銘盡(二版並びに別種の一版)、同じく口傳書(慶長十二年以前刊)等があり、所謂嵯峨本と稱する一類の刊行も慶長十三・十四・十五年の伊勢物語・同十四年の伊勢物語肖聞抄・同十五年の源氏小鏡・方丈記等、慶長十五年前後に榮えてゐる。

慶長十二年刊解紛記(四版) 第一七〇圖

解紛記(三卷三冊)は刀劍鑑定の書であつて、其の紛はしきを解きあかす意を以て書名とした。同一年內に四度同じ活字を組換へて重版印行し、三版は初版(再版は全く同一)に比して著しく編纂の體を改め、第四版は第三版に若干の改變(第三版の改變は卷首の一部分なりとす。)を加へて

ゐる。

（四周單邊）慶長十二丁未曆三月　日　　　高木文庫藏（上卷一冊、原表紙存す。）

（四周單邊）慶長十二丁未曆三月　日　黒庵(印)　帝國圖書館藏（四冊、原表紙存す。）

（四周雙邊）慶長十二丁未曆七月　日　黒庵　　內閣文庫藏（四冊、昌平坂學問所舊藏、褐色表紙附。圖書番號二〇五八四）

（四周單邊）慶長十二丁未曆七月　日　黒庵(印)　內閣文庫藏（合一冊。□□堂舊藏。圖書番號二四七四四）・靜嘉堂文庫影鈔本藏（松平秋霜軒舊藏。）

刀劍に關する書は、慶長期に入つて、本阿彌家の手を經た系統のものが專ら流傳し、現に慶元中の傳寫本が多く殘存してゐるのに據つて見ても、當時如何に行はれたかがわかる。從つて、當時最も要望せられた刀劍書の出版の如きも早くから行はれたのである。解紛記に次いで本朝古今銘盡も兩版行はれた。一は安田文庫所藏の一本四冊、松平秋霜軒舊藏で極めて大型の活字（伊勢物語・肖聞抄一卷本に[illegible]するものと同樣の活字に、若干刀劍書に特有なる作字等を混植せり。）を以て印行し、別に銘圖一冊（原整?）を添へてゐる。（毎半葉八行、毎行約十四字、字面の高さ約六寸六分。上中下三冊に改裝分綴し、別に銘圖一冊あり。整版なる?用紙、卷末に慶長十八年八月日、吉村新兵衛[illegible]花押[illegible]にするものの現に合して一部を形成せるかの疑問あれども、[illegible]）

本文下冊の奥に左の墨書識語があり、其の刊行年時を限定する。

右此書達目利關鑰也故雖爲家秘傳身之珍寶依不淺其志奉相傳早努々不可有他

慶長十二年七月刊行の本朝古今銘盡（大字本）　第一五七圖

見者也」　慶長拾貳七月吉辰　木屋　良茂(花押)

松田道以刊行本朝古今銘盡(小字本兩版)

是と內容を同じくする略ゝ共時印行の別版がある。活字は比較的小型で、連續活字を使用する事が少い。毎半葉八行、毎行約十八字。字面高さ約七寸一分。刄文及銘圖を挿む。「本阿彌家の家職用本として本阿彌宗家又は光悅の出版したものである」とする嵯峨本考の說は、何等確證無き臆說であつて、寧ろ管見に入つた傳本の大部分、卽ち第一版三本及び口傳書三本共に松田道以久元の墨書識語(慶長十二・三年)を存するから、本書は口傳書と共に松田道以の刊行したものであらうと思ふ。傳本の管見に入るもの五本、其の中には植版を異するものがある。第一・二種の各傳本とも、刄文には入墨して共の文様を補つてゐる。

第一種本

第一種本(初版)

この種の傳本は、何れも原裝を存してゐるが、表紙は手擦の爲に損じたものが多く、僅かに雲母模樣の存在を確め得る。安田文庫藏の一本(改裝)には識語の書入がないが、東洋文庫藏二本(一は井山重彦舊藏識語無し。)の中、一本の奥に「慶長十三年正月四日　松田道以　久元(花押)」、高木文庫藏本の奥には「慶長十二年霜月吉日　松田道以　久元(花押)」の墨書識語があり、卽ち、其の出版年時が、慶長十二年秋以前に限定せられる。第二種本も亦安田文庫藏本に據れば松田道以より出たものであるから、其の何れが先行の初版であるかは未詳で

あるが、餘り時差なく兩度の印行を見たものであらう。

第二種本（再版）

第一種本

第一種本と同種活字の異植字版　この種の傳本は京都帝國大學圖書館藏本及び安田文庫藏本（京大本は後に識語なく、共に傳はる口傳書の奥に安田文庫本と同じ慶長の識語を存す）がある。京都帝國大學藏本は表紙を缺き、打物拵鑑」の外題を存し、又別に「本阿彌家職用本」なる後人の加筆がある。嵯峨本考の著者の臆說は、かゝる後人の加筆に一種の暗示を得たものであらう。

松田道以并口傳書

口傳書

前記本朝古今銘盡の書本に「口傳おほし秘すへし」「口傳」等とある口傳の内容を傳へた一冊である。本朝古今銘盡（小字本）と全く版式を等しくし、且つ管見に入つた傳本（三本）は共に皆松田道以の墨書識語を存するから、前記銘盡（小字本）と共時の印行に係る事は明確である。其の内容よりすれば銘盡（大字本）にも亦、口傳書の附刻が存在す可きではあるが、大字本に添う可きものは未だ發見されない。

（島本文庫藏本識語）慶長十二年霜月吉日　松田道以久元（花押）　加藤次大夫殿まいる

（安田文庫藏本識語）慶長拾二十二月吉日　松田道以久元（花押）

（大島雅太郎氏藏本識語）慶長十三年三月吉日　松田道以久元（花押）　下石桂兵衛殿

慶長十六年頃刊本朝古今銘盡

右の諸本より數年後の開版に屬するが、本朝古今銘盡にはなほ慶長十六年頃の印行で

第二七六圖

認む可き一本がある。(安田文庫藏、一冊。毎半葉十行、毎行約二十字。字面の高さ約七寸三分。本書の活字、紀州能阿彌刊の活字と共通の部分あり。)卷末の左の跋文は略ゝ刊記と認む可きものであらうと思ふ。

右之銘盡竹屋以正本憐相寫早

慶長十六年　五月吉日

慶長十四年刊太平記 第二七七圖

刀劍書の他には、慶長十四年の太平記がある(四十卷、四十冊。毎半葉九行、字面の高さ約七寸七分。劍卷なし。)長文の刊語の末に、

慶長己酉陽月既望　存庵跋　　才雲刊之

とあり、書體麗しく、整備した版式を有する。附刻活字の混用は、本書に於いて初めて試みられた樣式であらう。

傳本

傳本の管見に入るもの、內閣文庫所藏(昌平坂學問所舊藏。原裝)・岩瀨文庫・成簣堂文庫(缺十六冊。原裝。吉澤義則博士舊藏)・杉浦三郞兵衞氏藏(他に零本は、京大圖書館(卷三八)東洋文庫(卷三二)藏の二本あり。)の諸本がある。

嵯峨本の刊行

以上の他に、當時の平假名活字印本として特に注意す可きは所謂嵯峨本の一類に屬するものであつて、慶長十三年刊伊勢物語(二種五版)・同十四年刊伊勢物語・伊勢物語肖聞抄(二版)・同十五年刊伊勢物語(三版)・源氏小鏡・方丈記(墨書識語)等刊行年時の明確なるものが少くない。これ等に就いては後に述べる事として、次に前記慶長十五年以前に於ける假名活字印本の刊行を一括して表示する

慶長十五年以前刊行假名活字

慶長七年(以)(刪)刊　太平記(五十冊 了庵刊)(片)

くない。寧ろ當時の假名活字印本としては、有刊記本は多數の無刊記本中に於ける偶然的なる存在である。然しながら、それ等國書の開版は武器に關するもの及び軍記物語の類が多數を占めてゐた事は動かす可からざる事實であつて、卽ち、當時に於ける印刷文化が著しく武家階級に支配せられてゐた事を示すものである。

又以上の表記に據つて見ると、平假名交り活字印本の發達は、近世印刷文化史上、と言はんより寧ろ我が印刷文化史上、特異なる位置を占む可き「嵯峨本」の刊行に負ふ所多大なるを知るのである。乃ち、次に項を改めて嵯峨本に就いて考究しようと思ふ。

嵯峨本に就きては昭和七年九月、拙著嵯峨本圖考に稍詳細に論ぜるも、其の後若干新資料を得たるものもあれば、今茲に若干補正を加へて一節に配す。なほ詳しくは嵯峨本圖考を參照せられん事を乞ふ。

第二節　「嵯峨本」の刊行

嵯峨本諸本の版行に關する「嵯峨本考」參照

「嵯峨本なる名稱は、既に室町時代に行はれてゐたが、其れは洛北の諸禪寺、殊に天龍寺開版の版經「妙法蓮華經」附訓刻本八軸、(卷末に「應安五年三月十四日　希杲拜書」の識語あり、當時の雕刻と認む)を指すものであつた。永正七年賢範書寫の妙法蓮華經の奧には明らかに應安本を「嵯峨本」と稱してゐる。又、安田文庫藏の一本(叡山眞如藏舊藏)の如く、江戸初期の筆蹟もて嵯峨本と箱書せられてゐるものもある。印刷題簽を有する傳本もあると言ふが、其れは應安本を江戸中期頃飜刻したらしい卷子の小本(成簣堂文庫藏)に見られるものを指すのであらうと思ふ。辨疑書目錄などに或說として平安朝嵯峨天皇の勅によつて空海がこの經に讀曲を書き加へて奉つたが僞である」と記してゐるのは無論當らないが、同書に故に今の印本の經には外題の上に嵯峨本の三字がある等と言つてゐるのはやはり飜刻本を指すものであると思ふ。

かく中世禪流關係の版經を其の出版の地に因んで嵯峨本と稱するのに對して、江戸時

林鵞峯の活版本史記

代の初頭、林鵞峯が眞名活字印本史記の一本に之を用ひてゐるものがあるが、更に（書誌島周）史記（史記寛文六年版本史記參照）現今行はれてゐる如く、平假名交り印本中の或る一類を指して「嵯峨本」と稱する事は、江戸中期以後、（寛永七年刊中村富平撰辨疑書目錄參）其の開版關係者を本阿彌光悅・吉田素庵等と思惟し、其の居住の地に寄せて名としたのに基くものである。故に、或は又「角倉本」とも稱し、更に、其の印行書籍の裝潢・書風等を第一義として考へる場合、其の雕刻關係當事者の中心の一人と認む可き本阿彌光悅に因み「光悅本」とも名づけてゐる。

中村富平撰辨疑書目錄

即ち、江戸時代の中葉以來、「嵯峨本」「角倉本」「光悅本」の三名稱は、同意義を有する名稱として用ひられてきたのである。而して、先人の此の方面の研究に於ける傾向は、聞書傳說等に基いて之を紹介し、殆ど資料の檢討を缺き、慶元間の雕刻書の何れをも「光悅本」に列せしめるが如きものすら少くなかつたのであるが、大正年間に至つて和田維四郎氏がこの方面に注意せられるに及び、先人の粗漏なる報告がやうやく訂正せられ、初めて嵯峨本に就いての纒つた調査（嵯峨本考・訪書餘錄）が見られる様になつたのである。

和田維四郎氏の研究

和田氏は、嵯峨本の定義を決定するに際し、先づ、本阿彌光悅の眞蹟を準據として、光悅自ら版下を書し、其の料紙裝潢等の意匠に至るまで自ら工夫を凝らしたと認め得可きものを以て「光悅本」と定め、これは主として貴顯及び知友に贈與するのを目的として出版したものであると思惟した。

和田氏の「嵯峨本」と「光悅本」

次に、和田氏は、光悅に倣つて、若干美術的なる意匠を加味し、光悅流の書風を以て雕刻せられた一類の刻本を目して、角倉素庵が「光悅本」を稍實用化して出版したものであるとの推測を下し、之を「嵯峨本」と定めた。即ち、「嵯峨本」は光悅の影響に基いて發生したものと解し、兩者の間に、自ら時間的進展の跡を認めるものである。前者に於いて、より高き美術的價値を唱した事は言ふまでもない。

和田氏の「光 [illegible]

而して此の兩者を統べて、更に之を「嵯峨本」と總稱し、即ち、嵯峨本に就いては、廣狹二義の解釋を與へてゐるのである。

其の和田氏の分類に「光悅本」として擧げられたものは、

觀世流謠本	(三種)	百番	百帖
久世舞三十曲本	(二種)		一帖
久世舞三十六番本	(二種)		一帖
方丈記	(一種)		一帖
百人一首	(一種)		一帖

等の五部であるが、之に、光悅と密接なる關係を有する出版として其の版式を異にする次の兩書を加へて七部とした。

「扇の草紙」(古活字本)　　一冊

「嵯峨本」と認めたものは次の八部である

(本朝古今銘盡)寫眞用本　一冊

伊勢物語　(二種　内一種は實は覆刻整版本)　二冊

伊勢物語聞書　(二種)　三冊

徒然草　(三種)　二冊

百人一首　(二種　内一種は繪入本)　一冊

三十六歌仙　(二種)　一冊

源氏物語　(二種)　五四冊

古今和歌集　(一種)(整版)　二冊

撰集抄　(一種)　三冊

以上の如く、和田氏は、其の書風・版式・料紙・裝潢等より、江戸時代極初期の雕刻書中に、「嵯峨本」なる一類を限定し、更に、之を「光悅本」と狹義の「嵯峨本」とに二分するのであるが、其の所謂狹義の「嵯峨本」と「光悅本」との明確なる識別は著しく困難であり、且つ、和田氏の示す狹義の嵯峨本と、古活字印本中の或種のものとも、亦同樣に判然と區別し難いものが少くないのである。かく、和田氏の分類にはなほ首肯し難い點も少くないのであるが、「嵯峨本」といふ名稱を以て總括し得可き一類の雕刻書を其の版式・裝潢の上より慶元間の雕

刻書中に於いて限定する事は、或程度まで可能であり、又其の限定は印刷文化史上深き意義を有するのである。

「嵯峨本」の定義

即ち、本阿彌光悅が自ら版下を書き、其の美術的意匠を印刷書籍に施した事は疑ふ可からざる事實である。又、光悅が當時の美術界の一半を統率し、之を指導してゐたといふ推定說に想到するまでもなく、其の門下が、光悅の意を承けて、刻書に從つたであらうといふ事は、自ら思惟せられる所である。更に又間接に光悅並びに其の雕刻書の影響を頗る豐富に蒙つた印刷事業の發生を見た事も、或種の古刻書の書風版式等が之を明示してゐる。然しながら、以上三者の間に於ける嚴密なる識別は行はれ難く、唯、以上三者の性質の一を具備するものを、慶長元和年間の雕刻書中に辨別し、之を嵯峨本と限定するに止む可きものであらうと思ふ。

即ち、重ねて言へば、光悅が自ら版下を書き、其の裝潢に美術的の意匠を施したもの、並びに、光悅の書風裝潢等の影響を頗る豐富に具備する刻書に對して嵯峨本といふ名稱を附與す可きであらうと思ふ。

現存嵯峨本書目

かゝる定義のもとに、現存資料を精査すれば、嵯峨本として檢討せらる可きものは、次の十三部となる。其の中、先人の報告と書名のみ同一にして、內容の異るもの、全く新たに發見せられたもの等は注記の如くである。

伊勢物語	(十種)		在來の研究と著しく異る。(後記參照)
伊勢物語聞書(肖聞抄)	(二種)		第二種本中にも亦若干の差異ある事、新たに發見せらる。(後記參照)
源氏小鏡	(一種)	二冊	和田氏嵯峨本考未收。
方丈記	(二種)	一帖(一冊)	一種は嵯峨本考未收。
撰集抄	(一種)	三冊	裝釘に兩種の差異ある事、在來知られず。
徒然草	(五種)	二冊	二種は嵯峨本考には未收。
觀世流謠本	(九種)	百帖(百冊)	七種は嵯峨本考には未收。
久世舞	(一種)	一帖	裝釘を異にするもの兩種ある事、在來知られず。
久世舞三十六曲本	(一種)	一帖	
新古今和歌集抄月詠歌卷	(一種)	一卷	整版——新發見
百人一首	(二種)	一帖(一冊)	
三十六歌仙	(二種)	一卷(一冊)	整版——一種は嵯峨本考所收のものと異る。
二十四孝	(一種)	一帖(一冊)	整版——嵯峨本考所收のものと異る。

光悦本・角倉本の二名稱を否定せんとする理由

なほ茲に附言す可きは、「嵯峨本」と同じ内包を有する同意義の語として之に代ふるに「光悦本」「角倉本」等の名稱を以てせんとする事は不穩當であらうと言ふ事である。光悦の實際に手を下したと考ふ可きもの、其の門流の所爲と認む可きもの、其の中には吉田

素庵の關與したものも存在するであらうと思はれるが、此等「嵯峨本」の一類中に包含せらる可きものは、極めて複雜であつて、「光悦本」「角倉本」等の名稱を以てしては、其の內容を蔽はざる恨みがある。かゝる複雜なる內容を蔽ふには、光悦にも素庵其の他にも密接なる關聯を有する洛北嵯峨の地名に寄せた「嵯峨本」の名稱を使用する事が、最も適當であらうと思ふのである。

嵯峨本の出版年代

次に嵯峨本の出版年代は、大略慶長後半期と言ひ得るであらう。伊勢物語は、其の跋文刊語に據れば慶長十三年同十四年同十五年に亘つて數次の開版が行はれてゐる。伊勢物語肖聞抄は慶長十四年に兩度印刷せられ、(同書跋文)方丈記は現存一本(東洋文庫藏本)の奥に存する墨書に據り、慶長十五年以前の刊行と認められる。源氏小鏡の上卷の末に慶長十五年十二月日書之と所刻があるのも、略々當時の刊行なる事を示すものであらう。其の他の諸書は刊記等明確なる出版年月を徵す可き性質を缺いてゐるが、何れも以上の諸書と相前後して上梓せられ、就中伊勢物語の印行等に若干の關係を有してゐた中院通勝の歿した慶長十五年前後まで最も盛んに開版せられたものであらうと思ふ。

光悦の宗教生活と活字本採用

嵯峨本が、挿畫を主とするものを除き活字印本を以て始められた理由を、其の主柱たる光悦の信仰生活に關する方面に、聯絡を覓めようとする考へ方も許されると思ふ。即

ち、光悦の信奉する日蓮宗の寺院が他に率先して活字開版を盛んに行つてゐた事が、彼の開版事業の實際に刺戟を與へたものではあるまいかと考へられるのである　次に嵯峨本の近世印刷文化の上に於ける意義を考ふるに、既に前述の如く平假名交り活字印本の發達が嵯峨本の出現に據つて著しく助長せられた事が明瞭である以上、嵯峨本は國文學書開版の權輿とは言ひ得ないとしても、少くとも嵯峨本が現れる樣になつてから、國文學書の開版が著しく隆盛に赴き、ひいて近世文學發展の主要なる動因となつた事は明確である　嵯峨本の近世初期印刷文化史上に於ける一つの意義は、實に茲に存するのである

印刷文化史上に於ける嵯峨本の意義（一）

印刷文化史上に於ける嵯峨本の意義（二）

又、嵯峨本は其の挿畫に於いても、我が印刷文化史上に一時期を劃するものと言ふ可きである　我が中世に至るまでの刻書に於ける挿畫は佛典中、極めて僅少なる實例に接するのみであつて、其の發達の最も遲れた方面の一つである（第一章參照）是が嵯峨本に至つて、初めて眞に其の目的に適つた優秀なる挿畫本の開雕を見る樣になつたのである　而して、其の挿畫の樣式が奈良繪本を粉本としてゐるらしい事は、嵯峨本伊勢物語の挿畫の例を以て知る事が出來ると思ふ　なほ、嵯峨本を其の發生の萌芽とする近世極初期の刻本挿畫の發達は、當時新渡の明刊挿畫本の影響をも蒙つてゐるものと考へられる　嵯峨本二十四孝等に之を迹づける事が出來るのである

（印刷文化史上に於ける嵯峨本の意義）

次に、嵯峨本の我が印刷文化史上に於ける最も重要なる意義は、其の版下書きの流麗なる光悦書風に加ふるに、美術的なる装潢を有する事である。嵯峨本の装潢は、本阿彌光悦が平安朝の料紙装潢等に施された美術的意匠を、印刷書籍に試みたものであつて、西本願寺所藏の三十六人集及び三井家所藏の元永本古今和歌集の料紙装潢と嵯峨本に於ける最も美術的加工の豊富なるものとを併せ見れば、自ら光悦の基く所を明かにする事が出來るであらう。

（嵯峨本の装潢）

嵯峨本の装潢は、美術的加工の差に據つて次の數種に分れる。

（一）其の美術的加工の最も豊富なる料紙は、厚様の雁皮紙に胡粉を引き、其の上に雲母模様を摺つたものである。厚様の雁皮紙を更に重ねて貼り合せたものもある。この種の料紙に色變りを混用する事は、嵯峨本の装潢として最上位のものであるが、其の種のものは比較的少く、殊に一冊の中に色變り料紙を交せ合せる場合は罕であつて、久世舞三十曲本（ア）種（東洋文庫藏）・百人一首第一種本（東洋文庫藏）・二十四孝（イ）種（成簣堂文庫藏）等極少數に過ぎない。

（雲母模様の種類）

使用せられてゐる雲母模様の種類は、田中親美氏の調査に據ると左の三十六種である。（嵯峨本考）

紅葉　　水玉　　松波　　藤巴　　水藤巴

竹（三種）　桐（二種）　菊　　梅（二種）　藤（二種）

櫻　　　横　　　蔦（二種）　紫陽花　笹

萍　　　露草　　菱紋　　　丸獅紋　松山月

芍藥　　山茨　　躑躅　　　波兎　　鶴

飛鶴　　蝶　　　蜻蛉　　　鹿

この種の料紙を用ひたものには、前記の色變り料紙を用ひたものの他に、新古今和歌集抄月詠歌卷觀世流謠本（第一種本—（一）一帖、緑又は紅の料紙を使用せるものあり。但し、一帖中に之を交へず。）方丈記（第一種本—（一））（光悦本一点嵯峨本より謡曲の借用可く異る）厚樣雁皮貼合料紙がある

但し、この種の料紙を用ひて摺刷を行つたものも、表紙には着色のものを用ひてゐる

料紙の性質上、卷子の外は、兩面に摺刷を行ひ、帖裝に仕立てられてゐる　又、これ等美術的加工の豐富なるものは、其の版式に於いても亦、光悦の書風を克明に刻み出してゐる事が特に注意せられる　この點に關する限り、「嵯峨本」中に「光悦本」と言ふ名稱を以て唱し得る一類の刻本を別に抽出する事も不可能ではないと思はれる。

（二）前者より稍美術的意匠を加へる事少く、雲母模樣を用ひず、厚樣の雁皮紙に具引きのみを施したものがある　但し、色變り料紙を用ひてゐるものと、之を用ひないものとがある　觀世流謠本（第二種本）は前者に觀世流謠本（第三・四種本）曲舞（三十曲本（二種））等は後者に屬する　其の帖裝であるのと表紙に着色雲母摺のものを使用する點とは、（一）と同じである

（三）薄樣の料紙に雲母模樣のみを摺つたもの。徒然草（第一・二種本）の如きである　料紙の

性質上、袋綴に仕立てられ、從つて、表紙も雲母模樣を摺つた比較的薄く軟かいものを使用してゐる。以下(四)(五)兩種の表紙も同樣である。

(四)薄き料紙に具引きのみを施したもの　但し、伊勢物語伊勢物語肖聞抄の如く、色變り料紙を用ひたものもある。觀世流謠本(第五種本)の如く、色變り料紙を用ひないものとがある。又、色變り料紙を用ひないものには、極めて薄く具引きを試みた撰集抄の如きものもある。

(五)料紙には何等の意匠を加へぬものがある　但し、其の場合にも、表紙のみ雲母模樣を摺つたものを用ひてゐる。現存の傳本に之を用ひてゐないものは、恐らく改裝に係るものが多いのであらう。

嵯峨本意匠[illegible]刊本の存在

嵯峨の裝潢の種類は、大略以上の如くであるが、印刷書籍に雲母摺等の美術的意匠を施したのは、果して光悅の創始であるか、或は又、既に用ひられてゐた手法を單に襲用したものであるかに就いては、なほ一考を要すると思ふ。即ち、嵯峨本よりも古き刊行と認め得可き徒然草古活字印本([illegible])の料紙に施された雲母模樣の樣式の古拙なる事は、之を嵯峨本の意匠の影響に據つて發生したものとは認め難い。なほ又、前述の慶長十一年以前の刊行と認められる伏見常盤([illegible])の如きも、色變り料紙を用ひ袋綴に綴られてゐるが、全く嵯峨本とは版式を異にする古活字印本であつて、之を「嵯

嵯峨本の漢籍の檢討

嵯峨本史記の書誌

現存史記古活字印本の第一種の吟味

峨本」と稱する事の出來ないものである。刊行年時から言つても亦、其の裝潢が必しも嵯峨本の影響を蒙つて現れたものと定める事は困難である（後出參照）恐くは、既に慶長十年前後に、何人か雲母模樣・色變り料紙等の裝潢を印刷書籍に試みるものがあつたのを、之に光悅の美術的創意が加へられて、新たに「嵯峨本」の特色となつて現れたものであらうかと思ふ。

又、當時の鈔本にもかゝる料紙を用ひてゐるものが現存してゐる　而して、光悅に據つて作成せられた料紙も、其の注意の下に、紙師の製作したものであつたであらうといふ事は、紙師宗二の印章を押捺した雲母摺料紙の現存（小山源治氏藏）に據つても明瞭であらう

因みに、茲に嵯峨本の漢籍と稱するものに就いて附言する。其の問題となる可きは、第一に、史記古活字印本中の一種である（前出參照）（四周雙邊、有界、八行十七字、注雙行、匡郭縱七寸六分、横五寸七分）內閣文庫（三十二冊、補記、慶長十二至十六年書入）（書寫手識語存す）・東北帝國大學（五十冊）・蓬左文庫（雲母模樣原表紙存す）・東洋文庫（二本）・大阪府立圖書館（卷一至十零本）・京都府立圖書館・久原文庫・栗田元次氏（原表紙原題簽存、一冊缺）・高木文庫・內野氏皎亭文庫・鍋島侯佐賀內庫所（一冊缺）・成簣堂文庫（零本二部、一は慶長十一年識語存す）・靜嘉堂文庫（零本）・新村出博士（零本）藏　光悅書風に類する題簽を有するが爲に、嵯峨本と稱せられるのであるが、「嵯峨本」の範圍を前述の如くに定めるならば、本書に對して「嵯峨本」の名稱を附與する事は出來ない　唯本書の刊行年時は現存傳本の墨書識語に據つて、慶長十一年以前に限定せられる　內閣

文庫藏本は、慶長十二年より同十六年の五年間に亙り、菅得菴が林道春の本を以て朱墨點を加へたものであるから、本書の出版は、慶長十二年以前となるが、更に、成簣堂文庫所藏の一本、卷三十二の奧に存する

　慶長十一丁未秋八月以東福善惠軒之本新加朱墨倭點者也

の墨書識語に據れば、少くとも本書の出版年時は慶長十一年以前に限定せられる。（成簣堂本書目參照。栗田元次氏藏本また右樣の識語存す。成簣堂本等の類を傳寫せるものか。）

而して又、この種の史記古活字印本の原書皮の裏張りより、平假名交り古活字印本（[illegible]）の摺り造りが發見されてゐるから、（[illegible]文庫藏本の例）この種の史記は、或種の假名交り活字印本と同一關係者の手になつたものである事が考へられるが、其の版式は眞名本と假名本と自ら相異るが故に、之を版式の上より整理する場合には、兩者全く其の類を分つのである　近世極初期の雕刻書整理の方法を求めて、傳存の書籍其の物と其の版式との二つの條件の外に發展し得可き事の困難なる限り、右の整理に止らざるを得ないのである　なほ又、後印の變遷、無界、八行十七字の古活字印本（[illegible]）の題簽に先行の慶長十一年以前刊本の其れを襲用してゐるもの（[illegible]）があつて、之に對しても單に其の題簽の書風より所謂嵯峨本と假稱する事は止むを得ないが、是は、先行本との關聯を示すに止り、林羅山の言を裏書す可き刻本は慶長十一年以前刊本であらうと思ふ

林鵞峯の嵯峨大本史記の吟味

次に林鵞峯が吉田氏所刊の嵯峨板大本(又は嵯峨本)と稱した史記の刻本の性質に就いて考究を進める事とする。卽ち、

鵞峯林學士文集卷九十八、書授島周史記後には左の如く記るされてゐる。

昔先考授史記評林一部於侍史、寫點加朱、而後以別本授之、而復爲家本、余幼時就此本一覽、爾來或門生請寫點、或侍史欲一見者、乃許借此本、丁酉之災在某人之手失、世家三冊、以新板本補之、余家藏遷史數部、其中吉田氏所刊嵯峨板大本有訓點、未遑加朱、丁未之冬侍者島周有一覽之志、余爲試彼之力、乃命之就此本寫朱句於嵯峨本、彼候史館之暇、勤而不怠、至今年仲秋全部功成、於是爲勸其學、且稱其勞、遂授此本、點朱既備、讀過可易、爲汝待其再覽、聊可記憶、周其勤哉 戊申八月朔(原文儘)

嵯峨本と吉田本訓點本

卽ち、林鵞峯は、家藏の嵯峨本史記を島周に與へたのであるが、「吉田氏所刊嵯峨板大本有訓點未遑加朱」の解釋に依っては、嵯峨板本史記の性質の限定が著しく異なる結果に導かれるのである。嵯峨本考の著者は、之を解して、附訓の刻本の存在を思惟し、捜査するも得ざりしたが、此の「有訓點」は、無訓の刻本に、墨點(訓點)のみの書入が施されてゐたものと解釋したいと思ふ。吉田素庵所刊にして鵞峯の言を信ずるならば、素庵の所刊は、慶長の中頃であらうと思はれるから、現存せる慶長中所刻の史記刻本中に之を求めなけ

ればならない。慶長中の史記刻本と認められるものは最大限三種存在するが、何れも活字印本にして、附訓の整版本は發見されない。史記のみならず、當時の漢籍にして、附訓刻本は極めて罕であつて、然も罕に存する附訓刻本は殆ど所謂啓蒙的なる書籍に限られてゐる。近世極初期に於ける印刷文化の大勢より言ふも、史記附訓刻本の存在は全く可能性に乏しい。更に又、當時に於いて「點朱既備」と言ふが如きは、朱點・墨點・訓點の兩樣が完備せる意に解す可く、經籍の無訓古活字印本に、當時讀過の人士が加朱・墨點云々なる識語を記るして、朱墨兩樣の訓點の書入を施してゐる實例には數限り無く逢着するのである。然も、朱墨兩樣の點法は、中世を通じて、永く我が國學士の間に用ひられ來つたものに外ならぬのである。乃ち、島周の得たる刻本の現存如何は知る事が出來ないけれども、鵞峯の所謂嵯峨本史記なるものは、やはり無訓の古活字印本であらうと推定するのである。而して、古活字印本とするも、如何なる版式を有するものであるか、又、現存各種の史記古活字印本中の何れに相當するかは全く詳かにし得ないけれども、現に嵯峨本と假稱する一本に、之を擬する事も出來ようかと思ふ。然しながら、若し、之に擬し得たとしても、今茲に定めた嵯峨本の範圍に編入し難い事は、再び言を重ねる必要は無いと思ふ。

次に、文章達德錄綱要（[illegible]）に就いては、既に嵯峨本考に論ぜられてゐるから、茲に

[illegible]

贅言するまでもない

從つて、慶長中の漢文書に於いては、嵯峨本の定義に相當する刻本は發見する事が出來ないのである。

嵯峨本刊行を中心とする光悅と素庵との關係

次に嵯峨本の各說に入るに先つて、茲に若干の資料を通じて、なほ「嵯峨本」刊行を中心とする光悅と素庵との關係、引いては當時の出版界の實相の一端を窺つて見ようと思ふ

まづ現存の諸傳本の檢討に據つて想定し得可き事は、本阿彌光悅の行草體の書風を基準として其の一類の刻本を規定する「嵯峨本」即ち特種なる書風版式を有する平假名交りの刻本(其の大多數は活字印本に屬する)が、特に嵯峨本のみを印行する爲に用意せられた、いはば專屬の職工と言ふ樣なものはなかつたであらうと言ふ事である。少くと

嵯峨本刊行に從事した職工の性質

も其の職工は「嵯峨本」以外に眞名活字印本等の作成にも從事したであらうと考へられる事である。(出版に關する汎ゆる工程が同一場所で行はれたと考ふ可き當時に於いて、例へば嵯峨本伊勢物語肖聞抄(久原文庫藏)の原表紙裏に眞名活字印本醫書の摺遣りを用ひてゐるものがあるのは其の一證となる。) 然し、是を以て光悅が平假名交り行草體の所謂「嵯峨本」の刊行の他、楷書體の眞名活字印本の出版に關與したものと考へるのは甚だ早計に失する。或は其の方面にも業績を著はしてゐたのかもしれないが、現在に於いては、其の書風並びに裝潢の意匠等を通じて、光悅が「嵯峨本」の刊行に對して積極的な

る立場に在つた事を察知するに止まる。或は又、光悦の下に統率せられた工藝百家の組織があつたと唱へるものもあるが、是等はなほ一種の推定説に過ぎず、光悦の寛名活字印本の刊行等に關しては何等所論を進め得き資料を持たないのである。然し寛名活字印本等の作成に際しても、其の装潢の上に於いては、間接に光悦と交渉を有する事が考へられる。即ち、嵯峨本以外に光悦意匠の雲母模様の原表紙を存するものに、下村本平家物語（下村時房刊古活字印本、雲母模様の原表紙を有する零本多し）・中院本平家物語（古活字印本、帝國圖書館藏本雲母模様原表紙あり）・慶長十四年以前刊寳物集（片假名交り活字印本、大屋徳城氏・大島雅太郎氏藏本雲母模様原表紙あり。）・慶長十一年以前吉田素庵刊行の史記（[illegible]文庫藏本雲母模様原表紙存す。）・本朝古今銘盡・口傳書（慶長十二年十一月以前刊、古活字本、雲母模様原表紙存す。）等の諸本があり、又、前述の如く嵯峨本とは全く書風を異にする版式光悦流ではないを有する徒然草（古活字版[illegible]東藏、[illegible]）には色變り雲母模様の料紙が用ひられてをり、又、伏見常盤（古活字本[illegible]）には具引き色變り料紙が用ひられてゐる。右の諸本には略嵯峨本の刊行と同時のものもあるから、其れ等は光悦の影響を蒙るものであると言ふ事も出來るが、中には光悦に先行すると考ふ可きものも存する。右の徒然草は版式上からも、又雲母模様の様式が稚拙で、光悦の意匠に成るものと異る點から見ても、嵯峨本の刊行に先行するもの、即ち、光悦がかゝる先行の装幀を改良して、嵯峨本に見られる様な意匠としたものではあるまいかとの推定を行はしめる資料となるものである。（[illegible]前記）

又嵯峨本の刊行が慶長十三年刊の伊勢物語より遡り得る確證のない點から言ふならば、其れ以前の吉田素庵の刊行に係る史記の原表紙の光悦の意匠になる雲母模様は如何に解す可きか。無刊記本の嵯峨本類中には或は慶長十三年以前の印行に係るものも存在するかもしれないが、同じ史記の傳本中にまた光悦書風の原題簽が存する（内閣文庫・）（東洋文庫・栗田元次氏藏）事をも併せ考へ、是が慶長十一年以前吉田素庵印行當時の原題簽である以上、光悦が積極的に「嵯峨本」の刊行に關係する以前に、角倉素庵等の刻書事業に若干の關係を有し、續いで次第に深入りする様な事情になつたものではあるまいかとの推定が許されると思ふ。

在來、角倉素庵の開版事業は光悦の影響に基くものとの見解であつた。然し是は何等確證のある所説ではなく、光悦流の書風を基準として嵯峨本の刊行を説き、次に其の版式の影響を考察する立論の上より來る推論である。然るに右の如き資料の發見に據つて、反つて光悦が最初に角倉素庵の開版事業の一部に關與し初めた事が動機となつて、近世初期印刷文化史上に意義深き「嵯峨本」なる刻書事業の足跡を殘す様になつたのではなからうかと考へられるに至るのである。

角倉素庵の刻書事業に於ける二傾向

右の史記を中心とする現存諸傳本に據つて、慶長十年前後に角倉素庵が種々の刻書事業に關與したであらうと言ふ事、更に進んでは、慶長年間に至つて急激に發達を遂げた

坊刻本の隆昌は、素庵に負ふ事が多大であらうと言ふ事が、暗示せられる。

この種の吉田素庵の刊行と認む可き史記の傳本中には原表紙の裏張りから、前述の如く舞の本二種及び小型の謠本等の平假名活字印本が發見されてゐるから、當時に於ける製本等裝幀に關する工作が、植版其の他と共に同一箇所で行はれたものと認められる點から言つて（書誌學一ノ四掲載大坂物語の研究、鼠子讀耕之日記の條、及び後記參照。）是等の平假名交り活字印本は慶長十一年以前に同一關係者に據つて作成せられたものと言つてよい。其の製作指令者は異る場合もあつたであらうが、少くとも其の職人は同一であつたに相違ない。然し坊刻本發生期に於いては、其の注文主等も職人を通じて互に極めて密接なる關係にあつた事は言ふまでもない。此の事は次に述べる資料に據つても諾けるであらう

下村生藏は恐らく當時の刻工の主要なるものであらうと思はれるが、是が慶長九年に教誡新學比丘行護律義（一冊）を寶珠院の依屬に據つて印行し、翌年其の活字を襲用して元亨釋書を印行した。又、同人は其れ等の活字より稍大型の活字を以て中庸を印行した。（中庸一冊の卷尾のみに刊記[illegible]）其の刊行年時は未詳であるが、慶長十一年以前であらうと思はれるのは、他の兩書の印行の年時と併せ考へられる事と、其の活字を前述の史記の印行にも襲用してゐる點からである。少くとも下村生藏の嘗て使用した活字の一部分を襲用して角倉素庵の史記は印行されてゐるのである。更

下村時房と角倉素庵

史記の活字の流用

に下村生藏と極めて密接なる關係にあるものと想像せられる下村時房刊行の平家物語古活字印本)に雁の葉の雲母模樣を施した表紙を用ひた原裝本が數本殘存してゐる事は前述の如くであるが、この平家物語の書風は光悦風の亞流に屬するので、在來は嵯峨本の影響に出たものと思はれてゐるが、この下村本の平家物語を角倉素庵が尾州敬公に獻上してゐる事實を以て見ると、(書誌學三ノ四、拙稿駿河御讓本の研究參照)角倉素庵を中心として兩下村の關係の密接な事も考へられると同時に、この平家物語の開版が早く行はれたものである事も推定せられ、又是に據つて素庵が直接間接に種々なる開版事業に關與してゐた事も判然として來るのである。

更に史記の活字が慶長十四年木室新七刊の古文眞寶後集にも襲用せられ、春秋經傳集解の一本にも流用せられてゐる事實があり、又史記の光悦風の題簽が、其の飜刻の別種の活字印本にも襲用せられてゐて、次第に其の關係を辿つてゆくと、益々問題が複雜となる。即ち、是に據つて當時の出版界の事情も亦複雜な關係にあつた事が察知せられる。

學術に深い關心を抱く角倉素庵が、豐富なる財力を有して開版事業の中心に立つてゐた事は、漸く其の方面の事業が端緒に着いた慶長期に於いて、如何に其の發達に甚大なる影響を與へてゐるかは茲に論ずるまでもない事である。

光悦が開版事業に積極的なる立場をとり、嵯峨本が刊行せられる様になつて以後に於ける角倉素庵と本阿彌光悦との關係（開版事業の上に於ける）も明らかではないが、以上の如くながあるならば、恐らく兩者協同の立場にあつたものと解する事も不穩當ではあるまいと思ふ。

（一）伊勢物語

諸本類別表

嵯峨本伊勢物語は、在來異版の存在を知られたもの僅に二三種に過ぎなかつたのであるが、精査の結果に據れば、次の如くに類別する事が出來る。

(1) 第一種本　慶長十三年刊　(イ)版　内閣文庫（原裝、原題簽附）・秋田縣立圖書館（[illegible]）・
　安田文庫（原裝原題簽附）藏

(2) 第一種本　慶長十三年刊　(ロ)版　東洋文庫（[illegible]）藏

(3) 第二種本　慶長十三年刊　(イ)版　東洋文庫（原裝）・安田文庫・上林豐明氏（原裝）・穗積重遠氏（[illegible]）
　[illegible]藏

(4) 第二種本　慶長十三年刊　(ロ)版　東北帝國大學圖書館・笹野堅氏（[illegible]）藏

(5) 第二種本　慶長十三年刊　(ハ)版　京都帝國大學圖書館・陽明文庫（原題簽附原裝、表紙裏張に(ロ)版の摺遣を用ふ。）・

(6)第三種本　慶長十四年刊　東洋文庫(原装)・岩瀬文庫(改装)・高木文庫・臺北帝大藏・京都帝國大學圖書館・成簣堂文庫・笹川種郎氏・安田文庫(下巻)藏

(7)第四種本　慶長十五年刊　(イ)版　安田文庫(原装)・神戸市立圖書館(上巻一冊、下巻覆刻整版本補配)藏

(8)第四種本　慶長十五年刊　(ロ)版　帝國圖書館(二部)藏

(9)第四種本　慶長十五年刊　(ハ)版　高木文庫藏

(附)「覆刻整版本」(嵯峨本に準ず)

(イ)色變り料紙摺　内閣文庫・東京文理科大學・神宮文庫(上巻一冊)・岩崎文庫(二部)・安田文庫・岩瀬文庫・久原文庫・杉浦丘園氏・穂積重遠氏(下巻一冊)藏

(ロ)素紙摺　帝國圖書館・京都帝國大學・神宮文庫・刈谷町立圖書館・神戸市立圖書館(下巻一冊)・岩崎文庫・池田龜鑑氏藏

(10)第五種本　慶長中刊(無挿畫)一巻　正宗敦夫氏藏

各種本(第五種のみを除く)とも、上下二卷、袋綴二冊を原装とする挿畫活字印本、毎半葉九行、毎行十六・七字(不等)　料紙は種別に據つて若干の差異があり、其の挿畫も種別に從つて版を異にするが、第二種本は第一種本の版を襲用してゐるから、挿畫の異版は三種に分れる。

（覆刻整版を含めて四種）活字の樣式も亦、種別に據つて若干の差異があるが、是には其の同種の活字を植ゑかへて刷印を重ねた異植字版が存在する。乃ち、同種本中に（イ）（ロ）（ハ）の別を立てる所以である。是等の差等の如きは、精細なる比較研究に據つてのみ初めて發見せられる所である。第一種と第二種とは稍版式を異にし、特に第一種本は初版として有意義の出版であるにも拘らず、在來、同種の印本として之を看過し、慶長十三年刊本の異版が合せて五種の多きに達する事は全く知られてゐなかつたのである。しかのみならず、嵯峨本の影響に據つて發生したと認む可き覆刻整版本をも單に同種の後印本と誤認し、卷末に於ける素然の花押を缺くのみであるとせられてゐた。第四種本（慶長十五年刊）の存在は、日本古刻書史に報ぜられたけれども、和田維四郎氏は嵯峨本考に、之を得ずと記るされ、是に三種の異植字版の存在するが如きは、全く知られてゐない。第三種本（慶長十四年刊）も亦、未だ世に知られなかつたものである。右四種と版式等を異にする第五種本も亦最近の發見に係り、結局嵯峨本と認め得可き伊勢物語の異版の新たに發見せられたものは、之を大別すれば五種、更に異植字版に據つて細別すれば、十種の多きに達し、別に嵯峨本の影響に據つて發生した覆刻整版本が存在するのである。

第一種本（イ）版

第一種本（慶長十三年刊）（イ）版

本書の活字の樣式は、稍肉太であつて、第二種本以下に比して、光悅の書風の眞面目を最

もよく刻出し、其の版式より見て、慶長十三年刊嵯峨本伊勢物語の諸異版中、最初の開雕と認められる。藤色・薄黄色・薄紅色等の色變り具引きの料紙を交へ、表紙は、藤色に卯花の雲母模様、題簽は中央に行書體を以て「伊勢物語上(下)」とあり、原裝は上下二冊袋綴。

慶長十三年中院通勝刊語

卷末に、左の中院通勝の刊語を附し、其の末に通勝自書の花押がある。

> 伊勢物語新刊就余需勘挍抑京極黄
> 門一本之奥書云此物語之根源古人之説々
> 不同云々如今以天福年取被與孫女書正之
> 然而猶恐有訂挍之遺缺也更圖畫卷中
> 之趣分以爲上下是雖不足動好女人情
> 聊爲令悦稚童眼目而已
> 慶長戊申仲夏上浣
> 也足叟(花押)

右の刊語に據つて、中院通勝(也足叟素然)が、嵯峨本伊勢物語の刊行に關與した事、其の刊行には定家の天福本を用ひた事等が知られる。

第一種本(ロ)版

第一種本(慶長十三年刊)(ロ)版

本書は第一種本(イ)版と同種活字を用ひてゐるが、其の卷頭より全く植字を異にする。

活字の磨滅度より推して、第一種本（イ）版の開雕後、再び組換へて刷印を行つたものと認められる。挿畫は前版を襲用し、裝潢も同一である。管見に入つた唯一の傳本東洋文庫藏本の卷末墨書識語（[illegible]は刊行の時中院家花押を成して」滋野井季吉卿へまいらせられし也[illegible]）は第一種本が同じく慶長十三年の刊語を有する第二種本に先行する傍證ともなるものである。

第二種本

第一種本兩版の現存するものが第二種本三版に比して極めて少數である事も、第二種本の後出を語るものであらうと思ふ。

第二種本（慶長十三年 內閣）

第二種本は第一種本と活字の樣式を異にし、其の筆畫が稍纖細である。第一種本の活字を若干襲用してゐるらしい點もあるが、少くとも其の揩刷が新雕の活字を主として行はれたものである事は、版式の明示する處である。但し第一種本の挿畫竝に題簽を其の儘襲用してゐる點、及び第一種本と全く同一の中院通勝自書の花押ある刊語を附する點等より、この出版が第一種本の繼續事業であつて、同じ慶長十三年の內に行はれたものであつた事は疑ひない。其の三種の異植版の刷印時次は辨別し難いが、（イ）版と（ロ）版とは其の版式より、揩刷關係の密接なるを知り得可く、又（ハ）版の原表紙の裏張りに（ロ）版の刷り違ひを使用してゐるから、（ロ）版が（ハ）版に先行する刷印である事がわかる。

三版とも其の巻頭の如きは、殆ど同一植版であるが、丁數を追ふに從つて全く刷印の時を異にする別版なる事が辨別せられる。其の裝潢は何れも、藤色の表紙に卯花の雲母模樣があり、色變り具引の料紙を使用する事は第一種本と同一である。同版中に於いては、色變り料紙の交へ方までも一致するのが原則である。（嵯峨本圖考參照）

第三種本

第三種本（慶長十四年刊）

本書は、在來其の存在を知られなかつた一異版で、慶長十三年に於ける數次の伊勢物語刷印に續いて、慶長十四年に新たに開雕せられたものである。慶長十三年刊行の兩種と挿畫並に活字の樣式を異にする。其の字體は第二種本と酷似してゐるが、活字雕刻の刀筆は全く相違してゐて、新たに開版せられたものである事が知られる。現存の諸本は、具引きの料紙を用ひてゐるが、色變りを交へる事は無い。卷末の左の刊語は何人の識したものか明らかではないが、新刊世醅多矣といふのは、慶長十三年に五度も版を重ねてゐる事實を含むものであらうと思ふ。

第三種本刊語

伊勢物語新刊世醅多矣然京極黄門ゝ本
之奥書云此物語之根源古人之説今不同云々
而今以天福年所被與孫女本正之猶恐有
字畫之差互聊加訂挍又圖卷中之趣而

分爲上下蓋爲令好事童蒙悅目也於
戲予老嬾眞慵而不堪辨烏焉豈無紕繆
博洽君子改正焉幸甚
慶長己酉仲春上澣日

第四種本（慶長十五年刊）

第四種本

伊勢物語は、慶長十五年に前記諸本に次いで、更に三版を重ねた。挿畫も活字も凡て新雕せられたものである。其の刊語に言ふが如く、先行刻本を粉本とする翻印たる事は、版式の上にも現れてゐる。從つて初刻の第一種本に比し、玆には光悦の書風が著しく歪められた形で殘留してゐる。卷末の刊語を吉田素庵の記るす處であらうと思惟するものもあるが、嵯峨慶長十三年・同十四年刊本の刊語と若干の關聯がある事を推定せられる外に、何等の確證も存在しない。

第四種本刊語

抑京極黃門一本之奥書云此物語
之根源古人之說〻不同云〻故去慶
長戊申仲夏之比中院也足軒素然
以天福年間被與孫女本正之幷加書
[illegible]春中之趣令以爲上下引十[illegible]

今亦以其印本正之再令流布世而巳
慶長庚戌孟夏日

慶長十五年刊本に三種の異版の存在する事は在來全く知られてゐない。其の摺刷の時次を摺刷に現れた活字の磨滅度、版式等に據つて推定し、之を別つと前掲表示の如く(イ)(ロ)(ハ)の三種となる。其の中(ハ)版のみは色變り料紙を用ひてゐる

覆刻整版本

(附)覆刻整版本

本書は、卷末に慶長十三年の也足叟(中院通勝)の跋文を附載するので、在來、單に後印の無花押本として、慶長十三年也足叟の花押本と同種活字印本と認められてゐた。然るに、之を精査すれば、雕刻のさらへの痕跡さへ發見せられて、第二種本(イ)版（慶長十三年再刊也足叟花押本）の覆刻整版本なる事が明らかである。挿畫並びに原刊語共に覆刻たる事は言ふまでもない。其の覆刻は稍拙劣で誤刻等も存する　色變り料紙の色彩も各種本に比して著しく濃く、品位を缺いてゐる。從つて、何れの方面より見るも、本書は單に嵯峨本の影響に基いて出現した古刻本と認む可きものであつて、之を嵯峨本の列には加へ難いと思ふ。茲に、之を附載とする所以である。素紙摺のものには遙かに後の印刷に係るものも少くないが、更に本書を寬永十八年に覆刻した整版本も行はれてゐるから、本書摺刷の劇しかつた事、卽ち其の弘通愛玩せられた事がわかる　其の覆刻の年代は詳かに

（銀子請取之日記の書影）

し得ないが、或は慶長末期には鏤梓せられてゐたものであらうかと推定する。其の推定に對して或種の暗示を與へるものは古活字印本日本書紀（十二行十五行本）の一本静嘉堂文庫藏の原表紙裏張りより發見せられた「銀子請取之日記」である（書誌學一ノ四、拙稿「大坂物語の諸版本と古活字版」參照）。該日本書紀の活字印本は慶長十五年の洛納野子三白の跋文が附載せられてゐて慶長十五年の刊行であるが、静嘉堂文庫本は神代卷を除く二十八卷は慶長十五年の印行と定め得るが、神代卷のみは後年の再版本を併せたもので、日本書紀慶長十五年刊本の諸傳本の比較、及び銀子請取之日記中に大坂物語等が見える事、並びに静嘉堂文庫藏本が、元和二年、山田以文の先、道忠の校正書入を施したものである點等より、大體元和元年春頃に製本を行つたものが其の儘に傳へられたものと考へられるのである。其の原表紙裏より發見せられた「銀子請取之日記」の書類は表紙の裏張りから出たものである以上、少くとも製本師の手許に於ける銀子請取帳と考へる事は極めて穏當であらう。其の中に言ふ「表ちん」は表紙の代價である事は無論、殊にある部分には明かに「三分ひようしちん」とあり、又「一匁ゆゑんのすみうら」等とあるのは「判之ちん」とあるのを摺代と考へる事を扶けるものであつて、是等の記載は當時に於ける製本作業が植字摺刷等汎ゆる出版事業の手順の最後の工程の一として凡て同じ場所で扱はれた傍證ともなるものであらうと思ふ。然らば、本書類、書名の頭書價格は該書籍一部の價格を示すものと認められ、

本書類は慶長前後の新刊書籍の價格をも知り得る貴重なる文獻となる　要するにこの書類に記載せられてゐる書名が、其の當時に近く出版せられたものである事だけは確實である　其の中に伊勢物語も、度々書名が見えるが是も其の當時の新刊本でなければならない　其の當時の雕刻と認め得可き伊勢物語の刻本は、この覆刻整版本の外には存在しないと思はれるから、之が該日記に記載せられてゐる伊勢物語の新雕本たる可能性に富むものであらうと思ふ　其の傳本中に、丹緑彩色を施したものがあるのも出版年代の上に於いて注意す可き事であらうと思ふ。

第五種本
第十七圖

第五種本 慶長中刊

以上の九種は何れも繪入の二卷本で、其の系統を一にするものであるが、茲に新たに知られた正宗敦夫氏藏の一本がある　原本の大いさは縦九寸一分、横六寸八分　扉の葉の雲母模様を施した藤色の表紙を用ひ、料紙は何等の意匠を加へない素紙摺、慶長十四年に兩度の印行を見た次記伊勢物語肖聞抄の活字と同一で、印刷面に磨滅の多く現れてゐる點から見ると、本書の方が肖聞抄の活字を襲用したものであらうと認められる　然らば、本書の印行も慶長十四年以降に限定せられるが、其の肖聞抄には本文を全部掲げてゐないから、本書は肖聞抄の爲に併せて本文のみ印行せられたものであるかもしれない　何れにしても、慶長十四年肖聞抄の印行に次いで間もなく摺られたものであ

らう。毎半葉十行、毎行約十七字。字面の高さ約七寸三分。卷數を分つ事なく全一冊、總紙數畧附七十六葉、卷末には、抑伊勢物語根源古人說〻不同(云々)の戸部尚書在判の識語のみを刻し、刊記はない。戸部尚書の奥書の存在に據つても本書の本文の性質は明らかであるが、其の奥書の部分の眞名活字(十行十七字)も亦、肖聞抄の奥書と同一の活字を用ひてゐる。

なほ正宗氏藏本には全卷に開版當時の綿密な傍注書入があり、卷末の見返に「德運」の署書識語が見える。是も開版當時の筆蹟であるが、この名前は圖書寮尊藏の慶長中刊古活字印本平治物語(上十行平假名交り、第一種本三冊。)にも各冊の奥の同じ部分に墨書せられてゐるものがある。

(二)　伊勢物語聞書

(二)伊勢物語聞書

上中下三卷三冊、袋綴。原本の大いさ、縱八寸五分、横六寸三分。字面の高さ約六寸三分、毎半葉九行、毎行十七字。具引き色變りの料紙を用ひ、書皮は、伊勢物語第一種本と似て、淡藍色に、雲母模樣があり、題簽は中央に「肖聞抄上中下」とある。卷末に左の奥書があつて、伊勢物語と同じく中院通勝の關與した出版である。奥書の末、也足叟の下に、「素然」の二字を自書し「自得」の黒印を捺したものと、之を缺くものとがある。

此一冊可書進之由蒙　勅定之時予
細存之談宗祇法師所々令添削畢
　　　　夢菴子

右抄者宵柏老人所傳之作也仍號之
宵聞然依　後土御門仰手自書
進之云々爾降世皆弄之猶元凱注左
氏也彼翁者予祖之餘流庶弟也今爲
技儺亦有故者乎　新刊之時作三策了
慶長己酉季春上浣
　　　　也足叟（素然）［白得］

在來、嵯峨本考の研究に據れば、（素然）［白得］の記名捺印ある本は誤植の訂正があつて、第一版とせられ、記名捺印を缺くものは、誤植少く第二版にして、兩者の植字には異同があるとされてゐた。然も、第二版の傳本の入手者二三が下卷のみ單獨に得たのを以て、第二版の下卷を刊行するまでの間に、中院通勝が歿したのではあるまいかとの推測さへもするのであるが、今新たに第二版中にも、素然の記名捺印あるものが發見せられた。卽ち、第一版摺刷の後、直ちに第二版の植版が行はれ、單に何等かの關係で通勝の記名捺印

を缺いたものが生じたものと言へる。在來第一版と稱せられるものが、第二版に先行するものである事は、版式の明示する所である。管見に入つた傳本を整理して表示すると左の如くである。

(1) 第一種本（通勝記名捺印本）　帝國圖書館（下巻缺）・東洋文庫・阿波國文庫（本文庫藏、原題簽附原裝）藏

(2) 第二種本

（イ）通勝記名捺印本　神宮文庫（村井古巖寄進、原題簽附原裝）・東京文理科大學（原裝原題簽附、三上參次博士舊藏）・成簣堂文庫（原裝）藏

（ロ）無記名無捺印本　圖書寮尊藏（賀茂縣主文庫舊藏）・東洋文庫・久原文庫（中缺）・高木文庫・誓願寺所藏

（三）源氏小鏡

源氏小鏡は、言ふまでもなく、花山院長親が足利義持の爲に源氏物語の梗概を記るしたもので、源氏物語の梗概書中で最も古いものである。今茲に述べる嵯峨本源氏小鏡は和田氏の嵯峨本考にも採集せられず、在來餘り知られてゐない。後の古活字印本或は插畫模印本と異り、上下二巻に分ち、御幸の巻までを上巻とし、其の奥に「慶長十五年十二

月日書之」と刻されてゐる。是は、明かに刊語と定め難いが、其の版式の示す如く、略々其の當時の雕刻と認め得る。每半葉九行、每行十八字、上下卷共に八十六葉。活字の樣式は、伊勢物語肖聞抄と酷似し、或は肖聞抄の活字を襲用してゐる部分もある樣である。何れにしても其の版式上より嵯峨本の類に入る可きものである。現存の傳本比較的少く、中に又、間々下卷を缺いてゐるもの（東北帝大高木文庫藏）があつて、他の類本に接しないものが、上卷の奧の識語に據つて、下卷は刊行せられなかつたものと誤解するのも尤である。傳本の管見に入つたものは、成簣堂文庫（原裝）・久原文庫・東北帝國大學狩野文庫（下缺）・高木文庫（下缺）の四本である。

（四）方丈記

（四）方丈記

嵯峨本方丈記は、現存傳本の示す所に據れば、其の裝潢に兩種あり、裝潢と共に其の植版をも異にする。

第一種本

其の一は、厚き雁皮紙を貼り合せて具引きを施し、雲母模樣を摺込んだ料紙を用ひてゐる（但し、色變り紙を交へず）。この厚い雁皮紙を重ね合せた料紙は、嵯峨本中にも多く用ひられてゐないもので、嵯峨本方丈記の裝潢に於ける一つの特色を爲すものと言つてよい。從つて、料紙の關係上、兩面摺り、帖裝に仕立てられ、每半葉九行、每行十二至六字（不等）。字面の高

第一種本に見える刊行年時の識語（第二十二圖）

第二種本

[illegible]

き約七寸二分。本書の活字の様式は、前記諸本とは異るが、其の版式はかへつて前記の伊勢物語第一種本を除く他の諸本よりも遙かに光悦の書風に富んでゐる。其の本文は所謂通行本で、卷末に「月影は」の歌がある。本書には、刊語は無いが、東洋文庫所藏の一本の奥に、「慶長十五庚戌七月十三日」の墨書識語があるから、其の出版年時が限定せられるのである。本書の傳本は頗る罕であると言はれてゐるが、管見に入つたものは六本に達する。嵯峨本中の最も優なるものであるから、其の保存にも自ら留意が行はれて比較的傳本の數も多いものと思はれる。前記一本の他東洋文庫一本、靜嘉堂文庫・安田文庫（西荘文庫舊藏）・阿波國文庫（不忍文庫舊藏）藏の五本があり、何れも原表紙を存するが、原題簽は殘つてゐない。或は原來之を具備しないものかもしれない。

其の二は、前記の帖裝とは、全く植字を異にする一本である。帖裝本に使用した活字を以て再度植版摺刷を行つたものと認められる。何等意匠を施さぬ素紙を用ひ、袋綴に仕立られてゐる。傳本の管見に入つたものは、本書の方が反つて少數であつて、東洋文庫と成簣堂文庫とに各一本を見るに過ぎない。

なほ方丈記には嵯峨本と誤稱せられる十行の古活字印本が一種ある。其の本文は、同じく通行本の系統には屬するが、其の文字の異同に據つても嵯峨本方丈記と直接の母子關係は無いと認められる。卷末の「月影は」の歌なども缺いてゐる。これも比較的傳

本が罕で、京都帝國大學(大久保忠寄舊藏)・安田文庫(西荘文庫舊藏)・蓬左文庫・谷村一太郎氏(「北氏家藏」印記あり。)藏の四本を調査し得たのみである。傳本が少數で、嵯峨本と誤られ易いので玆に附言して置く。前記の嵯峨本の種別並に所在を表示すると次の如くである

嵯峨本方丈記種別表

第一種本(初版)――(帖裝) 東洋文庫(二本)・安田文庫・靜嘉堂文庫・阿波國文庫藏

第二種本(再版)――(袋綴)――成簣堂文庫・東洋文庫藏

(五) 撰集抄

(五)撰集抄

嵯峨本撰集抄は、活字印本、上中下三卷、毎半葉九行、毎行十八字(不等) 字面の高さ約七寸本書の活字は、伊勢物語第一種本の活字を襲用し、間々新雕の活字を混用してゐる 新雕のものは、楷書體に近い眞名が多く、稍字體が小さいから、比較的指摘が容易である 從つて、本書は伊勢物語第二種本とも版式に於いて共通な點がある 嵯峨本考に、他本に比して、字體稍大なりと言つてゐるのは、穩當を缺くものであらうと思ふ 本書の出版年時は、伊勢物語に次ぐものとして、慶長後半期の中頃であらう 本書の本文の性質に就いては、已に知られてゐるが、元和寛永年間後印の活字印本は、直接間接に本書を粉本として翻字を行つたものである。 其の版式に於いて寶物集の異版と對照するものが多く、寶物集と共に、當時に流行した事が察せられる。

（一）具引き料紙

本書の傳本は、其の裝潢に據つて二種に分れる。

一は、薄く具引きを施した料紙を用ひて袋綴としたもので、表紙のみ大型の雲母模様を摺り込んだ淡藤色のものを使用し、黄紙に行書體を以てした題簽を貼附してある。傳本の管見に入るものは安田文庫・阿波國文庫・成簣堂文庫・成田圖書館・龜田次郎氏藏（[illegible]）（[illegible]）の五本と高木文庫藏（[illegible]）・東洋文庫藏（[illegible]）の二本とがある。

これらの諸本に對して、料紙に具引きを施す事なく、又表紙に雲母模様を用ひない一本（安田文庫藏上卷一冊）がある。其の版式は前記諸本と全く同一であるから、出版の際、單に其の裝潢を兩様に分つたものに過ぎない。

（六）徒　然　草

本書は、同じく光悦書風ではあるが、他の前記諸本とは稍趣きを異にする點がある。毎半葉十行、毎行十七八字（不等）字面の高さ約七寸四分、活字印本。同種活字を以て度々植版を行つてゐる。其の裝潢も兩種に分れ、裝潢の異るに從つて、植版をも異にしてゐる。其の一は、薄様の雁皮紙に雲母模様のみを摺込んだ料紙を用ひたものであつて、これに又兩種の異植版が存し、其の何れが先行であるかは詳かにし難いが、ともかくも兩

度時を異にして摺刷せられたものである。第一・二種本共の二は、前者の活字を組換へて、素紙に摺刷したものであつて、之にも兩種の異植版が存在する。第三・四種本即ち、同種の活字を用ひて四度植版を重ねてゐるのである。

各種本の關係

第一種本と第二種本とは裝潢を等しうし、共に雲母模様を摺込んだ料紙を用ひ、唯其の活字の植版のみを異にする。其の何れが第一版であるかは詳かでないが、第一種本の方が初版ではあるまいかと思はれる。

第三・四種本は其の配字植版等より見て、兩者の摺刷の關係が極めて密接である事がわかるが、其の活字の損傷のより著しく現れてゐる第四種本が、後度の摺刷に係るものである事は明瞭である。又、第三種本が第二種本(雲母摺)を底本として植字を行つてゐるらしい事は、第三種本の配字植版が、第一種本の其れよりも第二種本の方に著しく接近してゐる事に據つて察知せられる。而して、其の版式より推しても、第二種本(雲母摺)と第三種本との出版の時差は僅少である事が認められる。

傳本類別表

次に各種本の傳本を表示する。

第[illegible]、四[illegible]

第一種本(雲母摺)——久原文庫(水色原書皮に、草假名字體の原題簽存す。上下二冊。岡本橘仙氏舊藏、奥山春枝氏覆刊。)・阿波國文庫(不忍文庫舊藏)・刈谷町立圖書館(村上忠順舊藏)・安田文庫・大島雅太郎氏・反町茂作氏・東北帝國大學狩野文庫所藏

第二種本(雲母摺)――內閣文庫・東洋文庫(二本)(一は完本。二は下卷一冊、落丁一葉を光悅書風にて補鈔す。)藏

第三種本(素紙摺)――東洋文庫・安田文庫藏

第四種本(素紙摺)――內閣文庫(二本)(一は淺草文庫舊藏、一は熱海山田氏舊藏)・安田文庫(原表紙存す)藏

第五種本

又、第四種本摺刷の後、其の活字を襲用し、之に若干新雕の活字を交へ、字面の高さを改めて植版を行つた一本(第五種本)がある。從つて活字の磨滅度が著しく、文字が肉太に摺刷せられてゐる。是も併せて嵯峨本として附載して置かうと思ふ。管見に入つた傳本は、東洋文庫・安田文庫(二本、一は完本、二は下卷一冊)藏の三本である。

（七）觀世流謠本

（七）觀世流謠本

觀世流謠本は、嵯峨本中最も著明なるものゝ一つである。從つて、他の嵯峨本に比して、之に對する所說の見る可きものも一二存在するが、なほ不備なるを免れ難く、今玆に、其の後に得たる若干資料を以て、若干の考察を進める事とするが、更に他日の資料捜査の結果に俟つて、重ねて補正を期したいと思ふ。

丸岡桂氏は、嘗て、嵯峨本謠本は活字印本を以て六版ありと報じてゐるが、現存の傳本よりして、少くとも九版以上の存在は明確である。而して、之を其の装潢より見れば嵯峨本装潢の各種のものを殆ど網羅し、之を分つと左の五種となる。

第一種は、厚様の雁皮紙を貼り合せ、具引き雲母模様を施した料紙を用ひ、兩面摺として、帖裝に仕立たもの。之には綠紅等の色變り料紙を使用する事はあるが、一帖の內に種々の色紙を交へる事なく、紅綠等の一色の料紙を以て一帖としたものを百番中に若干混じてゐる。第一種本之に屬す。

第二は、第一と略同質の色變り料紙を用ひてゐるものであるが、之には、雲母模様を摺る事なく、一帖の內に、各種の色紙を交へ用ひてゐる。但し、其の表紙には、大型の雲母模様を摺り込んでゐる。第二種本之に屬す。

第三は、第二と同質の料紙を用ひてゐるが、具引きのみを施して、色變りの料紙を交へる事のないものである。但し、其の表紙のみは、第二と同様のものを用ひてある。第三・四種本之に屬す。

第四は、以上の三種が、厚紙に兩面摺として、帖裝に仕立られてゐるのに對し、之は具引きの薄様を用ひた袋綴である。第五種本之に屬す。

第五は、何等の意匠をも施さない第四と同質の料紙を用ひてゐる。但し、其の表紙のみには、雲母模様を摺つた薄い色紙を用ひてゐるものもある。第六・八種本之に屬す。各種本とも題簽には唐紙を使用するのが例である。

右の裝潢の種別は卽ち、雕刻の年次を示すものではなからうかと思ふ。其の裝潢の意匠が簡略となるに從つて、其の版式は、次第に硬化し、雕刻の爲の書風に墮して行つて、光

悅書風の特徴を失ひつゝある事がわかる。但し、行數は何れも同一、字面の高さ等にも著しい相違はない。又、覆版の際に、必ず行つてゐる曲目の改編數が、茲に揭げた種別を追うて增加してゐる事も亦、其の出版年次を示す傍證となると思ふ。

其の出版年代は明瞭ではないが、慶長後半期より元和六年所謂卯月本の現れるまでの間に、相續いて上梓せられたものであらうと思ふ。但し、茲に注意す可きは、慶長十一年以前に稍小型（八行十五字、字面高さ約五寸八分）の嵯峨本とは全く版式を異にする精美なる觀世流謠本の出版が行はれてゐた事であつて、（本書、内閣文庫藏（前記參照）史記古活字印本の表紙裏より發見せしが、後、八嶋一册原裝を發見せり。安田氏文庫藏。）當時既に、謠本の刊行が流行し初めてゐたものとすれば、所謂實用的なる出版と目す可き性質を有する嵯峨本第五種本以下も相當早く出版せられてゐたものであるかもしれない。

次に其の版式を異にする各種本に就いて略記する

第一種本

其の書風は、光悅筆蹟の特徴をよく傳へ、雕刻の爲の書風が現れてゐないのは、光悅自筆の版下書きに據つたからであらう　光悅自筆と傳へる鈔寫帖裝の謠本（筆者の實見に入りしもの、長谷川巳之吉氏藏（他筆の部分多く混れり）、[illegible]）と對照すれば、一層明瞭である。（每半葉七行、每行十二・三字不等、字面の高さ約八寸四分、[illegible]）

所謂獻上本として光悅が製作したものであるといふ傳說を有するこの第一種本は、其の裝潢にも、最も意匠を凝してゐる。上述の如く、其引き雲母摺の料紙を赤絲を以て帖

裝に仕立てたのが、原裝である。一帖一曲、其の曲目は次の百番である。同じ裝潢を有する異版は未だ發見されない。其の詞章が現行觀世流の詞章を有する第二種本以下と異る部分があるのも注意すべきである。其の異る部分は主として脇方の詞章である。

第一種本百番の曲目

高砂	田村	江口	班女	鵜飼
難波	兼平	重衡	卒都婆小町	紅葉狩
井筒	賴政	三井寺	天鼓	白樂天
實盛	楊貴妃	玉葛	融	清經
采女	通小町	朝長	姨捨	柏崎
阿漕	志賀	鵺	梅ヶ枝	誓願寺
蟻通	忠度	熊野	遊行柳	藤戶
景清	杜若	二人靜	安達ヶ原	矢卓鴨
俊寛	松風	西行櫻	浮舟	吳羽
八島	鸚鵡小町	葛城	當麻	海士
鞍馬天狗	定家	東岸居士	龍田	夕顏
角田川	春日龍神	舟橋	源氏供養	花匡

富士太鼓	皇帝	通盛	檜垣	櫻川
山姥	氷室	善界	芭蕉	百萬
舟辨慶	右近	女郎花	關寺小町	自然居士
大會	三輪	軒端梅	盛久	安宅
猩々	佛原	善知鳥	小鹽	邯鄲
殺生石	野宮	錦木	道成寺	葵の上
道明寺	項羽	鐵輪	春榮	籠太鼓
放生川	松虫	權	うの羽	老松

第一種本〇舊本　第二八五圖

管見に入つたこの種の傳本は、東洋文庫藏本*（雲巣に軒端梅一帖なし。）檜常之助氏藏本（完本）と一誠堂舊藏本（景清・天鼓・遊行柳の三帖、第一種本混配、但し曲目異同無し。）と成簣堂文庫藏本（凡て九十帖現存し、其の中、紅葉狩・東岸居士・山姥・善界の四帖重複の外、一誠堂藏本と同じく景清・天鼓・遊行柳の三帖と、別に千手重衡・道明寺の二帖と、併せて五帖、第二種本混配、故に曲目數は八十一番となり、左の十九番缺畫なり。高砂・江口・采女・清経・阿漕・矢立鴨・海士・龍田・檜垣・氷室・關寺小町・自然居士・猩々・野宮・葵の上・項羽・春榮・うの羽・老松）とである。

第二種本　第二八六圖

第二種本

第二種本は、第一種本と略々同質の料紙を用ひた帖裝であるが雲母模樣を摺る事なく、具引き色變りの料紙のみを交へてゐる。但し、表紙にのみ雲母模樣を施してある。この種の百番完本は東洋*文庫・久原文庫及び中島仁之助氏（[illegible]）

十番補配)・長崎縣立圖書館寄託諫早家舊藏本(六帖缺六十)等の諸本がある。其の中、東洋文庫・久原文庫藏の兩完本は曲目に多少の出入がある。東洋文庫本の第一種本との曲目の出入は、第二種本新收曲目六番(蟬丸・丹後物狂・昭君・玉井・反魂香・攝待)、其の代りに除去せられた曲目は、二人靜・皇帝・檜垣・右近・錦木・鐵輪の六番である。(久原文庫藏本(完本)は、昭君以下の四番と、鍾馗・雲林院・さくさの三番との七番を新收し、其の代り、右近以下の三番及び蟻通・通小町・松虫・道成寺の合計七番を除去してある。)この曲目の異同は何故に生じたか未詳であるが、或は百番全部が同裝潢の別版であるかもしれないと思ふ。他日の精査を期する。第一種本とは活字の樣式を異にし、光悅書風が若干缺除してゐる事が認められる。(其の曲目數編等より見れば、或は第三・第四種本より後に現れたものとも考へる事が出來る。)

第三種本

第三種本は、第二種本と略々同樣な書風を有するが、其の版式は又異り、別種の活字を以て刷印を行つたものである。具引きのみを施した厚樣の料紙を用ひて兩面摺とし、帖裝に仕立られてゐる。但し、表紙のみは、色變り雲母摺のものを用ひてある。この種の傳本の管見に入つたものは、京都北野神社寶藏*(明治十三年野田林兵衛納本)の一本のみであるが、源氏供養・關寺小町・野宮・定家の四帖を第二種本で補配してある。けれども第一種本との曲目の出入は、極めて少く、この種の本に新しく收められてゐるのは「攝待」の一曲のみである。其の代りに除去せられた一曲は「賴政」である。

第四種本

第四種本

第三種本と同種の活字を用ひた異植版である。其の裝潢も亦殆ど同じく、第三種本に比して、其の表紙に用ひた色變り料紙の種類（黄・赤・青色等）が少いだけである。曲目も亦第三種本と相違する事少く、第三種本に無くして、この種の本に新收せられた曲は「大原御幸」の一番である。即ち、第四種本に含まれてゐて、第一種本に之を缺く曲目は、第三種本に新收せられた「攝待」と併せて二番となる。但し、第三種本に除かれてゐる「頼政」は存在し、其の代りに「項羽」「鐵輪」の二番が除去せられてゐる。第四種本は高木文庫藏の完本を見るのみである。

第二八七圖

第五種本

第五種本

第五種本は、前の四種と其の裝潢を異にし、具引きの薄樣を用ひた袋綴である。この種の傳本は、安田文庫藏の「櫻川」の零本一冊を知るのみである。前四種と版式を異にし、其の活字には磨滅の跡が見えるが、第六種本などに比すれば光悦書風をよく傳へてゐる。

第六種本

第六種本

何等意匠を施す事の無い素紙を用ひて袋綴としたものである。其の表紙にのみ雲母模樣を施した色紙（藤・淺青・淡紅・白）を用ひてゐる。題簽に濃褐色の紙を使用してゐる事は、第一・二・三・四種本と同一である。前五種と其の版式を異にし、光悦の書風は傳へ

てゐるが、雕刻の爲の書風に墮してゐる事が注意せられる。安田文庫藏の一本が、管見に入つた唯一の完本である。其の曲目は第一種本に比してかなりの相違があつて、第六種本に新收せられてゐる曲目は左の六番である。其の前二曲は次の第七種本にも無く、この第六種本にのみ收められてゐるものである。（雲林院、鍾馗の二番は第二種本（久原本）に新收せられたものである。）

弓八幡　雲林院　張良　芳野靜　養老　鍾馗〔この他に第一・二種本にはなく、第三・四種本に新收せられた攝待がある。〕

從つて、右攝待を併せた七番の代りに、第一種本より除かれた曲目は、

右近　通小町　鐵輪　錦木　檜垣　氷室　放生川

の七番である。

第七種本
第一八八圖
第一八九圖

第七種本

第七種本の料紙は、第六種本と同樣であるが、原裝を存した傳本は、紺色の表紙の中央に唐紙印刷題簽を添附し、一曲一冊、其の版式は第六種本とは異り、（七行十三字、字面の高さ約六寸二分五厘、匡郭共六寸七分。）曲目にも著しい改編があり、其の關係から推すと、或は第六種本よりも後印であらう。本文も臆方の詞などが著しく相違してゐる部分があつて、其の方面からも、注意す可きものである。

第七種本の完本の管見に入るものは、圖書寮*尊藏の一本（改裝、五番綴、二十冊　古典全集影印）と、安田*文庫藏本（齋藤芳之助氏謠曲文庫に影印せるもの、原裝一百冊）との二本

がある。前者は、本來五番綴として製作せられたものではなく、單に便宜上、後に合綴改裝されたものである。

他に零本としては、安田文庫藏の五番綴（右近・和布刈・やうきひ・紅葉狩・うこふ）一册（原題簽をも存すれど、こは、一番一册の原題簽を巧に貼合せたるもの）・高木文庫藏關寺小町・西行櫻（紺色原表紙原題簽附零本二册）等を見る。

第一種本との曲目異同

第一種本に比して曲目の異同は左の如くで、第一種本にあつて本種に無き曲目十六番、從つて、第一種本になき曲目十六番。但し、其の中、既に、玉井は第二種本に、又、芳野靜・養老・張良・鍾馗（鍾馗は久原文庫の第二種本にのみはあり）の四番は第六種本に收められてゐるものであるから、結局、本種に新收せられた曲目は、十一番となる。此の曲目改編の狀態に據つて見ると、本書が第六種本と密接なる關係に立つものである事が判る。

第一種本にあつて本種になきもの（十六）

花筐　放生川　朝長　鵜　景淸　春日龍神　梅枝　鞍馬天狗　矢卓鴨　安達原

鸚鵡小町　櫻川　俊寛　春榮　氷室　百萬

第一種本に無きもの（十六）

（第二種本既收）　玉井

（第六種本既收）　芳野靜　養老　張良　鍾馗（鍾馗のみ第二種本久原本にはあり）

(第七種本新收)　羽衣　賀茂　咸陽宮　唐船　綱　經政　花月　小袖曾我　和布刈

常陸帶　西王母

(附記)嵯峨本圖考を著せる時、紅葉狩以下の五番綴一冊を誤りて別種第八種本とし、其の後又新種(第九種とす。)の發見あり、次いで又、安田文庫現藏(玆に第七種として記載せるもの)一百冊を得て、第八種本の完本として「嵯峨本圖考以後」(書物春秋昭和十年第一號)に紹介せしは、誤謬を重ねたるものなるに據り、玆に訂正す。

第八種本

第九種本

第八種本

第八種本として玆に所收するものは、在來知られる事の無かつた一本で、第六種本の異植版と認む可きものである。裝潢上、第六種本と異る點は、表紙の色紙が薄紅(四十六冊)・肌色(三十五冊)・淡香色(十三冊)の三種で、然も雲母模様が簡略になつてゐる點である。是が恰も第三・四種本の關係と相似してゐるのも注意す可き事である。表紙の中央に黄茶色の題簽がある。(七行十二・三字(不等)、字面の高さ約六寸三分、節附共六寸七分半、原本の大いさ縦七寸八分半横五寸九分。)*安田文庫所藏の一本は、六冊を缺いてゐるが、其の六冊は、第一種本以下七種本までに盡く存して、本書(九十四番)にのみ不足するものが七番に達する點から見て、不足の六冊は左の七番の中である事は確實であらう。

第八種本と他種本との曲目異同

小鹽　浮舟　卒都婆小町　松虫　源氏供養　海士　佛の原

曲目の改編を第一種本と對照すると、

第一種本にありて本種になきもの(十三)　放生川（佛の原）（小鹽）鐵輪（卒都婆小町）（浮舟）右近　鵜羽（松虫）（源氏供養）（海士）檜垣　氷室

第一種本になくして本種にのみ存するもの(六)　半蔀

（他の何れにもなきもの）

雲林院（第二種本(久原本)にはあり。）

（六・七種本には存するもの）

張良　芳野靜　養老、鍾馗（久原本あり）

（三・四・六種本には存するもの）

攝待

各種本曲目數出入表

以上、各種の活字印本の現存に據つて、如何に觀世流謠本が當時に流通したかが明かであるが其の現存の傳本に據つて知り得る限りの出版曲目數を纏めて表示すると次の如くとなる。

第一種本所收曲目數　一百番
第二種本新收曲目數　六番（久原本は、別に三番新收あり）
第四種本新收曲目數　一番
第六種本新收曲目數　六番（中、二番は第二種本久原本にあり）
第七種本新收曲目數　十一番
第八種本新收曲目數　一番

結局、各種本を併せて百二十六番の出版が行はれてゐるのである。

次に以上の曲目の出入を圖表に示すと左の如くとなる。（安田善次郎氏の作製せられたるものに據る。）

		第一種本	第二種本	第三種本	第四種本	第五種本	第六種本	第七種本	第八種本	(参考)元和卯月本
い	籠太鼓	○	○	○	○		○	○	○	
ろ	班女	○	○	○	○		○	○	○	○
は	白樂天	○	○	○	○		○	○	○	○
	花筐	○	○	○	○		○	●	○	○
	芭蕉	○	○	○	○		○	○	○	○
	放生川	○	○	○	○		●	●	●	
	反魂香		◎							
	羽衣							◎		
	半蔀								◎	
に	錦木	○	●	○	○		●	○	○	○
ほ	佛の原	○	○	○	○		○	○	●(○?)	○
へ	[illegible]	○	○	○	○		○	○	○	○
と	朝長	○	○	○	○		○	●	○	○

◎印は第一種本に無くして他種本に存するもの。●印は第一種本にありて他種本に無きもの。

群	曲名	1	2	3	4	5	6	7	8	9
	東岸居士	○	○	○	○		○	○	○	○
	とくさ		◎ 本久有原							
ち	張良						◎	◎	◎	
り										
ぬ	鵺	○	○	○	○		○	●	○	○
る										
を	姨捨	○	○	○	○		○	○	○	○
	女郎花	○	○	○	○		○	○	○	○
	小鹽	○	○	○	○		○	○	●(○?)	○
わ										
か	兼平	○	○	○	○		○	○	○	○
	通小町	○	○ 本久無原	○	○		●	○	○	○
	柏崎	○	○	○	○		○	○	○	○
	景清	○	○	○	○		○	●	○	○
	杜若	○	○	○	○		○	○	○	○
	葛城	○	○	○	○		○	○	○	○
	春日龍神	○	○	○	○		○	●	○	○
	邯鄲	○	○	○	○		○	○	○	○
	鐵輪	○		○	●		●	○	●	

	項羽	賀茂	成陽宮	頼政	芳野静	高砂	田村	玉葛	忠度	當麻	龍田	大會	道成寺	道明寺	丹後物狂	玉井	唐船
				よ		た											
第一種本	○			○		○	○	○	○	○	○	○	○	○			
第二種本	○			○		○	○	○	○	○	○	○	○ [illegible]	○	◎ [illegible]	◎	
第三種本	○			●		○	○	○	○	○	○	○	○	○			
第四種本	●			○		○	○	○	○	○	○	○	○	○			
第五種本																	
第六種本	○			○	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
第七種本	○	◎	◎	○	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○		◎	◎
第八種本	○			○	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
（參考）元和卯月本		○	○	○		○	○	○	○	○	○	○				○	○

れ	そ	つ		ね	な	ら	む	う							ゐ	の	
	卒都婆小町	綱	經政		難波		梅枝	鵜飼	浮舟	右近	善知鳥	鵜羽	雲林院	采女	井筒	軒端梅	野宮
	○				○		○	○	○	○	○	○		○	○	○	○
	○				○		○	○	○	●	○	○	◎ 久原本有	○	○	○	○
	○				○		○	○	○	○	○	●		○	○	○	○
	○				○		○	○	○	○	○	○		○	○	○	○
	○				○		○	○	○	●	○	○	◎	○	○	○	○
	○	◎	◎		○		●	○	○	○	○	○		○	○	○	○
	●（○?）				○		○	○	●（○?）	●	○	●	◎	○	○	○	○
	○				○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

	老松（お）	大原御幸	呉羽（く）	鞍馬天狗	皇帝	花月	矢卓鴫（や）	八島	山姥	楊貴妃	養老	松風（ま）	松虫	源氏供養（け）	藤戸（ふ）	二人静
第一種本	○		○	○	○		○	○	○	○		○	○	○	○	○
第二種本	○		○	○	○ 本久有原		○	○	○	○		○	○ 本久無窮	○	○	○ [illegible]
第三種本	○		○	○	○		○	○	○	○		○	○	○	○	○
第四種本	○	◎	○	○	○		○	○	○	○		○	○	○	○	○
第五種本																
第六種本	○		○	○	○		○	○	○	○	◎	○	○	○	○	○
第七種本	○		○	●	○	◎	●	○	○	○	◎	○	○	○	○	○
第八種本	○		○	○	○		○	○	○	○	◎	○	●（○?）	●（○?）	○	○
（参考）元和卯月本	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○		○	○	○

		1	2	3	4	5	6	7	8	9
舟橋		○	○	○	○		○	○	○	○
富士太鼓		○	○	○	○		○	○	○	○
舟辨慶		○	○	○	○		○	○	○	○
小袖曾我	こ							◎		○
江口	え	○	○	○	○		○	○	○	○
天鼓	て	○	○	○	○		○	○	○	○
定家		○	○	○	○		○	○	○	○
阿漕	あ	○	○	○	○		○	○	○	○
蟻通		○	○ 永久無頁	○	○		○	○	○	○
安達原		○	○	○	○		○	●	○	○
海士		○	○	○	○		○	○	●(○?)	○
安宅		○	○	○	○		○	○	○	○
葵上		○	○	○	○		○	○	○	
槿		○	○	○	○		○	○	○	
鸚鵡小町		○	○	○	○		○	●	○	○
實盛	き	○	○	○	○		○	○	○	○
西行櫻		○	○	○	○		○	○	○	○
櫻川		○	○	○	○	○		●	○	○

		第一種本	第二種本	第三種本	第四種本	第五種本	第六種本	第七種本	第八種本	(光悦)元和卯月本
き	清經	○	○	○	○		○	○	○	○
ゆ	熊野	○	○	○	○		○	○	○	○
	遊行柳	○	○	○	○		○	○	○	○
	夕顔	○	○	○	○		○	○	○	○
	弓八幡						◎			
め	和布刈							◎		
み	三井寺	○	○	○	○		○	○	○	○
	通盛	○	○	○	○		○	○	○	○
	三輪	○	○	○	○		○	○	○	○
し	(千手)重衡	○	○	○	○		○	○	○	○
	志賀	○	○	○	○		○	○	○	○
	俊寛	○	○	○	○		○	●	○	○
	自然居士	○	○	○	○		○	○	○	○
	猩々	○	○	○	○		○	○	○	
	春榮	○	○	○	○		○	●	○	
ゑ	鍾馗		◎ 久原本有				◎	◎	◎	

	一二六番	一〇〇番	一〇六番	一〇〇番	一〇〇番	(一番)	一〇〇番	一〇〇番	九四番(一〇〇番)	100番(左三番共)
ひ	檜垣	○	○ 久原本有	○	○		●	○	●	○
	氷室	○	○	○	○		●	●	●	○
	百萬	○	○	○	○		○	●	○	○
	常陸帯							◎		
も	紅葉狩	○	○	○	○		○	○	○	○
	盛久	○ ＼	○	○	○		○	○	○	○
せ	誓願寺	○	○	○	○		○	○	○	○
	善界	○	○	○	○		○	○	○	○
	關寺小町	○	○	○	○		○	○	○	○
	殺生石	○	○	○	○		○	○	○	○
	昭君		◎							
	蟬丸		◎ 久原本無							○
	攝待		◎	◎	◎		◎		◎	
	西王母							◎		
す	角田川	○	○	○	○		○	○	○	○

竹生島　○
夜討曾我　○
しらひけ　○

（八）久世舞　三十曲本

八久世舞（三十曲本）

[illegible]

久世舞は謡本より稍小型の活字を用ひて刷印せられてゐる、活字の小型なるが故か、光悦の書風の微細なる特徴が版式の上に現れてゐない傾きがある（毎半葉七行、毎行十五字乃至十六字）（高さ約六寸、横四寸四分）巻首に目次を附し、隠岐物狂を初め、三十曲を集めて一帖としてゐる。節附を別に右側に植版してゐる事は謡本の場合と同様である。曲目は左の如くである。

三十曲本の曲目

隠岐物狂　歌占　島めぐり　そとはなかし
山良物狂　かも物狂　香椎　石橋
舞車　同　花かたみ　二人みこ
芳野琴　須磨源氏　松浦物狂　横山
玉どり　經山寺　四季　ぬれきぬ
定家一字題　高野物狂　反魂香　俊成忠度
敷路物狂　はたか物狂　かはつ　はしとみ
初瀬六代　先帝

装潢の種類（二種）

其の装潢の料紙には兩種あつて、（イ）は具引きの厚紙に雲母模様を施し、且つ色變り料紙を交へたもの（安田文庫藏本）（ロ）は、厚紙に具引きのみを施し、色變り雲母摺等の意匠を加

へる事の無いもの(東洋文庫藏)(原表紙の中央に久世舞の原題簽を存し、表紙にのみ雲母模様あり。)である。

(九) 久世舞　三十六曲本

(九)久世舞(三十六曲本)

第二九一圖

三十曲本出版の後、同種の活字を以て、曲目を改訂增補して刷印を行つたものである。嵯峨本考に活字同一ならずと言ふのは不穩當であらう。字面の高さ、毎行の字數、節附等は、三十曲本と大體同一であるが、行數のみは、一行增して八行となつてゐる。曲目の加除は左の如くで、同一曲目の配列順は三十曲本とは異つてゐる。

除去せる曲目　四季・反魂香・俊成忠度・はしとみ

增加せる曲目　淡路・上宮大子・白鬚・高雄・兵揃・雪謠・さねかた・八景・同・鼓の瀧

卷首に目錄を附する事は三十曲本と同一、「淡路」を卷頭に收めてゐる。本書の裝潢は、三十曲本(ロ)と同じく、三十曲本(イ)の裝潢に相當するものは未だ發見せられない。管見に入つた傳本は、*東洋文庫藏の一帖と、久原文庫所藏の一帖とである。

三十六曲本には、嵯峨本の版式の影響を若干蒙つた刻本(整版 東洋文庫・安田文庫・京都帝國大學藏)がある。上下二帖、上卷には曲舞、下卷には曲舞小謡集四季小謠抄を收め、毎半葉七行、節附も嵯峨本とは異る。故に單に嵯峨本の影響として茲に附記する。

（一〇）新古今和歌集抄月詠歌卷

(二)　新古今和歌集抄月詠歌卷

本書は、近時發見せられたもので、安田文庫に一卷を藏するのみである。他の嵯峨本諸本とは稍趣きを異にし、光悅自筆の歌卷を整版とし、卷子に裝潢したものである。頗る光悅筆蹟の眞を傳へてゐて、若し之を寫眞版に附するならば、光悅眞蹟の歌卷と全く辨別し難いであらう。雲母模樣を摺込んだ具引きの厚い料紙（裏面にも雲母模樣を施せるもの多し。高さ約一尺一寸六分、幅約一尺七寸、最後の第十葉のみ幅一尺四寸五分。）十葉を繼合せ、大型の文字を以て認められてゐる。實に、嵯峨本中の白眉にして、日本印刷文化史上、特位の名品である。其の內容は、新古今和歌集卷四(秋上)中の卷末に近い第百三十二番の式子內親王の歌より第百四十番の右衞門督通具の歌に至る一聯九首を抄出したものであつて、其の間の九首は原集の儘を採錄し、詞書のみは全部省略してある。卽ち、式子內親王(二首)攝政太政大臣(三首)定家朝臣・右大臣忠經・宮內卿・右衞門督通具の六歌人所詠の月歌が含まれてゐるのである。其の料紙第一葉首第十葉尾の兩端に空白を多く存してゐる點から見ても、首尾全き一卷なるは疑ひないが、或は、四季雪月花等の中の一卷として作製せられたものではあるまいかとも思はれる。本卷には原の題簽がないから、假に「新古今和歌集抄月詠歌卷」と稱する。全卷の內容は次の如くである。

月詠九首の和歌

(一)式子内親王——宵のまにさてもねぬへき月ならは山のはちかき物はおもはし
(二)　　更るまてなかむれはこそ悲しけれ思もいれし秌のよの月
(三)攝政太政大臣——雲はみなはらひはてたる秋風を松にのこして月を見るかな
(四)　　月たにも慰かたき秋のよの心もしらぬ松の風かな
(五)定家朝臣——さむしろや待夜の秋の風ふけて月をかたしく宇治のはし姫
(六)右大臣忠經——秋の夜のなかきかひこそなかりけれまつにふけぬる在明の月
(七)攝政太政大臣——行末は空もひとつのむさし野に草のはらより出る月影
(八)宮内卿——月を猶待覽物閑急雨能晴行雲乃末濃里人
(九)右衛門督通具——秋のよはやとかる月もつゆなから袖に吹こすおきのうは風

(二)百人一首

第二九四圖

(二) 百人一首

百人一首の嵯峨本と稱し得るものは、兩種あつて、其の一は、謠本（第一種本）と相似せる版式を有し、頗る光悅書風の眞を傳へた活字印本である。每半葉七行、每行十四字（不等）、字面の高さ約六寸七分。兩面摺。帖裝。一帖。厚樣の雁皮に具引きを施し雲母模樣を摺込み、色變り料紙をも交へてゐる。久世舞（三十曲本（イ）版）・二十四孝・歌仙（第一種本）等と共に、嵯峨本中最も美術的なる印刷である。從來、世に紹介せられたる事なく、傳本極めて罕に、東洋文庫

に藏せらるる原裝の一本を知るのみである。

其の二は、第一種本と著しく版式を異にし、第一種本の影響に據つて發生した活字印本（毎半葉九行、毎行十六字（不等）。字面の高さ約六寸七分、素紙袋綴二冊。）と認められる。從つて、稍光悦書風の特徴を缺除してゐる點もあるが、其の版式は、嵯峨本として扱つても、著しく穩當を缺くものとは認められないから、茲に採錄する事としたのである。此の種のものも、東洋文庫藏の一本を見るに過ぎない。但し原裝を缺いてゐる。

第二[illegible]圖

以上二種の外、嵯峨本考に、吉田素庵筆と言ふ推定の下に、挿畫の整版本（東洋文庫高木文庫藏）を嵯峨本としてゐるが、其の挿畫の樣式などより推しても、少しく時代が降るものの如く、光悦書風を利用した稍後世の出版に係るもの、卽ち嵯峨本の影響に據つて發生したものと見る可きであらうと思ふ。故に茲には採錄しない事とする。

(三)　三十六歌仙

(三)三十六歌仙

嵯峨本考に、嵯峨本類三十六歌仙として紹介せられてゐるものは三種あるが、其の中の二種は、版式上、嵯峨本と認め難く、其の他の一種も、嵯峨本の類として採錄する事は出來るけれども、なほ是にも在來知られてゐない其の粉本となつた一本が存在する。卽ち、茲に、嵯峨本として第一に採錄せんとするものである。

其の第一種本と稱するものは、匡郭の界線の稍太い四周單邊（縱約九寸七分(不等)横約七寸五分(不等)）內に三十六歌仙の像を書き、其の圖上に和歌を書いてある。其の和歌の書風は、光悅自筆の版下に據る開雕と認め得るものである。歌仙の畫像の描線も頗る雅致に富み、巧に王朝時代の歌仙の風貌を離出してゐる。

（イ）種

其の摺刷の料紙に三種の差異があつて、(イ)は、具引きの色變り料紙を用ひたもの、(ロ)は單に具引きのみを施したもの、(ハ)は素紙を使用したものである。

(イ)種の現存してゐるものは、安田文庫藏の卷子本のみであつて、藤(順・兼輔朝臣)・黄(忠峯・敏行朝臣)・薄紅(赤人・淸正)等の色變り料紙を交へ、又、裏面に藤色を用ひ、淡く表面へ現れてゐる樣な部分もある。總紙數十八葉、左右歌仙の配列は、まづ左歌仙を盡して後、右歌仙に及んでゐる。もと輯綴せず保存せられてゐたのを、近時卷子裝としたものである（此本影譜第一期第一輯所載。嘗て、繪入本百種にも紹介せらる。）。

（ロ）種

(ロ)種の傳本は成簣堂文庫に一本を見るのみである。具引き料紙を袋綴に仕立てた極めて大型の本で、原裝の儘を傳へてゐる。但し、彩色が施されてゐるが、之は摺刷後間もなく行はれたものであらうと思ふ。彩色の上に、金泥で衣冠等の隈取りを行つてゐる爲に、反つて原刻の描線の隱れてしまつた部分が多いのは惜しい。

（ハ）種

(ハ)種は、素紙に摺刷を試みたものであるが、管見に入つた東洋文庫所藏の一本は、後印と

疊しく、大分原版が疲れてから摺刷したものと思はれる。

右の第一種本に對して、之を覆刻したと認められる一本の存在する事は前に述べたが、「嵯峨本考」には、之を嵯峨本三十六歌仙第一種本として採錄しつゝなほ疑を存してゐる。「嵯峨本考」に採錄した第二種本以下は、新發見の第一種本とは單に間接的なる關係を有するに止まるものと認定せられるから、茲に採錄しないが、「嵯峨本考」に、第一種本と定めたものは、茲に言ふ第一種本と直接的なる關係を持つものと認め、今改めて第二種本として採錄する事とする。

第二種本

第二種本は、第一種本を其の儘の形に覆刻したものであるから、形狀大小等は殆ど同一である。唯、原刻本に對して其の四周の匡郭の線が細く、畫像の描線が生硬となり、筆勢を失ひ、殊に其の顏部が拙劣となつてゐるのが注意せられる。和歌の書風は比較的崩れてゐないが、之を原刻本と比較すれば、其の優劣は自ら明瞭である。安田文庫と東洋文庫とに各一本を藏する。何れも、素紙摺の大型本である。

三十六歌仙の繪本は、後にも頗る數多く出版せられてゐて、比較的古刻と認められるものに、卷末に「京師書坊玉泉堂藏刻」の木記ある一本、「三十六歌仙（本阿彌光悦書土佐光茂畫）」の題簽を有する一本（嵯峨本考第二種本）「嵯峨本考」に傳素庵筆と推定して第三種本とするもの等が存するが、前述の如く、單に嵯峨本歌仙の間接的なる影響に據る出版であるから、茲に附言するに止

める。唯是等に據つて、如何に、當時、光悦書風の歌仙が流通したかを知る事が出來るのである。

（三）二十四孝

（三）二十四孝

在來、嵯峨本二十四孝として紹介せられてゐるものは、嵯峨本の影響に據つて現れた後刻本であつて、其の版式は全く嵯峨本として承認し難いものである。然るに、二十四孝には、何れの點より論ずるも、嵯峨本の代表的なるものと言ひ得可き一本が存在する。毎葉表面の上段に孝子行狀圖、下段及び裏面に詞章があり、本文は九行、四周單邊（横五寸五分五厘、縱七寸三分、上段畫面高さ二寸八分五厘）版心「二十四孝（丁數）」。總紙數二十四葉。其の挿畫の粉本は、或は、支那傳來の挿畫の影響を蒙るものではなからうかと思ふ。書風には頗る光悦の特徴が現れてゐるが、是には、其の版式の整版である事が、有力な一因となつてゐるのであらう。在來、知られてゐないものであるから、傳本も極めて罕であるが、其の裝潢には兩種あつて、

裝潢の種類（二種）

其の一（イ）は、厚樣の色變り雁皮紙を貼り合せ、具引き雲母模樣等を施した料紙を用ひて、兩面摺、帖裝としたもの。其の二（ロ）は、具引き色變りの薄葉料紙を用ひて袋綴に仕立たものである。即ち、單に摺刷の際に兩樣の料紙を用ひたのみであつて、其の版式を異にするものではない。

前者の傳本の管見に入るものは、成簣堂文庫藏本の一本のみである。狩谷棭齋の舊藏に係り、別に「吉氏家藏」の古印記がある。後者は東洋文庫と神宮文庫とに各々一本を藏する。兩本ともに原裝を存し、神宮文庫の藏本は林崎文庫舊藏の村井古巖納書の一である。

二十四孝の雕刻年代は、歌仙等と共に、慶長後半期中であらうと思ふ。嵯峨本考所收の二十四孝（震災前安田文庫藏）は嵯峨本の影響に據つて現れた慶元中の刻本であらう

附記

なほ在來嵯峨本と稱するもので嵯峨本と認める事の出來ないものに、源氏物語（活字印本、後記參照）・平家物語（下村本、後記參照）。扇の草紙（整版）・古今和歌集（整版）とがある。嵯峨本考の著者が本朝古今銘盡等を嵯峨本に編入してゐる事の無意味な事は既に述べたから茲には重言を避ける。本項に記述しないものは凡て嵯峨本と認めず他の條に於いて所收する事とした。

第三節　假名活字印本の刊行と當代の文化

附　元和寛永中刊有刊記假名活字印本

第一節に於いては假名交り活字印本—國書—開版勃興の大勢を述べたのであるが、慶長後半より元和寛永年間に至ると、出版書肆の發達に從ひ、次第に國書の出版が其の主體を爲すに及んで、凡そ人間生活に必要なる汎ゆる方面の刻書が出現し、茲に初めて、印刷文化を通じて其の時代の文化の諸相を窺ふ事が出來る樣になつたのである。國文學書に就いては後章に讓り、本節に於いては、其の他の各方面の活字印本開版の狀態を調べ、其れに據つてまた一面より當代文化の諸相の考察に資さうと思ふ。

法制・故實の諸本の活字印行

まづ第一に注意す可きは、史書の開版であるが、是は次章に併せ記する事として、茲には其れに關聯して、法制・故實等の諸書の活字開版に就いて述べる。

貞永式目抄

法制と言つても、當時既に故實的であつた貞永式目抄と職原抄とである。貞永式目も中世期に最も弘通したものであるが、當代には慶長十二年に享祿本の飜刻(整版)があるのみで、活字印本としては、常忠の講說を祖述した清原宣賢の假名講說が行はれた。元和寛永中に數度の重版が行はれ、其の盛行の狀を察する事が出來る　植木直一郎氏御

第二九六圖　第二九七圖　第三〇〇圖　第二九八圖　第二九九圖

成敗式目の研究には左の(三)十二行本・(四)十三行本の二種數本を所收するのみであるが、今管見に入つた十九本を整理して表示すると左の如くとなる。

(一)元和七年刊本　單邊、無界、十二行。匡郭内、縱七寸九分半、橫五寸八分。上下二卷。上卷五三葉、下卷四七葉。　刈谷町立圖書館藏*

〔刊記〕元和第七年霜月吉辰

(二)慶元中刊本　單邊、無界、十二行。匡郭内、縱七寸五分、橫五寸六分。附刻字數あり。　(イ)和田英松博士(震災燒失)藏　(ロ)高木文庫*(上卷)藏

(三)慶元中刊(十二行)本　單邊、無界、十二行。匡郭内、縱七寸七分、橫五寸七分。版心丁數全卷通算(首四十三丁)。故に原裝本中にも分冊せるものとせざるものとあり。

圖書寮尊藏(藤波家舊藏、原裝一冊、卷首十三丁まで附訓書入あり)・阿波國文庫(不忍文庫舊藏)・東京帝大穗積文庫(二本)一(宮崎蘇堂・森立之・大槻氏舊藏)二(は和田英松博士舊藏)・和歌山師範學校(分)三冊・水戶彰考館(小山田與清舊藏本)・成簣堂文庫(原裝二冊)藏

(四)寬永中刊(十三行)本　單邊、無界、十三行。匡郭内、縱七寸三分、橫五寸六分。版心丁數三卷に分け、上四五、中三七、下四一葉。

(イ)圖書寮尊藏(忠岡行義本、合一冊)・神宮文庫(村井敬義本、一冊)・阿波國文庫(不忍文庫舊藏、三冊)・成簣堂文庫三冊藏

(ロ)帝國圖書館*(中田憲信舊藏、三冊)・東京帝大穗積文庫(二本)・久原文庫(三冊)藏

職原抄

職原抄は中世後期を通じて公武の間に重用せられ、傳寫本の存するものも多く、これが近世初期の劈頭、印刷せられるに至つて、慶長勅版を初め伏見宮御版清原秀賢刊本(兩種)

覆刻整版本あり。等の諸版が行はれた。又清原秀賢刊本には百官禮節（慶長十七年刊）が附刻せられてゐる事も前述の如くである。なほ其の注解として清原宣賢の假名講說なども比較的早く現れたのであるが、是が寛永四年には（木室）二兵衛の手で活字印行せられた。雙邊、無界、十二行片假名交り、匡郭內、縱七寸一分橫五寸牛。上下二卷、二冊。阿波國文庫（不忍文庫舊藏）・*安田文庫藏。

職原私抄　第三〇一圖

（刊記）寛永四年丁卯秋九月吉辰　二兵衛開之

本書には寛永五年刊整版本一冊あり。鹽釜神社藏、刊記「寛永五年仲夏中旬　於洛下四條寺町中野市右衛門尉開板」

公事根源と世諺問答

職原抄に關聯するものに、一條兼良撰述の二書、公事根源と世諺問答とがある。是等は、支那の古代法等の漢籍活字印行の刺戟を蒙つてゐる點もあらうが、一方には當代に於ける復古的な精神の現れとも見る可きであらう。

第三〇二圖

公事根源（三卷、三冊）元和中刊。九行平假名交りなるに、漢字に片假名附訓あるは注意す可し。字面の高さ約五寸七分。原題簽「公事根源（上中下）」存す。傳本罕にして完本は成簣堂文庫に藏せらるるのみなり。善本影譜參照。

第三〇三圖

世諺問答（一卷、一冊）寛永中刊。寛永十七年刊左大將六百番歌合同種活字印本。十一行平假名交り。字面の高さ約七寸四分。每行約二十七字。阿波國文庫（不忍文庫舊藏）藏の一本を見るのみ。原裝、（題簽佚）大いさ、縱九寸一分、橫六寸五分。

禮法・教訓書の活字印行

故實に關聯した禮法・敎訓書の類も亦頗る行はれ、此の類としては、武家諸禮集・しつけかた・女訓集・女訓抄・めのとのさうし等が存する。

武家諸禮集

武家諸禮集（小笠原七禮）は寛永八年刊本の他、元和・寛永中の開版と認む可き活字印本五種と、寛永九年には整版本（圖書寮尊藏、中野市右衛門刊）・十三行本の覆刻整版本（久原文庫藏）等も現れてゐて、かかる數次の開版は、當時如何に本書が要望せられたかを知り得る。其の内容は何れも皆同一で、通之次第・酌之次第・元服之次第・萬請取之次第・萬躾之次第・書禮之次第（二卷）の七卷よりなる。卽ち、小笠原七禮と稱する所以である。通之次第の末に「小笠原大膳大夫長時、同右近大夫貞慶、右此一札雖爲當家之秘事也依御執心態記進之候夢々不可有他見者也」の識語、又書札之次第の末に「右七禮者雖當家之秘書依御執心進之候不可有他言者也　小笠原」の識語がある。以て本書の性質を知る事が出來る。

第三〇四圖　(一)慶元中刊十二行本（字面の高さ約七寸七分）　安田文庫藏*

第三〇五圖　(二)元和寛永中刊十二行本　(イ)（字面の高さ約七寸五分。）(ロ)（同右、異植字版）　安田文庫藏*　東京文理科大學（六冊）・成簣堂文庫藏（有欠。書禮・萬請・酌・萬躾の四冊）

第三〇六圖　(三)寛永中刊十三行本　成簣堂文庫（書禮・元服の二冊）・栗田元次氏藏*

第三〇七圖　(四)寛永八年刊本　七卷　六冊　龜田次郎氏*・栗田元次氏藏

刊記「寛永八辛未年八月下旬　二條通觀音町中嶋久兵衛開板」

しつけかた

「しつけかた」（[illegible]二十葉、一冊、九行平假名交、寛永中刊、字面の高さ約五寸七分半）は日常衣食住に關する禮法九十四ヶ條を記る

第一〇八圖

してゐる。當時の禮法敎訓書の類は武家或は女性に適應するものを主とし、本書の如く百般に亙つて通俗的に禮法を簡要に說いたものは少い。寬永十七年刊狹衣左大將六百番歌合と同樣の小型活字を以て摺刷を行つたものである。傳本の管見に入るものは成簣堂文庫・安田文庫*藏の二本である。

女性敎訓の書

男子に於ける武家諸禮集と對照す可き女性に關する敎訓書は、女訓集と女訓抄、並びに古くより傳へられた阿佛尼の撰述と稱する「めのとのさうし」がある。三書ともに各々二種の活字印本が行はれてゐる。

女訓集の兩本

第一〇九圖

第一一〇圖

女訓集(一卷、一册)の一本 十行平假名交り。字面の高さ約六寸六分。總紙數二十一葉。安田文庫*(西莊文庫舊藏)・岩瀨文庫藏。 は戲言養氣集(後章參照)と同種の小型活字を用ひ、八ヶ條に亙る女性の敎訓を收めてゐる。(いろは歌の事(敎訓とす可き事を和歌に詠じ頭にいろは四十八文字を一字宛据ゑたもの)・よしあしのしな・出雲ことば・みやつかう人のよろしきしな・あしきみやつかへのしな・婦人に七吉あり・夫婦三不吉あり・よめとりするに五のいむ事あり等八條。)

他の一本は、前記一本に比して活字稍大に、寬永中の印行と認む可く、其の內容は全く同一である。(十一行平假名交り。每行約二十字。次記めのとのさうし一本亦同種活字を用ふ。字面の高さ約七寸二分。高木文庫(原表紙裏張りに寬永中刊古文眞寶抄整版本の校正刷を用ふ)・櫻井徵治博士藏。)

女訓抄の兩版

女訓集よりも更に內容の豐富なものは女訓抄(三卷、三册)である。寬永十四年と十六年との兩度に印行せられてゐる。

寬永十四年刊本

第一一一圖

(イ)寬永十四年刊本 十三行平假名交り。每行約二十二字。字面の高さ約七寸三分。濁點附活字を混ず。上卷四十、中卷三十一、下卷四十三葉。* 阿波國文庫藏

(刊記)寬永十四年三月吉辰

寛永十六年刊本

第三一〇圖

（ロ）寛永十六年刊本 同種活字再版。版式全く同一なり。　久原文庫・高木文庫*中缺・杉浦三郎兵衛氏藏

（刊記）寛永十六年二月吉辰

寛永十九年には整版本の出版も行はれ（帝國圖書館藏）、更に内容を增補して挿畫を加へた萬治の整版本が江戸初期に最も流通してゐる。

めのとのさうしの兩版

「めのとのさうし」は右の二書とは若干趣を異にするものであるが、婦女の鑑として中世期以來傳統的に多く用ひられて來たのである。是には慶長中刊本と寛永中刊本との兩種がある。

第三一三圖

第三一四圖

（イ）慶長中刊本 中院本平家物語同種活字印本。句讀に黑丸點を植版せる點も同一なり。九行平假名交り。字面の高さ約六寸八分。上下二卷、合一冊　東洋文庫藏

（ロ）寛永中刊本 十一行平假名交り。毎行約二十字。字面の高さ約七寸一分。總紙數三十一葉。前記女訓集（二）と同種活字印本（後記參照）　阿波國文庫藏 不忍文東帝藏

これ等の諸書は、何れも實用的なる性質上、反つて後世に殘存する傳本は比較的少いが、諸方面に率先して武家階級必須の禮法教訓の書が多數印刷せられてゐる事は、軍記物語開版の流行、武具馬匹に關する參考書籍上梓の盛行と相俟つて、當時に於ける讀書階級の要望を如實に物語るものである。卽ち、是に據つて少くとも、當時に於ける印刷文化の傾向の一半が察知せられるのである。

武具・馬匹に關する書籍の刊行

武具に關する書籍、殊に刀劍鑑定の參考書が早くより屢々活字印本として現れてゐる事は前述の如くであるが、馬匹飼育に關する書籍も亦數次の開版が行はれてゐる。

慶長九年に整版本の假名安驥集（十二卷、十二册、內閣文庫藏）の出版せられた事は前に述べたが、其の後、寛永中に「けつ馬の次第」（一卷、一册）と驊騮全書（寛永六年刊、七卷、七册）との二書が現れてゐる。

けつ馬の次第

けつ馬の次第（一卷、一册、高木文庫藏）十二行平假名交り。每行二十四字。字面の高さ約七寸八分。濁點振假名附活字を混ぜり。振假名に片假名平假名を併用せるは注意すべく、活字の樣式亦流麗ならず、寛永中の印行と認む可し。は版心に「世人（丁數）」とあるので或は全書中の缺册ではあるまいかと思はれるが、未だ究める事が出來ない。六十八項に亙つて馬の療法を說いてゐる。

寛永六年刊驊騮全書

第二一五圖

驊騮全書は七卷（七册）挿圖中の本文は多く整版を用ひ、每半葉十二行平假名交り。每行約二十二字。字面の高さ約七寸二分。で、けつ馬の次第に比して遙かに內容も豐富である。其の奧書に據れば、原來秘傳の書として扱はれたもので

住友貞政の開版

あるが、本書に就いて最も注意す可きは、其の刊行者であつて、卽ち、住友一家に於いて銅と刻書とを業とした往時の活字開版に係る點である。

右一部七册之書者當家累代之重寶氏家之眼目也一子相傳之後不可遺

置寔前恐者無比之全書而已

奧書條ヽ代ヽ之系圖雖在之寫本借與之仁不可棄之由　　略畢

（刊記）寛永六年九月上旬　洛陽上柳町住友勝兵衛尉貞政開板

傳本の管見に入るものは、帝國圖書館*（七卷、合二册）・內閣文庫原裝。卷一至全四まで存す。缺本四册・高木文庫原題簽を存すれど、卷一・二及び三の三册のみを存す。卷三の末に卷七の末の刊語一葉を附す。（刊語の七册を三册と改訂す。）其の刊語を失せる卷七は栗田元次氏藏、又其の同じ卷六は住友家藏。蓋し、原本卷一至三、六、七の五册

にして、卷四・五を缺けるを、商賈の妄りに僞造せしなり）藏の三本である

諸藝に關する刻本

諸藝に關する刻本は前代まで絶えて見る事の出來なかつたものであるが、活字印刷が行はれてより、諸種の活字印本が現れ、蹴鞠・立花・象戲・圍碁・謠曲等に及んでゐる。

鞠の書　第三一六圖

「鞠の書」一卷、一冊は蹴鞠道を承傳する飛鳥井家の傳本に據つて元和頃に讎印したものである（每半葉十二行平假名交り。字面の高さ約七寸六分、大鏡等の活字印本と同種活字を用ふ。）傳本の管見に入るものは神宮文庫藏本（村井敬義納本、褐色原表紙存す）と阿波國文庫藏本（不忍文庫舊藏）の二本のみである。

仙傳抄 [illegible]

立花の書として當時最も流行したものは「仙傳抄」（仙傳書）又は「花傳抄」と稱するものである。其の內容が前記小笠原七禮等と若干の關聯を有するものである點から見れば、本書の印行も決して偶然ではないと思ふ。卷末に「此仙傳書者三條殿御秘本賴政公依御所望文安二年三月廿五日富阿彌相傳」以下天文五年池房專慈に至る九代相傳の識語を存し、慶元以後、屢々活字印行せられて、管見に入るものだけでも五種に達する。內容は何れも全く同一で、卷末に立花の插圖一葉を加へ、其の部分は整版を插入してゐる

第三一七圖

（一）第一種本　慶元中刊（十行本）　栗田元次氏藏（栗皮色原表紙存す、縦九寸、横六寸三分半。）

第三一八圖

（二）第二種本　元和寬永中刊（十一行本）（字面の高さ約七寸四分、附訓活字を混ず。）　東洋文庫高木文庫藏

第三一九圖　第三二〇圖

（三）第三種本　元和寬永中刊（十一行本）（字面の高さ約七寸四分。附訓活字を混ず。）（イ）帝國圖書館（寬永十二年識語あり。）・安田文庫藏（ロ）久原文庫・安田文庫（[illegible]）藏

花の傳書

（四）第四種本　寛永中刊（十一行本）字面の高さ約七寸二分。巻頭「傳仙書」と誤植す。　安田文庫藏*　原裝

（五）寛永十七年刊本「花傳抄」原題簽　高木文庫藏*

（刊記）寛永拾七庚辰年孟春吉日

整版本としては寛永二十年西村又左衛門刊行（東北帝大藏一冊）が最も早い。立花の傳書としてはなほ他に元和寛永頃の印行と認む可き横本（小型）一冊があつて、其の內容も仙傳書と異り、一層簡略なものである。管見に入るこの種の唯一の傳本（久*原文庫藏本）の原表紙（丹表紙）に存する書外題に據り、「花の傳書」と稱する事とする。毎半葉十一行平假名交り、字面の高さ約四寸一分。書物の小型なるに比して、活字は稍大型である。立花の法を傳へた秘書が多く弄される中に、自然とかゝる袖珍本も現れる樣になつたものであらうと考へられる。

花道に對して茶道關係のものは當時未だ活字印本として現れてゐない。整版本としても貞享元祿頃から漸く出版せられる樣になつたのは注意す可き點であると思ふ。是に對して、圍碁・象戲の類に關する書籍は早くより活字を用ひて印行せられてゐる定石棋譜の圖等は或る點では活字印刷を不便とするので、印行後、間もなく整版本として覆刻せられてゐる場合が多く、以て其の流通の盛行をも知る事が出來るのである圍碁に關するものには、慶長十二年刊行の碁經と慶長中刊平假名交り活字印本との兩

慶長十二年刊碁經　第一二四圖

種がある。　慶長十二年刊碁經（一冊）は、總紙數三十三葉、別に卷末に左の刊語（一葉のみ整版）があり、毎半葉中央に定石の圖を刻し、其の上下に「白先勝」「黒先勝」等の注書を小型の眞名活字を以て植版を行ひ、更に四周を雙邊匡郭（縦七寸一分横六寸一分）で圍んである。

右一冊定石并作物一百五十餘科雖有淺深厚薄非口傳者難識量歟所雖不可不習傳之慶長十二丁未十二月五日本因坊算砂（黒印）

傳本の管見に入るものは、安田文庫・橋井清五郎氏藏の二本で、之を後に刊語に至るまで其の儘に覆刻した整版本がある。（杉浦三郎兵衛氏藏）

平假名交り活字本碁經　第一二五圖

平假名交り活字印本（一冊）は、其の活字の様式上慶長中の刊行と認む可きもの（[illegible]）同じく整版を以て方眼圖を刻印し、圖中に丸型を以て黒白を捺印して定石を示し、上下欄に平假名を以て説明を加へたものである。黒白捺印を誤つたものは間々胡粉にて訂正を施してゐる。高木文庫（叡山眞如藏舊藏）に原裝の一本を見るのみである。

象戯馬法　第三二六圖

象戯馬法（一冊）は、元和二年宗桂刊（整版本）（高木文庫・谷村一太郎氏藏）の一本があるが、活字印本としては其れよりも内容の豐富な寛永中の印行と認む可き平假名交りの一本（高木文庫藏）が存し、中央基盤中の駒名（[illegible]）及び下欄の持駒を眞名活字、上欄の駒の異同類注記を平假名交り小型活字を以て十六行に植版を行つてゐる。（[illegible]）

第五九五圖

連歌に關するもの及び謠本（嵯峨本の條參照）の印行も頗る盛行を極め、其れ等は當時一種遊興的なものとして用ひられたものであるが、便宜後章に於いて、國文學書として併せ記述する事とする。又、塵功記*（吉澤義則博士藏、上卷一册。平假名交り。元和寛永中刊。挿圖。）の如き實益の書が印行せられるに至つた事も注意す可きである。

中世後期に於いて僅かに刊行せられた國書の過半を占めてゐた聚分韻略・節用集の刻本が、當時に於ける印刷文化の一般文化に對する一大寄與であつた事は前述の如くであるが、近世初期に入つても、簡便なる百科辭書的なる效用をも兼ね具へてゐた節用集・下學集等は附訓刻本たるを第一條件とする爲め、早く慶長中より整版本として刊行せられた。是等の辭書と共に拾芥抄（兩版）倭名類聚鈔等の古辭書・聚分韻略（整版・活版共にあり。）・倭玉篇（心蓮院版らしきものを含めて三種）等の漢字辭書の類も各種のものが現はれてゐる。殊に注意す可きは、連歌作法の爲の辭書類が數多く重版せられてゐる事である。かゝる辭書印行の盛況は、當時の印刷文化が益々一般文化と離る可からざる關係を有する樣になつた狀勢を如實に物語るものであると思ふ。（辭書の印行に關してはなほ後章に詳述す。後記參照。）

以上の諸刻本の存在に據つて、當代に於いては、印刷文化が前代の如き特殊なる限界に止らず、直ちに一般文化の反映を示す樣になつて、印刷文化は漸く一般民衆にとつて實用的なる極めて近しい存在となつた事が知られるのである。

元和寛永中に於ける有刊記の假名交り活字印本

附、元和寛永中刊有刊記假名活字印本

元來有刊記の假名交り活字印本は極めて少數である。殊に、慶長中の刊記あるものの少いことは前述の如くであるが、元和寛永中に於けるものも亦餘り多くはない。但し、少數ながらも諸本に散見する刊記は假名交り古活字印本研究上、極めて貴重なる資料として、幾多の示唆に富むものである。平假名・片假名二體の中、平假名の有刊記本が遙かに少い事は左記の表示で明らかである。

次に元和寛永中に於ける有刊記の假名活字印本を示すこと左の如くである

元和中刊本

（廿）太平記　四十卷劔卷一卷　二十一冊　東洋文庫・高野山寶龜院（卷九・十一冊缺）藏

（刊記）時丙辰歳次元和二孟秋。上旬日

（廿一）沙石集（元和二年刊）（前記二六三頁參照）

（廿二）明德記　三卷　三冊　阿波國文庫・成簣堂文庫藏

（刊記）于時元和三年極月望　以時

（廿三）古文眞寶抄（元和三年刊）（前記三六八頁參照）

（廿四）沙石集（元和四年刊）（前記二六三頁參照）

（廿五）平治物語　三卷　三冊（保元物語共時刊）東洋文庫・尊經閣文庫・成簣堂文庫（二本）・粟田元次氏（中卷）藏

(刊記)元和四暦三月日　開板

(片)承久記　二卷　二册　帝國圖書館・久原文庫・谷村一太郎氏藏

(刊記)于時元和四戊午暦孟夏中十日

(片)巵言抄　林信勝撰　二卷　二册　東北帝國大學(狩谷望之舊藏)・蓬左文庫(原題簽附丹表紙)高木文庫藏

(刊記)元和六年秋七月日　跋

(片)三體詩絶句抄(元和六年刊)(前記三六七頁參照)

(片)貞永式目抄(元和七年刊)(前記四七八頁參照)

(片)三體詩素隱抄(元和八年刊)(前記三六七頁參照)

(片)信長記　十五卷　八册　高木文庫藏(卷九十缺七册)

(刊記)于時元和八壬戌暦三月吉辰

(片)禪宗無門關抄(元和八年刊)(前記三四一頁參照)

(平)源氏物語　五十四卷　五十四册　東洋文庫・安田文庫・(高木文庫乙女卷一册)・野村八良氏(有缺)藏

洛陽二條通鶴屋町

(刊記)元和九年孟夏上旬　富杜哥鑑　開版

(平)狹衣物語　四卷　八册　靜嘉堂文庫(橘千蔭舊藏)・久原文庫(二本)岩瀨文庫(「心也開板」四字損缺)・臺北帝大(八册)藏

（刊記）元和九年五月中旬　心也開板

（平）太平記　四十巻　四十冊　京都帝國大學・高木文庫・成簣堂文庫（原装、別に零本三十一巻一冊あり。）・春日政治氏・九州帝國大學藏

（刊記）于時寛永元年南呂下旬　開板

（十）平家物語　十二巻　十二冊　久原文庫藏（巻八欠）

（刊記）于時寛永元年五月初一日落陽三條寺町　道意

（平）ちんてき問答　一巻　一冊　神宮文庫藏（村井敬義納本）

（墨書識語）寛永元甲子年霜月吉日　坂口權三郎（花押）（印）

（十）六韜抄　六巻　六冊　安田文庫藏（巻一至三欠）

（刊記）于旹寛永元甲子年初冬吉辰　玄佐開板

（片）禪宗無門關（寛永元年刊）　（前記三四一頁參照）

（片）古文尚書抄（寛永元年刊）　（前記三六五頁參照）

（十）明德記　三巻　三冊　東洋文庫・久原文庫・栗田元次氏（書一冊）藏

（刊記）寛永元甲子歳仲夏上旬　開板

（片）大學・中庸章句抄（寛永二年刊）　（前記三六五頁參照）

（十）太平記鈔・音義　四十巻　十冊　高木文庫藏

(跋書識語)于時寛永貳年　板出來(實は本書は慶長十五年春枝開版の太平記と共時の印行なり。後記參照。)

(片)史　記　抄(寛永三年刊)　(前記三六六頁參照)

(片)三體詩詩句抄(寛永三年刊)　(前記三六七頁參照)

(片)鹽山和泥合水集(寛永三年刊)　(前記三四二頁參照)

(片)黑谷聖人傳繪詞(寛永三年刊)　(前記三四〇頁參照)

(片)語　園　一條兼良撰　二卷　二冊　內閣文庫・東洋文庫・安田文庫・久原文庫・高木文庫・國分高胤氏(二本)藏

(刊記)寛永四年丁卯秋七月既望　刊之

(片)職原私抄(寛永四年刊)　(前記四七九頁參照)

(平)騈驪全書(寛永六年刊)　(前記四八三頁參照)

(片)錦繡段抄　釋龍澤撰・釋壽桂注　五卷　二冊　東洋文庫藏(西荘文庫舊藏)

(刊記)寛永六年仲呂上旬　二條觀音町中嶋久兵衛開之

(平)武家諸禮集(寛永八年刊)　(前記四八〇頁參照)

(片)日用灸經(寛永八年刊)　(前記三三五頁參照)

(平)(參考)舞の本　各一冊　東洋文庫藏(後記參照)

(木記)寛永九年壬申十二月吉日中野氏道也梓

(十)義・經記　八卷　八冊　久原文庫(二本)・松井簡治博士(卷八補寫)藏

(刊記)寛永十年五月吉辰

(十一)自・讃歌注　二卷　一冊　高木文庫・金澤武藤氏藏

(刊記)寛永十年五月吉辰

(十二)仙傳抄　一卷　一冊　帝國圖書館藏(同種印本安田文庫藏)

(墨書識語)于時寛永拾參年子六月十九日　善哲之

(十三)女・訓抄　三卷　三冊　(前記四八一頁參照)

(刊記)寛永十四年三月吉辰

(十四)大・和物語　二卷　二冊(二版あり)　(イ)阿波國文庫・廣島文理科大學・池田龜鑑氏藏　(ロ)成簣堂文庫・杉浦三郎兵衛氏藏

(刊記)寛永十六年二月吉辰

(十五)伊・曾保物語　三卷　三冊(二版あり)　(イ)東京文理科大學・安田文庫(卷下)・伊藤篤吉氏藏　(ロ)成簣堂文庫・木戸彰考館(卷下)藏

(刊記)寛永十六年卯月吉辰(善本影譜參照)

(十六)女・訓抄　三卷　三冊　(前記四八一頁參照)

(刊記)寛永十六年二月吉辰

(十七)寶・物集　三卷　三冊　高木文庫藏(卷下)(但し、本書は上卷のみの傳本に據る。(イ)安田文庫(ロ)東洋文庫藏の二[illegible]同種活字本なり。高木文庫藏本は(イ)(ロ)[illegible]一なるべきも、完本にあらずして[illegible])

（刊記）寛永十六年三月吉辰

（平）左大將六百番歌合　八卷　八冊　京都帝國大學・東洋文庫・久原文庫藏

（刊記）寛永十七年九月吉辰

（平）仙傳抄　一卷　一冊　（前記四八四頁參照）

（刊記）寛永拾七庚辰年孟春吉旦

●印を附したるものは刊行者同一ならんと認めらるゝものにして、なほ詳しくは後章に說く可し。

第八章　國文學書の活字開版（坊刻活字印本の發達其の三）

第一節　國文學書活字開版の發生と其の意義

中世期以前に於ける國文學作品の本文の流動性

中世期まで印刷文化と全く無關係なる狀態を續け、鈔寫を殆ど唯一の傳流の機關としてゐた國文學の作品は、其の傳流の間に、時と所と人に據つて、多くの本文に差異を生じ、其の本文は、流動し發展し、所謂異本の發生を見ない作品は殆ど罕なる有樣であつた。卽ち、この流動性・發展性は、印刷文化と關係なき中世期以前の國文學作品の特性と言ふ事が出來る。然るに、在來、鈔寫を唯一の弘通の機關として居た國文學は、玆に新たに起つた活字印刷術と言ふ有力なる弘通の機關を得て、其の發達に一新紀元を劃するに至つたのである。卽ち、古典文學に於いて、印刷が其の傳流の主要なる機關となるに及んで、其の本文は流動性を失ひ、著しく固定化する傾向となつたのである。

近世初期に於ける國文學古典開板の發生

當代に於ける國文學古典開板の發生は、中世期より現れた古典崇拜の思想の影響を蒙つては居るが、直接には近世初期に於ける文藝復興の氣運の魁として現れるに至つたものである。其の國文學古典開板の勃興が、活字印刷術渡來以後、國書活字開板の先驅として現れた史書類の出版に刺戟せられたものである事は否み難い。從つて、最初、國

文學古典の刻書は、古典と言ふよりは寧ろ當時の現代文學にちかい中世期の軍記物語の方面に發生し、次いで同じく中世期の隨筆類、延いては王朝文學の作品の開板に及んでゐる。之は、一には當時の武家階級の要望に基くものであらうが、又一には活字印刷術傳來以後、近世の印刷文化が、實用的方面に發展せんとする現象に基くものであつて、特に注意す可き點である。其れ故に、中世文學の作品に續いて開板せられた王朝文學の作品の最初に出版を見たものも亦、伊勢物語源氏物語等、當時種々の意味に於て實用に供せられた古典であつた。伊勢物語の最初の刻本（慶長十三年刊嵯峨本）が、挿畫本であるのもかかる理由に基くものであらう。

國文學書活字印本の底本は流布本

併し、玆に一應注意すべきは、當時に於ける國文學古典の開板が、民間特志たると書肆たるとを問はず、所謂坊刻本なるものは、學徒の研究的なる特殊の出版ではなかつたのであるから、（罕には其の證本を校刊する由の刊語を存するものもあるが、殆ど嚴密なる學的出版と認め難いものである）古典文學作品が活字印刷術に據つて開板せらるるに當つては、偶然の機會が、其の底本を決定する事が多かつたであらうと考へられる事である。けれども大體に於いて開板者の入手し易き傳本は、其の當時最も流布してゐた通行本であつたに相違なく、且又、讀者の欲求するものも亦流布の通行本であつた事は容易に承認し得る所である。卽ち、讀者が要求し、且つ開板者が入手し易き流布本が開

板せらるるのは極めて自然の現象である　しかのみならず、活字開板せられた古典の本文の性質が明かに之を證して居る

其れ故に、當時流布の通行本として有力なる二つ以上の系統本の行はれてゐる場合は、其の各々の系統本が活字開板に附せられてゐる。

平家物語古活字印本の例

平家物語は、語り本として一方流と八坂流との兩系統が存し、流布の通行本として、この兩系統本が多く傳寫せられ、要求せられたが爲に、開板者の發行したものも亦この兩系統本であつたのである。而して、事實一方流の方が數多く開板を重ねてゐるのに據つて見れば、一方流本は八坂流本より其の流傳が盛であつたものと思考せられる。八坂流本の活字印本は、中院本兩種に過ぎず、（寛永三年の刊行に係る八坂本二種の活字印本ありといへども未見なり。）他の十數種は何れも一方流本である（善本影譜第一輯第五輯、平家物語古活字印本輯集參照。）

徒然草古活字印本の例

最も多く活字開板を重ねてゐる古典の一つである徒然草も、其の本文は盡く當時に於ける流布本であつて、中世後期の初頭以來、僅に傳寫せられて居た正徹自筆系統本は、近世初期に於いて殆ど流傳を絶つてゐたが爲に、印本となつて現れる機會は極めて乏しかつたのである。（善本影譜癸酉第四輯、徒然草古活字印本專集參照。）

徒然草に續いて慶長中期に度々活版に附せられた伊勢物語も、同じく流布本に基き、定家の天福本の系統を傳へるものである。所謂嵯峨本と稱する插畫本九種、無插畫本一種、並に慶長後半の刻本と推定せられる活字印本一種等、其の本文の異同は、植字工の不

注意に據る誤植を見るに止まるものである。（拙著嵯峨本圖考參照。）

源氏物語の例

源氏物語は慶長後半に至つて初めて開板せられ、次いで元和九年と寛永年間とに活字本が現はれてゐるが、之も亦、中世後期以來、人爲的に流布本となつた青表紙系統の本文を有する。大部なる源氏物語の活字印本が早く現はれたのは、一には當時流行を極めた連俳の影響と考へられるのであつて、其の要求の甚く所は、自ら連歌師の間に專ら行はれてゐた青表紙系統本の開版となつて現はれたものであると思ふ。

狹衣物語の例

又、之と同じ要求に從つて早く元和年間に三度の活字開版を重ね、次いで寛永年間にも活字本として重版せられた狹衣物語も亦、中世後期より里村紹巴以下の連歌師の間に傳承せられた流布本が印刷に附せられてゐるのである。

太平記等軍記物語の例

太平記は最も早くから活字開版せられ、刊行年次の明かなものだけでも、慶長八年以前・同八年・十年・十四年・十五年・元和二年・寛永元年等十種にちかい。他書に比して比較的刊記を有するものが多いのは、最初に現はれたものが刊記を具へてゐたからでもあらう。之も亦最初に現はれたものに劔卷が附刻せられてゐないだけが較著な異同として注意せられる位で、本文は順次先行刻本を繼承してゐる

同じく流行した軍記物語の中、なほ保元平治物語などは大體同じ事情にあるが、曾我物語と義經記とは稍事情を異にする。殊に義經記は、數種の活字印本があつて、之が、判官

物語の系統に對しては、大略流布本と言へるが、其の中には稍本文の性質を異にするものがあり、他の軍記物語よりも本文關係が複雜である。

國文學書の本文の固定化

かくの如く、當時の流布本がまづ活字印刷術に據つて印刷に附せられ、在來流布本として勢力を占めてゐたものが益々廣く流傳する傾向が著しくなつた　且つ又、一度或る底本に基いて活字印行せられたものは、其の重版に當つて、初刻本を底本とするのを通例とし、新たに別な寫本を以て底本に用ひる場合は罕であつたから、愈々古典の流布本文の固定する傾向が助長される樣になつたのである。

加ふるに、寛永中期より整版に據る印刷が隆昌に赴くにつれて、活字印刷に附せられた古典が、多く其の儘整版に覆刻せられて、流布本が益々固定してしまふ事になつたのである。

なほ、活字印刷術の盛行期を過ぎて後、整版本として初めて出版が行はれた古典、例へば寛永二十年刊の土佐日記の如き、之等が、活字印本に初刻せられた古典と同樣なる性質と意義とを有する事は茲に附言するまでもない事である。

之を要するに、近世初期活字印刷術に據つて初めて印刷に附せられた古典文學は、其の主要なる作品の大部分を網羅してゐるのであるが、其れが何れも、開版當時の流布本であり、且つ又、後の流布印本の祖を爲したものである事を思へば、國文學古典傳流の上に

於ける活字印本の位置は極めて重要なるものと言はねばならない。

國文學書流布印本の祖としての古活字印本

なほ、茲に流布印本の祖としての活字印本の本文價値に就いて附言す可きは、後の流布印本は、度々開版を行つたが爲に、不注意不見識なる誤を重ね、一般に流布印本とは、最も本文價値の低きものとの概念さへ抱かしめるに至つたけれども、試に後刻整版本を以て其の直接の祖たる活字印本に比照すれば、後刻流布印本の誤りを正す可き實に多くの例に接するのである。(例へば、保元・平治・平家物語の場合の如き)無論活字印本は學究的なる出版ではないから、特に本文價値の高いものを選んで底本としたわけではなく、且つ誤植等も若干存するけれども、初めに印刷に附せられた流布印本の祖としての活字印本の本文價値は必しも一概に低いものではなかつたのである。

現代文學の印刷刊行の發生

次に今一つ注意す可き問題として、近世初期に於いて、まづ初めに古典文學の作品を主とした國文學書の開版は、次第に、當時の現代文學の作品の出版を促す準備ともなつて、寛永前後より、當時の創作が直ちに活字印刷術に據つて發表流布される様になつた事である。(大坂物語・竹齋・聚樂物語等多くの例がある)

茲に當代の儒學が、一部には既に新注の學に基く新しい學風の發生を見たに拘らず、慶長以來現れた活字印本は、盡く縉紳儒流の系統を引いた古注本のみであつて、漸く寛永初年に整版に據る新注學書の啓蒙的なる出版を見るに至つた狀態を思ひ浮べる事が

出來るのである。然し、儒學の新注學書が整版によつて初めて現はれる樣になつたのは、一つには其れ等が文之點四書集注の如き啓蒙的なる附訓本であつたからでもあらうが、其れに比して國文學の方面は、一歩先んじて、新しき創作が新しき印刷法たる活字印刷術に據つて現はれてゐる點に、若干の意義を見出す事が出來ると思ふ。

結局、近世初期に於ける國文學書の活字開版は、一には、古典文學の流傳に一新紀元を劃し、從つて近世初期以來の國文學の研究にも亦重要なる影響を與へ、又他方には、新興文學發達の一大誘因となつたものであつて、我國文學の發達に極めて重要なる意義を有するものである。

第二節　國文學書活字開版の概觀と其の種類

國文學の作品が活字印本として初めて印刷に附せられたのは、前述の如く、確實なる年代は慶長七・八年の頃である。其の最初に現はれたのは、太平記で、次いで徒然草抄・謠本・舞の本・徒然草・曾我物語等が印行せられ、慶長後半期に入ると、光悦を中心とする所謂嵯峨本の開版事業に刺戟せられて平安朝文學の作品の出版が隆盛になつた。其の後寛永後半期以後再び整版が勃興するに至るまでの間に於ける古典の活字開版は實に夥しい數に達するのである。それが書目に於いて多數を算すると同時に、一書の重版の行はれるものが亦頗る多數であつた事も注意す可きである。即ち、嚴密なる考究を遂げるに從つて、在來全く知られなかつた所謂異版の發見せられるものが枚擧に遑なく、殆ど面目を一新したかの觀をも呈するのであるが、唯一度だけ印刷が行はれたと考へられてゐた作品が、實は數次の重版が行はれて、頗る流通愛讀せられたものである事が闡明せられるに至るならば、其の存在の意義の重要性が全く異つて來るが故に、異植版即ち重版たる活字印本に於いては、極めて精密なる版式の考究が必要となるのである。

最も重版せる國文學作品

最も重版の行はれたものは、徒然草の十三種（他に壽命院抄七種）で、其の他には軍記物

語の類に多く、太平記十一種(他に賢愚抄二種、鈔三種)・平家物語十一種・保元・平治物語が各十種・曾我物語八種・義經記五種等である。

平安朝文學の作品としては、伊勢物語を最高とし、嵯峨本十種、他の活字印本一種、(併せて十一種)、注釋書を加へると、竹園抄(三種)嵯峨本二種、他の活字印本一種・闕疑抄(四種)の多きに達する次いで、大和物語十種、枕草子七種、以下撰集抄六種、竹取物語五種、狹衣物語四種、うつほ物語、俊蔭卷三種、源氏物語三種等、一書で再版を行つてゐないものは少數である。

重版の整版化

然し是等の活字重版數と共に注意す可きは、活字印本隆盛期に於ける整版本である。元和末年より杉田良庵(玄與)の手に據つて、太平記元和八年・平家物語元和七年刊本・徒然草等の整版本が行はれ、寛永に入つては、曾我物語寛永四年春田十兵衛刊・義經記寛永十年・十二年刊・伊勢物語嵯峨本整版參照等も整版として現れてゐるから、附錄年表下卷參照是等をも併せ考察して初めて、一層當時に於ける古典開版盛行の眞相を闡明する事が出來るのである。

而して、重版數の多いものは、各年代に亙つてゐるが、或は早く慶長より寛永に至るもの、或は寛永に初つて急速に多數版を重ねたもの、慶長に多くて寛永に少ないもの等其の間に自ら種々の相違がある。

總じて古典文學に於ける活字開版は、古物語・軍記物語・草子・隨筆の類に多く、之に比して歌書の類は當時流行した連歌を加へてもなほ極めて少數である。軍記物語に關聯し

て中世の雜史の類は各種のものが活字印行せられてゐる。是等は史籍と共に次節に附載する事とする。

語學に關する活字印本—殆ど全部辭書—が極めて少數であるのは、當時最も流行した節用集・倭玉篇の類が早くから整版本として連年新版を出してゐるからであらう。

次に管見に入つた古典文學の活字開版書を表示すると左の如くである。國史・語學其の他の類をも便宜併記する事とする。

(一)物語

(二)草子・日記・紀行

(一)物語

(イ)竹取物語　五種
(ロ)伊勢物語　一一種
　伊勢物語肖聞抄　三種
　伊勢物語闕疑抄　四種
(ハ)大和物語　十種
(ニ)うつぼ物語(俊蔭卷)　三種
(ホ)源氏物語　三種
　源氏小鏡　六種
　源氏物語紹巴抄　一種
(ヘ)狹衣物語　四種
(ト)住吉物語　三種
(チ)宇治拾遺物語　一種
(リ)寶物集　五種(內、片一種)
(ヌ)撰集抄　六種
(ル)沙石集　(片)五種

(二)草子・日記・紀行

(イ)枕草子　七種
(ロ)徒然草　十六種
　徒然草壽命院抄　(片)七種

(ハ)方丈記　三種
(ニ)十六夜日記　一種
(三)歴史物語
(イ)榮華物語　一種
(ロ)大鏡　一種
(ハ)水鏡　一種
(ニ)増鏡　一種
(四)軍記物語
(イ)平家物語　十一種(内、片五種)
(ロ)源平盛衰記　(片)三種
(ハ)保元物語　十種(内、片二種)
(ニ)平治物語　十種(内、片二種)
(ホ)太平記　十二種(内、平三種)
太平記賢愚抄　二種
太平記抄・音義　三種
(ヘ)曾我物語　八種
(ト)義經記　五種
(五)和歌(歌謠共)
(イ)八雲御抄　一種
(ロ)萬葉集　二種
(ハ)新古今和歌集　二種
(ニ)芳野拳詣　一種
(ホ)見咲和歌集　一種
(ヘ)百人一首　二種
百人一首抄　二種
(ト)自讃歌注　一種
(チ)左大將家六百番歌合　三種
(リ)勅撰名所和歌抄出　一種
(ヌ)類字名所和歌集　三種
(ル)臨葉集　一種
(チ)分葉抄　一種

(ワ)無言抄　三種
(カ)匠材集　四種
(ヨ)藻鹽草　二種
(タ)至寶抄　三種
(レ)發句帳　三種
(ソ)新撰犬筑波集　五種
(ツ)四生の歌合　一種
(ネ)花傳書　五種
(ナ)謠本　九種
(ラ)久世舞　二種
(ム)謠抄　五種

(六)漢詩文集・附作法

(イ)本朝文粹　一種
(ロ)遍照發揮性靈集　三種
(ハ)南浦文集　一種

(ニ)錦繡段　(漢)二種
錦繡段抄　(片)四種
(ホ)續錦繡段　(漢)一種
續錦繡段抄　(片)一種
(ヘ)三千句　(漢)一種

(附一)語學(辭書)

(イ)倭名類聚鈔　(漢)一種
(ロ)聚分韻略　(漢)一種
(ハ)倭玉篇　(漢)三種
(ニ)大和言葉　(平)一種
(ホ)拾芥抄　(片)二種
(ヘ)管蠡抄　(漢)一種
(ト)語園　(片)一種
(チ)巵言抄　(片)一種

(六)漢詩文集・附作法
(附一)語學(辭書)

（附二）史籍類

（附二）史籍類

（イ）日本書紀　（漢）二種
（神代卷）　（漢）五種
日本書紀（神代卷）抄　（片）二種
（ロ）先代舊事本紀　（漢）一種
（ハ）東鑑　（片・平）三種
（ニ）保暦間記　（片）三種
（ホ）承久記　（片）三種
（ヘ）新田左中將義貞軍記　（平）二種
（ト）明德記　（片）三種
（チ）應仁記　（片）二種

(一) 物語類

(イ)竹取物語　一卷(二卷)　一册(二册)

竹取物語の活字印本は次の五種で、其の本文は多く異る所がない。第一種本(一册)は慶長中の刊行と認められ、其の卷末附刻の識語は同種活字印本住吉物語(大字本)と同一關係者の傳承本である事を示してゐる。第三種本(二册)と第四種本(二册)(イ)(ロ)の三版とは同種活字印本で元和寛永中の刊行、第三種本が先行であらうと思ふ。第二種本(一册)は活字は小型であるが、活字の稍大きい第三種本より反つて先出の印本であらうと思ふ。正保以後の整版本は第三種本より出てゐる(正保刊本、神宮文庫藏)

第一種本(慶長中刊、十行平假名交り、毎行約十七字。字面の高さ約七寸一分。卷末に「竹取物語秘本申請興行之者也」と附刻す。一卷、一冊。)　高木文庫*(秋葉義之舊藏、原裝、「竹取物語」の原題簽をも存す。)・谷村一太郎氏藏

第二種本(慶元中刊、十一行(約)二十二字。字面の高さ約七寸。一卷、一冊。)　成簣堂文庫*(藍色原表紙存す。)・池田龜鑑氏(田中大秀書入)藏

第三種本(慶元中刊、十行、十八九字(不揃)、字面の高さ約六寸九分。枕草子十二行本等同種活字なり。二卷、二冊。)　東洋文庫(原表紙存す。)・久原文庫(狩谷望之手校、木村正辭舊藏)藏

第四種本(元和寛永中刊、十行本同種活字。十一行、二十字。(ロ)は異植字版なり。字面の高さ約七寸三分。版心「上(下)」(丁數)。二卷、二冊。)
　(イ)種　神宮文庫*(林崎文庫舊藏、丹表紙、「和歌山若町貴志屋市右衛門印」あり。)・石崎文庫(改裝)藏
　(ロ)種　光藤珠夫氏*(契沖校正を伴蒿溪が轉寫せる書入の移寫あり。)・安田文庫(震災焼失)藏

（ロ）伊勢物語（附）宵閒抄・闕疑抄　第二〇二圖

（ロ）伊勢物語　（附）宵閒抄・闕疑抄　　一卷　　一册

伊勢物語は嵯峨本に十種の印本がある他に、（前記嵯峨本條參照）慶長中期の印行と認む可き一本が存する。毎半葉十一行平假名交り、十七・八字。（濁點附の活字を混じ、上段に平假名漢字を植字す。）字面の高さ約七寸一分。次述の宵閒抄二卷本と同種活字印本である。慶長十二年の識語書入がある本朝古今銘盡（前記參照、安田文庫藏）中の活字を襲用してゐる點から見ても、慶長中期の印行と推定せられる。上下二卷に分たず、一卷一册とし、卷末に業平の年譜を附載した點のみ嵯峨本と異るが、同じく天福本の系統である。安田文庫（西莊文庫舊藏）に一本を見るのみである。

（附、一）伊勢物語宵閒抄　第二〇三圖

（附、一）伊勢物語宵閒抄　　五卷　　五册

嵯峨本（二版）の宵閒抄は前に述べたから省略し、（前記參照）前記伊勢物語と同種活字印本たる二卷本に就いて記るす。内容は嵯峨本と異る所がないが、彼が三卷であるのに對し、此は二卷に分つてゐる。十一行平假名交り十七字。（濁點附活字を混じ、上欄に平假名の補字を植用する事伊勢物語と亦同じ。）字面の高さ約七寸一分半。成簣堂文庫（表紙は雲母模様あり、原装宵閒上下二册）・東洋文庫藏）

（附、二）伊勢物語闕疑抄　慶元中仁右衛門刊本　第二〇四・五圖

（附、二）伊勢物語闕疑抄　　五卷　　五册

伊勢物語闕疑抄の活字印本は大別して二種、細別すれば四種となる。其の一は仁右衛門刊本（十一行平假名交り、二十一字、字面の高さ約七寸五分 [illegible] 仁右衛門 [illegible]）で、慶元中の印行と推定せられるもので、卷末の識語に據れば、文祿五年

（仁右衛門は中山仁右衛門 [illegible] 一人なるべし。）

仲春十五日に法印玄旨(細川幽齋)が撰述を終へたものを、慶長二年孟冬に中院通勝が書き傳へた一本に據つて讎字を行つたものである。(内閣文庫〔合二冊〕・岩瀨文庫・*安田文庫・成簣堂文庫〔原裝〕・高木文庫藏)闕疑抄は勢語の古注の中、肖聞抄其の他の先行諸注より更に詳かで簡要を得てゐるから、當時最も流通し、寛永中に本書を讎印した活字印本三種及び寛永十一年刊整版本等の刊行がある。

仁右衛門刊本の讎印たる寛永中刊活字印本〔十一行平假名交り、二十二字。字面の高さ約六寸九分。〕には三種の異植版がある。其の印行の順次は明確にし難いが、共に寛永十一年刊整版本〔神宮文庫藏〕の出現以前、寛永中期までに時差なく印行せられたものと認められる。唯活字の磨滅度の少ない點より(イ)種が初版であるらしいのと、(ロ)(ハ)兩種の植版の著しく接近してゐる事とを知る。

寛永中刊本 (二三六)

寛永中刊(無刊記)本

第三三六圖

(イ)種　内閣文庫〔合一冊〕・*神宮文庫〔村井敬義納本。原裝原題簽存す。慶安刊本もて朱書す。〕藏

第三三七圖

(ロ)種　*安田文庫〔五冊〕・久原文庫藏

第三三八圖

(ハ)種　*成簣堂文庫〔原題簽附原裝、五冊。「苔香山房之印」等印記あり。原本の大いさ、縱九寸三分半、横六寸八分。〕藏

(八)大和物語

(八)大和物語　二卷　二冊

大和物語は慶元中より寛永の後半に亙つて數度の開版が行はれてゐる。後出の活字印本は盡く、最初慶長の末年頃に現れた十一行本(三版)の讎印であるから、其の本文が何

れも十一行本(二條家本の系統本)を承けてゐるのは當然である。十二行本は活字の様式から言つても十一行本に次いで現れたものと認められる。活字は若干小さい。寛永十六年刊本及び無刊記同種活字印本は十二行本中の(ハ・ニ)版の類に據つたものである。(イ・ロ)兩版は下卷末「しものゆき」の歌の次に「となんありける」とあるのが、(ハ・ニ)版には之を缺き、寛永十二行本は何れも之を缺いてゐる事などからも證せられる。慶安元年刊本は、其の本文より見て寛永十二行本等に據り開版せられたものであると思ふ。

(1)慶元中刊十一行本　每行約二十一字。字面の高さ約七寸。兩版中の前後は未詳なり。

(イ)種　京都帝國大學（原題簽存す。）・龍谷大學（原題簽存す。表紙裏に平家物語片假名活字版の損遺りを用ふ。）・大島雅太郎氏（[illegible]）藏　第二三九圖

(ロ)種　高木文庫（原題簽存す。）・正宗敦夫氏藏　第二四〇圖

(ハ)種　安田文庫（寛永頃の後印本。）藏　第二四一圖

(2)元和中刊十二行本　每行約二十字。字面の高さ約七寸。各版何れも刊行か未詳なるも、(イ)版は墨付活字の摩滅現はるゝ事少く、(イ)(ロ)共に下卷末に「となんありける」の結語あり、(ハ)(ニ)には兩者の植版關係極めて密接にして、磨滅度著しく且つ結語を缺く。後印本との關係に見るに大略右表の分類の如くなるべし。

(イ)種　京都帝國大學・高木文庫藏　第二四二圖

(ロ)種　東洋文庫（原題簽存す。原表紙。）・久原文庫（藍色原表紙存す。）藏　第二四三圖

(ハ)種　岐阜師範學校藏　第二四四圖

(ニ)種　桜井簡治博士（原題簽）藏・歌堂文庫舊藏本（[illegible]）　第二四五圖

(3)寛永十六年刊(十二行)本 次の無刊記本と異植版なるも配字等に至るまで同じ。何れが先行なるか未詳なるも、略共時の印行なる可く、有刊記本兩版の時差の如きは殆どなかる可しと推定す。

(イ)種 成簣堂文庫原裝・杉浦三郎兵衞氏(合)一冊藏

(ロ)種 阿波國文庫原題簽附、原裝、不忍文庫舊藏

(4)寛永中刊十二行本 每行約二十一字。字面の高さ約七寸。 圖書寮尊藏下卷・靜嘉堂文庫・東大寺佛敎圖書館・岩瀨文庫・高木文庫待賈堂舊藏藏

第一四六圖

第一四七圖

第一四八圖

(二)うつぼ物語(俊蔭卷)

(二)うつぼ物語(俊蔭卷) 二卷 二冊

うつぼ物語は、俊蔭卷のみ活字印行せられた。當時の鈔本には、俊蔭卷のみを傳へてゐるものも少くないから、(嫁入に持參せし嫁入本の類も存在せり。)其の要求に應じて、うつぼ物語開卷の一部分のみを出版したものであらう。萬治二年林和泉掾刊行の繪入俊蔭卷(三卷三冊又は合一冊)は其の本文關係より見て、活字印本に據る飜刻と稱する事は出來ないが、俊蔭卷を單行する點に於いては交渉を有するものと考へられる。活字印本は何れも無刊記本であるが、第一種本は竹取物語第三種本と同種活字印本で、元和寛永中の印行、第二種本も略同時の刊行であらうが、活字が稍小さい。本文は何れも變りはない。

第一種本 十一行平假名交り、約十九字。字面の高さ約七寸。(イ)(ロ)兩版何れが先行なるか詳かならず。

(イ)種 東北帝國大學狩野文庫・阿波國文庫原表紙存す。不忍文庫印記捺印なきも其の舊藏、原本大いさ、縱九寸、橫五寸九分。朱校書入若干あり。・東洋

文庫（今一冊、賓竹文庫舊藏）・成簣堂文庫（原青表紙）・大谷大學・安田文庫藏

第三四九圖

(ロ)種　神宮文庫（今一冊、村井敬義舊本、藍色原表紙存す。原本大いさ縦九寸、横五寸八分半）・其他石崎文庫（今一冊）・東大寺佛教圖書館（東大寺北林院舊藏）藏

第三五〇圖

第二種本（十一行、字數略定まり、一行約二十一字。字面の高さ約七寸。上下二丁、[illegible]の匡心あり。）の九州帝國大學（[illegible]舊藏）・久原文庫藏

第三五一圖

(ホ)源氏物語　附、源氏小鏡・源氏物語網目抄　五十四卷　五十四冊

一、傳嵯峨本

源氏物語の最古刻本は、往來嵯峨本と傳稱せられる裝潢麗しき慶長中刊行の大型活字印本（十一行、二十二字。字面の高さ約七寸四分。五十四冊。）である。然し、其の書風は光悅の筆蹟の特徴を具へる事少く、其の裝潢の一部分（表紙に小紋様の雲母摺模様を施し、[illegible]に[illegible]ある紙片を用ふ。）に嵯峨本の影響を蒙つてゐる點を認め得る程度であるから、前述の嵯峨本に之を編入する事は不穩當であると思ふ。傳本も比較的多く、内閣文庫（[illegible]）・京都帝國大學（[illegible]）・東洋文庫・安田文庫・高木文庫（[illegible]）藏の諸本は淺青色小紋様雲母模様の原表紙を具へ、金子元臣氏（[illegible]）・大島雅太郎氏（[illegible]）の二本は卵色原表紙に同じ模様がある。なほ震災前に東京帝國大學に藏せられたと言ふ、初めの十冊に不規則に色變り料紙を混用した類の傳本は未だ管見に入らない。原題簽は雲母模様があり何れも同一である。

第三五二圖

源氏物語が平安朝以來最も流行した古物語である事は言ふまでもなく、中世以來所謂河内本・青表紙本等の系統の諸本が傳へられ、殊に中世後期室町時代には青表紙系統本

二、元和九年刊本 第三九三圖

三、寛永中刊本 第三九四圖

附二、源氏小鏡

が專ら流布し、其の流れを受けた當時の流布本をとつて慶長中に活字開版せられた本書が青表紙系統の本文を有する事は極めて當然である。後印の二本が青表紙系統本である事は言ふまでもない。

嵯峨本と傳へる一本に次いで開版せられたものは元和九年刊本(十一行、二十一・二字(不等)。字面の高さ約七寸二分。五十四冊。)である。卷末に左の刊記がある。開版者富杜哥鑑は未詳、國文學書活字印本の有刊記本は極めて少數であるから、かゝる有刊記本は、古活字研究上にも亦貴重なる資料となる。

(刊記)元和九年孟夏上旬　洛陽二條通鶴屋町　富杜哥鑑　開板

傳本の管見に入るものは、安田文庫*(黃色原題簽附、褐色表紙存す。)・東洋文庫(豐山文庫舊藏校正書入多し。)・野村八良氏(有缺)・高木文庫(一冊。乙女卷)・金子元臣氏藏の諸本である。

元和九年刊本に據つて寛永中に飜印せられた一本(十一行、二十一字。字面の高さ約七寸一分。)は、反つて傳本少く、內閣文庫(昌平坂學問所舊藏)・久原文庫*二本(一は五十五冊、二は五十四冊)・正宗敦夫氏(葵卷より、各十八冊。)藏本を見るのみである。之に兩種の異植版があり、久原文庫藏二本が之に當る。慶安頃の繪入整版本はこの寛永中刊無刊記本に基いたものである。

(附、二)源氏小鏡　花山院長親撰　二卷(三卷)　二冊(三冊)

嵯峨本(前記參照)の他に、古活字印本として四種の異版が存する。其の一は元和中の印行

と認む可き一本（鈴鹿三七氏・田村專一郎氏藏）で、十二行約二十二字、字面の高さ約七寸三分。（鈴鹿氏藏本は上中二卷、田村氏藏本は中卷一冊のみである。）其の二は寛永中刊行の無刊記本で、寛永十六年の年號刊記ある諸本と同種活字を用ひてゐるから、略其の刊行年時が判る（後記參照）。之に又、四種の異植版がある。十二行本三種と十三行本一種とである。何れが先行か不明であるが、共に時差なく現れたものである事は其の植版配字が之を證してゐる。内容は前記嵯峨本等と同一であるが、嵯峨本が二卷（御幸までを上）に分つに對し、是は三卷（明石まで上、宇治十帖下）として居る。

（一）十二行本（每行約二十二字、字面の高さ約七寸三分。卷首目錄の初めに源氏目錄とあるは、源氏小鏡目錄の略にして卷頭を掲ぐるの意なり。左の三種の異植字版あり。）

（イ）種　安田文庫・＊高木文庫（中缺）藏

（ロ）種　＊高木文庫（卷上）藏

（ハ）種　＊東北帝國大學（丹表紙原裝、狩野文庫）藏

（二）十三行本（字面の高さ約七寸二分、每行約二十二字）・京都帝國大學（原表紙存す。）・＊東洋文庫（南葵文庫舊藏）・安田文庫（上卷缺、中下卷）藏

（附三）源氏物語紹巴抄　　里村紹巴撰　　二十卷　　二十冊

活字印本盛行期に於ける源氏物語注釋書の刻本として最も大部なものである。寛永十七年刊左大將六百番歌合等と同種の小型活字印本で、寛永後期の開版と認められる。卷末に、天正八年仲夏上旬三條西殿等の聞書を武州忍成田總州の懇望に據つて許可する由の紹巴の識語を附刻してある。（十行本、卷名表引、每行約二十四字、字面の高さ約六寸二分。）

第三六〇圖

傳本の管見に入つたものは、東洋文庫・安田文庫・久原文庫・高木文庫(書入多し)藏の四本に過ぎず、世に流傳するものは、寛永末年頃に本書に片假名附訓を施して覆刻した整版本(內閣文庫(和學講談所舊藏、二十冊)・京都帝國大學(十冊)・大阪府立圖書館(二十冊)・蓬左文庫・高木文庫(眞如藏舊藏、二十冊)・奈良女高師(二十冊)等あり。)である。原本を極めて精刻してゐる部分が多いので、間々活字印本と誤認せられてゐる。

(ヘ)狹衣物語

(ヘ)狹衣物語　四卷　八冊(各卷を上下に分綴す。)

狹衣物語は中世期に於いて源氏物語と共に同じく連歌と密接なる關係を有し、現存舊鈔本にも紹巴等の識語を有する傳本も發見されてゐる。從つて、近世初期に於いても亦、連歌師の間に傳承せられてゐた通行本が活字開版に附せられる樣になつたのである。其の初刻本は、元和九年心也開版、刊記「元和九年五月中旬　心也開板」の一本で、別に同種活字異植版の無刊記本が兩種存在する。無刊記本が後出である事は誤植等の徑路の調査に據つて證せられる。版式は三版とも同一、(十一行、二十二字。字面の高さ約七寸四分。原題簽を存する傳本多し。)管見に入るものは併せて二十本に達する。

元和九年刊本並に同無刊記本

第三六一圖　第三六二圖　第三六三圖

(一)元和九年刊本　靜嘉堂文庫*(橘千蔭手澤舊藏、四冊)・岩瀨文庫(四冊、卷末「心也開板」の四字削去。)・久原文庫(二本)(一は賜蘆文庫舊藏、二は永田文庫舊藏、各八冊)・臺北帝國大學(八冊)藏

(二)元和中刊無刊記本　(左に列記する他に、多和文庫(菊亭家舊藏)に一本を藏す。)

(イ)種　神宮文庫(村井敬義納本、四冊)・京都帝國大學(黃紙摺、八冊。別に木村正辭博士舊藏、靜嘉堂文庫藏本と同一の校正書入ある零本卷一一冊あり。)・東洋

文庫(鳳鶴館舊藏、源貞*筆書入あり。八冊)・安田文庫(藍色原表紙、原題簽附、八冊)・高木文庫(上同)・久原文庫(吉野氏舊藏、巻四缺、六冊)藏

(ロ)種　内閣文庫(八冊)・京都帝國大學(二本)(一は八冊、黄紙表紙を附し、一は會田所藏等印記あり四冊)・水戸彰考館(三冊)・成簣堂文庫(三上・四上下の三冊、補寫、僊戸文庫舊藏)・松井*簡治博士(藍色原表紙四冊)・池田龜鑑氏(八冊)・入江相政氏(八冊)藏

寛永中刊十三行本

元和中の刊本に據つて寛永中に飜印せられた一本(寛永十六年刊大和物語等同種活字)は反つて傳本少なく、(十三行、二十二字。字面の高さ約七寸一分。第一六九圖)管見に入るものは神宮文庫(宮崎文庫本、八冊、丹表紙。)・高木文庫(八冊)・靜嘉堂文庫(佐伯子爵舊藏、巻四缺、六冊)・日本大學(武笠三氏舊藏)藏の諸本である。

(ト)住吉物語

(ト)住吉物語　二卷　二冊

住吉物語は古物語中最も本文を異にする傳本が多いが、古活字印本には其の本文を異にするもの二種、三版が存在する。

慶長中刊十行大字本

第一は、竹取物語(十行大字本)と同種活字印本(十行、十七字。字面の高さ約七寸。上下二卷。)で、竹取物語と同文の識語「住吉物語依少人御所望以秘本興行也」を卷末に附刻し、慶長中の刊行と認む可きものである。

第二は、元和頃の刊行と認められる一本で、前記慶長刊本の本文を傳へたものである。(十二行、二十三字。字面の高さ約七寸六分。版心に巻數及び丁數あり。)第三は、活字の様式等は略相似してゐるが、少しく後の印行と認められる一本である。但し、其の本文は前記二本と著しく異り、全く他の傳寫本に基いて開版したものである。(十二行、約二十二字。字面の高さ約七寸七分。)

各種の傳本を表示すると左の如くである。

(一)第一種本(慶長中刊十行大字本)

內閣文庫(二本)一は保存よき美本・安田文庫*香色原表紙・原題簽附・大島雅太郎氏同上藏

(二)第二種本(元和中刊十二行二十三字本)

東洋文庫洒竹文庫舊藏原表紙存す。・福井市立圖書館上卷一冊・無窮會文庫稱意館舊藏、合一冊・臺北帝大二冊・

久原文庫・安田文庫*・池田龜鑑氏藏

(三)第三種本(元和寛永中刊十二行二十二字本)

內閣文庫・東洋文庫洒竹文庫舊藏・安田文庫*岸本由豆流舊藏、震災燒失。藏

第三六五圖

第三六六圖

第三六七圖

(チ)宇治拾遺物語

第三六八圖

(リ)寶物集

(チ)宇治拾遺物語　八卷　八冊

元和九年刊源氏物語等の活字を襲用して摺刷したものの如く磨滅の著しい部分が少くない。寛永中の刊行と認められる。十一行平假名交り、毎行約二十一字。字面の高さ約七寸二分。十傳本極めて罕に、完本は高木文庫*原表紙原題簽存す。杉浦三郎兵衛氏藏の二本で、他に京都帝國大學卷一缺、七冊、原題簽存す。に一本を藏する。其の本文は比較的善く、後刻の萬治の繪入整版本の誤りを正し得る點が多い。

(リ)寶物集　平康頼撰　三卷　三冊

寶物集も其の傳流の間に本文が發展を遂げた好適例の一つである。(寶物集の異本研究(橋純孝)・國語國文二ノ二・三・四)活字印本に附せられたものにも兩種の本文系統があつて、其の一は片假名交り、其

の二は平假名交りを以て印行せられてゐる。

慶長十四年以前刊片假名交り印本

(一)片假名交り活字印本(一種)は慶長十四年以前の印行の確證(大屋德城氏藏本識語)があり、三卷、三冊(四周單邊、無界、十一行片假名交り、匡郭内、縱七寸四分半、横五寸二分半。單に其の樣式に據るも慶長中の刊行なるは疑ひなし。)管見に入るものは、神宮文庫・大谷大學(中卷缺、元禄神宮文庫本を以て補寫)・安田文庫・松井簡治博士・大島雅太郎氏(二冊、雲州揖原長抵、各冊末に寛永十八年十月十日の墨書識語あり)・大屋德城氏(中卷缺、雲州揖原長抵、各卷末に慶長十四年暮月中旬書本之西南院秀辨の墨書識語あり)藏の諸本である。

之に對し平假名交りの活字印本は、數度(大別して二種、細別すれば四種)の開版が行はれ、且つ片假名活字印本よりも其の内容少く、寛永二十年刊本(大谷大學藏)以下の流布の整版本とは密接なる關係を有する。

元和中の印行(大和法隆寺藏本と同種活字)十二行と認められる第一種本には兩版の別がある

第三六九圖

第一種本(十二行平假名交り、毎行約二十一字、字面の高さ約七寸一分)

(イ)種　東京文理科大學(平出氏舊藏、合一冊)・成簣堂文庫(法隆寺舊藏、三冊)藏

第三七〇圖

(ロ)種　靜嘉堂文庫(三冊)・池田龜鑑氏(野中氏舊藏、上中二冊(殘損))藏

第三七一圖

第二種本(十二行平假名交り、毎行約二十一字、字面の高さ約七寸)は、其の一本(高木文庫藏、下卷一冊)に「寛永十六年三月吉長」の刊記があつて、この種の活字印本が、大體寛永後期の印行に係る事を證してゐるが、

第三七二圖

管見に入つた三部の傳本は、何れも零本のみで、前記高木文庫の下卷と、安田文庫東洋文庫藏の各上卷一冊とである。然も、僅かに二部の上卷は、各々植版を異にし、この種の活

字印本が少くとも二版以上行はれた事を明示してゐるが、前記高木文庫の寛永十六年刊下卷一冊は、其の何れに屬するものであるか、又は更に新しい別版に屬するものであるか、以上の三本のみでは明らかにする手掛りがない。唯第二種本が第一種本に據つて飜印したものである事だけは確實である。

寶物集と撰集抄の共時刊行

なほ寶物集は保元平治物語程に嚴密には言へないが、常に撰集抄と共時に出版せられてゐる樣である。慶長十四年以前刊片假名活字印本と嵯峨本撰集抄とが對照の位置にあるものとして、（嵯峨本撰集抄高木文庫藏本の麻葉模樣の雲母模樣表紙と同種のものを、大島氏・大屋氏藏の寶物集に使用せるもこの間の消息の一端を窺ふを得可し。）寶物集第二種本・第三種本と對照す可き撰集抄の同種活字印本がある。撰集抄には寶物集第二種本（兩版）に相當する活字印本が一版しか見當らない代りに、寶物集には未だ同種活字印本を見ない元和寬永中刊行の活字印本が一種存在する。

（ヌ）撰集抄

（ヌ）撰集抄　　三卷　　三冊

寶物集と共時の印行に係るものと考へられる本書の最古刻本は嵯峨本である。（前記總參照）その後刻本は直接又は間接に之に基いて印行せられた。慶長中期の嵯峨本に次いで現れたものは、元和中の印行と認む可き寶物集第一種本と同種活字の印本である。之を無刊記本第一種とし、（毎半葉十二行平假名交り、毎行二十一字。字面の高さ約七寸一分上中下を更に三分し第一より第九に至る寛永中刊活字印本は之に據りて九卷とす。）（安田文庫原表紙存す。・高木文庫藏）

第一七圖

之に續くものは元和寛永中の印行と認む可き一本である。（無刊記本第二種）每半葉十一行、每行約十八字。字面の高さ七寸三分。本書のみは他の諸刻本と若干語句の相違がある。（靜*嘉堂文庫藏）

第三七四圖

寛永中の印行に係る無刊記本第三種には少くとも三版以上の重版が行はれてゐる。本書に用ひられてゐる活字は寛永十六年の刊記ある諸本の其れと同種のものであるが、活字の磨滅が殆ど現れてゐない點等から見て、或は、この種の活字印本としては新雕の際に初めて植版せられた部類に屬するものではあるまいかと思ふ。各版の前後は未詳であるが、摺刷の程度より推せば、左表の順序とする事が出來る

第三種本　十二行平假名交り、每行約二十一字。字面の高さ約七寸一分。

第三七五圖

（イ）種　松*井簡治博士藏（三冊）

（ロ）種　東洋文庫藏（舊宮城藩藏、下卷末に「石出澤吉持之藏」語書入あり。）・廣島文理科大學（上卷一冊）藏

（ハ）種　東洋文庫・高木文庫藏

（ル）沙石集

（ル）沙石集　釋無住撰　十卷　十冊

沙石集は早くから幾多の活字印本が行はれてゐるが、之に就いては前に記述したから（[illegible]）茲には省略して、諸本を表示するに止める。後刻本は活字印本並びに整版本共に悉く慶長十年刊（要法寺版）より出たものである。

（一）慶長十年刊本（要法寺版）　圖書寮（[illegible]）・蓬左文庫（[illegible]）・成簣堂文庫（[illegible]）藏

第二七六圖

（二）無刊記本（要法寺版同種活字）　京都帝國大學藏

（三）元和二年刊本　雙邊、無界、十二行片假名交り。匡郭内、縱六寸七分、橫四寸七分。十卷、十冊。　本書には刊記をも其の儘に覆刻せる整版本あり。（龍谷大學・東洋文庫等藏）

（イ）種　*京都帝國大學・松井簡治博士藏

第二七七圖

（ロ）種　大阪府立圖書館藏

（四）元和四年刊本　單邊、無界、十二行片假名交り。匡郭内、縱七寸六分、橫五寸八分。　*安田文庫・高木文庫（眞如藏舊藏）藏

(二)草子・日記・紀行

(イ)清少納言枕草子

(二)草子・日記・紀行

(イ)清少納言枕草子　五卷　五冊

清少納言枕草子の最古刻本は慶長中の印行と認められる十行植版の活字印本である。之に基いて慶元中に刊行せられたものに十二行植版の活字印本(兩版)があり、更に之に據つて寛永中に十三行植版の活字印本(數版)が現はれてゐる。其の本文は順次先行刻本を承けてゐて、之が慶安二年の整版本にも關係し、次いで北村季吟に據つて春曙抄が出るに及んで、この系統本が流布本としての位置を占める樣になつたのである。之に對して枕草子には安貞の識語を有する所謂三卷本の系統本が別に存在し、其の傳寫本も尠ではないが、近世初期に於いて枕草子が初めて刊行せられるに當り、偶然的に其の底本の決定を見たものであつたとしても、この種の系統本が底本となつたのは、是が當時流布本としての性質を具へてゐたが爲であらうと思ふ。而して、一度十行本が印行せられて後は、この系統本が流布本としての位置を確保した事は言ふまでもない。次に管見に入つた各種の活字印本を表示すると左の如くである。清少納言枕草子の異本に關する研究　池田龜鑑(國語と國文學五ノ一參照。

第一種本[慶長中刊十行本] [illegible]

第二八〇圖

内*閣文庫五冊・祐德文庫肥前鹿島、鍋島子爵家本藏

第二種本（慶元中刊十二行本）十二行平假名交り、毎行約二十一字。字面の高さ約七寸九分。其の活字の書風は第一種本と同樣なるも稍小型なり。兩版の何れが先行か未詳なるも、略共時の印行なる可し。

（イ）種　神*宮文庫村井敬義納本、原表紙存す。五冊・京都帝國大學三卷缺・四冊・陽明文庫五冊藏

（ロ）種　東洋文庫舊岩持井宮家藏、四冊・高*木文庫原表紙存す。五冊藏

第三種本（寛永中刊十三行本）は十三行平假名交り、毎行約二十二字。字面の高さ約七寸三分。活字の書體は先行二本に比して稍拙にして小型なり。本書と同種活字印本猗衣十三行本を初め頗る多し。各種の前後未詳なるも（イ）（ロ）は密接なる關係にある可く、（ニ）種最も後印と推定せらる。

（イ）種　内閣文庫昌平坂學問所・淺草文庫舊藏、五冊・帝國圖書館榊原芳埜舊藏、五冊・東洋文庫卷四・五合四冊・靜*嘉堂文庫合二冊藏

（ロ）種　帝國圖書館屋代弘賢手校、中村秋春・酒竹文庫舊藏、卷二至五の四冊。卷一は後に別種の活字印本（ハ）を補配せしもの。・廣*島文理科大學五冊・東大寺佛教圖書館五冊・久*原文庫五冊・東洋文庫五冊・正宗敦夫氏藏

（ハ）種　内閣文庫卷二缺、四冊・京都帝國大學五冊・帝國圖書館に卷一、屋代舊藏本に補配せるもの。・安*田文庫卷五、慶安二年刊本補配・田村專一郎氏四冊・兵庫前川氏原刊表紙存す。藏

（ニ）種　東京文理科大學百井文庫舊藏・安*田文庫・高木文庫・武藤元信氏舊藏藏

（ロ）徒然草　二卷　二冊

徒然草の傳本の研究は茲には省略して（拙著正徹本徒然草參照）流布本たる活字印本に就いて述べる。（日本書誌學第八章參照。）

第三七八圖

第三七九圖

第三八一圖

第三八二圖

第三八三圖

第三八四圖

（ロ）徒然草

徒然草は伊勢物語等と共に近世初期に於いて最も數多く開版せられた國文學書の一である。慶長極初、假名交り印本の發生した當初直ちに上梓せられて以來、寛永年間に至る活字印本は管見に入るもの十四版（約五十本）に達する。之に慶長九年、著者秦宗巴生前に活字印行を見た註釋書「壽命院抄」の活字印本異版（七通以上）を加へると、實に夥しき數に上り、當時弘布の盛況を察する事が出來る。整版本も亦比較的早く現れて、元和頃の杉田良庵刊行の二冊本を初め、寛永中刊無刊記本等種々行はれてゐるが、其の本文に至つては、何れも殆ど異る所がない。

次に各種の活字印本を略推定刊行年代順に表示すると左の如くになる。

第一八五圖

（一）雲母摺本（慶長中刊十行本）（1）裝式頗る古拙にして趣きあり。徒然草最古刻本にして、其の色變り料紙（薄紅・淺青・黄等）に施せる雲母模樣の意匠また嵯峨本に先行するものと認めらる。毎半葉十行約十八字。字面の高さ約六寸五分。卷末に兼好の自讃歌を附刻せるは他の凡ゆる刻本と異る點なり。傳本の管見に入るものの一本のみ。安田文庫藏（上卷題原退藏氏舊藏、下卷西莊文庫舊藏。）

第一八四圖

（二）嵯峨本（前記嵯峨本條參照。）

（イ）第一種本（雲母摺）（2）久原文庫（朱色原表紙に草假名字體の原題簽存す。奥山存枝氏覆刻。）・東北帝國大學・阿波國文庫・刈谷町立圖書館・安田文庫・大島雅太郎氏・反町茂作氏藏

（ロ）第二種本（雲母摺）（3）内閣文庫・東洋文庫（二本）（一は完本、二は下卷一冊）藏

（ハ）第三種本（素紙摺）（4）安田文庫・東洋文庫藏

第三八六圖

(ニ)第四種本(素紙摺)(5)内閣文庫(二本)一は淺草文庫舊藏、二は熱海山田氏舊藏。・安田文庫原表紙存す。藏

(ホ)第五種本(素紙摺九行本)(6)東洋文庫・安田文庫*(二本)一は完本二冊、一は下卷一冊。藏

第三八七圖

(三)烏丸本(慶長十八年刊)前記二〇七及び刊記集參照。(7)

圖書寮尊藏・内閣文庫昌平坂學問所舊藏・東北帝國大學狩谷棭齋舊藏・安田文庫*・久原文庫・高木文庫櫻山文庫舊藏・成簣堂文庫元和七年朱印記あり。藏

(四)慶長中刊十行本十行十八字。字面の高さ約七寸六分。保元平治・平家物語等同種活字印本多し。(後記參照)兩版の前後は磨滅度誤植增加等の精査に據りて(イ)(ロ)の順なる事知らる。

(イ)種(8)久原文庫・高木文庫下卷藏

(ロ)種(9)安田文庫西荘文庫舊藏・東洋文庫西荘文庫舊藏・高木文庫桂氏舊藏・加賀豐三郎氏下卷一冊、卷末三葉損、實に靜嘉堂文庫藏永享三年正徹自筆鈔本の奥書を墨書せるは正徹本傳流上注意す可きものなり。藏

(五)慶長中刊十一行本十一行十九・二十字(不等)。其の活字前記十行本と同書風にして型稍小、枕草子十二行本と相似たり。字面の高さ約七寸六分半。(ロ)は同種活字後印本。活字の磨滅著し。

(イ)種(10)東洋文庫・久原文庫・安田文庫上卷・高木文庫下卷藏

第三八八圖

(ロ)種(11)安田文庫*上卷藏

(六)慶長中刊十二行本(句讀點植版)(12)字面の高さ約七寸八分半。本書の零葉、靜嘉堂文庫藏日本書紀古活字印本の原表紙裏張より銀子請取之日記等と共に出でたるを以て、元和元年以前の刊行と限定せらる。(前記嵯峨本の條參照)

第三八九圖

東洋文庫(二本)・久原文庫・安田文庫上卷、西荘文庫舊藏・成簣堂文庫・高木文庫首尾若干葉缺藏

第三九〇圖

(七)慶長元和中刊(十一行本)(13)(14)字面の高さ約七寸六分。每行約二十字。異植版あり。版心上(イ)初版なり。(イ)種安田文庫*藏(ロ)種*頴原退藏氏藏

第十一書　(附、一)徒然草壽命院抄

(八)元和寛永中刊(十一行本)(15)（毎行約二十字。字面の高さ約七寸六分。）鈴鹿三七氏藏*

(附、一)徒然草(壽命院)抄　秦宗巴撰　二卷　二冊

徒然草壽命院抄は秦宗巴(壽命院徳岩)（天文十九年生、慶長十二年五十八死。醫師。）が生存中に印行せられたかゝる例は當時としては極めて罕な現象である。本書の印行其の他の詳細に就いては嘗て公表したものに讓って、（徒然草壽命院抄覆刊佐雲堂刊摺稿解題）茲には唯各版種の別を表示しておく。

第十二書

(一)慶長九年(如庵宗乾)刊本（卷首數葉のみ、本文は平假名、註解は片假名交りを用ひ、第七葉以下は凡て片假名交りとす。恐らく著者の稿本には本文は平假名、考註は片假名交りとなれるを、其の儘印行せんとしたるものなればかゝる形式の出できたりしものなる可し。十行。(漢字)十八字。單邊、匡郭内、縱八寸二分、横五寸九分。卷末に慶長九曆閼逢執徐姑洗貝晝の刊記あり。（前記參照））

内閣文庫（昌平坂學問所舊藏）・尊經閣文庫（三分冊）・東洋文庫（中川忠英舊藏、又木街狩野氏文庫印記あり）・龍谷大學・内野氏皎亭文庫（山岡明阿自筆書入）・慶應義塾大學藏

(二)無刊記本(第一種)（慶長中刊十一行片假名交り、雙邊、匡郭内、縱七寸五分、横五寸五分。）

神宮文庫（村井古巖獻納本）・東洋文庫（岸本由豆流舊藏）・岩瀬文庫（三分冊）・安田文庫（上卷）・濱野知三郎氏（下卷）藏

(三)無刊記本(第二種)（慶長中刊、十二行片假名交り。單邊、匡郭内、縱七寸六分、横五寸七分。第一種本によりて植版せり。）

阿波國文庫（不忍文庫舊藏）・杉浦三郎兵衛氏藏

(四)無刊記本(第三種)（慶長中刊十三行片假名交り、單邊、匡郭内、縱七寸五分、横五寸八分。慶長九年刊本を以て植版の底本とす。）

圖書寮尊藏（[illegible]）・濱野知三郎氏（上卷は中[illegible]、大久保忠寄[illegible]寫書入あり）藏

(五)無刊記本(第四種)元和中刊。十二行片假名交り。雙邊、匡郭内、縱七寸五分、横五寸八分。第二種本に據りて印行せしものなる可し。

帝國圖書館藏(榊原芳野舊藏。分四冊)・龍谷大學・彰考館文庫(清納本)小山田與藏

(六)無刊記本(第五種)寛永中刊。十二行片假名交り。雙邊、縱七寸五分、横五寸五分。第四種本に據りて植版す。

京都帝國大學(「虚受庫」印記あり)・靜嘉堂文庫(上卷一冊、下卷は第六種本補配)・安田文庫(西荘文庫舊藏)

(七)無刊記本(第六種)寛永中刊。十一行片假名交り。單邊、縱七寸六分、横五寸三分。壽命院抄中最後出の一本なる可し。源平盛衰記・信長記等と同種の小型の活字を用ふ。

靜嘉堂文庫(上卷缺)・東洋文庫・久原文庫・陽明文庫・高木文庫・成簣堂文庫藏

(八)方丈記

(八)方丈記　一卷　一冊

嵯峨本方丈記(二種)並びに慶長中刊無刊記活字印本に就いては前に述べたから、茲には重言を避け、左表を掲げるに止める。因みに正保二年の整版本が嵯峨本を飜印したものである事は其の本文關係が明らかに之を物語つてゐる。

傳本種別所在表

(一)嵯峨本第一種本(雲母摺帖裝)慶長十五年頃前刊　阿波國文庫(不忍文庫舊藏)・東洋文庫(二本)・靜嘉堂文庫・安田文庫藏

(二)嵯峨本第二種本(素紙摺袋綴)　東洋文庫・成簣堂文庫藏

(三)慶長中刊本十一行本　京都帝國大學・蓬左文庫(駿河御讓本)*・安田文庫(西荘文庫舊藏)・谷村一太郎氏(北氏藏書印記あり。)藏

(二十六夜日記)

(二十六夜日記　一卷　一冊

第一九二圖

阿佛尼の十六夜日記は、元和か寛永の初め頃に活字開版せられた。（十一行平假名交り、毎行約二十字。字面の高さ約七寸六分半。）萬治二年の繪入整版本は活字印本に據つたものであるが、活字印本には第四葉裏第五行目等に長文の脱落がある。同樣な語句が重出してゐる爲に錯誤を來したものので、植字の際の粗漏であるか、又は底本とした傳寫本に脱葉があつたものかの何れかであらう。傳本の管見に入つたものは、東京文理科大學（原表紙存す。）・熊本縣立圖書館・東洋文庫（巻末に「京都四條坊門通敎賀屋久兵衛」等の墨書書入あり。）・水戸彰考館（契沖書入）・松井簡治博士（林讀耕齋・橘千蔭舊藏）・杉浦三郎兵衛氏・安*田文庫（角田竹冷舊藏）の七本である。阿波國文庫藏の「不知夜日記」と題する一本は、古活字印本の影鈔本である。

(三) 歷史物語

(イ)榮華物語　四十卷　二十冊

本書は元和寛永中の開版と認められる。稍小型の樣式の整つた活字(發句帳一本と同種)を用ひてゐるが、卷末に從つて活字の磨滅が著しくなつてゐるのは、かゝる大部な書籍を印行する際に於ける活字其の他の準備の完全でなかつた事が察知せられると共に、活字を極めて經濟的に利用した當時の出版狀況が窺はれる。二卷を一冊とし、全部二十冊(每半葉十一行平假名交り、每行約二十一字。字面の高さ約六寸九分。各冊首に卷名目次を附し、卷名のみ大型活字を用ふ。)傳本の管見に入るもの頗る多く左の十八本に達する。

圖書寮尊藏(谷森善臣舊藏、新見正路書入)・神宮文庫(新見正路自筆校正書入、賜蘆文庫印あり。)・帝國圖書館(二本)(一は榊原芳野舊藏、二は小杉榲邨舊藏)・內閣文庫・東京文理科大學(缺十三冊、平野廣臣、清臣藏本にて校正)・京都帝國大學(別に又、影鈔本あり、谷森善臣舊藏本なり)・山口縣立圖書館(明倫館舊藏、毛利侯の書入を移寫せり)・東洋文庫(卷一(寫)一冊を附す。二十一冊)・久原文庫・岩瀨文庫(附、卷一(寫)二冊を附す。二十二冊)・靜嘉堂文庫(卷一至六の六冊)・高木文庫(卷卅三・四缺、十九冊)・田中忠三郎氏・松井簡治博士*(榊原芳野舊藏、原書)・大島雅太郎氏(藍色原表紙存す、慶長年中三條西實條本を以て比校せり)・布施卷太郎氏・田村專一郎氏(缺十六冊)藏

(ロ)大鏡　六卷　六冊

大鏡は古く三卷本として傳寫されて來たが、本書は更に之を兩分した形で、各冊首に目

次を附し(一)王代記(二)仲平至師輔(三)伊尹至兼家(四)道隆道兼(五)(六)道長の六冊となつて、古寫の三卷本に比して、傍注其の他の書入が混入增補した本文を有する。是が後の整版本の粉本となつたのであるが、整版本は更に便宜八卷八冊に分冊してゐる。增鏡水鏡の兩書と同種活字で、慶元中共時に刊行せられたものと認められる。(十二行平假名交り、每行約二十字。字面の高さ約七寸六分。原題簽「大かゝみ(卷數)」を存する傳本多し。但し安田文庫藏(二條家舊藏)の一本の如く、本文と同一の活字を以て捺印せる「大　一(至六)」の紙標のみを假に添附せるもあり。)傳本多く、管見に入つたものは左の十七本である。

大鏡の傳本

内閣文庫(原題簽存す。)・神宮文庫(村井敬義納本)・大阪府立圖書館(二本)(一は鴻池家舊藏、二は住友家舊藏)・名古屋市立圖書館(河村秀根舊藏、缺五冊)・水戸彰考館(屋代弘賢書入)・東洋文庫(玉松家舊藏、原題簽存す。)・靜嘉堂文庫(東園文庫舊藏)・久原文庫(二本)(一は歌堂文庫、二は松本文庫舊藏)・*安田文庫(二本)(一は二條家舊藏、二は本居宗家舊藏「鈴屋之印」あり。)・高木文庫(缺一冊)・杉浦三郎兵衛氏・谷村一太郎氏(稼園舊藏)・高野辰之博士(零本一冊、藤原惺窩舊藏)・鳥野幸次氏藏

第三七五圖

(八)水鏡

(八)水鏡　三卷　三冊

版式裝幀等全く大鏡と同一、各卷首に目次を附し、上卷は神武の古より欽明天皇、中卷は敏達天皇より孝謙天皇、下卷は廢帝(淳仁)より仁明天皇の御代までである。好古目錄等に藤原貞幹は、傳本が罕であると言つてゐるが、管見に入つた古活字印本中では所謂三鏡は傳本の多い部類である。後の慶安頃の整版本(風月庄右衛門刊)と若干文字の異同があるが、流布版本の基を爲してゐる事は、他の二鏡と同様である。

（四）軍記物語
（イ）平家物語
流布印本としての一方流本
（一）十行平假名本 [illegible]

（四）軍記物語

（イ）平家物語　　十二卷　　十二冊 [illegible]

平家物語は古活字印本中最も多く雕刻せられた書籍の一つである。中世期以來、弘く流傳したが爲に、異本の發生を見た事も亦頗る多く、平曲の關係より言つても、一方流と八坂流との二系統の大別が立てられる樣になつたが、古活字印本に於いても亦この兩系統本がある。然し、其の大半は、一方流本であつて、一面、當時通行の狀を察する事が出來る。又一面には、一方流本の開版の盛行は一方流本の通布本としての位置をより一層強化する作用を爲したものとも言ふ事が出來る。古活字印本として行はれたものの十種の中、八坂流系統本は中院本及び其の翻印と認む可きものの一種の二本のみであつて、他は盡く一方流本である。又、之を其の書體より言へば、八坂流系統本は兩種とも平假名交り印本であるが、一方流本は平假名本と片假名本とが相半ばしてゐる。一方流本として現れた活字印本中、最古刻本は左の一本である。

（一）十行平假名本 [illegible] 刊記は無いが、其の版式並びに内容より、恐らく平家物語最古の刻本と思惟せられる。各卷章段を分たず、題名を加へる事なく、古い體裁を存してゐる。傳本頗る罕に、松井簡治博士藏の一本を見るの

みである。震災前東京帝國大學に一冊不足せる一本ありき。

(二)下村本。(毎半葉十行、毎行十六至八字(不等)で字面の高さ約七寸三分) 本書は卷末刊記「下村時房刊之」(下村時房は未詳、前記參照。)に據つて、下村本と稱する。在來、本書を光悅本・嵯峨本等と唱するものがあるが、其の版式は光悅風の亞流には屬するが、嵯峨本の列に加へ難い。間々傳本中に雲母模樣の原表紙を存するものがあるが、是も他の諸本の例に多く見える樣に必しも嵯峨本裝潢の影響に出るものとは言へず、前述の如く寧ろ本書の方が嵯峨本の刊行に先行するものであるかもしれない。本書は前記の十行平假名本を粉本とし、新たに章段題名を補つて印行したものと解し得る。初め、卷八の卷頭「山門御幸」の題名を脫したので、後に其の首一葉のみ之を補つて組改めてゐるのも其の傍證とする事が出來る。([illegible]) 世に稀覯本と稱するが、管見に入つた傳本は頗る多く、二十本に達する。

內閣文庫(二本)([illegible])・東北帝國大學(二本)([illegible])・第一高等學校([illegible])・東洋文庫(二本)・靜嘉堂文庫([illegible])・久原文庫・安田文庫([illegible])・成簣堂文庫([illegible])・高木文庫([illegible])・松井簡治博士・刈谷町立圖書館([illegible])藏の諸本の他、林森太郎氏も一本を藏せらるゝ由である。([illegible])

(三)十一行平假名本(河原町仁衞門刊)([illegible]) 卷末に「此平家物語一方

撿挍衆以吟味令開板之者也」河原町　仁衛門」の刊記があり、同じく仁衛門刊行の伊勢物語闕疑抄の活字を襲用し、元和中の印行と認む可きもので、元和七年並びに九年刊杉田良庵所刻の片假名整版本と共に、江戸時代流布印本（一方流本）の祖をなしたものの一つである。

傳本（二版）（第一二九・第一三〇・四〇一圖）

傳本比較的少く、管見に入つたものは三本に過ぎないが、何故か卷末刊記の一葉のみ植版を異にする別版があつて、之を別つと左の如くとなる。

（イ）京都府立圖書館十二冊藏

（ロ）安田文庫合六冊・大阪府立圖書館十二冊藏

（四）寛永元年刊本（第一〇二圖）

（四）寛永元年（道意）刊本。（每半葉十二行平假名交り、每行約二十一字字面の高さ約七寸八分）前記十一行本に據つて飜印を行つたものと認められる。卷末に左の刊記がある。

此平家物語一方撿挍衆以吟味令開板之者也

于時寛永元年五月初一日

落陽三条寺町　道意

久原文庫缺卷八・牧川鷹之祐氏藏の二本を知るのみである。

（五）雙邊十二行片假名本

（五）雙邊十二行片假名本（疊一本）（四周雙邊、無界、十二行片假名交り、匡郭内高さ七寸六分、横五寸六分）慶長中の刊行、片假名交り印本中最初に現はれたものと認められる。卷中、章段題名を脫するものが少くない。本

第四〇三圖　傳本

家物語古活字印本が、大多數一方流諸本である事は前記の如くであるが、其の一方流系統本中、本書のみは覺一本に屬し、他は盡く其れより變化した流布本の系統である。

本書の傳本には、第一高等學校（書外題あり、美裝）・靜嘉堂文庫・高木文庫・高野辰之博士（缺四冊（卷六・九・十・十一））藏の四本がある。

（六）單邊十二行片假名本　第四〇四圖

（六）單邊十二行片假名本。（四周單邊、無界、每半葉十二行片假名交り。匡郭內縱七寸五分半、橫五寸五分半。）前記覺一本に次いで現はれた一本で、流布本系統。活字の樣式は稍異るが、同じく慶長中の印行と認められる。傳本の管見に入るものは、＊久原文庫・酒竹文庫舊藏・高木文庫（原裝）・高野辰之博士（卷八一冊）藏の三本である。東京帝大震災前一本ありき。

（七）十二行片假名本　第四〇五圖

（七）十二行片假名本。（四周雙邊、無界、十二行片假名交り。匡郭內縱七寸二分、橫五寸八分。）元和九年刊杉田良庵所刻平家物語の原表紙裏張りに使用してゐる源平盛衰記と同種活字印本であるから、元和中には印行せられたものであらう。本文は十行平假名古活字印本と同じ。傳本少く、京都府立圖書館（十二冊）・＊成簣堂文庫（原裝、原題簽存す。大久保忠寄舊藏、卷八缺。）・栗田元次氏（卷一・三・十二缺、九冊）藏の三本を見るのみである。

（八）附訓片假名本

（八）附訓片假名本。（雙邊、無界、十二行片假名交り。匡郭內、縱七寸五分、橫五寸五分。）振假名・訓點を附刻した活字印本であるが、振假名・句讀點等を別行に附植したものではなく、特別に振假名・句讀點等を併せ雕りにした所謂ルビ附活字を作成して附訓刻本としたものである。本書の活字を襲用したものに、源平盛衰記・太平記等寬永中刊の整版本を混用した亂版が存在するのを以て

見れば、本書も寛永中の印行であらう。前記十二行片假名本を粉本とし附訓を施して雕刻したものの如くである。傳本の管見に入るものは、東洋文庫（[illegible]）・安田文庫（[illegible]）藏の二本である。

以上八本は覺一本（五、雙邊十二行片假名本・六、單邊十二行片假名本）・覺一本より流布本成立に至る過程を示す一方流本（一、十行平假名本・二、下村本・七、十二行片假名本）・流布本（三、十一行平假名本・四、寛永元年道意本。八、附訓片假名本。）等の細別はあるが、（[illegible]）何れも一方流系統本である。之に對して、八坂流系統本の活字印本は次の二本である。

（四）中院本

（九）中院本（十行十八字。字面の高さ約七寸二分。[illegible]）二十二卷末の校語「右此平家物語者中院前中納言以諸家正本校合之給者也」に據れば、中院通勝の校正本を出版したものであるから、中院本と稱するを可とするが、其の底本となつたものは何れの系統本であるか、又諸家正本との校合はどの程度に行はれてゐるかに就いては、大體、三條西本の系統本に一方流本を以て校合を加へたものと言ひ得る。（[illegible]）傳本の管見に入つたものは八本に達するが、其の中四本が、原裝を傳へながら卷末の校語一葉を存しないのは、流傳の間に失つたものではなくて、原來之を附屬しなかつたものであらうと思ふ。傳本によつては雲母摺の模樣を加へた水色表紙を有するものがある點等から、在來嵯峨本光悦本等と誤稱せ

られたものであると思ふ。

(イ)(校語附載本) 内閣文庫（朱色雲母模様表紙）・帝國圖書館（原表紙存す。寧樂文庫舊藏）・安田文庫（卷十二、零本一冊）藏

(ロ)(無校語本) 史料編纂所（本）・京都帝國大學文學部研究室・高木文庫(二本)（一は朱色雲母模様存す(完本)。二は香色原表紙、缺七冊。）・安田文庫・成簣堂文庫（卷一・二缺十冊。「木街狩野氏之文庫」印記あり。）藏

(二)十二行平假名本（十二行二十八字。字面の高さ約七寸八分。）中院本を飜印したものである。極めて小型の活字を用ひてゐるが、この種の活字は他に曾我物語・義經記・左大將六百番歌合（寛永十七年刊）等同種印本多く、寛永中の印行と認められる。傳本の知られてゐるものは、京都府立圖書館・安田文庫・正宗敦夫氏（褐色原表紙存す。）・伊藤氏甘露堂文庫（完本）藏本と松井簡治博士（缺六冊）藏本との五本であるが、他に異植版の存在する事が知られた。（卷三の零本一冊、安田文庫藏。）

右の二本の他になほ八坂流系統に屬する古活字印本が一種あつて、山田孝雄博士は其の卷十二の一冊（楠美恩三郎氏藏、卷十二の末に、「寛永三年の春の比藤田檢挍城慶加賀の國にて筑紫方檢挍城一川の雲井の本と奥書侍る平家物語を求侍き此本則其雲井の本を寫し筑紫檢挍城一本と奥書侍る故に藤田檢挍城慶此本を用て八坂方の平家と號す」の識語あり）のみを見られた由であり、又山崎美成の歌曲考にも岡本況齋の平家物語攷（自筆稿本靜嘉堂文庫藏）にも一見の由を記るしてゐるが、筆者は未見であるから、茲に附記しておく。

なほ又、寛永中の刊行と認む可き一本（四周單邊十二行片假名交り。）もあるが、零本若干を見るのみであ

るから、詳しい性質も不明である。

（ロ）源平盛衰記　　四十八卷目一卷　　二十五册

源平盛衰記の活字印本は三種あり、順次先行本に據つて飜印せられたものである。何れも片假名交りであるのは、慶長前後の傳鈔本が多く片假名交りに書寫せられてゐるのに據つても首肯する事が出來る。

（一）は慶長中刊（寶物集（慶長十四年以前刊）同種活字。四周雙邊、無界、十一行。匡郭内縦七寸一分半横五寸四分半。二十五册。（首一册は目錄））傳本の管見に入るもの、内閣文庫・米澤圖書館・成簣堂文庫（合十二册）・久原文庫（一・二卷缺、目一册缺）・松井簡治博士藏の五本がある。

（二）は元和寛永中刊（四周單邊、無界、十二行。匡郭内縦七寸六分横五寸三分。目一册共二十五册）前記慶長中刊本に據つて現れたもの、東洋文庫に一本を見るのみである。

（三）は（二）の元和寛永中刊十二行本に附訓を施して飜印した附訓刻本である。平家物語附訓刻本の活字を襲用してゐるが、傳本の管見に入るものは何れも附訓整版本を混入した亂版であるから、或は亂版に非ざるこの種の附訓活字印本は作成せられなかつたのかも知れないが、この種の亂版が何故に生じたかに就いては堀田章男氏の所論の如く、（書誌學第二ノ五、「源平盛衰記亂版考」參照）原來全卷附訓活字の一本があつたのを、後に整版本を覆刻するに當つて之が殘葉を流用し、其の不足の部分のみ整版を以て補つたものが若干出來たわけであらうと思ふ。其の傳本に據つて、整版の混じた部分が若干異つてゐるのも其の一

（ロ）源平盛衰記

[illegible]本

第四一〇圖

第四一一圖

第四一九圖
第四二一圖

（五）元和・寛永中刊十一行本。（第五種）

毎半葉十一行。毎行約二十字。字面の高さ約七寸五分。活字稍小型なるも第六種本より若干長方形をなす。章段を分たず。

静*嘉堂文庫・久原文庫・玉井幸助氏藏

高*木文庫・春日政治氏（上下二冊）藏

第四二二圖
第四二四圖

（六）元和・寛永中刊十二行本。（第六種）

毎半葉十二行。毎行約二十字。字面の高さ約七寸五分。

光*藤珠夫氏（平治物語と傳來を同じくし、原表紙存す。）藏

光*藤珠夫氏藏

第四二三圖
第四二五圖

（七）元和・寛永中刊十二行本。（第七種）

毎半葉十二行。毎行約二十二字。字面の高さ約七寸一分。活字前記諸本に比して稍小型にして間々濁點附活字・（平假名）振假名附眞名活字を混用す。目錄章段を附せる點前記諸本と異る。

安*田文庫（平治物語揃、原表紙存す。）・高木文庫（原装、酒竹文庫舊藏、三冊）・大谷大學・成簣堂文庫（「渡邊宗山淵書倉」印記あり。）・谷村一太郎氏（上中二冊）藏

安*田文庫（保元物語共、栗皮色原表紙存す。）・成簣堂文庫（二本）（一は渡邊氏舊藏）藏

第四二六圖
第四二八圖

（八）寛永中刊十二行本。（第八種）

毎半葉十二行。毎行約二十二字。字面の高さ約七寸九分。活字は第五種本に相似たるも、振假名附眞名活字を混植す。第七種本の如く、目錄章段を附せり。

杉*浦三郎兵衛氏（中巻一冊）藏

東*洋文庫（下巻末見返に「日光」印、墨書識語あり。）藏

（九）寛永中刊十二行本。（第九種）

（傳本未見）

附訓活字頗る第八種本に相似せり、兩者の關係深き事知らる。章段題名を設け、紋心を附す。十二行二十四字。字面の高さ約七寸六分。保元物語未見。

安田文庫（下缺）・武藤元信氏遺書（完本）藏

第四二七圖
第四二九圖

（二）慶長中刊（片假名）十一行本

頴*原退藏氏（上巻一冊、原装、野口道[illegible]舊藏）藏

久*原文庫藏

慶長中刊。四周雙邊、有界、十一行片假名交り。匡郭內、縱七寸一分、橫五寸四分五厘。活字大型なり。(保元物語は二卷本、第一種と同じ)

成*簣堂文庫(印記あり。泉之屋文庫)・尊經閣文庫藏

(二)元和四年刊(片假名本)

元和四年刊、四周單邊、無界、每半葉十一行片假名交り。平治物語卷末に「元和四曆三月日　開板」の刊記あり。

成*簣堂文庫(印記あり。泉之屋文庫)・尊經閣文庫・東洋文庫(栗原)・栗田元次氏(中卷)藏

(一)太平記

(一)太平記　附一　太平記賢愚抄　附二　太平記鈔音義

太平記は前述の如く國文學書中最も早く開版せられ、重版の數も最も多い。多くは片假名交りで、平假名交り印本は慶安三年の活字印本を合しても三種に過ぎない。特に本文を異にするものはなく、慶長七年開版以來、盡く先行の印本を以て順次翻印を行つた形となつてゐるが、慶長十五年刊本より片假名本にのみ初めて劔卷が附刻せられる樣になつた。從つて無刊記本中慶長中の開版と認む可き版式を有し、劔卷の附刻なきものは慶長十五年以前に開版せられたものであるかもしれない。他の國書に比して、獨り太平記の活字印本にのみ刊記を附刻したものが多數見えるのは、最初に現れたものに年號刊記を刻してゐたのを順次繼承して行つたものであらうと思ふ。

五十川了庵刊本二種

前述の如く最も早く現れた太平記の刻本は(一)慶長七年五十川了庵所印の活字印本である。(成簣堂文庫藏(第四章第三節[illegible]頁參照))(二)は翌慶長八年同じく了庵が同種活字を以て印行し

た一本(「慶長癸卯既望富春堂新刋」の刊記あり。東洋文庫(冊四十)・安田文庫(二十冊、原表紙存す。別に廿一・二卷一冊及び慶長七年刊同卷あり。)・坂出町立圖書館・杉浦三郎兵衛氏(卷三九・四〇の一冊零本)藏(なほ卷末の刊記ある一葉、表紙裏張り等より出でたりと覺しきもの竹苞樓佐々木惣四郎氏所藏))

慶長十年刊本

(三)は慶長十年刊本、(要法寺版と認む可きもの(二六七頁參照))活字の樣式も了庵刊本より整備し、片假名交り印本としては最も大型の部に屬する。(久原文庫(卷二三・二四の一冊補寫、目共二十冊)・成簣堂文庫(目一冊共二十一冊)・高野辰之博士(卷十一・十二の一冊)藏。(他に東部書肆に二本を見る。))

慶長十二年刊本

(四)は慶長十二年刊本(帝國圖書館藏の一本を見るのみ。(零本三冊は高野辰之博士藏。)四周雙邊、有界、十二行片假名交り。卷末に「慶長十二丁未年上元日」の刊記あり。原裝、二十冊。)

慶長十五年刊本

(五)は慶長十五年春枝刊本で、有刊記本としては本書より劍卷が附載せられる樣になつた。(單邊、無界、十二行片假名交り。活字は稍小型に屬す。匡郭內、縱七寸六分、橫五寸五分半。卷末に「慶長十五曆庚戌二月上旬日　春枝開板」の刊記あり。春枝に就きては未詳なるも、慶長十一年に四體千字文等の刻あり。)傳本の管見に入るもの頗る多く、圖書寮尊藏(二十一冊)・內閣文庫・大阪府立圖書館・福井市立圖書館・久原文庫(卷九補寫二十冊)・高木文庫・岩瀨文庫・高野山寶壽院・成簣堂文庫(二本)(一は完本、二は鈌十五冊)・布施卷太郎氏・安田文庫(原裝、卷十七・八鈌、二十冊。太平記鈔同活同裝。)・中島仁之助氏(鈌七冊、十三冊)・高野辰之博士(卷七至十一、廿九至卅一、卅七至四十の合三冊零本。)の十四本に達する。慶長中の有刊記片假名交り活字印本は右の如くで

無刊記本

あるが、なほ刊行年時未詳の無刊記本は、(六)慶長中刊本(雙邊、無界、十二行片假名交り。匡郭內、縱七寸二分、橫五寸六分劍卷なし。)(高木文庫(原裝、原題簽存す。卷十五・十六の一冊欠、思七を以て補配。)・京都府立圖書館(圓光寺舊藏、鈌十三冊(卷一至六、九至十二、十五至二十、廿五・廿六・廿九・三十・三十三・三十七至四十)藏)(七)慶元中刊(雙邊、無界、十二行片假名交り。匡郭內、縱七寸、橫五寸六分。卷十五・六の一冊零本、高木文庫藏(六)に補配あり。)等の若干種が存する(なほ零本等にて僅三種管見に入るものあり。)

元和二年刊本

元和に降つては、(八)元和二年刊本(單邊、無界、十二行片假名交り。匡郭內、縱七寸五分半、橫五寸六分。劍卷附載。卷末に「時丙辰歲次元和二霜秋上旬日」の刊記

第四十二冊

り。がある。（東洋文庫〔原装附原表紙、巻共三十一冊〕・高野山寶壽院〔巻九十一冊缺〕藏〔東部書肆にて一冊見たる一本見〕）又、寛永中の刊行と認められる附訓片假名交り古活字印本も存在する。平家物語・源平盛衰記と同種の活字を用ひ、管見に入つた一本（嚴松堂書店にて一見）は源平盛衰記の如く活版と整版との亂版となつてゐるが、若干缺冊〔[illegible]〕十五・十六巻缺、巻一至四・九・一〔[illegible]〕がある。雙邊、無界、十二行片假名交り、[illegible]其の整版の部分は印刷面を見るに、初印に相違ないから、若干殘存してゐた活字版の殘葉に新版を加へて一部を成したものであらうと思ふ。右の亂版の部分に相當する零本で、全部活版のものも管見に入つたものがあるから、右の所考は更に確められると思ふ。

太平記の平假名交り活字版

元和八年には杉田良庵の手に據つて初めて片假名附訓の整版本（内閣文庫藏）も現れてゐる。以上は片名本であるが、平假名本の方は（九）慶長十四年に存庵が開版した一本（四十冊）が最初である。其の印行の實務に從事したのは才雲で、頗る整備した版式を有し、振假名附の漢字を混用してゐるのも、本書に於いて初めて試られた形式である。（[illegible]）内閣文庫・岩瀬文庫・杉浦三郎兵衛氏・成簣堂文庫〔[illegible]〕・東北帝國大學〔[illegible]〕藏）（三）慶長十四年刊本を後に覆刻した一本が（二）寛永元年刊本で、活字の樣式が若干趣きを失つた他は、版型等全く相似してゐる。（[illegible]）（京都帝國大學・九州帝國大學〔[illegible]〕・高木文庫・成

慶長十四年刊本　第二七七圖

寛永元年刊本　[illegible]

賓堂文庫に、巻廿一の零本一冊（完本。原題簽存す）の他、中島仁之助氏藏）寛永元年刊本も附訓活字を使用してゐるが、其の活字を襲用し、更に片假名附訓の眞名活字を混じ、寛永元年刊本を飜印したものに

慶安三年刊活字印本

（三）慶安三年の刊本がある。古活字版流行の末期たる寛永を過ぎる事六年の後になるが、古い活字を襲用してゐる點と、此の種の活字印本が僅か二種（本書と鴉鷺合戰物語）に過ぎない點とより、本書を古活字版に附載して茲に說く所以である。傳本の管見に入るものは圖書寮尊藏・久原文庫藏の二本のみである。（毎半葉十一行、毎行約二十字。字面の高さ約七寸八分。）卷末に左の刊記があり、同じく鴉鷺合戰物語も亦同人所刊の、同種活字印本である。（後記參照）なほ平假名本に凡て劔卷の附載がないのは、之が附載のない慶長十四年刊本を其の儘承けてゐるからである。

（慶安三年刊本刊記）慶安三年庚寅五月吉日荒木利兵衛開

附一、太平記賢愚抄（二版）

附一、太平記賢愚抄　　釋乾三撰　　四十卷　　二册

太平記賢愚抄は、天文十二年に釋乾三が著した全卷に亙る簡單なる語句の摘解であるが、太平記開版の流行に伴つて、慶長中期に兩度の片假名活字開版が行はれてゐる。初刻は慶長十二年醉德堂守三刊本（內閣文庫・成簣堂文庫・松井簡治博士・光藤珠夫氏・大久保忠寄舊藏・刈谷町立圖書館・野口通益舊藏・蓬左文庫・高木文庫・神田喜一郎氏藏）、再刻は慶長十五年刊本である。（前記參照）

附二、太平記鈔・音義

附二、太平記鈔（並びに）音義　　四十卷　　（共）十册

前記の太平記賢愚抄を詳しくした貌で、何人の著述か詳かではないが、或は要法寺の日性上人ではないかと言はれてゐる（前記參照）。高木文庫藏一本の墨書識語に「世雄房日雅述記」とあるのも其の關係を示すものであらうか。其の開版も賢愚抄に次いで慶長中期から行はれたものの如く、管見に入つた古活字印本は左の三種がある。之には鈔中の音義を附屬してゐる。

第[illegible]圖　第[illegible]圖

第一種本（慶長十五年刊本）（慶長十五年刊本太平記と同種活字を以て同時に印行せられし事安田文庫藏本を以て證せらる。單邊無界、十二行片假名交り、匡郭內縱七寸七分、橫五寸六分。）內閣文庫・阿波國文庫（不忍文庫舊藏、合四冊、音義二冊）・蓬左文庫（御本日記あり。音義とも十冊）・高木文庫（第一帙、七冊、音義缺）・安田文庫（原表紙存）藏（この種の闕逸り、第三十七卷第一葉が、廣島淺野文庫藏太平記物語（第二種本）原表紙裏張りに用ひられたるものあるを發見、本書が慶長中の印行たる傍證となるべし。）

第二種本（元和寛永中刊）（單邊、無界、十二行片假名交り、內閣本は假名を用ふ。）內閣文庫（褐色原表紙、同帖十二冊、閣庫藏本）藏

第三種本（元和寛永中刊）（單邊、無界、十二行片假名交り、匡郭內、縱七寸六分、橫五寸六分。）高木文庫藏（秩葉義之舊藏、其の音義の末に寺嶋寛寸二年板出本と墨書識語あるも、信ず可からざるに似たり。）

第[illegible]圖　（ホ）曾我物語

（ホ）曾我物語　　十二卷　　十二冊

曾我物語も平家物語以下の軍記物語と共に近世初期に流行し、其の刻本も頗る多い。然し、印行せられたものは何れも流布本系統のもので其の本文に大きな異同はない。最初の活字開版は慶長十年前後であらう。其の最初に現れたと認められるものは、（一）

第一二八圖

第一二九圖

第一三〇・一三一圖

組合せ式挿畫の構成

雙邊、無界、十行本、每行約十八字。匡郭內縱七寸五厘、橫五寸一分で、版式頗る古拙に、其の大型活字が慶長十年刊伏見版東鑑中に散見する平假名活字の樣式と著しく類似してゐるのは、其の刊行年時を推定する傍證となる。完本の管見に入るものなく、*安田文庫藏本（西莊文庫舊藏、卷六、十一、十二の三冊を缺き九冊存す。）の他に、高木文庫（卷九）・京都帝國大學（卷八）藏の二零本を見るのみである。卷十二を見ないので、刊記の有無は明かでないが、恐らく無刊記本であらうと思ふ。（二）之に次いで現れた一本は、慶長後半頃の開版と認む可き十一行本(二種)である。（每半葉十一行、每行約二十二字。字面の高さ約七寸六分。活字大型にして、他に同種活字の印本平治物語(第四種本)徒然草(十一行本)等頗る多し。之に異植版一種あり。）其の一は、安田文庫藏（卷一・五・七至十一の缺七冊、原表紙存す。）で、摺刷の具合から見てこの方が初版と認められる。其の二は、同種活字の異植版で、阿波國文庫藏の一本は頗る原裝を存する傳本（十二冊、褐色原表紙(大いさ縱九寸四分、橫六寸八分。)に雙邊有枠內に印刷せる原題簽(曾我物語第幾)存す。屋代弘賢・山崎美成舊藏。卷十二末に文政三年六月十二日比校了の弘賢朱筆識語あり。）であるが、なほ他に高木文庫藏の一本がある。（三）其の三は*靜嘉堂文庫に藏せられる慶元中刊十二行本（每行約二十一字。字面の高さ約七寸七分。）で、前記十一行本に比較して、活字は稍小さく、其の飜印と認む可きものである。（四）其の四は、元和寬永中の刊行と認められる挿畫刻本（每半葉十二行、每行約二十一字。字面の高さ約七寸三分。）である。(龍谷大學・藤井乙男博士（卷四・六・八缺九冊）・*高木文庫（卷一・六の二冊）・*大島雅太郎氏（十二冊）藏)前記十二行本に比し、活字の長さがつまつてゐて、書風に濶達なる趣きが缺けてゐる。本書に就いて特に注意す可きは、其の插畫である。一面の插畫が數箇の集合によつて構成せられ、自由に組合せて幾回

（五）寛永中刊十一行本の書影
[illegible]

も襲用してゐる。從つて挿畫は匡郭を以て括つて植版を行ひ、活字印本の挿畫にふさはしい方法を用ひたものである。（附錄集影參照。[illegible]中明らかに組合せたる[illegible]を伺ふを得。また高木文庫藏本と大島氏藏本とを比するに其の本文は同一なるも挿畫のみ組合せを異にする部分あり。かかる部分[illegible]も存するを知る。）（五）其の五は、寛永中の印行と認む可き小型の活字を以て摺刷を行つた一本で、（[illegible]半葉十一行、毎行約二十七・八字、字面の高さ約七寸九分。同種活字印本、寛永十七年刊左大將六百番歌合の[illegible]）之には異植字版も存し、（イ）[*]神宮文庫藏本（村井敬義納本。栗皮色原表紙を存し卷四・七・九の三冊、原題簽あり。）・正宗敦夫氏藏本（卷一・六・十一缺）の類と、（ロ）[*]安田文庫藏本・京都帝國大學藏本（卷四・十一缺十冊）・山田孝雄博士藏本の類とがある。其の何れが先行であるかは未詳である。又、この小型の活字を以て十三行に植版した一本（零本をみる）がある。曾我物語は早く寛永四年に安田十兵衛開版の整版本（無挿畫）が現はれ、流布整版本の直接の祖を爲した。卽ち、後の正保四年刊本初め整版本は皆之に基いてゐるのである。（仇討文學としての曾我物語（山岸徳平氏）參照。）

（へ）義經記　　八卷　　八冊

義經記は流布系統寫本の間にも亦、少からざる本文の異同があるが、其の初期の刻本たる活字印本中に於いては、元和中刊十一行本を祖本として順次之を承けて襍印してをり、唯第五種本のみ本文を略異にする。義經記の活字印本諸本を比照するに版式上からも、本文の上からも元和頃の十一行本が最初で、寛永十年刊本を除いては何れも無刊記本であるが、確實に慶長中の印行と認む可き版式を有するものはない。本文關係の

上より、寛永中刊十二行本(小字)の他は、何れも第一種本(十一行本)の飜印である事がわかる。其れ等は、流布の整版本に比して卷四の本文の如きは頗る異同がある。

第四四四圖

第一種本　元和中刊(十一行)本　毎半葉十一行、毎行約二十一字。字面の高さ約七寸六分。現存唯一の傳本は卷末を缺くも、完本は恐らく無刊記本なるべし。

安田文庫藏 卷一・八缺六冊。

第四四六圖

第二種本　元和寛永中刊(挿畫)本　毎半葉十二行、毎行約二十三字。字面の高さ約七寸六分。異植字一箇存す。

(イ)種　京都帝國大學*(丹緑本・丹表紙原裝)・安田文庫(丹緑本)・高木文庫(卷五丹緑本零本一冊)藏

第四四七圖

(ロ)種　東洋文庫*藏

第四四八圖

第三種本　寛永十年刊(十三行)本　毎半葉十三行、毎行約二十三字。字面の高さ約七寸七分。濁點・振假名附活字を混ず。卷末に寛永十年五月吉辰の刊記あり。

久原文庫*(二本)(一は完本八冊、二は卷一・四缺六冊)・松井簡治博士*(合四冊、卷八補寫)藏

(附記)寛永十年刊本に附訓句點附整版本あり(福井市立圖書館藏)卷末に寛永十癸酉五月吉日　西村又左衛門梓行の刊記あり。之最初の整版本にして、次いで繪入の寛永十二年刊本(整版本)あり。

第四四九圖

第四種本　寛永中刊(十二行)本　毎半葉十二行、毎行約二十八字。字面の高さ約七寸八分。曾我物語(五卷同種活字)と同本多し。

久原文庫(丹表紙原裝・八冊存す)*・刈谷町立圖書館・成簣堂文庫(卷三・六缺二冊)・野村八良氏(卷一至三三冊)藏

(五) 和歌・歌謠

(イ)八雲御抄

(イ)八雲御抄　六卷　七冊

八雲御抄の活字印本は無刊記本であるが、寛永二年刊の木記を有する整版本(足利學校遺蹟圖書館藏)に先行するものと認められるから元和末年か寛永初年頃の印行であらうと思ふ。小字を大字に交じへて雙行に植版を行ひ整備した版式を有する(每半葉十行、每行約二十二字。字面の高さ約七寸九分)。其の小字の部分は元和三年の識語を有する類字名所和歌集の小型活字と同種活字であり、この種の活字は寛永十七年刊狹衣左大將六百番歌合に至るまで歌書軍記物語等の印行に多く使用せられてゐる。本書の傳本の管見に入つたものは、圖書寮尋藏・京都帝國大學(二本)(一は七冊、一は存三冊、細川幽齋の傳本にて書入あり)・成簣堂文庫(酒竹文庫舊藏)・刈谷町立圖書館・谷村一太郎氏(第一・二冊)・佐々木信綱氏(卷三零本一冊)・春日政治氏([illegible])藏の諸本がある。

(ロ)萬葉集

無訓本

(ロ)萬葉集　二十卷　十冊

萬葉集の活字印本は、無訓・附訓の兩種がある。

無訓本(四周雙邊、[illegible]、每半葉八行、每行十八字。匡郭内、縱七寸四分、橫五寸三分。[illegible])は、家康の刊行せしめた伏見版の眞名木活字を襲用し、不足の文字を新雕して印行を遂げたものと認められる。然らば、本書が、林道春手校の鈔本(内閣文庫藏)を基にして植版を行つたものではあるまいかと推定を下

した校本萬葉集の考説（木村正辭博士説）は家康と道春との關係より見るも頗る意義あるものと言はねばならない。版式上、慶長後半期の印行であらう。

無訓本の傳本（十一本）

傳本の管見に入るものは東京帝國大學（青洲文庫舊藏、十冊）・大阪府立圖書館・金比羅宮圖書館（賀茂眞淵自筆書入本の巻一・二のみ。他は寛永二十年刊本。）・水戸彰考館（巻五至八缺、八冊）・東洋文庫（木村正辭舊藏）・久原文庫（二本）（一は「吉氏家藏」古印記あり、二は酒竹文庫舊藏）・*成簣堂文庫・高木文庫（巻一・二缺、十八冊）・大島雅太郎氏（秋葉義之舊藏）藏の十本及び東都書肆反町氏の許で一見した本（堀氏舊藏、冷泉家本にて校正し、綴次を改めしもの。）の十一本がある。

附訓本

附訓本は無訓本を底本とし、寂印成俊本の一傳本を以て校合讎印を行つたもので（校本萬葉集）、刊行年時は明確にし難いが、慶元中の印行であらう。片假名の附訓は別行に植版を行つてゐる。（四周雙邊、無界、毎半葉八行、毎行十八字、匡郭内縱七寸三分半、横五寸五分。）寛永二十年刊整版本は本書に據つて開版を行つたものである。古くは無訓本に比して附訓本は珍しいものとされたが、傳本の管見に入つたものは、反つて本書の方が多數で、帝國圖書館（榊原芳野舊藏、十冊）・東京帝國大學（二本）（一は舊南葵文庫藏、小中村清矩舊藏、二は森鷗外博士舊藏）・京都帝國大學文學部研究室（巻四缺、十九冊）・大谷大學（二十冊）・無窮會文庫（十九冊、中院家舊藏）・東洋文庫（木村正辭舊藏）・*成簣堂文庫（二本）（一は二十冊完本、二は首冊十葉整版本補配、五・六巻缺、九冊）・高木文庫（巻三缺、秋葉義之舊藏）・大島雅太郎氏・春日政治氏（巻一至四の二冊、市岡孟彦書入本）・佐々木信綱博士（巻六・七零本二冊）藏の十三本に達する。

附訓本の傳本（十三本）

（ハ）新古今和歌集

（ハ）新古今和歌集　藤原良經等奉勅撰　二十卷　四冊

歌集の類は近世初期に於いても鈔寫に據つて流傳する事が多く、古今和歌集の如きも

傳嵯峨本の整版本が元和寛永中に開版せられたのみである。其の中にあつて、新古今和歌集のみは、兩種の活字印本が存し、何れも麗はしい版式を有するものである。

兩種の刊本

其の(一)は慶元中の印行と認む可きもの、(每半葉十一行平假名交り、每行約二十字、字面の高さ約七寸。活字書體は筆勢稍太く、光悅の亞流を承く。)卷首に假名序を附するのみで、眞名序無く、應永十九年に定家卿自筆本を書寫した仁和寺宮本に基いた一本を底本として植版を行つたものである。完本の管見に入るものは高木文庫藏の一本のみであつて頗る原裝を存する。(丹表紙、原題簽存す。尾張藩舊藏)他には安田文庫藏の零本(卷十三至十五)一冊がある。其の(二)は元和・寛永中の印行と認む可く、前記一本とは全く活字の樣式を異にし、前記一本よりも更に流麗なる小型活字を用ひてゐる。本書には卷首に眞名序をも存する。(每半葉十行平假名交り、每行約二十五字、字面の高さ約七寸五分。眞名序の活字は行書體にして漢字假名交りの部分と同一なり。)安田文庫(二冊、中缺、丹表紙存す。)・東洋文庫(合二冊、丹表紙、卷一首十二葉補寫、全卷黃門入道宗世遺墨之本を以て校正書入を行ひ、上卷の部分には撰者名を頭注せり。)の他には、中島仁之助氏(卷五の半より卷十、卷十一至十四の二冊)藏の三本がある。

(二)芳野參詣

(二)芳野參詣　一卷　一冊

文祿三年二月豐臣秀吉が吉野へ花見に登つた時の詠歌を錄し、二月廿七日登山の御坂の上の茶屋で詠じた秀吉以下十二名の詠歌各一首、並びに同廿九日歌會に於いて花の歌・花ちらさぬ風・瀧の上の花・神の前の花・花の祝の歌題にて各々の詠じた五首の歌を收めてゐる。五首の歌の方は秀吉・秀次等二十名の中、家康・秀康・利家・政宗等の武將

が多い。

本書は寛永十七年刊左大將家六百番歌合等と同種の小型の活字を襲用してゐるから、寛永後期の開版と認められる。詞書に敬語を用ひてゐる點から見て、執筆の傳へた本に據つて後に上梓したものであらう。（毎半葉十行、毎行約二十五字。字面の高さ約七寸二分。）傳本の管見に入るものは安田文庫藏の一本のみである。寫本として傳はるものも罕である。

(ホ)見唉和歌集　第百九九圖

(ホ)見唉和歌集　一卷　一冊

本書は倫理女訓の和歌を輯めたもので、（例へば卷頭の數首を抄出すると、「人はまづ仁義れいち信たいしくて慈悲正ぢきをほんとあるべし」「よしあしとおつかひ草やつのくにのなにはの事も身のほどをしれ」「よこしまな思ひよりけるしゆごどのはけらいはうとみくにそやふる」）慶長中の刊行と認む可き光悦書風の影響を蒙つた頗る大型の活字を用ひ、（連歌至寶抄、方丈記（十行本）同種活字）毎半葉九行、毎行約十六字。字面の高さ約六寸六分。其の原表紙裏張りに慶長九年刊大廣益會玉篇の殘葉を使用してゐる事も注意せられる。東洋文庫に一本を見るのみである。

(ヘ)百人一首

(ヘ)百人一首　一卷　一帖（一冊）　附、百人一首宗祇抄（小倉山莊色紙和歌）

百人一首嵯峨本二種に就いては前に嵯峨本の條に述べたから、茲には省略して、百人一首宗祇抄に就いて述べる。

百人一首宗祇抄

百人一首宗祇抄（小倉山莊色紙和歌）　一卷　一冊

百人一首宗祇抄は、卷頭に「小倉山莊色紙和歌」とある。宗祇が東野州の說をうけて之を

甚こし、明應二年に撰んだものである。元和寛永中の印行と認む可く之に兩種の異植版が存する。其の刊行の前後は未詳であるが、(イ)種本の方が活字磨滅の程度等より見て先行ではあるまいかと思ふ。（每半葉十二行平假名交り。每行約二十二字。字面の高さ約七寸二分。）

(イ)成簣堂文庫（[illegible]より）・久原文庫・高木文庫（岡部氏舊藏）

(ロ)神宮文庫（村井敬義舊藏本、褐色原表紙存す。原本大いさ縱九寸一分、横六寸五分半。）・安田文庫藏

(ト)自讃歌注　　飯尾宗祇撰　　一卷　　一冊

宗祇の跋文に據れば文明十六年の撰述に係り、後鳥羽院を始め新古今和歌集の十七歌人の自讃歌各十首宛を集めた自讃歌に注解を施したものである。小型の活字を用ひ、（每半葉十一行、每行約二十一字。字面の高さ約七寸。）卷末に「寛永十年五月吉辰」の刊記がある。傳本極めて罕に、高木文庫藏の一本の他、金澤武藤元信氏の遺書中に一本（原表紙附二冊）がある。

(チ)左大將家六百番歌合　　八卷　　八冊

建久四年左大將藤原良經邸に於いて行はれた歌合、判者俊成。其の俊成の判に反對して顯昭の六百番陳狀（[illegible]）が出てゐる。

本書は寛永中に同種活字を以て三度も重版せられた。原題簽は何れも「六百番歌合」とある。其の中に寛永十七年の刊記を有する一本があるが、他の兩種の無刊記本との先後は、其の版式を比較するに、十一行植版本が初版、寛永十七年刊十二行植版本は再版、十

二行植版本は第三版の關係に立つものであらう。然し、其の時差は極めて少いものであると思ふ。極めて小型の活字で、多數の歌書軍記物語等の開版に使用されてゐる事は屢々述べた所である。

第四五九圖

(イ)第一種本（毎半葉十一行平假名交り。毎行約二十六字。字面の高さ約七寸三分。）內閣文庫・神宮文庫（宮崎文庫本合四册）・岩瀨文庫・久原文庫（二本）（一は丹表紙原裝。）高木文庫・谷村一太郎氏（丹表紙原裝。）藏

第四六〇圖

(ロ)第二種本(寬永十七年刊)（毎半葉十二行。毎行字數・高さ等略第一種本に同じ。卷末に「寬永十七年九月吉辰」の刊記あり。）京都帝國大學・東洋文庫（異本校正書入あり。）・久原文庫（合三册）藏

第四六一圖

(ハ)第三種本（毎半葉十二行。毎行字數、高さ等第二種本と同一。）神宮文庫・東京文理科大學・成簣堂文庫（賜蘆文庫舊藏）・正宗敦夫氏・西下經一氏藏

承應元年村上平樂寺版整版本(石崎文庫筆者等藏)は、活字印本に基く飜印であるが、十行本であるから、覆刻本ではない。

(リ)勅撰名所和歌抄出

(リ)勅撰名所和歌抄出　二卷　二册

本書に附刻した原識語に據れば、永正三年宗碩の撰述に係り、勅撰集中の名所の歌を類字分類したものであつて、類字名所和歌集は本書を更に纂補した貌を爲してゐる類字名所和歌集と同種の活字印本で、兩書共に活字の磨滅が少しも見えないから、新雕の活字を以て開版したものであらう。是が寬永後期寬永十七年刊左大將家六百番歌

合等の如く其の印刷面に磨滅度の著しく現れる様になるまで多くの軍記物語・歌書等の印刷に襲用せられたものである。

本書の傳本は極めて少く、成簣堂文庫(二冊)と久原文庫(四冊)とに各一本を見るのみである。(毎半葉十行、平假名交り、毎行一首二十數字、左右雙邊、上層に古歌枕撰集名、下部に作者名を注記す。傍訓・假名のみ大字の鎌名活字を用ふ。字面の高さ約七寸七分。)　第四八圖

(ヌ)類字名所和歌集　　里村昌琢撰　　七卷　　八冊　　(ヌ)第十六圖 次頁

前記勅撰名所和歌抄出等の例に據つて、之を完備したもの。二十一代集中の名所の歌をいろは分にして、更に其の細分を國分けにしてゐる。卷末に附刻した「此一部者互見廿一代集數多之本而抄出名所和歌者也唯愚暗所撰恐有舛謬猶後見之輩勿憚改而已　元和三暦仲秋下旬　法橋昌琢判」の識語を刊語と解するに就いては若干の疑問を抱いた事もあるが、(高木文庫古活字版目録解題)其の後、駿河御讓本の研究に據り、尾州家舊藏の類字名所和歌集活字印本(慶長古活字印本年に刊行せられて現に岩崎文庫に藏せらる)が、元和五年以前に敬公の購入に係る事が明らかとなつたので、(慶長古活字本の研究、第三十四卷、駿河御讓本第四七頁參照)この種の活字は元和から寛永の末年まで盛んに軍記物語・歌書等の印行に襲用せられた事を知るに至つたのである。(第四八圖)本書を寛永八年に覆刻した整版本(東京文理科大學等藏)には右の刊語中の元和三年を寛永八年に改めて刊行してゐるから、之に據つて寛永八年刊本の開版者も亦刊語と認めてゐた事が判り、元和三年の識語は卽ち、刊語である事の傍證ともなる。傳本に據り、卷首に二十一代集の

歌表（整版）を附屬してゐるものがある。本書は比較的傳本多く、且つ原題簽をも存する保存よきものが少くない。又、其の中には兩三種の異植字版があり、(1)內閣文庫・東洋文庫・刈谷町立圖書館藏本、(2)山口縣立圖書館・成簣堂文庫藏本、(3)前二者の中間に位する如き靜嘉堂文庫藏本の類がある。（今遽かに再調を行ひ難きものもありて管見に入りたるも其の種別を明らかになし得ざるもの若干あり。）

第四六〇圖
第四六四圖

（每半葉十一行、每行歌一首を植版し、撰集名・作者名の注記等、約撰名所和歌抄出と同じ。字面の高さ約八寸。）

(1)內閣文庫 八冊・刈谷町立圖書館・東洋文庫 四・五卷合六冊 藏

(2)山口縣立圖書館・岩瀨文庫（御本印記あり、松平君山手澤。）[*]・成簣堂文庫 合三冊 藏

(3)靜嘉堂文庫・安田文庫[*]・中島仁之助氏藏

(ル)隨葉集
第四七〇圖

(ル)隨葉集　　三卷　　三冊

詠歌作法に資する爲、四季・戀・名所・神祇等に分つて證歌を集めたもので、編者は未詳であるが、連歌師流の所爲であらうと思はれる。（黑川眞賴說）本書も左大將家六百番歌合と同種活字印本であるから、寬永後期の印行であらう。（每半葉十一行、每行二十六字。字面の高さ約七寸二分。目次のみ大型活字を用ふ。）管見に入るものは內閣文庫藏の一本（褐色原表紙存す。明治十五年閣庫購入本。）のみであるが、其の奧に、本書の舊藏者は塙氏であると覺しく、黑川眞賴が本書に就いて報答した自筆返書が添へてある。其の文中に本書と世諺問答との活字に同時のものがあると言ふのは略正しいが、（世諺問答は阿波國文庫に現存す。）共に慶長板也と稱するは誤りである。整版本は寬永十四年刊（小本）が最も古い。

內閣文庫藏本
添附の黑川眞
賴手簡

（ヲ）分葉抄（第四六六圖）

（ワ）無言抄（第四六七圖）

（ヲ）分葉抄　　飯尾宗祇撰　　一卷　　一冊

同語にして意義を異にするもの、及び類似の語九十五語に對し宗祇が注解を加へたもので、歌林山かづら・拾芥愚抄・和歌詞證歌集等の異稱を以て傳へられてゐるものがある。分葉と題する傳本は極めて少く、古鈔本は内閣文庫（和學講談所舊藏）に一本を見る。活字印本としては、刈谷町立圖書館藏本（野口道直舊藏）が管見に入つた唯一の傳本である。元和寛永中の印行であらう。（毎半葉十行、每行約十八字。字面の高さ約六寸六分。）

（ワ）無言抄　　釋應其撰　　三卷　　三冊

無言抄には應其上人（木食）自筆本等も殘存してゐるが、（[illegible]）慶元中頗る行はれて古活字印本三種の他に、元和九年源太郎刊整版本（東京文理大學藏）も現れてゐる。左の第一種本は、第二種本に比して稍長細めの樣式を有する活字で、慶長中の刊行と認められ、慶長三年紹巴・同年空性法親王・同四年紹巴の跋文を整版にて附刻してゐる。（毎半葉十一行、每行約十七字。字面の高さ約七寸。）第二種本は初版と再版との兩版があり、其の活字は徒然草十一行本と同じ樣式を有し、慶長中の印行と認められる。之には慶長八年應其の跋が加はつてゐる。（毎半葉十一行、每行約十九字。字面の高さ約七寸一分。）

第一種本

内閣文庫（[illegible]）・帝國圖書館（[illegible]）・秋田縣立圖書館（[illegible]）・京都帝國大學（[illegible]）・成簣堂文庫（[illegible]）藏

第四六八圖
第四六九圖

第二種本　(イ)初版　東洋文庫・杉浦三郎兵衛氏藏*
　　　　　(ロ)再版　高木文庫藏*

(カ)匠材集

(カ)匠材集　四卷　四冊

無言抄の一半と同じく連歌の作法に具へる字書で、用語をいろは分に分類して之に略解を加へたものである。從つて携帶用として小型の横本に仕立てられた。卷末に慶長二年の紹巴の跋文を附刻してゐる。元和寛永中の開版と認む可き兩種(四版)の活字印本が存する。第一種本(三版)は文字纖細、第二種本は稍肉太の書體である。寛永十五年には整版本(横小形)が刊行せられてゐるが、慶安四年の整版本(横小本)が最も流通してゐる。

第四七〇圖
第四七一圖
第四七二圖

第一種本　三版の中、何れが先行なるや詳かならず。每半葉十三行平假名交り。每行約十一字。字面の高さ約三寸七分。

(イ)種　東洋文庫*缺、冊　三　藏

(ロ)種　龍谷大學卷四、寛永十五年刊整版補配・岩瀬文庫藏

(ハ)種　京都帝國大學卷四缺、丹表紙原裝・久原文庫*「天滿之莊西善寺」藏印、四冊・成簣堂文庫丹表紙原裝四冊藏

第二種本　每半葉十四行平假名交り。每行約十一字。字面の高さ約三寸六分。見出しの文字も肉太なり。　高木文庫*原裝、原題簽存す。叡山眞如藏舊藏。藏

(ヨ)藻鹽草

(ヨ)藻鹽草　二十卷　十冊

匠材集より一層内容の充實した貌のもので、天象部以下の綱目に分ち、語彙に略解を加

へ、時に證歌などを掲げてゐる。八雲御抄と同種の活字を用ひ、大小二種を混植してゐる。寛永初年の開版であらう。之に兩種の異植版が存する。寛永末期頃には覆刻整版本も現れてゐる。（內閣文庫・和歌山師範（二本）・神宮文庫（二本）等藏）其の覆刻は頗る精刻で、間々活字印本と誤認せられてゐるが、原の活字印本には存在しない版心が整版本には加へられてゐるので、識別せられる。この整版本を後に寛文九年の刊記を追刻して印行したものが間々あつて、（內閣文庫藏）之にも又後に其の刊記の一部を削去したもの（靜嘉堂文庫藏等がある

第四七四圖

（イ）每半葉十行、每行約二十一字。字面の高さ約七寸八分。

（ロ）[illegible]の中に入れられたるも、何なるか未詳なり。

京都帝國大學・山口縣立圖書館・名古屋市立圖書館・東大寺佛教圖書館藏

神宮文庫（二本）（一は村井敬義納本、藍色原表紙を存す。一は宇治文庫の印あり。褐色原表紙を存す）・足利學校遺蹟圖書館（原裝、丹表紙）・正宗敦夫氏藏

（タ）連歌至寶抄　　里村紹巴撰　　一卷　　一冊

連歌至寶抄は豐臣秀吉の爲に紹巴が連歌の入門を簡要に說いたものである。慶長中に印行せられたもの兩種と元和寛永中印行の小型の橫本とがあり、整版としても寛永中に寛永四年正月刊（大本）寛永九年刊（[illegible]博士藏）寛永十一年中野道伴刊（小本）の三本が現れてゐる。以て本書流行の狀を察する事が出來る。

第四七五圖（タ）連歌至寶抄

第一種本（慶長中刊。每半葉十行、每行約十七八字。字面の高さ約七寸一分。[illegible]）　安田文庫藏

第四七六圖
第四七七圖
第四七八圖　(レ)發句帳
第四七九圖
第四八〇圖
(ソ)新撰犬筑波集
四種の刊本

第二種本　（慶長中刊。毎半葉十一行、毎行約二十字。字面の高さ約七寸四分。無言抄第一種本と同種活字印本。）　安田文庫・高木文庫藏*

第三種本　（元和寛永中刊。毎半葉十三行。毎行約十一字。字面の高さ約三寸七分。横小型本。）　久原文庫藏*

(レ)發句帳　四卷　四冊

發句帳には其の內容を異にするものが種々あるが、本書は、春夏秋冬の四卷より成り、宗祇・兼載・心敬・宗長・宗碩以下昌休・昌叱・紹巴等室町中期より慶元中の作者の發句を類題に集めたもので、寛永中の刊行に係る三種の傳本がある。其の一は圖書寮尊藏・安田文庫*・大島雅太郎氏（春夏二冊）藏の三本と、同種活字異植版本（安田文庫藏*　夏部一冊）との二種があり、（同種活字寛永中に多し。(後記參照)十二行平假名交り、毎行約十五字。別に下部に作者名を註す。字面の高さ約七寸、卷頭の目次並びに卷中の題名のみ大型の眞名活字を用ふ。）其の二は、前記の一本より稍活字が長細めで、榮花物語と同種活字、行數等は全く同一で、字面の高さ約六寸（肩書約一寸）之には褐色原表紙を存する傳本が安田文庫*にある。　榱齋の書目に「寛永十九年八月吉辰」の刊記ある活字印本を所收してゐるが、未だ管見に入らない。

(ソ)新撰犬筑波集　山崎宗鑑撰　一卷　一冊

新撰犬筑波集は撰者宗鑑が數種の抄本を殘したが爲に、諸種の異本が流傳し、江戸初期の刊本に至つて、犬筑波なる書名が冠せられる樣になつた。（頴原退藏氏「犬筑波考」（書物の趣味（後、俳諧史の研究、所載）））古活字印本四種の中、其の本文上よりは一は慶長中刊（大本）、二は慶長中刊（十二行本）・元和・寛永中刊（中本）・同（小本）の二類となるが、活字の種類は四種とも別種のものである。　寛永

十四年の整版本（北田彦三郎氏舊藏）は(二)類をうけたものであるから、活字印本は凡て其れ以前の刊本であらう。

第一種本（毎半葉十行、毎行約十六字。香表、十行本と草子本同種。字面の高さ約六寸七分。）　(イ)種　竹冷文庫舊藏・北田彦三郎氏舊藏

第二種本（毎半葉十二行、毎行約十六字。活字の様式十一行本と雙紙草子と同し。字面の高さ約六寸。第三種本以下整版本等本書より出づ。）　(ロ)種　伊藤爲吉氏（香色原表紙、原本の大いさ縦八寸七分半横六寸八分半。）藏　安田文庫藏

第三種本（毎半葉八行、毎行約十七字。）　竹冷文庫舊藏

第四種本（毎半葉十行、毎行約十八字。）　竹冷文庫舊藏

(ツ)四生の歌合　四卷　二冊

鳥獸蟲魚四生の歌合は、丹綠插畫の活字印本が東洋文庫（岩崎文庫舊藏二冊）に存する。下段に描線の活氣ある插畫を刻し、上部に和歌並判の詞を植版してゐる。（下部まで一行二十四字詰）活字は肉太の稍稚拙なる様式を有する比較的小型（濁點・振假名附きのもあり、返點・送假名はない）に屬するものである。恐らく元和寛永中の印行であらう。（稀書複製會刊行）缺本は帝國圖書館なる、

(ネ)花傳書　八卷　八冊

（けだし四の一冊、内閣文庫藏色なし。）藏の一本がある。

觀世元清（世阿彌）撰。八卷本の花傳書に就いては、所謂世阿彌十六部集の中の花傳書と異るが爲に、吉田東伍博士等は寛文五年の刻本を用ひて僞作と疑つた。けれども安田

文庫所藏の、少くとも室町末期を降らぬ書寫と確認せられる古寫本の存在に據つても、右の所説には再考の餘地があつて、世阿彌の著述ではないとしても古い傳書である。其れ等に就いての詳論は他の機會に讓るが、慶元中に花傳書が數度活字開版流行してゐるのを見ても、其の疑問の一端は解けると思ふ。

古活字印本は活字の様式の差異に據つて大別して兩種、更に其の各々の異植版を分つと五種に達する。　第二種本(イ)を寛永頃に覆刻した整版本も行はれてゐる。

第一種本は活字の書體極めて麗しく、版式も整ひ、花傳書中の最古刻本と認められる。之には再版があり(活字磨滅度に據り明確に識別し得)十二行平假名交り、毎行約二十字。字面の高さ約七寸四分。笛の圖、人形の圖等は整版を部分的に使用せり。以下の古活字印本諸本は皆本書を基としてゐる。

之を安田文庫藏古寫本と比較すると、本文は殆ど同一であるが、古寫本に片假名を併用してゐる部分をも平假名に改めて植版を行ひ、又、笛の九圖等も順序が異つてゐて、殊に其の圖說(整版)の文字に誤刻等も存する。　又古寫本の各冊末に存する「世阿彌」の署名を略してあり、卷の順序も異つてゐる。　古寫本の卷の順序も必しも宗とす可きものとも認められないが、他の後刻本との相違をも併せて表記すると左の如くとなる。　因みに寛文五年刊本(卷末に寛文五年乙巳九月吉日平野屋佐兵衛開板」の刊記あり。)は古活字印本諸本を直接の祖とせず、古寫本系統のものを直接底本としてゐる様である。　笛の圖の順なども古寫本と一致し、卷末「世あ

こ」の署名を略してゐない。併し安田文庫藏の古寫本を直接底本として刊行したものではない事は兩者の間に若干の文字の異同が存在し、古寫本の本文の方が遙かに優れてゐるのに據つても明らかである。

各々の比較は同

第一種本卷題	古活字印本(四種)・覆古活字整版本・寛文五年刊本	安田文庫藏古寫本
(一)夫申樂延年の事わざ	同上	一
(二)調子の次第の事	同	二
(三)抑讓といつは	同	三
(四)夫讓といつは	同	五
(五)夫能と云事	同	六
(六)物まねのしな〳〵	同	八
(七)よろつ嘩のしな〳〵	同	七
(八)先稽古の條々	同	四

現存諸本の種別

第一種本

第四六七圖

(イ)陽明文庫（補色原表紙原題簽存す）・京都府立圖書館・安田文庫（陽明文庫本と同じく原題簽存す）同藏

第四六八圖

(ロ)安田文庫藏

第二種本（元和寛永中刊。第一種本に比し活字の體式稍粗く、前出活字印本に基き後刷せる匡郭・界線等も凡て断離なり。行詰は第一種本と同じ。）

第四六九圖

(イ)安田文庫・久原文庫（原題簽藍色原表紙存す。もと、い[illegible]さ縦九寸五分横六寸九分）藏（覆刻整版本にて本書を底本とす。本書にはなき[illegible]）

田文庫・高木文庫藏）

（ロ）刈谷町立圖書館藏（（イ）（ロ）（ハ）の三種中、其の印行の前後は未詳なり。）

（ハ）*東洋文庫（合二冊）藏

第四九〇圖

（ナ）謠本

嵯峨本の條（四〇五頁）に詳述したから茲には略する。嵯峨本と嵯峨本以前の刊行と目す可き一本（前記四〇〇頁）の他には古活字印本は存在しない。

（ラ）久世舞

嵯峨本の條（四六八頁）を參照せられたい。久世舞としては嵯峨本以外には古活字印本は存在しない。

（ム）謠抄

謠抄の撰述に就いては篁五百里氏の言繼卿記に據る研究があり、諸刻本に關しては齋藤芳之助氏の調査も發表せられてゐるが（昭和三・四年國語と國文學）其の刊行に就いてはなほ判然としない點もある樣である。齋藤氏の掲げられた諸本は其の所在を少しも記載せず、又其の分類も穩當を缺く場合があると思ふので、茲には、管見に入つた安田文庫其の他の藏本に據つて、卑見を述べる事とする。齋藤氏の掲げた種別の中楷書體（有枠本）十番綴（百番本）の一種は未だ管見に入らない。

(一)守清刊本

(一)守清刊本(百二番十冊)

本書、大原御幸の末に「守清梓刋」とある刊記の守清に就いては未詳であるが、之でも闡明されること、本書刊行の事情も明かになるかと思ふ。然し、本書は其の版式より見て、恐らく多くの謠抄刻本中、最も古いものであらう。草書體の平假名活字と楷書體の片假名活字とを併用し、同一葉内に數行宛、多きは一二葉宛、交互に植版を行つてゐる。かゝる例は古活字印本中にも極めて罕で、他に兩體の假名を混用したものには、伏見版東鑑及び其の覆刻たる古活字印本の各巻中に平假名活字が若干散見するのと慶長九年如庵宗乾刊古活字印本徒然草壽命院抄の巻頭の數葉のみ注解は片假名を用ひ本文に平假名交りの活字を混用してゐるものが存するに過ぎず、然も以上の兩書とも極めて様式の拙い平假名活字を用ひてゐるが、本書の活字は汎ゆる平假名活字中最も書風の麗しい種類のものである點が特に注意せられる。但し書風は光悦流ではない。其の平假名活字は、慶長十一年以前に刊行せられた六行十五字の小型の謠本（[illegible]原[illegible]文庫[illegible]）に使用した活字と同種であるから、同類の著書の開版に便宜之を襲用したものであらう。かゝる點からも本書の刊梓が慶長後半期早々行はれたものと言ひ得ると思ふ。（四周雙邊、[illegible]界、半葉十一行、[illegible]行平[illegible]名十八字、片假名は小型にして[illegible]不等。抄解一字下げ植版。）

傳本の管見に入るものは安田文庫藏の一本のみである。（匡郭[illegible]七寸一分五[illegible]五寸六分[illegible]）

む。十番宛（十一番綴のもの二册あり）一册に仕立て、欵冬色の表紙には「謡抄（曲目十番）訛々居藏」の墨書があり、全册總裏打を施し、後の修補改裝を經てゐる。本の大いさ、縱八寸九分、横六寸六分五厘。「平出氏書室記」印記を捺す。

曲目は左の如くであつて、總數百二番は、言繼卿記所載の曲目と一致する。＊印は百一番本になき曲目。

なほ、謡抄の準據とした本文の流派を金春とする齋藤氏の說は穩當と認められる。

(1) 高砂　老松　難波　放生川　吳羽　金札*　御裳濯*　養老　白樂天　矢卓鴨　弓八幡（十一番）

(2) 鵜鵜羽　葛城　樺*　誓願寺*　龍田　羽衣*　杜若*　三輪　當麻*　蟹*（十番）

(3) 短册忠度　朝長　眞盛　八嶋　田村　兼平　清經　通盛　賴政　藤戸（十番）

(4) 湯谷　松風　井筒　源氏供養　浮舟　玉葛　姨棄　關寺小町　檜垣　卒塔婆小町（十番）

(5) 江口　野宮　定家　軒端梅　芭蕉　二人靜　楊貴妃　釆女　千手重衡　夕顏（十番）

(6) 錦木　舟橋　松虫　鳥頭　女郎花　天鼓　通小町　邯鄲　阿漕　鵜（十番）

(7) 籠太鼓　花筐　斑女　東岸居士　柏崎　富士太鼓　百萬　隅田川　三井寺　自然居士（十番）

(8) 道明寺　西行櫻　遊行柳　融　小鹽　小督　盛久　俊寬　石橋*　大原御幸（十番）

(9) 項羽　山姥　春日龍神　張良　殺生石　皇帝　王昭君　安宅　蟻通　三咲*　歌占*（十一番）

(10) 紅葉狩　舟辨慶　善界　鞍馬天狗　大會　道成寺　鵜飼　葵上　安達原　金輪（十番）

（二）慶元中刊單邊十二行本

（二）慶元中刊單邊十二行本　四周單邊、十二行片假名交り。匡郭内、縱七寸六分、横五寸七分。この種の完本は蓬左文庫に藏せられ、各册末に「末岡市郎右衞門」の識語がある　一百番の曲目は左の如くである

(1) 高砂　老松　難波　放生川　吳服　金札　養老　御裳濯　白樂天　矢卓鴨

(2) 鵜鵜羽　葛城　樺　誓願寺　龍田　羽衣　杜若　三輪　當麻　蟹

(3)藤戸　頼政　清経　通盛　兼平　田村　八嶋　實盛　朝長　短冊忠度
(4)卒都婆小町　檜垣　關寺小町　姨棄　玉鬘　浮舟　源氏供養　井筒　松風　湯谷
(5)夕顔　千手重衡　采女　楊貴妃　二人靜　芭蕉　軒端梅　定家　野宮　江口
(6)鵺　阿漕　邯鄲　通小町　天鼓　女郎花　鳥頭　松虫　弓八幡　錦木
(7)隅田川　百萬　自然居士　三井寺　富士太鼓　柏崎　東岸居士　斑女　花筐　籠太鼓
(8)大原御幸　石橋　俊寛　盛久　小督　小鹽　融　遊行柳　西行櫻　道明寺
(9)項羽　山姥　春日龍神　張良　殺生石　皇帝　昭君　安宅　蟻通　三笑
(10)紅葉狩　船辨慶　せカイ　鞍馬天狗　大會　道成寺　鵜飼　アフヒノウヘ　安達原　金輪

守清刊本(二百二番)より舟橋歌占の二番を去つて一百番としたものである。守清刊本(1)中の弓八幡が本書では(6)に編入せられてゐる他に一冊(十番)中の合綴曲目の異同はない。京都兩足院藏の一本は(8)の一冊を缺く九冊本である。

(三)台林刊本(百二番十冊)

守清刊本を飜刻したと思はれる一本であつて、其の曲目内容は全く同一、一冊中の綴込順に若干の差異が生ずるのは、版心に「曲目の第一字」(丁數)とのみあつて、通算丁數が無いから、當然であらうと思ふ。（無邊、無界、每半葉九行、[illegible]假名交り、[illegible]一字下げ、[illegible]約七寸[illegible]）安田文庫に完本を藏する。（[illegible]表紙[illegible]、曲目を[illegible]せる題簽[illegible]大いさ縦九寸三分、横七寸。）左記の曲目の卷末に台林刊行等の刊記があるが、台林は慶長二十年より元和二年春まで家康の駿河版刊行に際し、京より下つて事に從つ

た工匠の隨一であるから、本書は恐らく其の歸洛後の元和年間の印行であると思ふ。本書の活字の樣式も元和以後寛永初年頃のものと認められるのである。

巻末に台林刊行の刊記ある曲目。　(1)難波　(2)權・三輪・蟹　(4)浮舟・姨棄　(6)鵜　(10)鵜飼　(以上八番)

巻末に台林刊の刊記ある曲目。　(8)大原御幸　(10)舟辨慶　(以上二番)

本書の傳本は他に京都帝國大學附屬圖書館(零本一冊(1))に藏せられてゐるのみである。

(四)慶長中刊無邊十行本

(四)慶長中刊無邊十行本(色變り料紙摺、十番綴本)

この種のものは未だ完本に接しない。管見に入つたものは大阪府立圖書館藏の零本三冊と中島仁之助氏藏の零本一冊とである　具引き色變りの料紙を用ひ、活字の樣式は慶長十四年以前刊寶物集と同種であらうと思はれる。(每半葉無邊、無界、十行片假名交り。字面の高さ約六寸二分五厘。)十番綴に仕立られてゐて、大阪府立圖書館藏本(住友家舊藏)は

(1)高砂　八嶋　江口　盛久　熊谷　天鼓　櫻川　三輪　鞍馬天狗　融
(2)難波　田村　軒端梅　景清　松風　藤戸　百萬　小鹽　せかい　蟹
(3)志賀　清經　芭蕉　安達ヶ原　檜垣　松虫　斑女　富士太鼓　誓願寺　張良

中島氏藏本は(1)一冊である　右の曲目に據つて見ると後の整版本(其の最古刻にて覆活字印本と認む可きもの(京都帝國大學藏))は本書から出てゐるのである。

(五)慶長中刊雙邊十行本

(五)慶長中刊雙邊十行本(五番綴百一番本、二十冊)

本書は安田文庫の一本（四周雙邊、無界、毎半葉十行、片假名交り。匡郭内、縦七寸五分五厘、横六寸六分。注解一字下げ植版。版心「曲目丁數」。黒小口。頗る原本の趣きを存し、黄冬色原表紙に「謡之巻　百番内廿　觀音院盛尊文」とある識語、及び各冊の見返しの曲目等は盛尊自筆。原本の大いさ、縦九寸五分、横六寸六分。）と帝國圖書館藏本（原表紙附、二十冊、「南谷」黒印等あり）とがある。

本書は其の版式より見ても慶長中の開版なるは明確であるが、安田文庫藏本は之を保存する本箱の裏に左の如き墨書があつて、當時のものである事は疑ひないから、其の箱が若し原來謠抄に附屬するものでないとしても、本書の開版年時を推定する一助とするに足りると思ふ。

往生院

慶長十貳年丁未霜月廿一日盛尊

觀音院

毎冊五番綴りとなつてゐるが、(1)高砂・志賀・難波・玉井・吳服の五番綴の卷頭に「謠注甲集上」、又、(2)老松・白樂天・放生川・弓八幡・養老の五番綴の卷頭に同じく「謠注甲集下」との記號を植版してあるのに據れば、開版者當初の意圖は他の十八册も各々十番宛、乙丙等の記號のもとに上下二册に組織して續刊するつもりであつたと思ふ。或はかゝる意圖の下に編輯してあつた寫本を底本として植版したものであるかもしれないが、十番綴を二分してゐる點より見れば、本書の如き五番綴のものは十番綴より生れ出た新しい編輯

の體裁と考へられる。其の總曲目は百一番であるが、之を守清刊本及び台林刊本と比すると十餘番の出入がある。卽ち、守清本及び台林本に在つて本書に無いものが十一番、其の代り新たに編入せられた曲目が十番ある。其の十番の注解は言繼卿記の謠抄撰述の曲目には見えぬものであるが、本書出版の際書下したものではなくて、やはり前の百二番と共時に編述せられてゐたものであらう。

守清本及台林本に在りて本書に無き曲目　(1)金札・御裳濯　(2)權・誓願寺・羽衣・杜若・當麻・蟇　(8)石橋　(10)三咲・歌占（以上十一番）

但し帝國圖書館藏本は(2)の權至當麻の五番一冊ありて、其の代り次記(5)田村以下五番の一冊なし。

新に編入の曲目　(1)志賀・玉井　(3)右近　(7)佛原　(9)鸚鵡小町　(10)雲林院　(12)櫻川　(13)梅枝　(15)木曾・景淸（以上十番）

次に甲集上以外の曲目組合せを掲げると次の如くである　*印は守清本等に無き曲目

(3)鸕鷀羽　矢卓鴨　右近*　邯鄲　皇帝
(4)八島　短冊忠度　賴政　眞盛　兼平
(5)田村　朝長　通盛　淸經　舟辨慶
(6)江口　夕顔　野宮　芭蕉　定家
(7)熊野　松風　源氏供養　井筒　佛原
(8)軒端梅　采女　千手重衡　楊貴妃　二人靜
(9)關寺小町　檜垣　姨棄　鸚鵡小町*　大原御幸
(10)三輪　龍田　小鹽　雲林院　葛城

(11) 卒塔婆小町　斑女　花筐　籠太鼓　浮舟　玉鬘（六番）
(12) 櫻川*　百萬　柏崎　隅田川　三井寺
(13) 道明寺　西行櫻　遊行柳*　梅枝　富士太鼓
(14) 融　女郎花　小督　張良　蟻通
(15) 木曾*　景清*　安宅　盛久　葛城
(16) 道成寺　葵上　鐵輪　安達原　紅葉狩
(17) 阿漕　天鼓　藤戸　自然居士　東岸居士
(18) 善知鳥　錦木　松虫　通小町　船橋
(19) 昭君　項羽　鵺　鵜飼　春日明神
(20) 鞍馬天狗　善界　大會　殺生石　山姥

帝國圖書館藏本は(5)田村外五番一冊の代りに、「羽衣　杜若　權　誓願寺　當麻」の五番一冊（原表紙、同一）を加へて二十冊。即ち、元來本書は一冊だけ別曲よりなるものが作製せられたものである。

(六) 漢詩文集 附、作法

(イ)本朝文粹　　藤原明衡撰　　十四卷　　八冊

卷首に寛永、林羅山・堀杏菴序があり、目錄と共に首卷一冊。卷一末に「于時寛永六己巳曆卯月吉旦」玉屋町　田中長左衛門刋之（印）」の刊記、卷十四末に「玉屋町田中長左衛門開板」の刊記並びに寛永六年那波道圓の跋を附す。　田中長左衛門は本書と同種の大型活字を以て、寛永元年に祥刑要覽、同二年に韻府群玉を印行してゐる。（四周雙邊、有界、九行十八字。匡郭內、縱七寸三分五厘、橫五寸五分五厘。版心「本朝文粹卷（數）（丁數）」）なほ本書中の鐵槌傳の一篇は後の正保の覆刻整版本には除去せられてゐる、　本書は傳本比較的多く、管見に入つたものは、神宮文庫（二本）・東北帝國大學（合五冊）・阿波國文庫（伏原印記あり。十五冊）・靜嘉堂文庫（二本）・東洋文庫・安*田文庫（西莊文庫舊藏）・成簣堂文庫（合五冊）・久原文庫（七冊）・高木文庫（若干補配あり。）・松井簡治博士・大島雅太郎氏（五冊）・田中忠三郎氏藏の諸本である。

(ロ)遍照發揮性靈集　　釋空海撰　　十卷　　十冊

慶長十九年刊本を初め、無刊記本等種々存するが、前に述べたから玆には省略する。（前記三四〇頁參照。）

(ハ)南浦文集　　釋文之撰　　三卷　　三冊

寛永二年の刊行で、（四周雙邊、無界、十行二十字。匡郭內、縱七寸四分、橫五寸二分。版心「南浦文集上（中・下）（丁數）」）。卷末に「寛永乙丑仲秋四條寺町梭

第四九八圖

正刊行」の刊記がある。傳本比較的少く、帝國圖書館・東北帝國大學（狩野文庫、上巻山崎任印記あり。下巻六十葉以下缺。）・安田文庫・東洋文庫・成簣堂文庫・森潤三郎氏藏の六本がある。一般に行はれてゐるのは本書に據つて重刊した慶安二年の整版本である。

（二錦繡段）

（ニ）錦繡段　釋龍澤撰　一卷　一冊

第四九九圖

錦繡段には早く慶長二年の勅版がある他に、慶長中刊行の大字の一本がある。其の覆刻整版本（無刊記）に元和初年の墨書識語を書入れた一本（高野山親王院藏）がある點から言つても慶長中の印行たるは疑ひないと思ふ。（四周雙邊、無界、九行十七字、匡郭内、縦六寸八分半、横五寸四分。[illegible]錦繡段丁數[illegible]五九葉。）傳本の管見に入るものは、帝國圖書館・久原文庫・杉浦三郎兵衛氏藏の諸本である。

（ホ錦繡段抄）

（ホ）錦繡段抄　釋壽桂撰　五卷　五冊

錦繡段の假名講説には三種四版の活字印本が存する。共に寛永中の印行で小型の活字を用ひてゐる。

第四九九圖

（一）寛永六年刊本

單邊、無界、十二行片假名交り匡郭内、縦七寸二分、横五寸二分。卷末に「寛永六年中呂上旬　二條觀音町中嶋久兵衛開之」の刊記あり。東洋文庫（合二冊）・正宗敦夫氏藏

第五〇〇圖　第五〇一圖

（二）寛永中刊本（單邊）

（イ）單邊、無界、十三行片假名交り匡郭内、縦七寸五分、横五寸七分。（イ）（ロ）は同種の字を使用。　高木文庫藏・[illegible]藏（九條家舊藏本）（慶應義塾大學[illegible]研究室藏本同種）

（ロ）[illegible]七寸五分半、横五寸八分半。東洋文庫藏

第四九八圖

（ヘ）續錦繡段　第五〇〇圖

（ト）續錦繡段鈔　第五〇一圖

（チ）三千句

（三）寛永中刊本（雙邊）毎半葉十四行片假名交り。　大島雅太郎氏藏*

（ヘ）續錦繡段　　一卷　　一册

本書は慶長中の刊行と認められる。　活字には磨滅が著しく現れてゐるが、古文孝經・補注蒙求・孔子通紀等と相似の樣式を有する。　雙邊、無界、九行十五字。匡郭內、縱七寸一分半、橫五寸四分半。傳本の管見に入つたものは東洋文庫*「圓融藏印記あり。加持井宮舊藏、丹表紙原裝。」・高木文庫藏の二本である。

（ト）續錦繡段鈔　　五卷　　五册

寛永中の印行と認められる。小型の活字を用ひた一本である　雙邊、無界、十三行片假名交り。毎行約二十四字。匡郭內、縱七寸二分、橫五寸二分。傳本の管見に入るものは、東洋文庫*・久原文庫一絲和尚舊藏藏の二完本の他、阿波國文庫一册・成簣堂文庫卷二の一册藏の零本がある。

（チ）三千句　　一卷　　（橫）一册

梅谷と策彥との聯句を收めたもので、卷末に、「天正六禩端月吉辰謙齋」七十八禿翁周良印」の原識語を附刻し、其の次に、「于時元和七曆九月吉辰」二兵衛」の刊記がある　二兵衛は駿河版に從事した工匠で、後に種々の活字開版を行つてゐる事は前述の如くである。　無邊、無界、十三行十一字。字面の高さ約三寸九分。總紙數六十一葉。二三一頁參照。帝國圖書館に一本を藏する。

（附一）語　學（辭書事彙類）

辭書事彙の類は古活字印本として現れたものは極めて少數である。其れは辭書類には殆ど必須の條件たる附訓の植版が技術的に困難を伴つた事も有力な原因であらうが、又一には需要が比較的多かつたが爲に、整版本として雕刻し、屢の重刷に備へ易い方法を採つたからでもあらう。節用集・下學集等は早くから整版本のみ行はれて活字印本は一本もない。倭玉篇も三種の古活字版はあるが、又別に慶長板だけでも三版（整版本）ある。（後記參照）なほ玆には共れ等の辭書と共に漢土の故實出典を搜索す可き種類の編纂物、管蠡抄、語園等の類をも辭書事彙的の作用を有するものとして併せておく。

(イ)倭名類聚抄

（イ）倭名類聚抄　　源順撰　　二十卷　　十冊

倭名類聚抄の二十卷本は通行本として扱はれ、後に增補せられたものと言はれてゐるが、是も相當に古く共の體を爲してゐたものである。古活字印本は二十卷本を那波道圓が校印したもので、卷首に源順の原序に加ふるに元和三年十一月林羅山序、那波道圓の刊行凡例等が附加せられてゐる。本書の印行も略元和三年頃であらう。元和四年道圓校印の白氏文集と同種の大型の活字である。（四周雙邊、無界、九行十六字、注雙行、匡郭内、縱七寸五分、横五寸四分、版心倭名類聚鈔丁付）

傳本の管見に入るものは左の如くである。

第五〇四圖 （ロ）聚分韻略

帝國圖書館・東北帝國大學五冊・東洋文庫十冊・靜嘉堂文庫（二本一は狩谷望之手校・二は市野迷庵手校）・刈谷町立圖書館十冊改裝・安田文庫狩谷望之手校、原裝十冊・高木文庫原裝十冊・蓬左文庫「御本」印記あり。丹表紙原裝十冊・多和文庫・猪熊*信男氏（二本）一は中原出納より天海僧正に贈りしもの。・成簣堂文庫十冊・正宗敦夫氏・東方文化研究所藏尊經閣文庫三本藏

（ロ）聚分韻略　　釋師錬撰　　五卷　　五冊

第五〇五圖

聚分韻略は中世期に頗る流行し多數の開版が行はれた事は既に述べたが、近世初期に入つても其の版木の重摺や、又新しく雕刻せられるものも現はれ、慶長十一年醫德堂刊本を初め、有刊記本三種の他、慶長中開版と認むべき無刊記本三種以上あり。整版本としての刊行は依然として盛んであつたが、活字印本としては管見に入つたもの僅かに寛永頃の印行と認む可き一本である。*久原文庫藏、改裝合二冊、單邊、無界、匡郭内、縱四寸三分、橫三寸九分半。上冊末に「寛永十七庚辰年九月十三日牧純（印三つ）」の墨書識語あり。又中島仁之助氏藏一本（二冊）あり。

（ハ）倭玉篇

（ハ）倭玉篇　　三卷　　三冊

心蓮院版の條に記るしたから、茲には重言を避ける。なほ補遺の條參照（前記一九四頁參照）

（ニ）大和言葉

（ニ）大和言葉　　一卷　　一冊

所謂歌語に略解を施した匠材集等を簡略にした形式のものである（圖版參照）分量も少く匠材集の如くいろは分にする事なく、紙數も僅か二十葉に過ぎない。元和寛永中の印行と認められるから「大和言葉」と題するものとしては最初の刻本であらう。管見に入つたものは栗田元次氏藏の一本のみである。*每半葉九行、每行約二十字。字面の高さ約七寸七分、長心一丁數。補裝に係るも栗皮色原表紙

第五〇六圖

を存し、大いさ縱九寸二分、横五寸九分强。

（ホ）拾芥抄

(ホ)拾芥抄　洞院公賢撰　三卷　六冊（三冊）

拾芥抄は一種の百科辭典で、社會萬般の事が記載せられてゐるので頗る重寶とせられ、江戸時代にも貴族の嫁入の時の必携品の一となつてゐた。（拾芥抄に就いて（一）（二）（三）松井簡治博士論叢一ノ二參照）慶長中に印行せられた活字印本には兩種の異植版が存する。三卷を各本末に分ち、兩種共中の末の卷に宮城指圖五葉・八省指圖一葉・四行八門圖半葉・坊保圖四半葉・日本國圖一葉等を整版にて附載し、兩種とも同版を用ひてゐる。日本國圖の如きは我が國最古の古刻地圖として注意せられてゐる。（栗田元次氏古地圖集成）本文の卷頭には「略要抄」、卷首目錄の大名には「拾芥抄」とある。（松井博士論文參照。）

同種の刻本

第一〇八圖

第一〇九圖

（一）慶長中刊（雙邊）雙邊、無界、十一行、十九字。間々平假名を交ふ。匡郭內縱七寸一分半、横五寸五分。　帝國圖書館・阿波國文庫（二本一は六冊、一は山崎書繼寫本に、觀勘大宿正本を以て屋代弘賢手校）・久原文庫（石川丈山手澤）＊・安田文庫・光藤珠夫氏藏

（二）慶長中刊（單邊）單邊なるの他行款等（一）と同じ。　東洋文庫（六冊）・久原文庫・安田文庫＊（横山由清舊藏）

（ヘ）管蠡抄

(ヘ)管蠡抄　三卷　一冊

管蠡抄は漢士の故實出典を簡便に索むるの具として菅原爲長の撰述したものである。（上野文庫本の傳鈔本（山田孝雄氏藏）奧書に爲長撰とあり。）中世期に頗る行はれ、其の傳鈔本も亦少くないが、（帝國圖書館・安田文庫・米澤圖書館・靜嘉堂文庫・青山文庫・室町期の鈔本なり。）近世初期の刻本としては、元和頃の古活字印本が一種存するのみ

第五〇七圖

である。（雙邊、無界、十行二十二字。匡郭内縦七寸一分半、横五寸。）原來十卷に分れてゐるのを上（一至三）・中（四至七）・下（八至一〇）の三卷としてゐる。管見に入つた唯一の傳本は靜嘉堂文庫藏（狩谷望之手校）の一本である。後の整版本は本書とは內容を異にし、頗る增補を行つたものである。

（ト）語園

（ト）語園　一條兼良撰　二卷　二冊

第五〇八圖

本書は漢故事の和譯、上下併せて百十二段を收めてゐる。卷末に「寛永四年丁卯秋七月既望刊之」の刊記がある。（雙邊、無界、十行平假名交り。匡郭内縦六寸、横四寸六分半。）なほ本書には原刊記をも其の儘に附刻する寛永中の覆刻整版本が存在する。傳本の管見に入るものは、內閣文庫・久原文庫・東洋文庫・安田文庫・高木文庫・國分高胤氏（二本）藏の諸本である。

（チ）巵言抄

（チ）巵言抄　林信勝撰　二卷　二冊

第五〇九圖

語園に類する本書は、元和六年秋七月林道春の跋文があり、略其の當時の印行と認められるが、片假名交りの注解の他に、本文にも附訓植版を行つてゐる點が版式上特に注意される。（雙邊、無界、十七行片假名交り。但し本文八行十六字。）漢字の上下左右に別に小型の附訓活字を植版する法は、元和頃の叡山版に始めて試みられた樣式で、次いでこの方法は高野版にも榮えたが、本書の如く外典に行つたものは罕である。傳本の管見に入るものは、東北帝國大學（狩谷望之舊藏）・蓬左文庫（「御本」印記あり。原題簽附丹表紙存す。）・岩瀨文庫（曼殊院舊藏、丹表紙原裝。）・安田文庫・尊經閣文庫・高木文庫藏の六本である。

（附二）史　籍　類

(イ)日本書紀　舍人親王等奉勅撰　三十巻　十五冊

日本書紀には平安朝以來多くの傳承本が殘存してゐるが、近世初期に於いて印行せられた古活字印本は、神代巻のみは後陽成天皇の慶長四年の勅版を以て嚆矢とする。其の後、神代巻のみ、神道の寶典として崇はれた故か、多く行はれて屢々慶長勅版を以て飜印せられたが、（後記參照）其の完本の初めて開版せられたのは、慶長十五年である。慶長十五年刊本は、四周雙邊、無界、毎半葉八行、毎行十八字。（匡郭内、縦七寸三分半、横五寸四分半。）文字は比較的大型で、巻末に左の刊語がある。其の刊語に言ふ如く本書は、卜部家傳承の一本を三條西實隆が校訂した本文を底本としたものである。然も諸傳本中に、其の原本たる三條西本との校正を書入れたものを往々に見受ける。

此寫本者當初安貞二年兼頼挍讎諸本」正應之中神祇權大副卜部兼方筆之收」于石室以來永仁正四位下行神祇權大」副兼山城守卜部仲季嘉元甲辰沙彌蓮」惠康永壬午神祇權大副兼員轉書之云」云至永正之頃內大臣實隆公件本親」讐書訂朱墨點今據內相公本鏤梓廣傳」于世忠活板之徒多誤刁刀陶陰矣庶幾」莫貽請於余焉」

慶長十五庚戌仲夏念八」洛汭野子三白誌

即ち、本書は慶長十五年の刊行に係る事は明確であるが、之を弘める際に神代卷のみ度々補配を行つてゐる事が、現存諸傳本に據つて知られる。之を詳論する前に神代卷の單行本(活字印本)に就いて言及する。因みに、慶長十五年刊本に附訓を加へて整版とした覆刻本(無刊記本と寛文九年刊記追加本とあり。)があり、之が多く流布してゐる。

神代卷

神代卷は、慶長勅版を底本として、慶長以來幾度も重刊せられてゐる。

(一)慶長勅版(前記一八〇頁參照)

(二)慶長中刊本 雙邊、無界、八行、十七字。 田中忠三郎氏藏(三十卷十五册日本書紀完本に補配の分。其の活字は、三十卷本(無刊記)と同じく、慶長十五年刊本に比しては稍小型である。

(三)慶長中刊本 雙邊、無界、八行、十七字。 高木文庫藏。匡郭内、縱七寸、横四寸九分半。活字の樣式は古拙で、慶長十五年刊本より稍小さい。慶長十五年刊本に補配本として用ひられてゐるものがある。

(四)慶元中刊本 單邊、無界、八行、十七字。 京都帝國大學藏。

(五)元和寛永中刊本 雙邊、有界、七行、十七字。 成簣堂文庫藏。活字の樣式が稚拙で、版型も稍小さく、匡郭内、縱六寸四分、横四寸九分。

第五一七圖

(六)元和寛永中刊本 無邊、無界、九行、十七字。字面の高さ約七寸六分半。 *東洋文庫藏。整備した版式を有するも、新味があるから、寛永頃のものであらうと思ふ。

右の諸本の中、慶長十五年刊本と直接關係を有するものは、(二)と(三)とである。現存の慶長十五年刊本を検するに、神代卷の關係から見ると左の如き三種となる。

第五一八圖
第五一九圖

(一)混交なきもの。 神宮文庫・朝鮮總督府圖書館・安田文庫(以上原裝)・刈谷町立圖書館(野口道直

舊藏・高木文庫の卷一・二補鈔、卷九・十一冊整版補配。尊經閣文庫附訓書入吹藏十五冊。

二神代卷のみ別版(版式の全く異るもの)を補配せるもの　(之に兩種存す。)(イ)田中忠三郎氏藏、(ロ)大阪府立圖書館藏(以上原裝)

三神代卷のみ同種活字を以て再版補配せるもの　圖書寮尊藏・靜嘉堂文庫藏(以上原裝)

慶長十五年刊本補配別版の理由

然らば、かくの如き補配が如何にして生じたかと言ふに、右の現存諸本が盡く原裝の儘の傳本であるから、後に缺脫したが爲に補配せられる樣になつたものでない事は明確である。乃ち、今諸傳本精査の結果は、次の如く考へる事が出來ると思ふ。神代卷は慶長勅版以來、單行として活字印行せられ(前記(一)(二)の如き版式上慶長中期までに印行せられたるものと認む。)當時流通した神典である。故に其の後、慶長十五年に至つて三十卷全部を印行するに當つて、先行の神代卷の殘本を利用し、之を卷三以下の二十八卷十三冊に添へて完本を作成するに至つたものが何本か出來上つたものか、又は、三十卷完本の刊行に際しても、特に神代卷のみのの要求多く、殊に慶長十五年刊行の三十卷本は版式が優れて、麗しい刻本であつたから、三十卷十五冊の中、二卷(神代卷)のみを拔き出して、之が求めに應じ、(大阪府立圖書館藏(住友本・寶藏・京第二冊)・成簣堂文庫藏二冊の諸本等この類か)以て、二十八卷十三冊の殘本を生じたるが爲に、其の不足を補ふ可く、何等かの便宜で入手し易かつた別版活字印本の神代卷を以て補ひ一時の用に供したものではあるまいかと思ふ。其れが爲に、別版の補配本に

も、(イ)田中氏藏本の如きものや、(ロ)大阪府立圖書館藏本の如き種々なるものが存在するのであらう。

然し、かゝる補配を行つてもなほ不足があつたので、神代卷のみ再び同じ活字を用ひて版を起し、卽ち、再版を補配した傳本が生ずる樣になつたのである。之が靜嘉堂文庫藏本の類である。從つて其の再版の神代卷は活字の磨滅著しく版心等が若干複雜になつてゐる。

なほ右の再版の時期は、靜嘉堂文庫藏本の原表紙裏張りから出た「銀子請取之日記」殘葉と卷中に元和二年五月よりの書入(山田以文の先、道忠自筆)とに據つて限定する事が出來る。卽ち、銀子請取之日記中に、大坂物語が三箇處に見えるから、元和元年の書附と認む可きこの帳面を反古にしたのは、少くとも翌二年でなければならないとすると、本書の製本の出來上つたのは、元和二年の初頭から、卷中書入の識語五月以前に於ける僅か數ケ月の間に限定する事が出來るのである。卽ち、本書は、慶長十五年に第一版を出した後、神代卷再版補配の際まで、製本を行はずに保存せられてゐたものと考へられる。而して、神代卷再版の直後、製本が行はれたものと考へる事は不穩當ではあるまいと思ふ。

日本書紀三十卷刊本

なほ日本書紀の完本(三十卷)には、慶長十五年刊本より或は先行かと思はれる活字印本が一本ある（雙邊、無界、八行、十七字。匡郭内、縱六寸七分半、橫四寸七分。久原文庫藏(木村正辭舊藏)九册。）活字は慶長十五年刊本に比して稍小

(ロ)先代舊事本紀
第五一八圖
(ハ)東鑑
第二七〇圖
(ニ)保暦間記

さく、版式上少くとも慶長中の印行と認む可きものである。其の行數が八行十七字詰である點は、他の單行の神代卷が何れも十七字詰に從つてゐる點から見て、又、其の中本書と同種活字の神代卷單行本が慶長十五年刊本に補配せられてゐるものがある(田中氏藏本)點から考へて、或は本書の方が、三十卷完本として先に刊行せられたものかとも思ふのである。(神代卷抄の片假名活字本は二種あれど後に補遺す。(其の一は一八二頁參照)、日本書紀に關聯し聖德太子十七條憲法の古活字版あり、補遺參照)

(ロ)先代舊事本紀　釋潮音撰　三十卷目一卷　十六册

本書は所謂先代舊事本紀とは別撰である。伊雜の宮の神官水野釆女が潮音和尚を利用し、和尚は釆女の供給した資料に據つて聖德太子に託して僞撰したものであつて、和尚在住の黑瀧山不動寺に其の草稿及び資料を藏すると言ふ。寛永中の活字に若干新雕活字を混じて摺刷し、卷末に寛文十年の跋文刊語を附するもの(東洋文庫藏)と附せざるものの(高木文庫藏(九華堂舊藏、成簣堂文庫藏、舊日藏書印記あり))とがある。(雙邊、無界、八行、十六字、匡郭内竪六寸六分、横四寸四分、版心「舊事記(卷數)(丁數)」。)原裝を存するものは薄色の表紙に「大成經鷦鷯傳(卷數)」の原題簽を存する。

(ハ)東鑑　五十二卷　二十五册　(前記二一九頁參照)

(ニ)保暦間記　一卷(二卷)　一册(二册)

本書は保元元年(後白河天皇)より暦應年間(光明院)に至る一百八十餘年間の成敗を記るして、後人の鑑としたものである。即ち、保元の亂に始まり、後醍醐天皇の崩御までを含

む。之に三種の別版があり、第一種本と第二種本とは稍行文を異にし、前者は一卷、後者は二卷に分けてゐる。又、第二種本には、卷頭に「小瀨道甫刋」の文字があるが、同書は小瀨甫庵の刊行とは認め難いから、或は、なほ其の底本たる原刻の一本があつたものかもしれない。又第二・三種本は上欄に章段見出しを附植してある。

第五一九圖　(一)慶長中刊本　四周單邊、無界、十二行片假名交り。匡郭內縱七寸六分、橫五寸五分半。版心「保曆間記(丁數)」。總紙數七十二葉。

靜嘉堂文庫　蓬左文庫*「御本」印記あり。・成簣堂文庫・安田文庫 卷首一葉缺、梶井宮舊藏本 藏

第五二〇圖　(二)慶元中刊本　四周單邊、無界、十二行片假名交り。匡郭內、縱七寸四分橫五寸五分。本書には同種活字の異植版があり、其れは間々章段の名稱等が變つてゐるものがある。

(イ)米澤圖書館・安田文庫・久原文庫藏、(ロ)刈谷町立圖書館藏

(ホ)承久記

(ホ)承久記　二卷　一冊

承久の亂の記には、三種の活字印本がある。(一)は元和四年刊本、(二)は元和中刊本、(三)は寛永中刊本であり、(三)が最もよく版式が整つてゐる。

第五二一圖　(一)元和四年刊本　單邊、無界、十二行片假名交り。匡郭內縱七寸五分橫五寸四分半。

帝國圖書館 原表紙存す。合一冊・久原文庫・谷村一太郎氏藏*

「刊記」于時元和四戊午曆孟夏中十日

第五二二圖　(二)元和中刊本　單邊、無界、十二行片假名交り。匡郭內縱七寸四分、橫五寸八分。

東北帝國大學 原裝、合一冊・彰考館 合一冊、修史に用ひたる書入あり。・成簣堂文庫藏*

（三）寛永中刊本　雙邊、無界、十二行片假名交り。匡郭内、縦七寸四分、横五寸五分。（二）に據りて飜印せしものならん。　高木文庫藏

（ヘ）新田左中將義貞軍記

（ヘ）新田左中將義貞軍記　一卷　一冊

他の軍記諸本が多く片假名交りであるのに本書は平假名交り印本で、之に二種の異版がある。其の一は方丈記十行本等と同種の極めて大型の活字を用ひてゐる（毎半葉十行、毎行約十七字。半面の高さ約七寸三分。）其の版式上慶長中の印行たるは疑ひない。傳本の管見に入るものは、京都帝國大學・阿波國文庫（不忍文庫舊藏）藏の二本のみである。其の二は、其の一よりも稍小型の活字で、同じく慶長中の印行と認む可き版式を有する。毎半葉十一行、毎行約十九字。總紙數三十一葉。大阪府立圖書館に一本（享和元年識語あり）を藏するのみである。

（ト）明德記

（ト）明德記　三卷　三冊

明德記は山名氏清・同滿幸が謀叛を企て內野にて合戰を行つた事蹟を記し、其の活字印本三種は何れも左の如き刊記がある。即ち之に據れば、保元平治平家物語の流行に對し、本書及び承久記・應仁記等を併せ印行の企てを行つた事がわかる。凡て保曆間記以下の軍記々錄が平家物語等の盛行に伴つて開版せられたものである事は重言するまでもない。

（一）慶長十九年刊本　雙邊、無界、十一行二十二字。匡郭內、縦七寸二分、横五寸五分。（上二十四、中三十三、下二十六葉）　內閣文庫（卷合一）・蓬左文庫（承久記應仁記と合冊三冊）・久原文庫（卷中）藏

〔刊記〕今世好事者保元平治平家物語皆以費梓工矣於是承久兵亂及明德記及應仁記不幸而免如予閑人幸而得之屢爲日之便時々以古本校訂之漸畢其功忽補其闕雖然不獲其全也庶幾後人有道而正焉而已

于時慶長第十九年無射望日　以時

第五一六圖

〔二〕元和三年刊本　單邊、無界、十一行、(漢字二十一字)、匡郭内、縱七寸一分半、横五寸四分半。　阿波國文庫(不忍文庫舊藏)・成簣堂文庫*藏

〔刊記〕于時元和三年極月望日　以時

第五一七圖

〔三〕寛永元年刊本　單邊、無界、十三行、片假名交り。匡郭内、縱七寸五分、横五寸七分。　東洋文庫*・久原文庫・栗田元次氏藏

〔刊記〕寛永元甲子歳仲夏下旬　開板之

整版本としては寛永九年刊本(寛永九年壬申季冬吉日刊行」の刊記あり。)が最も古い。(内閣文庫(二本)等藏)

(チ)應仁記

(チ)應仁記　二卷　二冊

應仁記の活字印本の管見に入るものは左の兩種である。

第五一八圖

〔一〕元和寛永中刊本　雙邊、無界、十二行、毎行約二十二字。匡郭内、縱七寸三分半、横五寸二分。　岩瀬文庫*藏

第五一九圖

〔二〕寛永中刊本　單邊、無界、十二行、毎行約二十三字。匡郭内、縱七寸三分半、横五寸七分半。上卷序目とも二十八葉、下卷二十六葉。　久原文庫*・成簣堂文庫藏

整版本は第一種本に附訓を施して覆刻を行つたもので「寛永十年孟春吉日」の刊記がある。

第三節　創作出版の濫觴

創作を出版する現象の發生

國文學書の開版は軍記物語に次いで古典文學作品の方面に發生し、多數の古典が活字印刷術に據つて流傳するに至つたが、是等に伴つて現はれ初めたのは、中世後期の末葉に多く著作せられた所謂お伽草子の類の活字開版である。かくお伽草子或は讀物としての舞の本等が新作の如くに茲に再生の姿を以て新版として出現した事は、當代の創作を直ちに出版に據つて發表流布せしめる現象を促進する有力なる動因となつた樣である。所謂お伽草子の類は伊勢物語等の出版に刺戟せられて、慶長中期に花鳥風月・淨瑠璃物語等の挿畫刻本が現はれてゐる。讀物として行はれた舞の本等も番數は未詳であるが、慶長十一年以前に既に兩種の活字印本が刊行せられた。其の後元和より寛永初年の間に、辨慶物語(二種)・清水物語(二種)・秋夜長物語(二種)・鴉鷺合戰物語(二種)・よしつね東下り・釋迦の本地(二種)等が印行せられてゐる。

お伽草子の開版に刺戟せられて現れた現代文學の作品たる所謂假名草子類の開版は大體元和以後の事であるが、「昨日は今日の物語」等は比較的早くから、活字印本として多數の改版が行はれてゐる。聚樂物語・大坂物語・竹齋・一本菊・うらみの介等の新作品が殆ど書下しの儘活字印行に據つて發表せられる樣になつて、茲に初めて我が印刷文

寛永後半期に於ける假名草子の整版本

化は文學作品の出版と密接なる關係を有するに至つたのである。活字印刷術の隆昌期に現はれ初めたこの現象は、其の後整版の復興と共に、出版界の常則となつたのである。無論寛永後半期には既に整版を用ひて假名草子類の創作出版せられたものは少くなかつた。尤草子・富士の人穴草子・薄雪物語（寛永九年刊）・七人比丘尼（寛永十二年刊）・清水物語（寛永十五年刊）・あだ物語・可笑記（寛永十七年刊）・そぞろ物語（寛永十八年刊）・あづま物語（寛永十九年刊）・料理物語（寛永二十年刊）・大佛物語・福齋物語（寛永二十一年刊）・祇園物語・仁勢物語・醒睡笑等は活字印本として現れず、直ちに整版本として行はれたものである。然しながらかゝる現象の發生を見るに至つたのは、近世初期活字印刷術の發達以後に於ける印刷文化の著しい特色の一つとして最も注意す可く、之は全く中世期に至るまで絶えて見る事の出來なかつた現象である。然も亦、當時に於いて、新しく撰述せられたものが直ちに出版に附せられる現象は、獨り文學作品に止らず、汎ゆる方面に亙つて、近世以後に於ける印刷文化の特質となりつゝあつた事は既に前にも一言した如くであつて、かくして印刷文化は其の時代文化を直ちに反映する様になつて、茲に初めて印刷文化に據つて其の時代文化を知り得るに至つたのである。

假名草子類の挿畫

なほ活字印本・整版本共に、當代の假名草子刻本に於ける挿畫は、奈良繪本を其の粉本としてゐる。同一書に就いて奈良本繪と印本とを比照するならば、自ら首肯し得られるであらう。

又、本節には、慶長以後に撰述せられた史籍記錄類の活字印本をも文學作品の創作出版と同一の現象として茲に便宜併記して整理する事とした。

次に左表に從つて、お伽草子・假名草子等の活字印本に關して略説する。

(イ) 淨瑠璃物語 (一種)
(ロ) 花鳥風月 (二種)
(ハ) 一本菊 (一種)
(ニ) 四十二の物諍 (二種)
(ホ) 釋迦の本地 (二種)
(ヘ) 秋夜長物語 (二種)(片一種 不一種)
(ト) 鴉鷺合戰物語 (二種)
(チ) 辨慶物語 (二種)
(リ) 清水物語 (二種)
(ヌ) 義經東下り (一種)
(ル) 舞の本 (五種)
(ヲ) 昨日は今日の物語 (六種)
　附 戲言養氣集 (一種)
(ワ) 竹齋 (二種)
(カ) 恨の介 (一種)
(ヨ) 伊曾保物語 (七種)
(タ) ぢんてき問答 (五種)
(レ) 一休水鏡 (五種)
(ソ) 天正記 (四種)
(ツ) 信長記 (六種)
(ネ) 聚樂物語 (一種)
(ナ) 大坂物語 (六種)
(ラ) 前關白秀吉公御檢地帳 (一種)
(ム) 寛永行幸記 (四種)(不三種)
(ウ) 洛陽大佛鐘之銘(抄) (一種)

(イ)淨瑠璃物語
第五三〇圖

(ロ)花鳥風月

第五三一圖
[illegible]刊本

(イ)淨瑠璃物語　三卷　三冊

淨瑠璃物語には傳寫本に據り、多少本文を異にするものもあるが、淨瑠璃の起源に最も密接なる關係をもつものとせられてゐる如く、其の流行も盛んに、早く出版を見るに至つたものである。現存の傳本は東京帝國大學圖書館藏(舊青洲文庫藏、稀書複製會第八期刊、所說參照。震災前安田文庫藏、大槻如電翁等本藏)の一本で、色變り料紙を交じへ、繪入(其の挿畫、嵯峨本伊勢物語の版木を襲用せり(木村仙秀氏示教))毎半葉十行(第二葉裏のみ十一行)約十九字。字面の高さ約七寸一分。版式上慶長末年頃のものであらうと思ふ。花鳥風月(二)と同種の活字を用ひてゐる。整版本(有刊記本)としては、寛永十七年の本記ある一本(安田文庫藏)が最も古い。

(ロ)花鳥風月　一卷　一冊

花鳥風月の古活字印本は兩種存在し、共に慶長中の刊行に係る挿畫本である。(一)は十行本枕草子等と同種の書體麗はしい大型活字を用ひたもの。(毎半葉九行、毎行十七字、字面の高さ約七寸二分、繼紙三十四葉。)挿畫(十面)の手法は嵯峨本伊勢物語等と相似してゐる。傳本の管見に入つたものは高木文庫藏の一本(伊勢源氏あふきあはせ全の書題簽(後人筆)あり。改裝本)のみである。(二)は淨瑠璃物語と同種活字印本、(一)と全く書風を異にし、活字は大型であるが書體は長細めである。其の本文も亦異なるが、(有朋堂文庫お伽草子中に帝國圖書館本に據りて收む。)花鳥風月にはなほ古鈔本・奈良繪本等本文の異なるものが種々傳はつてゐる。此の種の傳本の管見に入るもの

第五三二圖

は、帝國圖書館藏の一本（毎半葉十行、毎行約十九字。字面の高さ約七寸三分。挿畫十面、總紙數三十葉。不忍文庫・阿波國文庫舊藏。書外題に後人の筆にて「葉室大納言」とあるも、實は花鳥風月なる事、平出氏の指摘せる所なり。）のみである。

（ハ）一本菊

（ハ）一本菊　　二卷　　二冊

一本菊の古活字印本は、往時の書目を檢しても、不忍文庫書目に著錄されてゐるのみであつて、傳本は極めて罕である。後の繪入の整版本は間々傳本に接するが、之も比較的少い。現存の古活字印本は國分高胤氏藏の一本のみで、之は不忍文庫を經て阿波國文庫に納められたものである。寛永頃の刊行であらう。小型の活字で、十行二十字。版心「上（丁數）」。字面の高さ約六寸五分。上卷總紙數二十八葉。下卷を缺く。

（ニ）四十二の物諍

（ニ）四十二の物諍　　一卷　　一冊

第五三三圖

四十二の物諍には室町末期より近世初期に至る傳承本が少くないが、其の最初の刻本たる古活字印本には兩種の刻本が存在する。其の一は挿畫本で、共に寛永中の印行と認む可きものである。山本明清の考證（文政元年刊一冊）にも別本の異同を論じ、古活字印本一種をも對校に使用してゐるが、次の兩種の活字印本は、其の本文は同一である。

（一）第一種本（十二行二十字。字面の高さ約七寸四分。挿畫四面、總紙數二十葉。）

東洋文庫（清竹文庫舊藏、目錄本）・久原文庫（目錄本、岡田眞氏書誌目錄より。表淡色原表紙存す）藏

第五三四圖

（二）第二種本（十二行二十字。字面の高さ約七寸。）　東洋文庫藏

覆刻の挿畫整版本(尾崎久彌氏藏)は句讀點、版心等を附刻してゐるが、是も寛永末期は降らぬものであらうと思ふ。

(ホ)釋迦の本地

(ホ)釋迦の本地　三卷　三冊

本書は、活字の磨滅著しく、濁點附の活字を混じ、間々振假名附眞名活字をも加へた古い活字を用ひて寛永中に摺刷を行つてゐる。(安田文庫藏の一本(下卷)の原表紙裏張に寛永中刊古活字印本源平盛衰記の摺葉を使用せる事も亦其の傍證となる可し。毎半葉十一行平假名交り。毎行約十九字。字面の高さ約七寸。)現存の傳本を見るに、植版を異にするものが兩版ある。但し未だ完本に接しないが、之を分つと左の如くとなる。

第九十五圖

第五十六圖

(一)(イ)種　久原文庫(上下卷)*・安田文庫(下卷)*藏

(二)(ロ)種　高木文庫*(中下卷)・安田文庫(上卷、上下補配本にして、下卷は久原文庫藏本と同一なるも、上卷は植版を異にす。(ロ)種高木文庫藏本は上卷を缺けるを以て比照し難きも、本上卷は恐らく(ロ)種なる可し。)藏

(ヘ)秋夜長物語

(ヘ)秋夜長物語　一卷　一冊

秋夜長物語には兩種の活字印本が行はれ、又寛永十九年には整版本(東京文理科大學附屬圖書館等藏)が現れてゐるのに據つても中世期以來もてはやされた兒物語の中でも最も流行したものの一つである事が判る。(整版本(無刊記本)にしてなほ古刻の一本もあり(神宮文庫藏))活字印本は兩種あるが傳本少く、柳亭種彥の好色本目錄に元和中の活字印本として所載されてゐるのは其の中の一つであらう。其の一は平假名、其の二は片假名であり、本書の如き作が片假名交りで印行せ

られてゐる事も注意す可き事である。

平假名交り印本（第十六七圖）

（一）平假名交り印本は元和頃の印行と認められる。（十二行二十一字。字面の高さ約七寸、版心丁數。總丁數二十九葉。）傳本極めて少く、高木文庫藏本（竹合文庫舊藏）と國分高胤氏藏本との二本を見るに過ぎない。

片假名交り印本（第十八圖）

（二）片假名交り印本は元和寛永中の印行と認む可く、平假名本より後出と考へられる。（單邊、無界、十二行、匡郭內、縱七寸五分半、橫五寸四分。版心「軍」（丁數）。）傳本の管見に入るものは、鈴鹿三七氏藏本（一冊）（嘗て示教を蒙り、初めて片假名本の存在を知れるもの。）と伊藤氏甘露堂文庫藏（甘露堂文庫稀覯本攷覽）の二本とである。

（ト）鴉鷺合戰物語

（ト）鴉鷺合戰物語　　三卷（四卷）　　三冊（四冊）

一條兼良の撰述と傳へられ、寛永中に活字印本（其の活字の樣式、寛永中の同形ある諸本と同一なり。後記參照）が現れてゐる。傳本極めて罕に、管見に入つたのは第五高等學校（日表紙。原装）・成簣堂文庫藏（扉に讀耕齋書の印あり。原小野氏舊藏）の二本のみである。（卷末に譜一ノ二參照）一本書の如き上中下三卷（十一行、平假名交り、毎行約二十一字、字面の高さ約七寸。上卷二十四、中卷二十六、下卷二十四葉）が原型であらう。圖書寮尊藏の古寫本等亦三卷である。之を便宜、四卷四冊に分縮したのは慶安二年刊活字印本である。

寛永中刊本（第十九圖）

慶安二年の活字印本（十一行、毎行約十九字、字面の高さ約七寸五分。片假名交り、附訓。寛永活字を具す。寛永中の古活字を用ひ、若干新雕活字を加へて補刻を行つたものなり。卷末に「慶長二年正月吉日」寛永刊本の刊記あり。）は、前述の太平記と同種活字を以て同一刊行者の企てたものである。即ち、本書と太平記とは寛永以後數年を降り、他の凡ての古活字印本に對して、全く例外的なる存在であるが、比較的古活字印本の專ら行

はれた時期に近く古き活字、即ち寛永中の活字を以て摺刷を行つてゐる上に、正保以後江戸中期までの間に極めて數の少い活字印本中に於いても、平假名交り印本はこの二書の他には見る事が出來ない點等を考へて、茲に併せて古活字印本中に取扱つておかうと思ふのである。

慶安二年刊本の例外的存在

第五四一圖

傳本の管見に入るものは、帝國圖書館・京都帝國大學・靜嘉堂文庫*豐芥子・橫山・成簣堂文庫岡田眞が其の師神谷三園文庫舊藏よりうけし由識語あり。・鹽釜神社神庫村井敬義奉納本合一冊藏の諸本がある。

(チ)辨慶物語

(チ)辨慶物語　二卷　二冊

この物語は辨慶が生ひ立ちより義經に出合つて平家をうかがひ、一時身をひそめて奧州に下るまでの傳說的物語を上下二卷に述べた室町期のお伽草子風の作である。活字印本の管見に入るものは左の兩種である。後の繪入整版本も何種かあつて、行はれたのに比して傳本の殘存するものが少い。

第五四二圖

第五四三圖

(一)慶元中刊本　每半葉十一行平假名交り、每行約二十一字。字面の高さ約七寸六分。版心上下二丁數。本書は慶長末期刊行の徒然草十二行付點植表の活字を襲用せるものなれば、恐らく慶元中の印行なる可し。　阿波國文庫・高木文庫*二本一は宅本、狩葉義之舊藏、二は下卷一冊。

(二)元和寬永中刊本　每半葉十一行平假名交り。每行約二十三字。字面の高さ約七寸三分。版心上下二丁數。濁點附活字を混ず。前記(一)に據りて飜印せしものなる可し。其の本文全く同一なり。　高木文庫*原裝藏

(リ)清水物語

第五四四圖

(リ)清水物語　二卷　二冊

清水冠者義高の物語で、朝山意林庵の著、きよみづ(淸水)物語寬永十五年刊とは全く內容を異に

する。活字印本として刊行せられるだけに相當行はれたものと見えて、室町時代の鈔本も二三管見に入つたものがある。（成簣堂文庫（室町中期寫）藏一冊、靜嘉堂文庫藏（一冊、室町末期寫）本文は兩者同一なり。又、中出氏嘗て「慶長九年たつ十月三日書之」の語ある一本を藏せし由、近古小說解題二一五頁に見ゆ。）古活字印本には寛永中の印行と認められるものが二種ある。共に傳本極めて罕に、一は高木文庫藏（秋葉義之舊藏）の一本（毎半葉十行、毎行約十九字、字面の高さ約六寸九分、稗邊の本地と同種活字なるも本書活字に磨滅なければ、摺刷の時は早かる可し。）二は安田文庫藏の一本（十二行平假名交り。毎行約二十二字。字面の高さ約七寸二分。丹緑繪入。一冊。）である。作としては辨慶物語等に比して構想本文には小異はあるが、略古鈔本と同一である。文章共に劣つてゐる。

（ヌ）義經東下り　第五冊所收

（ヌ）義經東下り　二卷　二冊

「よしつね東下り物語」と題し上下二卷として刊行されてゐるが、之は實は、義經記第七卷の奥州下りの條のみを拔いて印行したものである。上卷には義經記第七卷第一至四段、下卷には同じく第五至九段を收めてゐる。（毎半葉十一行約二十一字。字面の高さ約七寸二分）寛永頃の印行と認められる。大谷大學に一本を藏するのみである。

（ル）舞の本

慶長十一年以前の兩種の活字印本

（ル）舞の本

舞の本は幸若の舞曲として語られる他に、讀み物としても傳寫せられ、同じ目的を以て早くより活字印行にも附せられたのである。慶長十一年以前に「滿仲」（大島雅太郎氏藏、和田維四郎氏舊藏）、「高館」（上圖[illegible]、慶長十一年以前[illegible]）等が存在し、又其れと同時に伏見常盤（挿畫、安田文庫藏）と本書[illegible]

種活字印本の殘葉同じく史記より出づ。等、樣式を異にする兩種の活字印本が行はれてゐた事は前述の如くである。其れ等が何番かの揃本として刊行せられたものか、單行の性質を有するものかも未詳であるが、ともかくも何番かは相次いで印行を見たものであらう。

慶元中刊本（三十曲現存）　第五四六圖

次いで慶元中に行はれたと認む可きは、挿畫なき一類の活字印本である。東*洋文庫藏本と名古屋市立圖書館藏本とを合して三十曲を得るが、之も後の三十六曲本と同じく、其の曲目數だけは三十六曲であるのか、又は何番で完本になるのか明らかではない。右の三十曲は後の寛永九年の繪入刊本（整版、三十六曲）とは若干曲目を異にし、寛文の書籍目錄（刊本）に番外としてある左の四曲を含んでゐる。寛永九年刊本より開版の曲目が多かつたものか、或は三十六曲に止つて其の曲目に出入があるのか現在までの資料では定め難い。

かまた　しづか　日本紀　くらまで

東洋文庫藏本は、黄色原表紙に原題簽をも存する美裝本、原來一册に二曲を併せてゐるものが多く、左の如く九册十五種である。無論名古屋市立圖書館藏本の存在を知る以上、缺本である。毎半葉十行、平假名交り、毎行約十九字。字面の高さ約七寸。

(1)日本紀・大織冠　(2)夜討曾我　(3)ゑぼしをり・くらま出　(4)しづか・未來記

(5)元服曾我・拾番切　(6)こがし・いるか　(7)大臣・信田　(8)和田さかもり・はま出

名古屋市立圖書館藏本(二十四冊)は河村秀根舊藏本で、改裝に係り一曲一冊としてゐる。

右の東洋文庫藏本と重複しない曲目は左の十五曲である

いぶき　おひきがし　景清　木曾願書　清しげ　こし越　四國落　つきしま

つるぎさんたん　なすの與一　堀河夜討　まんじう　やしま　夢あはせ　かまた

寛永中刊本

次に寛永中刊本(挿畫)は版式上前記一本の飜印に當り挿畫を加へたものと認められるが、未だ完本に接しないから、何番實在するか未詳であるが、常盤問答(永森直次郎氏藏)一の如く、卷末に寛永年間に開版を行つてゐる「京四條坊門通　敦賀屋久兵衛」の刊記を有するものもあり、又、活字印本と誤認せられるのが常である程の精刻なる其の覆刻整版本が三十六曲本(淺野圖書館藏本諸傳本中最も保存よき美本なり)中である點より、恐らく三十六曲本として印行せられたものであらうと思はれる。管見に入つたものは、其の中の若干曲で何れも無刊記本であるが、其の覆刻整版本中に若干寛永九年の木記等を加へたものが發見されてゐるから、其の印行は寛永初年であらうと思ふ。又、この種の同じ活字を用ひ版型等を稍異にする印本等も存在するから、同時に單行的な出版としても行はれたものであらうと思ふ。其の覆刻の整版本にも單行的なものがあつたらしく、常盤問答等は、殆ど刊行時期を等しくする兩種の覆刻整版本(寛永後期頃刊)が存在する。(東洋文庫南種藏)

管見に入つた寛永九年の木記を有する覆刻整版本は、文覺(東洋文庫藏一冊)・清重(岩瀬

文庫藏一冊)の二冊で、卷末に「寛永九年壬申十二月吉日中野氏道也梓」の木記がある。每半葉十行平假名交り、每行約十九字。字面の高さ約六寸八分。

第五四五圖

かくの如く其の活字印本は三十六曲の中零本若干を見るに過ぎないが、其の覆刻整版本(挿畫)は三十六曲揃本で、後刻の三十六曲本の直接の祖を爲してゐるものである。其の曲目は次の如くである。又、右の活字印本に十一行植版の同種活字異版の存する事は前述の如くであり、(東洋文庫藏かまた一冊。十一行二十字。字面の高さ約六寸八分。)この種の覆刻整版本にも別版の行はれたものがある事も前述した所である。なほ、單行的の印行であるが、「大しよくかん」[*]には十二行の活字印本(元和・寛永中刊、十二行二十一字。字面の高さ約七寸一分。九州帝國大學國語研究室藏。)も存在し、之に據つても如何に舞の本が讀物としても盛んに流行したかがわかるのである。

覆刻整版本三十六曲

あつもり	いぶき	いるか	いわうか島	馬ぞろへ	烏帽子折
おひさがし	景清	木曾願書	清しげ	元服曾我	こし越
小袖そが	四國落	十番切	しだ	新曲	大織冠
高館	つきしま	劔さんだん	常盤問答	とがし	なすの與一
濱出	笛の卷	伏見ときは	堀河夜討	まんじう	未來記
文覺	やしま	夢あはせ	百合若大臣	夜討曾我	和田酒盛

因みに後刻の整版本に就いて附言しておく。

まづ寛永九年覆刻整版本の他に古活字印本の或種のものと殆ど時期を等しくし開版

せられた整版本に寛永十二年の刊本（刊記、寛永十二年乙亥二月吉日開板之）があり、三十六曲全部が開版されたものか否かは未詳であるが、管見に入つたものは、あつもり（岩瀨文庫藏）・えぼし折（下卷東洋文庫藏）（十行大字、字面の高さ七寸分、句讀點附刻）等の若干に過ぎない。幸田成行博士は嘗てこの種の揃本に近いものを一見せられたといふ。（國書刊行會本舞之本解題）其の後、江戸初期の刊行に係る三十六曲揃本は二種（無刊記本）あり（阿波國文庫二種藏、但し、各々若干缺あり）其の他に有刊記本としては、揃本は管見に入るものなく、同種印本に一曲毎に刊記の年時を異にしてゐるものが多いのを見ると單行的に上梓せられたものであらうと思はれる。卽ち管見に入つたものは左の如くである。

江戸初期刊本

(1) 明曆二年刊本　景清（刊記、明曆二丙申仲冬　書林中野氏道也新刻）（近古小說解題）

(2) 明曆四年刊本　あつもり（二冊）・とがし（二冊）（十四行二十一至五字不等）（明曆四年戊九月吉日山田市兵衞開板の刊記あり）（東洋文庫藏）

(3) 萬治二年刊本　かげきよ（二冊）（十四行二十七至九字不等。萬治二年仲夏吉辰開板の刊記あり）（東洋文庫藏）

(4) 寛文年中刊本　（寛文七年刊）笈探し（二冊、神宮文庫藏）

（寛文九年刊）大しよくかん（一冊、神宮文庫藏）

（寛文年中刊）あつもり・かまた・とがし・わださかもり・十番切（各一冊、神宮文庫藏）

(5) 山本長兵衞開板本（十一行）堀河夜討（二冊）（東洋文庫藏）

(チ)昨日は今日の物語 附、戯言羪氣集

(ヲ)昨日は今日の物語　二卷　二册

附、戯言羪氣集　二卷　二册

昨日は今日の物語は近世初期頗る流行を極めた。全卷、小笑話の結集であるから、內容章段の異るもの多く、就中寫本で傳はるものは內容も豐富である。本書の性質上、刻本には省略したものもあらうし、又傳寫の間に敷衍せられたものもあるのであらう。寫本、岩瀨文庫(高橋仙果手校)・多和文庫・松井簡治博士等藏。版本は、古活字印本六種の他に寛永十三年刊本久原文庫藏(待賈堂・只誠舊藏)一册・寛永中刊無刊記本八行小本、下卷(六十五葉)帝國圖書館藏。九行小本上卷一册安田文庫藏。等の古い整版本もあるが、何れも若干內容を異にし、章段數排列順も互に出入があり、又同一笑話中に於いても其の行文を異にする。又他に其の內容は昨日は今日の物語の一本であるが、書名のみを「戯言羪氣集」と稱する一本(古活字印本)もある。

六種の古活字印本を整理すると左の如くなる。內容の豐富なもの程後刻であらうと思ふ。

第五四七圖
第五四八圖

(一)第一種本(八行本)慶元中刊。八行十七字。字面の高さ約五寸五分。活字は比較的大なり。同種活字を以て組換へたるものあるも、兩版の前後は未詳なり。上卷は五十七段を含む。

(イ)種　安田文庫藏*震災に燒失。寫眞一葉殘存す。　(ロ)種　刈谷町立圖書館*上卷一册、大館高門舊藏。藏

第五四九圖

(二)第二種本(九行本)慶元中刊。九行二十一字。字面の高さ約七寸一分。　神宮文庫*村井敬義請本、林崎文庫舊藏、褐色原表紙存す。二册藏

第五五〇圖

(三)第三種本(十行本)元和寛永中刊。十行二十三字。字面の高さ約七寸二分。活字は稍小型なり。下卷は六十三段を收む。

高木文庫（下巻一冊、栗皮色原表紙存す。）藏

安田文庫（金地院舊藏、中川得甚・角田竹冷舊藏、栗皮色原表紙存す。二冊）藏

第五五一圖

（四）第四種本（十行本）元和寛永中刊。（十行約二十一字。字面の高さ約六寸七分。上卷七十八段（三十五葉）下卷六十三段（三十四葉）。他の諸刊本に比し最も内容豐富なり。）

第五五二圖

（五）第五種本（十一行本）元和中刊。（十一行約二十二字。字面の高さ約七寸二分。上卷六十七段（三十葉）下卷六十六段三十一葉）を收む（版心「上下二丁數」）。卷末は上京は常是さいふ人の段にて終れり。）

久原文庫（中井文庫舊藏）・高木文庫（眞頓寺實堂舊藏）・安田文庫（震災にて燒失、寫眞一葉のみ存す。）藏

戲言養氣集

附、戲言養氣集　　二卷　　二冊

本書は昨日は今日の物語の一異本さも稱す可く、上卷に四十二段、下卷に三十段の小話が所收せられてゐるが、傳本極めて罕に嘗て安田文庫に存した唯一の完本が震災に燒失して、現に同じく安田文庫に下卷一冊を藏するのみである。（内容は、安田文庫本に據つて未刊隨筆百種に收められしものなり。）

第五五三圖

下卷小話所收總紙數二十二葉（十一行十三至五字。字面の高さ約四寸。橫本にして未見の活字を用ふ。女訓抄安田文庫藏と同種活字なり。）「大かたかへてよからん物」の段より「檢地わびことの事」に至る。第二十三葉以下には「前關白秀吉公御檢地帳」（第二十七葉まで）「朝鮮國御進發之人數帳」を附してある。（後證參照）恐らく之は卷末に秀吉の檢地に關する小話を收めてある爲に附錄としたものであらう。右二附錄の末に「人心之圖」の一段があり、天正の初めの頃の人白糸宗印の逸話を述べて、其の終葉に宗印の詠歌「世の中の人の心の色々にそむさも元は一つ白糸」を揭げ、黑衣頭巾姿の宗印の像

吉田文庫藏本（柳亭種彦手識）

を刻してある。

安田文庫藏本は（丹表紙原裝、大いさ縱四寸六分半、橫五寸五分半）柳亭種彥舊藏、卷末に左の墨書識語がある。

柳亭考　文祿ノ帝ハ後陽成院なり」それを今上皇帝としるしたれば」此冊子は慶長十六年の前に」書あつめし事必せり可惜」上ノ卷を闕」文政庚寅四ノ十」

（ロ）竹齋

（ロ）竹齋　　二卷　　二冊

竹齋は烏丸光廣の作と稱する、所謂文學的地誌の濫觴である。內部徵證に據れば元和末年より寬永中期頃までに著作せられたものであると言ふ。其の古活字印本の版式より推して、創作後直ちに印行せられたものに相違ない。活字印本兩種の刊行前後は未詳であるが、共に寬永後半には降らぬものであらう。後刻の整版本には寬永頃刊行の無刊記繪入本（安田文庫藏）を初め天和二年刊繪入本（三冊、東洋文庫藏）等種々あり、又後世之に擬して「上り竹齋」「新竹齋」等も現れてゐる。

（一）第一種本（十行大本）（每行十九字。字面の高さ約七寸。上卷二十五葉下卷二十三葉。版心チク上（下）（丁數））　*成簣堂文庫藏

（二）第二種本（十一行小本）（每行二十一字。字面の高さ約七寸六分。上下合一冊。）　*靜嘉堂文庫（福田文庫舊藏）・久原文庫（首一葉補鈔）藏

（ハ）からみのすけ　　二卷　　二冊

恨の介も創作後間もなく印行せられたものである。柳亭種彥の好色本目錄には栗原柳庵の所說を引いて慶長十四年以後の作としてゐるが、古活字印本の版式より言へば

元和年間を降らぬ印行であらうと思ふ。傳本極めて罕に、震災前に東京帝國大學に一本所藏してゐたと言ふが（樋口慶千代氏示教）現存するものは安田文庫藏の上卷一冊のみである。每半葉十二行二十一字。字面の高さ約七寸一分。版心「上（丁數）」。總紙數二十二葉。褐色原表紙を存し、大いさ縱九寸一分、橫六寸四分。

整版本は何れも繪入で、寛永後半期頃の刊本（高木文庫藏）を初め、明曆・寛文等種々あるが、何れも傳本が少い。然し、種彥等の言つてゐる如く、當時は最も流行した假名草子の一つであつて、浮世草紙の先驅を爲したものである。

(ヨ)伊曾保物語

(ヨ)伊曾保物語　三卷　三冊

伊曾保物語の平假名交り古活字印本に就いては新村出博士の研究等があつて、既に詳細に說かれてゐる（文祿舊譯伊曾保物語明治四十年刊、昭和四年訂正版（新村出氏））切利支丹版にはローマ字本があるが、國字本とは內容を異にし、國字本は、慶長・元和より寛永年間に互つて、數次の活字開版が行はれ、其の雕刻活字の樣式を異にするもの五種、異植版を合して七種に及ぶのを見ても、當時流行の狀が察せられる。順次先行本を承けて飜字し、其の本文は何れも同一、異る處があれば、誤植に過ぎない。共に上中下三卷、各卷首に目次を附し、（上卷二十段、中卷四十段、下卷二十四段挿畫はない。古活字印本を飜刻した萬治二年刊整版本は挿畫刻本で、之には其の本記を異にするものが二種ある。（一は高屋清兵衛、二は[illegible]三右衛門、又[illegible]刊。）

第五六一圖

(一)慶元中刊本　十一行二十二字。字面の高さ七寸四分。圖字本中最古刻本。版心「イソホ上(中・下)(丁數)」。本書と同種活字印本に大和物語(十一行本)等あり。　京都帝國大學舊藏寶鏡寺・帝國圖書館「尾府內庫圖書」印記・静嘉堂文庫*・東洋文庫「眞顔」「山岡文庫」菊廼舍文庫等印記あり。原題簽を存す。藏

第五六二圖

(二)元和中刊本(第一種)　十二行二十一字。字面の高さ約七寸七分。十一行本に據りて飜印せしもの、版心に至るまで之を襲へり。活字の樣式、河原町仁衛門刊平家物語と同一なり。　安田文庫*舊藏大槻氏・內野氏皎亭文庫狩谷望之・田澤仲舒等舊藏、神田孝平より小中村清矩に惠れるもの。藏

第五六三圖

(三)元和中刊本(第二種)　十二行二十二字。字面の高さ約七寸四分。第一種本と同じく十一行本に基きて飜字開版せるもの、第一種本と略共時の刷印なる可し。　新村出氏*下卷一冊藏

第五六四圖

(四)元和中刊本(第三種)　十二行二十二字。字面の高さ約七寸三分。第一・二種本と版式異れり。　佐々木信綱氏*奥田三角舊藏、生川正香識語あり。竹冷文庫舊藏、中卷缺藏

第五六五圖

(五)寛永中刊本　十一行二十一字。字面の高さ約七寸。寛永十六年刊本と同種活字異植版にして、刊記なけれど、本書の方がかへつて先行なる可し。　圖書寮*不忍文庫・阿波國文庫舊藏藏

第五六六圖

(六)寛永十六年刊本　十二行二十一字。字面の高さ約七寸。濁點附活字を交ふ。卷末に「寛永十六年卯月吉辰」の年時を刻せり。同種活字を以てせる異植版あり。また同じ年時を刻せり。

(イ)種　東京文理科大學藏芸堂・待賈堂舊藏、丹表紙原裝。・安田文庫*大槻氏舊藏、下卷・伊藤爲之助氏藏

(ロ)種　成簣堂文庫*原裝三冊・彰考館文庫小山田與清納本、下卷一冊零本藏

第五六七圖

(タ)ぢんてき問答

(タ)ぢんてき問答　一卷　一冊

ぢんてき問答の管見に入つた最古の傳本は静嘉堂文庫所藏本慶長十三年の片假名交りの書寫本一冊と安田文庫藏本慶長中寫の類であらう。恐らく撰述後間もなく書寫せられたものと思はれる。

活字印本は、之を假名草子風に書き改めたもので、當時の人士に喜ばれたものと見えて慶長末年より寛永年間に亙つて、數度の開版が行はれた。寛永九年には整版本（判紙本）も現はれ以後江戸末期に至るまで小型本として盛んに重版せられてゐる。

第五五六圖

（一）第一種本（慶長元和中刊）十一行二十字。字面の高さ約七寸四分半。　神*宮文庫藏　林崎文庫舊藏、村井敬義納本。褐色原表紙、大いさ縱八寸八分、横六寸四分。卷末に「寛永元甲霜月吉日　助日根三郎（花押）（印）」の墨書識語あり。

第五五七圖

（二）第二種本（元和寛永中刊）十一行二十字。字面の高さ約七寸三分。第二至四種本の三版は殆ど同種活字の異植版といふも可なり。　成*簣堂文庫藏

第五五八圖

（三）第三種本（元和寛永中刊）十一行二十字。字面の高さ約七寸三分半。總紙數三十七葉。　久*原文庫藏

第五五九圖

（四）第四種本（元和寛永中刊）十一行二十字。字面の高さ約七寸三分。　東*洋文庫藏

第五六〇圖

（五）第五種本（寛永中刊）十一行二十二字。字面の高さ約七寸八分。濁點附活字を混ぜり。（中に少ちんてき丁數）。總紙數三十六葉。本書は他の諸刊本に比して數式書しも畧る。古活字印本中最も後出なるべし。　高*木文庫藏

（レ）一休水鏡

（レ）一休水鏡　一卷　一冊

一休水鏡は、だんてき問答と共に流行し、古活字印本も多數開版せられ、整版本も亦寛永九年以後輩出してゐるが、凡て判紙本以下の小型本が多い。水鏡の次に二人比丘尼を併せ、末に鈍一休とある。其の最古刻本は、慶長中頃の刊行で、之に次いで慶長中の刊行に係る層種の異植版があり、更に寛永年間に亙り、二種の小型本がある。

第五七〇圖

(一)第一種本(慶長中刊) 十行十八字。字面の高さ約六寸八分。平家物語十行本(松井簡治博士藏)と同種活字印本なり。 久原文庫(原表紙に語歌集と外題書きあり。)藏

一誠堂書店にありし平家物語慶長寫本表紙裏張に其の零葉を見る。

第五六八圖

(二)第二種本(慶長中刊) 十行十九字。字面の高さ約七寸一分。平治物語第四種本と同種活字。之に兩種の異植版あり。

(イ)種 安田文庫・高木文庫藏

第五六九圖

(ロ)種 安田文庫・帝國圖書館(三馬・榊原芳野舊藏)藏

第五七一圖

(三)第三種本(慶元中刊) 八行十七字。字面の高さ約五寸七分。總紙數二十六葉。中本。 東洋文庫(大田南畝・石塚豐芥子舊藏)藏

(四)第四種本(元和寛永中刊) 九行。小本。 臺北帝國大學(不忍文庫・阿波國文庫・市島春城翁舊藏)藏

(ソ)天正記

(ソ)天正記 太田牛一撰 十五卷 九冊(五冊)

天正記は、武田氏滅亡・秀吉毛利攻めより慶長元年に至る秀吉の動靜を記るしたものである。其の卷七に御檢地帳の目錄等を所載してあるのは、古活字版として他に戲言狼氣集所載のものや、單行のものが存在するので注意される。或は本書が其の基となつたものであらう。慶長十五年太田和泉守の奥書があるが、其の後間もなく印行せられたものと思はれる。其の最初に現れた活字印本は慶長極末年か元和初年であらう之に次いで相前後して三種の別版(活字印本)がある。第二種本以下は第一種本に若干補訂を加へてある。

第五七二圖

(一)第一種本(慶元中刊) 十一行二十字。字面の高さ約七寸。濁點附活字を混ず。活字の大いさは他の三本より小なり。 內閣文庫(昌平坂學問所舊藏(合)三冊)・栗田元次氏(第七・八冊鈌、七冊。酒井忠勝(朱印)舊藏)藏

第五七三圖

(二)第二種本(元和中刊)十一行二十一字。字面の高さ約七寸八分。活字の大いさ諸本中最も大なり。　静嘉堂文庫(好文堂印記あり。八冊)・安田文庫*(原装・九冊)・成簣堂文庫・栗田元次氏藏

第五七四圖

(三)第三種本(元和寛永中刊)十一行二十字。字面の高さ約七寸四分。五冊　刈谷町立圖書館・岩瀬文庫*(野口道直舊藏)藏

第五七五圖

(四)第四種本(元和寛永中刊)十一行二十一字。字面の高さ約七寸五分。振假名附活字を用ふ。版心「天(巻數)(丁數)」　小山弘房氏*(合三冊)藏

(ツ)信長記

(ツ)信長記　太田牛一輯錄 小瀬道喜重撰　十五巻　八冊

小瀬甫庵の自筆稿本が織田子爵家に傳へられてゐると言ふ。其の新しい影鈔本(平假名交り)は成簣堂文庫に一本を藏する。本書も撰述後餘り時差なく刊行せられたものであるが、其の初刻は元和八年刊本であらう。以下元和寛永中に數版行はれてゐる。(何れも片假名交り)。整版本も早くより行はれ、元和八年杉田良庵開版の一本があるが、其れを重刊した寛永元年刊本よりは巻末に增補が加へられてゐる。

第五七六圖

(一)第一種本(元和八年刊本)單邊、無界、十三行片假名交り。匡郭内縦七寸五分、横五寸五分。版心「信長記(巻數)」(丁數)」。巻末に「于時元和八壬戌暦三月吉辰」の刊記あり。　高木文庫*(褐色原表紙存す。巻九・十の一冊缺、七冊)藏

第五七七圖

(二)第二種本(元和寛永中刊)單邊、無界、十二行片假名交り。匡郭内縦七寸四分五厘、横五寸五分五厘。版心「信長記(巻數)」(丁數)」。　安田文庫*(代赭色原表紙に「信長記(巻數)」原題簽存す。第一冊裏表紙に「八巻之内 持主 一瀬五右衛門」の墨書識語あり。八冊)藏

第五七八圖

(三)第三種本(元和寛永中刊)單邊、無界、十二行片假名交り。匡郭内縦七寸四分、横五寸六分。版式等凡て第二種本と同一、同種活字の異植版なるべし。　久原文庫*(改装、舊竹文庫舊藏、十二冊)藏

第五七九圖

(四)第四種本(元和寛永中刊)單邊、無界、十二行片假名交り。匡郭内縦七寸四分五厘横五寸七分。第二・三種本と同種活字。異植版なるべし。　成*簣堂文庫(原表紙存す。朱墨點書入、三冊)藏

第五八〇圖

(五)第五種本(元和寛永中刊)雙邊、無界、十二行片假名交り。匡郭内縦七寸四分五厘横五寸五分。版心「信長記(卷數)(丁數)」。源平盛衰記第二種本と同種活字印本にして稍小型の活字なり。　東*洋文庫(五冊)藏

第五八一圖

(六)第六種本(元和寛永中刊)單邊、無界、十二行片假名交り。第二至四種本と活字の樣式を異にす。　東*京帝國大學(舊南葵文庫本)藏

(ネ)聚樂物語

第五八二圖

(ネ)聚樂物語　　三卷　　三冊

本書は一名「關白物語」とも稱し、關白秀次滅亡の顛末を記るした事實小説とも稱す可きものである。實際に其の推移を目擊した者の撰述に係るものであらう。撰述後間もなく印行したものに相違なく、古活字印本は寛永中の刊行と認められる。傳本極めて罕に、成*簣堂文庫に一本(原題簽、原表紙存す。菅沼氏章印記あり。)を見るのみである。毎半葉十一行二十一字。字面の高さ約七寸。濁點附活字を用ひてゐる。整版本としては寛永十七年の刊本(圖書寮藏(末記寛永拾七年五月日杉田勘兵衛開板))が最も古い。

(ナ)大坂物語

(ナ)大坂物語　　一卷(二卷)　　一冊(二冊)

大坂夏冬兩陣の戰記を傳へた大坂物語は、上下二卷、上卷は冬陣、下卷は夏陣、大坂落城の有樣が描かれてゐる。全篇德川家を憚つた書き方をしてゐる事は言ふまでもないが、眞田幸村を初め大坂方の武將に就いては作者も同情を寄せてゐる。其の行文は、擬古

的な修飾を常套とする所謂假名草子一流の體を出でず、餘り優れた文章と言ふ事は出來ないが、大坂の役直後平易に其の合戰の大略を報道した事實を扱つた物語としては、其の目的に添うたものであらう。無論其の內容には史實と違ふ事も若干見える樣である。

大坂物語の結構

上卷は、關ヶ原の戰に初まつてゐるが、石田三成等をむほんのくはだてをなし(云々)と言つてゐる。其の後關東大坂の不和が募つて遂に大坂合戰となつた次第を記るし、冬陣の戰記は、主として寄手の關東方堀尾山城守・石川主殿助・伊井掃部助・越前少將等の功名を讃え、從つて大坂方に就いてはゑつたが城の薄田隼人等の負けいくさ等を報じてゐる。何れも關東方に心を寄せた書き方をしてゐて、事實なども曲げてゐる樣であるが、ともかくも表面世は平和にかへつて、めでたしと結んでゐる。

下卷は、和睦いくばくもなく再戰、其の戰話の大半は、大坂方武將討死の記載に費されてゐる。先づ伴團右衞門の討死を最初に、大和路へ家康の攻擊に向つた木村長門守・山口左馬助・薄田隼人、又は後藤又兵衞等の相續く戰死と、更に大坂方の柱石と賴む眞田幸村の最後等を語つてゐる。其の間僅に越前少將等關東方の戰功を敘してゐるが、後半は大坂城中の最後を述べ、終りに長曾我部入道・大野道犬等、及び秀賴の側室の若君捕はれの事などが見える。

大坂物語の著作年代

この大坂の兩陣の戰記を傳へた大坂物語全篇は、元和元年五月以後の著作である事は言ふまでもないが、之が果して何時何人に據つて創作せられたかはこれまで不明である。然し、大坂の役後、餘り年時の隔らぬ頃の作品であらうと言ふ事だけは考へられてゐた。然るに先頃、この物語が大坂の役の各陣の直後著作出版せられてゐた證據となる資料を發見した。其れは、靜嘉堂文庫所藏古活字印本日本書紀（慶長十五年刊本）の原表紙裏張りより發見した「銀子請取之日記」である。これは大坂物語のみならず、所謂慶長版の研究に種々有益なる資料を提供するものであり、又、該日本書紀の刊行に關する種々なる事情をも明らかにし得るものであるから、茲に紹介して置かうと思ふ。

靜嘉堂文庫所藏の日本書紀（三十卷十五冊）の古活字印本は、慶長十五年の刊記がある一本（五八〇頁參照。）であるが、其の原表紙の裏張りから現れた零葉と本書の書入の年代とより推せば、少くとも元和二年の春期の製本發行と認む可きものである。即ち、本書には、元和二年五月十八日（卷三）より同年十一月（卷二）に亙つて山田以文の先道忠が卜部家の舊鈔本に基いて校正した書入がある。次に又、原裝の儘を傳へてゐる本書の表紙裏張りから、倶舍論頌疏八卷第一葉（慶長十六年一條清和院刊古活字印本）・徒然草壽命院抄古活字印本第三種本卷初二葉・徒然草十二行古活字印本七葉と、「銀子請取之日記」數葉の書類とが發見された。其の「銀子請取の日記」は美濃型紙を縦に二つ折にして認めたもの僅か六枚の零葉に過ぎ

ないが、幸にも其の第一葉と認められる部分が發見せられ、其れには左の如く記るされてゐる。（今、下段は便宜倒書する。）

銀子請取之日記
八分　判之ちん
一匁　さつ病
二匁五分　和玉篇
二匁一分　同
正月廿二日
六分　表ちん
四日
二匁一分　わこく　壹部

（八）分　さいしやうか
□三匁　平家
□分　上るり
□分　八卦
□分　大坂物語
□六分　上るり
□匁四分　表ちん
□分　三重ゐん

銀子請取之日記の性質

この書類が表紙の裏張りから出たものである點より考へれば、之を製本師の手許に於ける銀子請取之日記とする事は極めて穩當であらう。右に言ふ所の「表ちん」は表紙の代價である事は無論、殊に別紙には明かに「三分ひようしちん」とあり、又其の次行に「一匁ゆゑんのすみうり」等とあるのは、右に「判之ちん」とあるのを摺代と考へる事を扶けるものであつて、之等の記載は當時に於ける製本作業が、植字・摺刷等汎ゆる出版事業の手順の最後の工程の一として凡て同じ場所で扱はれた傍證となるものであらうと思ふ。

銀子請取之日記中に見える慶長版

然らば、書名の頭書は該書籍一部の價格を示すものと認められ、本書類は慶長前後の新刊書籍の價格をも知り得る貴重なる文獻となる。又、右の請取書の中に現れて來る書名に該當する諸本は、何れも現存の慶長末期開版書中に之を見出す事が出來る。又、この書類に據つて、不明であつた刊行年時の限定せられるに至つた刻本も少からず存する。今其の中に見える書名の大體を擧げ、之に該當すると考へられる慶長版を併せ注記すると次の如くである。

大學・中庸　正運刊古活字印本にも兩種あり、下村生藏刊古活字印本中庸も存すれど、他になほ慶長中の開版と認む可きは正運刊古活字印本中の一種を覆刻せる整版本なり。請取書中のものの之に相當る可し。

論語(ろんご)　慶長中刊古活字印本其の數多ければ、玆に見ゆるは、恐らく古活字印本を覆刻せる慶長末期の整版本なる可く思はる。

ゐんきやう　韻鏡は、慶長十三年涸轍書院刊古活字印本と、其の覆刻整版本と、別に享祿刊本と世に誤たるゝ整版本(元和刊行か。寛永十八年刊本は刊記のみ追刻せる其の後印本なり。)とあり、玆に言ふもの或は慶長十三年刊本かと思はるゝは次の千字文と併せ考ふるを以てなり。

三りやく　三略は伏見版の他、別に單行の古活字印本あり、又慶長十八年刊覆伏見版七書(整版)中にもあり。其の兩本中の一なる可し。

千字文　古注千字文は、元和刊本には元和三年刊古活字印本・無刊記古活字印本等あれど、慶長版は慶長十三年涸轍書院刊古活字印本一種のみ。韻鏡慶長十三年刊本と同一刊行者なる點注意す可く、或は本請取書も其れ等關係者のものなる可きか。

古文眞寶　慶長刊古活字印本には、慶長十四年刊本を初め其の數多し、

さんこく　山谷詩集注も多くの古活字印本あり、其の中、元和以降と認む可きものもあれど、慶長中の整版本は見えねば、茲に言へるは古活字印本中の一なる可し。

綮病　綮病指南は慶長元年甫庵版の外、慶長後期の刊行と認む可き古活字印本横小本二冊あり。

八卦　八卦圖會は慶長十六年刊整版本（折本）一帖あり

三重ゐん　三重韻即ち聚分韻略は、慶長十一年醫德堂刊整版本の他、慶長後期刊行の整版本數種あり、何れも小型本なり。以上三本中の一なる可し。

節用集　慶長中刊行の諸本頗る多けれど、何れも整版本にして、古活字印本は一もあらず。茲にも度々書名見えたり。恐らくは慶長後半期刊行の覆易林本・慶長十五年壽閑刊本・同年小山仁右衛門永次刊本・慶長十六年刊本等の類なる可し。

和玉篇　古活字印本三種現存すれど、在來古活字印本と稱するは實は何れも整版本を誤認するものゝ如く、茲に言へるも慶長十五年・同十八年刊整版本中の一を指せるものなる可し。

きんしうだん　錦繡段の慶長頃と覺しきものゝ管見に入れるは、軸裝の他、古活字印本一種・整版本一種あり、兩者の一なる可し。

大ねんだいき　何本を指せるか不明なるも、或は倭漢合運圖かとも思はる。然らば、要法寺版古活字印本諸本の他に、慶長十六年刊行と目せらるゝ整版本あり

これんだいき　本書は、或は倭漢合運圖に對し、小型にして、簡略なる小瀬甫菴の年代記略を對稱せるものか。之に活字印本と整版本とあり、古活字印本は慶長八年まで、整版本は慶長十六年までの記事年表を掲ぐ。茲に言へるは後者なる可し。

これき　古暦を後年印行せるものとも解し得れど、或は、當年の常用として印行せる暦本の殘部を

後年請渡しせるものと思考す。慶長初期刊行平假名の活字暦日(慶長九年暦)の現存せるものあれど、茲に言へるもかゝる類を指せるにや。

百くわん　百官は禮節と共に、慶長十七年に慶長十三年清原秀賢刊古活字印本と同種活字を以て刊行せられしものあり。

しよれい　武家諸禮集(平假名交り古活字印本)數種あり、其の中に慶長極末期刊行と認め得可き一本あり。

伊勢物語　嵯峨本古活字印本十種の他に、慶長中期以前刊行と認む可き古活字印本一種、及び嵯峨本を覆刻せる整版本一種あり。本書牘中、伊勢物語は十部一度に渡せる由記るせし處等あり。恐らく右覆刻整版本を指せるものなる可し。

平家　平家物語の慶長中刊古活字印本、平假名片假名併せて十數種あり。其の何れなりや明かにし難し。

つれ〴〵　慶長中刊行のつれ〴〵草古活字印本多けれど、茲に言へるは、本書牘と共に現れたる十一行句點附古活字印本の類なる可し。

つれ〴〵抄　徒然草壽命院抄も異版多し。之も共に書皮中より現れたる古活字印本第三種の類なる可し。

上るり　淨瑠璃物語は慶長中刊古活字印本(繪入)三卷本あり、其の挿畫、嵯峨本伊勢物語の雕版を巧に利用せるものあり。

ぢんてき　ぢんてき問答の慶長中の刊行と認め得べき古活字印本は平假名交り本三種あり。

うたひ　觀世流謠本は嵯峨本數種の他慶長十一年以前に刊行せられたる小型の古活字印本も存せし事明かなり。茲に言へるは何本か不明なるも、或は嵯峨本中、後出の一本なる可し。

大坂物語　本書題中、王前處に見ゆ。

大坂物語の刊刻年時

この請取書は、既に元和二年五月に書入を行つてゐる日本書紀の表紙裏張りに用ひられて廢紙となつてゐる以上、其れ以前のものである事は言ふまでもない。然も「銀子請取之日記」とある部分は當然卷頭でなければならないが、其の部分に正月の日附があり、他の數葉には、七月・十月等順次日附が肩書されてゐる。そして、大坂物語は其の卷頭の部分の正月と、七月の部分とに見えてゐて、七月の方は大坂の役終了後の元和元年の七月と認めるに論はないが、正月の方は、元和元年か否か、一應疑問を存する。表紙裏から發見されたこの數葉のみに就いて見れば、正月の部分は確かに卷頭の部分であるから、七月・十月等の部分より以前の記錄と考ふ可きであるが、或は又、年が改つて紙數を別にしたもの、從つて七月・十月等は前年の元和元年、正月は元和二年に相當するものと解する事も出來る。然し又、一方より見ると、元和二年の五月以前に、其の年の、然も最も大切な金錢の請取帳を廢紙にする事も如何かと思はれるから、この正月は元和元年と認めるのが穩當と考へる。さうすると大坂物語は元和元年正月末には著作出版せられてゐなければならない事となつて、まだ大坂の役の夏陣勃發以前、漸く冬陣が收つて一旦和議が成立した頃に現れたものとなるのである。今、大坂物語を見るに、上卷は冬陣、下卷は夏陣の戰記に相當し、下卷は明かに上卷に書き續いで完成せしめた形式になつて

大坂物語の上卷と下卷

ゐるが、上卷は下卷を豫想した行文といふよりも、寧ろ上卷のみで其の結構が完結し、上卷の部分のみで單行たり得る性質を持つてゐる。之を裏書すると考へられるものは左記の大坂物語の初版と認め得る古活字印本第一・二種の樣式である。

兩本共に卷頭には單に「大坂物語」とのみあり、下卷に相當する部分を伴はぬ一册本である。殊に第二種本は、卷末に大坂城之繪圖が附載せられてゐて、之も二卷本なれば下卷末に附載せらる可きものが殊更上卷に相當する部分の卷末に存する事も、もと上卷に相當する部分のみ單行せられたものである事を示すものであらうと思ふ。卽ち、之等に據れば、大坂物語は、先づ上卷に當る冬陣の部分のみ冬陣終了の直後に早くも著作出版報道せられ、更に夏陣の終焉の直後下卷が書き續けられて、之も亦、七月には旣に上梓せられたものと解せられるのであつて、從つて右の請取書も、元和元年中の日附を指示するものと言ふ事が出來る。

かくの如くいち早く時事問題が物語となつて出版報道せられた事は、在來全く例のない處であつて、この物語がかくも世にもてはやされたと言ふ事は、如何に當時の人々が大坂の役に深き關心を持つてゐたかを如實に示すものである。大坂落城當時其の圖繪が瓦版ですぐに流傳せられた事實を思ひ併せるならば、大坂落城の次第を叙したこの物語がかく早く現れるに至つた事情も自ら首肯せられるであらう。

我が印刷文化史上に於ける創作出版の嚆矢

我が國の印刷文化史上に於いて、物語の創作が直ちに印刷に據つて發表せられると言ふ現象は、室町末期まで絶えて見る事の出來なかつた處であつて、これは、文祿慶長以後、急激に印刷文化が本質的なる發展を遂げる樣になつて初めて、現れそめた最も著しい傾向である。　卽ち、大坂物語は其の現象の魁をなすものと言ふ可く、我が國の印刷文化史上に於いても特に注意せらる可き興味深き作品と言はねばならない。

大坂物語第一種本

次に大坂物語の初版並びに重版に就いての考察であるが、大坂物語の古活字印本の管見に入つたものは六種であつて、之を整理すると左の如くとなる。　其の中、最初に著作出版せられたと認む可きは次の一本である。

第九六一圖

(一)毎半葉九行、毎行約十九字。　字面の高さ約八寸、卷頭には「大坂物語」とのみあつて全一冊、冬陣を描いたこの物語上卷の部分に相當し、其の行文から見ても一卷を以て完結の體を爲してゐる。　本書は、慶長中期以前から平家物語・保元平治物語・徒然草(十行)・枕草子(十行)等の先行刻本に使用された大型のものを用ひ、版式上からも、各種本中、最古刻と認む可きものである。　然らば「銀子請取日記」等の考證に據つて、元和元年正月以前、冬陣和議成立の直後、出版せられた一本に相當するものであらう。　管見に入つた傳本は帝國圖書館所藏青山文庫根岸信輔氏舊藏寄贈の一本のみで、「吉氏家藏」「高麗藏」「洞華堂(二顆)」(白文)「このゑしいもしげ」「やき」等の印記がある。　卷頭の本文が古活字印本第三種以下

の諸本と著しく異つてゐる。

大坂物語第二種本

(二)本書も第一種本の如く、卷頭には「大坂物語」とのみあり、第一種本の「濃州關かはら」が「美濃國關かはら」となつてゐる位の相違はあるが、其の内容は同一である。毎半葉十一行平假名交り、毎行約二十字。字面の高さ約七寸五分。活字は稍大型で、句讀の黑丸點を植版してある。同じく慶長中刊行の他の活字を襲用したものであるが、前の第一種本が光悅流と異る書風であるのに對し、之は光悅書風の亞流に類する。卷末には、大坂城之書*圖一葉を附載し、其の中央に聳えてゐる七層の天守を中心に鳥瞰的な戰圖を畫いてゐるのは、大坂城の盛時を眼の邊り眺めてゐる人々に示したものであるから、現時の我々にとつては、考證的にも有益なものに相違ない。成*簣堂文庫所藏の一本は、原題簽をも具備した原裝本であるが、下卷に相當する部分の一册を次の第三種本を以て補配してある。

第九八〇圖

第九八一圖

大坂物語第三種本

(三)第三種本は、毎半葉十二行平假名交り、毎行約二十字。字面の高さ約七寸六分。其の活字の樣式は、第一種本に類し、光悅書風とは異なる小型。第一册(上卷の部分)は、卷頭卷末共に先行の二本と同じく、下卷を作はない體裁を爲し、末に、第二種本附載の「大坂城之書圖」を後摺襲用してゐる。然るに本書には、同種の活字を以て印行した下卷一册がある。是は下卷の現れた最初であつて、恐らく、この種の印本の上卷に相當する一册を出版中、

大坂夏陣が起り、間もなく戰が終焉したので、直ちに下卷を書き繼いで、同種活字を以て印行したものであると考へる。其れ故に、同種活字を用ひながら、下は上に從ふの體裁を有してゐるが、上は下を豫測しない樣な兩冊が出で來つたのである。管見に入つた唯一の傳本は、上卷一冊*久原文庫藏、下卷一冊成簣堂文庫藏。成簣堂文庫藏本は、第二種本（一冊）に補配されてゐて、之と同じ印刷原題簽を有するが、之は、何等かの理由で第三種本出版の當時、第二種本に補配されたものであらう。

第五八六圖

大坂物語第四種本。

（四）第四は、毎半葉十一行平假名交り、毎行約二十一字。字面の高さ約七寸六分。元和中の刊行に係るものであらう。第三種本に比して活字の樣式は新味があり、上卷末に大坂城の繪圖はない。上卷の本文は本書より初めて改められた部分があるが、下卷は全く、第三種本を其の儘に飜字したものである。*成簣堂文庫に滴竹文庫傳藏の原裝を傳へた一本を藏する。以下の諸本は何れも本書の内容を基としてゐる。

第五八七圖

大坂物語第五種本

（五）は、右の第四種本と同種の活字を以て時を異にして出版せられた異植版である。其の二者の何れが先行刻本かは明かにし難いが、本書には元和中刊行の大和物語其の他の古活字印本と同種の活字が用ひられてゐるから、共に元和中の刊行と認められる。*東洋文庫藏本は丹表紙原題簽をも存した二冊、「うたのやにをさむるふみらのしるし」なる黑印記がある。成簣堂文庫にも亦下卷一冊を藏する。

第五八八圖

大坂物語第六種本

第五八九圖

(六)は、元和・寛永中の刊行かと認められる古活字印本で、十二行、二十字、字面の高さは約七寸一分。本文は前三者と全く同一である。附圖もない。*高木文庫藏本(二冊)は、原表紙を存しない故か、奥附刊記を缺いてゐるが、(或は元來之を缺くものであるかもしれない)名古屋市立圖書館所藏の河村秀根舊藏本(二冊)には、後表紙の裏に左の如き奥附刊記がある。

京四條坊門通　　敦賀屋久兵衛

摺刷の具合で行間等が稍ゆがんだりしてゐるが、之に據ればともかくも京都敦賀屋の開版に係はる事が明確である。之と全く同一の様式を持つた奥附刊記は、帝國圖書館藏古活字本ときは問答(本書と同種活字の舞之本を覆刻せる整版本に寛永九年の木記存す。本書の刊行年時を略限定し得。)や、寛永中刊附訓古活字印本を覆刻した整版本の源平盛衰記(靜嘉堂文庫藏)等、寛永年間の刊行書にも見出されるし、又東洋文庫所藏の古活字印本いざよひ日記の奥にも墨書せられてゐるものがある。慶長以來諸賈集覽にも、寛永中刊貞永式目註などが擧げてあり、敦賀屋は寛永より慶安頃まで京都に於いて諸書を印行してゐる様である。又かゝる點よりすれば、本書と同じく他の大坂物語の先行諸本も亦恐らく當時の出版事業の中心地たる京都に於いて相續いで上梓せられたものであらうかと思はれる。

初めて著作出版せられた大坂物語並びに其の後引續いて上梓せられた諸本は、以上の

各種古活字印本であるが、なほこの他にも別種の古活字印本が發見される事もあらうと思ふ

なほ以上の諸本は、第一種本が附圖一葉を有するのみで、何れも挿畫の無い刻本であるが、寛永中期以後に現れた整版本に至つて初めて挿畫が施される樣になつたのである。又、貞享二年以後の整版本に於いて前記各種の古活字印本と異る點は、卷末に「首帳」の附載せられるに至つた事である。この首帳は其の内容より見ても「當代記」の記載首帳などに據つて增補したものであらうと思ふ。（書誌學一ノ四、拙稿、大坂物語の研究及び善本影譜癸酉第八輯參照。）

（ラ）前關白秀吉公御檢地帳之目錄　附　朝鮮國御進發之人數帳・政要抄　一冊

（ラ）前關白秀吉公御檢地帳之目錄　第五九〇・五九一・五九二圖

秀吉の御檢地帳と朝鮮國進發之人數帳とは天正記の第五種本（小山氏藏本）中に所收せられてゐるが、其の方が或は本書よりも後年の印行に係るものかとも思はれる。本書にも卷末に小瀨甫庵編集の政要抄が附載せられてゐるから、この御檢地帳等も甫庵の手に據り他に資材を求めて編纂せられたものであるかもしれない。版式上慶長末頃の印行と認む可きものである。大型の活字を用ひ、單邊、無界、七行十五字。（匡郭、縱七寸四分、横五寸三分半。）前關白秀吉公御檢地之目錄六葉（版心「檢地帳目錄（丁數）」）。朝鮮國御進發之人數帳二十五葉（版心「朝鮮陣（丁數）」）。政要抄は小型の活字（朝鮮[illegible]中に[illegible]）を以て十二行二十二字（單邊、無界、縱七寸四分半、横五寸六分半）に植版し、六葉。完本は帝國圖書館藏の一本のみで、幸田成友氏藏本は政要抄を佚してゐる（[illegible]）

戯言狼氣集の卷末に御檢地帳目錄と朝鮮陣とを附印してゐる事は前述の如くである。

(ム)寛永行幸記

(ム)寛永行幸記　三卷(二卷)　三軸(二册)

寛永三年九月六日後水尾天皇が二條城へ行幸の次第を畫いた行列繪卷で、撰述後間もなく印行したものである。上部に次第書を附し、上下卷は行列の繪卷に説明を加へたもの、中卷は詞章のみで、樂の事、御歌の會の事以下當時の催しと御進物御引出物の目錄等を記してある。本書は烏丸光廣の撰述に係り、其の稿本(佐々木計次郎氏藏二卷)に基いて開版せられたものである。(但し、上卷女院中宮の行啓一卷は稿本になし。書物の趣味第六號今井貫一氏「繪入寛永行幸記の著者」參照。) 而して、現存の諸本には、版式を異にする兩種の活字印本があり、其の一種は更に異植版本が存在するが、烏丸光廣の稿本に據つて最初に現れたものは、第一種本であらうと考へられる。第一種本の管見に入るものは正宗敦夫氏藏の一本のみであるが、本書には惜しむらくは、若干缺脱がある。中卷と下卷とを合綴し、二軸となつてゐるが、之は元來三軸であつたに相違なく、中卷首數葉と、下卷末「大御所樣より御進物」以下に於いて數葉を缺いてゐる。活字は他本に使用したもの(附訓眞名活字混用)を襲ひ、若干新刻の附訓活字を加へてゐる。其の本文は光廣の稿本と同じく(但し、下卷末の御行幸の次第云々の跋文のみは稿本にはない。開版の際加へられたものであらう。)例へば、下卷首に稿本の如く「七日夜うたのくわいの座はい」とあるが之が第二種本には「御うたの」と「御」字を加へてある。かく第

平假名交り第一種本
第六九〇圖

一種本が稿本に從つてゐるのに對し、第二種本は隨所に訂正を加へ、例へば、中卷に於いて、第一種本には、「からす丸左中へんくろしやうそく」とあるのが、第二種本には「からす丸さいしやうくろしやうそく」と改められ、下卷に於ける御進物の目錄等も第二種本には省略が加へられてゐる。其の他「ほうい」「白丁」の人數等にも互に出入があるが、第二種本は、繪卷の人物注記の植版も整備してゐる。從つて第一種本は上卷紙數三十一葉であるのに對し、第二種本は二十九葉である。

第一種本(正宗氏藏本)は字面の高さ約八寸、料紙の幅約九寸。

平假名交り第二種本

第五九七圖

第五九八圖

第二種本は、活字の樣式全く異り、附訓活字を混用せず、第一種本に比して稍小型である。字面の高さ約七寸八分。繪卷中の人物等も全く別版である。本書には繼目に丁數の數字標識を附植してあるが、之は第一種本には見當らない。この種の活字印本には、兩種の異植版が存在し、安*田文庫に各一本を藏する。(イ)(ロ)兩種共各三卷三軸。但し(ロ)種は下卷を缺く。其の何れが先行であるかは未詳であるが、(ロ)種を基にして覆刻した整版が存在する點から見ると、或は(ロ)種の方が後出であらうかと思はれる。(ロ)種本は京都帝國大學附屬圖書館にも一本を藏す。)

以上の三種とも、凡て無彩色で、其の繪卷中の人物は、前方に現れてゐる人物の型を、後方に、於ける他の人物に度々襲用し、あたかも、同一の活字を屢々襲用するが如く、畫面の利

用を行つてゐる。前葉に用ひたものをすぐ次へ續く葉に用ひてゐる例も多く、之に據つて一時に一葉宛植版を行つてゐた事も判り、極度に同型の人物を利用して印刷してゐる事も知られる。此の書面利用は、前述の曾我物語等に見る所と同じく、活字版に相應する挿畫印刷法として注意す可き點である。

(ロ)種の覆刻整版本

又、右の(ロ)種を覆刻した整版本が存在する。其の種の刻本は、何れも雲母をかけた厚い料紙を使用し、印刷題簽「御行幸之次第上(中・下)」を有し、傳本中の一半は手彩色を施したものである。在來、此の種のものは、活字版と誤認せられてゐたが、精査の結果は後記附表の如くである。

眞名活字二卷本

又別に、金地院崇傳の撰述に係る眞名本二卷(古活字印本)もあつて、光廣の稿本より前に成立したものと考へられる。(書物の趣味第四號、山鹿誠之助氏「活字本寛永行幸記について」參照。) 然し、眞名本も寛永中の印行に係り、大型の活字を用ひ、(雙邊有界九行十七字。匡郭内縱七寸二分五厘、横五寸二分五厘。上卷九十五葉、下卷四十六葉。) 上卷七十三至八十六葉は整版を混じてゐる。

第[illegible]九[illegible]圖

傳本の管見に入るものは、阿波國文庫(二本)(一は不忍文庫舊藏、丹表紙原裝。)・靜嘉堂文庫東洋文庫(大谷木純堂舊藏、下卷一冊)久原文庫(中原出雲舊藏)藏の諸本である。

なほ平假名交り印本の管見に入つたものは左の如くである

(一)第一種本　正宗敦夫氏藏(山鹿氏の言ふ乙種本)

(二)第二種本　(イ)安田文庫藏

(ロ)安田文庫(鈇下巻)・京都帝國大學藏(山鹿氏の舊ふ甲種本)

附(ロ)種を覆刻せる整版本　東北帝國大學・京都帝國大學・東洋文庫・蓬左文庫・岩瀬文庫・成簣堂文庫・高木文庫・安田文庫二部等藏(手彩色を加へたる傳本多し)

(ハ)洛陽大佛鐘之銘抄

(ハ)洛陽大佛鐘之銘(抄)　一冊

豐臣秀頼の豐光寺造營の際に問題となつた國家安康の文字を含む清韓所作の大佛鐘銘の假名講說抄物である。本文はゾ式を用ひ、片假名交り、四周雙邊、無界、九行(漢字十九字)匡郭內、縱六寸四分、橫四寸三分。總紙數十八葉。判紙型本。卷末に「寛永三年秋八月吉辰」の刊記がある。稚拙な小型の活字を用ひてゐるが、この種の活字は他に襲用せられてゐるものを見ない。卷頭には「洛陽大佛鐘之銘」とのみある。管見に入つた唯一の傳本は建仁寺兩足院所藏の一本である。同本には「九面」の古印記を捺す。

遺記內裏御普請帳附明意寶鑑、補遺の條參照。

第九章　活字印刷術の衰退

活字印刷術の衙興

前述の如く慶長より元和・寛永に亙る約五十年間に於ける印刷文化は、活字印刷術の傳來に據り經濟問題を解決し得て、茲に一大轉換を來し、新式の活字印刷術を採用して、急激に異常なる進展を示したのであるが、寛永後半に至ると活字印刷に據る出版は次第に衰退して、遂に正保以後は、殆ど整版（一枚板に雕刻するもの）に據る樣になつた。其の主要なる原因も亦經濟的なる事情に依存するのである。

卽ち、一枚板に雕刻する方法に據る場合には、例へば、論語集解の開版を行ふとするならば、其の板木の使用に堪へ得る限り論語を印刷供給する事は出來るが、其の儘で別種の書籍を印刷する事は不可能である。從つて、論語集解一部の刊行に投ぜられた多大の費用は、全く固定し、板木は原姿の儘他の書籍の刊行に利用する事が出來ない。然し其の印行部數の要求が繁多であるならば、經濟的に收支相殺の結果を期待する事も可能となり、又、更に別種の書籍の續刊を促す事も出來るのであるが、室町末期に至るまでは、特殊の事情にある佛經の他は、需要の少い關係からも、供給の困難な事情が讀書圈を狹少にしてゐた點もあつて、因果關係をなすものではあるが、刻書は甚だ難事業と定められてゐたのである。比較的刊行の容易なる可き少量の佛經の開版さへも僧徒が

多大の努力を拂つて漸く其の志を遂げてゐる事は前述の如くである。

然るに、活字印刷術を採用すると、一種の活字を作成すれば之を用ひて各種の書籍を出版する事が出來、比較的些少の經費を以て其の希望が達せられるのである。平假名の活字若干數を用意すれば、之を以て汎ゆる假名書きの書籍を印行する事が出來るわけである。故に需要に應じて、活字を組換へて少數づつ各種の書籍を印行し、又、幾度か同一書籍の重刊をも行ふに至つた。然も現存諸本の印刷面より案ずるに、一時に僅か數葉のみを植版して直ちに摺刷を行ひ、數十葉一部の書籍の印行を完成するまでには、同一の活字を幾度も襲用し、活字を極度に利用してゐる事が、發見されるのである。

かくして漸く近世初期に至つて刻書は企業としての條件を具備するに至り、眞の出版書肆業の發達を見るに至つた事も亦前述の如くである。

活字印刷法の缺點

摺刷其の他の工賃に比して、料紙其の他の材料費を多く要する當時であるから、一度の植版に際して多くの部數印刷を行つて、之を在庫させて置くよりも、必要に應じて、何回も改版を重ね、少數づつ印刷を行ふ方が遙かに經濟的であつた。之が活字印本中に異版、特に同種活字の異植版本が多く存在する主要な原因である。當時の活字印本に同種活字異植版の存在する原因を印刷技術の不備にのみ求める在來の通說は、異植字版の比較精査の結果と、活字印本の版式の整備してゐる點とより見ても從ひ難い。

即ち、在來、若干部を印刷する間に活字植版臺の締括りに緩みを生ずるがために、中途に於いて、或は活字をさし換へ、込めものを訂正して印刷を續行するが故に、一部分のみ活字の體を異にする別版が生じ、一見全く同種の活字版と思はれるものに、實は多數の異版が存在するのであると說くのであるが、現存諸本の印刷面を檢するに、活字の轉倒等は殆ど例外的なる存在であり、又、印刷中に緩み等の生じた跡を認む可き活字の傾斜等も全く見る事が出來ない。且つ又、現存の天海活字の植版板面(寛永の古法を傳ふ)を檢しても、印刷中にかゝる不都合を生ずる程幼稚な用具を使用してはゐない。且つ又、同種活字の異植版本が二種以上存在する場合に、在來の所說の如く、僅かに數箇の活字のみをさし換へて印刷したといふ樣なものは存在せず、若し一見兩者の間に於いて一二箇活字の體が異つてゐると思はれる場合には、必ず全部が植み換へられてゐるものである。即ち、之は在來の異版研究の調査が極めて緩慢なるものであつた事を證するに外ならぬのである。

異植版多數存在の理由

要するに多數の異植版の存在する主要な原因は、右の如く經濟的の事情に基くものと考へられるのである。然し、現在の金屬製活字と異り、紙型の法等も具はつてゐないのであるから、餘り度々同書を重版する必要に迫られ、又一時に多數の需要を見る樣になると、多額の費を投じて一枚板に雕刻して其の開版を遂行しても、經濟的の條件が充足

活字印刷術衰退の原因

せられるに至り、茲に於いて再版に時日と手數とを要する活字印刷が不便となり、又、精緻なる挿畫刻本・附訓本其の他技術上の不滿足も出で來つて、次第に整版を使用する傾向となつたのである。この點からも、初めて整版として現はれる場合に、活字印本を版下とする覆刻が多く行はれてゐる事實(太平記・源平盛衰記・藻鹽草・花傳書・舞の本等前記參照)は注意す可きものである。

活字印刷術の衰退と整版の勝利

卽ち、一度は經濟的困難に解決を與へた活字印刷術が、其の發達に據つて印刷文化の隆昌・出版事業の確立を促進せしめた結果、其の保有する若干の缺點をも補ひ、經濟的にも好條件を具へる樣になつた整版の印刷法に、其の位置を讓つたのである。結局、近世に於ける活字印刷術の發達も、亦其の衰退も、共に經濟的の原因に歸一するものである。なほ活字印刷と整版との交替は寛永中期であるが、附載の年表に據つて一見明らかであるから、茲には詳述を避ける。但し、其の表は、活字印本が刊記年號等を有する刊行年時の明確なもののみであつて、多數の無刊記本を含まないものである事、及び整版本は單に參考に止めたので、十分に盡してゐない事等を考慮せねばならない。然し、寛永後半期の活字印本の性質と、同時期に現れた整版本の性質とを比較するならば、右に述べた經濟的な原因に據つて活字印刷・整版印刷の兩者が盛衰所を異にした狀勢を容易に了解する事が出來ると思ふ。

第十章　近世初期に於ける活字印刷の技術と活字の種類

斯道研究遲延の原因

我が近世初期の活字は、其の種類も頗る複雜豐富であり、且つ印刷せられた書籍其の物以外に殆ど研究資料を得る事が不可能な狀態であるから、其の分類整理も亦頗る困難な問題となる。西歐諸國の古活字版に於ける活字の種類は既に研究整理が完うしてゐると言ふが、西歐諸國の其れに比して我が古活字版に於ける活字の種類は遙かに複雜豐富なるものゝ如く、其の未整理の一因は玆に存するものと思はれるのである。而して又之は、在來の研究が遲れてゐた一原因と言ふ可きである。玆にも此の方面の研究はなほ今後を期する事として、其の大略を述べておかうと思ふ。

活字の材料

我が近世初期の活字は、其の材料よりすれば、銅製と木製とに二分せられる。初めて朝鮮から傳來した標本は銅製であつたと思ふが（文祿勅版に使用せられたものと考へられる事は前述の如くである。）我が國に於いて作成せられたのは、大多數木製であつて、

銅活字

銅製は極めて僅少である。之は材料・製法等の關係からであらうと考へられる。銅製の活字は、德川家康が駿河版（大藏一覽・群書治要）に使用したもの（紀州德川家現存、前記二三一頁參照）及び後水尾天皇の元和勅版（皇朝類苑）の其れ等で、所謂坊刻本には殆ど見る事が出來ない。那波道圓據刊の白氏文集等の活字は銅活字ではあるまいかと言はれてゐるが確證はな

い。なほ在來極めて印刷面の鮮明なる活字印本を目して、銅活字に據る印刷であらうと議するものがあるが、古活字版に於ける銅活字の印刷面は反つて鮮明を缺くのであつて、之は駿河版(二四)等の印刷面に注意すれば、容易に首肯し得る所である。印記に於いても銅印が木印よりも不鮮明に捺印される事實は、其の傍證を提供するものである。又、假名活字には銅製と確證あるものは見當らない。

銅活字の印刷面

當時の活字の現存するものも亦、極めて少く、徳川家康が雕刻せしめた前述(二二六頁)の伏見版の木活字(京洛の圓光寺に若干殘存してゐる)と、右の駿河版の銅活字(二三一頁)との兩者の他は、高野奈良、及び江戸寛永寺の天海僧正が一切經に用ひた、卽ち寺院版の其れ等が殘存してゐるのみであつて、坊刻本の其れは一も見る事が出來ない。

現存の古活字

叡山にも當時の木活字が現存してゐると言ふが、今實査し得たものは、高野山西禪院に現存してゐるもの(三一四頁)東大寺に現存してゐるもの(三一六頁)及び天海僧正が江戸寛永寺に於いて開版した一切經所用の木活字である。

天海版の木活字及び其の印刷諸具

天海版の一切經は、寛永十四年より慶安元年に至る十二年を經歷して完成したものであつて、正保以降は整版をも用ひてゐるが、活字版としては當時用ひられてゐた通例の法(或は最も進んだ方法を採用してゐたかもしれない)に從つてゐたものと考へてよからうと思ふ。現に寛永寺に保存せられてゐる天海版に使用した活字は、頗る多數で、先

年の關東大震災以後、舊庫が埋れた爲、今假倉の函中に保管してある。後世、江戸末期に於ける寛永寺開版の木活字・整版本の板木等も多數積載せられてゐるが、天海版使用の活字は、大體の大いさ、底部縦四分強四方、高さ六分、又、注雙行の小字は、縦四分強、横二分強、高さ六分が其の標準である。之を其の當時如何様に植版したかは、當時の附屬器具が殘存してゐないから確實な事は判らないが、後世に至つて、寛永寺中で古い活字を襲用して佛經を印行する際に使用した版臺の現存してゐるものを見るに、舊時の方法の俤を傳へたものと認められ、古風に據つて後に作製したといふ同寺の傳誦を裏書するものと思はれる。

寛永寺現存の組板の吟味

長方形の五分板の上に、略活字の高さと等しい厚さを有する細板四枚を以て組んだ枠(額椽様のもの。縦は活字十七箇植版の寸法をとり、横は印刷紙面一葉分)を重ね、竹釘で上下二枚を固定せしめて、其の枠内に活字を拾ひ、行間に一分板の罫線(之は印刷面には現れず、活字より高さを低くしてある)を挾み、所定の行數にのみ使用する様にしてあつて、行數の增減の全く不可能な版型で、他の版式に利用する事が出來ない。而して現存のものは折本仕立とする爲、上下にのみ匡郭を設け、之を上下の枠に刻込む方法を採り、別に匡郭を植版しなくてもよい様になつてゐる。此の方法は、現存諸古活字版の印刷面より案ずるに、比較的後に、特殊な書籍の專行に當つて考慮せられるに至つたものであらうと思ふ。匡郭の組み方は、左右の板(凹形)へ上下の板(凸形)を銜

へさせて、銜へさせた部分を竹釘で止める方法を採つてゐる。舊時の一般の方法は大體之に近く、恐らく現存の諸本の印刷面よりみて、右の匡郭を遊離せしめた形のものであつたであらうと推測せられるのである。

現存諸傳本を總合的に精査し、其の印刷面より案じた結果に據れば、匡郭を有するものは、必ず四方より組合せた所謂四注の形式を採り、固定した枠を用ひてゐるものは一も存在しない。後世江戸末期に於いては、三方を固定せしめ、右側のみ木片を移動して所要の寸法の匡郭を得る方法を用ひたもの、或は、原版には匡郭界線を施す事なく、別に罫紙を用意して之に印刷を行ふ法等が生じたが、其れ等は古活字版に於いては、全く見る事が出來ない。匡郭は四周雙邊若しくは單邊で、左右雙邊の場合は殆ど見當らない。

匡郭の樣式

四周雙邊の場合には、二線とも同じ太さのものと、外側が太く内側を細くした所謂「子持ち式」のものとの二樣がある。なほ現存諸傳本の印刷面より案ずるに、匡郭界線の印刷せられてゐないものも、四周は五分板で圍まれ、行間には適宜一分前後の細い界線を挾入してあつたものである事が判る。（印刷面に現はる可からざる其れ等の部分が、摺刷の具合で紙面に影出してゐるものに間々逢着するのである。）匡郭を有するものは、卷

版心の附植

數丁數等の標識を版心の部分に附植してある。匡郭を施さぬものは、卷數丁數を版心の部分に現はしてゐるものも若干あるが、其れ等は概して小型本であつて、大多數は版

心が印刷せられてゐない。但し、其れ等のものも製本等の便宜に供する爲、多く綴目の部分に丁附を附植してある。其れが製本の際切截せられずに殘存してゐるものが少くない。又、版心に何等の附植を行はぬもので、製本の際に於ける折目の標識として、小黒點を附植してゐる例(伊勢物語聞書二卷本(五〇八頁參照)等)もある。又、版心の部分には、駿河版群書治要・大藏一覽集の如く、所謂連續活字を使用してゐる場合もある。

なほ、無邊無界のものは版心を附植しないのが一般であるが、之を覆刻して整版とする場合には版心を設けてゐるのが通例である。例へば、源氏物語紹巴抄・藻鹽草・花傳書等の平假名交りの活字版には版心なく、其の覆刻整版本は何れも版心を刻してゐる。整版は附刻が簡便である事も主要な理由であらう。從つて活字版に於いては無訓のものが、覆刻本に於いて附訓となつてゐる例も存在する。右の源氏物語紹巴抄の如きは其の一例でもある。(但し右の中、藻鹽草には版心を有する古活字版一種あり、寧ろ例外とすべし。之に就きては補訂篇參照。)

版型の標準寸法

版型には無論大小種々のものが存在する事は言ふまでもないが、現存諸傳本の印刷面を檢するに、通例、每半葉、縱七寸、橫五寸を以て大體の標準としてゐる事が知られる。其れは料紙の寸法から自然に制限せられるに至つたものであらうと思ふ。

又、玆に附記す可きは、前述の天海版の植版法に關し、若干の傍證を提供する近世末期の

木活字である。江戸末期の活字と雖も現存してゐるものは極めて罕であるが、今玆には高木文庫現藏の一例を記述しておかうと思ふ。

高木文庫現藏の江戸末期木活字

高木文庫現藏の木活字は、京都書肆竹苞樓に傳はつた江戸末期のもので、引出し附の木箱（縦二尺七寸七分、横二尺四寸二分、奥行一尺二寸三分）に納め、片假名活字を含む楷書體の眞名活字、總數八千五百六十五箇を算する。活字の大いさは、縦三寸七分半、横三寸五分、高さ五分。殊に注意す可きは、未だ使用しない活字を殘存保有する事で、之は同大の小木片を粘樣のもので密着せしめ、一連約二十字の一小棒とし、同一の字型を雕刻してある。之を手にて割りされば一字型が得られるのである。即ち之は字型の大小を一定せしめ、植版に便せんが爲であつて、文字を刻して後初めて之を刄物もて切截すれば、植版の際字型が不揃ひとなる恐れがあるからである。

是等は恐らく近世初期に於ける活字作成の法を遺すものであらうと思はれる。なほ又、之には植版の臺が二面附屬し、其の一は未使用のもので型稍大に、舊時使用したものは、臺板の長さ一尺二寸一分、匡郭内の高さ約六寸三分五厘、まづ左隅初行の活字を植ゑ、次に界線を加へ、順次所望の行數に植版を行つて後稍太い木板を以て右隅を締めるのである。即ち動く部分は右隅最後の部分のみである。四周の邊界は臺板に定着してゐて、望みに從つて變更する事が出來ない。技術上から措劃には安定であるが、前述の

如く、此の點は古法ではなく、後世に發達を見たものと考へられるのである。此れ等の版面を一時に何枚程植版したかも未詳であるが、現存諸本の印刷面を檢するに、一時に數枚以上は植版を行はなかつたものと認められる。甚だしき例としては、前葉に用ひた特殊な活字を直ぐ次葉にも襲用してゐる場合が少くないのである。寛永行幸記(繪卷)に於ける人物型の利用等に於いては極端に之が行はれてゐる。

一時に於ける植版數

又、當時に於ける最も大規模な計畫であり、且つ經濟的にも十分の餘裕を有する駿河版印行に於ける記錄(本光國師日記二四三頁參照)を見ても、活字の數が大字約六萬餘、小字約參萬餘、合計約十萬を算するに對し、其の植版附屬器具は極めて小數で、「すりばん拾參面』『卦長短合百五拾四本』『つめ木四拾八本』等とあるのを以て見ても一時に於ける組版の枚數は極めて少く、植版と同時に校正して、直ちに摺刷を終へ、植版を解いてしまつたらしい事が察せられる。

一版の印刷部數

駿河版に於いてかくの如くであるから、他の場合にはなほ更少量宛行はれたものと思はれるのである。一版毎に於ける印刷部數も明確ではないが、前記の駿河版に於いては、百二十五部と明記してある。然し之も恐らく特に多數の場合であつて、通例はなほ少く百部內外(十九史略通考刊語參照)であつたものと推定される。

古活字版に於ける裝幀

因みに古活字版の裝幀に就いて附言する。粘葉裝のものは高野版中に若干存在し、綴葉裝(料紙を重ねて二折し、數括りを重ね、絲を以て綴つたもの、洋書のノートブック類似のもの)は、嵯峨本類及び高野版共の他の佛書中に多少

存在する。卷軸を爲すものは寛永行幸記と暦のみである。又罕には包背裝（松井簡治博士藏漢[illegible]千慮）眞の原裝の例としたものもある。以上の他大部分は所謂袋綴で冊子を爲すものである。

本文の料紙

本文の料紙は、楮を主材とするが、時に雁皮を混ずるものも若干存在する。又、嵯峨本の如き特殊な意匠を施したものもあり、（前記四一八頁參照）又、罕には陸象山文集等の如く唐紙を用ひてゐるものもある。

表紙と其の裝幀

表紙は各種の色紙を使用してゐるが、何れも一色で、多彩を施す事なく、紋様を書いたものはない。紋様を有するものは、何れも型を以て所謂から押しを行つたものである。其の方法は室町以前には見る事のなかつたものであつて、之は活字印刷術と共に朝鮮の影響に據つて發生したものである。

室町以前の印刷題簽

題簽を印刷して添附する事は、室町以前には餘り行はれてゐない。但し、之は長年月に於ける傳承の間に改裝せられ、其の原姿を殘存するものが罕である事も考へられるが、原裝の儘を傳へてゐる現存諸本を比較的多數調査した結果から見ても、室町以前に於ける印刷題簽を有するものは、天文五年（越前一乘ヶ谷刊八十一難經（書寶卷首大野氏藏））を見るのみである。（書誌學四ノ一、讀書觀籍日錄參照）

之に對して古活字版に於いては、印刷題簽を殘存するものが少くない。然し當時に於いても、必しも盡く印刷題簽を用ひたわけではなく、原來、書題簽を添附したもの、又は表

紙に直接墨書するもの、外題及び全く題簽を用ひてゐないものも多數現存してゐて、寧ろ、總體から見れば、印刷題簽を有するものは僅かに其の一少部分に過ぎない事が判るのである。其の現存するものの一例を擧げると左の如くである。なほ前記諸本解說の條參照

市庵版醫學正傳（慶長二年刊）圖書寮藏第四四圖參照。
慶長勅版神代卷（慶長四年刊）靜嘉堂文庫藏本完全。成簣堂文庫藏本上部缺、第五圖參照。
伏見版孔子家語（慶長四年刊）成簣堂文庫藏一本、足利學校遺蹟圖書館・大阪府立圖書館藏等。
伏見版東鑑（慶長十年富春堂刊）久原文庫・尊經閣文庫藏
秀賴版帝鑑圖說（慶長十一年刊）安田文庫藏
富春堂版太平記（慶長八年刊）安田文庫藏
慶長十年下村生藏刊元亨釋書 安田文庫藏
慶長十年正運刊周易 安田文庫（大槻家舊藏）藏
史記（慶長十一年以前刊）內閣文庫藏等
直江版文選（慶長十二年刊）高木文庫藏
慶長十三年刊職原抄（秀賢跋）高木文庫藏等
嵯峨本伊勢物語（慶長十三年刊第一種本（ロ）版）內閣文庫・安田文庫藏等（其の他嵯峨本伊勢物語各種本中原題簽を有するもの少からず）
嵯峨本伊勢物語肖聞抄（慶長十四年刊）（イ）（ロ）兩版とも原題簽を有するものあり。

嵯峨本撰集抄安田文庫・成簣堂文庫・南足陸藏等黄紙に印刷せり　嵯峨本徒然草久原文庫藏

慶長十五年刊日本書紀安田文庫藏

烏丸本徒然草(慶長十八年刊)圖書寮・高木文庫・安田文庫藏本等

嵯峨本謠本(各種)黄色書紙に印刷す

其の他、竹取物語(慶長中刊)高木文庫藏・伊勢物語肖聞抄(慶長中刊、二卷本)成簣堂文庫藏・住吉物語(慶長中刊)安田文庫・大島雅太郎氏藏・東鑑(慶長中刊第二種本)安田文庫藏・源氏物語(傳嵯峨本)諸文庫藏・大和物語(慶元中刊、十一行本)高木文庫藏等・信長記(第二種本)安田文庫藏・韓文(慶元中刊)北野神社藏・源氏物語(元和九年刊)安田文庫藏・狹衣物語(元和中刊、無刊記本二種)安井篤治博士・安田文庫藏本等・庖言抄(元和六年刊)蓬左文庫藏等・聚樂物語成簣堂文庫藏・大鏡・水鏡・增鏡(慶元中刊)內閣文庫藏等・平家物語(元和中刊單邊十二行片假名本)成簣堂文庫藏等・太平記(慶長中刊第六種本)京都帝國大學圖書館藏等・新古今和歌集(慶元中刊)高木文庫藏・舞の本(九冊十五種)東洋文庫藏・花傳書第一種本岡田文庫・安田文庫藏・祥刑要覽寛永元年刊蓬左文庫藏・增續韻府群玉(寛永二年刊)帝國圖書館・安田文庫藏等・南浦文集(寛永二年刊)蓬左文庫藏・驊騮全書寛永六年刊高木文庫藏・三教指歸鈔寛永八年刊、高野版高木文庫藏・仙傳抄(寛永十七年刊)高木文庫藏・宇治拾遺物語(寛永中刊)高木文庫藏・匠材集(十四行本)高木文庫藏・公事根源成簣堂文庫藏等の諸本がある。右の中には、嵯峨本の如く特殊な意匠を施したもの、直江版文選の如く薄紅唐紙を用ひたもの、又は醫學正傳(慶長二年甫庵版)の如く水色の目錄題簽をも添

附したもの等もあるが、大部分は楮の生漉である。

寛永以後の整版本に於いては、印刷題簽は必ず具備す可きものとなり、更に殊種なものとして、繪外題其の他種々の發達を見るに至つたのである。

誤植の訂正法

因みに、古活字版に於ける誤植の訂正法に就いて附言する。古活字版に於ける誤植は實に多數であるが、其の大部分は、訂正等を行つてゐない。然し、時には出版當事者が、之を校正してゐるものもあつて、其の場合には(一)胡粉を以て誤植を消去して、其の上に活字を捺印するか、若しくは墨書を以て訂正を行つてゐるものと、(二)活字を以て捺印した小片紙を張紙して訂正を加へたものとの兩種がある。一書中に此の兩種の訂正方法の共に存する保元物語・平治物語(第一種本)の如きものも存する。圖書寮尊藏の保元物語一本の一例を以て述べるならば、上卷第十五葉裏第三行五字目の「間」字・同第二十七葉裏第五行目「圖」「藏」字等は張紙活字捺印訂正、同じく上卷第三十二葉表三行目「龍」字・下卷第五十八葉表第九行目「侯」字等は胡粉抹殺、墨書訂正を加へてある。

活字の書體

當時に於ける活字に就いては、眞名・假名の別がある事は言ふまでもなく、更に假名は片假名・平假名の兩種に分れる。

眞名活字に於ける行書體の例外

眞名活字專用の植版本は殆ど全部楷書體を用ひ、行書體專用は僅かに宗鐵が妙心寺版に使用したものが一種(慶長十八年刊眞覺匡眞禪師廣錄・鎭州臨濟惠照禪師語錄(無刊記本))あ

るのみである。（二九七頁參照）片假名に混用せられた眞名活字は楷書體で、眞名活字專用のものを利用してゐるから特に言ふ可き事もないが、平假名活字に混用せられた眞名活字は、何れも行草の體を用ひ、竿に小型活字の特殊な字體に限り楷書體を混用するに止るのである。即ち、平假名活字と共に特に作成した眞名活字であつて、片假名活字の場合に、當初眞名活字單獨に使用す可き意圖の下に作成せられた楷書體の活字を常に混用してゐるのとは事情を異にするのである。

眞名活字の書風

楷書體の眞名活字は、直接間接に朝鮮の影響を蒙つたものが少からず存在し、直接に影響を蒙つたものには、比較的大型のものが多く、例へば甫庵版醫學正傳・東垣十書・長恨歌傳等、是等は其の字型を雕刻する際に朝鮮刊本を用ひたが爲であらうと考へられる。

眞名活字に於ける闕筆

又、眞名活字に於いて注意す可きは、闕筆の存在する事である。其の種類は極めて少數で、「貞」「胤」「垣」等の文字が、駿河版の二書・其の他古文尙書等に混植してゐる。其れは朝鮮刊本に字母を求めた事も其の一因であらうかとも考へられるが、（高木文庫古活字目錄一三八頁）少くとも駿河版の場合に於いては其の鑄字の字母として用ひた宋版後漢書（[illegible]）に存する闕筆を其の儘繼承したが爲であらうと考へられるのである。或は古文尙書等は更に其の影響であるかもしれない。

平假名活字の書風

平假名活字に於いては、書風の變遷が著しく注意せられる。慶長十年前後に初めて現

れた平假名活字の書風は、頗る潤達で、特に版下書きの形式に捉はれてゐない。其の中に嵯峨本類を中心とする光悦流のものと、所謂御家流のものとの兩系統が存在してゐるが、元和を經て寛永年間に至ると、兩系統が自ら混合し、殊に光悦風の特色が減退して、次第に書風が硬化し、雅致を失つた版下書きの書風に墮して行つた。其れ等に就いてはなほ後に述べる事とする。

活字の形狀（一）寸法

これ等の平假名活字を初め、片假名眞名活字を通じて、其の形狀は、大より小へと移つてゐる。眞名活字に於いて寛永頃に作成せられた大型のもの（本朝文粹〔寛永六年〕・祥刑要覽〔寛永元年〕等の活字）假名活字に於いて寛永元年刊平假名太平記等を除けば例外は極めて少ないと言へる。この事は同一の書籍に就いて其の變遷の跡を見れば容易に諾く事が出來ると思ふ。例へば、源氏物語に於いては、傳嵯峨本〔慶長中刊〕の大型活字から、元和九年刊本、寛永中刊本〔無刊記本〕と次第に小型となり、又清少納言枕草子に於ける十行本—十二行本—十三行本、狹衣物語に於ける十二行本〔元和九年刊本及び同種活字の無刊記本二種〕—十三行本、大和物語に於ける十一行本〔慶元中刊無刊記本三種〕—十二行本〔元和中刊無刊記本四種〕—寛永中刊十二行本〔無刊記本及び寛永十六年有刊記本二種〕、平家物語平假名本に於ける慶長中刊十行本、下村本、中院本等より、元和中刊仁右衛門刊本・十二行本〔中本四冊〕・寛永元年刊本への例等、例示するまでもないと思ふ。片假名に於いては、徒然草（壽命院）抄の一例のみに據つてもよく之が判る。

平假名活字に於ける連續活字

更に平假名活字に於ける特色の一は、連續活字を使用してゐる點である。片假名活字に於いても「ナリ」「ケリ」「ツイテ」等の如く若干の連續活字を使用してゐる場合もあるが、其の數も少く、且つ又平假名に於けるが如く、これが印刷面に多大の變化を惹起してゐない。

平假名に於ける連續活字發生の原因

平假名活字に於いて連續活字を使用する理由は、結果から見れば、一字雕(一字一箇)を組合せて植版を行つたものは、草假名の雅致を全く失つてしまふからであらう。然し其の發生の原因は、恐らく版下書きの影響であらうと思はれる。即ち、初めて或る書籍を活字印行するに際し、其の版下書きに基いて活字を作成する場合に、草假名の筆の續きを其の儘に雕刻し、若干葉の分だけ活字を作り、其の後の部分は、版下書に從つて活字を新刻せず、玆に一旦植版した活字を解版して襲用し、特殊の文字のみを追加新雕して行つたものと考へられる。活字の利用から言へば、一字一箇の活字に比して連續活字は一見不便なるが如く思考せられるが、實際に當つては、其の應用が十分に行はれ、却つて連續活字の使用を便宜としてゐる樣である。又、平假名活字に於ける連續活字の發生に就いて西歐系統の活字との關聯を考慮すべきを說くものもあるが、未だ此の方面に對して其の關聯を推定すべき手掛りを得る事が出來ない。玆に慶長十五年以前刊嵯峨本方丈記・元和九年刊伊勢物語・寬永中刊撰集抄等の植字に就いて行つた調査表を掲

げて、連續活字が如何なる程度に使用せられてゐるかを示さうと思ふ。

(一)嵯峨本方丈記(慶長十五年以前刊)(安田文庫藏本に據る)

(二)元和九年心也刊狹衣物語(靜嘉堂文庫藏本に據る)

(三)元和中刊無刊記(ロ)種本狹衣物語 元和九年刊本同種活字異植版 (松井簡治博士藏本に據る)

(四)寛永中刊撰集抄第三種本(ハ)版(高木文庫藏本に據る)

嵯峨本方丈記の例

(一)嵯峨本方丈記(慶長十五年以前刊)

丁數	三字連續活字	二字連續活字	一字	(眞名)	(假名)
一オ	1	25	75	(33)	(42)
一ウ	4	16	90	(48)	(42)
二オ	/	14	104	(55)	(49)
二ウ	2	15	99	(46)	(53)
三オ	1	17	92	(34)	(58)
三ウ	1	16	98	(53)	(45)
四オ	3	22	81	(37)	(44)
四ウ	/	18	93	(29)	(64)
五オ	1	24	77	(31)	(46)
五ウ	1	23	80	(31)	(49)
六オ	/	21	93	(45)	(48)
六ウ	/	13	94	(48)	(46)
七オ	/	25	84	(30)	(54)
七ウ	/	24	87	(45)	(42)
八オ	1	25	81	(28)	(53)
八ウ	/	22	90	(44)	(46)
九オ	1	20	91	(34)	(57)
九ウ	/	24	86	(31)	(55)
十オ	1	26	79	(28)	(51)
十ウ	/	26	81	(29)	(52)
計	17	416	1755	(759)	(996)
平均		21	87,8	(38)	(50)

元和九年心也刊狹衣物語の例

（二）元和九年心也刊狹衣物語

丁數	四字連續活字	三字連續活字	二字連續活字	一字	（眞名）	（假名）
一オ	/	10	60	87	(49)	(47)
一ウ	/	6	86	73	(20)	(53)
二オ	/	11	81	62	(17)	(45)
二ウ	/	6	84	75	(22)	(53)
三オ	/	8	72	94	(43)	(51)
三ウ	/	4	67	118	(64)	(54)
四オ	/	7	84	72	(38)	(34)
四ウ	/	6	76	93	(37)	(56)
五オ	/	10	82	68	(18)	(59)
五ウ	/	6	74	95	(27)	(68)
六オ	/	9	79	75	(17)	(58)
六ウ	/	6	72	96	(32)	(64)
七オ	/	6	68	85	(34)	(51)
七ウ	1	7	63	109	(49)	(69)
八オ	/	4	82	87	(25)	(62)
八ウ	/	6	77	90	(28)	(62)
九オ	1	8	71	84	(25)	(59)
九ウ	/	6	68	105	(32)	(73)
十オ	/	4	71	106	(35)	(71)
十ウ	/	5	85	75	(15)	(60)
計	2	135	1502	1749	(618)	(1131)
平均		6,8	75,1	87,5	(30,9)	(56,6)

元和中刊無刊記（ロ）種本狹衣物語の例

（三）元和中刊無刊記（ロ）種本狹衣物語　元和九年刊本同種活字異植版

丁數	四字連續活字	三字連續活字	二字連續活字	一字	（眞名）	（假名）
一オ	1	10	59	87	(39)	(48)
一ウ	1	7	86	65	(18)	(47)
二オ	/	10	83	60	(17)	(43)
二ウ		9	81	71	(24)	(47)
三オ	/	9	71	94	(44)	(50)
三ウ	1	4	58	108	(58)	(50)
四オ	1	7	76	81	(40)	(41)
四ウ	1	7	77	87	(37)	(59)
五オ	/	13	79	67	(19)	(48)
五ウ	/	6	75	89	(27)	(62)
六オ	/	8	83	72	(16)	(56)
六ウ	/	5	79	87	(29)	(58)
七オ	/	5	81	83	(31)	(52)
七ウ	2	7	64	101	(48)	(53)
八オ	1	4	84	79	(22)	(57)
八ウ	/	9	84	93	(28)	(65)
九オ	1	8	74	80	(26)	(54)
九ウ	/	7	72	94	(28)	(66)
十オ	/	5	73	95	(35)	(60)
十ウ	/	8	86	63	(14)	(49)
計	9	148	1520	1656	(600)	(1056)
平均		7	76	82,8	(30)	(52,8)

寛永中刊撰集抄(第三種ハ版)の例

(四) 寛永中刊撰集抄(第三種本ハ版)

丁數	四字連續活字	三字連續活字	二字連續活字	一字	(眞名)	(假名)
一オ	/	8	61	82	(51)	(31)
一ウ	/	10	58	92	(52)	(40)
二オ	/	4	78	80	(42)	(38)
二ウ	/	8	70	87	(54)	(33)
三オ	/	4	69	101	(60)	(41)
三ウ	/	4	79	77	(48)	(29)
四オ	/	7	64	92	(41)	(51)
四ウ	/	3	71	92	(53)	(39)
五オ	/	12	68	86	(49)	(37)
五ウ	/	3	74	93	(58)	(35)
六オ	/	5	76	86	(37)	(49)
六ウ	/	3	77	90	(43)	(47)
七オ	/	7	58	110	(70)	(40)
七ウ	/	7	76	83	(37)	(46)
八オ	/	6	77	86	(38)	(48)
八ウ	/	7	71	91	(36)	(55)
九オ	/	7	68	97	(41)	(56)
九ウ	/	6	69	99	(54)	(45)
十オ	/	2	70	107	(47)	(60)
十ウ	/	5	66	109	(51)	(58)
計		118	1400	1840	(962)	(878)
平均		5,9	70	92	(48,1)	(43,9)

右の統計表に據れば、嵯峨本方丈記は、文字の形大きく、一葉の字數が少い故か連續活字も四字に及ぶものがない。但し、同じ嵯峨本中でも徒然草の如きは、方丈記等に比して版型も大きく、四字連續の活字を混用してゐる。

元和九年心也刊行の狹衣物語は、其の同種活字の無刊記本(再刊と推定せらる)と比較調査した結果、同種の活字を使用すれば、其の植版の具合に據つて若干の相違を來す事はあるが、略類似の植版となる事が判明した。

然も右の表に據つて、各本共に二字連續の活字が主體となつて植版が形成せられてゐ

る事も判明する　其の紙面の大半は二字連續の活字より成り、一字一箇の活字は全體の約三分の一を占め、之に僅かに三字以上連續の活字が加へられてゐるのである。又、元和九年刊狹衣物語全卷に於ける連續活字の字母總數を精査すると左の如くである。

元和九年刊狹衣物語の連續活字（三字以上）表

○四字連續活字の字母總數（九種）

ありさま（二種）　あつかひ　おそろし　かたはら
ことなき　さふらひ　のたまへ　はつかし

○三字連續活字の字母總數（百十一種）

其の頭字に據つて分類すると次の如くとなる。

頭字											
あ	一二	い	八	う	三			お	一三		
か	一一	き	二	く	三	け	三	こ	三		
さ	三	し	二	す	四						
た	七			つ	三			と	二		
な	一一							の	二		
は	二	ひ	三	ふ	一						
ま	四	み	一	む	四	め	一				
										よ	一

わ　三

二字連續の活字の字形種類は頗る多數で未だ統計を得るに至らない。

眞名活字に於ける連續活字

眞名活字に於ける連續活字は、本文の部分には殆ど使用した例はないが、版心等の標識には之を用ひてゐる。駿河版に於ける大藏一覽・群書治要等の例は其の代表的なるものであつて、殊に群書治要は其の實物さへも殘存してゐる。なほ他に多くの例がある事は其の版心を注意するとよく判ると思ふ。

陰刻活字

又、特殊なる活字として、陰刻のものがある。主として標識的に使用せられてゐるもので、慶長十八年刊法華經文字聲韻音訓篇集の數字・片假名、東坡先生詩・氏族大全・事文類聚・古今韻會擧要・龍龕手鑑・春秋經傳集解・象戲馬法等の漢字がある。なほ、事文類聚・三體詩鈔(寛永中刊)等、魚尾風の標識を用ひてゐるものもあり、其の他、丸・角等の記號を加へた例も存在する。

濁點附活字

次に假名の活字に於ける特殊なるものとして濁點附の活字がある。其の實例は平假名にのみ見えて、片假名には例がない。

平假名濁點附活字

平假名活字に於いても其の全體より見れば、或る一少部分に限られてゐるが、左の如き種類のものがある。

(イ)慶長中刊伊勢物語(一卷本)安田文庫藏・同伊勢物語肖聞抄(二卷本)安田文庫・東洋文庫・成簣堂文庫等藏

(ロ)四生の歌合東洋文庫等藏

(イ)釋迦の本地安田文庫等藏・清水物語高木文庫藏・聚樂物語成簣堂文庫藏
(ロ)天正記(第一種本)
(ホ)武家諸禮集安田文庫藏
(ヘ)曾我物語(繪入)前記五四八頁參照・大島雅太郎氏高木文庫等藏
(ト)保元・平治物語(第七種本)
(チ)寛永十年刊義經記、寛永十四年・及同十六年刊女訓抄、寛永十六年刊伊曾保物語、寛永中刊撰集抄(第三種本)
(リ)けい馬の次第高木文庫藏

之に據つて見ると、慶長中の刊行と推定せられるものは僅かに(イ)種のみであつて、かゝる特殊な活字は後に發達したものである事が判る。又當時に於いては、漸く濁點の記號が、ゝ點に固定せんとした頃であつて、書寫の場合に於いても、濁點を附加する方が却つて少い位であつたから、自然印刷となつて現れるものも少數に止つたものであると考へられるのである。

振假名附眞名活字

眞名活字に於ける特殊な活字としては、振假名附の活字がある。是も主として平假名交りの活字に混用せられた眞名活字に見られる現象であつて、片假名交りに混用せられてゐる例は、僅かに一種類(平家物語・太平記・源平盛衰記等、亂版を生ずるに至つた種類

のもの)に止まる。確實なる現存資料に據れば、振假名附の眞名活字の最初は、慶長十四年に刊行せられた太平記(前記五四四頁參照)で、極めて書風の麗はしい活字である。以下は降つて寛永元年刊行の太平記(慶長十四年刊本の覆刻)、元和寛永中の刊行と認む可き釋迦の本地(前記濁點附活字)又、保元・平治物語(第七種本及び第八種本)・平治物語(第九種本)、天正記(第四種本)、四生の歌合、寛永行幸記(第一種本)、仙傳抄(第二・三種本)、義經記(寛永十年刊)撰集抄(第三種本)・寶物集(寛永十七年刊)等、寛永年間に多い事が判り、又是等の半ば以上が濁點附活字をも混植してゐるのは、濁點・振假名附等の特殊活字の使用は、一には即ち、印刷の技術の進歩を示してゐるものと言ふ事が出來るであらう。

平假名活字中に於ける片假名振假名の眞名活字

又、振假名附の活字の中には、平假名活字に交じへる眞名活字にも拘らず、片假名を附刻した少數の例がある。一は元和年中刊行の公事根源、二は慶安年間(荒木利兵衞)刊行の太平記と鴉鷺合戰物語(前記五四五・五九四頁參照)とである。後者は寛永元年刊太平記の活字を襲用した上に、若干新刻の活字を交じへ、新刻の部分に之が見られるのである。

古活字版に於ける附訓

右の如き振假名附の活字は、附訓をも含めて、元來振假名を附加しない活字と同じ大いさに刻したものであるが、書籍の性質に據つては、行間に振假名を附植する事も行はれた。之等は慶長頃に現れたものが多く、例へば、慶元中刊萬葉集(附訓本)・慶長中刊倭玉篇に於ける片假名植版、又諸本に於ける節付の記號等である。極めて小型の活字を用ひ、

中には連續活字をも交じへてゐる。

附訓植版の發達

これに關聯して、振假名のみならず、漢文に對する訓點を附植する方法も行はれてゐる。但し、古活字版に於ける訓點の附植は、技術的に困難であるから、啓蒙を主なる目的とする附訓本は早くから整版本として刊行せられる傾向にあつたが（節用集、文之點の漢籍本）、古活字版に此の方法を初めて用ひたのは、元和年間に於ける叡山版であらう。現存資料に據れば、元和四年寶幢院刊行の天台名目類聚鈔を以て其の嚆矢とする。（前記三〇九頁參照）其の後是が高野山に於いても行はれ、又、京洛に於ける坊刻本にも、庖言抄（元和六年林道春跋）等が現はれた。

古活字版に於ける附訓の二形式

然し、其れ等の方法は、漢字の行間及字間に於ける餘地を十分に存して、其の間に振假名・送假名及び返點・數字其の他の記號を植版するもので、從つて行數字詰等が比較的少い。之に對し、寛永年間に現れた平家物語・源平盛衰記・太平記等の一類の附訓本の印刷に用ひられたものは、振假名・返點・數字等を具備した活字を雕刻して植版に用ひ、然も活字が小型であるから、一見整版と紛ふ版式を具へてゐるものである。

句讀點附植の古活字版

なほ、右の平家物語等の類にも無論句讀點は加へられてゐるが、句讀點のみを植版した例も見られる。之は用例が極めて少いが、中院本平家物語及び之と同種活字を用ひためのとのさうしは、黒丸點、（中院本平家物語の句點の性質と、前に山田孝雄博士の高說（平家物語考）もあり[illegible]しく、然らざるときは高橋貞一氏の所說の如し[illegible]）又、徒然草（第六種本）（[illegible]）は、〇印を使用してゐる。漢文に句讀點のみを加へた

ものは存在しない。

古活字版に於ける繪入本

次に、古活字版の版式上に於いて注意すべき二三の問題に就いて述べる。其の一は、繪入本である。

古活字版に於ける繪入本は附訓本と同じく比較的少數である。然し、若干の挿圖を加へた程度のものをも算へると、相當の數に達する。まづ醫書の人形圖等を加へたものには、例へば、市庵版十四經發揮(慶長元年刊)前記一五八頁參照・黄帝明堂灸經(慶長十八年刊本等)前記三三五頁參照・八十一難經(元和中刊)等があつて、此等は毎半葉、文字植版中の一半を占めてゐる。君臣圖像は肖像の右肩に人名を活字で植版し、四生の歌合は圖の上方に文字を、又舞の本等にも挿繪の傍に本文を植版してあるものがある　驊騮全書の馬具其の他の圖、仙傳抄の立花圖、花傳書の笛の圖、塵功記の挿圖、戯言養氣集の白糸法印等、皆此の類である。

古活字版に於ける挿畫印刷の特殊なる方法

古活字版に於ける挿畫印刷の特殊なる方法として注意す可きは、一度使用した畫面を他の異る畫面に其の儘利用してゐる點であつて、寛永行幸記前記六二三頁參照の如きは、各種本とも、卷中の前方に現れた人物の型を後方に於ける別箇處の別人に襲用し、甚だしきは、すぐ次の紙面にさへも其れが行はれてゐるといふ樣に、活字版にふさはしい畫版の利用を行つてゐる。

又、曾我物語(第四種本)前記五四七頁參照の例に據れば、一面の挿畫が數箇長方形小片の結合に據

つて構成せられ、自由に組合せて之を幾回も襲用してゐる。従つて挿畫は匡郭を以て括り、組合せの客線が印刷面に現れてゐる。又、淨瑠璃物語の如く、（前記五九一頁參照）嵯峨本伊勢物語の挿畫を割つて組合せ、之を襲用してゐる例も存する。

右の諸例は、特殊なものであるが、古活字版に於ける通例の繪入本は、挿畫の部分のみ一枚板に雕刻して挿入印刷したものである事は言ふまでもない。其れ等の例としては次の如きものがある。

[illegible]

嵯峨本伊勢物語（前記四三〇頁參照）
義經記（第二種本）（前記五四九頁參照）
淨瑠璃物語（前記五九一頁參照）
花鳥風月（二種）（前記五九一頁參照）
四十二物諍（二種）（前記五九二頁參照）
清水物語（前記五九六頁參照）
十牛圖（五味禪の內）（前記三四八頁參照）
秀賴版帝鑑圖說（慶長十年刊）（前記二三二頁參照）

附圖挿入本

附圖を加へたものとしては、拾芥抄に於ける日本國圖及び條坊圖等、大坂物語に於ける大坂城圖等がある。

片假名・平假名の混植

次に、版式上の問題として、片假名平假名の混植、整版活版の亂版の二つがある。第一に、片假名平假名の混植に就いては、徒然草壽命院抄・謠抄の例があり、なほ原本が片假名交り書寫本でありながら、和歌・消息等のみ平假名を交じへてゐる場合に、之を其の儘に傳へる爲、特に平假名の活字を加へてゐるものに、日本書紀神代卷抄(二卷本、本能寺前刊行)(前記二八二頁參照)東鑑(伏見版等三種)(前記二二〇頁參照)の二書がある。

徒然草壽命院抄の假名活字混植

徒然草壽命院抄(慶長九年宗乾刊)(前記五一六頁參照)は、卷首數葉のみ、本文は平假名、注解は片假名交りを用ひてゐるが、第七葉以下は凡て片假名交りとなつてゐる。之は恐らく本書の稿本には、本文は平假名、注解は片假名交りとなつてゐたのを、其の儘印行せんとして着手し、其の煩瑣なるを知つて、卷首以外の大部分を單純に統一してしまつたものであらうと思はれる。之は、古活字版、殊に假名交り古活字版發生の極初期に於ける出版として然る可き事であらう。

謠抄の假名活字混植

謠抄(守清刊本)(前記五六六頁參照)の場合は、草書體の平假名活字と楷書體の片假名活字とを併用し、同一葉内に數行宛、多きは一二葉宛、交互に植版を行つてゐる。本書は謠抄としては最初の刊行と認む可きものであるが、何故にかゝる版式を有するものか未詳である。然し、謠抄の撰述が、元來各々專門に據る分擔になつたものであるから、之を集成した其の稿本には、片假名を用ひて記るした部分と、平假名を以て書寫した部分とがあつたため

を守清刊本は之に基いて其の儘刊行した爲に、か〻る版式を具へたものが出で來つたのであらう。 其れ故に守清刊本には同一の語彙の注解が重複してゐる部分が少からず存在し、然も又、其の一が片假名、其の一が平假名を以て記るされてゐる例を多く發見するのは、(其の注文が異る事は言ふまでもない)それが爲であらうと考へられる。(齋藤芳之助氏教示)

平假名交り古活字版に於ける片假名の版心

平假名交りの活字版でありながら、版心の略稱文字のみ片假名を用ひた例(伊曾保物語第一種本の「イソホ」、竹齋第一種本の「チク」等)もある事を附言する。

活版・整版の亂版

第二は、活版と整版との亂版の問題である。 活版と整版とを交じへた亂版としては要法寺版論語・大慧普覺禪師書、及び源平盛衰記・太平記の四本がある。

大慧普覺禪師書の亂版

まづ大慧普覺禪師書(二卷、二冊)の古活字版には、慶元中刊行の無刊記本と別に、「富小路通讃州寺町　中村長兵衛」の刊記ある一本があつて、其の一傳本たる久原文庫藏本には「寛永四年霜月五日」の墨書識語があるので、其の刊行年時の大體を知る事が出來るが、(圖版三三八頁參照)此の書には、下卷第三十八葉以下整版を交じへた亂版があり、(久原文庫・高木文庫藏)又、其の整版の部分を襲用して、全卷整版とした一本もある(久原文庫藏)。 此の三種に據つて見るに、初め活字版として現れたものを基として覆刻整版本を作成するに當り、其の整版完成の過程に於いて、俄かに本書を要求せられて、整版未刻の部分のみ活字

版の刷殘りを利用して、一書を出したものであらうと推測せられる。此の場合、亂版の活版の部分が、全部活版の一本と全く同一であつて、異植版ではない點から考へて、整版未刻の部分を活版に組んで補つたものと解する事は不可能である。但し、なほ一つ考へられる事は、整版が全部完成した後に、活字版の刷殘りがあつたために、不足の部分のみ整版を以て補つたものであるとも解し得るが、其の場合には、次記の源平盛衰記の如く、傳本に據り活字版補配の狀態に異同があるのが通例であらうと考へられるから、本書の亂版の如く、兩傳本とも補配の狀態が同一であるものは、前述の如く解する方が穩當であらうと思はれる。

要法寺版論語の亂版

要法寺版論語の場合に於いては、全部活版の傳本が見當らないので、亂版中の活版が特に新しく植版せられたものであるか、先行の活字版の刷殘りを利用したものであるか、未詳であるが、是も整版完成以前に現れたものである事は確實であらうと思ふ。(前記二七〇頁參照) 大慧普覺禪師書の亂版が、卷末のみ整版であるのと、要法寺版論語の亂版が、卷首より卷四第六葉までと卷七第九葉より卷末までの終始約三分の二が整版である事實とより考へれば、前者は卷末より、又後者は卷首卷末雙方より整版を起して行つた事が判ると思ふ。

太平記と源平盛衰記の亂版

次に、太平記と源平盛衰記との亂版であるが、此の種のものは、前述の如く片假名交りの附訓活字で、同種の活字印本には、平家物語がある。平家物語には亂版は見當らないが、

太平記と源平盛衰記とは反つて未だ全部活字の傳本に接しない。但し、太平記は僅かに不完の二本を見るのみであるが、源平盛衰記は堀田璋男氏藏本（書誌學二ノ五、源平盛衰記亂版者・前記五二八頁參照）の他、新たに完全なる二本（安田文庫藏）を得て、其の補配の狀態の異同に據り、亂版發生の原因も活版の刷殘りを利用したものである事が判明した。

參考の爲、左に活版補配異同の狀態を表示しようと思ふ。（安田文庫藏の二本は、前記五三八頁校了後新に發見されたものであるから、茲に初めて記載するものである。（二）は丹表紙を存する原裝本、（三）は青色表紙を存する原裝本で、共に後の補配等なき傳本である。）各本の數字は活版の丁數のみを記るす。（第十八卷の第七葉の如きは、末六行のみ整版を交ふ。）

源平盛衰記亂版諸傳本の混合表

冊數	卷數總紙數	（一）安田文庫藏本	（二）堀田氏藏本	（三）安田文庫藏一本
第一冊	目録（二一）	七	（缺）	
第二冊	卷一（目一・三〇） 卷二（目一・三〇）	全部	（缺）	
第三冊	卷三（目一・三一） 卷四（目一・三〇）	二〇至二五ノ他全部 六至九・一三・二七・二九ノ他全部	（缺）	
第四冊	卷五（目一・二七） 卷六（目一・二八）	一四・一七 一一	（缺）	
第五冊	卷七（目一・三三） 卷八（目一・三三）	三・四・七・一八	（缺）	同上
第六冊	卷九（目一・二六） 卷一〇（目一・二七）	一五	同上	
第七冊	卷一一（目一・三二） 卷一二（目一・二四）	一三・二四	同上	

第八冊	巻一三(目一・二・二三) 巻一四(目一・二・二二)	目・一・二・四・七・一〇・一二至一三	同上 一六	
第九冊	巻一五(目一・二・二九) 巻一六(目一・二・二五)	一三	一三・一七 同上	
第十冊	巻一七(目一・三二) 巻一八(目一・二八)	二一・二三ノ他全部 八ノ他全部	目・一至二〇・二二至三二 目至七・九至二八	
第十一冊	巻一九(目一・二二) 巻二〇(目一・二五)			
第十二冊	巻二一(目一・一九) 巻二二(目一・二〇)	四至七・一〇	同上	同上
第十三冊	巻二三(目一・二三) 巻二四(目一・二五)	五至九・一五・一六・一八至二一 七・二三	同上	同上
第十四冊	巻二五(目一・二三) 巻二六(目一・二九)			
第十五冊	巻二七(目一・二三) 巻二八(目一・二八)	一至三	同上	同上
第十六冊	巻二九(目一・三一) 巻三〇(目一・三三)			
第十七冊	巻三一(目一・二三) 巻三二(目一・二七)	一	同上	
第十八冊	巻三三(目一・三一) 巻三四(目一・三三)	一三・一五ノ他全部 二・一九・二〇ノ他全部	目・一至一一・一三・一四・一六至三〇 一・三至一八・二一至三三	
第十九冊	巻三五(目一・三二) 巻三六(目一・二七)	一・二六ノ他全部 一七ノ他全部	目・三至一五・一七至三二 目・一至一一・一三至二七	
第二十冊	巻三七(目一・二八) 巻三八(目一・二六)	全部 八・九・一八・二三・二五・二六ノ他全部	目・一至二七 目・一至七・一〇至一七・一九至三三・三四	同上
第二十一冊	巻三九(目一・二九) 巻四〇(目一・二七)	全部 一ノ他全部	(同上) 目・二至二七	同上
第二十二冊	巻四一(目一・二三) 巻四二(目一・二五)	全部	(同上) 目ノ他全部	
第二十三冊	巻四三(目一・二四) 巻四四(目一・二四)	二〇至二二ノ他全部 一六・一七ノ他全部	目・一至一九・二三至二四 目・一至一九・一八至二三	同上

第二十四冊 巻四五(目一・二・六)　一二・二六ノ他全部　目・一至一〇・一二至一五・一七至二五
　　　　　 巻四六(目一・二・六)　一二・二九ノ他全部　目・一至一〇・一二至一八・二〇至二六　同上

第二十五冊 巻四七(目一・二・二二)　全部　目ノ他全部
　　　　　 巻四八(目一・二・二七)　　　　(同上)

特殊なる異植版

亂版と若干の關聯を有する版式上の問題として、特殊なる同種活字の異植版に就いて茲に附記しておかうと思ふ。

同種活字を以て版を重ねる場合に、必ず刊記を加へて其の前後を明らかにしたもの(伏見版六韜・三略、寛永十四年刊女訓抄・同十六年刊女訓抄の例)、又、其の一が無刊記本となつてゐるもの(其の場合無刊記本が必しも後出と限らない事は言を俟たない。)元和九年刊狹衣物語・同無刊記本、寛永十七年刊左大將六百番歌合・同無刊記本二種(一は十一行本にして此の種のもの初版、二は十二行本にして此の種のもの寛永十七年刊本に次ぐ三版なるべし)何れも無刊記本であるもの(清少納言枕草子十三行本四種等)等があるが、是等は特に問題はない。

同一刊記ある同種活字異植版

又、異種の活字で、全く同一の刊記を有するものならば、(元和四年刊授決集の例(三〇二頁參照))其の何れか一方は、後の飜刻に係るものに相違なく、是亦特に論ずる必要はないが、同種活字の異植版にして、全く同一なる刊記を有するものが少からず存在する事は、注意す可きである。

其れ等の例としては左の如きものがある。其の何れか一方は再版に相違ないが、同一の刊記を附加してゐる點から言へば、初版の刊記を以て通用する程度の時日内に再版

せられたものと考ふ可きである。

慶長十一年刊伏見版七書　二種（前記二一七頁參照）

慶長十三年清原秀賢刊職原抄　二種（前記二〇六頁參照）

慶長十三年中村長兵衛刊五家正宗賛　二種（前記三三八頁參照）

寛永十六年刊伊曾保物語　二種（前記五一一頁參照）

寛永十六年刊大和物語　二種（前記六〇五頁參照）

卷中一小部分の異植

右の諸本は全卷異植版であるが、茲に又、卷中の極一少部分のみ植版を異にするものがある。平家物語下村本は、卷八の首一葉のみ組換へを行つてゐるが、之は章段の見出しを附す可きを誤つて脱落の儘印行してしまつた爲、後に章段見出しを加へて訂正再刷を行つたものである。（前記五三三頁參照）

かくの如く內容の誤脱を訂正したものに對し、卷末刊記の一葉のみ組換へを行つたものが存在する。何故かゝる組換へを行ふに至つたものか未詳であるが、此の種の實例としては左の如きものがある。

要法寺版（直江版）文選（前記二六八頁參照）

伏見版孔子家語（慶長四年刊）（前記二一一頁參照）

元和中（仁右衛門）刊平家物語

又、全く同じ植版でありながら、刊記の一行の有無のみを異にする(削去或は追加)慶長十三年淵轍書院刊古注千字文(前記三五九頁參照)の如き例もあり、又、刊記のみ別葉になつてゐるものには、元來之を附加しない無刊記本(中院本平家物語·秀頼版帝鑑圖說(本書は後人が跋文二葉を破棄したものかもしれない等)も存在する。(其の場合本文は有刊記本も無刊記本も全く同一なる事は注意するまでもない)又、慶長十四年刊論語集解の如く、刊行者名二字のみさし代つてゐるものもある。

次に同種活字を用ひて印行せられた書籍を分類して表示する。但し、同種活字を襲用しても書籍の性質に據り、特殊な活字を多數入用とするものがあるから、新雕の活字を追刻混植してゐるものも少からず、又、新雕のものと度々利用して著しく磨滅したものとは、別種の如く見える場合等もあつて、活字の種類を識別する事は、容易ではない。茲にも一部分明確なるもののみを列擧して參考とするに止め、更に將來の研究調査に俟つ事とする。慶長勅版を初め、伏見版、寺院版等は前述の如く同じ活字を襲用してゐるものが少からず存在し、又、書肆等の出版に係るものにも同種活字の刊本が若干見うけられるが、其れ等は、前に述べたから茲には殆ど列記しない。

平假名活字の種類

〇平假名活字

(1)慶長十一年以前より(一の活字に異假の書風なるも、稍不同なり)

謠本(八嶋等)·舞之本(伏見常盤等)

(ロ) 慶長中(大型)

竹取物語(第一種)・住吉物語(第一種)・至寶抄(第一種)・方丈記(十行本)・見咲和歌集

(ハ) 慶長より元和初年(大型)

清少納言枕草子(十行本)・徒然草(十行本三種)・保元物語(第一種)・平治物語(第一種)・平家物語(十行本)・花鳥風月(九行本)・大坂物語(第一種)・新撰犬筑波集(第一種)・一休水鏡(第一種)・延壽撮要・碁經

(ニ) 慶長中(中型 右(ハ)と同系統の書風)

平治物語(第四種)・曾我物語(十一行本二種)・徒然草(十一行本)・一休水鏡(第二種)・無言抄(第二種)・至寶抄(第二種)・新撰犬筑波集(第二種)

(ホ) 慶長中(黒丸點附植)

中院本平家物語・めのとのさうし

(ヘ) 慶長中

淨瑠璃物語(繪入)・花鳥風月(繪入第二種)

(ト) 慶長中(松田道以本)

本朝古今銘盡・口傳書

(チ) 慶長中

伊勢物語・伊勢物語聞書(二卷本)

(リ)慶長・元和中

大和物語(十一行本)・伊曾保物語(十一行本)

(ヌ)元和中

大和物語(十二行本)・住吉物語・寶物集・撰集抄・秋夜長物語・昨日は今日の物語・一休水鏡(第三種)・大坂物語(第四・五種)・新古今和歌集・百人一首抄新撰犬筑波集

(ル)元和中(小山仁右衞門永次刊)

平家物語・伊曾保物語・伊勢物語闕疑抄

(ヲ)元和中

大鏡・水鏡・增鏡・鞠之書

(ワ)元和・寛永中刊

類字名所和歌集(元和三年刊)・勅撰名所和歌抄出・新古今和歌集(第二種)・隨葉集・世諺問答・吉野拾遺・源氏物語紹巴抄・左大將六百番歌合(寛永十七年刊、並に無刊記本二種)・平家物語(十二行本)・曾我物語(第五種)・義經記(第四種)

(カ)元和・寛永中

うつほ物語(第一種)・竹取物語(第四種)

(ヨ)寛永中

清水物語・釋迦の本地・聚樂物語

(タ)寛永中

榮華物語・發句帳(第二種)・和歌題林抄

(レ)寛永中

源氏物語・宇治拾遺物語

(ソ)寛永中

義經記(寛永十年刊)・自讃歌注(寛永十年刊)・撰集抄(第三種)・寶物集(寛永十七年刊)・清少納言枕草子(十三行本)・源氏小鏡(十二行・十三行)狹衣(十三行本)・大和物語(寛永十六年刊、並に無刊記本)・伊曾保物語(寛永十六年刊、並に無刊記本)・女訓抄(寛永十四年・同十六年刊)・發句帳(第一種)・鴉鷺合戰物語・伊勢物語闕疑抄三種

(ツ)寛永中

女訓集(十行本)・戲言養氣集

(ネ)寛永中

八雲御抄・藻鹽草

(ナ)寛永中(慶安年中襲用刊)

片假名活字（一）

太平記・鴉鷺合戰物語

（一）片假名活字

（イ）慶長前半期（五十川了庵刊）
　太平記（慶長八年以前・同八年富春堂版）・伏見版東鑑
（ロ）慶長十年前後
　源平盛衰記・寶物集・徒然草壽命院抄（無刊記第一種本）・保元物語（十一行）・平治物語（十一行）
（ハ）慶長中
　太平記（慶長十五年春枝刊）・太平記鈔・音義（第一種）
（ニ）元和・寛永中（本能寺前刊）
　日本書紀抄・周易抄・毛詩抄
（ホ）元和・寛永中
　大學抄・中庸抄（單邊十六行本）
（ヘ）寛永中
　語園（寛永四年刊）・冷齋夜話（寛永二十年刊）
（ト）寛永中（附訓）

源平盛衰記・平家物語・太平記

(二) 眞名活字

(イ) 慶長前期(宗乾刊)

元亨釋書(慶長四年如庵宗乾刊)・太平記(慶長八年以前刊本序文のみ)・徒然草壽命院抄(慶長九年宗乾刊)

(ロ) 慶長前期

論語集解・古文孝經(慶長七年刊)

(ハ) 慶長前期(下村生藏刊)

新學教誡比丘行護律義(慶長九年刊寶珠院版)・元亨釋書(慶長十年刊)

(ニ) 慶長中

中庸(下村生藏刊)・論語・孟子(兩書生藏刊か)・史記(第一種本、慶長十一年以前刊)・春秋經傳集解(第一種本)・古文眞寶後集(慶長十四年刊)

(ホ) 慶長中

古文孝經(異植版三種)・孔子通紀・補注蒙求(異植版二種)・續錦繡段

(ヘ) 慶長中

直江版(慶長十二年要法寺刊)文選・要法寺版太平記(慶長十年刊)・韻鏡(慶長十三年涸

（ト）慶長中
敕書院刊）・古注千字文（慶長十三年㓊敕書院刊）・脈語（慶長十三年刊）
伏見版（諸本）・萬葉集（無附本）
（チ）慶長中
三國佛法傳通緣起・止觀義例（慶長二十年刊）
（リ）元和中
白氏文集・倭名類聚抄（道圓校印）
（ヌ）元和・寛永中
皇朝字實類苑（元和勅版）・天寶開元遺事・古注千字文・補注蒙求・古今事文類聚
（ル）元和・寛永中
古注千字文・胡曾詩註
（ヲ）寛永中
前漢書（寛永五年刊）・後漢書、蒙求・胡曾詩・千字文（三書合綴、無註本）
（ワ）寛永中
祥刑要覽（寛永元年刊）韻府群玉（寛永二年刊）・本朝文粹（寛永六年刊）・新增鷹鶻方・棠陰比事

附章　古活字版研究小史

辨疑書目錄

古活字版に對して特に注意するに至つた最初は、寶永年間の辨疑書目錄(中村富平著)であらう。「植字本」なる名稱のもとに不完全ながら其の書目を掲げてゐる。其の後は特に纏つた見る可き考説も現れなかつたが、江戸末期に至つて考證學と共に書誌學が勃興するに及んで、古活字版に關する問題を考究したものも現れる樣になつたのである。

吉田篁墩の活版經籍考

其の一は寬政年間に吉田篁墩(漢官)の著はした「活版經籍考」であり、其の二は、近藤正齋(守重)の慶長勅版考其の他(右文故事の內)である。前者は、我が國に於ける活版の起源を論じ、併せて漢籍中に於ける經書の古活字版を主として調べたもので、此の方面に於いては、其の後百載を經て現在に至るまで他に類書の現れるものなく、殆ど唯一の纏つた業績となつてゐる。早く寬政十二年頃に狩谷棭齋が補訂を行つてゐる如く、全卷に誤謬が少くないが、此の方面の研究を開拓したものとして尊敬すべき業績である。(安田文庫所藏の狩谷棭齋手寫、自筆書入の活版經籍考は、現存の一切の通行本の祖本で、先年之を玻璃版覆製するに際し、之に增補訂正を加へて、其の誤謬を正しておいた。)

近藤守重の右文故事の(續)譜書目

右文故事中に記載せられてゐる近藤正齋の慶長勅版考及び家康の伏見版・駿河版に對する考説も無論誤謬はあるが、書誌學的には活版經籍考よりも遙かに卓越した研究で、

古活字版研究史上特筆す可きものである。然し是れ等は、何れにしても、古活字版の極く一少部分に關する問題を取扱つたものであつて、古活字版全般に亙る調査は未だ現れるに至らなかつた。

狩谷棭齋と屋代弘賢の研究着手

然しながら、近藤正齋と共時に典籍の蒐集に努め、書誌學に造詣淺からざる諸學者の間には、此の方面の調査に着手した人々があつた。其れは、狩谷棭齋と屋代弘賢とである。

棭齋の活字板書目

狩谷棭齋は、活版經籍考の補訂(自筆頭注書入)に於いて、其の見識の優れてゐた事を示してゐるが、自家藏弆を中心として、之に見聞する所を加へ、「活字板書目」を編纂してゐる。安政二年に森約之が自ら轉寫した一本(安田文庫藏)の殘存してゐるものに據れば、上卷は漢籍(佛書を含む)一百四種、下卷には國書七十種を收め、簡單に版式等の注記を加へてある。開書の部分もあるらしく、書名のみを掲げて注記を缺くものや江戸中期のものも若干混入してゐるが、當時かゝる書目の編纂は、棭齋を措いては他によく之を成し得るものはないであらう。單に未完成の書目にのみ止つて、其の研究の成果を後世に殘さずに終つた事が惜しまれる。

屋代弘賢の活版書籍目錄

屋代弘賢も亦古活字版を多數所藏し、「活版書籍目錄」(自筆稿本一冊、東洋文庫藏池底の玉藻の內)を殘してゐるが、之は單に弘賢が自家藏弆中の古活字版に就いて其の版式を略記した書目で、其の記載も十數本に終つてゐて、かゝる試みを行つたといふに過ぎな

い。其の他當時の藏書家の中には自然に古活字版をも多數所藏してゐたもの、例へば、新見正路(賜蘆文庫)・勢州松坂の小津桂窓(西莊文庫)、稍降つて水野忠央の新宮城書藏等があるが、特別に纏められた書目等はなかつた。(新見正路には賜蘆書院儲藏志あれど、古活字版とは殆ど關係なし)又、群書類從の編纂校訂に多數の古活字版が參考せられたのを初め、諸學者の間には、古活字版を以て本文校訂を行ふものも少からず、古活字版を古本として尊重する傾向を生じた事も注意せられる。又、其の後、棭齋の末流たる澁江全善・森立之等の編纂に係る經籍訪古志にも若干古活字版を採錄してゐるが、特に研究と稱する程の事はない。爾來古活字版に對する注意が喚起せられて、古書に注意を向ける人々は、何人も之を取扱ふのであるが、何れも極めて一少部分に止り、纏まつた研究は殆ど現れてゐない。明治の末期に及んでも、朝倉龜三の日本古刻書史中に先人の調査を應用した啓蒙的の若干の記述が現れた程度で、研究と稱す可きものは極めて乏しい。大正年間に入つて、新村出博士が、若干の考說を發表せられて此の方面の問題を提唱せられ、又、和田維四郎氏が其の蒐集を中心として嵯峨本考・訪書餘錄の兩書を編刊せられるに及んで、古活字版の研究は一轉期を劃したと言ふべきであらう。古活字版全般に亙つて、多數の資料を蒐集し、專ら實物に則して研究する方法に據つた和田氏の業績が、

在來の考說と自ら其の價値を異にした事は當然であつた。又和田氏の蒐集が其の儘東西兩地に保存せられて、其の後の此の方面の研究に寄與する所が少くないのも注意すべき事である。なほ明治大正年間に結成せられた成簣堂文庫の古活字版蒐藏も亦研究資料として有力なるものである。而して輓近に於ける古活字版の研究に就いては高木文庫と安田文庫との資料蒐集を擧ぐ可きである。殊に後者の蒐藏は空前にして、殆ど絕後であらうと信ずる

補訂篇

本文の校了若しくは印刷終了後、新たに發見した資料、又は、新たに調査の結果、補訂す可き點を生じたので、以下、本文の章節に從つて、追記する。

本書成稿の後、第一篇は、昭和九年の春校了となり次いで印刷をも終へてゐる爲、滿二年を經過する今日、新資料を補益す可き事も少くないが、其れ等は他日改稿の機を俟つ事として、今玆には本稿記述中の紕謬のみに止める。　昭和丙子四月二十九日

第一篇

（一）第二章第一節

（八頁十一行）　訂正　禿氏祐祥氏百萬塔陀羅尼攷證

（二）第二章第二節

（二二頁四行）　訂正　墩煌出中

（三）第四章第三節

（四〇頁）石井氏藏醍醐版大乘玄論は金澤文庫舊藏本で、石井氏藏本に缺脫してゐる卷末刊語一葉及他の數葉のみは、金澤文庫に現存してゐる。

（四四頁九行）　訂正　舟讃

一、第五章第三節

師直版首楞嚴義疏注經の補刻

（五三頁六行）保阪潤治氏の藏本を檢するに、師直版首楞嚴義疏注經は、後に補刻が加へられてゐる事がわかつた。然し、保阪氏藏本には、「永享四年壬子二月十日置之」の墨書識語が存するから、補刻はそれ以前に行はれたものである。

（五四頁四行）　訂正　日本印刷通史　祐祥

（五六頁）（六二頁）　訂正　應庵和尚語錄

妙葩刊行書

（五六頁）春屋妙葩の關與した五山版としては、なほ他に、貞和四年に建仁寺天潤庵の玉峯が開版し、延文中に同じく建仁寺の宗任が幹緣して補刻した景德傳燈錄にも助緣してゐるものがある。其の卷十四の末に、

補刻景德傳燈錄施主芳衡」前南禪住持比丘　德見」南禪住持比丘　慈均」
天龍住持比丘　光林」東福住持比丘　士昭」眞如住持比丘　不傳」
安國住持比丘　沼榮」雲居比丘　妙葩」

臨川寺版

（五七頁）臨川寺版としては、他に、康應元年刊行の聯燈會要（三十卷十五冊、建仁寺兩足院藏）があり、卷末に、「康應己巳歲重刊于臨川寺」の刊記がある。從つて、六四頁四行目の嘉慶二年の次に本書を加へる。

嘉慶元年刊附訓妙法蓮華經

（五七頁）應安五年刊妙法蓮華經に關し、之は音讀附訓なるに對し、後、嘉慶元年に訓讀附

建仁寺版

訓版の妙法蓮華經(八卷八册、身延文庫藏。)書誌學三ノ四、拙稿「身延問答」參照があり、左の刊語がある。

法華經倭點者蓋爲　本國僧俗男」女至于竈婦販夫未通漢音者而所」設也詳夫以倭字翻
漢語猶以西天」梵音而譯東土唐言其音字雖似別」法義則大同矣而又倭字俗謂之假」名字
經曰但以假名字引導於衆生」是乃　約齋居士不壞假名而談實」相所以流通倭點者歟若
復有人乎」不執卷常誦是經別居士捨財鏤版」厥功也不虛矣居士法諱道儉約齋」其號嘗自
製十願文誓施世法二藥」以治一切衆生身心二病云嘉慶初」元丁卯佛成道日空華道人爲」
約齋請隨喜而題

善法住持沙門　心空校定」東山隱衲釋　祥英繕寫」約齋居士　道儉募緣刊行

(五八頁)建仁寺版としては、他に、黄龍窟所刻の黄龍十世錄(卷末に康曆二年比丘以倫謹誌の刊語あり。)がある。

(六〇頁七行)冷齋夜話を削去、同書は無刊記本であるが、成簣堂文庫藏の一本に明德二年の識語が存するので、其れ以前の刊行なる事が知られるにとどまる。(七三頁參照)

(六二頁四行)虎丘隆和尚語錄は前頁終行と重複につき削去。

(同頁十二行)次に、「妙法蓮華經(臨川寺版)八軸」を挿入。

(六三頁三行)次に、「新刊五百家註昌黎先生聯句集(陳孟榮版)」を挿入。

(同頁十五行)次に、「至德三丙寅年(一三八六)刊　蘿山和泥合水集」を挿入。

（六五頁八行）次に、「三十（癸年一三四）刊　梵網經菩薩戒　一冊」を挿入。

（六七頁二行）刻工名見ゆる五山版。　佛祖歷代通載「三十一卷、合十一冊」布施卷太郎氏藏。　十行二十字（稀に二十一字）にも亦、「良甫・孟榮・榮・福・伯壽・白壽・壽・伯・才・林・朱・元・沈・善朴・胡」等の刻工名が見え、之に據れば、本書も、兪良甫・陳孟榮等の開版書として算へる事が出來る。

又、韻府群玉にも「明（彥明）・長有」等の刻工名が見える。（七四・七八頁參照）

工名

（六九頁）「博多版」の傳稱に就いて、今一つ考へられる事は、現在でも東山建仁寺附近に博多町なる町名が殘存してゐる點から、或は舊時の支那刻工の來朝移住と何等かの關係を有するものであるかもしれないと推定せられる事である。

外典五山版の傳本增補

〇第五章第五節

（七四頁）外典の五山版書目を編んで後、管見に入つた類本若干を左に增補表記する。

（七四頁（二））毛詩鄭箋。　兩足院藏、缺三冊。

（同頁（三））春秋經傳集解。　兩足院藏、改裝合十五冊。　永祿天文年間林宗二自筆書入あり。

（同頁（四））論語集解（正平本）。　雙跋本、安田文庫藏。

（七五頁（五））論語（天文本）。　初印と認む可き一本（妙覺寺舊藏）（石川縣立圖書館保管本）を一見した。卷末に左の如き淸原枝賢と正種との手識がある。（書誌學五ノ一、拙稿□□□□小識參照）

永祿歲舍丙寅菊月二十又九袖」此一冊索後證家點恰如一器」水於移一器勿令聽電覽矣

楠」第兄余門下生也豈梅花楼」可謂之者乎」　司農卿淸原朝臣［枝賢］

大外記宮內卿枝賢以證本朱墨點寫奧書」寫置候條拙者ためには重寶に候常御覽候て

御廻向奉」願斗候」永祿拾年卯月五日大饗主馬首正種（花押）」妙覺寺」建住坊　參

（七七頁（四））歷代序略。　（ロ）版、金澤市立圖書館藏（大島贄川舊藏本、保管。　一冊）。

（同頁（二））蒙求。　中・下二卷二冊、安田文庫藏。

（七八頁（九））莊子鬳齋口義。　兩足院藏、卷五・十の二冊を缺く、八冊。

（七九頁（三））八十一難經。　在來、圖要一冊のみが知られてゐたが、（帝國圖書館・谷村一太郎氏藏。　舊刊影譜所收。）實は、六卷二冊に圖要一冊を併せて三冊を以て完本たる可きものなる事がわかつた。（尊經閣文庫・布施卷太郎氏藏、三冊。）殊に布施氏藏の一本（書誌學五ノ 描鳥西[illegible] 小林參照）の第一冊は原題簽をも存する稀有の傳本である。（一二一頁同じく訂正）

（八〇頁（八））胡曾詩註。　兩足院藏、中卷缺、二冊、原表紙存す。

（同頁（一））東坡先生詩。　披雲閣文庫藏、二十五冊。　布施卷太郎氏藏（有缺）。

（同頁（二））山谷詩集注。　兩足院藏。　卷十の一冊缺、九冊。

（八一頁（七））白雲詩集。　卷四以下を缺く一本（伊澤蘭軒舊藏、文化十三年求古樓展觀書目に見ゆ）を石田羊一郎氏遺書中に見る

雪廬藁に嵯峨刊行本

(同頁)(六)雪廬藁。兩足院藏の一本(一冊)は、卷末に「嵯峨刊行」の刊記があつて、全く別版である。

(八二頁)(三六)聯珠詩格。安田文庫藏(松崎慊堂・山本北山舊藏、五冊)

(八三頁)(元)皇元風雅。(二)兩足院藏。

察病指南と揭曼碩詩集の發見

以上の他、新たに發見したものに安田文庫藏の二本ある。即ち其の一は「察病指南」、其の二は「揭曼碩詩集」である。

察病指南(三卷、一冊)大永版の醫書大全と略同じ頃の刊行と認められる。左右雙邊、有界、十行十九字。注雙行。縦七寸三分。横五寸三分。挿圖あり。版心「察病指南 (丁數)」。總紙數通卷五十二葉(序目共)。往時の附訓書入があり、褐色の五山版原表紙を保存する。

揭曼碩詩集(三卷、一冊)元揭傒斯撰。惜しむらくは、首尾各一葉を缺く爲、刊記の有無等未詳であるが、南北朝刊行の五山版と認められる。左右雙邊、有界、十行十九字。縦六寸四分五厘、横四寸。版心「詩(卷數)(丁數)」。第一卷、二十二葉。第二卷、二十三葉。第三卷、二十二葉。間々後人の頭注書入がある。

薄樣雁皮紙摺の五山版

なほ、五山版中、薄樣の雁皮紙に摺刷して冊子としたものがある事が判つた。其の一例として、兩足院所藏の輔教編(妙範刊、卷三・四の零本一冊)・重刊貞和集(二冊)がある。

（八八頁四行）　訂正　過ぎざるも。

月庵和尚假名法語（五山版）

（九二頁）片假名交りの五山版としては、他に「月庵和尚假名法語附月庵行實」（一冊）があり、雨足院藏の一本は、「月庵」の古印記もあり、月庵手澤の一本である。

天正片假名版暦

（九二頁）假名版暦に就いては、以上は平假名のみであるが、片假名としては現存唯一のものに、天正六年・同七年の斷簡（一帖。もと古箱の裏貼に用ひられてゐたもの。）が安田文庫に藏せられてゐる。

饅頭屋本の原本不傳

（九三頁）饅頭屋本の原稿本が雨足院書庫の林宗二手寫本の一類中に保存せられてゐる由を同院主より示教せられたが、其の後、機會あつて、筆者自ら同庫中一片紙をも殘さず精査し得た結果、其の誤傳なる事が確められるに至つたから、茲に訂正をする。

○第五章第八節

尼子經久　法華經

（一一二頁）中國筋に於いては、なほ山陰方面に、尼子經久の開版した妙法蓮華經がある。管見に入つた唯一の傳本は、保阪潤治氏の藏本で、稍後摺と認められる。舊時の改裝に係り、朱點書入。字面高さ約七寸。八卷。八軸。毎卷首に「二千部內佐々木伊豫守源經久」の木記、「長谷寺三十部寄進」の識語があり、卷八の卷末に左の刊記がある。

佐々木伊豫守源經久　　（墨書）尼子伊豫守　天文十一年十一月（下缺）
月叟省心居士　　年八十四歲

經王六万有餘字刊梓功勳積接天
　人與非人受持者齊成佛道幾千季
　　永正十二季乙亥正月吉日

（一一九頁八行）　訂正　（東福寺靈源院版）

越後蒲原刊般若心經秘鍵

（一二一頁）同じく越後蒲原に於ける開版に永正四年の「般若心經秘鍵」（一帖）がある。小型本で、管見に入つた唯一の傳本は、高木文庫藏の一本である。每半折四行、每行十七字。字面高さ約四寸。原本の大いさ、縱五寸五厘、橫一寸九分半。全卷に朱墨點書入があり、卷末に左の刊記がある。

　越後蒲原大面小栗山不動院住侶玄誠書之
　　永正四年丁卯九月廿九日

訂正追加

（一一九頁一二行）　訂正　內野氏皎亭文庫舊藏、安田文庫藏。（西村兼文自筆稿本古梓一覽の序文に據れば、本書は嘗て法華寺に藏せし書）

　卷末墨書識語と訂正（越後にありたるを藏之が得て、櫻田中青山伯の手に移りしものといふ。）

（五五頁七行）　訂正　一〇三　四一

第　二　篇

○第一章

（一三二頁五行）　訂正　寛政十一年

○第二章

吉利支丹版の増補

吉利支丹版に就いては、前記の後に、左の諸本の發見が報ぜられた。上智大學のヨハンネス・ラウレス教授の「日本耶蘇會古版本三部の發見」（幸田成友博士譯、圖書館雜誌三〇ノ四・同三〇ノ八、補遺）に據れば、

（一）「金言」（ローマ字）　一冊　慶長八年（一六〇三）　長崎刊　（北平支那古耶蘇會員文庫藏）

（二）「精神の鍛錬」（ローマ字）　一冊　慶長元年（一五九六）　長崎刊　（獨逸オッペルスドルフ伯藏）

右の二本は在來知られなかつた新發見のものである。又、在來の傳本に其の數の加はつたものには、（三）サクラメンタ（南洋カトリック傳道會財産管理人エレロス師藏）

（一三九頁）(13)どちりいな・きりしたん（國字）に就いては後に記述する。

○第三章

（一五八頁七行）（一五九頁四行）　訂正　辭

（一五六頁一行割註）（一五八頁九行）　訂正　文祿元年は十月廿七日に慶長と改元

○第四章第一節

慶長勅版勸學文の傳本

（一八〇頁）慶長勅版勸學文の傳本には、なほ早稻田大學圖書館藏の一本がある。改裝一冊「若香山房之印」「千水艸堂之印」等の印記があり、又、寺田望南の舊藏に係る。

（一八五頁終行）訂正　本。である。

（一八八頁十・十一行及欄上）訂正　中臣秡。

（一九六頁）皇朝類苑の傳本には、なほ尊經閣文庫藏本（丹表紙附原裝）・富岡文庫藏本（薄鶯色原表紙附）がある。

（二〇二頁十二行下）訂正　あらう。

（二〇六頁）「百官略・書札禮事」は阿波國文庫にも一本（不忍文庫舊藏）藏。

（一）第四章第三節

（二一七頁六行）伏見版周易には、なほ富岡文庫藏本（改裝、二冊）があり、又、周易、慶長十年刊潤幡子祖博有跋本には、なほ安田文庫藏（原裝、原題簽附。五冊）及び早稻田大學圖書館藏（「今井文庫」印記あり、改裝三冊、但し、卷末の刊記一葉を缺く。）の二本がある。又、無刊記本には尊經閣文庫藏本（褐色原表紙附）がある。

（二一八頁六行）訂正　初秋念又一日

（同頁九行）伏見版七書（一）の傳本には、なほ內野氏皎亭文庫藏本（水色原表紙附七冊）がある。

（二二一頁六行）東鑑其の（三）の傳本、尊經閣文庫に一本（紺表紙二十六冊）・富岡文庫に一本（改裝、二十五冊）がある。（なほ此の種の活字には平假名の振假名を附せるものあり。）

（二二五頁五行）伏見版東鑑の傳本には、なほ尊經閣文庫藏の一本があり、此の書人なく

香色原裝(原題簽附)を存する美本(五十一冊)である。

(二三一頁七行)(6)東洋文庫藏二本と訂正、從つて總計(18)となる。

帝鑑圖說の傳本

(二三四頁二行)帝鑑圖說無跋本の傳本にはなほ、(15)尊經閣文庫藏本(16)福井市立圖書館藏本(原題簽附原裝松平家藏)・(17)長谷川赳夫氏藏本(第四册末に「去歲自元和癸亥冬至寬永甲子季春借三餘暇朱墨以點之」の墨書あり。)等がある。

○第四章第四節

駿河版群書治要印行に關する文獻

(二三一頁)群書治要の印行に關し、五山衆が其の校合の仕事を分擔した事は、本光國師日記に明らかである(二三九頁參照)が、他に五山側の文書が發見せられたので、本光國師日記の記載を强化す可き資料として玆に其の全文を掲げる。其れは、建仁寺兩足院所藏の「群書治要板行按合御用抄錄」と題する美濃紙二枚の寫本(江戶中期寫)である。

群書治要板行校合御用抄錄

○元和二年丙辰於駿府群書治要板行按合御用納下牒

二月十四日駿府下向傳馬之御理役者出勤

同廿日　同用之折紙取ニ役者出勤

同廿二日　同用駄賃之用力者貳人

四月四日二番駿府下之折紙取ニ眞乘院仙首座入京

六月　伊賀殿へ駿府下向之禮仙首座參

金壹兩貳步　銀貳拾貳文目八分於駿府御扶持方群書治要校合之衆五山支配也

一番衆

鹿王院文泉昌謂西堂

三秀院天外承定首座

右道中上下十四日　在府四十六日

貳番衆

眞乘院玄英斎洪西堂

仙首座慈照院菊齢徒 諱長首仙

右道中上下十四日　在府五十三日

群書治要校合衆御扶持方八木從壽學請取申覺

拾七斛七斗者從三月朔日至四月三十日分

此代小判ニノ五兩參步也但小ノ月アリ

拾壹斛四斗者從五月朔日至六月八日分

此代小判ニノ參兩貳步此外銀六文目渡也

右御扶持方壹人ニ付一日三器充也

但八木三代時之相場ニノ壽學ヨリ請取渡申候也　以上

右之二口分一山之支配金壹兩貳分銀貳拾貳文目八分也

元和二年　　　　　　金地院内

六月八日　　　　　　宗春判

五岳校合之御衆

御小姓衆

（二三九頁柱書）訂正　本光國師

○第五章第二節

倭漢合運圖の傳本

（二六一頁）倭漢皇統編年合運圖の慶長五年刊（第二種）は尊經閣文庫に一本（二冊、大本改裝）を藏し、又同慶長八年刊本（二冊）は、兩足院にも一本、（但し、第一・二種の何れなるか未詳なり。）又、東京文理科大學圖書館にも同刊本第二種（三宅米吉博士遺書、香色原表紙附、正德年間までの書續きあり。二冊）を藏する。

沙石集の別版

（二六三頁三行）沙石集の後刊本に就いては、別に覆刻の古活字版が一種發見せられた。即ち、尊經閣文庫藏の一本（十冊、改裝、水色表紙附）で、四周單邊、無界、十一行片假名交り。匡郭内、縱七寸六分半、横五寸五分半。卷末には、慶長十年刊本と同一の刊語があるが、全く別種の稍小型の活字版で、慶長十五年春枝刊の太平記・太平記抄等と相似の様式を有する。太平記抄が圓智の著述かと言はれてゐる點から考へて、或は同種活字を使用してゐるかもしれない。原刊語のみで、本書刊行の刊記はないが、右の如く慶長後半期の刊行と認められ、元和二年の刊本よりも以前に刊行せられたものとなる。即ち茲に沙石集は又新たに別種の活字版一種を增した。

直江版文選の傳本

（二六八頁一行）直江版文選の傳本には、なほ尊經閣文庫藏本がある。

慶長十年刊太平記の傳本

（二六九頁五行）慶長十年刊太平記の傳本には、なほ尊經閣文庫藏本（二十冊「金澤學校」印あり、改裝）があり、又現に東都書肆に見るもの（何れも缺本若しくは刊記の部分等を脱せるもの）三本あり。

寛永二年刊文選の傳本

（同頁十五行）寛永二年刊文選の傳本もなほ尊經閣文庫藏本の他書肆に見るもの三本あり。

（二七〇頁初行）内野氏皎亭文庫藏本は、卷末の寛永二年刊記を削去し、其の狩谷棭齋藏印二種の捺印は近人の妄補に係るものである。（三六二頁、寛永二年刊文選の條亦、訂正）

（二七二頁三行）　訂正　洛汭宗與。

溫故遺文所收の太平記抄撰者圓智説

（二七六頁）溫故遺文（前田松雲公が蒐書の際、各方面の專家に質した報告書簡（吉川惟足・中院通茂・木下順庵・室鳩巢・稻生若水等各自筆）を貼込帳二十三冊とせるもの、別に拾遺四冊）の第一冊に所收せられた報答書簡の中に、圓智は、倭漢合運圖の著者である由を述べ、又次に太平記抄をも著したとある。即ち（前略）「太平記抄も此僧之作ニ而世雄坊とも申由ニ候。世雄坊は坊號、圓智は名にて候。又日之字付申名も別に有之由申者候（下略）」とあつて、右は圓智歿後、餘り距らぬ時代の所傳であるから、太平記抄を圓智の作と定めてよいと思ふ。因みに右の報書の文中の日の字のつく名とは、日性である事は言ふま

でもない。

○第五章第一節二

（二七八頁）佛祖歴代通載（本國寺版）（前記六本の他、布施巻太郎氏一本藏。）の刊記中に見える「實乘」は、恐らく元和四年刊妙法蓮華經玄義（安田文庫藏。三二八頁參照。）の刊行者なるべく、この僧は、又後年江戸に於いても佛典を活字開版してゐる。（三二六頁參照）

實乘の事蹟

（二八二頁）阿波國文庫所藏の日本書紀抄の原表紙の裏貼りに措遣りが使用せられてゐる長恨歌の平假名交り古活字版（假名草子）は、完本に接しないが、其の裏貼りに據ると、毎半葉六行十五字、字面の高さ約五寸四分の小型本である事が判る。

假名草子の長恨歌・琵琶行兩種

又、「琵琶行・長恨歌」といふ内題を有し、各巻首に一葉の挿繪を含む平假名交りの活字印本がある。内容は前記の一本と異り、寛永頃の刊行と認められる。管見に入つた唯一の傳本は東京文理科大學藏本（改裝、一册）である。

（二八五頁一五行）訂正　伊勢兩太神宮

（二八六頁）法苑珠林一百巻の各巻末刊記を檢するに、必しも巻の次序に從つて刊行してゐない事が判る。即ち、巻數を刊行年時の順に列記すると左の如くとなる。なほ刊記を加へてゐない巻もある。

法苑珠林の刊行巻數次序

元和八年刊　第八十八巻（三月二十四日）・第十三巻（十月二十八日）

元和九年刊　第九十四卷(三月十日)・第八十四卷(三月十四日)・第十五卷(三月二十四日)・第六十卷(六月八日)・第七卷(八月二十九日)・第五卷(潤八月二十二日)・第四卷(十月十九日)・第五十一卷(十一月二十二日)・第十四卷(十一月二十三日)

元和十年(寛永元年)刊　第十八卷(二月九日)・第三十九卷(二月十九日)・第三十二卷(二月二十三日)・第十七卷(彌生下旬)・第五十八卷(三月一日)・第七十五卷(三月十一日)―以下寛永元年―第三十八卷(六月十五日)・第四十二卷(六月二十九日)・第四十卷(七月二日)・第四十四卷(七月十日)・第五十卷(七月二十二日)・第五十五卷(八月一日)・第五十四卷(八月六日)・第五十三卷(八月九日)・第五十二卷(八月十一日)・第五十六卷(八月十六日)・第六十五卷(九月二十三日)・第六十八卷(十月四日)・第七十四卷(十月二十二日)・第八十五卷(十一月十四日)・第九十五卷(十二月四日)・第九十八卷(十二月十一日)・第九十九卷(同上)・第九十七卷(十二月十六日)・第九十三卷(十二月二十六日)・第一百卷(十二月二十七日)

(二八八頁四行)　訂正　元和二年刊

(二八九頁三行)　訂正　或鳥而馬

(同四行)志投小財。…………活板。

(二九三頁七行)元亨釋書の傳本には、なほ内野氏皎亭文庫藏の一本がある。

(二九四頁二行)　訂正　もと仁和寺

倭玉篇の古活字版

又、倭玉篇の古活字版に就いては、其の一(五段組本)の異植版二種は、版式内容精査の結果、安田文庫藏完本が初版、同じく下卷を缺く二冊本(前記諸本の中、大槻家藏本は、狩谷棭齋・森立之舊藏、安田文庫現藏。)は第二版と認められ、第二版には稍增補が加へられてゐる。之に對して其の二(四段組本)は、第一種本の第二版を基として之に若干の改變を施して印行したものである事が明らかになつたから、玆に訂正する。又、水戸彰考館藏本の他、新たに安田文庫に一本を得た。而して右三種ともに心蓮院版ではあるまいかとの推定は一層可能性が增した樣に考へられる。(古典全集印影第一種本(イ)版解題拙稿參照。)

(二九五頁上欄「第八七圖」削去。從つて安田文庫藏の「*」削去。

東福寺に於ける活字開版

(二九七頁終行)增集續傳燈錄は安田文庫にも一本を藏する。

(二九九頁)以上諸寺の他、東福寺に於ける活字開版に就いても注意すべきものがある事が判明した。即ち、同寺在住の守藤集雲(慶長二十年より元和七年六月七日に至る數年在住)が元和二年に十九史略通考を活字開版(三六〇頁・三八二頁參照)を行つてゐる他、整版ではあるが、元和六年には諸人に勸緣して聖一國師語錄(一册)を開版する等、守藤を中心として、同寺内に於ける開版事業にもやゝ見るべきものがあつたのである。

○第五章第二節

(三〇四頁初行)觀心略要集は安田文庫にも一本を藏する。

(三〇三頁八行)同じく寛永元年刊行の「大乘止觀法門」(二册)は版式上叡山版と推定せられる。卷末に「寛永元年甲子九月五日」の刊記がある。(叡山文庫藏)

(三〇四頁七行)　訂正　縱七寸七分、橫五寸三分。

(三〇五頁九行)傳法正宗記は、兩足院にも一本(三册)を藏する。

(三〇六頁三行上)　訂正　撿 十六行十八字但勘細字

(同　四行下)　訂正　記 十六行十八字但勘細字

(同　六行下)　訂正　次七行との間に「一　止觀義例 十行二十字」を加ふ。

(同　八行上)　訂正　處 二十一行二十字

(同　十一行上)　訂正　次行との間に「一　遁麟 十行二十字」を加ふ。

(三〇八頁十行)法華經文字聲韻音訓篇集の活字印行に從事してゐる純好は、正運と共に慶長九年刊大廣益會玉篇(二七三頁參照)の開版にも與つてゐる。

(三一二頁八行)　訂正　玉澤不渇抄

(三一七頁)阿彌陀經秘直談鈔は、三村淸三郎氏また一本(上中卷二册)藏。

(三二七頁八行)　訂正　川越喜多院とあるは、川越慈恩寺と訂正、喜多院には現存してゐない。

〇第六章第一節

延壽撮要の一本傳

（三三〇頁八行）延壽撮要（第三種本）の一傳本たる森潤三郎氏藏本の奥に「門下生意齋道啓刊行之　慶長十三年孟春吉辰　延壽院玄朔（花押）」の墨書識語が見える。但し、玄朔の自筆とは認め難く、移寫に係るものであらうと思はれるが、之が移寫であつても、延壽撮要其れ自體（第三種本にあらず。）の初刻年時を限定する傍證とはなり得る。且つ本書は、筆者には版式上からも今少し後の刊行と認定せられるから、茲に疑を存して後考を期する事とする。

慶長十三年刊脈語

（三三〇頁）慶長中期に要法寺版（直江版）文選等と同種の活字を襲用して古注千字文・韻鏡（共に慶長十三年刊）等を刊行してゐる涸轍書院（慶長十年に周易を刊行した涸轍子祖傳と同人なるべし）も亦、醫書を活字開版してゐる。慶長十三年刊脈語の卷末に

慶長十三戊申龍集仲冬如意珠日（下缺）

の刊記があり、管見に入つた現存唯一の傳本（安田文庫藏一册）は、不幸にして、丁度涸轍書院（又は堂）等の文字を含む箇處たる刊記の末が削去されてゐる爲に、確證を示し得ないが、古注千字文等と同種の活字を用ひてゐる上、刊記の樣式等も相似してゐるから、同一刊行者の手になつたものと推定する事も不可能ではない。（又、二七四頁參照）

慶長九年刊十四經發揮

又、現存書を見ないが、狩谷棭齋の求古樓展觀書目第二（文化十三年、棭齋自筆稿本、安田文庫藏一册）所收、棭齋所藏本中に、慶長九年刊十四經發揮（三卷）があり、其の卷末に「慶長歲舍甲辰仲冬良日日東下京涸轍堂活板焉」の刊記があると解說してあるから、涸轍書院の活

版は更に多きを加へる。（右本は、被審の正確なる解説に據れば、四周雙邊、九行十七字、嘉靖頃の翻印であるといふ。）

慶長八年守三刊雲林神彀

（三三〇頁終行）慶長八年守三刊雲林神彀の卷末に附贊として「龔公當日太醫官、施療軍治當罪喩、匪學岐黃精素難、方書普遍是多端、醫鑒回春之作長、常撮二帙撮要肝、七言五四為歌訣、政令童蒙誦習安、去重刪復幾編簡、若挂遐邇納小叢、名是日雲林神彀、的然直發育中完、今求善本新刪板、不辨鳥馬錯于干、康幾高君加政正、洛陽醫德堂下刊」とあつて、大に慶長八年癸卯臘月日　守三謹識」となつてゐる。刊記集に略したから玆に附記する。

（三三一頁十一行）訂正　黃帝

梅壽刊醫學正傳卷之一・明醫雜著抄

（三三二頁）梅壽刊行の活字版にはなほ他に、醫學正傳卷之一（醫學或問）一冊（安田文庫藏）があり、卷末に左の刊記がある。

元和七年歲舍辛酉初夏良日梅壽刊行

又、元和・寛永中の刊行と認む可き明醫雜著抄（片假名交り三卷三冊、安田文庫藏）があり、卷末に「梅壽刊行」の刊記がある。

（三三四頁二行）　訂正　新刊黃帝明堂灸經

慶長十八年刊黃帝明堂灸經

（同　六行）傷醫精要の前に「新刊黃帝明堂灸經、三卷、一冊。（安田文庫藏）

（刊記）「慶長癸丑仲冬日」を加ふ。

寛永五年刊醫略正誤

（三三五頁四行）玉機微義の他になほ之と同一刊行者の手になつた同種活字の醫略正誤（寛永五年刊、二卷、二冊、東洋文庫藏。）がある。四周雙邊、無界、十一行二十字。小字雙行。匡郭內、縱七寸、橫五寸六分五厘。（序文五葉のみ大型活字を用ひ、九行十六字。）卷首に上下の目二葉を附す。卷末に左の刊記があり、寛永五年同一刊行者の手になる玉機微義等と同種活字を用ひてゐる。（平出氏舊藏。）

新町通町頭　　盧甚左衛門
室町藥師町　　宇野善五郎

寛永第五戊辰曆臘月吉辰　　繡梓

八十一難經

（三三六頁三行）訂正　八十一難經（六卷二冊。元和中刊、寄村一太郎氏藏。其の原夫竅奧賦序に題識、淺蕉本は元和（六年刊）明月本を用ひたれば、刊行年時を限定し得。）

（同　　頁七行）古今醫鑑は大阪府立圖書館また一本藏。

又、皆川に一見した古活字版醫書を左に追記する。

意傳善救錄

○意傳善救錄乾集（一冊、安田文庫藏）乾集とあるから、坤集も刊行せられたものと思はれる。元和寛永中の刊行、四周雙邊、無界、十二行二十一字。

註解傷寒論

○註解傷寒論（十卷、合一冊、安田文庫藏）卷首序及圖解運氣圖（十一葉）のみ整版を交じへ、本文は、全部活字。四周雙邊、無界、十一行十九字。元和寛永頃の印行と認められる。

○第六章第二節

(三三八頁五行)五家正宗賛(花園一枝軒刊)、兩足院また一本(四册)藏。

(三三九頁六行)五燈會元、兩足院また一本(三十册)藏。

慶長二十年刊止觀義例

(三四〇頁四行)三國佛法傳通縁起(慶長十二年以前刊、一册―三四七頁參照。)と同種活字同版式の慶長二十年刊行の止觀義例(一册、杉浦三郎兵衛氏藏)があり、卷末に「右此本者以舊本校摘之而印寫之焉」于時慶長二十乙卯曆六月日」の刊記がある。　杉浦氏藏本は、眞如藏舊藏の一本で、卷末に元和元年呑海・同二年實祐の傳領墨書識語が加へられてゐる。

(三四一頁二行)　訂正　元和八壬戌歳。

夢中問答集の異植版

(三四三頁八行)夢中問答小字本には、右三種の他、更に別種の異植字版が、(ニ)一種發見せられた。(安田文庫藏、四周雙邊、無界、十二行片假名交り。)又小字本(イ)種は早稻田大學圖書館にも一本(合一册)を藏する。

卅三問答の異植版

(三四六頁十三行)卅三問答には同種活字の異植版が存在する事が判明した。(安田文庫藏、一册。答下缺缺。)

佛書三種の記　古活字版追補

新編佛法大明錄(元和寛永中刊。十八史略と同種の活字を用ふ。四周雙邊、無界十二行二十二字。二十卷五册。兩足院藏。)・運庵錄(寛永中刊。四周雙邊、無界十行十九字。纏紙數十六葉。一册。兩足院藏。)・原人論(寛永中刊。一卷一册。京都帝大藏。)・倶舍論頌疏(寛永中刊。實山版か。十三册。安田文庫藏。)

(三五〇頁二行下)　訂正　「本屋新七」。

同　十一行上)「西田勝兵衛尉(慶長十八年刊大藏目錄)」を加へる。

(三五一頁二行) 訂正 玄佐。

(同 三行)涸轍書院(堂)は涸轍子祖博(慶長十年周易刊行者)であらう。

(同 四行)「宗甚」の上に「宗與」を加へる。

(同 七行)仁右衛門は、慶長十五年節用集刊行の「小山仁右衛門永次」である。

(同 十行下) 訂正 慈眼・純孝等の(宗純ハ誤リ)

○第六章第三節

(三五九頁)・(三八〇頁)・(四二一頁)史記原裝の一本(五十冊)安田文庫藏、又、内野皎亭氏藏(改裝、五十冊、久遠院舊藏)

(三六〇頁十三行)・(三八二頁八行)古今歷代十九史略通考が東福寺版であらうといふ事は、前に述べたが、早稻田大學圖書館にも一本(栗皮色原表紙存す。「金澤學校」印記―加州藩學―あり。)を藏する。刊記二行目第十二字「輝」は「詳」の誤につき訂正。

(三六二頁終行)・(三八九頁(元))韻府群玉は安田文庫にも一本(丹表紙・原題簽附。但し、合綴十九冊。)を藏する。

(三六三頁)・(三八七頁)三國相傳陰陽輨轄簠簋内傳金烏玉兎集の古活字本には、なほ新たに管見に入つたものに、寛永二年・四年・五年刊の諸本(三本安田文庫藏)があり、何れも松園作左衛門の刊行に係るものである。各刊記は左の如くである。

簠簋內傳の增補新見

寛永二年刊（刊記）寛永二乙丑林鐘上旬日　松岡作左衛門開板

同　四年刊（刊記）寛永四丁卯五月下旬日」洛陽冨小路通於一町目松岡作左衛門開板

同　五年刊（刊記）寛永五戊辰曆仲春上旬日」洛陽冨小路通於一町目松岡作左衛門開板

江湖風月集略註の一本

（三六三頁終）江湖風月集略註に同一刊行者による寛永三年刊本がある。（三九五頁にも增補）

（刊記）寛永三年仲呂上旬

二條観音町中嶋久兵衛開刊

（三六四頁）多識編は林道春の諺解故に削去。國書の部（五七七頁）へ移す。

（同　頁）訂正　新編晦菴先生語錄類要。　阿波國文庫にも一本（八冊）藏。（三八五頁下にも增補）

（三六五頁）尚書抄は兩足院一本藏。

中庸抄の一異版

（三六六頁）中庸章句抄は三種の他、新たに元和・寛永中の刊行と認む可き一本（下卷一冊、安田文庫藏）を發見した。四周單邊、無界、十一行片假名交り。（縱八寸二分・横五寸五厘）四十一葉。

長恨歌抄の一異版

長恨歌抄は尊經閣文庫にも別版（五）寛永中刊の一本（島田蕃根舊藏、寛文七年業秀點講あり、以貫一讀）がある。

（三六七頁）三體詩素隱抄（一）元和八年刊本は尊經閣文庫にも一本（改裝、岡本氏舊藏、十三冊）を藏する。

（三六八頁）笑雲和尚の古文眞寶抄（元和三年刊）は、尊經閣文庫にも一本（香色原表紙を存し、大型、些の書入なく頗る美本）を藏する。

中華若木詩抄の異板

中華若木詩抄も亦尊經閣文庫に一本（栗皮色原表紙附、四冊）を藏するが、之は成簣堂文庫藏本等に比して版式の古い別版で、雙邊、十七行片假名交り。慶元中の刊行と認められる古拙な様式を有するものである。

篔簹抄

（三六八頁）以上諸本の他、活字刊行の假名抄物としては、寛永中の刊行と認む可き篔簹抄がある。阿波國文庫に一本（三卷、三冊、不忍文庫舊藏）を藏する。四周單邊、無界、十二行片假名交り。日本書紀抄（三卷本）と同種の活字を用ひてゐる。版心に「篔簹抄」とある。

（同　六行）訂正　錦繡段抄

漢籍古活字版刊行書目數及版種表訂正

（三六八・九頁）漢籍古活字版刊行書目數及び版種表を左の如く訂正する。

	（假名抄を除く）	（假名抄）	中世期刊本（五山版等）
經部	一七部	六部	一一部
史部	一二部	一部	六部
子部	三八部	五部	一三部（儒書三部共）
集部	一四部	九部	三四部
（計	八一部	二一部（合計）一〇二部	六四部（同一書目に就きて異版を數へず）

經部　（假名抄を除く）五六部　（假名抄）一三部

史部　　一六部　　一部
子部　　六六部　　五部
集部　　三九部　　一五部
○計　　一七七部　　三四部（合計）二一一部

（三七二頁）周易（二）正運刊本、他に安田文庫藏本（原題簽存す、吉田漢宦舊藏）・早稻田大學圖書館藏本（今井文庫舊藏、一本は周易一冊本、二冊本）があり、（三）無刊記本に尊經閣文庫藏（褐色原表紙附）の一本がある。
（三七三頁）尚書（二）第二種、尊經閣文庫一本藏。（青色原表紙附、二冊、酒竹文庫舊藏。朱訓書入。）
（三七四頁）毛詩（一）割注訂正　八行十七字　（二）（ロ）尊經閣文庫一本藏。（褐色原表紙附、十冊。朱訓書入。）
（三七五頁）春秋經傳集解（一）尊經閣文庫一本藏。（原表紙。朱訓書入、他、慶長時代の句讀点、其本を書入書添あり。十五冊、大本。）
（三七六頁）（七）古文孝經孔氏傳は、新たに（三）と全く活字の樣式を異にする（四）元和寛永中の刊行と認む可き別版を發見した。（安田文庫藏）四周雙邊、有界、八行、十八字。（縦七寸三分、横五寸四分、古文孝經孔傳別本、數。）序四葉、本文二十四葉。
（三七七頁）論語（ロ）第二種本は、安田文庫に又一本を藏する。
孟子（一）正運刊本も安田文庫に一本、（二）も尊經閣文庫に一本（香色原表紙附、附訓書入、酒竹文庫舊藏）を藏する。
なほ、尊經閣文庫に開版當時の水色表紙を殘す四書（中庸のみ正運の刊記を存す）の活字覆刻整版本（學・庸各一冊、論語二冊、孟子四冊）があり、之に據つて、慶長後半期に正運刊

行の活字版をもとにして早く出版せられた整版四書(論孟は古注)の完本の姿が明確となる。

(三七八頁)安田文庫に大學・中庸を合綴した一本(森立之舊藏)を藏する。但し、大學の首一葉及び中庸全部整版補配。活字の部分は(イ)第一種本である。

(三七九頁)(三)中庸集略は尊經閣文庫一本藏。

(同頁)(五)龍龕手鑑は、尊經閣文庫に一本(黄色原表紙附、松雲公手題)及び、富岡文庫に一本(改装六册)を藏する。

(三八〇頁)古今韻會舉要(一)有界本(ロ)は尊經閣文庫に一本(稻田福堂舊藏)を藏する。

(三八〇頁)(六)多識編二卷二册は、明人の著述であるが、茲にいふ寛永七年刊古活字版は林羅山が諺解を加へたものであるから、國書(辭書)の部(五七七頁)に入る可きものである。

(三八一頁)(三)後漢書の零本(卷四五至四七)一册、早稻田大學圖書館藏。附圖印影參照(※)

(三八二頁)は高木文庫藏本と訂正。

(三八二頁)(四)十八史略は、武藤元信氏遺書中に一本を見る。

(同頁)(六)貞觀政要元和九年刊本は尊經閣文庫に一本(寶永二年林復軒及林讀耕の手跋あり)がある。

(三八三頁)(二)孔子通紀、高木文庫藏本は、高木文庫古活字版目錄に脱漏したから特に茲

に注記しておく。又、東洋文庫藏本(二十本)は(三十本)と訂正、從つて「一は四冊」を「二十は四冊」、「二十は合二冊」を「二。は合二冊」と訂正。

(三八五頁)　訂正　(七)眞西山心經・政經

(三八六頁)(三)施氏七書講義は、又、安田文庫二十冊・尊經閣文庫十八冊に各一本を藏する。

(三九〇頁)(元)(二)元和三年刊本も富岡文庫に一本(「慈海之」の識語あり。)を藏する。

(三九〇頁)(三)剪燈新話句解、上卷缺、中下二冊、雨足院藏。又、高木文庫藏一本(上卷の零本一冊)は、淺野梅堂舊藏で、同じく梅堂舊藏の中卷一冊は布施卷太郎氏藏、又、同じ下卷は渡邊氏が藏せられると聞く。

(三九一頁)(圭)句解南華眞經(一)卷二缺、九冊の一本安田文庫藏。(二)早稻田大學圖書館藏(褐色原表紙附、十冊。「長遠寺」「高橋」印記存す。)(畫)老子鬳齋口義(二)堀杏庵舊藏、一冊、安田文庫藏。又、(二)には異植字版(尊經閣文庫藏)があつて、之を改めて分類すると左の如くとなる。

(イ)尊經閣文庫藏附訓書入、褐色原表紙附、二冊。

(ロ)嵩山堂文庫・安田文庫藏([illegible])

(三九二頁)子部に屬すべきものに以上の他、筆疇・撫讀(一冊)がある。阿波國文庫に一本(原裝。不忍文庫舊藏、堀杏庵舊藏の印あり。)を見るのみで、大型活字を用ひ、寬永頃の開

版と認められる。無邊無界九行十七字。字面の高さ約七寸一分。筆疇の後に撫談を合刻してある。筆疇十八葉、撫談六葉。

(三九二頁)(一)昌黎先生文集は安田文庫にも一本(合綴十冊、森立之自筆書入)を藏する。

(二)白氏文集、第六至十、二三・二四の七冊を缺く、二十三冊、早稻田大學圖書館藏。

(三九四頁)(六)山谷詩集注、(一)兩足院また一本藏(六冊)。

(三九五頁)(一〇)新編江湖風月集略註には、他に寛永三年中嶋久兵衛刊の一本あり。刊記「寛永三年仲呂上旬二條觀音町中嶋久兵衛開刊」。

寛永十八年刊
沈靜錄

(三九六頁)なほ、漢籍を抄錄した編著に沈靜錄(十卷、五冊、東洋文庫・阿波國文庫藏)がある から、玆に漢籍の附載として追補する。四周雙邊、無界、九行十九字。匡郭内、縱七寸、横四寸七分。卷首に左の題識があり、更に卷首に明人陳元贇の序文(明崇禎十四年=寛永十八年)があるから、同年頃の刊行であらうと思ふ。

餘負痾數月杜門不出矣性嗜文籍志好沈靜
間取架上之書而讀焉若有所得隨卽筆錄或
一二句或三四條言較有重復遂無復詮次書
成緦曰沈靜錄寛永辛巳八月壬戌埜靜軒題

東洋文庫藏本は、西莊文庫舊藏。

○第七章第一節

(三九九頁)慶長九年平假名活字暦日は安田文庫に又一本を藏する、(三村清三郎氏惠贈、卷首一行を缺く他、卷末まで缺脱なき一軸。)又、前記の一本と形式を異にする慶長頃の刊行と認む可き版式を有する小型活字の平假名暦日の一種があり、之は袋綴としたものに相違なく、行間三分、三段組(高さ六寸七分)の上に更に一段を加へてゐるが、惜しむらくは、古き表紙の裏張から出た斷簡(林若吉氏舊藏玉屑集所揭)を見るのみである。茲に附記して他日完本出現の機を待つ。

平假名活字暦日の異版

(四〇〇頁・五二六頁)慶長九年刊徒然草壽命院抄下卷一冊(森立之舊藏、前表紙のみ褐色原表紙存す)早稻田大學圖書館藏。

(四〇四頁四行)解紛記第三版は安田文庫にも又一本を藏する。

(四〇六頁三行)本朝古今銘盡(第二版)は安田文庫に又一本を藏する。

(四〇七頁六行上欄)「第二七七圖」は誤りて四〇三頁の解紛記と重複せるを以て、解紛記は「二七七(イ)」とし、本書は「二七七(ロ)(ハ)」として之を分つ。

慶長十年刊源平盛衰記

(四〇八頁三行)慶長十年刊の下部に「源平盛衰記(夢梅本玉篇表紙裏貼より一本發見)」を加へる。源平盛衰記(第一種本)の一傳本に「慶長十一丙午八月廿七日」の墨書識語ある一本があり、又、更に、安田文庫藏慶長十年刊夢梅本玉篇の原表紙裏貼りに之が使用せられてゐるから、少くとも、慶

長十年以前の刊行に係る事が證せられ、活字の様式も亦之に適ふものである。

○第七章第二節

（四一五頁七行） 訂正 觀世流諸本 （八種） 六種は嵯峨本考に未載

（四二〇頁十行） 訂正 嵯峨本の。

紙師宗二

（四二一頁）小山源治氏の示教に據れば、「紙師宗二」の印章を料紙の下方隅に模様と同じく雲母で摺込んだものの他に、銀泥で書込んだものもあるといふ。又、嘗て京都大丸呉服店（下村家）に藏せられてゐた光悦自筆の卷物の末の署名に據つて、宗二の姓が「中村」である事が判明し、なほ、同人は、光悦寺所藏の鷹峯光悦町古圖中にも居住者の一人として記るされてゐる。但し古圖には、宗仁と記るしてあるが、二と仁とは通ずるから同人と認めてよいと考へられる。

（四二六頁三行） 訂正 進め得べき

（四二九頁九行） 訂正 本屋新七

（四三〇頁）伊勢物語(3)第二種本(イ)版、富岡文庫一本藏改裝。

（四四六頁）撰集抄(一)原裝の一本また兩足院藏。

（四四七頁）徒然草第一種本は小山源治氏も一本を藏する（佐々木曉水氏舊藏）。同じく第四種本、富岡文庫（改裝）一本藏

嵯峨本徒然草の一異版

又、第三種・第四種の二版と相並ぶ可き異植版がなほ一種存在する事が確められたので、茲に訂正する。之は嵯峨本考にも所收せられてゐたが、其の所收本は現に何處に存するか未詳であるが、安田文庫藏(下卷、一冊。原表紙存す。大槻氏舊藏)の一本が即ち之に當る。從つて、之は第五種本とす可きものであるから、前に第五種本として假に整理をした一本(九行本)は、第六種本と改めなければならない事となるのである。

一　第七章第三節

(四七八頁十一行)(イ)東洋文庫にも一本(改裝三冊、西莊文庫舊藏)を藏する

(四八一頁)女訓集(十一行本)及び女訓抄　(ロ)寛永十六年刊本、中卷、安田文庫藏。

(四八二頁九行)(ロ)早稻田大學圖書館にも一本(小諸文庫舊藏、栗皮色原表紙存す、一冊)を藏する。

(四八六頁四行)刊語中、第三十字、「雖」は「詮」と訂正、又、傳之の下に「者乎」の二字を追補

(四八八頁)　訂正　明德記の刊記、「極月望日　以時」

(同　頁)元和三年刊本にはなほ類字名所和歌集(平假名)あり。(五五六頁參照)

(四八九頁四行)巵言抄の傳本にはなほ安田文庫藏本(新宮城舊藏、一冊)・尊經閣文庫藏本(褐色原表紙附、二冊。「林菴」印記あり)等がある。

(四九〇頁十一行)　訂正　禪宗無門關抄(寛永元年刊)

(四九一頁三行)三體詩絶句抄。

(四九二頁十一行下) 訂正 伊藤爲之助氏藏。(五六二頁も訂正)伊曾保物語(イ)種は又、安田文庫一本(中巻缺)藏。

○第八章第二節

(五〇一頁終行) 訂正 十七種

(五〇八頁) 訂正 (附、一)伊勢物語肖聞抄 二卷 二冊 (安田文庫にも亦一本を得た。)

(同頁十二行割註左)「表紙は雲母……と訂正。

(五一〇頁)大和物語(2)元和中刊十二行本(イ)種は、尊經閣文庫にも一本藏。

(五一二頁二行)うつぼ物語第一種本(ロ)種は早稲田大學圖書館一本(合一冊)藏。

(五一三頁十四行)源氏物語寛永中刊本の兩異植版は、安田文庫にも各一本を藏する。初版と認む可き活字の磨滅の現れてゐない一本は、藍色原表紙附、(有缺、五十一冊)又、再版と認む可きものは、栗皮色原表紙附、有缺、四十四冊。なほ尊經閣文庫にも一本(藍色原表紙附、美本、再版本)を藏する。

(五一五頁)狭衣の元和中刊無刊記本には、なほ尊經閣文庫藏本(ロ)種本、褐色原表紙附、八冊)、名古屋市立圖書館藏本等がある。

(五一七頁)住吉物語第三種本には、異植版がある。(富岡文庫藏、合一冊。小田清雄書入)

撰集抄二種異版

(五一九頁)(四四六頁)嵯峨本撰集抄(素紙摺)はなほ安田文庫に一本(缺下)を藏する
(五二〇頁二行)撰集抄無刊記第二種本には、異植版が存する事が新たに發見せられた。
(安田文庫一本藏。丹表紙附合一冊。)
(五二一頁二行)沙石集古活字版には慶長後半刊行の別版ある事、前記要法寺版の條に補訂した如くである。
(五二三頁)清少納言枕草子第三種本(イ)の中、靜嘉堂文庫藏本は(ロ)の誤。從つて久原文庫藏本の＊を削去。(イ)帝國圖書館藏本に＊を附す。なほ(イ)種の傳本に、富岡文庫藏の一本(丹表紙附原裝、五冊)がある。其の他第一種本(十行本)の傳本には、第一冊のみの零本であるが、富岡文庫藏本(「吉氏家藏」印)がある。

徒然草古活字異版

(五二五頁)徒然草(二)嵯峨本(ニ)の次に、實は第五種本として、同種活字異植版の一本が加はる可き事は、前記の如くである。從つて(ホ)は第六種本となる。なほ其の第四種本の傳本には、富岡文庫藏の一本(改裝、二冊)がある。又、(四)慶長中刊十行本は、別に又一種の異植版本が新見せられ、新たに(ハ)種を得て、(イ)(ロ)(ハ)の三種となつた。活字の磨滅の見えない點から見て新發見の(ハ)種が、初版と認められる。(下卷一冊のみ安田文庫藏)又、(三)烏丸本は、安田文庫になほ一本(原題簽附、二冊)を藏する。(六)句點植版本、安田文庫には別に下卷一冊を藏する。(同五二五頁終行)版心上は「版式上」と訂正。

（五二七頁（ハ）十四行）　訂正　十。行本　（同頁終行）　訂正　（ニ）。十六夜日記

（五二九頁）榮華物語、安田文庫一本藏（栗皮色原表紙附、二十冊。）

（五三一頁）增鏡、高松松平家披雲閣文庫一本藏。

（五三四頁）平家物語（四）寛永元年刊本、安田文庫また一本藏（改裝、十二冊）。（五）雙邊十二行片假名本（覺一本）東京美術學校藏。

源平盛衰記第一種本の刊行年時限定

（五三八頁）源平盛衰記第一種本、管見に入る一本（合二十四冊、但し原表紙保存。）各卷末に「慶長十一年丙午八月廿七日」の墨書識語があるので、本書の刊行年時が限定せられるが、更に又、慶長十年刊夢梅本倭玉篇の一傳本（安田文庫藏中卷一冊、原表紙存す。）の原表紙裏貼りに、本書の摺遺りが使用せられてゐる點より、なほ其の刊行年時が限定せられる事となつたのである。なほ（ニ）の傳本は尊經閣文庫に一本（褐色原表紙附、目とも二十五冊。「金澤學校」印あり。）がある。又、附訓亂版がなほ一本安田文庫に藏せられてゐる事は、第十章（六五八頁）の追記參照。

保元物語の訂正

（五四〇頁）保元物語（一）の中、京都帝國大學藏上卷一冊は、他の四本に對し同種活字の異植版である事が確められたから、（一）は（イ）（ロ）兩版の別が存する事となる。

（七）の保元物語の中、谷村一太郎氏藏（上中二册）は、實は第九種本と認む可きものである。誤つて第七種本に加へたから訂正する。從つて第九種本の欄の（傳本未見）は消去する。

（二）保元物語（片假名十一行本）の完本（合一冊）、安田文庫藏（穴戸氏舊藏）

太平記慶長十二年刊本

（五四三頁）太平記（四）慶長十二年刊本は、前記（四〇八頁）校了の後の發見に係るから、本項のみに追記を加へた。又、元和二年刊本は安田文庫にも一本（卷三七・三八の一冊缺）を藏する。

（五四四頁十一行）訂正　片假名本

義經記第四種本の異植版

（五四六頁十行）太平記抄の音義のみ二冊、尊經閣文庫藏。改裝本。

（五四九頁）義經記第四種本に異植版が存在する事が判つた。即ち尊經閣文庫藏本藍色原表紙附八冊。小杉榲邨舊藏。は成簣堂文庫藏本とは異植版本である。故に他の三本は其の兩種の何れかに屬するものであらう。他日の再調を期して改めて整理をしなければならない。

（五五〇頁）（イ）八雲御抄は、安田文庫にも一本（藍色原表紙附、七冊。喜多村節信舊藏）同じく尊經閣文庫にも一本（改裝、松本文庫等舊藏、八冊）を藏する。なほ八雲御抄の次に加ふべき新發見の古活字版に「和歌題林抄」がある。

和歌題林抄の新發見

和歌題林抄　二卷　二冊　東洋文庫藏

榮華物語・發句帳（第二種本）と同種の活字を用ひ、卷頭の大題及び標目等の漢字のみは、大型の活字を用ひ、他は、比較的小型の活字で、毎行二十至二字、字面の高さ約七寸。標目の雙行注記のみ一層小型の活字を交じへてゐる。四季の部を上卷、戀部以下を下卷とする。

東洋文庫藏本は現存唯一の傳本で、「淡川家藏」「藤原湍印」等の印記がある。褐色原表紙を存し、大いさ等原の儘で、縦八寸九分、横六寸七分。

（五五〇頁）（ロ）萬葉集無訓本の傳本になほ尊經閣文庫藏の一本（書入なし、褐色原表紙附。十冊。）があり、附訓本には、富岡文庫藏の一本（褐色原表紙附、書入本。「温故堂」印記あり。二十冊。）がある。

（五五二頁）（ニ）芳野參詣の芳は吉と訂正。

（五五三頁）不忍文庫書目に「百人一首宗祇抄　元和四刻　十二行　一冊」と見えるが、未だ傳本に接しない。

（同頁十五行）訂正　宗祇抄

（五五六頁）類字名所和歌集(1)は尊經閣文庫にも一本（九冊）を藏し、中島仁之助氏も亦（　）一本藏。

藻鹽草古活字版

（五五九頁）（ヨ）藻鹽草、尊經閣文庫藏の一本（「武州府中善明寺藏」印記あり、青色原表紙附、岡本氏舊藏、十冊。）は、前記二種と全く別版、版心附刻のある異植字版で、整版本の基をなしたものである。

間の本古活字版見

（五六五頁）（ラ）久世舞の次に、新發見の「間の本」を追記する。惜しむらくは上下二卷の中、上卷のみで、然も、卷首の目錄を缺き、卷末も亦若干葉を失つてゐる樣である。元和頃の刊行と認む可きもので、小型の活字（振假名附眞名活字を混ず）を用ひ、毎半葉八行、毎行十七字。字面の高さ約五寸五厘。版心「上　（丁數）」。（第二葉より五十八葉まで存す。）五十

八葉までの曲名を列記すると左の如くである。

たかさご　うのは　なには　はくらくてん　ゆみやはた　よし野しづか　をいまつ
ちくぶしま　かすがりうじん　たましま河　ひむろ　やうらう　あらし山　くれは
しが　かんたん　やたてがも　た歌　をしほ　たうせん　あま　まつむし
ゆうがほ　かねひら　のゝみや　さほ山　江口(四行以下缺)

後の寛永中刊本(二種)・萬治二年刊本等の整版本は皆本書を源としてゐる。書誌(實生十五ノ八、挿圖の本の古版に就いて)參照。うのはの例を擧げると次の如くである。(句讀點・濁點のみ今假に加ふ。)

ひうがの國うどの石屋と申は、かみよのこせきにて御ざ候。むかし天神七代すぎて、地神八だいめの御かみをば、うのはふきあはせずのみことと申候。その御父の御神をばひこほこでのみことと申候。されば御ひざうにおぼしめされ候。三じやくのけんのさきをおり給ひ、三ずんのつりばりにこしらへ給ひて、この浦にてつりをたれ給ひ候所に、つりばりをうをにとられさせ給ひて、みごと御ひざうのつりばりにて候程に、とりかへし度おぼしめされ、こゝかしこを御尋ね候へども、さらに御ざなく候。

(下略)

(五六八頁)(三)謠抄臺林刊行の一本は、香色原表紙を存する十冊本が、尊經閣文庫にも藏せられてゐる。

(五六九頁)謠抄(四)同じく雲母模様の表紙を存し、色變り料紙を交じへた缺本六冊(安田文庫藏)がある。(1)(高砂等)の他の五冊は左の如き曲目を所收してある。

(4)老松　朝長　楊貴妃　紅葉狩　姨棄　通小町　三井寺　蟻通　西行櫻　矢卓鴨

(5)放生川　井筒　卒都婆小町　鵺　佛原　小督　浮舟　梅枝　項羽　龍田

(6)養老　通盛　二人靜　木曾　大原御幸　ウトフ　角田川　自然居士　殺生石　道明寺

(7)白樂天　兼平　定家　山姥　夕顏　籠太鼓　遊行柳　女郎花　葛城　春日龍神

(8)鸕鷀羽　忠度　釆女　安宅　源氏供養　船橋　柏崎　雲林院　鸕飼　當麻

(五七〇頁初行)　訂正　の一本

(五七四頁初行)上欄「第四九六圖」及び下の*印削去。(第一三七圖に既出重複。)

(五七七頁)倭名類聚抄の尊經閣文庫藏の三本に就いて補說する。(一)は栗皮色原表紙を存し、書入なき美本十冊、(二)は鼠色の古き表紙ありて、其の綴目の下方に「江戸文庫」と墨書す。(三)は嘉永四年に幸福嗣興が當時澁江全善の許に保管せる狩谷棭齋自筆校正本を借りて移寫書入を施せる一本なり。又、倭名類聚抄の傳本中には、植版中誤植を發見し、印刷中途にて訂正せりと覺しく、誤植なき一本(前田本(一)の如し)と誤植を胡粉もて塗抹し、其の上より活字を以て捺印訂正せる一本(前田本(二)の如し)とあり。「序文第二葉裏第三行八字目「私」を「松」と改めし例等)

(五七八頁)(へ)拾芥抄、(一)の傳本中に、安田文庫(中下二冊、林洞春寺舊藏。)・早稻田大學圖書館(上中二冊)藏の二本を加へる、

多識篇に道春の諺解

(五七九頁終行)寛永七年刊本の多識篇は、林道春の諺解が加へられてゐるので、國語の字書類に加ふ可きものであるから、玆に補訂する。なほ版式等を詳述すると次の如くである。(四周單邊、有界十二行十一字。横本二冊。匡郭內、縱四寸一分半、横五寸七分半。卷末に「寛永七年霜月下旬」の刊記あり。安田文庫藏(眞如藏舊藏)の一本を見るのみなり。)

庭訓鈔

「庭訓鈔」(庭訓往來のカナ抄注解)を本文中に脫したから玆に補記する。東洋文庫・安田文庫に各一本を藏する。元和・寛永頃の刊行で、四周雙邊、無界十二行片假名交り。上下二卷、二冊。本文を摘注(ナリ式抄物)したもので、內容は後、寛永八年に整版本として其の儘再版せられた。

日本書紀抄の二卷本と三卷本

(五八四頁)日本書紀抄に二卷本と三卷本とあつて、各其の內容を異にする。二卷本は、本能寺前町の開版で、前述(二八二頁參照)の如くであるが、三卷本は、內容を異にする。同じく元和寛永中の刊行と認む可き別種の活字版で、四周單邊、無界、十四行片假名交り(匡郭內、縱七寸八分、横五寸四分。)。中卷四十六葉、下卷五十三葉。上卷首に卷一とあり、下卷には「卷二」とあるから、元來は、二卷なるべきを、便宜上三冊に分けて、上中下と稱したものであらう。傳本の管見に入るものは、圖書寮(下卷第三十七葉缺、褐色原表紙附。)・內閣文庫・東北帝國大學(中村準太郎氏藏書あり。)・久原文庫・尊經閣文庫(黑色原表紙附、前田綱紀舊藏三冊)安田文庫藏の諸本である。

元和四年刊承久記の刊語

(五八五頁)承久記(一)元和四年刊本には、元和四年の刊記年時の前に左の一文がある。

右兵亂之記行于世年尙矣故本有廣略條有
脫落今也集於多本以一挍畢

聖德太子憲法十七箇條

(五八四頁)日本書紀の一部分を抄錄したかたちをなすものに、「聖德太子憲法十七箇條」一冊がある。版式上慶長中の刊行と認められ、七行十七字。大型活字。卷末には、「上宮太子十七箇條憲法畢」とあつて、章毎に改行、凡て五葉、其の第五葉目の裏からは、「聖德太子德失鏡(三頁)・聖德太子碼碯御記文(二頁)・聖德太子四節文(四頁)」等を附載してある。十七條憲法の本文は群書類聚本と異同がある。管見に入つた唯一の傳本は圖書寮尊藏の一本(裏打改裝)である。

一休水鏡の傳本

(六〇七頁)一休水鏡第一種本の傳本にはなほ富岡文庫藏本がある。

(六二二頁)前關白秀吉公御檢地帳之目錄附朝鮮國御進發之人數帳・政要抄の完本一冊(原裝)は安田文庫にも一本を藏する。

內裏御普請帳の追記

(六二六頁)新たに調査し得たから左に追記する。

內裏御普請帳附明意寶鑑　(古)一冊

御檢地帳と同種の活字を用ひ、版式も亦同樣である。版心に「內裏御普請帳」とあり、卷末に同じ大題がある。卷首には大題なく第一葉表に「慶長十六年春三月從征夷大將軍氏

長者淳和奬學兩院別當從一位前右大臣源朝臣家康公被仰出禁中御造營之人數帳」とあつて、同じく裏より、上段に石高、下段に諸侯名を七行二段に植版を行ひ、總紙數十九葉大型の活字を用ひ、毎行十五字、四周雙邊、無界、匡郭內、縱七寸五分、横五寸四分五厘。版式上慶長十六年から餘り年時を經過しない頃の刊行と思はれる。

卷末に、御檢地帳附載の政要抄と同じく小型活字を以て、小瀨甫菴輯錄の明意寶鑑を附載してある。總紙數七葉、四周單邊、無界、十二行二十一至二字。(匡郭等內裏御普請帳に同じ)本書附載の體裁も凡て御檢地帳に於ける政要抄の場合と全く同一であるから、兩書は略共時の刊行と認めてよいと思ふ。

本書の傳本の現存するものは、東洋文庫藏の一本のみで、尾張神郡氏・西莊文庫舊藏、褐色原表紙を存し、薄紅色雲母引の料紙(御普請帳第五葉・明意寶鑑第二葉)を交じへた部分がある。大いさ等凡て原の儘で、縱九寸一分五厘、横六寸七分強。

〔附　章〕

(六六九頁一三行下)　訂正　駿河版

補訂追記

(二九九頁)一二　高雄・槇尾に於ける活字開版事業

高雄山で開版した活字版の實物に接しなかつたが、新たに在來知られてゐない「般若波

羅蜜多心經疏」(一冊、安田文庫藏)を發見した。無邊無界十行十九字。字面の高さ約七寸八分。上欄標示の部分のみ整版。卷末に左の刊語がある。

印施　賢首大師般若心經疏
伏願頓悟般若之妙心朗開群生之慧
日功德遍三世利濟流十方法界含靈
同圓種智者也
于時寬永八年　梅月下旬
於高雄山　平等心王院　摺之畢

要法寺版神代
卷一卷見

慶長十年刊要法寺版沙石集と同種活字を以て印行し、其の匡郭、版心の魚尾、黑口等に至るまで沙石集のものを襲用してゐる日本書紀神代卷(二卷、二冊)を新たに發見した。四周雙邊、有界、每半葉七行十七字。匡郭內、縱六寸三分半、橫四寸九分半。特に行間が廣いのは附訓書入の便を考慮してあるのであらう。「一書曰」を本文より一字下げて植版し、古い形式を保存してゐる。但し本文は慶長勅版の飜刻で、卷末に國賢の跋をも存し、末に、

慶長十乙巳年三月上旬二日

の刊記があり、其の刊記の體裁も亦、沙石集・太平記等、同年刊行の要法寺版と相似してゐる

る、即ち、右に據れば、本書は沙石集校刻の後、數日にして刊行を終へてゐる。恐らく之は沙石集の刊行完成以前、或る期間中、同時に仕事が進められて、殆ど日を同じくして出來上る結果となつたものであらうと思はれる。本書の傳本は、安田文庫藏の一本を見るのみである。（丙子、十月十日）

古活字版刊記集

書名下括弧內數字は本文參照頁數、年號干支下括弧內數字は西紀を示す。

文祿四年乙未（一五九五）

(1) 天台四敎儀集解（一五五）

文祿四乙未暦十一月二十四日

(2) 法華玄義序（一五四）

奉寄進　法華玄義序　　　百部

文祿乙未暦極月二十四日

大光山本國寺常住　願主一輪房日保

文祿五年丙申（一五九六）

（慶長元年）

(3) 標題作狀元補注蒙求（一五七）

桑域洛陽西洞院通勘解由小路南町住居甫庵道喜新刊一字板繡此

書以應童蒙之求也呼嗚未辨芋耶羊耶魚耶魯耶淵愧林懃冀博覽人運郢斤多幸

惟時文祿第五丙申小春吉辰道喜記

(4) 十四經發揮（一五八）

旹慶長元年十二月上澣

日東洛陽西洞院住　甫庵道喜摸行焉

慶長二年丁酉（一五九七）

(5) 新編醫學正傳（一五八）

扶桑國平安城西洞院居住甫庵道喜苟以愚意刋一字之板而印玆書校支那三韓之兩本宗其正者也雖然字字可多舛差若有博覽之妙手斲泥者幸甚

旹慶長第二丁酉初夏中澣

(6) 錦繡段(一七八)

錦繡段者東皐天隱之所編而未有刊
行茲悉取載籍文字鏤一字於一梓棊
布諸一版印一紙纔改棊布則渠絲亦
莫不適用此規模頃出朝鮮傳達
天聽乃依彼樣使工摹寫焉
叡慮寔在擬周詩六義敎以化之家藏
人誦傳之不朽云
慶長第二歲在丁酉夷則下澣
臣僧南禪靈三誌焉

(7) 勸學文(一七九)

命工每一梓鏤一字棊布之一版印之
此法出朝鮮甚無不便因茲摸寫此書
慶長二年八月下澣

(8) 東垣先生十書(一五九)

慶長丁酉刻梓
洛之甫庵道喜

慶長四年 己亥(一五九九)

(9) 日本書紀神代卷(一八〇)

(木記) 日本書紀慶長己亥季春新刊

(刊語) 日本書紀歷代之古史也　元正天皇養
老年中一品舍人親王太朝臣安麻呂奉
勅撰之吾朝撰書迄　奏覽以是爲權輿
者耶君臣共以莫不窮此書矣按　應神
天皇以還至　繼體天皇御宇異域典經
多以雖來朝不解其義徒經三百有餘歲
矣　推古天皇御宇聖德太子察三才之
源達三國之起故始以漢字附神代之文
字傍於于爰吾邦人浸得識量典經之旨
非至聖誰敢成此緈哉蓋神道者爲萬法
之根柢儒敎者爲枝葉佛敎者爲花實彼
二敎者皆是神道之末葉也雅以枝葉顯
其本原然則異曲同工者歟頃學儒佛者
夥而知神書者鮮矣物有本末事有終始
何棄本取末焉於神國爭疏神書乎萬機
之政尙以神事爲最第一但神代事理旣

幽微非理不通欽惟
陛下寛恵叡智之餘後世惜其流布之不廣
遂命鳩工於是始壽諸梓矣舊本頗純駮
不一求數本考正之去其駮而錄其純用
之國而及之天下則以成熈皡之治以紹
神尊之統保瑞穂之地千五百秋將必有
賴於斯焉
慶長己亥姑洗吉辰　正四位下行少納言兼侍從臣清原朝臣國賢敬識

(10) 職原抄（一八五）

（木記）職原抄慶長己亥季春刊

(11) 標題句解 孔子家語（一一〇）

世際季運而學校教將廢也維時
內府家康公于文于武得其名故興廢繼絕
爲後學刻梓文字數十萬而賜予退爲謝
公之恩惠初開家語此書是聖人與義治世
要文定非小補也刊字列槃中則明本家
語以數本考正焉或板行有訛謬或文字
有顚倒以亡加之以餘刪之雖如此有帝
虎鶴鵠誤者必矣只願待博雅君子改制
焉也謹跋
慶長第四龍集己亥仲夏吉辰
前學校三要野衲於城南伏見里書焉
慈眼刊之

(12) 六韜（二一一）

維時　內府家康公以刊字數十萬賜予
卽開六韜六韜是文武備書也吾　公治
世不忘亂謂乎
慶長四龍集己亥仲夏吉辰
前學校三要於伏見城下書焉

(13) 三略（二一二）

右三略依　內府家康公命刻梓焉板
行誤以明本講義改正者也
于時慶長四龍集紀仲夏吉辰庠主三要野衲書之

(14) 四書（一八四）

（木記）大學（中庸・論語・孟子）慶長己亥刊行

(15) 古文孝經（一八四）

（木記）古文孝經慶長己亥刊行

(16) 元亨釋書（三一九）

于時慶長四年戊亥月日
日東　洛陽　如庵　宗乾　摸行

慶長五年庚子（一六〇〇）

(16) 貞觀政要（二一三）

唐太宗文皇帝者創業守成一代英武之
賢君也千載之下仰其德慕其風者今之
內大臣家康公是也故令前學校三要老
禪校訂貞觀政要去歲開家語於板今歲
刻政要於梓遵聖賢前軌而作國家治要
宜也
豐國大明神際辭下土之日受
令嗣秀賴幼君賢佐遺命爾來寬厚而愛
人聰明而治衆不異周勃霍光安劉氏輔
昭帝也矧又海內弘此書而協和士民之
心則爲
明神不忘舊盟爲
幼君盡至忠者其用大矣哉
慶長五年星輯庚子花朝節
前龍山見塵苑承兌叟謹誌
焦（？）之久摸刊之

(17) 法華經傳記（二五七）

唐僧祥公不知其氏族博聞達識之人而記
法華之應驗誘愚昧之徒殊載出傳譯等之
科目該括一化之始終實維甚奇甚妙也故
盛行于世爲談者之資矣然轉寫誤於豕亥
剩有差脫不可稱計予嘗披僧史傳并衆經
錄等忽覺此記傳之有本據愈考愈質輙命
工鏤梓學者幸勿疑惑焉時
慶長庚子載季春望日　洛陽　釋圓智誌

(18) 六韜（二一五）

維時　內府家康公當學文興仁務武立
義故以刋字數十萬賜予卽仰其厚恩開
六韜已以講直兩部正文字訛謬也予案
六韜是非治周家季世樞機也以之計之
文武備書也吾　公本此書治世不忘亂
亦宜哉
慶長五年庚子初夏吉辰
前龍山元佶叟於伏見城下書焉

(19) 三略（二一四）

右三略依　内大臣家康公命刻梓焉板
行誤以講直兩部改正者也
于時慶長五龍集庚子孟夏吉辰
前龍山元佶叟於伏見城下書焉

(20) 天台四教儀集註（三三七）

慶長第五庚子歳臘月下澣吉辰
正雲刊之

慶長六年 辛丑（一六〇一）

(21) 日蓮聖人註畫讃（三三八）

時慶長龍集舍于辛丑無射仲九遂功而巳
願主俊長日燈
卯造清純日源
校勘爲山日顗

慶長七年 壬寅（一六〇二）

(22) 古文孝經（二〇四）

歳一日來而謂予曰孝經者非百行之爲
本書乎今世好事者多以雖費梓工未及
此書惜矣因費刊鋟之勞欲備幼學之几
案也予感其志遂出累代的本借與焉予
亦時々加校訂者也
慶長壬寅八月壬子明經儒清原秀賢誌

慶長八年 癸卯（一六〇三）

(23) 太平記（二二三）

慶長癸卯季春既望　富春堂　新刊

(24) 摩訶止觀科解（三〇一）

惟旹慶長八暦癸卯六月日於比叡山延暦寺
東塔東谷月藏坊令刊摺之畢　眞慶

(25) 科註天台四教義（三〇二）

右六冊者就諦觀所錄天台四教義永嘉
沙門從義令註釋之惟旹亮憲僧正冠科
文寫註解本末符契訖予又爲末代於傳
集刻字調卷之奠加佛陀冥助令遂自他
悉地給而巳

延暦寺西谷覺林房秀憲謹刊挍
惟時慶長八年龍集癸卯黄鐘中浣

(26) 新增醫方大成發提(等)(三三二)
慶長八年癸卯蕤月既望
洛陽醫德堂刊

(27) 新鍥雲林神彀(三三〇・補遺)
(前略、補遺參照)慶長八年癸卯蕤月日　守三謹識

慶長九年 甲辰(一六〇四)

(28) 徒然草(壽命院)抄(三二九・四〇〇・五二六)
慶長九曆閼逢執除姑洗良辰
日東　洛陽　如庵宗乾刊行

(29) 醫方考(三三二)
慶長第九甲辰四月十二日　醫德堂刊

(30) 法華玄義科文(三三一)
惟旹慶長九曆甲辰五月日於比叡山延曆寺
東塔東谷月藏坊令刊摺之畢

(31) 教誡新學比丘行護律儀(二八九)
右教誡儀簡牘磨滅字畫殘殃或烏而焉
或焉而馬故勵志投小財命工令活板併
爲正法久住善願圓滿耳
慶長九年甲辰應鐘上旬
城西歡喜山寶珠院沙門幸朝
下村生藏刊之

(32) 六韜(二一六)
維時　征夷大將軍家康公常學文興仁
務武立義故以刊字數十萬賜予郎仰其
厚恩開六韜已以講直兩部正文字訛謬
也予案六韜是非治周家季世樞機也以
之計之文武備書也吾　公本此書治世
不忘亂亦宜哉
慶長九年甲辰仲冬吉辰
前龍山元佶叟於伏見城下書焉

慶長十年 乙巳(一六〇五)

(33) 東鑑（二二〇）

（目録末）富春堂新刋

（巻末）夫人之處世也言行之善不善不可
不記焉得一善記之則百世善其人
得一惡記之則百世惡其人言行寔
君子樞機也可不愼乎左氏記春秋
而作萬代龜鑑得良史名者難矣哉
東鑑一書者自治承四年至文永三
年八十七載之間傍羅曲探以大抵
記之不知記者名爲遺憾久歷年代
其名湮滅耶深隱山林其名埋沒耶
抑又謙退以不著其名耶見此書則
言行之美惡如指掌也吾
大將軍源家康公治世之暇翫弄此
書見善思齊焉見不善內自省也凡
人主所趍向天下隨之如風草形影
也以東鑑名之者非無所由殷以夏
爲鑑周以殷爲鑑詩曰殷鑑不遠在
夏后世今也刻梓以壽其傳後世能
見此書辨別淄澠則非啻東州明鑑
豈不作四方鑑戒乎書之以爲跋

慶長十稔星集乙巳春三月　日
前龍山見鹿苑承兌叟［印］

(34) 沙石集（二六二）

此集行于世尙矣本有廣略條有前後不知
孰是也頃幸得無住師之直筆正本今也不
堪濫藏於焉遂鏤于梓十日所視豈甚揜乎
勿敢疑也
慶長十乙巳年仲春下浣八日　圓智校讎

(35) 元亨釋書（二九〇）

慶長乙巳歲仲夏日　下村生藏刋之

(36) 周易（二一六）

古今學儒書者排斥佛經學佛經者排斥儒
書是世之常而其不辨眞理也釋尊生中國
設敎則如周孔周孔生西天設敎則如釋尊
儒釋元來不涉二途如鳥雙翼似車兩輪也
如　閑室大禪師者壯歲入東關讀四書六
經而品論之講說之旣稱學校者有年于玆
暮齡到洛陽傳中峯法要位空門極品僉曰

儒釋兼并也頃豪
大將軍源家康公鈞命印行周易其志要弘
興道於萬年能校正舛差而加陸德明音義
於王輔嗣注集而大成者乎古德曰鷲嶺拈
華伏羲初畫少林面壁文王重爻然則於禪
門亦不可不究盡易道予於　禪師其情如
骨肉因需跋其後不獲堅辭漫書焉也
慶長十年星集乙巳孟夏初五日
鹿苑西笑叟承兌

(37)
周易（二二一・二七二）
〔識語〕時丁乖拱之運无長无少入學志道也其所
謂道者何也耶仁義禮智是也又推諸於極
則元亨利貞乃天之德也豈不學乎哉予壯
歲遊學在東關日竊希宣尼之三絶慕劉安
之九師僅闚戶牖不到其奥也雖然以所希
慕之厚欲鋟梓以廣其傳日奄矣去歲之秋
獲自一而六王氏註之自七而九韓氏註之
〔刊記〕關東下總住正運刊焉
到略例之十唐學士邢璹傳之又加陸氏之
音釋於其註下之唐朝一本而兼用本朝外
史局之善本而參攷訂義袪贅蕃而梓行以
成矣嗚呼卷中舛謬且待博雅君子而已庶
幾元亨之德日新而无所其終仁義之道擴
充而永行于世矣
慶長乙巳季夏日東下洛涸轍子[睡庵]謹跋

(38)
太平記（二六九・五四三）
慶長十年乙巳九月上旬日

(39)
法華文句科解（三〇一）
（前略）旹慶長乙巳之冬黃鐘冬至日釋亮
憲謹誌（下略）
延暦寺東塔院東谷沙門釋眞慶欽啓

慶長十一年丙午（一六〇六）

(40)
帝鑑圖說（二三二）
夫帝鑑圖說者元輔少師張居正以經史浩博而
難研究略其大撮其要編輯焉而獻
大明皇帝自降慶六年及今歷三十五星霜也畢
賢事蹟八十一事用九九陽數愚蒙惡行三十六
事用六六陰數各因書圖系其說於後爲令

幼生易識見也其輔佐之志良臣之忠不謂而可
知矣雖爲
帝者一身有善行則稱諸賢君有惡行則以爲暗
君凡人之在一世也始者善而後不善者多焉可
不謹愼乎克始克終者困難矣哉頃
右相府秀頼公及見此書乎之口之寅夕無不披
覽也仍命工刻于梓而壽其傳於無窮也孔夫子
曰視其所以觀其所由察其所安人焉廋乎人焉
廋乎今也右相府其所由其所安見善思及其行
見不善思改其行善言惡行其作鑑戒也妙年未
及志學而有老成人之風規者罕見其比以此書
名帝鑑者本于唐太宗以古爲鑑知興替之義畢
哲之君佞邪之主以一百餘之條目知千百世之
治亂興敗者寔非萬代之龜鑑乎也

慶長拾壹稔星集丙午春三月　日

豐光老衲承兌

(41) 七書（二一七）

夫兵書古今雖多諸家說凡以七書爲樞機
孫子以兵書見於闔廬闔廬知孫子能用兵
爲將破强楚是孫子力也吳起學書於曾子
事魯君後事魏文侯擊秦拔五城所以吳起
爲將也穰苴齊景公時文能附衆武能威敵
景公聞爲將尉繚以天官時日決勝而已三
略老人授子房書也是漢代平均基乎太公
以文武龍虎豹犬傳於文王興起周代八百
餘歲者乎太宗問李靖靖對曰先仁義後權
譎可謂文武兼並也前
大將軍家康公以文安人以武威衆天下萬
臣咸歸服雖周漢不能過忽隨
公鈞命記七書於梓以講直正之畢矣予爲
令知太平於後人跋其後也

慶長十一年龍集丙午初秋念又一日

紫陽閑室元佶叟書焉

慶長十二年 丁未（一六〇七）

(42) 難經本義（三三〇）

八十一難經之註解古來頗多就中視
滑伯仁之本義其旨趣深奧而无彊其
文詞明白而易曉　本朝未能梓行維
時門下之醫生宜帆齋道救聚數帙校

訂之仍因工而鏤板可謂救恤之心至
哉矣
　慶長丁未春分之節　洛下玄朔敬識　［東井］［玄朔］

(43) 解紛記（四〇三）
（初・再版）慶長十二丁未暦三月日　黒庵（初版三字無）
（三・四版）慶長十二丁未暦七月日　黒庵

(44) 增補六臣註文選（二六七）
慶長丁未沽洗上旬八蓂　板行畢

(45) 行事鈔（三一五）
慶長十二丁未暦五月七日
　大和州添上郡於元興寺極樂律院摺寫之

(46) 藥性能毒（三三〇）
此書者先師一溪翁之所作也醫
學正傳曰藥性各有能毒中病者
藉其能以獲安不中病者徒惹其
毒增病云々翁本此義而撰藥性
之可否者凡一百二十六味目之
曰藥性能毒蓋考證類本草及
諸家藥性論聚英萃者間加祖
傳之說爲全書近本草綱目來
朝予檢閱之摭至要之語又加之
增添藥品仍命工鏤梓爲門下
後學補萬一而已
　慶長十三年龍集戊申仲夏如意珠日
　　洛澨延壽院玄朔　［東井］［玄朔］

(47) 太平記賢愚抄（三三〇・四〇二・五四五）
慶長十有貳丁未暦仲夏如意珠日
　於醫德堂以乾三正本刊行

(48) 秘藏記（三三九）
慶長十二暦丁未九月上旬

(49) 碁經（四八六）
右一冊定石并作物一百
五十餘科雖有淺深

厚薄非口傳者難識
量歟所詮不可不習傳之者乎
慶長十二丁未十二月五日
本因坊算砂 黒印

(50) 太平記（五四三）
慶長十二丁未年上元日

慶長十三年戊申（一六〇八）

(51) 韻鏡（三五九・三七九）
慶長戊申中春良日
下洛涸轍書院新栞

(52) 纂圖附音増廣古註千字文（三五九・三九〇）
慶長戊申中春良日　下洛涸轍書院新栞

(53) 新刊黄帝明堂灸經（三三四）
慶長十三年　三月吉日

(54) 職原抄（三〇五）
官位職員科目備令條雖載之
上古風儀輙難識量多端也而
今此鈔者外顯除書之體內含
令式之義而摸周典之職配唐
官之名又述自中古覃當時諸
家并進旨趣殆如指掌也是以
桃華禪閤被加格言尤可謂官
位職掌之龜鑑者也爰中原職忠
欲鋟梓之余需校讎因聚考數
本從其宜而已并可便覽者七
八科附其後
于旹慶長戊申夏四月蚳蚓出日
吏部少卿清原秀賢誌

(55) 伊勢物語（四三二）
伊勢物語新刊就余需勘挍抑京極黄
門一本之奥書云此物語之根源古人之說々
不同云々如今以天福年取被與孫女本正之
然而猶恐有訂挍之遺欠也更圖書卷中
之趣分以爲上下是雖不足動好女人情
聊爲令悅稚童眼目而已
慶長戊申仲夏上浣

也足叟（花押）

(56) 日蓮上人註畫讃（三三七）

（偽整）慶長戊申曆十月十日功畢　工匠琳齊日慈

(57) 五家正宗讃（三三八）

慶長十三戊申仲秋吉長
西京花園一枝軒板行之

(58) 五家正宗讃（三三八）

慶長十三戊申仲秋吉辰
富小路讃州寺町　中村長兵衛尉

(59) 脉語（補遺）

慶長十三戊申龍集仲冬如意珠日（下缺）

(60) 黃帝內經素問註證發微（三三二）

慶長十三戊申年十二月日梅壽重刊

慶長十四年己酉（一六〇九）

(61) 伊勢物語（四三五）

伊勢物語新刊世醋多矣然京極黄門一本
之奥書云此物語之根源古之之說今不聞云々
而今以天福年所被与孫女本正之猶恐有
字畫之差互聊加訂挍又圖卷中趣而
分爲上下蓋爲令好事童蒙悅目也於
戯予老懶衰惰而不堪辨烏焉豈無紕繆
博洽君子改匡焉幸甚
　慶長己酉仲春上澣日

(62) 伊勢物語聞書（四四〇）

此一冊可書進之由蒙　勅定之時予
細看之談宗祇法師所々令添削畢
　　　　　　　　　　夢菴子
右抄者肖柏老人所傳之作也仮號之
肖聞然依　後土御門院仰手自書
進之云々爾降世皆崇之箱元凱注左
氏也彼翁者予祖之餘流庶弟也今爲
梓鏤亦有故者乎　新刊之時作三箇丁
　慶長己酉季春上浣
　　　　　　　　　　也足叟

(63) 醫方大成論（三三一）

慶長己酉初夏良日梅壽重刊

(64) 釋淨土二藏義（三一八）

（卷首序末）龍澤山大巖寺第二代穩蓮社安譽虎角作

同當住依源譽隨流上人大和尚尊意刊之

于時慶長十一年四月三日　重譽開出

（卷末刊記）于時慶長十四年巳酉五月十五日畢

(65) 選擇傳弘決疑鈔（三一八）

當世流布決疑鈔異本萬多損落非一今依數多

本今遂校合假草鏤梓也矣下州龍澤山大巖寺

住世比丘譽蓮社源譽隨流於後日値御正本學

者宜有添削己上

于時慶長十四巳酉年七月六日　鏤梓主雲龍

(66) 論語（三六〇・三七六）

慶長十四年巳酉九月日　洛汭宗與開板

友傳刊

(67) 論語（三六〇・三七七）

慶長十四年巳酉九月日　洛汭宗甚三板

友傳刊

(68) 魁本大字諸儒箋解古文眞寶後集（三五九・三九五）

慶長十四巳酉年陽月下旬　室町通近衞町本屋新七刊行

(69) 太平記（四〇七）

修己治人之道無如察古典故愼徵五典實奥天下

之達道而建民五敎四書六經亦閱見往聖之觀撰

而起之來學之標準者多矣蓋此書讀者講究商確

而見賢思齊焉見不賢而內自省也使天下之人皆

躬行心得則自然所平也是以名之曰太平記歟近

來顯野天下之簡籍或漢字或以片假字爲漢字之

扶故不童蒙愚婦所曉今既幸政可正以假字命工

鋟梓行世自王宮國郡至村閭巷愚夫懸歸皆有以

案觀而習閱披現此書惣形容體情性以盛數共同

然之善心豈不嘆慕激勵哉　慶長己酉陽月既望

存庵跋　才雲刊之

(70) 秘密曼荼羅十住心論（三一一）

爲續三寶惠命於三會之出世廣施一善利益於一切之衆生是則守大師之遺誡倫令遂小僧之心願謹以開印板矣

慶長十四己酉年霜月廿一日

金剛峯寺寶龜院住阿闍梨朝印

幸悦

宗安

淨善

刊之

慶長十五年庚戌（一六一〇）

(71) 太平記（四〇二・五四三）

慶長十五暦庚戌二月上旬日　春枝開板

(72) 仁王經開題（三一二）

慶長十五年二月廿九日

(73) 太平記賢愚抄（四〇二・五四五）

幸悦刊之

慶長十五庚戌暦孟春仲旬第三刊行焉

(74) 醫方大成論（三三二）

慶長庚戌季春良日梅壽重刊

(75) 大日經開題（三一二）

慶長十五庚戌年四月廿一日　幸悦刊之

(76) 阿字義（三一二）

慶長十五庚戌年五月廿九日　幸悦刊之

(77) 伊勢物語（四三六）

抑京極黄門一本之奥書云此物語之根源古人之説々不同云々故去慶長戊申仲夏之比中院也足軒素然以天福年所被與孫女本正之并加畫圖卷中之趣分以爲上下行于世矣今亦以其印本正之再令流布世而已

慶長庚戌孟夏日

(78) 日本書紀（五八〇）

此寫本者當初安貞二年兼賴校讎諸本正應之中神祇權大副卜部兼方筆之收

于石室以來永仁正四位下行神祇權大
副兼山城守卜部仲季嘉元甲辰沙彌蓮
惠康永壬午神祇權大副兼員轉書之云
云至永正之頃内大臣實隆公以件本親
謄書訂朱墨點今據内相公本鏤梓廣傳
于世忠活板之徒多談刁刀陶陰矣庶幾
莫貽誚於余焉
慶長十五庚戌仲夏念八
洛汭野子三白誌

(79) 梵網經開題（三一二）
慶長十五庚午（一六一〇）年十月廿一日　幸悦刊之

(80) 源氏小鏡（四四二）
慶長十五年十二月日書之

慶長十六年辛亥（一六一一）

(81) 本朝古今銘盡（四〇七）
右之銘盡竹屋以正本櫳相寫早
慶長十六年　五月吉日

(82) 法事讃私記（三一八）
此一部三卷令挍合畢尙又假鏤梓也
大嚴寺隨流　鏤梓主雲龍
于時慶長十六辛亥八月六日

(83) 觀念法門私記（三一八）
此一部二卷令挍合畢尙又假鏤梓也大嚴寺
隨流　鏤梓主雲龍
于時慶長十六辛亥八月六日

(84) 科註妙法蓮華經（三〇一）
于時慶長十六年十月日於延曆寺東塔
東谷月藏房摺刊之畢

(85) 法華三大部（三〇一）
慶長十六年十月日（等）

(86) 往生禮讃私記（三一八）
此一部二卷令挍合畢尙又假鏤梓也大嚴寺
隨流　鏤梓主雲龍
于時慶長十六辛亥十月七日

(87) 素問入式運氣論奥（三三二）
慶長十六辛亥初冬吉辰梅壽重刊

(88) 倶舍論頌疏（二九二）
慶長十六辛亥曆孟冬
京一條清和院新刊

慶長十七年壬子（一六一二）

(89) 百官略書札禮事（二〇六）
慶長玄默困敦夾鍾　刊之

(90) 釋淨土二藏義（三一八）
此二藏義下總國於龍澤山大巖寺　板行
隨流時代　鏤梓主雲龍
于時慶長十七年壬子五月廿日畢

(91) 本草序例（三一二）
慶長十七年季夏良日梅壽重刊

---

(92) 醫方大成論（三三四）
慶長壬子仲秋日於雲州鹽氏平宣政開板

(93) 簠簋内傳金烏玉兎集（三六〇・三八七）
于時慶長十七年壬子九月吉日

(94) 華嚴五教章（二九二）
慶長十七年壬子十月吉日

(95) 大乘起信論疏（三三九）
惟時慶長第十七壬子暦桂秋良日
日本若耶府　利庵正節　模行
洛陽　飯田久左衞門勝家新刊

(96) 觀經四帖疏傳通記（三一八）
此傳通記十五卷令挍合畢仍又假鏤梓也
下州龍澤山　大巖寺隨流　鏤梓主雲龍
于時慶長十七壬子霜月十五日

(97) 佛祖歷代通載(二七八)
本國寺學校　玉潤日銳補爛脫耳
十住　從　實乘　進
法壽　珠　金林　慧
四僧集會異體同心鏤梓刊板流行天下
慶長十七壬子極月十九日

慶長十八年癸丑(一六一三)

(98) 雲門匡眞禪師廣錄(二九七)
慶長癸丑歲仲春月洛陽　宗鐵重刊

(99) 法華經文字聲韻音訓篇集(三〇八)
旹慶長十八癸丑年三月日理教房快倫謹誌
純好刊之

(100) 安樂集(二一九)
此一部二卷令挍合畢尙又假鏤梓也
下州龍澤山　大巖寺隨流　鏤梓主雲龍
于時慶長十八年癸丑四月　日

---

(101) 天台四教儀集註(二七五)
慶長十八癸丑年八月　日
於京師要法精舍板行焉

(102) 徒然草(二〇七・五二五)
這兩帖吉田兼好法師燕居之日徒然向
暮染筆寫情者也頃泉南亡羊處士
箕踞之草廬而談李老之虛無
說莊生之自然且以晦日對二三子戲講
焉加之後將書以命於工鏤梓而付
夫二三子矣越句讀淸濁以下俾予糾
之予生好其志忘其醜卒加挍訂而已
復恐有其遺逸也　黃門
慶長癸丑仲秋日　光廣

(103) 大藏目錄(二八三)
大本願伊勢聖乘坊宗存(花押)
慶長十八癸丑年九月吉日　於洛陽梓之
當施主
開板　吉野入道意齋
西田勝兵衛尉

(104) 禪林類聚（二九六）

於洛陽高臺寺
參來之徒拔出之誤多々
于時　慶長十八癸丑菊月吉辰

(105) 新刊黄帝明堂灸經（補遺）

慶長癸丑仲冬日

慶長十九年甲寅（一六一四）

(106) 儒醫精要（三三四）

慶長甲寅仲春吉日
紀州和歌山見義堂梓

(107) 無量壽經鈔（三三九）

右望西樓七帖一部者爲末代興隆損落改
文字開板摺寫之畢
旹慶長十九甲寅歲三月二十五日
願主權大僧都

(108) 遍照發揮性靈集（三三七）

於洛陽寺町市右衛門開板之

慶長十九暦甲寅仲夏吉日

(109) 選擇傳弘決疑鈔（三一八）

下州於龍澤山大巖寺隨流時代板行者也
于時慶長十九甲寅七月六日　鏤梓主雲龍

(110) 明德記（五八六）

今世好事者保元平治平家物語皆以貲梓工矣於是
承久兵亂及明德記及應仁記不幸而免如予閑人幸
而得之屢爲日之便時々以古本校訂之漸畢其功忽
補其闕雖然不獲其全也庶幾後人就有道而正焉而已
于時慶長第十九年無射望日　以時

(111) 法華經傳記（二八〇）

慶長十九甲寅孟冬仲三日洛陽　釋露閑誌

慶長二十年乙卯（一六一五）
（元和元年）

(112) 無量壽經鈔（三三九）

洛陽七條寺內平井近江法橋良專開板

于時慶長二十乙卯初夏上旬

(113) 神祇講式（一一八五）

伊勢大神宮　常明寺　高日山　法樂院

元和元年乙卯十一月吉日　法印宗存敬梓

元和二年丙辰（一六一六）

(114) 沙石集（二六三・五二一）

（此集行于世尚矣本有廣略條有前後不知孰是也頃幸得無住師之直筆正本今也不堪蘊藏於焉遂鏤于梓十目所視豈其揜乎勿敢疑也）

元和二年六月吉日　圓智校讎

(115) 止觀義例隨釋（三〇一）

〔卷一刊記〕于時元和二丙辰暦仲秋上旬

於山門西塔南谷摺刊之

〔卷六刊記〕于時元和二丙辰暦孟冬下旬

於山門西塔南谷摺之

(116) 太平記（四八八・五四三）

時丙辰歳次元和二孟秋上旬日

(117) 維摩經略疏（三〇二）

旹元和二年丙辰九月上旬摺之

(118) 增集續傳燈錄（二九七）

續傳燈錄者古來日域未有板行今使工模寫焉竟畢其功冀后代不朽矣

元和丙辰小春良辰　宗鐵誌之

(119) 古今歷代十九史略通考（三六〇・三八二）

吾山二三子追慕朝鮮國之意匠頃倣工布列一刊字於一板印寫于十九史略者一百餘部矣大概聚數本按讎參差訛謬眞贗詳略而式從其宜矣庶允博施薄散要令宇內之人知諸史端末而已

元和第二曆丙辰孟冬令辰

惠山　守藤誌焉

守藤

元和三年丁巳（一六一七）

(120) 纂圖附音増廣古註千字文（三六一・三九〇）
元和三 丁 巳 暦二月良日

(121) 涅槃經疏（三〇二）
昔元和三年丁巳仲春下旬
於比叡山東塔摺之

(122) 古文眞寶之抄（三六八）
元和三年丁巳孟春如意珠日
於雒陽刊行焉

(123) 歴代名醫傳略（三三四）
于時元和丁巳姑洗上弦日刊行

(124) 顯戒論（二八五）
惟皆元和三丁巳暦八月中旬於西京
北野經堂常明寺宗存摺刊之畢

(125) 類字名所和歌集（五五六）
此一部者互見廿一代集數多
之本而抄出名所和歌者也唯
愚暗所撰恐有舛謬猶後見之
輩勿憚改而已
元和三暦仲秋下旬 法橋昌琢判

(126) 難經本義（三三二）
元和三年歳舍丁巳仲秋之吉梅壽重刊

(127) 元亨釋書（三四〇）
洛陽二條通鶴屋町
元和三丁巳暦孟秋上旬 壽閑開板

(128) 十住心廣名目（三一三）
元和三丁巳年十一月二十一日尾州住丹下淨善開
板

(129) 守護國界章（三〇二）
于時元和三年丁巳孟冬中旬
於比叡山延暦寺西塔北谷正觀院摺之

(130) 明徳記（四八八・五八七）

（前略）于時元和三年極月望日　以時

(131) 法華三大部（二八五）

摺寫役人上州住正直・工匠台林

（右の他、元和三年六月至四年刊記あり。略。）

元和四年戊午（一六一八）

(132) 沙石集（二六三・五二一）

元和四年正月吉日

(133) 正因果集（二八五）

惟時元和戊午暦正月下旬

(134) 十四經發揮（三一二）

元和四年歳舎戊午初春良日於洛陽二條梅壽刊行

(135) 保元物語 平治物語（四八九・五一九）

元和四暦三月日　開板

(136) 觀世音經疏（三〇三）

元和四戊午暦　彌生中旬　摺之

(137) 菩薩戒義記（三〇三）

元和四戊午暦　彌生中旬　摺之

(138) 法華去惑（三〇三）

元和四戊午暦　彌生中旬　摺之

(139) 心地教行決疑（三〇二）

于時元和四戊午暦殘春下旬

於山門西塔南尾摺之

(140) 妙法蓮華經玄義（三二八）

天台三大部項者叡山承詮之開板盛行諸
徒以教授焉退而省之復非無其失故校訂
玄義釋籤而鏤梓然猶恐有遺忘差脱庶幾
後君子有質焉時元和四戊午五月下旬四日

洛下　沙門　華林
沙門　實乘

(141) 承久記(四八九・五八五・補遺)

(前掲、補遺參照)于時元和四戊午暦孟夏中十日

(142) 天台名目類聚鈔(三〇三)

于時元和四年戊午六月上旬

於比叡山寶幢院刊摺之

(143) 天台四教儀(三〇三)

旹元和四戊午年林鐘下旬　摺之畢

(144) 眞言宗教時問答(三〇二)

旹元和四戊午年林鐘下旬

於比叡山無動寺　摺之畢

(145) 授決集(三〇二)

于時元和四年戊午八月上旬

於山門寶幢院摺刊旃

(146) 法界次第(補遺)

元和四年戊午八月十日　日養

(147) 城西聯句(三六一・三九六)

元和四歳霜月日

二兵衞　開板

元和五年己未(一六一九)

(148) 新編排韻増廣事類氏族大全(三六一・三八九)

元和五己未年九月日

(149) 天台法華宗牛頭法門要纂(三四三)

于時元和五己未暦　望冬上旬吉日

元和六年庚申(一六二〇)

(150) 止觀私記(二八〇)

元和六年庚申二月上旬　開板露関

(151) 法華肝要略注秀句集(三二五)

旹元和六年庚申　五月吉日　武州江戸　開板

(152) 三體詩絶句鈔(三六七)

洛下有書生其名曰塩瀬宗和老人自壯年

昔書夜誦雪纂露鈔聊無倦矣此家法詩要抄按諸家之善說集以大成予欽奉　綸命對　御講之節借普光一宗翁秘密藏攤之雖然字經三寫烏焉成馬其卷付不詳處予改之正之不知簡書不能改之頃者江北犬上郡彦根養俊勝士命工鏤梓以利晴證僉曰幗中張明遠也亮知自此詩格効唐賢体者必矣
于時元和第六庚申仲夏吉旦
前南禪古㵎叟慈稽誌焉[印][印]

(153) 山家義苑（三二五）

于時元和六年庚申七月二十四日　武州江戸　開板

(154) 新鐫雲林神彀（三三二）

元和六年歲舍庚申仲冬良日於二條梅壽重刊

(155) 助顯唱導文集（三二六）

昔元和六年庚申十二月日　華林　日從
本妙　日慧

從正本於武州江戸梓刊　實乘　日進

(156) 禪林類聚（三四一）

於越前國靈泉寺二代日雷澤和尙之假名點細被付置候不殘一點校合悉致精誠畢
于時元和六庚申極月吉辰　二條通仁王門町長嶋世兵衞開梓

元和七年辛酉（一六二一）

(157) 釋門自鏡錄（三二六）

于時元和七年辛酉三月日　於江戸梓刊

(158) 摧邪輪抄（三四一）

右此書七十卷摺寫旨趣者奉爲　宗徹道意大禪定門證大菩提也
願主深譽仰誓信女
元和七酉曆四月望云尒

(159) 醫學正傳卷之一（或問）（補遺）

元和七年歲舍辛酉初夏良日梅壽刊行

(160) 禪門秀句集（三四一）

于時元和七酉五月吉辰長嶋世兵衛開板

(161) 皇朝事實類苑（一九四）

皇宋事實類苑吉州太守江
少虞所撰也蓋此書之趣恐
遺文逸說可事美一時語流
千載者之泯絕也其顚末詳
于序文今不復贅矣伏惟
皇帝陛下
叡智夙成之天性柔仁博愛之
至道悉叢于
聖躬紀綱整肅于
朝中車書混一于海內加之萬
機餘暇肇學術惜白駒忙
於書窓跋紅燭轉於夜几不
曾挍訂
本朝國史特設經史子集之庫
其經營也牽以勤堂推以金
碧甍棟鏈麗而結霞閣楯衝
直而璽日意匠出巧輪焉奐
焉其前有池水漣漪湛凝碧
浮鳥戲乎其上游鱗躍乎其
中佳木秀而布繁陰奇石壘
而幻小峰風致瑋其庭除如
此大觀豈可以口舌贊揚而
盡哉然而令如薛稷馬懷素
沈佺期武平一之俊才知之
於是下
勅命曰令皇宋類苑鏤梓其
叡旨要前人之言往古之行取
之左右逢其原且又欲令天
下國家之人誦斯文者視其
美以爲觀視其惡以爲戒鳴
乎大哉體乎業已了畢則先
賢之言之美也以之爲寶而
玩之則崑山粹精之玉不足
比擬焉高文之才之俊也以
之爲苑而遊之則鄧林之材
梗楠杞梓不足譬喩焉況又
樂花開而禮葉茂氣焰生而
麗藻光以盡美善矣間者辱

宜
麻令於臣僧某甲日跋此書尾
如臣某淺術末智醯甕之雞
坎井之蛙如不知甕外之天
井外之海今又老懶眼生眵
花憑烏皮着睡工夫之外別
無一所爲何以與毛刺史楮
先生從事哉雖然固辭固請
普天率土無處回避故綴荒
無詞塵

宸脊惟深漸縮臣某不勝蒙恩
遇故奉謝其萬一跋非臣敢
所書
元和七年重光作噩六月晦日
前南禪臣僧瑞保謹書(印)

(162) 源信枕雙紙(二八五)
元和七辛酉年七月吉日
伊勢雨太神宮内院一切
經本願常明寺宗存敬梓

---

(163) 施氏七書講義(三六一・三八六)
于時元和七年辛酉歳仲秋吉辰　岩田七兵衛刊行

(164) 三千句(五七五)
于時元和七暦九月吉辰
二兵衛

(165) 阿彌陀經秘直談鈔(三一七)
右此秘直談一部三卷者爲末代改略談
之文字印寫畢
旹元和七年辛酉　九月日　沙門良心
三州於平地善宗寺　梓刊

(166) 貞永式目抄(四七八)
元和七年霜月吉辰

(167) 新鍥丹溪先生醫書纂要心法(三三四)
元和七辛酉年霜月望日　三條寺町黒澤源兵衛
開板

(168) 醫學源流(三三四)
元和七年辛酉季冬良日重刊

元和八年 壬戌（一六二二）

(169) 信長記（四八九・六〇八）
于時元和八壬戌暦三月吉辰

(170) 鎮州臨濟惠照禪師語錄（三四一）
元和壬戌歳孟春吉朝　金宣重刊

(171) 禪宗無門關抄（三四二）
元和八壬戌歳立夏吉辰　洛陽　在故刊之

(172) 三體詩素隱抄（三六七）
于時元和八年壬戌仲夏丙申朔
草于湘南紫陽山下

(173) 千手千眼觀世音菩薩大悲心陀羅尼（二八五）
元和八年壬戌十月二日甲子日
天台沙門常明寺宗存重刊

(174) 新學行要抄（三二一）
下總州香取郡飯高鄉法輪學校之工匠等幸覓此一本輙鏤梓矣所慨者雖積年累月爲生產之謀天性不敏而暗字字或罔辨避俗從正或弗知所從所非況於乜乜之形旡旡之類乎欽請於大衆刪削之以其不差耳
元和第八壬戌年十月十四日

(175) 法苑珠林（二八六・補遺）
伊勢大神宮一切經本願常明寺宗存敬梓
寛永元年甲子十一月二十七日（全百卷）
（本書元和八年至寛永元年刊記あり）

元和九年 癸亥（一六二三）

(176) 和名集並異名製劑記（三三二）
元和九年歳舍癸亥季春良辰日梅壽疏之以刊行

(177) 狹衣物語（四八九・五一五）
元和九年五月中旬　心也開板

(178) 源氏物語（四八九・五一二）

洛陽二条通鶴屋町

元和九年孟夏上旬　富杜哥鑑　開板

(179) 法華玄義釋籤（三二二）

於下總國飯高梓刊

元和九年癸亥潤八月下旬

(180) 貞觀政要（三六二・三八二）

元和九癸亥初冬吉辰　三條白壁町 忠田吉兵衛門板

(181) 百法問答抄（三一二）

元和九年十一月廿一日

金剛峯寺於西院開板之畢東室來賢寫

本樣合之開板生國尾州之住丹羽郡丹下

左平次入道淨善造之

(182) 名醫類案（三三二）

于時元和九年歲舍癸亥臘月吉辰猪子梅壽刊行

---

(183) 鎮州臨濟慧照禪師語錄（三四二）

元和九年孟冬吉旦洛陽　重刊

元和十年甲子（一六二四）
（寛永元年）

(184) 玉澤不渴鈔（三一二）

元和十年五月廿一日　淨善　開

(185) 祥刑要覽（三六二・三八七）

寛永元年甲子　三月吉日

玉屋町田中長左衛門刊之

(186) 尙書抄（三六五）

于時寛永元甲子歲卯月吉辰　二兵衛開板

(187) 禪宗無門關抄（三四一）

寛永元甲子年立夏吉辰　加樣合　洛陽重刊

(188) 平家物語（四九〇・五三四）

此平家物語一方檢挍衆以唅味令開板之者也

于時寛永元年五月初一日
落陽三條寺町　道意

(189) 七帖要文（三一三）
于時寛永元年中夏十日

(190) 明德記（四九〇・五八七）
（前略）寛永元甲子歳仲夏下旬　開板之

(191) 城西聯句（三六三・三九六）
寛永元孟夏日
意濟　開板

(192) 開心鈔（三一三）
高野山於西院開之
寛永元年八月十六日

(193) 太平記（四九〇・五四四）
于時寛永元年南呂下旬　開板之

(194) 大乘止觀法門（補遺）
寛永元年甲子九月五日

---

(195) 傷寒明理論（三三三）
寛永元年歲舍甲子季秋吉旦　梅壽刊行

(196) 保赤全書（三三三）
寛永元年歲舍甲子季秋吉旦　梅壽刊行

(197) 六韜抄（四九〇）
于昔寛永元甲子年初冬吉辰　玄佐開板

寛永二年乙丑（一六二五）

(198) 日蓮聖人註畫讚（三三八）
右註畫讚者相州鎌倉妙法寺住持日澄所撰也
然傳寫誤於魚魯其文或失前後剩有差脫以故
今集多本而按檢之輙命工鏤梓焉耳
維時寛永龍集乙丑正月念四日成功畢

(199) 大學章句抄
中庸章句抄（三六六）
于時寛永二暦重光作噩初春吉辰
本屋
意齊　開板焉

(200) 増續會通韻府群玉（三六二・三八九）

寛永二年乙丑初春吉日

洛陽玉屋町田中長左衛門開刊

(201) 科註妙法蓮華經鈔（三〇三）

寛永二乙丑暦梅月下旬吉辰刊摺之

(202) 増補六臣註文選（二六九・三六三）

寛永二乙丑孟夏上旬日　板行畢

(203) 十四經發揮（三三三）

寛永二年歳舍乙丑仲夏良日於洛陽二條梅壽刊行

(204) 簠簋內傳金烏玉兎集（補遺）

寛永二乙丑林鐘上旬日　松岡作左衛門開板

(205) 邵康節先生心易梅花數（三六三・三八八）

寛永二暦　八月吉祥日

---

(206) 周易程傳（三六三・三七二）

寛永二年南呂下旬

二條觀音町中嶋久兵衛開之

(207) 南浦文集（三四〇・五七三）

寛永乙丑仲秋四條寺町校正刊行

(208) 妙法蓮華經論（三〇三）

寛永二乙丑暦　晩秋吉日　刊摺之

(209) 隨身鈔（三〇三）

寛永二乙丑十月中旬

(210) 妙法蓮華經（二九五）

于時寛永二年十月日於洛陽三條寺町

寶藏寺摺刊之畢

(211) 素問入式運氣論奧（三三三）

寛永第二歳舍乙丑季冬良日梅壽重刊

寛永三年丙寅（一六二六）

(212) 天台法華宗學生式問答（三〇三）
于時寛永三丙寅曆三月吉辰
比叡山延曆寺寶幢院於南谷　刊摺之訖

(213) 大方廣圓覺略疏注經（三〇四）
寛永三丙寅曆三月吉辰刊摺之畢

(214) 禪儀外文集（三四〇）
寛永三丙寅卯月上旬於四條寺町校正刊行

(215) 玄義備檢（三〇四）
旹寛永三丙寅曆卯月吉辰刊摺之

(216) 法華文句記箋難（三〇四）
于旹寛永三丙寅曆卯月日　刊摺之

(217) 摩訶止觀略決（三〇四）
旹于寛永三丙寅年四月日　刊摺之訖

(218) 唐決集（三〇三）
旹寛永三丙寅年四月日　刊摺之訖

(219) 簠簋內傳金烏玉兎集（三六三・三八七）
寛永三丙寅潤四月中旬日松岡作左衞門開板

(220) 往生要集抄（三〇四）
于時寛永三丙寅曆閏四月吉日刊摺之畢

(221) 要法文（三〇四）
于時寛永三丙寅曆閏卯月日刊摺之

(222) 註無量義經（三〇三）
于旹寛永三丙寅曆閏四月日刊摺之

(223) 史記抄（三六六）
寛永三丙寅年閏四月下旬　陰山玄佐板行

(224) 黑谷聖人傳綸詞（三四〇）
于時寛永三丙寅曆孟夏上旬
於四條寺町大文字町中野市右衞門尉開之

(225) 轤山和泥合水（三四二）

寛永丙寅林鐘日　板開

(226) 觀心略要集（三〇四）

尒時寛永丙寅暦　林鐘吉晨　開板

(227) 格致餘論鈔（三三三）

寛永三年歳舍丙寅初秋良日　梅壽刊行

(228) 宗門正燈錄（三四二）

月窓宗珊信女印寫宗門正燈錄若干部
預充三十三回忌之佛事伏希
信女百年後依此願力永脱女流速到佛
地　寛永丙寅八月吉辰

(229) 天台法華疏續（二七九）

右此抄記者一家習學之上雖勵書寫之功
展轉之謬歎亦有餘矣因茲今聚集數多之
舊本粗校檢之而輙鋟乎版焉庶幾留未來
永劫傳道廣遠也猶恐魚魯訛錯章句齟齬
文字添脱敬請後哲删削决正而已

于時寛永三丙寅暦南呂仲旬
洛陽於本國寺　開之

(230) 洛陽大佛鐘之銘(抄)（六二六）

寛永三年秋八月吉辰

(231) 佛果圜悟眞覺禪師心要（三四〇）

于時寛永三年丙寅中秋下旬
於洛下四條寺町中野市衛門尉刊摺之

(232) 玉印抄（三一二）

寛永三丙寅九月廿一日於高野山開板經
尾州丹羽郡丹下左平次入道淨善

(233) 摩訶止觀私記（二七九）

寛永三暦丙寅九月　日
於洛陽本國寺內　開之

(234) 法華玄義私記（二七九）

寛永三丙寅暦九月　日　洛陽於本國寺開之

(235) 三體詩素隱抄(三六七)
寛永第三丙寅季秋念七　木室二兵衛尉刊行了

(236) 佛果圜悟禪師碧巖集(三四二)
寛永三年丙寅暮秋中旬　洛陽於押小路
新刊

(237) 集解要文(三〇四)
寛永三丙寅年十一月二十七日

(238) 百喩經(三八〇)
寛永丙寅極月吉日百喩經
洛陽於本能寺　開判露閑

寛永四年丁卯(一六二七)

(239) 天目中峰和尚廣錄(三四二)
于時寛永四丁卯年三月吉辰　刊之

(240) 天目中峯和尚廣錄(三四二)
寛永四歳在丁卯春三月下浣　前南禪最岳
宴元良誌

(241) 簾篋內傳金烏玉兎集(補遺)
寛永四丁卯五月下旬日
洛陽冨小路通於一町目松岡作左衛門開板

(242) 開心鈔(三一二)
寛永四年七月七日於高野山左半次入道淨
善開板

(243) 語園(四九一・五七九)
寛永四年丁卯秋七月既望　刊之

(244) 鎭州臨濟惠照禪師語錄(三四二)
寛永四丁卯歳仲秋吉辰加校合　重刊之

(245) 職原私抄(四七九)
寛永四年丁卯秋九月吉辰　二兵衛刊之

(246) 日蓮上人註畫讃(三二八)
(前略)維時寛永四龍集丁卯霜月念五日成功畢

(247) 無量壽經論註記(三〇四)
于時寛永四丙卯暦　霜月上旬

(248) 淨土略名目圖見聞(三四三)
寛永四丁卯暦十二月中旬

(249) 天台三大部補注(三四二)
寛永四年丁卯歳　於洛陽尾張町河面平衛門刊行

寛永五年戊辰(一六二八)

(250) 往生要集抄(三四二)
于寛永五年戊辰暦二月吉日刊摺之畢
五條因幡堂大堀付拔町淸吉

(251) 簠簋內傳金烏玉兎集(三八七)
寛永五戊辰暦仲春上旬日
洛陽富小路通於一町目松岡作左衛門開板

(252) 徹選擇本願念佛集(三四三)
于時寛永五戊辰暦孟春下旬

(253) 城西聯句(三六三・三九六)
寛永五歲春
巳濟　開板

(254) 釋淨土二藏義(三四四)
于時寛永五戊辰暦卯月上旬於洛下大佛橋通醍醐町道以刊之

(255) 安樂集私記(三四四)
于時寛永五戊辰暦卯月吉日刊摺之畢
五條因幡堂大堀付拔町淸吉

(256) 局方發揮抄(三三五)
于旹寛永五戊辰暦長夏下旬　刊行之

(257) 玉機微義(三三五)
新町通町頭　盧甚左衛門
室町藥師町　宇野善五郎
寛永第五戊辰暦八月吉辰　繡梓

(258) 秘密曼荼羅十住心論(三一二)
寛永五戊辰年十月廿一日於高野山
尾州丹羽郡丹下左平次入道淨善開板

(259) 前漢書（二八一・三六三・三八一）

寛永第五戊辰曆菊月廿一日於洛陽本能寺前刊行焉

寛永六年己巳（一六二九）

(260) 篚纂內傳金烏玉兎集（三六三・三七八）

寛永六己巳潤二月上旬日

洛陽富小路通於一町目松岡作兵衛門開板

(261) 修習止觀坐禪法要（三四三）

于時寛永六己巳曆　二月日　開板

(262) 錦繡段抄（四九一・五七四）

寛永六年仲呂上旬　二條觀音町中嶋久兵衛開之

(263) 本朝文粹（九七三）

（卷十七）于時寛永六己巳曆卯月吉日

玉屋町　田中長左衛門刊之印

(264) 新編江湖風月集略註（三六三・三九五）

寛永六年　五月下旬

二條觀音町中嶋久兵衛開刊

(265) 驊騮全書（四八三）

右一部七册之書者當家累代之重寶氏家之眼目也一子相傳之後不可遺置窓前恐者無比之全書而已

奥書條々代々之系圖雖在之寫本借與之仁不可棄之由堅物略畢

寛永六年九月上旬　洛陽上柳町 開板　住友勝兵衛尉貞政

(266) 決疑鈔直牒（三四四）

于時寛永六年己巳　初冬　上旬

大佛橋通於松尾町長井七左衛門　開之

寛永七年庚午（一六三〇）

(267) 秦定養生主論（三三五）

昔寛永第七稔龍集上章敦牂

白藏夷則吉辰活板焉

新町通町頭　蘆甚左衛門
室町薬師町　宇野善五郎

(268)
傳法正宗記（二〇五）
寛永七年庚午九月吉日　板行畢

(269)
多識編（三六四・三八〇）
寛永七庚午年霜月下旬

寛永八年 辛未（一六三一）

(270)
食性能毒（三三五）
（右之一冊爲初學蒙士記焉
慶長第二歳舍丁酉仲夏初吉
延命院法印元朔）
寛永八辛未歳仲春吉辰重刊

(271)
三教指歸鈔（三一三）
寛永八年辛未三月仲旬　於高野山開板
應宣

(272)
脩華嚴奥旨妄盡還源觀（二九九）
于時寛永八年七月八日
於槇尾平等心王院　摺寫之畢

(273)
武家諸禮集（四八〇）
寛永八辛未年八月下旬
二條通觀音町中嶋久兵衛開板

(274)
秘密漫荼羅教付法傳（三一二）
旹寛永八辛未年九月廿一日染紫毫了備州深識
於高野山尾州丹羽郡住丹下左平次入淨善開板

寛永九年 壬申（一六三二）

(275)
宗要柏原案立
寛永九壬申年應鐘中旬
於延暦寺止觀院佛母谷刊摺之訖

(276)
修證心印（三二一）
中山第九世寂靜院
寛永第九壬申霜月朔日
日賢記

(277) 六帖要文（三〇四）
寛永九壬申年寒食
於延暦寺寶幢院搨刊之畢

寛永十年癸酉（一六三三）

(278) 義經記（四九二・五四九）
寛永十年五月吉辰

(279) 自讃歌注（四九二・五五四）
寛永十年五月吉辰

寛永十一年甲戌（一六三四）

(280) 止觀義例隨釋（三〇四）
（卷一刊記）于時寛永十一甲戌曆仲春上旬
於山門西塔南谷搨刊之
（卷六刊記）于時寛永十一甲戌曆三月上旬
於山門西塔南谷搨之

(281) 廣付法傳聞書（三一二）
寛永拾壹甲戌歳　於高野山
三月廿一日　尾州之住左平次入
淨善開板

寛永十二年乙亥（一六三五）

(282) 五燈會元（三三九）
寛永乙亥重陽日　洛陽富小路通讃州寺町
中村宗遵重刊

(283) 表白集（三一三）
旹寛永十二年九月日
於高野山　蓮福院開板之

(284) 古筆拾葉抄（三一三）
右古筆鈔於高野山往生院開印板
寛永十二年乙亥九月吉日　應宣開之

寛永十三年丙子（一六三六）

寛永十四年丁丑（一六三七）

(285) 女訓抄（四八一）
寛永十四年三月吉辰

(286) 難經捷徑（三三五）
寛永十四丁丑年孟秋中旬　二條通觀音町風月宗知
刊行

(287) 大毘盧遮那成佛經神變加持經疏（三一三）
寛永十四丁丑歳極月十三日　於高野山
淨善開板

寛永十五年戊寅（一六三八）

(288) 傳述一心戒文（三四四）
寛永十五戊寅曆四月中申十五日刊行畢

(289) 諸尊表白鈔（三一三）
旹寛永十五年九月日
於高野山　蓮福院開板之

寛永十六年己卯（一六三九）

(290) 大和物語（四九二・五一〇）
寛永十六年二月吉辰

(291) 女訓抄（四八二）
寛永十六年二月吉辰

(292) 寶物集（四九二・五一八）
寛永十六年三月吉辰

(293) 伊曾保物語（四九二・六一四）
寛永十六年卯月吉辰

(294) 地藏引導等（三一三）
寛永十六年於高野山蓮福院開板

寛永十七年庚辰（一六四〇）

(295) 佛傳書(四二五)
寛永拾七庚辰年孟春吉日

(296) 觀經四帖䟽楷定記(二九五)
寛永十七庚辰年八月吉日
洛陽三條於寶藏寺令印判之者也
比丘來譽林香

(297) 左大將六百番歌合(四九三・五五四)
寛永十七年九月吉辰

寛永十八年辛巳(一六四一)

寛永十九年壬午(一六四二)

(298) 義例私註(三〇八)
寛永壬午七月書寫山松壽院通容快偏書
寛永十九年壬午八月中旬摺之

(299) 月輪觀秘釋(三一四)
于時寛永拾九壬午曆仲秋吉辰日
於高野山往生院寶藏院開板之

寛永二十年癸未(一六四三)

(300) 冷齋夜話(三六四・三八八)
(卷首目末) 癸未春孟新刊
(卷末) 於下京樓町開板

(301) 山家義苑(三四四)
于時寛永二十年癸未九月上旬

寛永二十一年甲申(一六四四)(正保元年)

正保二年乙酉(一六四五)

正保三年丙戌(一六四六)

(302) 西山上人緣起(三四四)
正保三丙戌歳三月日

麩屋町通　船屋町
販木屋 宗兵衛開之

(303) 天台四教儀備釋（三四四）
正保三年七月吉日　寺町三條上町　庄右衛門

(304) 貫西山心經・政經（三六四・三八五）
正保三丙戌歳下冬吉辰
風月宗知刊行

(305) 新編晦菴先生語錄類要（三六四・三八五）
正保三歳極月日
二條鶴屋町田原仁左衛門刊行

正保四年丁亥（一六四七）

正保五年戊子（一六四八）
（慶安元年）

慶安二年己丑（一六四九）

(306) 鴉鷺合戰物語（五九四）
慶安二年正月吉日　荒木利兵衛開板

慶安三年庚寅（一六五〇）

(307) 太平記（五四五）
慶安三年庚寅五月吉日　荒木利兵衛開

刊年不刻本（慶長至寛永刊）

(308) 謠抄（五六六）
守清梓刊

(309) 保元物語・平治物語（三五二・五四〇）
紀州能阿彌鋟梓

(310) 延壽撮要（三三〇）
意齋道啓刊行

(311) 平家物語（二九〇・五三三）
下村時房刊之

(312) 中庸章句（二九〇・三七八）
下村生藏刊之

(313) 中庸章句（二七四・三七八）
關東上總住今關正運刊

(314) 論語（二七〇）
慈眼刊　正運刊　洛汭要法寺內開板

(315) 孟子（二七三・三七七）
關東上總住今關正運刊

(316) 韻林類聚（[illegible]）
豪州住人小林滿介刻之

(317) 法界次第（二八七）
六條　刊堂

(318) 拂惑袖中策（三二六）
於江戶梓刊

(319) 伊勢物語闕疑抄（五〇八）
御幸町通二條
仁右衞門　活板之

(320) 平家物語（五三三）
此平家物語一方檢校衆以吟味令開板之者也
河原町　仁衞門

(321) 謠抄（五六八）
台林刊行

(322) 毛詩抄（三六二・三六五）
於洛陽本能寺前町開板

(323) 周易抄（三六二・三六五）
於洛陽本能寺前開板

(324) 日本書紀（神代卷）抄（三六三）
於洛陽本能寺前町開板

(325) 明醫雜著抄（補遺）
梅壽刊行

(326) 祖庭事苑（三三八）
洛陽富小路通讃州寺町　中村長兵衛刊

(327) 大慧普覺禪師書（三三八）
富小路通讃州寺町
中村長兵衛

(328) 黃檗山斷際禪師傳心法要（三三九）
富小路讃州寺町　中村長兵衛尉

(329) 山谷詩集（三六四・三九四）
於二條大黑町助衛門刊行

(330) 大坂物語（六三一）
京四條坊門通　敦賀屋久兵衛

(331) 先代舊事本紀（五八四）
勅以菅丞相之女妻之且讓其

禁秘之書不無面授口決乃是
菅公之所傳也斯本紀三十一
卷之外更有雜部數十卷大菅
會御灌頂三器再興之傳八雲
神秘軍旅本紀等之書深秘于
家不漏于佗子孫授受之以至
成賴始改鵜鷀二字爲佐佐貴
三字然後世領江州傳以斯書
夫以鵜鷀家譜並永補任從五
位菅
後鳥羽院辱染宸翰賜于管領
六角泰綱京極氏信兄第今又
攝政關白從一位前左大臣藤
房輔公自操紫毫賜于吾家者
血脈不絕書傳在于家之餘烈
也唯恨佗邦異端日盛本朝
神道月衰矣恭惟吾神國之
天皇者
日御種而道已巍巍誰不尊敬
矣其生斯國而貴異法者正可
謂神敵乎誤之大者何如焉故

鋟梓斯書以弘家傳冀廢道之
再興者也因茲謹書于東武
寛文庚戌歲季夏上浣
八雲軒住吏命源朝臣能門

補遺

(332) 止觀義例（補遺）
右此本者以舊本校擷之而印寫之焉
于時慶長二十乙卯暦六月日

(333) 淨土諸名目圖見聞（二四三）
寛永元年甲子八月中旬

(334) 醫路正誤（補遺）
新町通町頭　盧甚左衛門
室町藥師町　宇野善五郎
寛永第五戊辰曆蠟月吉辰
繡梓

(335) 沈靜錄（補遺）
余負痾數月杜門不出矣性嗜文籍志好沈靜
間取架上之書而讀書焉若有所得隨即筆錄或
一二句或三四條言較有重復遂無復詮次書
成廼曰沈靜錄寛永辛巳八月壬戌埜靜軒題

(336) 素問玄機原病式（二八八）
元和二年丙辰　於六條開板之

(337) 江湖風月集略註（補遺）
寛永三年仲呂上旬
二條觀音町中嶋久兵衛開刊

(287) 大毘盧遮那成佛神變加持經疏（[illegible]）は整版につき削去。

(298) 義例私註（[illegible]〇八）は整版につき削去。

附記

本篇所載の刊記は、つとめて配字其の他原本の儘に從ひしも、編錄に當り、遽かに原本と對校し難きものありて、若干例外存す。

又、沙石集・明德記・日蓮上人註畫讚等の如く、後年の再版以後に於ても初版の刊語を襲用し、年時のみ改變を加へたるものは、（　）印若しくは（前略）等の註記を施す。

なほ編錄の際誤りて刊語の一半を省略せるものは、本文補遺篇に之を所收訂正し、本文所載中誤植あるものは本集に於いて之を正せり。

古活字版五十音別書目

一　國書之部

佛書・醫書及び切利支丹版は之を除き、カナ抄物は漢籍之部に附載す。但し佛書中、史傳及び詩文集等の類は便宜之を收む。假名遣は歴史的假名遣を用ひず。

（ア）

鴉鷺合戰物語（五九四）
間の本（補訂）
秋夜長物語（五九三）
東鑑（二二〇）

（イ）

十六夜日記（五二七）
伊勢物語（五〇八）
伊勢物語闕疑抄（五〇八）
伊勢物語肖聞抄（五〇八）
伊曾保物語（六〇四）
一休水鏡（六〇六）

（新撰）犬筑波集（五六一）

（ウ）

うつぼ物語（五一一）
うらみのすけ（六〇三）
宇治拾遺物語（五一七）
謠本（四〇〇・四四八）
謠抄（五六五）

（エ）

榮華物語（五二九）

辨慶物語（五九五）

（ホ）

保元物語（五三九）

保暦間記（五八四）

方丈記（五二七）

寶物集（五一七）

法華經文字聲韻音訓篇集（三〇八）

發句帳（五六一）

本朝古今銘盡（四〇四）

本朝文粹（五七三）

（マ）

舞の本（五九六）

增鏡（五二一）

鞠の書（四八四）

萬葉集（五五〇）

（ミ）

見咲和歌集（五五三）

水鏡（五三一）

（ム）

無言抄（五五八）

（メ）

めのとのさうし（四八二）

明意寶鑑（内閣御普請帳閣藏）（補[illegible]）

明德記（五八六）

（モ）

藻鹽草（五五九）

（ヤ）

八雲御抄（五五[illegible]）

二 漢籍之部

卷後に

つゝしみてこの書を故安田善次郎大人の御靈前にさゝげます。

この書が公刊のはこびになりましたのは、一に、故大人の御蔭でございます。

大恩は謝せずと申します。　いま私は古人のこの言葉をおもふばかりであります。

この研究は、もと、昭和七年の春、東京文理科大學の業を卒へるに際し、「王朝時代物語の研究」に添へて、副論文として提出したものを、更に書き改めたものであります。　昭和六年の早春、平河町のお邸へはじめて伺ひました時、「いままで、これ程古活字版を澤山に見て調べたものはないから、完璧を期すると限りはないが、學生の間に調べたといふ記念の意味で是非まとめたらよからう」とおすゝめを戴きましたので、かねての志を固め、又、松井簡治・垣内松三兩先生の御敎導もありまして、其の執筆を急いでをりました。　たま／＼德富猪一郎先生より長澤規矩也學士と共に古稀記念「成簣堂善本書目」の編纂を命ぜられ、日々大森の文庫に秘笈を拜見いたしてをります中、傍ら私の古活字版の調べも急速に進捗したのであります。　副論文としては、時間の關係などから、省略を重ねざるを得ませんでしたが、幸に纏りまして、いよ／＼提出の前日にやうやく製本も出來上りましたので、早速平河町のお邸へお目にかけに伺ひました。「一晩あづけて下さい」とのお言葉で、翌日戴きに上りますと、「ゆうべひと晩中にすつかり讀みました

これで結構ですから、今度はすつかり詳しく書きなほすのですね。 出版の方は私が心配しますから」との有難い思召しに、私は、たゞ感泣いたしました。

其の後、御高配に從つて改稿の筆を起す事となりましたが、卒業後、引續き母校の國語國文研究室に助手を拜命いたしまして、重なる公務の爲いとまも少く、其の上目前の研究課題などに追はれて、其の儘年餘を經過しました。 その頃、大人の御配慮と諸先生のおとりなしとにより、昭和九年度の母校紀要として別刊して戴ける事となつたのであります。 ところが、其の秋は、これまた私が年來古活字版の研究に就いて一方ならぬ御高恩を蒙りました故大阪毎日新聞社專務高木利太翁の遺書古活字版目錄の編纂並びに展觀に關し、微力をさゝげなどいたしました爲、いよ／＼改稿に着手したのは、昭和八年の歲末であります。 爾來、連夜殆ど睡眠を節して執筆に從ひ、翌九年の五月頃には八分通りの成稿を見るにいたりました。 又一方では、稿の成るに從つて順次印刷所に廻附し、執筆と同時に校正をも急いでをつたのであります。 をりふし暑中休暇前に、助手の職を辭し、研究科に在籍の上、研學に專念いたす事となりまして、僅かに餘暇に恵まれる境遇となりました爲、大人の御指圖に從つて、一時組版を中止し、各地の資料の再調を行つて、一旦成稿の分にも、いたらぬながらほゞ滿足出來るまで新たに筆を加へる事となりましたが、其の間に發見された新資料の檢討などに時日を要しまして、遂に改稿中に年を越えるにいたりました。 かくて餘りに延引を重ねて心せかれます爲、諸方面の諒解を乞ひ求

め、一旦決めて戴いてをりました紀要を辭退いたしまして、之を安田文庫から公刊して戴く事となりました。か樣に種々な事情から次第に遲延いたしましたが、やうやく昨夏になりまして、本文の印刷を終へ、引續き補訂篇の後半と附載との組版を進めることが出來るやうになりました。次いで附圖の印行に着手する手筈になつてをりました處、茲に思ひもよらぬ大人の御急逝にあひました次第であります。

そこで一時、すべてを中止し、御令嗣の御歸朝を待ち、御葬儀終了の後、一切の御指圖を仰いで再び印刷を續けました。かくしてこゝに、御當主の御庇護のもとに、いま昭和十二年の秋日、愈々完成を告げようといたしてをるのであります。

御先代よりひき續き蒙りますす過分なる御庇護に對しては、生涯の研鑽をもて御高恩の萬一に報ぜんと念ずるばかりでございます。

誠に本書の結成に就いて賜りました故大人の御高配は、到底拙い筆につくし樣もございません。

印刷に渡します前の原稿、校正刷など、順次御校閲を賜りました上、更に本刷を終りました分を重ねて御精讀下さいまして、內容の誤謬、文字の誤植から枉心の不正までも、筆をとつて御表示下さつたのであります。御表示は、訂正を要すべき部分を特に赤色でお認め下さいました御懇切なものでございます。今御許しを戴きまして、左にその御手蹟を掲げ、御遺德を偲ぶよ す

がといたしたいと存じます。

又、印刷・體裁に就きましても、本文・目次の組方、附表・索引の作法から圖版の編纂方針・取扱ひ方に至るまで、一として御高配を賜はらぬはなく、其の御心盡しは、實に本書の隅々に及んでゐるのであります。

圖版は、特に之を別册として、在來同類の研究書に例のないほど多數(六百圖・二百頁)を收め、見開き兩面刷として對照に便し、又本文・圖版雙方に參照記號を註記して、眞に圖版附載の主旨に適ふ樣にとの御留意に從つて編纂いたしたのであります。

題簽も扉の分と兩様の御染毫を頂戴いたしました。御晩年には、美事な墨蹟を一切他に示されませんでしたのに、殆ど唯一の例外とも申すべき御心いれを賜りました事は、つたないながら全力を盡してまゐりました私のこの研究にとりまして、何よりも有難く存じてをりましたが、これも亦、唯今では、尊い御遺念となりました。

完成の姿をお察し戴いてをりました事は、せめてもでございますが、眞の完成をまのあたり御覽戴く事が出來ませんで、まことに心さびしく存じます。

常時御期待を戴いてをりました本書の公刊の延引の一因は、出來る限り完璧を期したいといふ私の我儘をお許し願ひました爲であると思ひますと、眞に自責の念に堪へません。

本書完成記念の古活字版展覽會に就きましても、早くより御話がございまして、御他界の後、御

手控の中に、左に掲げます様な御書留を拜見いたしました。

古活字版之研究出版紀念古活字印本展覧會の事
自文禄至寛永古活字印本
參考（從來古活字印本ト誤認セラレタルモノ）
要法寺版論語
南禪版年代記略　一冊
嵯峨本伊勢物語　一冊
寛永刊草紙　一冊

また平素「何でも氣をつけて見ておくものですね。」と申されて、諸方面の報告論文に注意せられ、常に關係事項を御示教下さいました。御手許の古活字版も、一粒よりの珠玉とも申すべき善本が四百種に達しまして、御收藏中に於ても最も充實した部門の一つでございましたが、正に古今無雙、空前にして絶後と申すべき御蒐集であります。御蒐集の數と共に、私の研究も進んでまゐつたのでございますが、又、御高配に據り、東西諸庫に資料採訪の旅行をいたします事も年數時に及びまして、私が、今日までに全國各地で拜見いたしました古活字版の數は、大略三千五百部（國書一千五百、漢籍八百、他は佛典）に達しました。その中、寫眞に納めました分だけで

も、一千點に近いのであります。かくの如きは、往昔の人々の企て及ばなかつた事でありまして、進みゆく昭代に生れあはせた有難さをおもひますと共に、かく多數の資料を拜見し、研究を進める事が出來ましたのは、また實に多くの方々の御厚情の賜物でございます。

「ものの成就するには、必ず三種の縁が具足する。それは順縁としての贊助の力と、逆縁と申して反對の力と、それに順逆何れにも屬せぬ縁の力とが加はつて初めて成就する。順縁ばかりで決して功の成るものではない。歴史や古人の傳記を稽へるまでもなく、少し氣をつけて世間を見渡せば直ぐ判る筈です。順縁に向つて感謝するのは無論、逆縁等に對して感謝して下さい。風雨寒暑が花を咲かせる縁でせう」（會田富康氏編「みさご」第三輯、三村清三郎氏筆。）と、三村翁の申される通り、私のこの研究も、幸に三種の縁に深く惠まれて成つたものの樣に存じます。

私がはじめて古活字版の研究に留意いたしました當初から想ひ起しますと、既に十年の月日を經過いたしてをります。其の間必ずしもこの問題ばかりを研究し、又、其の資料搜査の爲にのみ訪書旅行をいたしたといふわけではございませんが、私の研究生活の一半は、常に古活字版でございました。茲に、私が古活字版の研究に着手いたしました由縁並びに研究の經過を申述べます事は、まことにをこがましい次第でございますが、長い間御世話になりました多くの方々に對し、一言御禮を申上げたく存じまして、あへて附記させて戴く事といたします。

私は小學生の時分、國語・歴史などにも興味はございましたが、何といつて格別嫌ひなものもな

く、唯其の中に特に數學を好みまして、幼な心にゆく〳〵は工科に進みたいと切望してをりました。然し、九歳に父を、ついで十一歳に母を失ひまして、初志に任せず、其の後、成蹊學園に學ぶ樣になりまして、環境の影響から次第に文學・史學の方面に強い關心を抱く樣になりました。初めは現代文學の作品を多讀したり、新體詩や和歌（之は後に園長中村春二先生が、やる以上はよい師につかなければいけないと、前田夕暮先生を聘して下さいました。）などを作つて樂しんでをりましたが、傍ら謠曲・狂言などを習つてをりました事も其の一因でありましたか、古典にも興味を惹かれ、一年生の時に徒然草と方丈記から入つて、平家物語・增鏡・枕草子・古今集・新古今集・萬葉集・源氏物語の順に全讀し、又別に古事記は早くから鈴木友吉先生（現神宮皇學館教授）に教へをうけました。これ等は讀む中に半解ながらも自然と暗んじ、古今集などは、覺えた歌から順に墨で消して、一冊全部まつ黑になつた活版本が唯今でも殘つてをります。又、無點本の四書を芳野幹一先生（現學習院教授）から教へて戴いた事もございました。次いで東京高等師範學校の文科第二部（國語漢文專攻）に入學いたしました。私が好きな國漢を專攻出來る樣になりましたのは、故中村春二先生の御蔭でございますが、中學校から高等師範・文理科大學と順に專門の學を修業する事を得ましたのは、岩崎小彌太男爵の奬學の賜物であります。高等師範に入りましてからは、松井簡治・吉田彌平兩先生をはじめ諸先生の御教導により好きな專門の道に勵む事が出來ますのを樂しみに勉强してをりましたが、まもなく當時學習院に

をられました山岸徳平先生に御指導を戴く機縁を得まして、非常に仕合せをいたしました。山岸先生の御教へに從ひ、學校で學ぶテキストは精讀し、學校の教科課程として學ばないものは、難解の部分は唯過眼するにとゞめてでも專ら多讀して、作品に卽して國文學史の展開を腦裡に收める樣につとめました。又傍ら先人の研究や國文學通史の類をもなるべく多く讀破して專門の常識を廣くし、つまらぬ事に驚ろかない樣にとの御注意を服用し、なほ其の他に、小さいながら何か一つの問題を捉へて研究する樣にとの御指圖をも實行する樣に心がけました。又、先生の古寫本の讀合せや筆寫などの御手傳をさせて戴いた事なども、讀む力が養はれた樣に思ひます。「活版本で間に合はなければ、木版本を見、木版になつてゐない時は、更に進んで寫本に及ぶがよい。」との松井先生の御注意を體し、學校で學ぶテキストを精讀する際に、必ず試みる事に決めてゐた諸注集成の作業に之を實行して、研究資料・參考書等の捜査も、自校の圖書館等の手近な處から次第に遠くへ及ぼす樣に心がけました。一方に松井先生の豐富な御藏書を自由に拜見する事を許されて、書誌に關する興味も加りましたが、又、圖書寮・內閣文庫を初め諸文庫へも山岸先生に連れて行つて戴き、麻布の南葵文庫へひと夏通つた事などもありました。其の頃は古書を閲覽調査する學生は殆ど皆無で、丁度、山岸先生のお伴をして、當時虎之門にあつた圖書寮へ參つてをりました時、池田龜鑑氏が西下經一氏と同道で初めて閲覽に見えたのに遇合したのを記憶してをります。平素は學校の正課に追はれます上、初學年の

頃には健康の爲にと思ひ弓道に精を出して、選手生活などをいたしました爲、暇も少く、主として長い休暇に科外の勉强を樂しみました。そして段々諸方の文庫へも訪書の機を得る樣になりましたが、一層之に努める樣になりました一因は、能狂言の研究に志を寄せた爲であります。

能狂言はかねて中學生の頃に少しばかり眞似事を習ひ、和泉流よいや會などで狂言にしたしむ樣になつて、元來の考古癖から狂言に就いて少し纏つた事を知りたいと思ひ、其の方面の唯一の權威であるといふ「能狂言の研究」と題する小册を探し求めました。早速之を讀みましたが、中學生の乏しい知識から見ても疑問の點が少くありませんので、自分で少し調べてみたいといふ氣持を起しました。然し、當時は研究の便宜も持ちませんで、其の儘に過ぎてをりましたのが、高等師範に入つてから、調べはじめる樣になつて、帝國圖書館・早稻田大學の圖書館（藤代理文を集めてゐた吉田東伍先生に御紹介して戴きました）の能狂言に關する資料を見ただけでも、「能狂言の研究」を訂正出來る樣に考へました。然し、狂言の本質と其の源流、狂言記の性質等に關して、自ら立てた推論假設を論證するに足る資料が容易に見つからない爲に、勢ひ之を次々と諸方の文庫へ求め歩く結果になりました。けれども豫期する樣な資料はなか／＼發見する事が出來ず、大正十五年の秋「高師二年生」に「能狂言小見」と題する一文を執筆して自校の校友會誌に發表し、他に二三の小考をものしただけで、たま／＼古物語の研究や論語の訓點の研究等、他の問題に興味が移つて、狂

言の研究は其の儘中絶してしまひました。　然し、この能狂言の研究資料を諸方へ捜索にまゐりました時、第一目的のものが得られなくとも、其の文庫の特色とするもの、又は他の古典に關する資料等を調査して戻りました爲、是はをのづから後に書誌を研究する機緣となりました。後から思へば、其の頃大藏流に直接關係しなかつたのが私の狂言研究には一不幸であつたと考へますが、若し其の當時、せめて今日手許にある何分の一かの研究資料があれば、其の儘專ら能狂言の研究に精進を續け、或は今日、この古活字版の研究の成果を見る事もなかつたかもしれないと思ひますと、何が機緣になるか分らぬものであります。

かうして私の研究の興味は、古物語などの古典に落ちついたのでありますが、かねて山岸先生から、何れの時代、何れの系列を研究するにしても、在來の研究が頗る不備であるから、自分が研究しようと思ふ範圍の作品は、自ら十分に本文整定を遂げて、其の上で立論するがよい。是は、日暮れて途遠しでは不可能であるが、若い時からはげめば必ず出來ると、先生自ら範を示して敎へられるのに刺戟をうけて、其の決心を固め、諸方へ訪書する際にも、一物も殘さぬつもりで廣く調べて戻る樣に心がけました。

さうして調べた古寫本・古板本・先人の注解等を、各作品別に集めて整理をしてをります間に、一作品の本文の傳流が、寫本の時代から板本の時代へ移つてゆく際には、共通な現象が見られ、且つ其の時期も各作品ほゞ皆同じく慶長から寬永に亙る一定期間であつて、其の板本の樣式

は所謂古活字版が大半を占め、然も其の種類は在來知られてゐるよりも豫想外に多數に上るものであるといふ事に氣がついたのであります。然るに、全く同一の無刊記の古活字版に對して、甲の文庫と乙の所藏者とが、其の刊行年代の推定を全然異にし、一は慶長といひ、一は寛永と稱して歸一する所がなく、甚しきは古活字版である事さへ辨別してゐない有樣でありました。古寫本・古板本を資料として作品の傳流を考へ、本文整定を行ふ場合に、古寫本の書寫年代、古板本の刊行年代が明確に定められなければ、もとより其の研究の成果を期する事は出來ません。私は在來の研究に依賴する事が出來ないと悟りましたので、自分の手で、無刊記の古活字版の刊行年代を明確にする爲、古活字版を徹底的に研究しようと決意いたしました。其れ故に、當初は、直接必要に迫られてゐる國文學の作品の古活字本（即ち、假名交りの古活字本(特に又、平假名)）を調べましたが、段々研究を始めますと、同一作品で平假名と片假名と兩方の形式を持つて印行せられたものが案外に多く、且つ、片假名交りの古活字本の研究には、眞名(漢字)活字本の調査を切り離す事が出來ないといふ事にも氣がつきました。其れは、片假名交りの古活字本中に混用せられてゐる眞名活字が、殆ど皆眞名活字本の其れを流用したものであり、且つ、眞名活字本は假名交り本よりも遙かに多數開版せられてゐて、古活字版刊行の中樞をなし、之を措いては、古活字版研究上の諸問題の決論を導き出す事は不可能であるからであります。

かくして昭和三年の秋には一旦「平假名古活字本の研究」と題する小論を公表しましたが、之を

契機として私の古活字版の研究は大いに熱度を加へました。其の小考は、十年後の今日から見れば、まだ不完全なものではありますが、當時既に圖書寮・内閣文庫・岩崎文庫・靜嘉堂文庫・京都帝大・久原文庫・神宮文庫・阿波國文庫等、諸文庫の古活字本を拜見してをりました爲、其の論旨に於いては今日といへども大異なく、最初に立てた假設が、其の後順調に確められてゆきました事は、研究經過の上に大幸でございました。

かくて古活字版の研究は、私の當初の志からは、大分深入りをし、且つ又、横道へ逸れたかの觀をも呈しました。なほ又、眞に古活字版の總合的なる研究を徹底する爲には、我が國の印刷文化史を究め、或は古寫本・古板本より見たる佛典・漢籍等の傳流の問題、古活字版と其れ以後の板本との關係等をも研究する必要を生じ、其の結果、日本書誌學研究の汎ゆる分野に亙つて研究の手を擴げなければならなくなつて、私の研究は益々多岐に亙らざるをえなくなつたのであります。其の間、幸に昭和四年の春高等師範を卒へ、新設の文理科大學國語國文學科に入つて引續き勉學に專念する事を得まして、追々資料調査の便宜にも惠まれ、研究はかなり順調に進みました。

又、高等師範入學以來、自らかへりみて、出來る限り諸方の學術講演會、各種の展覽會等に出かけ、見聞を廣める樣につとめましたが、就中、大正十五年の春から連年東洋文庫で伺ひました白鳥庫吉博士の御講義（日支古代史に關する諸問題の新研究）は最も感銘深く、研究上多大の教誨を蒙りました。

又、古活字版を研究し始めました頃には、手控として、薄様か雁皮かに鉛筆・墨等を用ひて忠實に原本を摸寫しました。寫眞を使ふ費用もありませんので、自然見たものを頭の中へよく殘すといふ事を心がけ、版式をよく呑込む様に努めましたが、其れを大分やつた後で、陽畫感光紙といふものが手に入りました。この陽畫感光紙を古書の調査に用ひた事もいはゞ私共が元祖でありますが、是は原寸大の影印が得られて、古活字版の版式の調査には頗る重寶な爲、何千枚と寫しました。お蔭で研究は長足の進歩を遂げましたが、其れが一通り濟んだ後で、出版といふ事も考へられる様になりましてから、縮寫の燒付寫眞を撮るといふ事になりました。寫眞に撮れば、てつとり早い様でも、其れに便り過ぎてしまひますので、頭の中には殘りません。從つて寫眞がない時は、全く不自由であります。結果から考へますと、右の順序は、私個人の研究段階としては、非常に好かつたのであります。

私の訪書旅行も、恩師知己並びに同窓の諸友の援護に據るものが多いのであります。生れつきの好古癖から、上代の宮址や歌枕、古美術の探索などもしてゐましたが、大正十五年の夏休に、中京の眞福寺・名古屋市立圖書館、神宮文庫等を尋ねたのが、地方へ訪書の旅をした最初であります。爾來、諸方に御邪魔いたしましたものの、學生々活中には未だ九州と北陸とには機を得ませんでした。併し其の後、故安田大人の御高配に據つて、遂に內地の諸文庫は殆ど遍歴いたしたのであります。資料の捜査は、何時を限りと果のない事でありますが、唯今の私の境遇と

しましては、まづ入力を盡したものと申せませう。茲にこれまで拜見を許されました諸文庫名を謹記し、種々研究の便を與へられました當局の方々に、改めて感謝の微意を表する次第であります。

圖書寮　帝室博物館　内閣文庫　帝國圖書館　東京帝國大學　史料編纂所　東京文理科大學　早稻田大學　慶應義塾大學　日本大學　學習院　第一高等學校　東方文化研究所　東洋文庫　靜嘉堂文庫　尊經閣文庫　蓬左文庫　無窮會文庫　論語青淵文庫　秋田縣立圖書館　岩手縣立圖書館　宮城縣立圖書館　東北帝國大學　鹽釜神社神庫　米澤圖書館　上杉伯爵家　水戸彰考館　成田圖書館　足利學校遺蹟圖書館　太田町立圖書館　川越市立圖書館　金澤文庫　靜岡縣立葵文庫　靜岡縣師範學校　縣居神社　身延文庫　刈谷町立圖書館　岩瀨文庫　名古屋市立圖書館　眞福寺大須文庫　愛知縣第一師範學校　岐阜縣師範學校　福井市立圖書館　金澤市立圖書館　石川縣立圖書館　神宮文庫　松阪町立圖書館　叡山文庫　京都帝國大學　久原文庫　陽明文庫　京都府立圖書館　大谷大學　龍谷大學　賀茂三手文庫　北野神社神庫　兩足院　智積院　奈良女子高等師範學校　東大寺圖書館　石崎文庫　和歌山縣師範學校　高野山大學　親王院（外高野山內各院）　大阪府立圖書館　懷德堂　大阪天滿宮文庫　住吉文庫　神戸市立圖書館　岡山縣立圖書館　池田侯爵家　廣島文理科大學　淺野圖書館　山口縣立圖書館　山口縣師範學校　阿波國

文庫　多和文庫　披雲閣文庫　金比羅神社文庫　坂出圖書館　九州帝國大學　福岡縣立圖書館　太宰府神社神庫　祐德文庫　長崎縣立圖書館　長崎縣師範學校　佐賀縣立圖書館　鍋島家内庫所　熊本縣立圖書館　第五高等學校　細川侯爵家　人吉願成寺　鹿兒島縣立圖書館

又、御藏書の拜見を許され、種々誘掖を賜りました左の方々に對し篤くお禮を申上げます。

大槻茂雄氏　幸田成友氏　佐々木信綱氏　高野辰之氏　瀧川龜太郎氏　濱野知三郎氏　藤浪剛一氏　保阪潤治氏　森銑三氏　森潤三郎氏　猪熊信男氏　潁原退藏氏　大屋德城氏　島田次郎氏　小山源治氏　杉浦三郎兵衛氏　田中忠三郎氏　富岡益太郎氏　藤井乙男氏　吉澤義則氏　上野精一氏　飯島幡司氏　中島仁之助氏　布施卷太郎氏　水原堯榮氏　正宗敦夫氏　西下經一氏　井上榮夫氏　栗田元次氏　光藤珠夫氏　春日政治氏　田村専一郎氏　小山弘房氏　神田喜一郎氏

なほ又、東西古書肆、殊に、淺倉屋・一誠堂・弘文莊・文行堂・文求堂・村口書房、並びに佐々木竹苞樓・鹿田松雲堂・藤園堂・沖森書店主諸氏には研究上多くの便宜を與へられました。各位に對し、厚く御禮を申上げます。

恩師諸先生はじめ在京の方々に絶えず御援護を蒙つてをります事は、御禮の申上げ樣もない次第でございますが、一年の三分の一以上を研究訪書の旅におくりました年もありまして、殊

に京阪地方へは毎年數度訪書の機を得、京都帝大の新村出・山鹿誠之助・鈴鹿三七・藤堂祐範諸先生、大阪の今井貫一先生には長い間常に特別の御配慮を戴きました。

又、岩崎小彌太男爵の靜嘉堂文庫には、學生の頃から御手傳に參つてをります關係からも、汎ゆる便宜を許されまして、諸橋轍次先生はじめ、長澤規矩也・飯田良平兩氏よりは種々誘掖を戴きました。なほ又、故安田大人の御主唱に據り、同邸に集ひました日本書誌學會並びに稀書複製會の同人の方々、わけても、

石井光雄・市島謙吉・大島雅太郎・鹿島則泰・橋井清五郎・鈴木重孝・德富猪一郎・永山近影・樋口慶千代・林若吉・三村清三郎諸先生よりは、數々の御援護を蒙りました。

唯、諸先生の恩顧をかへりみます時、心殘りに存ぜられますのは、この研究の完成を深く御期待下さいました高木利太・內野皎亭・和田萬吉・谷村一太郎・內藤湖南諸先生の今日おいでにならぬ事であります。

內藤湖南博士に最後にお目にかゝりましたのは、丁度滿洲國の鄭總理が恭仁山莊を訪問せられた翌日で、床上に臥つてをられましたが、長時間に亙つて御話を伺ひ、古活字版の研究にも種々御注意を戴きました。

谷村一太郎翁は京都にお住ひで、離れてはをりましたが、實業界に活動せられる餘暇の愛書の御趣味から、屢御目にかゝる機會を得まして、私の古活字版の研究にも御藏書を開放せられ、早

くから其の成果を御期待下さいました。

四年前の春、安田邸に催されました日本書誌學會例會の席上、和田萬吉・内野皎亭兩翁が、當時既に校正濟になつてゐた本書の第一篇を手に取られて、「是は大變なものだ。何時頃出來ます。」と尋ねられましたのを、「もうぢきです。」と故安田大人が微笑まれながら、私に代つてお答へ下さいました。並んで坐つてをられた兩翁の溫容が眼前に髣髴して、昨夜の事の樣に思はれますが、答問何れの言葉を發せられた方も、今は幽明相隔て、うたゝ感懷に堪へない次第であります。

古活字版の研究に就き、故安田大人の御高恩をおもふ時、次いで私の念頭に浮ぶのは、必ず高木利太翁であります。古活字版を通じて利太翁と私との關係は、故翁の遺志に基き私に編纂を命ぜられました「高木文庫古活字版目錄」の卷後、並びに「高木利太追悼錄」中に、まさ子刀自がお認め下さいましたが、其の後、安田・高木兩家の御話合ひに據つて、故翁遺愛の古活字版の一半を安田文庫におあづかりする事となり、兩度ばかり私が東西を往來して、滯りなく落着いたしました。其の爲、高木未亡人は昨秋御挨拶に上京せられ、十月九日に私が平河町のお邸へ御案內申上げました。其の節、高木未亡人が「御本のおすきな天下の安田さんのお庫に納まりますれば、私どもの方にございますより、書物もどの位仕合せでございませう。」と申されましたのに對し、「いゝえ、お言葉は恐れ入ります。たゞ、好きなものを擇らせて戴けまして仕合せでござい

ます。その代り永く大切に保存いたしますでございます。」と御丁重に御挨拶されましたが、それから、半月を出ない中の俄かの御他界に、甲麓の高木未亡人より涙の封書を戴き、私も亦、千萬無量のおもひでございました。

かうして安田家の御庇護のもとに多くの方々のめぐみをうけて、本書は、茲に世に出る事となりましたが、私の不敏から、なほ不備な點、將來の研究に俟つべき部分が、多々あらうと存じます。切に大方の御叱正を冀ふ次第であります。

もとより私自らも亦、增訂に努力すべき責めを十分に感じてをります。只今は、昨年の元旦以來、故安田大人並びに恩師諸先生の御指圖に從ひ、別箇の新たな問題に研究の主力を注いでをりますが、古活字版の研究は、なほ生涯の伴侶として、他日增訂篇を編む事の出來ますのを、色々の意味で自ら希つてをります。

終りに、本書の印刷は、故安田大人の御配慮に據り、安田家關係行社の一、日本紙業株式會社を煩はしましたが、私が行屆きません爲、延引を重ね、種々御迷惑をおかけいたしました事を深く御詫び申上げます。又特に、同社にあつて終始並々ならぬ御世話を戴きました村上憲勝氏、並びに、其の間同社に對し種々斡旋の勞をおとり下さいました安田家、本庄谷慶次郎氏に對し、茲に厚く御禮を申上げます。

追而、本書は、故安田大人の御遺志に據り、世界各國の諸文庫へ贈ります爲、特に英文の概說を

附印いたしました。英文は東京文理科大學英文學研究室の成田成壽君を煩はしました。同君の厚意を篤く感謝いたします。

又、私が昭和二年の春、はじめて研究論文を發表いたしましてから、今年で丁度滿十年に、また學窓を離れましてから、滿五年になりますが、其の間に公刊いたしました論文・單行本を算へますと、一百を越えてをります。本書の公刊を機に、おのが歩んだ道をなつかしむまゝに、其の目錄を編んで茲に附記させて戴く事といたしました。次の十年には、いま少し充實した目錄を編んで大方の御援助に對へたいものと、ひそかに念じてをります。

昭和十二年丁丑六月二十三日

川瀨一馬謹識

川瀨一馬著作目錄

自昭和二年三月
至同十二年九月

（發表年時）　（題名並びに發表雜誌名）　＊印は單行本

昭和二年　三月（大正十五年執筆）　能狂言小見（東京高師校友會誌八二號）

昭和二年　六月　論語訓點史の初期（東京高師校友會誌八三號）
——新資料元龜本を中心として——

昭和三年　三月　能狂言とＰＡＲＯＤＹ（東京高師校友會誌八五號）

同　年　六月　足利時代の小歌と狂言歌（東京高師校友會誌八六號）

同　年十一月　平假名古活字本の研究（東京高師校友會誌八七號）

昭和六年　四月　元龜字叢攷（丘三號）

同　年　五月　＊つれづれ種正徹本（古典叢刊第一篇）（文學社刊）　菊判　一冊

同　徒然草壽命院抄攷（國文學誌一ノ一）

同　年　六月　正徹本徒然草攷（國文學誌一ノ二）

同　年　六月　＊徒然草壽命院抄解說（慶長九年刊本覆製附載）（松雲堂刊）　大本　二冊

同　年　七月　徒然草抄異版攷（國文學誌一ノ三）

同　年　九月　正平板論語攷（斯文十三ノ九）　拔刷二百部　別刊（六一頁）

同年十一月・十二月　大和物語の異本と平中物語の發見（國文學誌一ノ七・八）

同　年十二月　徒然草研究參考書目（丘四號）

昭和七年　一月（至十年九月）　＊善本影譜（長澤學士共編）第一期至第三期（各十輯）（日本書誌學會刊）　菊倍判　三十套

同　年　四月　續群書類從の編纂に就て（書物展望二ノ四）

同　年　五月　＊成簣堂善本書目（長澤規矩也學士共編）（民友社刊）　菊判　一冊

同　＊成簣堂善本書影七十種（同右）（民友社刊）菊判　一套

同　年　六月　伏見版と駿河版（書物春秋十九號）

同　年　九月　＊嵯峨本圖考（一誠堂刊）　菊倍判　一冊

同　年　十月　近世初期の活字版に就いて（書物趣味一ノ二）

同　年十一月　全國諸庫に於ける和漢舊籍收藏の現狀（文部省圖書館講習所校友會誌三號）

昭和七年十一月　*舊刊影譜（日本書誌學會刊）　四六倍判　一册
昭和八年　一月　要法寺版の研究（書誌學一ノ一）
同　舊刊影譜補訂（同右一ノ一）
同　近世初期の活字印本に就いて（書物春秋二一號）
同　年　三月　誤られたる古版本（國文學新報一ノ三）
同　丹鶴叢書に就いて（書誌學一ノ三）
同年三・五・七月　日本古刻史講話（第一至三回）（書誌學一ノ三・四）
同　年　五月　近世初期に於ける文學書開版の發生について（コトバ三ノ六）
同　五月・七月　舊刊本大廣益會玉篇に就いて（上・下）（書誌學一ノ三・四）
同　年　七月　大坂物語の研究（書誌學一ノ四）
同　年　七月（至十年　八月）　安田文庫古板書目（古活字版之部）其一至十五（書誌學一ノ四至五ノ二）
同　九年　九月（至十年　七月）　安田文庫古板書目（室町以前之部）其一至五（書誌學三ノ三至五ノ一）
（同十年十一月）　安田文庫書目（自筆本之部）大田南畝の部（書誌學五ノ五）

同　年　九月　*活版經籍攷解說並補正（狩谷棭齋自筆本覆製附載）（日本書誌學會刊）半紙本　一册
同　現存阿佛吾妻下りの原本に就いて（書誌學一ノ五）
同　年十一月　*高木文庫古活字版目錄（高木文庫刊）四六判四倍　一册
同　*古活字版の話（高木利太蒐書古活字版展觀書目附載）（高木文庫刊）　菊判　一册
同　*古版本圖錄（一誠堂刊）　四六倍判　一册
同　西遊日記（書誌學一ノ六）
同　「江戸」に於ける初期の出版（書誌學一ノ六）
昭和九年　一月　寛永の江戸圖に就いて（書誌學二ノ一）
同　年　二月　倭玉篇に關する二三の新見（書誌學二ノ二）
同　年　三月　古板本の僞造（書誌學二ノ三）
同　年　五月　上代に於ける漢籍の傳來（書誌學二ノ五）
同　源平盛衰記の古活字印本と亂版（書誌學二ノ五）
同　年　七月　射和文庫を訪ふの記（書誌學三ノ一）
――荒木田久老手校の萬葉集其のほか――

昭和九年 八月　中京遊記（書誌學三ノ二）

同　年 八月（至十年 十月）　*安田文庫書目（二十三種）百部印行、公にせず。（以印刷代謄寫）

同　年 十月（至十一年七月）　讀書觀籍日錄（其一至十一）（書誌學三ノ四至七ノ一）

同　駿河御讓本の研究（書誌學三ノ四特號）

同　年十一月　*江戸時代書誌學者自筆本展覽會目錄（日本書誌學會刊）（附載、展覽二十五家略傳、三村清三郎氏撰。）菊判　一册

同　年十二月　*平假名古活字印本書目（日本書誌學會刊）四六判　一册

昭和十年 一月　屋代弘賢の藏書に就いて——不忍文庫書目考——（圖書館雜誌二九ノ一）

同　*高木利太追悼錄（高木文庫刊）（高木まさ子刀自共編）菊倍判　一册

同　年 二月　新たに知られた嵯峨本伊勢物語など——嵯峨本圖考以後——（書物春秋二十五號）

同　年 三月　古代解釋學（後篇）（國語科學講座第十二冊）（明治書院刊）

同　年 四月　近世初期に於ける經書の訓點に就いて——博士點・文之點・道春點を[illegible]りて——（書誌學四ノ四）

同　平瀨本源氏物語私見（國文學論叢一ノ一）

同　年 五月　*南畝文庫藏書目（校訂、附解說）（目錄叢書第一篇）（日本書誌學會刊）四六判　一册

同　年 六月　古い狂言名寄（寶生十四ノ六）

同　狩谷棭齋の學績（書誌學四ノ六）——其の著書と手澤本とを中心として——

同　新たに知られた棭齋關係傳記（同右）

同　棭齋印譜の集錄に就いて（同右）

同　年 七月　攝壤集に就いて（國文學論叢一ノ二）

同　年 八月　能狂言釣狐考（寶生十四ノ八）

同　市井の學者狩谷棭齋（AKラヂオ放送稿本）（書誌學五ノ二）

同年 八月・九月　誤られたる古板本（書誌學五ノ二・三）附、原刻・覆刻對照書影

同　年 九月　假名書論語に就いて（書誌學五ノ三）

同　江戸時代に於ける考古圖錄の編刊に就いて（書誌學五ノ三）

同　*かながき論語　安田文庫叢刊第一篇（校注、附解說）美濃本　一册

同　年 十月　近衞家藏狂言流儀部分（寶生十四ノ十）

同　*狩谷棭齋先生百年祭記念展覽會目錄（斯文會刊）菊判　一册

同　　　　　　　伊勢暦の刊行に就いて（書誌學五ノ四）
同　年十一月　「伊勢暦」の刊行拾遺（同右五ノ五）
同　　　　　　「熊澤蕃山著述集」に就いて（書誌學五ノ五）
昭和十年十二月　横山由清自筆夜半の寢覺附、窓の燈火（國文學論叢三・四號）
昭和十一年一月　最古の謠板本（寶生十五ノ一）
同　年　三月　狩谷棭齋の業績（斯文十八ノ三）（叙五百年祭記念講演速記）
同　　　　　　森立之の「枳園漫錄」（書誌學六ノ三）
同　年　五月　※古活字版倭玉篇解題（古典今集第五期二五附載）一冊
同　年　七月　唐物語と蒙求和歌（國語一ノ一）
同　年　八月　「間の本」の古板に就いて（寶生十五ノ八）
同　年　九月　靜嘉堂文庫に納まれる松井簡治博士の藏書に就いて（書誌學七ノ三）（同十月補筆、國語一ノ二所載）
同　年十一月　偲ぶことども（安田文庫主人追憶）（寶生十五ノ十一）
同　年十二月　偲ぶことども（安田文庫主人追憶）（安田同人會々誌百二十八號）
同　　　　　　偲ぶことども（安田文庫主人追憶）（能樂畫報三十一ノ十二）

同　年十二月　※平中物語解説（靜嘉堂複製書之一、平中物語覆製本附册）
昭和十二年一月　八卷本花傳書に就いて（寶生十六ノ一）
同　　　　　　※椎園第一輯（安田文庫刊）菊判　一册
　　　　　　　　玉篇水部の斷簡に就いて
　　　　　　　　著者の校正刷本と手訂刊本
　　　　　　　　大藏八右衞門の狂言傳書
　　　　　　　　要法寺版「神代卷」の發見
　　　　　　　　山岡浚明「サンズヰ」考
　　　　　　　　皎亭文庫の追憶
　　　　　　　　本の話（其の一）
　　　　　　　　安田文庫書目（自筆本の部其の二、狩谷棭齋の部）
同　年　二月　古活字版叢話（訪書會探訪第一輯）
同　　　　　　大藏虎清自筆狂言八番（複印）
同　年　五月　自筆本叢説（圖書館雜誌三十一ノ五）
同　　　　　　北村季吟が歌學傳授の起請文に就いて（國漢三五）
同　年　六月　弘化の勸進能に就いて（寶生十六ノ六）
　　　　　　　　附、弘化勸進能番組に就いて

弘化勸進能番組

同　年　七月　弘化の勸進能に就いて、補遺（寶生十六ノ七）

同　　　八月　異色ある古板本（八月一日、東京日々新聞）

同　　　九月　＊時代別古板本陳列書目並解説（世界教育會議記念、出版と印刷文化展覧會陳列目録の内）（三越刊）

同　　　　　　＊椎園第二輯（安田文庫刊）菊判　一冊

自筆本叢説（圖書館雜誌所載一部訂正）

東寺の刊經に就いて

市野迷庵雜記

附、古書肆藏書目録

狂言方大藏家の系圖

本の話（其の二）

安田文庫書目（自筆本の一其の三）吉田篁墩外

同　年　十月　＊古活字版の研究（安田文庫刊）四六倍判　二冊

古活字版の研究索引

（ウ）

（キ）

（ク）

（ケ）

（コ）

（ス）

（タ）

（ナ）

（ニ）

（ヒ）

（フ）

（ム）

（メ）

（モ）

（ワ）

古活字版之研究
限定六百部之内
第一百十二號

昭和十二年十月十九日印刷
昭和十二年十月廿二日發行

全二册

著作者
發行者　東京市麴町區平河町二丁目六番地
安田文庫内
川瀬一馬

印刷者　東京市四谷區元町五十九番地
石川二郎

印刷所　東京市四谷區元町五十九番地
日本紙業株式會社

發行所　東京市麴町區平河町二丁目六番地
安田邸内
安田文庫

八　活字印刷術の衰退

かくの如く國文學關係のものをはじめ、佛書以外の種々な書籍の出版は、活字印刷術の傳來以後、經濟的に有利な條件を得て、活字印刷に據り大いに發達したが、寛永の後半になると、活字印刷による出版は次第に衰へて、遂に正保以後は、其の開版は殆ど凡て整版に基く樣になつた。其の主因も亦經濟的の事情に據る。卽ち、活字印刷によると、一種の活字を造れば、其れで各種の書籍が印刷せられ、比較的些少の經費を以て各種の書籍を出版し得る。從つて需要に應じて活字を組直して少數宛幾度も同一の書籍を重版してゐる。現代と反對に工賃に比して料紙其の他の材料費の嵩む當時の事故、一度の植版に際して多數印刷し、之を藏つて置くよりも、必要に應じて少數宛何回も組換へ組換する方が遙かに經濟的であつた。之が一つには活字版に同種活字で組みかはつたもの、卽ち異植版の多い有力な原因である。在來、同種活字異植版の多い理由を當時の印刷技術の不備にのみ求めてゐたのは、活字版の版式の整つてゐる點、又異植版の比較研究などから言つても從ひ難い。之はやはり前述の如き經濟的の原因からであらうと思ふ。然しながら、一時に多數の需要を見、又餘り度々重版の必要に迫られて來ると、活字版は組んだ儘版を保存する事が出來ないから、卒急なる重版には極めて不便とする點もあつて、一枚板に雕つても、經濟的に引き合ふ樣になると、次第に又整版が專ら用ひられる傾向を生じて來た。かく見來れば、結局、近世初期に於ける活字印刷術の發達も亦其の衰退も共に經濟的の原因が重きをなしてゐると言へる。そして一度この活字印刷術の現れた事によつて、我國の印刷文化が、一大轉換を爲したる事こそ、「古活字版」の最も重要なる意義と言はねばならない。なほ古活字版の技術と活字の種類性質等に就いては、長くなるから省略に從つた。

（昭和八年十月二十四日於東京文理科大學國語國文研究室）

れたものに醫師の關係してゐるものが多いのは特に注意す可き事である。

又、醫書を當時主として刊行したものに、醫德堂守三と梅壽軒とがある。前者は後者よりも早く現れてゐるが、慶長中期以後は刊行してゐないらしく、後者の方は慶長中期より元和・寛永に亙つてゐる。佛書の類も寺院で出版されると同時に、慶長後半より書肆關係のものも多く現れた。それは禪宗關係のものが大部分を占めてゐて、當代禪宗寺院の活字開版の不振は玆に原因があるかと思ふ。

五　漢籍の活字飜刻

次に當代に於ける漢籍の活字開版の狀勢を見るに、もともと漢籍の飜刻は、鎌倉末期以後室町末期に至る我が印刷文化が依然として佛教文化の一特質としての存在に過ぎなかつた當時に於いても、學僧の教養其の他の關係から若干行はれてゐた。共れが活字印刷術の渡來以後、爲政者の奬勵を受けて益々隆盛の氣運を示して來たのであるが、次いで起つた寺院の活字開版事業に於いても亦、少からざる經籍の出版を行ひ、大いに坊刻本の勃興を刺戟した。然しそれ等の經籍開版は直接間接に縉紳儒流並に共の學統を繼承する緇流が交渉を持ち、從つて共の刻本の底本には共れ等の人々の持本たる古注本が用ひられた。之に反して當時の新學たる程朱學の書籍の刊行は、寛永に入つて漸く整版に據つて現れてゐる。卽ち、之は一面には新注の學が未だ當時の人々の精神生活に於いてさまで有力になつてゐなかつた事を示すものであらう。當時刊行せられた活字版の漢籍は凡そ一百部に達する。經書が最も多く、次いで字書類、集類も相當多數である。史記の樣な大部なものが三度程活字開版されてゐるのは盛んなものであると言はねばならない。

嵯峨山等の京洛内外の寺院に於いて慶長から寛永に亙つて幾多の書籍が活字開版された。中にも日蓮宗の寺院が多いのは注意す可き事であつて、前に述べた本國寺の關係からであらうかと思はれる點もある。本國寺の僧は、或は加藤清正などから朝鮮の活版術をうけ入れたものではなからうかと思ふ。
京洛以外の各地に於ける寺院の活字出版として最も注意す可きは、叡山と高野山とである。
叡山の活字出版は慶長八年頃から始り各坊各院に於いて競爭の貌で、寛永頃まで、寺院の活字出版中最も盛んに行はれてゐる。
高野山の方は、慶長の中頃賴慶・朝印等に據つて初められたが、叡山に劣らず多數の開版を行つてゐる。慶長の初め、伏見版に與つた三要等が高野へ登つて後に、高野の方で活字版が初つてゐるのは注意す可き事であらうと思ふ。
又、近畿地方では南都の諸大寺・東海道では三河の善宗寺、關東地方では、下野の龍澤山の淨土教版、下總飯高の法輪寺、この法輪寺は日蓮宗であるから、京都の同宗派の盛んな開版事業の影響に據るものであらうと思ふ。それから元和年間に於ける江戸版の佛書が數種あるのも注意す可きである。
なほ、寺院の活字出版に就いて附言す可きは、寺院に於ける活字出版の盛行が、やがて出版書肆の發達を促す最も大きな原因の一つとなつた事で、之は本能寺・叡山・野山等の場合に於いて極めて明瞭に指摘し得る所である。

四　坊刻活字印本の發達

爲政者・寺院の開版事業と密接なる關係を保持しつゝ次第に出版書肆業の發達を促す有力な支援となつたのは民間の特志の出版事業である。或は特志の出版と稱す可きものが、著しく書肆としての性質を帶びてゐたものと言ふ事も出來よう。在來、之を坊刻本と稱するのは適切な稱呼であると思ふ。又、坊刻本の最初に現

見に於いて木活字を以て三要等に開版せしめたもの、孔子家語・貞觀要政・六韜三略・七書・東鑑等、漢籍が大部分で、然も、六韜三略の如きは慶長四年五年九年と三度も開版してゐる。武家の開版としては當然であらう。この伏見に於ける開版書を「伏見版」と言ふが、之に對して、慶長二十年から元和二年に亙つて、家康の最晩年、駿河に於いて銅活字を以て道春等に命じて刊行せしめた大藏一覽集と群書治要とがある。之を前の伏見版と區別して「駿河版」と言ふ。

又、家康の影響をうけたものと思はれるが、豐臣秀頼も慶長十一年に帝鑑圖說を刊行してゐる。他に武家の開版としては上杉家の直江山城守などが有名で、慶長十二年に京都要法寺で文選を出版した。

三　寺院に於ける活字出版

又、爲政者の開版事業に劣らず、寧ろ或點では爲政者の影響をも蒙つて活字印刷に從つたのは寺院である。前代よりなほ引續いて印刷文化の主體を爲してゐた寺院が、新式にして簡便なる印刷法を看過する筈はない。新しい技術を用ひて益々盛んに開版に從事し、在來、印刷事業に少しも關係してゐない宗派の寺院(日蓮宗の如き)からも反つて多數の出版を見る樣にさへなつて、寺院の出版事業は前代にも增して隆盛を來した。これ等諸寺院の出版は、爲政者の活字出版よりも僅かに遲れて慶長五六年頃から發達し初めてゐる。爲政者の出版に僧侶の關係したものが多數を占めてゐた事に據つても爲政者と寺院との開版の間には密接な關係のある事がわかる。寺院の中でも最も早く活字印刷を行つてゐるのは京洛の寺院であるが、叡山・野山及び其の他諸地方の寺院でも相當盛んに出版をしてゐる。京洛の寺院では、要法寺が最も早く慶長五年に出版を初め、其の他、本國寺・本能寺・北野經王堂・高臺寺・寶珠院・淸和院・心蓮院・寶藏寺・西本願寺・妙心寺・東福寺・

限定の法華玄義序の出版が行はれてゐるが、之を稍後年の上梓と見る說も有る樣である。併し、私は其の版式なども當時のものと認めてよいと思ふのみならず、同年十一月、即ち一月前に同じ活字で印刷された天台四教儀集解が發見されてゐる點から考へても疑ふ餘地がないと思ふ。本國寺に早く活字本の現れたのは、或は日蓮宗と朝鮮の役の勇將加藤淸正との關係ではないかと考へられるのであるが、未だ確められない。

ともかくも右に述べた事實の如く、活字印刷術が傳來すると間もなく、(一)爲政者、(二)寺院關係者、(三)民間特志家の三方面に於て餘り時差なく、活字本が發生してゐる事がわかる。そして是から後は、簡便であるといふので、何でも活字で印刷を行ふ樣になつた。

併し、何んと言つても活字印刷術の發達の當初に最も大いなる寄與を爲したものは、爲政者側の活動、即ち、第一に後陽成天皇の勅版と、德川家康の開版事業並に其の奬勵政策とである。後陽成天皇の文祿二年の古文孝經の事は前に述べたが、之を第一次の勅版とすると、第二次の勅版は、慶長二年から八年に亙る七年間、其の間に錦繡段・勸學文・四書・孝經・日本書紀神代卷・職原抄・琵琶行長恨歌等を印行せられた。其の活字は極めて大型の木製で、勅版にふさはしい立派な版式のものである。其の實際の仕事には、公卿禪僧等が從事してゐるが、當時の公卿中には、勅版のみならず寺院や民間の出版にも色々關係してゐる者が多い樣である。朝廷方に於ける活字開版が盛んである中に在來、宮樣方の出版といふ事は知られなかつたのであるが、近頃、宮樣方も出版をしてをられる事實が發見せられた。伏見宮御板の「職原抄」がそれである。但し整版であるが、美事な版式の一見勅版の職原抄と間違ふ程のものである。

德川家康は、自ら書籍を印行すると同時に勅によつて活字を造つて獻上してゐる。之は又後に家康に御貸與になつた樣である。其の自ら印行したものは、慶長四年から同十一年に亙つて京洛伏

な新式の印刷術が、我が印刷界の經濟的困難を排擊する一大動力となつて、我が印刷文化は、佛教文化から離脱した方面へ急激なる進展を遂げる事となつたのである。卽ち、印刷文化其れ自體として獨立して發展する様になつたのである。卽ち、この近世初期こそは、我國に於ける印刷文化の展開を劃然と二分する重大なる轉換の時期である。然しながら、かゝる一大轉換の殆ど唯一の直接原因となつた活字印刷術が、豐臣秀吉の朝鮮の役以前に我國に傳來してゐたか否かに就いては種々推論もある様である。室町時代に彼此の文物交流が相當行はれてゐる事は明かであるが、當時に於ける活字印刷術の傳來を暗示する様な資料は、未だ發見されてゐないから、傳來の可能性はないとは言へないが、實際には未だ傳はらなかつたものと解する外はないのである。なほ又茲に注意す可きは、朝鮮の活字印刷術より寧ろ少しく早く西歐の活字印刷術の傳來してゐた事である。天正十八年には既に傳來してゐるが、之は當時に於ける我が中央印刷界の活字印刷術の發達に殆ど影響を與へてゐない様である。或は新村出博士の言はれる様に假名交り活字本の發達に若干の關係を持つたかと思はれるのであるが、其れもなほ多分に研究の餘地がある事である。

二　爲政者の開版事業

朝鮮の活字印刷術が輸入されて後、最初に現れた活字本が何であるかに就いても若干の議論がある。早くも文祿二年に、後陽成天皇の勅版、古文孝經の活字開版が行はれた事は、確實な文獻の報ずる所であるが、未だ現存するものを發見する事が出來ない。實物の現存してゐるものでは、普通には、文祿五年(この年慶長と改元)小瀬甫菴刊行の補註蒙求であるとされてゐる。甫菴は、次いで慶長元年冬、十四經發揮、同二年に醫學正傳・東垣十書をも刊行した。なほ之より前、文祿四年十二月に本國寺の僧日保によつて一百部

のと考へらるが、其の初めは奈良朝である。支那に於いて印刷文化は古く隋代に發生したと言はれてゐるが、唐代には確かに既に幾多の印刷が行はれた。併し其れ等は殆ど佛典の開版に終始してゐると言つても過言ではなく、從つて、唐代に我國に持ち來された印刷文化が、佛典の開版の方面に現れてゐるのは極めて自然な事であらう。今日では例の百萬塔陀羅尼が世界の現存最古の印刷物にさへなつてゐる。然るに我國の印刷文化は其の後に於いても依然として佛教文化に依存する狀態を續け、鎌倉末期に至つて漸く少しばかりの漢籍が開版される樣になつたが、其れとても佛教の庇護のもとに育まれたものであつて、之を、唐の時代に佛教文化の方面に於いて其の初期の發達を遂げ、五代に入つて早くも爲政者に據つて外典の開版が行はれてゐる記錄が見え、次いで宋代になると、盛んに官刻本の現れてゐる支那の印刷文化の發達に比較すると、我國の印刷文化は、遙かに長く佛教文化の下に閉されてゐる。たまたま爲政者で開版するものがあつても、其れは爲政者としてではなく、佛徒としての寄與に過ぎず、何れも佛教の報恩的な思想の下に行はれたものであつた。從つて印刷文化の恩惠を蒙る者は、宗教生活を行ふ者及び其れと密接な關係を有する極めて少數の精神生活者に限られてゐる狀態であつた。卽ち、奈良朝に始つて室町末期に至る約九世紀間に亙る古い印刷文化の特質は、佛教の庇護のもとに發展し、佛教的な色彩を有すると言ふ事である。印刷文化が、この樣な狀態に置かれざるを得なかつたのは、主として經濟的の原因に基くものであつて、出版事業は、全く經濟的に獨立する事の出來ない事情にあつたのである。

又、これを技術的の方面から言ふと、何れも一枚板に雕つた所謂「整版」と言ふものであつて、一種の書物の開版には實に多額の費用を要したものである。

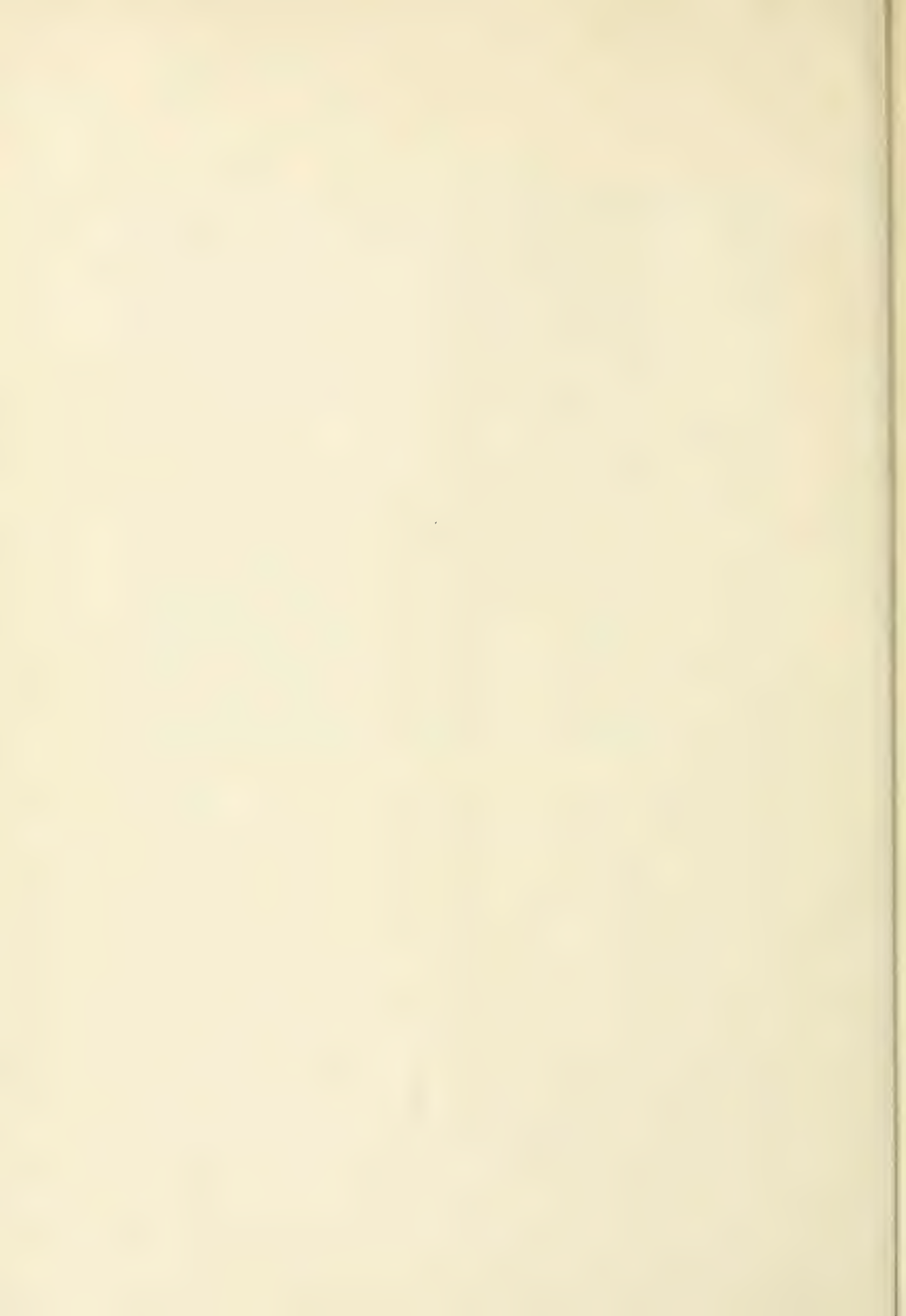
然るに、豐臣秀吉の朝鮮の役の結果は、高麗朝以來、彼の地に異常な發達を示してゐた活字印刷術を輸入する機緣を作り、其の簡便

古活字版概說

川瀬一馬

一　活字印刷術の傳來

我國の古い印刷文化は、隔期的に海外の影響を蒙つて發展を遂げた。私は明治以前に於ける我國の印刷文化の歴史の時期を大略三つに分け度いと思ふ。まづ奈良朝から平安朝の末までを上古、平安朝の末から室町時代の末までを中世、この中世は、又前後兩期に分れて各特色を異にする印刷文化が榮えた。其の前期は鎌倉時代の末までで、後期は南北朝を中心として鎌倉時代の末期から室町の末期までである。更に、江戸時代の初め(玆では文祿慶長の頃とするが、)から、其の末までを近世とする。そしてこの近世は更に四つに分ける事が出來るかと考へる。第一は、慶長から寛永に亙る約五十年間、之を初期とし、又寛政十一年頃から所謂「官版」といふ幕府の昌平坂學問所で教科用の漢籍等を出版しはじめる様になつて、當時の印刷界の狀勢が頗る變つて來た。この頃からを末期とする。其の中間のいはば中期とも稱すべき時期は、又元祿頃を中心として二つに分けられると思ふ。それは、元祿頃から漸く出版界の中心が江戸にうつりかけたからであつて、其れまでは依然として出版界の中心は京阪であつた。其の中間の二つの時期を假に唐時代の詩を論ずるものが、初唐・盛唐・中唐・晩唐と分ける様に、盛期・中期と言つてもよいであらう。そこで、上古・中世・近世に於ける海外の響影を見ると、上古・中世に於いては主として支那、之に若干朝鮮も關係し、又、近世に於いては、主として朝鮮、共れに西歐諸國が稍係はつてゐる。

我國の印刷文化は、もと一般文化と共に支那から將來せられたも

to say that in those days the price of the paper and other materials for printing was higher than the wages, hence it was far economical to print copies repeatedly in small numbers by recomposition every time there was a demand, than to print a large number of copies at a time and keep them for an uncertain future demand. This led to the birth of many books printed in different type-composition, though hitherto the poor techniqne in printing has been held responsible for the production of such books. This latter view is refuted by the excellent composition of the printing-type and the result of the comparative study of the prints of the same type in different composition.

The above-mentioned device, however, had one drawback, as when there was a large demand at one time or too frequent demands or urgent need for reprint, for typing-boards could not be kept in arrangement. Therefore when block-printing was proved to pay well with no inferior products, it began to enjoy its former exclusive use.

The rise and fall of the art of printing in the early Modern Stage, were, after all, determined mainly by economic causes.

The first important thing concerning early Japanese typography is that it was revolutionarised by the introduction of the Korean type-printing.

(The limited space forces the author to leave out the details of echnique in type-printing and the kinds and characteristics of various ttypes.)

and the *Genjimonogatari* were next to press. All these ran into several editions, and especially the *Isemonogatari*, and the *Tsurezuregusa* ran into more than tenth editions. Those publications are, generally speaking based on MSS in book form in currency in those days. Therefore when there were two kinds of MSS of the same source in current use as in the case of the *Heikemonogatari*, with the 'Ichigata-Ryuhon' and the 'Yasaka-Ryuhon', two editions were prepared based on the two different MSS.

Most editions of these books have not the date of their publication, with one exception of the *Taihciki* most of whose editions have the dates of their respective publication. Perhaps the date of the publication of the first editon may have been handed down to later ones.

It is also to be noted as a feature of the full development of the art of printing then that stories came to be published in print, immediately after they were written. For example, the *Osaka-monog atari* which treats of the seige of the Osaka Castle, was published shortly after the Osaka-Fuyu-no-Jin (Winter Battle in Osaka) to inform the progress of the battle. An evidence has been secured proving that the book was already circulated in the beginning of the first year of Genna.

VIII. The Decline of the Type-printing

As stated in the foregoing chapters, the publication of literary Buddhist and other kinds of books had made a remarkable advance with economic facilities secured by the adoption of type-printing since the introduction of the art. In the latter half of the Kwanei period, however, the publication by type-printing saw its gradual decline, till at last after the Seiho period most publication returned to its former resource, block-printing, necessitated chiefly by economic reason. In type-printing, once a type is founded, it can be used to print various books, hence the expense of the publication was comparatively small. Therefore they printed the same edition repeatedly in small numbers at each demand, by re-composing the types. This may sound puzzling

style. The *Isemonogatari* ran into a ninth edition in that style. The birth of the 'Saga-hon' gave rise to a remarkable increase in the production of books in Chinese characters and Japanese syllabaries in the latter half of the Keicho period, when almost all sorts of books were put to print for publication. Su rely this is the most remarkable incident in the history of the Japanese typography since its first introduction. Thus printing became of much practical use and the reflex of civilization in general of that period. This characteristic marks thee arly Modern Stage.

Of the books printed in that period, the following attract our attention: books on swords (fencing), on horses (riding), and the time-honoured manners and customs of the Samurai sect, those as might easily be guessed, were put to print by the demand of the Samurais. Books concerning polite accomplishments such as football, the game of Go and Shogi (Japanese style of chess play), and flower-arrangement were also outstanding both in number and quantity.

The printing of the illustrated books too came to develop steadily in the 'Saga-hon' style in the middle of the Keicho period.

VII. The Significance of the Publication of Japanese Classics

Up to the Middle Ages when type-printing was not even dreamed of, the circulation of the Japanese literary works was kept up solely by manual transcription of the original, so the texts in the process became differentiated according to the periods, localities, and transcribers. These texts circulated and developed their modification. This transformation is one of the characteristics of the Japanese classic up to the Middle Ages.

However, when literary works generally acc epted as classics came to be printed all at once in the beginning of the Modern Stage, the texts were deprived of their former possibilities of variability and transformation, and tended gradually to be fixed and standardized.

Various romances of chivalry of the Middle Ages were the first to be put to print, and works in the Heian period like the *Isemonogatari*

introduction of the type-printing, the reproduction increased with the encouragement of the government authorities. The reprint of the Chinese classics by the temple press quickened the rise of the popular printing business.

Court nobles and Buddhist priests took part, more or less, in reprinting Chinese classics, and the type-setting was based on the books with supplementary notes which were in thier possession. Whereas books of the Teishu school, modern in those days, were reprinted in the printing-boards much later in the Kwanei period, an eloquent proof that the school had not yet secured a firm foothold on the spiritual life of the people then. Chinese books reprinted in the period amount to approximately one hundred, and of those the literary classics were in the majority, seconded by various dictionaries, and anthologies of poetry too were in a considerable number. Such a voluminous book as *Shiki* ran into a third edition, a proof showing how prosperous was the printing in those days.

VI. The Development of the Publication of the Japanese Books

Japanese books were the last to appear in printed form. As a matter of fact, after the introduction of the art of printing, the two books, the *Nihon-Shoki* and the *Shokugensho* were put into print, but they were composed entirely in Chinese characters, not in the mixed style of Chinese and Japanese syllabaries. The first printed book in that style is the *Taiheiki* published by Isogawa Ryoan before the eighth year of Keicho, and ran into a second edition in the same year.

The first print in Chinese characters and Japanese Hiragana (the cursive Japanese syllabaries) is the 'Printed Calendar' for the ninth year of Keicho, presumably published in the previous year, since a calendar must be ready in print before the New Year comes round.

Shortly after the publication of this kind, an edition of books generally termed the 'Saga-hon' came into existence, and with the birth Japanese books began to be printed even more abundantly in that

Nichiren sect in the same province) probably being influenced by the printing activities of the temples of the same sect in Kyoto. It is noteworthy that there are several kinds of Buddhist books of the Yedo Edition published during the Genna era.

The Buddhist printing business as in the Honno-ji and other temples on Mt. Eizan and Mt. Koya, which flourished so much was the chief factor to bring into existence the professional printing-houses.

IV. The Development of the Popular Publication

The book printing business conducted by those interested in the affair, gradually became, side by side with those of the Buddhist temples and government, a powerful driving force of the general progress of the typography. Book printing by those enthusiastic hands was in the nature of the printing house, a later development, and the 'Bokoku-bon' a conventional title for those books is quite suitable, since the appelation means 'an edition of books printed by popular hands'. Majority of those books of the 'Bokoku-bon' printed in the early days were on medicine; Syuzo Itokudo and Baijuken were their chief publishers of the period. (Itokudo's books appeared earlier, but he seems to have given up printing books after the middle of the Keicho period, while Baijuken continued the practice from the middle of the Keicho period onwards to the Genna and Kwanei eras.)

Many Buddhist books besides those printed in temples, began to be issued by the printing-houses in the later half of the Keicho period. They were mostly on the Zen sect, a fact which explain the inactivity of the Zen sect in the printing of the books on their sect in those days.

V. The Reproduction of the Chinese Books

The priests' demand for learning had necessitated the reprint of Chinese classics, though in small quantities, even in those days of the Medieval Stage when the typography in Japan still remained one of the means for the exclusive use of the Buddhist cultures. After the

fifth or the sixth year of Keicho, a little later than the government one. Priests rendered service to the publication of books by the authorities of the government, and this is sufficient to show that there was a close mutual relation between the printing activities of the two. parties concerned.

The temples in and near Kyoto were the first to adopt the type-printing, and other temples on Mt. Eizan and Mt. Koya and other districts followed their example and printed books fairly abundantly. Of the first group, the Yoho-ji was the topmost in starting the type-printing, that is, in the fifth year of Keicho. Other temples as the Honkoku-ji, the Honne-ji, the Kitano Kyoōdo, the Kodai-ji, the Hojyu-in, the Seiwa-in, the Shinren-in, the Hozo-ji, the Nishi Hongan-ji printed many books for the first time from the Keicho to Kwanei periods. It is to be noted here that among these mentioned here there are not a few temples of the Nichiren sect, a fact whose explanation may be sought in their connection with the Honkoku-ji a temple of the same sect, whose priests might have been initiated with the Korean typography by Kiyomasa Kato, above-mentioned as a devotee of the sect.

The second group, temples on Mt. Eizan and Mt. Koya, claims to be mentioned. Those on Mt. Eizan started the activity about the sixth year of Keicho, one temple competing with another in their products, and kept up the most brisk production up to the Kwanei period. Type-printing in temples on Mt. Koya was begun by Raikei and Chôin in the middle of the Keicho period, and the product was as abundant as in those on Mt. Eizan. Mention must be made that the printing here was undertaken after Sanyô and others who had taken part in the publication of the Ieyasu's Fushimi Edition, visited Mt. Koya in the early days of Keicho.

There are other temples famous for book publication, several in Nara, and the Shosha-zan in the Porvince of Harima, and the Ryutaku-zan(a temple in the Province of Shimofusa in the eastern part of Japan) which printed the *Jodokyohan*, and the Hôrin-ji (of the

As another example Ieyasu of the first Shogun of the Tokugawa Shogunate hadalso books printed, and at the Emperor's command had printing-types founded and presented them to the Emperor, who graciously lent them to several temples, it appears. The books printed by Sanyo and others at the command of Ieyasu from the fourth to the eleventh year of Keicho at Fushimi in Kyoto are chiefly Chinsse classics as the *Koshi-kego*, the *Joanseiyo*, the *Rikuto-Sanryaku*,* the *Shichisho*, the *Azumakagami*. They were printed with wood blocks, and being printed at Fushimi, are called, the Fushimi Edition. In his last days, from the twentieth year of Keicho to the second year of Genna, Iyeyasu made Doshu and others print with bronze types the *Daizo Ichiran-shu* and the *Gunsho-Chiyo*, which from the place of their press took the name of the Suruga Edition.

Hideyori Toyotomi, too, probably following the example of Ieyasu, had the *Teikan-Dzusetsu* printed in the eleventh year of Keicho. Besides these, Naoe-Yamashiyono Kami, of the Uesugis, one of the Daimyos, published an anthology in the twelfth year of Keicho, printed at the Yoho-ji, a Buddhist temple in Kyoto.

III. Type-Printing in Buddhist Temples

In the meanwhile the Buddhist temples continued to engage in printing, with more or less influence from the government printing. It is inconceivable that they should have let the chance slip by to adopt the new and convenient method of printing being so eager in the enterprise and the centre of the printing activities from the previous period. With the adoption of the new method, Buddhist printing became more active than before, and even sects of temples such as those of the Nichiren sect which hitherto had nothing to do with the business of publication issued more books than their elders in the business. Their publication began to make a renewed progress in the

*This book was printed three times in the fourth, fifth, and the ninth years of Keicho respectively. It is not to be wondered at, since it is the publication at the command of Samurai.

asserted by some to be of a later date, but its type-founding is recognizably of that period, and another proof which supports this view is the discovery of the copies of the *Tendai-shikyogi-shukai* (an explanation of the doctorines of the four sub-sects of the Tendai sect) printed with the same type one month earlier, in November of the same year. Thus it can safely be affirmed that the *Hokke-gengi-jo* is the first printed book after the introduction of the Korean typography. It may be suggested here, though the matter needs much investigation to be established, that an explanation of the comparatively early printing activities at the Honkoku-ji, can be sought in Kato Kiyomasa's connection with the temple, for he was an earnest follower of the Nichiren sect and took an active part as one of the leaders in the Korean expedition.

It becomes clear from the foregoing statements that immediately after the introduction of the Korean typography books were begun to be printed almost at the same time (1) by the government authorities, (2) by the people of the Buddhist temples, and (3) by those people who took special interest in printing.

Since type-printing came to be made much of for the simplicity of its procedure, and various writings were put into print.

The government authorities' exertions contributed undeniably most to the progress of printing in its initial stage. To mention some examples, the *Kobun-Kokyo* was printed at the command of the Emperor Goyozei as already mentioned, who also ordered to print the following books during the seven years from the second to the eighth year of Keicho: the *Kinshudan, the Kangaku-bun,* the *Shisho*, the *Kokyo*, the *Nihon-shoki Jindai no Maki*, the *Shokugensho*, the *Biwako*, the *Chokonka*. They were printed with large wooden types, very fine ones well in harmony with the dignity of the Imperial edition. Court nobles and priests of the Zen sect did the printing.*

*Quite another of court nobles of the period engaged not alone in court printing, but also in the Buddhist and other popular publications. The printing at court was very active. Till recently it has not been discovered that the Imperial princes too had taken part in the publication of books in printed form. The *Shokugen-sho*, it was made clear by the recent research, was printed by the command of the Prince Fushimi. The printing-boards are so excellent as to be easily mistaken for those of the Imperial edition.

it began to develop into an independent industry.

There are some writers, however, who infer that this new art of printing had already been introduced here before Hideyoshi's expedition, but as nothing has been found to prove that, though the exchange of cultures between Japan and Korea was fairly active then, we can only state, though it is not established, that it was not introduced before the expedition.

Some passing mention must be made here that Western typography came over to Japan a little earlier than Korean typography. The historical data show that it was introduced as early as in 1590, but it seems that it had little or no influence on the central activities of printing in Japan. If it exerted any influence at all, it seems, as Dr. Shimmura maintains, that it had some bearing on the new attempt to print Japanese books in Chinese characters and Japanese syllabaries. But it requires further research and investigation to decide this point. The subject will be treated more in detail elsewhere in this pamphlet.

II. Official Printing Business

There is more than one book which asserted to be the first printed book after the introduction of the Korean type-printing. A certain authoritative document records that the *Kobunkokyo* was first printed at the command of the Emperor Goyozei in the second year of Bunroku, but thus far no copy of that press has been found. The general research has come to the conclusion that the *Mokyu* published with supplmentary notes by Hoän Ose* in the fifth year of Bunroku is the oldest of the extant copies of books printed after the introduction.

Still earlier, in December of the fourth year of Bunroku, Nippo, a priest of the Honkoku-ji (a temple of the Nichiren sect), published the *Hokke-gengi-jo* (an introduction of the doctrines of the Nichiren sect), in a limited edition of one hundred copies. The publication is

* He also published the *Jushikyohakki* in the winter of the first year of Keicho, the *Igakuseiden* and the *Toen-Jussho* in the following year.

the printing was confined to Buddhist books for a considerable time, till at the end of the Kamakura period a few Chinese classics came to be printed for the first time in Japan, and that with the assistance of Buddhist circles. It becomes manifest from the above that Japanese typography was confined to the service of Buddhism for a much longer time than Chinese typography, which finished its first development in the *Tang* period and in the succeeding *Godai* period sent out literary classics printed by the Government and in the *Sung* period produced many books through the Government press. In Japan, too, there were some statesmen who had printing blocks founded, not in the capacity of statesmen, but in the spirit of devotion to Buddhism they followed. It follows therefore that those who benefited by the products of printing were confined to a minority of the people, the religionists, and those associated with religion.

The characteristic of Japanese typography throughout Old and Medieval Stages extending over 900 years (from the Nara period to the end of the Muromachi period) is summarily that it developed under the patronage of Buddhism and that it was naturally limited to Buddhist books. This state of affairs was brought about chiefly by economic reasons ; nobody but the rich priests could afford the expense of the printing-boards. They carved boards of timber into blocks, a task demanding much money and labour. It is obvious that the printing of books with carved blocks was more than expensive, and as in those days the printing did not pay, it did not develop into an industry. The result was that it remained for some time longer in the hands of the Buddhists for their own use.

Hideyoshi's Korean expedition at the end of the sixteenth century led to the introduction of new art of type-printing which had made remarkable progress there. This simple and expedient new method of printing, making use of movable types took the place of the former expensive blockprinting. It overcame the high cost and brought about a revolution in the art of printing in Japan. Typography shook off the yoke of Buddhism, and came into general use, with the result that

To

THE BLESSED MEMORY OF ZENJIRO YASUDA

TO WHOM

THE AUTHOR IS DEEPLY INDEBTED

FOR

HIS GREAT ASSISTANCE GIVEN

IN THE

PREPARATION AND PUBLICATION

OF THIS BOOK

正誤表

		（誤）	（正）
巻後に	七三頁七行目下	近影△	近彰○
著作目錄	七七頁下十行目	類徒△	類從○
附圖目次	八頁下八行目	巻首△	巻末○
同	二七頁上十一行目	「下」字削去	
同	同　上十三行目	同　右	

中世期地方印刷文化地圖

凡例

一、本圖は鎌倉並室町末期に於ける地方印刷文化開發の狀態を圖示せるものにして、現存未詳なるものは記せず。但し刊行せる事確實なるものは之を收む。

一、刊行書名は、鎌倉・南北朝期は赤色、室町期は藍色を用ひて之を區別す。

一、群雄割據の狀勢は、天文、弘治年間に據る。（據吉田東伍博士等編日本讀史地圖）

一、○印は刊行地、●印は參考に記載せる地名なり。

昭和十一年春日

川瀬一馬識

出羽
陸奥
佐渡
能登
越後
越中
加賀
越前
下野
常陸
上野
信濃
飛驒
美濃
若狭
武蔵
下総
上総
安房
相模
甲斐
駿河
伊豆
遠江
三河
尾張
近江
山城
丹後
丹波
但馬
因幡
伯耆
出雲
石見
美作
播磨
備前
備中
備後
摂津
河内
和泉
大和
伊賀
伊勢
志摩
紀伊
淡路
讃岐
阿波
伊予
土佐
隠岐
対馬
壱岐
長門
周防
安芸
筑前
豊前
肥前
筑後
豊後
肥後
日向
薩摩
大隅

碧巖録
般若心經秘鍵
法華經
正信偈
三帖和讃
臨濟録
聚分韻略
歴代序略
叡山版
五山版
醍醐版
大般若經
春日版
論語集解
高野版
根来版
四体千字文
節用集
阿佐井野版
三体詩
五部大藏經
大學章句

古活字版之研究附録